

# 聖拳列伝

小津左馬亮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

北斗の拳の序盤キャラ、南斗聖拳のシンが主人公。準主人公はユダ。

ケンシロウとの戦いに敗れ、サザンクロス城から飛び降りたシンが目を覚ましたのは、以前とは似て非なる世界。

富も権力も名声も全てむなしだけだったと気づいた彼は、一度死して殉星の使命に目覚めることになる。

南斗宗家の拳を復活させ、慈母の星の心に沿おうとする男の物語。

原作とは違いすぎるキャラあり。オリキャラあり。

時系列や正しい解釈は無視でやりたいように書いています。

不定期更新。

# 目次

一話	殉星再臨	1
二話	宿敵	9
三話	群星乱舞	19
四話	北斗あらわる	30
五話	龍の牙	39
六話	赤い衝撃	46
七話	帝王と霸王	53
八話	鳳凰天舞 馬上の霸王	63
九話	終戦	75
十話	放浪の極星	82

十一話	北斗の聖者	97
十二話	もう死んでいる	109
十三話	南斗双演戒(そうえんか)	128
十四話	五車と慈母	146
十五話	トランプマークのならず者	160
十六話	北斗の末弟、死角なし	171
十七話	死人(しびと)	183
十八話	数年後	192
十九話	大戦前夜	203
二十話	原作開始	215

二十一話	アスガルズル	—	232	三十一話	天をも砕く拳	—	351
二十二話	女王エバ	—	250	三十二話	カサンドラ伝説	—	360
二十三話	世紀末救世主伝説			三十三話	銀の聖者	—	372
261				三十四話	メデイスンシティ	—	
二十四話	七つの傷を持つ男			386			
271				三十五話	拳王登場	—	396
二十五話	南斗乱れるとき	—	283	三十六話	邂逅	—	405
二十六話	天地を穿(うが)つ将星			三十七話	妖星の赤い牙	—	421
300				三十八話	三つ巴	—	433
二十七話	落鳳破	—	310	三十九話	弟子との再会	—	446
二十八話	極星の腕のなか	—	323	四十話	余波	—	464
二十九話	旅立ち	—	332	四十一話	サザンクロス	—	477
三十話	南斗二十三派	—	339	四十二話	塵芥	—	487

四十三話	仁者と熱血漢	498
四十四話	目覚めるとき	513
四十五話	慈母という光	524
四十六話	陰と陽	541
四十七話	炎上	553
四十八話	黒幕の正体	564
四十九話	帝都へ	579
五十話	置き土産	595
第二章 修羅の国編		
一話	内乱の予兆	609
二話	北斗の羅刹	622
三話	南斗燃ゆ	634
四話	東華八盾(とうかはった)	

五話	死人の修羅	648
六話	表裏一体	672
七話	羅刹七人衆	684
八話	リュウケンの弟子	
九話	修羅の心得	704
十話	南斗聖極輪	715
十一話	龍炎斧(りゅうえんぷ)	
十二話	鏡の人	740
十三話	魔界	752
十四話	斬りたるは標的のみ	

一話	第三章 大陸内乱編	斬り倒す者	882	十三話	天を舞う	1015
二十四話	帰国	暗躍	870	十一話	食わせ者	1005
二十三話	天を衝(つ)く	赤い鬼	857	十話	ふり幅	971
二十二話	頂上決戦	通説を破る衝撃	848	九話	不屈	946
二十一話	北斗の兄弟	真・相雷拳	838	八話	真なる西斗	926
二十話	大言	帝都の嵐	829	七話	光とは	904
十九話	宗家激突	光とは	819	六話	帝都の嵐	914
十八話	正面から砕く	真なる西斗	808	五話	真なる西斗	926
十七話	義士	帝都の嵐	796	四話	帝都の嵐	914
十六話	恩に報いる	光とは	785	三話	光とは	904
十五話	魔人	895	772	二話	次の月が満ちるとき	

十四話	救世主	1025
十五話	千隼(ちはや)推参	
1035		
十六話	妖(あや)かしの星	
1046		
十七話	地上最強とは	1055
十八話	正念場	1067
十九話	愛の誓い	1075
二十話	かつての自分	1084
二十一話	起死回生	1094
二十二話	心技体	1104
二十三話	北斗南斗の宿命	1115



## 一話

## 殉星再臨

「さらばだ、ケンシロウ」

宿敵たる北斗の男に敗れたとき、確かにシンはそう叫び、ユリアの墓標たるサザンク  
ロスの城から飛び降りた。意識はそこで途絶えた。

§……はずだった。

§ § § § § §

「……はどこだ」

見慣れぬ天井を眺めた際、かざしたおのが手の甲に十字に広がる傷を確認した。

ケンシロウの拳に砕かれたほうのそれを見つめてから、シンは痛みに耐えて上半身を  
起こした。

どうやらベッドに横たわっていたらしい。頭を振りながら眩いた。

「……俺は死んだはずではなかったのか」

「確かにお前はあのとき死んでいた」

不意に聞こえてきた声に飛び跳ねた。身構える自身の体の大きさに違和感を覚えて自失していると、声をかけてきたであろう何者かが白い顎鬚をしごきながら、わしが手加減が苦手でのう、と呟いた。

「お前は」

「口の利き方がなっておらん、金髪の小僧」

小僧と言われたシンが再び己の体を見回す。たしかに小さい。まるで成長期途中の少年のようだ。

ふと顔を上げた。自分の手の甲に刻まれた傷と同じように、相手も同じ場所に十字の紋章が施している。そんな初老の男を改めて見直した。

南斗の導師クラスの者だけにゆるされる紫の道着を着込んでいる。

南斗六星のひとりとしてそれくらいの見立ては、朦朧とする意識の中でも確認できた。

「思わぬ拾い物をしたと聖大導師に大口を叩いた以上、わしの立場もあつて厳しい修行にならざるを得ぬ。わが奥義を食らつて生きているそなたの気合はともかく、舐めた口の利き方まで認めるわけにはいかぬぞ」

「……お前は誰だ？」

とまどうような少年の誰何の言葉に、老人がようやく異変に気付いたようだ。薄い眉

をひそめている。

「軽い意識障害か? ……まあよい。そなたの立場と使命を思えば、年少の身には重荷にすぎ、逃避したくもなるというもの。だが行き倒れの孤児たるそなたを拾って数年、南斗の拳の薫陶を与えてきた今となつては、もはや放逐することもかなわぬ」

なんだと、と彼は独語した。南斗孤鷲拳を授けてくれた師はフウゲン、師に寸分も劣らぬ相手の威厳を認めつつも、このような男に覚えはない。

「ではお前は、俺の師父であるというのか」

「……わし以外も数人、そんな存在が小僧を支えておる。例えば——」

フウゲンははじめ、先代の南斗六聖拳の名を口にする男は、どう見ても虚偽を語るような人物には思えなかつた。

シンは混乱しながらも、現在自分が置かれた環境について問いただすことにした。ついでに鏡を所望した。

§ § § § § §

§ 頭部への衝撃で記憶がとんだ、と勘違いしてくれたヤンと名乗る大導師に休養を与えてもらった彼は、少年時代に逆戻りしたような体を引きずりながらも、現在の状況を把

握するために南斗の聖殿に足を運んだ。

最初は過去にもどったのかと勘違いしたものだ。

数多く存在する南斗聖拳の同門たちをはじめ、後の六星と呼ばれる頂点の男たち、年長組である鳳凰拳のサウザー、白鷺拳のシユウや、同年代である水鳥拳のレイなどはよく知る以前の彼らと今のところさほどの違いはない。

しかし下流の数派を率いる紅鶴拳のユダを少し遠くに見たとき、以前とはまるで違うその佇まいに、シンは思わず呆然と立ち尽くしてしまった。

「……」は俺の知る過去ではない、と確信したのはこのときだ。

「あれは南斗の名門紅鶴拳の若君、上位百八派の拳修生のなかでも天才の呼び声が高いユダ様です」

通りすがりの門下生が興奮したように赤毛の少年を見ながらシンに説明している。

秀麗な外見は前世以上だった。そして洗練された立ち振る舞いには余裕があり、一目で尋常ならざる人傑だと知れた。

それはシンの知るあの男の挙動にはなかったものだ。

一般門下生に混ざる彼の視線に気づいたのか、居並ぶこちら側に歩みを向けてくる。

「ユダ様」

同世代の若者が主人に続こうとするも、彼は手を上げてそれを制した。

周囲がざわついた。

「金髪の小僧」

まだ口紅はひいていない赤毛の美少年がそう呼んでくる。深淵に充ちた藤色の瞳がふと細められた。

それはシンが赤毛の小僧、と言い返したからだ。

「お前の執念に期待している」

周囲がまたどよめいた。シンも怪訝そうに眉をひそめた。ヤンから聞いた現世の生い立ちは、どここの馬の骨かわからぬ捨て子だったという。

そんな下郎に名門の貴公子が期待する、と声をかけたことで、聖殿の中庭に居合わせた誰もが驚きの声を上げていた。

「南斗の宗家、途絶えた極聖の拳を受け継ぐことができるのはお前だけだ。南斗聖拳のシン」

独り言のようなユダの声は金髪の少年にしか届かなかっただろう。しかしその言葉は雷鳴のごとく彼の身を撃ちぬいた。

反応できずに固まっていると、赤毛のほうは純白のマントを翻し、颯爽とこの場を去っていった。

去り際の横顔には微笑が浮かんでいた。どうやらこの世界の奴は、南斗のなかでも白

眉に値する大人物らしい。そうシンは呟いた。

「極聖の拳……俺が修めようとしているのは」

聖大導師様がお呼びだ、という背後からの声に振り返るために、馬の骨の少年は言葉を切った。

§ § § § §

「大導師様は何故このような馬の骨を拾われたのか、未だにもって理解できん」

先を行く導師の独り言はシンの耳にもはつきりと届いた。以前の彼ならば激昂してこの中年の背中を指突で貫いていただろう。

だがここはもう自分の知る世界ではないことを知りつつあった。

闇雲に突っ走ってきた前世とは違い、一歩引いて物事を見ようとするいわゆる他人事のような感覚で彼に続いて歩くのみだった。

南斗大聖殿の門をくぐった際、導師レベルでさえここまでしか通れないのか、案内役の男が舌打ちをしながら聖殿のなかに入るよう促してくる。

少年の自分にそこまでの敵意と隔意を向けてくる理由を、この聖殿のなかで知ることになった。

数人の大導師が並び、そして聖大導師と称される南斗の長老が大仰な椅子に鎮座する前に進んで膝を折る。

平伏に等しい姿勢のまま、面をあげよと言われることもなく彼らは用件を話し出した。

「導師ども以下の者どもは事の次第を知らぬ。ゆえに名もなき小僧が神聖なる殿堂に足を踏み入れることが我慢ならぬようだが」

修練でシンを気絶させた坊主の大導師が同僚にそう告げる。伏せた状態からでもわかるフウゲンの声がそれに応えていた。

「南斗正統血統を守り抜いて死ぬ、という役目を名家の流派である連中に押し付けるものではない。彼らは生きてこそ神輿が輝こうというもの。拳才はあるが失つても惜しくない捨て子ならば、五車星以上の身代わりが期待できよう。この賭けが成るまではあれらにどう思われようと致し方のないこと」

他の大導師の声がそれに続いた。

「北斗の影におびえ、拳格は元斗の下にあり、西斗にも後れを取る。血筋だけはよいわが南斗の象徴がああ美しい少女である以上、後々他の斗の拳を巻き込んだ大乱世に発展する恐れがある」

シンが思わず面を上げる。最後に締めくくったのは聖大導師が口にした拳法の名前

だった。

「ゆえに途絶えて久しいわれらが宗家の拳、南斗極聖拳きよくせいけんをもつてそなたは正統血統に殉じるのだ」

長老の背後の扉が開かれた。光に包まれながら入ってきた一人の少女を見たとき、少年は了解を示すように平伏した。金髪が震えた。

俺の欲しかったものは権力でも名声でも、ましてや南斗宗家とやらの拳などではない。

今に至っては目の前の無表情な少女の、際立った美貌ですらない。

かつて自分にはあの女の心を掬すくえなかった。サザンクロスサザンクロスの居城から飛び降りる際、それだけが心残りだった。

だが今回は成し遂げてやろう。この目の前にいる慈母の星の、心の赴くままに背中を押してやろう。

そのためにもう一度人生をやり直す機会を得たのだ、と思い込むことはシンにとって自然な流れだった。

金髪の少年の口角は上がっていた。



## 二話

## 宿敵

陽門である南斗の拳は千前後の流派がある。

そのなかでも聖拳を名乗ることを許された上位拳法が、いわゆる南斗の百八派と謳われている。

百八のなかでも位階がある。

最高峰である六聖拳は王、そのすぐ下の九龍衆は将官、さらにその下の十六翼将は佐官級と明確な身分分けがされている。

その最上位三十一派が象徴たる正統血統を仰いで南斗聖拳を構成していた。

頂上拳である南北西元の斗の拳法のなかで、とくに南斗は血筋を重要視しており、名もなき者がその一派を継ぐことは例外中の例外とされていた。

そんな権威主義のなかで血筋とは縁のない存在が頭角を現してきたことは、乱世の前兆として到底受け入れられない風潮を生んでいた。

南斗鳳凰拳のサウザーもその一人だった。そんな界限の空気を実力で吹き飛ばした剽悍な男は、一子相伝ながらも将官、佐官級の流派やその他を従え、瞬く間に南斗有数の勢力を形成していったのだ。

傑出した才能と帝王然とした風貌ながら彼はまだ若く、南斗の導師たちを凌駕する権力を手にしたわけではなかったが、すでに師のオウガイを倒してわが拳に及ぶ流派なし、と公言しても憚らないほどの地位を築いていた。

そんななか、もう一人の名もなき門下生が宗家の拳を復古すべく聖殿に通い詰めており、詳しい事情を知らぬ権威主義の人々からの蔑視を買っていた。

あらゆる意味で南斗の里からの扱いをまったく気にする様子もない金髪の少年は、陽門だけにはとどまらず、陰門たる北斗の伝承者候補たちとも交流を深めていた。

そして象徴の少女を護衛する殉星は宿敵との再会を果たす。

黒く短い髪の彼だけではない。長者然とした次兄、サウザーとほぼ同年ながらすでに覇気を纏いし長兄と、変わらぬ印象の面子には新鮮味なく対応したものの、やさぐれた悪人でしかなかった三弟が粗雑ながらも兄弟思いの人物になっていたのはさすがに驚愕を隠せなかったものだ。

「おめえがシンか、リュウケンから聞いてるぜ。南斗正統血統のためだけに生き、そして死ぬどこの馬の骨かわからない存在だつてな」

「……」

「殉星の宿命っていうやつか？　つまり災難のたびにあのガキの身代わりになり続けるってことだろ。見た目は清楚で可憐だが、おりやあは騙されないぜ。兄者たちやケン

シロウとは違ってな。あれは魔物だ。男を狂わせる魔性の気を孕んでる。自覚がないからこそよけいにタチが悪い」

「ほう」

シンは瞠目しながらも視線を動かした。

長兄次兄末弟、象徴の少女と邂逅するや否や、無表情の扉を優しく叩いてそつと中に入るような様相を展開させている様子を眺めやる。

それを苦々しげに眺めているジャギの反応こそ目新しい。

客観的な立場になってみると、象徴と出会ってもそれに絡めとられることのないこの男も、他の北斗兄弟と同じく特異だった。別の意味で優れているといえた。

「末弟はともかく、年長者二人は化けもんだ。誰が伝承者になってもおかしくはねえ。ただおりゃあも結構腕に自信があつてな……南斗のガキごときに後れをとるとは思わなかつたんだ」

「ああ」

「それにしてもおめえは強い。その拳には執念がこもっている。あの女のためだな」

「……」

「リュウケンの指示で長兄次兄とはやり合わなかつた。まあそらそうだろ。特にラオウ兄者なんか相手にしたら、命がいくつあつても足りねえ」

「そうかな」

「模擬の相手が強いってのは兄者の覇気を刺激する。おめえもその年で六花八裂になりたかねえだろうよ」

がははと笑って去っていった豪快な男の背中を見送る。がさつながらその忠告に従い、ジャギを蹴散らしたと聞いたラオウの挑戦状をシンは最後まで受けなかった。

この時点で己があの大敵に勝る確率など万が一もない。トキにしろ同じ理由だった。リュウケンと南斗の大導師があらわれたことで交流会は終わりを告げる。

金髪の少年は宿敵と象徴が手をつなぐのを少し離れた場所から見守っていた。

この世界でのシンの役割はそれに始まり、それに尽きた。

§ § § § §  
「水……」

聖殿内の道場で打ち捨てられた少年が体を引きずり、外の庭園へと足を運ぶ。

南斗最高峰の達人たちからの修練は日に日に厳しくなるばかりだった。

書物でしか残されていない宗家の拳の伝承に彼らも手探りの状態であって、その教えは厳格を遥かに超え、死合いに等しいものだった。

だがシンの執念はそれに押しつぶされることはない。

彼は二度絶望を味わっている。

ユリアが居城から飛び降りたとき。自らも同じ場所から投身したとき。

その例えようもない虚無感に比べれば、今世における絶命の危機感など論ずるに値しない。

練達への実感を味わうことのできる死線こそが彼の生きる力になっていた。

この子の生き様はまるで死人だ、と後にリユウケンは語っている。

半死半生で庭園の泉で水分を補給する少年が、不意に感じた背後の気配を察して振り返った。

殺気が同時に飛んでくる。次の瞬間、指突の拳と薙ぎ払いの拳が交錯する。

疲労の極にある年下が裂波の衝撃に耐えられず、もんどりうって芝生に転がった。

跳ね起きたのを見た年上の青年がおや、と片目を見開いている。

それを窺ったシンが口から流れ出る血をぬぐいながら、おまえはと言った。

「独眼竜だな」

異名を告げられ、長い銀髪を後ろで結んでいる眼帯の青年が自分の手のひらを見て首を傾げていた。

「即斬のつもりで放ったのだが」

「趣味が悪いぞ。ガキに対して隠密機動の長が本気撃ちか」

血をぺつと吐いた金髪の少年に、隻眼の青年は少しだけ白い歯を見せた。

異相ゆえか只ならぬ雰囲気を持った者の本名はダガール。

南斗の隠密機動をもって任ずる独歩に近い組織、極斗衆の棟梁だった。

最大勢力のサウザーにも属さず、他の六星候補にも一定の距離を置き、導師たちから

も一目置かれる南斗隼蒼拳じゅんそうけんの伝承者となるべき人物である。

「隼の一撃をその状態でかわすかねえ」

「殺気を放った時点で今から行きますよと告げておいて、何を言うのか」

「尽きた気力のなかでそれを察する君が規格外つてことだ」

紳士のような仕草を見せて男は一礼した。

剛柔を兼ね備えた、サウザーでさえもその名を知る南斗きつての勇将である彼のこと

は導師たちから聞いている。

前世ではユダの副官だったはずだが、その彼とは風格が違いすぎた。

完全に別人物だとシンは思った。

「極星の輝き、南斗を照らす光となるか」

「……」

「聖大導師の目論見は当たらずとも遠からず。どうやら復古の拳の情報は事実のようだ

な」

影の集団極斗衆の長ならではの地獄耳で、ある程度の情報をつかんでいるらしい。指先から流れる自身の血を見て、ダガールは目を細めた。

「北斗は虎、南斗は龍に例えられる。その拙者の牙に一撃入れるとは」

そう独語した独眼の龍が一步踏み出した。

二度目の交錯だとしてシンも震えながら立ち上がる。

だが年長の勇将が庭園の別方向を向いた。あらわれたのは大導師たちと同年配の拳士とその配下たちだった。

「ダガールともあろう武刃者が瀕死の小僧に死合いを挑む。一体どういう見だ」

「……紅鶴の宿老か。見ていたのか」

クリムゾンレッドの道着は誉れの証であり、歴戦の南斗の戦士だと一目でわかるようになってる。

聖堂の昇殿を許された数少ない現役の老人は、白い美髯を揺らしながら人差し指を青年に向けた。その標的が両手を上げた。

「南斗焰浄拳<sup>えんじょうけん</sup>。芸術にも等しいこの園内で爆炎を放つつもりかね、ゲンガン老」

「そのほう次第」

「やれやれ、あの紅鶴も存外甘い男のようだ」

ダガールが踵を返した。主人であるユダの指図かと遠回しに指摘された老人が眉を寄せる。

「極星の原石に期待を寄せるほど切羽詰まった立場ではあるまいに」

「なんのことだ」

「あのサウザーに対抗できる唯一の赤い衝撃、カウンター拳法を極めようとする男が、なぜこの小僧に期待する？」

「……」

「復古なれば頂上の拳格を持つ鳳凰はもとより、百八派随一の名門たる紅鶴の影響力にも影を落とす。だが彼は南斗開闢以来の変動を座して見守ろうとしている。何故だ？」

「南斗の帝王たらんとする者。象徴に殉じようとする者。生まれが定かではない双方の羽ばたきが痛快でならぬようだ」

名門の御曹司では珍しくもない、退廃というか屈折した思考を持つユダの酔狂に、ダガールは鼻を鳴らして苦笑した。

「だとすれば老の主人も大概前衛的な男だな。六星以下、百八派の南斗の枠組みを壊すのはサウザーでも極星の小僧でもなく、生粋の血筋を持つ紅鶴の若者になろうとは、皮肉なものだ」

「存外なのはそなたであろう。思っていたより権威主義だと知ってわしも驚いている」



独眼竜はそれに返答せず、優雅な一礼を返して去っていった。

洗練された振る舞いの青年を見送るシンのもとへ、現役の老人拳士が音もなく近寄った。

「そなた……北斗神拳をどう思う？」

南斗の門下生で唯一北斗との交流を持つ少年に対し、二世代前の拳士が問いかけた。

意図を理解しないまま、シンは簡潔に答えた。

「地上最強の拳法だが一子相伝にあらず」

「……なぜだ」

「一子相伝は南斗鳳凰拳であり、俺が修めようとしている復古の拳だ」

ラオウ、トキ、ジャギ、ケンシロウ、キム。北斗神拳には現在五人の門下生がいる。

だがサウザーとシンには南斗としての同門はあっても流派での同門などいない。

受け継がなければ絶えるという危機感の中で修練を積んでいる。

伝承者以外は拳を封じられる、という北斗の建前を信じているほど金髪の少年は純粹ではない。

「面白いくことをほやく」

ゲンガンと呼ばれた老人が去り際に若君の目に狂いはないな、と肩を揺らして独語していったのを、少年は知らない。

這う這うの体で道場に引き返す。そこには今日二人目の師範が待ち構えていた。  
南斗孤鷲拳のフウゲンだった。

## 三話

## 群星乱舞

丘の上に建つ大聖殿を見上げる形で建てられた基本的な南斗の道場は、敷地内にいくつも備えられている。そのなかのひとつに、同じ道着を着た門下生の一部が集まって月に一度の十人組手が開催されていた。

流派の枠を超え、腕に覚えのある若手の拳士たちが名乗りを上げて日頃の修練を披露しあう。

裂帛ながら手加減された一撃を食らい、石畳の地に叩きつけられた対戦相手を助け起こす青年の雄姿に、皆が拍手を送っていた。

十人目を軽々と突破した白鷺拳の最有力候補が壇上から降りる。このときすでに彼は南斗の誉れである六星に入ることさえも確実視されていた。

番狂わせを期待した誰かが何人かはいただろうが、この里においてシユウと対等に戦える門下生はほとんどいない。

そんな大物が立ち見のなかの大多数の歓迎を受けた後、特等席である座椅子に腰かけて次に行われる武闘の瞬間を見守った。

背後にはさらに大物である鳳凰拳のサウザーが鎮座していた。

次に壇上に上がったのは、チリチリロン毛の臙脂色えんじの髪をした男だった。シユウやサウザーよりは幾分若い。

そんな彼が十人組手の最初に選んだのは、近頃界限を騒がしている金髪の少年だった。

「上がってこい、捨て子の小僧」

周囲がざわつく。特等席の大物たちは眉も動かさなかつたが、他の門下生はなぶり殺しかと疑つたのも無理はない。

南斗孤鷲拳の次代伝承者としてすでに名を轟かせるジュガイが、大聖殿に出入りしながらも特定の師を持たぬ一般修行生に対して名指しをするなど、あまり褒められた行動ではない。勝ち負けはその時点で決まっていた。

「おれが出よう」

代わりに自薦したのはアイスブルーの髪色の美少年だった。次代の伝承者としてジュガイに劣らぬ名声を持つ者の名はレイと言つた。

「華麗なるものよ、お前には実力はあつてもわが興味はない」

レイの挑戦を鼻で笑つたジュガイに対し、臙病者とそしる拳士は誰もいなかった。

着席しているサウザー、シユウ、紅鶴の御曹司でさえ異論を唱えない。

壇上に姿を見せた金髪の少年に興味深い視線を向けたのみだ。

「乳飲み子よ。少しは呼吸ができるようになったか」

煽る男の鋭い目を見返し、金髪を風に靡かせたシンの道着とジュガイの道着はデザインが同じでも色が違った。

黒い肩当て、黒の長い靴の一般門下生に対し、銀色のそれを着込むのは大物の証である。

鋭角な印象が強いそんな青年が両手を広げ、孤鷲拳の構えをとった。

「わが爪牙は全てを掻き切る。小僧の貧弱な体で受けきれぬかな」

大仰なその様子に、特等席で観戦していた南斗の帝王が長い足を組み、鼻で笑った。

「貧弱な小僧を相手に身構える。体が言葉を裏切っておるわ」

「無謀にすぎぬ」

「大人げないと誇そしるかシユウよ」

「あのジュガイは敵と認められた者に手加減を知らぬ。組手は死合いなどではない」

立ち上がろうとしたシユウを制したのは、彼と同じ線上に腰かける赤い髪の少年だった。

「ユダ」

「度を越せば私が止める」

「紅鶴の御曹司、貴方はかの者を随分と買っているようだが、今回は相手が悪い」

「負けるだろうな」

赤毛の美少年の断言に、サウザーが眉を上げた。

含んだ物言いに何かを察したのか、シユウは無言で腰を下ろした。

「ツシヤ」

ジュガイが気合を発したと同時に標的へ迫る。南斗凄斬爪という奥義の名を一般門下生は知らずとも、孤鷲拳の衝撃はそれが当たれば一撃必殺の威力だとわかるほどの痕跡を石畳の壇上に残していた。

×の形に断裂した爪痕を見た見物人たちが、おおつと歓声を上げる。

そんななかでジュガイの背後をとったシンの動きを当人は読んでいた。

手を鎌の形にしながら弧を描いて背後を薙ぎ払った年上の拳を受け流し、年下が蹴りを放つ。

遅い、と思いつながら膝受けの態勢になったジュガイが重いそれを止めきれず、大きく後退していった。

壇上の端まで吹き飛ばされたような状況に、さらに場内がどよめいた。

「小僧……」

力負けに憤慨したジュガイが勢いよく相手に突進した。南斗のなかにおいては剛に値する鷲の拳を突き放つ。

同様にシンも指突で反撃していた。両者の牙がぶつかり合う。

互いの鮮血が舞った。

「あれは南斗千刺貫手、ではないな」

「ジユガイの奥義は千本の爪。だが今のきやつめは百に抑えている」

サウザーが眩くと、奥義中の奥義のクセを見せたくないのだろうとシユウがそれに答える。

「しかしそれを受けきつているのは流派のない南斗聖拳のこわっぱ。孤鷲拳め、存外ふがない」

南斗の帝王は大きく発言したわけではない。けして寡黙ではない帝王だったが、彼の独語のような台詞は頂上を目指す野心家の耳に痛烈に届いた。

言いおつたな、とジユガイが殺気という名の闘気を放つ。シユウが再び立ち上がった。

「いかん」

「シユウ、ここはおれに任せてくれ」

「レイ」

ライトブルーの髪的美少年の名を呼んだのは赤毛の御曹司だった。

「奴を甘やかすな、まだその時ではない」

「なんだと、ユダ」

「止めるなら私が阻むぞ」

「キサマ」

水鳥拳を年少で会得した秀才と紅鶴拳開闢以来の天才が睨みあった。闘技中の二人よりも興味をそそられたのか、サウザーは青と赤の対立に肘をついて見守っている。

「サウザー、南斗の長者としてこの場を収めぬか」

「なれ合いなど武門の穢れ。同門とて宗派の優劣を示すのはそう悪手ではない」

愉快そうに小さく笑う帝王が道場の混乱を制する気がないのを見て、シユウが飛び上がった。

舞台上の対決は体力と経験の差ですでにジユガイに軍配が上がっていた。何本も突き入れられ、シンの体は真つ赤に染まっていた。

「とどめだ」

気合をこめた最後の一撃は相手のガードごと地盤をえぐりぬいて突貫する奥義のひとつだったが、その前にジユガイは上空から降りてくる闘気存在に気が付いていた。

目の前の瀕死の少年では到底繰り出せない疾風の踵落としを避ける。

それが石畳を断裂するのを見ながら、臙脂色の髪拳士はさらに横から薙ぎられる脚を大きく後退してしのご切った。



「シユウか。頂上拳のひとつ白鷺、しかと見せてもらった。なかなかやつかない足技だな」

「十人組手の最初の一人をこなしたばかり。あと九人も残っているが、このまま相手を殺して棄権でいいのかね」

「……赤毛といいお前といい、拳才のない孤児へ目をかける老人どもといい、南斗の先のないことよ。何を考えているかわからない将星といい、どいつもこいつも」

「サウザーを遠くに窺いながらジュガイがべつと吐き捨てる。それには血が混ざって  
いた。」

シユウやレイ、ユダらがまず驚いたものの、本人がそれ以上に驚愕しながら膝をつく  
金髪の少年を睨みつけていた。

名もなき流派の孤児を支えに来るものは誰もいない。彼はよろけながらその場を後  
にしていった。

「続きだ。あと九人はまとめてかかってこい！」

気を取り直したジュガイが吠えた。それは大言ではなく、わずか数人を除けば南斗の  
なかには敵などいないと事実を告げただけだった。

§ § § § § §

応急の処置を施された金髪の少年はベッドからすぐに身を起こした。

見た目ほど致命の傷はない。奴の牙は俺の表面を抉っただけにすぎないと豪語する彼に、ほざくな負け犬と冷笑した介護班の煽りを背に受けながら、シンは屋外へと抜け出した。

その際、組手でジユガイに敗れて運ばれてきた拳士たちの様子を一通り窺ったが、自分ほどの負傷をした者は誰もいなかった。

いずれも一撃、それも急所ではない部位を突かれて気絶している連中ばかりだった。それに比べればシンの負けは手が込んでいたといえよう。

生まれ故孤独な少年はいつものように大聖殿を見上げる木の下に辿り着いて座り込む。

そこへ気絶していた十人組手のとある門下生がシンの元へやってきた。

同世代の少年は彼の隣に腰を下ろし、いやあ負けた負けたと苦笑している。

「お前は」

「僕の名はゲンジユ。老ゲンガンの孫だ」

「ああ、ユダの宿老の」

くるくる巻髪の少年がクリクリした目をシンに向けてくる。それは侮蔑の色はなく

尊敬の念を孕んでいた。

「ジユガイ、さすが六星候補と呼ばれることはある。あの化け物を倒せるのは今のところ帝王のみ。シユウ様やユダ様でさえ手に余る」

「……」

「だが数年後はどうだ。まだまだ若いユダ様などはもつと伸びる。そのときにジユガイはユダ様ほど腕を伸ばすことができるかな」

「とは？」

「君に可能性を見た」

風が二人の少年の髪を揺らした。なびく金髪を眩しそうに見たゲンジュが言った。

「あの恐ろしい男に奥義を駆使させるほどの年少の拳士が何人いる？ 僕が思うに君のような歳に限定すると他に二人しか思いつかない。ユダ様、レイ様だ。すなわち君は」

南斗の天才たちと肩を並べる男なんだ、と興奮気味にゲンジュが語った。

それを聞いても他人事のように振舞えるのは、シンがここが前の世界ではないと確信しているからだ。

さらに彼は言った。ジユガイは大物だが、それに張り合える男はまだまだ存在する  
と。

聖殿に入り浸る世間知らずのシンは、南斗の現状を伝える少年の説明を大人しく聞い

ていた。

「独眼竜の隼、あれならジユガイに引けを取らない。他にもユダ様やサウザー様の麾下にも逸材が幾人かいる。特に帝王はあえてそれを隠しているみたいだけど、ゲンガン爺様の目はごまかせない」

多士済済の南斗の人材を知ってシンは内心驚きを隠せない。前世では六星以外に世に名を馳せるほどの人傑はいなかった。

それがここではダガールをはじめ、ジユガイ以外にも優れた拳士たちが存在するとう。

「ユダ様やレイ様といった生まれのよい貴公子ではないものに目を向けよ、爺様はそう仰せになった」

「……」

「あの年寄りにはぼんやりながら未来が見えるようで、南斗は枠外から復古すると断言していたよ。僕には君の煌めきを確認できても爺様ほどの目利きはない。つまり可能性を見た、つてのも方便でね」

「老に命じられて縁を結びに来た、というわけか」

「許してくれ、爺様の命令は絶対でさ」

「……かまわん」

拝みながら謝る同輩の立場を思いやる。人畜無害なゲンジユの人となりは無碍にするほど、二度目の人生を歩む男は子供ではない。

この世界の南斗は前世に比べ精強なる集団だ、という確信を得たことは大きかった。北斗と対峙する前に超えるべき牙城がそこにはある。あらためて大聖殿を見上げながらシンはそう思った。

## 四話 北斗あらわる

一年ほどの月日が過ぎた。

感情をなくしていた慈母の星が次第に喜怒哀楽を示すようになってきた、と南斗の上層部でそう囁かれ始めたところだ。

それは北斗の門弟との邂逅で発生した偶然の産物だったものの、それゆえ定期的に交流を持つようになったのは自然な流れだった。

慈母の騎士として復古の拳を習得中の少年も同行している。

彼女の周りにはケンシロウだけではなく、トキ、ラオウといった年長者も姿を見せている。

普段はこういう催しに興味がない気質の長兄がこの場にいることは違和感しかなかったが、豪気な彼がトキにだけ語った「ユリアはわが野望のひとつ」という言葉を偶然耳にしたシンはその理由を知っていた。

ラオウといえど金髪の小僧との接触を師父から止められてでもいるのか、手合わせなどは専らトキやケンシロウに任せている。

ここで北斗神拳相手に実戦のような経験を積んだのは、他の南斗にはありえない僥倖

だとしてシンは積極的にそれに挑んでいった。

今更言うまでもない天才中の天才、トキの柔の拳に叩き伏せられるのはいつものことだ。

剛柔あわせもつケンシロウにも現時点で敗れている。以前ならばユリア強奪までの彼には後れを取らぬ自負があつたのだが、それは過去のものだと認識を変えなければならなかった。

喋り好きなジャギからの情報で、少年は北斗の門下生であるキムがこの場にはいないことを知る。

才及ばぬ者は斗を越えた交流に出せないというリユウケンの方針に対し、キムに一番同情的なジャギの言葉が印象に残った。

「凡人は凡人を知る。長兄次兄は泰然としすぎ、ケンシロウでさえ凡百を知るには若すぎる。それに比べおりやあはできないものの気持ちがよくわかる」

「ぬかせ」

シンは鼻で笑った。確かにキムはこの場に来ることを許されなかったようだが、未だ伝承候補生に名を連ねるこの男が凡百とは少年には到底思えなかった。

彼からすればジャギの拳才は、千人以上にも及ぶ大多数の南斗の門下生より上を行く。

実際戦ったところでジャギを倒せる南斗の人間は限られているだろう。

そのうちのひとりがシンなのだが、そんな少年にジャギを侮る様子はない。

「どうやら俺はほかの三人の北斗よりジャギのほうが気が合うようだ、と思ったただけだった。」

北斗の里は南斗に比べ、表向き一子相伝を謳っているだけあって小さなものだ。

そんな静かな里に風雲急を告げる密使がやってきた。

慈母の星を客人として迎えているリュウケンはそれでも密使を目通りさせ、事の次第を聞いていた。

「北斗の分派が天帝に反逆を起こしたか」

伝え聞いた北斗神拳伝承者が黒い口髭に手をやって考え込む。

慈母の従者であるダーマが緊張を滲ませた視線を、同世代のリュウケンに向けた。

「曹、孫、劉の三家拳ですか」

「うむ」

他門の問いかけに、リュウケンはまだこの大陸で明らかにされていない一派の存在を明かすことなく頷いた。

北斗琉拳の存在はそうそう他へ漏らすわけにはいかない。

「天帝の守護者である元斗は迂闊には動けん。そして西斗の沈黙は不気味だが、この際



捨て置く」

「では南北が中心となって鎮圧にあたると」

傍にいたトキの言葉にリュウケンは何度頷いた。ラオウは乱世の序章かと目を爛々と輝かせている。

この時点では霸王たる彼もまだまだ若い。シンは自分の手を握ってくる美しい姫の白いそれを、ケンシロウとともに握り返した。

§ § § § § §

§ 天帝の六つの門を守る衛将として、または戦車として南北の共同軍が編成された。

§ 傍から見れば拳法の世界における内乱である。

§ 各地の里で反乱の狼煙をあげた北斗の分派三家拳がそれぞれ手勢を率いて天帝領に迫り、すでに迎撃態勢を整えていた元斗の軍を一時は蹴散らしたが、背後から南北の拳士たちの奇襲を受けるに及んで混戦となった。

§ 部隊戦が膠着するなか、それぞれの指揮官たちが独自に動く。

卒として反軍の先鋒と拳を交えていた。導師たちにそう告げられ、最前線に投入されたシンは一兵



ひとりの男から一斉に身を引いた。

そんな様子は曹家の一部隊を率いるタイエンにも見えていた。

「貧弱な孫どもめ。寄せ集めは我らだけではなく敵も同様であろうに」

ん、と彼が目を細めた。シンには確認する必要もない、鳳凰の鬨気の発動だった。

「あれは……」

さらに味方が吹き飛んだのを確認したあと、タイエンは舌打ちを放った。

金髪の少年が彼の頬に傷を与えることに成功したからだ。

「小僧」

「やめておけ、お前程度が挑んだところで帝王の進撃を阻むことはできん」

「帝王だと?」

離れたここからでも大きく見える紫のオーラが再度敵を薙いだ。散り散りになって

いく孫家の先鋒隊は、おひとり鳳の二度の羽ばたきでただ一人を除いて完全に壊滅した。その

一人とは孫家拳の伝承者になるであろう黒髪を逆立てた青年だった。

タイエンがもう一度ちつと舌を打った。

「そうかあれが南斗最強と名高い、鳳凰の舞か。孫家拳のキョウウンめ、大金星を挙げら

れるとは運のよい」

「あほうめ」

少年の再度の煽りで曹家拳の若者のこめかみに血管が浮かぶ。

「聞いていなかったのか。北斗の分派風情が束になってかかっても無駄だ」

「……威を借る狐、遺言はそれで終わりか？」

一步踏み出したタイエンだったが、今度は逆側に見えている劉家拳の部隊が飛散するのを視界の端で捉えた。

鳳凰の斬に対し、それは爆裂のエフェクトを生んでいた。

そのすさまじい闘気は帝王すら凌駕するものだった。分派である彼はそれが本家のものだ、とすぐに理解した。

「北斗剛掌波、我らの宿敵の奥義じゃあねえか」

小僧など眼中にない、とする彼がシンを打ち捨てて劉家拳の元へ駆け寄ろうとしたものの、正拳で撃ち抜いたはずの相手がそのすぐ後ろに迫っていた。タイエンが裏拳を繰り出しながら振り返る。

「北斗の霸王に挑むのも十年早いぞ」

「タイエンだ。名乗ってやったからには今すぐ死ぬ」

裏拳を防がれた青年の、予備動作のない蹴りが放たれた。

シンも蹴り返す。年少の足を砕き折って体ごと踏みつぶすつもりでいたタイエンは、脚が交錯してそのまま互角で動かない状況になったことで驚愕の目を見開いた。

「脚には俺も自負がある」

「……ガキい」

「極聖拳復古の狼煙をお前に向けてやる。誇りに思え」

シンが飛び上がった。それに応じてタイエンも同様の動きを見せた。

再び二人が交錯した。スン、という風を切り裂く音が響いた後、双方が着地した瞬間に、苦悶の叫び声を上げたのは年上のほうだった。

「バカな……!!」

両手両足から鮮血が迸る。鍛え抜かれた北斗の拳士の肉体を易々と切り裂いたのは、斬撃ではなく蹴撃だったことに意表を衝かれた様相だった。

「南斗獄屠拳」

血しぶきをあげながらタイエンが体勢を崩す。長身を支えようにも踏ん張りがきかず、そのまま地上に倒れ込んだ。

不意の突風に吹かれ、少年の金髪が揺れる。彼の目には北斗の分派は映ってはいない。

その視線は同門の帝王であり、北斗の霸王に向けられていた。

「小僧……このタイエンは眼中にないというか」

ブシユウ、とさらに吹き出した鮮血は彼が立ち上がったことよって起こったもの

だった。

憤怒の形相を見返し、シンは相手の極意の発動を身構えて待っていた。  
「肉塊にしてくれよう、爆龍陽炎突」

## 五話

## 龍の牙

しなる腕からの指突により敵を穿<sup>うが</sup>つ必殺の奥義で、勝負は一瞬にしてついたはずだった。

変則的な動きと敵の背後からでも強襲できるそれは、年若い相手を貫手の的にしてまさに肉塊にできる威力を誇っている。

だが現実には繰り出した百手の拳は全て少年の同数の拳によつて相打ちになっていた。

バゴン、と周囲の地盤が技の重さで崩落した。ぶつかり合う衝撃波が円状に広がっていく。

同門である孤鷲拳のジウガイと撃ち合つて負けた記憶は過去のものだ。

南斗の極意である指突を向けられて後ろを見せるわけにはいかない。

血しぶきの応酬のなかで指の一本が折れた。それはタイエンのものだった。

「ぐっ」

北斗の分派のなかで剛柔を使い分ける曹家拳の、柔の部分が敗れた。

それを無意識に悟つて彼は仰け反つたあと、大きくとんぼ返りしながら間合いを取つ

た。

「タイエンがシンを指さし、憤怒の形相でどの流派にも当たらぬ拳、と告げてくる。

「南斗の上位拳法はおおよそ見た覚えがある。だがそれは」

たたつと血がしたり落ちた。彼の両手両足と、指先から出るものだ。

「復古の拳……うぬが宗家の拳を奮うというのか」

ぎりつと歯を食いしばったタイエンが雄叫びを上げた。北斗神拳に抱く憎悪や屈折をシンの拳に向けたと思われる。

おおお、という裂帛の気合で彼の上半身の道着がはじけ飛ぶ。

鍛え抜かれた体躯をさらなる闘気で包み込んだ曹家拳の使い手は、獄屠拳の断裂を膨張した筋肉で塞いで出血を止め、ゆっくりと歩み寄ってきた。

轟音の一步一步で大地が揺れる。

北斗の激流に比べ、南斗の少年の構えに見える闘気は薄いものだった。南斗極聖拳に体中から溢れるほどの凄まじい気合は必要ない。

気を込めるべきは龍の牙に例えられる指突の部位であり、放つものではなく内に込めるもの、と秘伝書から学んでいたからだ。

言うほど易くもない教えを体得できたのかと問われれば、未だそれは未到達と言わざるを得ない。



それにしてもタイエンの増幅された剛の殺気は、シンには見慣れたものだった。

曰く、帝王が持つそれであり、霸王が持つそれでもあった。

少年が遙か見上げるその先から、目線を落としてタイエンを見る。

「侮どるか、小僧！」

双眼を血走らせて両手を掲げたその構えから、爆龍陽炎突だと察したシンが意表を衝かれる形で蹴り飛ばされた。

高速の蹴撃を目で捉えたものの、無軌道な動きを読み損ねて直撃したのだ。

「この手ごたえ、利き手が折れたか。虚実に騙されおつて」

草地まで転がった相手が起き上がるのを見て、その姿勢にタイエンが見切りの台詞を放つ。

「半人前の分際でわが曹家拳を侮った。なぶり殺しをもって応えてやる」

今度はシンの体に血煙が湧きたった。あえて一撃で殺さぬよう、加減をしながら鞭の如く、双腕での滅多打ちが展開された。

「仕上げだ。幻夢百奇脚」

奥義の名を高らかに叫んだタイエンが大勢を崩す。トト、ト、と片足でステップを踏んだ違和感のあとで見たものは、己が利き足の激痛だった。

足指の先を確認し、切断ではないことを知る。だが相手の指が脛にめり込んでいるこ

とにようやく気付いた。

驚くまいとして、そのまま蹴り潰してやろうと横薙ぎに足を押し込む。

しかし南斗の指突がふくらはぎまで貫通する様相を見せたため、タイエンは本能から足とともに、またも体を大きく仰け反らせて後退した。

彼の奔流していた闘気が縮小する。

「指一本でおれさまの足を……！」

「復古の拳の礎は斬撃ではない。指突を極めし者が南斗極聖拳の伝承者となる」

「南斗……極聖拳だと……」

この時点のシンに許された奥義は南斗獄屠拳だけであった。それもまだ途上の仕上がりであり、龍の牙と呼ばれる南斗の貫手に至っては異名のまま名乗りを許されていない。

青年に近くなった少年から放たれる指突は疾風のごとき速さを持つていたが、タイエンはそれを難なく見切ることができた。

だが白刃取りで抑え込んだはずの牙は徐々に彼の両手の防御を押し抜け、その剛強なる肉体に指を突き立てることに成功していた。

「とっ……止められぬ……」

徐々にめり込んでいく牙によってタイエンから新たな噴血が放たれた。

両手を放せば貫かれる。足で反撃しようにも利き足は能力を半減しており、思うように動かない。

静かなるシンの双眼に、激昂や覚醒以上の迸りを見た。それが少年の執念だということ、まだ若いタイエンが知るわけもない。

復古の拳にて今度こそ慈母を守り抜く。その執念が常に死と隣り合わせの過酷な修練や実戦に耐えうる心身を生んでいた。

「かつは」

吐血したタイエンが死を覚悟したとき、貫手を抜いた少年が乱入してきた誰かに対し足蹴りを放った。

その者は蹴りを蹴りで受け止め、掌底でシンを弾き飛ばした。

折れた利き腕でそれを受けた彼がさすがに表情を歪めながら、青年と自身の間に立ちちはだかった者を見返す。

長く白い髭の、額に傷のある壮年の男だった。タイエンが師父、と男に呼びかけた。

「驚くべき小僧よ。利き腕ではない指突でわしが鍛えたタイエンを突き殺そうとするとは」

曹家拳配下の郎党が若き伝承者候補を左右から支える。余計なことをするなと叱咤する気力もなく、タイエンは師父が自分と戦った少年に容赦ない報復を加えるのを黙つ

て眺めていた。

熟練した無影脚の威は弟子の比ではない。死を覚悟するのはシンのほうだったが、もとより決死の少年が引くはずもなく、決死の指突はたびたび現伝承者の道着をかすめ、あるいは頬や手の甲に傷を与えていた。

「こやつ。折れた腕で」

「師父、後ろだ」

弟子の叫びに師が向きを変え、鬨気を駆使して背後から放たれてきた衝撃波を打ち消した。

岩盤が砕かれ、砂煙が宙に舞う。

やがてそれが晴れ、やってきた人物の姿を明確に映し出す。

金髪を血で染めた少年が腫れた目でそれを窺う。

赤紫のマントが風に靡いている。赤毛、赤を基調とした南斗の道着は選ばれしものだけが着用することができる名門の証を誇らしげに示していた。

「北斗曹家拳のタイゲンとお見受けする」

「……推参者の小僧、名乗らずともよい。摘まれる新芽に名は必要ない」

「詰むのはそちら」

どっと沸いたのはこの場ではなく、両側で戦闘していた孫、劉の方向からだった。

赤紫のマントの青年のそばに、小さい影が着地する。

「孫の年若い指揮官をサウザー様が、劉はラオウが駆逐しましたぜ。あとは後続部隊の掃討戦に入るだけ」

コマクと呼ばれた小男が主人の領きに領き返し、後ろに引き下がった。

でははじめるか、という赤い髪の青年が片手を上げていき、その指先をタイゲンに向けた。

## 六話 赤い衝撃

「南斗紅鶴拳、どくしてんけつ独指点穴」

その奥義の名とともに、北斗の師父が闘気を漲みなぎらせた。放たれた重圧が地響きを生んだ。

一直線な赤い衝撃を打ち返した壮年の男が白い髭を振り乱し、赤い青年へ飛びかかった。

「ぬるい」

薙ぎられた南斗の斬撃を鼻で笑い、腕で受ける。切断どころか裂破すらせずそのまま剛撃を打ち込む。

赤毛はその振り下ろしを華麗に避けて後ろに着地した。

小さいクレーターになった地盤の惨状を見て、コマクと呼ばれた丸眼鏡の小男がこりやすげえと感嘆している。

「あの斬撃で傷ひとつ与えられんとは」

「小物よ、驚くには値せん。脆弱な南斗の手刀で北斗を断つことなど」

言うや否や、タイゲンの腕の道着に切り込みが入った。そこから頑強な上腕があらわ

れたものの、直線に走る筋からは血が流れていた。

それを見下ろす曹家拳の伝承者がぴくり、と眉を動かした。

「絶影の拳法、貴方でさえ見るのは久しかろう」

切り裂いた側が口を開く。その指先にはタイゲンの血が滴っていた。

同じように南斗の青年も完全に避け損ねたのか、肩のプロテクターが砕けて落ちる。

剛撃を受けた赤い髪的美男子は喉の奥で楽しそうに笑っていた。

「御曹司に当てやがった。あのじじいの拳は重くも速い」

コマクが思わず唸るのを眺めながらタイゲンが呼吸を整えている。

経絡秘孔を突いたはずが躲された、と不機嫌そのものの表情だった。

相手の強勢を悟った青年が赤紫のマントをつかみ、放り投げた。

視界の端には同門の少年がいる。それに笑みを向けて言った。

「お前には悪いが、獲物を盗ませてもらうぞ」

先程から無言で二人の初撃を見守っていたシンへの言葉に、カツ、とタイゲンが吐き

捨てた。

小僧に侮られて泰然としているほど、戦場での彼の気合は低くはない。

「言いおるわ南斗の雛鳥めが」

砂煙を巻き上げて曹家拳の伝承者が突進する。両腕から縦横無尽に薙ぎ払われる正

拳の衝撃で地盤の一部が浮き上がり、または陥没していった。

「あんな爆弾に当たったらひとたまりもねえ、御曹司！」

コマクが悲鳴を上げる。不本意に観戦に回っているタイエンが拳にて破裂するか秘孔にて爆散か、と呟いた。猿のような南斗の従者が叫ぶ。

「なんだとおこらあチリ毛！」

「いずれにせよ……細い体躯の赤毛の勝機は剛撃をかいくぐつてのカウンターしかないが、その程度は師父も心得ていよう」

「いかんいかん、防具がまた吹き飛んだ」

頭を抱えるコマクの動揺はシンにも理解できた。だが……と彼は思った。

タイエンの拳は包まれた闘気で当たり判定が増大している。ところどころかすめた赤毛の部位から血が滲みだしていた。

「運がなかったな、北斗曹家拳」

「……なんだと小僧」

シンの独語に師の勝利を確信したタイエンが食いついた。

彼に向かって震える体を起こしながら、シンはお前の解説通りだと告げる。

「剛撃をかいくぐつてのカウンター」

「あれは仮定の話だ。師父のそれを見切ることが出来る目を持つ者など、この地上にお



いて片手の指に余るわ」

「そう思っているのなら、お前ら北斗の分派は滅ぶべくして滅ぶ」

「あ？」

「北斗の霸王はばかりすら憚る南斗の帝王。あやつが今のところ実を取れずして名のみ留まっているのには理由がある」

本物の帝王ならば今頃象徴や聖大導師を駆逐している。南斗の一軍を率いる将程度にとどまっている器ではない。

実を取れぬ理由は明確だった。

南斗二十三派を配下にする名家中の名家がそれを阻んでいたからだ。

だが武門の世界において血筋のよさだけで帝王と並ぶ勢力など築けようがない。

最強を謳われる鳳凰拳に対し、唯一カウンターの奥義を持ち、それを使いこなすことができる逸材がいるからこそ、帝王は未だ聖帝を名乗れずにいるのだった。

そのことは南斗の導師レベルや上位の拳士たち以上ならば誰でも知っている。

サウザーにカウンターを打ち込める唯一の南斗の拳士。その青年が曹家拳の剛撃に、自らの白い指を合わせにかかった。

「独指点穴など蠟螂に等しい。わが斧でへし折り、そのまま体ごと砕いてやるわ」

ぶわつと気流が上昇した。とどめの正拳を叩きこもうとするタイゲンの動きが止

まった。時間も止まったかのようだった。

壮年の男の胸元に、赤毛の一本の指が指されている。それが標的の頭上へとゆっくり振り上げられた。

「師父っ」

「お、おとおおー」

タイエンとコマクが叫んだと同時に、タイゲンの背中に衝撃波がすり抜けた。

それは地盤を抉りながら彼方へと消えて行った。両側で追討戦の準備に入っていた北斗南斗の動きも止まる。赤い閃光を見たのだろう。

シンは二人の大物が戦いを止めてこちらを見ていることに気付いた。

大きくない声だが、少年の耳には南斗最強の男と北斗開闢かいびやく以来の豪傑の台詞がはっきりと聞こえた。

「小賢しい。南斗紅鶴拳、血冥けつめい断指だんし……あの絶影の高速拳をまさかこの戦場で見ようとは」

「北斗の伝承者がサウザー以外の小鳥こどりごときに反撃を食らうというのか」

次の瞬間、拳を突き出していたタイゲンが血を吐きながら吹き飛んだような所作を見せた。触れていない背中から断裂の鮮血が舞う。

腕を上空に挙げていた一本指の赤毛の拳士はそれを優雅に横薙ぎ、納刀するように手

を振り下ろした。

前のめりになった壮年の男が数歩歩いた後、意識を失くして倒れ込んだ。

「あれが居合……いや、奴のカウンターだというのは……ありえぬ。師父ほどの拳士が避けられずに一撃で」

タイエンがかすれた声でそう呟きながら、信じられない光景を見守っていた。

静まり返った戦場がまた沸き立った。帝王と霸王が部隊を進発させたようだ。

「コマク」

「ははあ」

付き人の小男が赤紫のマントを拾い上げ、主人に手渡す。それを華麗な仕草で羽織り直した青年は、敵愾心に等しいサウザーとラオウの視線に目もくれることなく踵を返した。

「お前の……お前の名は」

過呼吸で息を乱したタイエンが師父の前ににじり寄りながら、その背中に問いかける。

曹家拳の門下生たちによって助け出される二人を確認しながら、赤毛の青年は秀麗な横顔を向けてユダ、と名乗った。

「ユダ……南斗紅鶴拳のユダか」

「覚えておけチリ毛。あの方があらわれた以上、北斗の拳はもはや無敵ではない。いつの日か赤い衝撃が天すら破るのを見ておくがよい」

主人の背を追いかけるコマクが、得意気に鼻を鳴らしながら去っていく。

担ぎ上げられたタイエンが重傷に見える金髪の少年を眺めやった。そしてまた驚いた。

「小僧」

「見た目ほど傷は深くはない。このまま進む」

「タイエン様や師父を退けたのは二人のガキだぞ……南斗は揃いも揃って化け物だらけか」

タイエンを支える一人の拳士があえぐように言った。その万感の台詞を、次代の曹家拳伝承者は否定しなかった。

## 七話

## 帝王と霸王

北斗の分派が蜂起し、南北の共同軍が鎮圧にあたつたものの、勝敗は部隊ごとに異なっている。

曹家拳の本隊が壊滅しつつも、孫、劉の本隊は一旦引いて態勢を立て直すや、北斗神拳を学ぶキムのいる部隊へ猛烈な攻勢をしかけ、彼を含む小隊を撃破して反撃に移つた。

その他の南斗や守りに徹していた元斗の部隊などがいくつか敗走しており、まだ油断のならない状況が続いている。

南斗の何隊かが這う這うの体で撤退していくなか、追撃戦に乗り出した北斗劉家拳の指揮官のひとりにハクホウという名の拳士がいる。

すでに成人している彼はサウザーやシユウ、ラオウよりやや年上のようにだった。

この口髭を蓄えた長い白髪の男こそ、キムの部隊を打ち破つた当人であった。

追撃を振り切ろうとする南斗の残存部隊のなかで、その拳を見た門下生たちが次々に悲鳴のような声を上げて指摘した。

あれは南斗聖拳だと。

恐れおののく敵のそんな驚愕の叫びを聞いたハクホウがシツと呼吸音を吐き出し、背を向けて逃げる南斗の数名に上空から襲い掛かり、そのすべてを薙ぎ払った。

解体した敵の血の海の上で、口髭男は両手をかぎして声高に言い放った。

「北斗劉家拳の流れをくむこの極十字聖拳こそ南斗の源流よ。陽拳ゆえ見世物のような拳法すら擁するうぬら如きが軽々しく語るでない」

さらに追撃しますかと伺いを立ててきた指揮下の門下生が、主の了承を得て隊列ごと突撃していく。

まだ見ぬ大敵を求めてハクホウもこの場を離脱しようとした。

一騎駆けをするつもりの方が留まざるを得なかったのは、風のように現れた少数の集団が劉家拳の追撃隊を瞬く間に蹴散らしたからだだった。

「ほう」

ハクホウが歩み寄ってきた黒紫の装束の連中を見る。

そのなかで小頭、と呼ばれた何者かがふと足を止めた。北斗の分派に比べ、南北の共同軍は皆驚くほど若い。

装束で口まで覆っている性別定からぬ者が問いかけた。

「北斗劉家拳の部隊ならばソウブがいるはずだ。きやつはどうした？」

問われた側が失笑する。口髭をしごいて言った。

「うぬは影であろう……影ごときをわが門最強の武人が相手にすると思うか？ そのう  
えあれは不羈ふきなる存在。どこをふらついているのか見当もつかん」

「重畳なことだ」

「安心したか、ならば心置きなく死ね」

影が意味深な返答をよこしたが、虚実を弄する相手ということでハクホウは気にも留  
めず飛び上がった。しえあ、という気合が戦場に響き渡った。

§

§

§

§

「ようシンじゃねえか。ここにいたのか」

「ジャギ」

「先陣を破ったばかりだったのにもうボロボロだな。聖殿に出入りできる特待生が一兵  
卒扱いつてのがまあなんともし」

「お前は指揮官ではないのか」

「おりやあも一兵卒よ。兄者二人は指揮官としての経験を得るために無理やり小隊を任  
されているけどな！」

めんどくせえことは嫌いだと言わんばかりに、北斗の防具を着た目つきの悪い男があ

くびをかましている。

そんな彼も戦場を往来してきたからか、シンほどではないにしろその体は打撲だらけに見えた。

「見た目ほどじゃねえよ。なんてか、キョウウンとかいう孫家拳のバケモンにはやられそうになつたけどよ」

トキの兄者に助けられたと呑気に語る緊張感のない男が、不意を衝いてやってきた北斗分派の兵を裏拳で殴り飛ばしていた。

「それよりさつきから見てると南斗の奴ら、何隊かは大負けに負けて引き上げているみたいだぜ」

「ああ」

「まあサウザーやラオウの兄者がいる限り、こちらの負けはないに等しいんだが……あ？」

ジャギが前方の草原から湧き上がってくるような異様な闘気に気づいた。

こちらに向かつて潰走してくる南斗の軍団が見える。その数名は逃げ切ることができず、何者かが放つた衝撃を受けて四散した。

「なんだありゃあ?!」

轟音のなか、ジャギが目を凝らして様子を窺う。立ち込める煙が払われた。



そのなかからすさまじい気合を漲らせた巨軀の男がこちらにやってきた。

何かを確認した北斗の三弟が相手を指さしながらウソだろ、と驚倒せんばかりに叫んでいた。

「あつあつあのツラ……」

かの鬨気と異相を眺めるシンが目を細めた。

「兄者そのものじゃねえか!!」

「違うな」

「ああ?」

ジャギが仰け反りながらシンを見た。金髪の少年はかぶりを振っていた。

暗い銀髪と顔立ちが酷似するものの、その髪の長さや眉の跳ね、口元はラオウというよりサウザーのような剽悍さを思い出させる様相だ。

けして北斗の長兄などではない。

「つてことは?!」

「北斗の分派。率いている数人が持つ旗の紋章から見て劉家拳の使い手だ」

重く響く足音が停止した。二人の前に立ちはだかった男が周囲を一瞥し、少しだけ首を傾けた。

「……も南斗か……討つべき北斗神拳はどこへ」

その低い声の言葉を聞いてジャギが震えあがった。彼もひとかどの拳士ながら、長兄を思い起こさせる大敵の前にして矜持を保つほど愚かではない。

剛毅な男が何かに気づいた。

「ん。その道着」

「し、知らねえ」

「本家のものだな。だが一人か、ここで何をやっている」

踵を返そうとするジャギの襟足を掴もうと男が手を伸ばす。すると手の甲に十字の傷を持つ者が、男の剛腕を掴み取った。

「小僧」

「相手は俺だ、北斗の分派」

煽ったつもりのないシンの台詞に、巨漢の眉が吊り上がった。

恐るべき速さの剛拳が振り下ろされたが、それが少年の頭上に降りかかる前に、彼は拳を止めていた。他に注意を向けたようだった。

「力なきその細腕でオレを止めようとした心意気は褒めてやる。だが二度目はない」

「おい」

シンが背を向けた男に何か言いかけて押し黙る。

南十字星の旗を掲げた部隊が遠くに見えた。男はそれに向かって歩き始めていたか

らだ。

標的へ近づくとラオウに似た拳士が、高揚のなかで巨軀を揺らしていた。尻もちをついていたジャギが安堵の息をつきながら、あれはサウザーの軍、と呟いた。

「見知らぬ小僧よりも南斗の帝王……そりやそうだな」

歯牙にもかけぬ扱いをされた少年も、傷だらけの状態であの巨漢に敵うとは思っていない。

それでもズシンズシンと重低音を立てて南十字星の旗の元へと向かう男の背を追いかけた。帝王はそれを待ち受けている。そして声高に告げた。

「見つけたぞ、北斗劉家拳の下郎」

巨大バギーの上で立ち上がった剽悍なる青年がマントに手をかけた。

その鳳おとりはシンに一瞬だけ目を止め、高らかに笑った。

「その額の印、伝え聞いたことがある。帝王の証だ」と

剛毅な男が対峙する相手を見上げて言った。

そうかお前がサウザーとやらか、と問われた彼はマントを脱ぎ捨てた。

「余も聞き及んでいるぞ。北斗の長兄に似た下郎、そのほうがソウブだな」

「南斗」ときの頂点で思いあがる小物よ……今すぐ六花八裂にしてくれるわ」

煽りの応酬はすぐに終わった。サウザーが音もなく飛翔したのを見て、ソウブも大地

を蹴った。

§

§

§

§

§ 黒装束の道着が引き裂かれたことによつて、小頭という者が女であることがはつきりと認識できた。

しかし目元まで覆つた薄手の布のせいで表情までは読み取れない。

「戦場に性別などありません。南斗の旗を掲げて立ち向かつてきた以上、武人に相応しい報いを受けるべし」

「つしやう」

影の小頭の斬撃はハクホウの頬をかすめたものの、その手を取られて持ち上げられた。

彼女が小柄に見えるほど、極十字聖拳の拳士は長身の持ち主だった。

「ふむ、美しい顔をしている。しかしまだ小娘か」

「放せ」

ポニーテールの黒い髪を振り乱して抗う女を、ハクホウが目を細めて見上げている。

颯るか顔を真っ赤にさせて激怒する側が放つた蹴撃は、持ち上げる男に当たること

はなかつた。

「鬪気があれば皮一枚は破けたろうに、貧弱な南斗ではそれも叶うまい」

ハクホウがあえて掴んでいた女の腕を放した。その機を逃さなかつた彼女は、気合を溜めて両手を羽ばたかせた。

「おっ」

「南斗紫蝶拳、しちよう円舞双葬えんぶそうそう」

斬り抜けた彼女が着地しながら振り返る。道着の胸部を切り裂かれたハクホウが白い髭に指を這わせながらこれはこれとは眩きながら瞠目していた。

「くっ」

「惜しいな。なかなかいい切れ味だ。当たれば少しは挟られたかもしれん」

おんなあるし女主の危機に影の黒装束が飛びかかる。制止の声を上げる間もなく、彼らは極十字

聖拳の爪で斬殺された。女が歯ぎしりをしながら立ち上がった。

「おのれ」

「なるほど一門下生かと思えば、百八派の使い手であつたか。だがいかに上位拳法であろうとそなたのような小娘では……うぬら南斗の未来は暗いろう」

呵々大笑した白髪の男の笑みが表情から消えた。

何かを感知したようだ。屈辱で震える南斗の女拳士をうち捨て、ゆつくりとやってく

る馬蹄に耳を澄ませていた。

黒い。巨大な馬を駆る相手を、長身のハクホウが見上げた。それほどの体高だった。

## 八話

## 鳳凰天舞 馬上の霸王

地べたに転がされる男、ソウブが転がり終えるまで受け身を取らなかつたのには理由があつた。

かつてこれほど無様に地に叩き伏せられることなど幼少期以来なかつたからだ。

自失していたゆえの無様だつた。

屈辱を覚えるという、そんな正気に戻るのはさらにいくばくかの時間を必要とした。

転倒したことによつてできた間合いの長さを、北斗劉家拳の拳士は感じることができなかつた。

肘をつく自身のすぐ近くで傲然と見下ろしているような、そんな相手の存在感だ。

「極星十字拳」

南斗最強を謳うたわれる青年が奥義の名を口にする。

いつ懐かに踏み込まれたのか、そしていつ蹴しゅ撃げきを受けたのか、ソウブにはそれが見えても躲かわすのが限界であり、帝王が繰り出す深淵なる闘氣の流れまでは読み取れなかつたよ  
うだ。

お互い跳躍して激突するはずだつた。だがソウブの剛拳は空を薙ぐのみ。標的に触

れる事さえできなかつた。

相手は両腕を下げたまま無防備に立ち尽くしている。そして鼻で笑っていた。

「小手調べで余に挑もうとする。本物のラオウならありえん話だ」

一撃目から奥義を放出した帝王と、南斗を侮った北斗の伝承者候補は、その心得のままの展開を生んでいる。

地を這うソウブへサウザーは一瞥をくれて、ふと彼方の空を見た。

ここに至つて彼が憤激して立ち上がる。

霸王の幻影扱いされたことでようやく誇りを傷つけられた、と実感したようだ。

「飛び回るハエの分際でオレの道着に触れた。その程度で思いあがるか」

闘気を操るにおいて南斗は北斗の足元にも及ばない。フレアのごとく湧き出るソウブのそれで大地が震撼した。

比較してサウザーの気合いはそこまで巨大ではない。

「湯気程度の気纏が精一杯か、南斗め」

踏みしめながら間合いを詰める豪傑然とした男の、火山の爆発にも等しい迸りと殺気を受けたサウザー配下の南斗の部隊が声もなく後ずさる。

それを平然と受け止めているのはただ一人だった。彼はクセである口角を上げていた。



「笑止。武を極めし者に派手な鬨気や余分な殺意はいらん」

「……キサマ」

「鳳凰の羽ばたきひとつで」

ブオツ、という突風を受けて巨軀のソウブが仰け反った。濃紫の鬨気が鳳の羽をかたどって広がっている。

「厚みのない見世物など吹き飛ばせる」

そう言い終えた帝王が飛び込んできた。北斗劉家拳伝承者候補がたわけが、と吠える。

交差させたサウザーの両手が広がる。しかしその間合いはソウブから再び沸き上がった鬨気によって歪んでいた。

目算を誤った南斗の拳は北斗の髪を斬るにとどまった。

剛毅なる男の目が光る。

「捉えたぞ、飛び回るハエよ」

鳳凰のから空きの胴体へ、ソウブの掌底が決まる。奥義に優る一撃であり、必殺の威力だった。

北斗の男が放つその重圧に耐えきれず、バゴンという音を立てて地面が崩落する。

押し飛ばされた相手が鬨気に纏われたまま地盤を抉り、草地のほうへと転がり回っ

てようやく停止した。

「武を極めしとはな、奥義など必要がないということだ。小虫にはわかるまい」

歓声のどよめきが驚愕のどよめきに変わった。北斗劉家拳の門下生たちが、未だ主人の氣にまかれながら立ち上がる男の姿を見たからだだった。

「フハハ、下郎」

上機嫌の帝王が高らかに笑っている。笑ったまま、劉家拳の氣にまかれながら草地を踏みしめてやってくる。

「ラオウ以外にこれほどの剛氣を放つものがいようとは……褒めて遣わずで、北斗の分派よ」

「なぜ燃え尽きぬ」

門下生のひとりが鬨気で滅することのない敵を窺って、いや待て、とさらに言葉を紡いだ。

「ソウブ様の一撃、つまり経絡破孔を突いたも同然。なぜ……なぜあれは生きている?!」  
サウザーの額、司空の位置にある印から光が漏れ出した。と同時に、鳳凰が羽ばたくような形の氣合が放たれた。

北斗の拳の鬨氣を打ち消しやがった、と彼らが叫んだ。

「ありえぬ……確かに手ごたえはあった」

「経絡「破孔」だど？ まがいものの点穴など余には通じん」

ソウブが呆然とするのも無理はない。長じて劉家拳を会得して以来、標的を突き損ねた過去はない。

ましてや渾身の闘気を完全に無効化されたことなど、師父相手にも覚えがない。

「だが認めてやろう。そのほうの闘気はラオウに等しい。ゆえに実戦相手としてはこの上もない」

この時点で北斗の霸王を私闘で討つことは、サウザーですら叶わない。

北斗の大賢者リュウケン、南斗の大導師たち、小賢しい赤い衝撃、その他様々な障害があつた。

組織の中でまだ一部を掌握したにすぎない身では、彼の行動にはまだまだ制限がかけられていた。

さらにこの時期はまだ核戦争前であり、乱世の兆候があるとはいえ、世界には一定の秩序が保たれている。

そんななか、ラオウに酷似する男がラオウに匹敵する剛の者であつたのは、サウザーにとつては僥倖以外の何物でもない。

反乱討伐の名目で、霸王との死合いを模擬的に実践することができるからだ。

「まさか、うぬは点穴変異を……!!」

「ほう、それは奥義か？」

ソウブの定まらぬ憶測に、サウザーが問いかけた。

変異を知らぬと察した北斗の男が無防備で間合いを詰めてくる相手に、振り絞った気合いをうち放った。

それは北斗神拳でいう天将奔烈に近く、サウザーの南斗の防具と道着を破壊し、彼に幾条もの傷を植え付けたが、それでも帝王の前進を阻むことはできなかった。

劉家拳の真髄も他の北斗同様、経絡秘（破）孔を突いとどめを刺すことにあつた。

それができず未だ魔道に至らぬソウブの闘気では、ラオウですらはばか憚るサウザーの肉体を撃ち落とすことができなかつたのだ。

「わが押し込みで満身創痍になりながら……こやつ、止まらぬ?！」

「余は帝王。うぬら下郎とは、体の内側までも創りが違うのだ」

上空に飛び上がった姿は南十字星を象かたどつていた。その腕を交差させ、側部へ薙ぎ払う鳳凰拳の舞いを、気のガードで受け止めた地上のソウブが威力を殺せず、そのまま後ずさる。

後退するときに来た二本の長い足跡からは煙が立ち上っていた。

屈辱に打ち震えていたソウブは、サウザーが落ちていたマントを手にし、おのが血まみれの体を覆つたのを見た。何を勝ち誇るか、と北斗の男が言いかけたのを、南斗の

男が遮さへぎった。その瞬間ソウブの視界が赤くなった。

「鳳の横薙おとりぎを二度受けた。一度目で裂けぬ頑強な体が仇になったな」

宙に飛び散る血しぶきを、劉家拳の男は他人事のように見上げていた。防御した腕を抜けたようなサウザーの気当たりが胸部に直撃した際、一度目で破れかけていた傷が開いた、と彼は薄れゆく意識の中で悟った。

「はおうりゅうのしん  
「羽凰龍ノ真」

その秘奥義の名を聞いた彼が天空を見た。空が青い。仰け反って倒れこんでいく体の自由が利かない。

わが名を叫ぶ門下生の声が遠くなる。恐るべき南斗の拳士の、ゆらめく濃紫のマントも遠くなっていく。そこで北斗の男の意識は途絶えた。

バギーに乗り込むサウザーが、見物していたはずの北斗の三弟と南斗の小僧がいつの間にか姿を消していることに気が付いた。

「フン、余の無様を見せずにすんだか。ラオウ以外にこれほどの苦戦を強いられようとは、帝王の名が泣く」

§ § § § § § §

象と見間違える程の体軀を誇る黒い馬を、ハクホウは口髭に手をやりながら見上げていた。

それに跨る男の服装に気が付いてふむ、と頷いている。

「偉そうなマントで隠しているが、それは真正銘北斗神拳の道着……」

同門であるソウブの容貌によく似ている。それよりさらに禍々しい顔立ちのこの相手がラオウだ、と彼は確信した。

「噂に聞く北斗神拳の長兄がお前だな」

そう呼ばれたラオウが握っていた手綱を少し動かした。それだけで愛馬が動いた。象そのものな蹄が飛んでくるのを、ハクホウが後方に退いて避ける。

木の上に飛び上がった。彼はしやがみこみ、上空から霸王を興味深そうに観察している。

それに目もくれることなく、ラオウは近くで膝をついている南斗紫蝶拳の女拳士に下がれ、と告げた。

抑え込んでいるような激しい闘気に圧倒され、少女は無言のまま頷いて後ずさった。

「女に甘いなあ、北斗の長兄」

「……」

「北斗ながら南斗狩りを見続けるのは退屈であったか。思っていたよりも笑止な信条を

持つようだ」

くくく、と嘲笑うハクホウを見上げるラオウの反応は薄い。木の上の敵を見上げるのみだった。

「問答無用か、ではいくぞ」

分派が木の上で腰を上げると同時に、本家が口を開いた。

「南斗狩りなら見せてやろう」

「……何？」

「狩られる鳥はおのれだ」

極十字聖拳は北斗劉家拳の一派。南斗と同列にされたことで、ハクホウは憤怒しながら跳躍し、馬上の大物へ急降下しながらいきなりの奥義を繰り出した。

「死ぬ。瞑空爪舞」  
めいくうそうぶ

彼も大柄な体格だった。その体からしなりのある劉家拳の斬波が放たれた。

手綱を握ったままの霸王がカツと目を見開いたのは気合のためだ。

その指が何本もの突き入れに見えたハクホウが空中で態勢を変えて、崩れながらも着地した。

ずさささと後退する白髪の男が両足で踏ん張って仰け反りを止めた。

ゆらりと立ち上がり、そして鋭く叫んだ。

「キサマ……下馬せずわしとやり合うつもりか」

「お前ごときがこのラオウと地上で戦えると思っているのか」

同門最強の男、ソウブに匹敵する闘気を受けたハクホウが、そのほうなど指一本で十分、と断定されて爆発した。

「ならば馬上で果てるがよい」

飛びかかったハクホウは今度こそ闘気の壁にひるまず、剛爪でそれを掻き消しながら、虚空爪舞の続きとばかりに標的の頭上へ腕を振り下ろした。

だが視界は突然現れた布地に遮られてしまった。

「うー」

「哀れな小鳥め」

マントでその襲撃を防いだラオウが指一本で落下物を突き抜く。

胸に突き立てたスピードは速いものではなかったが、その恐るべき剛の一撃でマントは四散し、弾かれるように飛ばされていったハクホウが遙か彼方まで転がって岩石らしきものに激突した。

このときのラオウはつい先刻に見たユダの血冥けつめい断指だんしを思い出していた。

それほど赤毛の男の絶影の拳が印象に残っていたのだ。

彼を相手にしたときの死合いを思い描きながらおのが指を見つめ、その拳を握りしめ



た。

「……………なバカな……………指一本でこのわしをここまで」

吐血しながら胸を押さえて立ち上がったハクホウが弱弱しい声で奥義かと問うと、離れた場所ですらつく相手を横目に、ラオウが傲然と言い放つ。

「極十字聖拳。知らぬなそんな下等な拳法は」

馬上でうそづく霸王は赤い衝撃に対して見栄を切っているつもりだった。だがそのことを当てつけにされたハクホウが知るわけもない。

「思い上がりおつて、ラオウめ」

「お前に対して増長したのではない。それこそ思い上がるな」

三度舞い上がった南斗の源流に対し、北斗神拳の長兄は掌底を撃ち放つ。

ソウブと互角だと推測していた気合の違いを知ったときには、すでにハクホウの体は練り込まれた渾身の闘気に包まれていた。

「兄者くラオウの兄者」

戦場でもよく通る三弟の大声が聞こえてきた。主人の代わりに愛馬が吠える。

ジャギがその近くに移動したとき、やや離れた場所にいる敵が戦闘不能になって打ち捨てられているのを見た。

「なんだ、もうカタがついたのか」

「戦況は」

「兄者とサウザーのおかげでどうやら分派は壊滅の様相みたいだぜ。それよかラオウ様はどこについて北斗の連中が騒いでたんだが」

「放っておけ。それよりトキはどうした」

「ああ、次兄ならもう本陣を落として追撃戦に入ってる。さすがだぜ」

「……そうか」

ジャギの後からついてきた半死半生の金髪の小僧を眺めたラオウが、不意に馬首を返した。

「どこ行くんだよ」

「己の役割は終わった。離脱する」

「お、おい離脱って、天帝とか象徴はどうすんだ」

「天帝には元斗が、象徴にはケンシロウやシュウがついている。このラオウの一番はもはやあるまい」

黒い巨馬が前足を上げて大きくいなないた。砂塵をまき散らして去っていく雄姿を、シンはまじろぎもせず見送っていた。

## 九話

## 終戦

中途半端な蜂起で中途半端に破れ、諦め良く引いていった北斗の分派たちに対し、強硬に追撃を主張したのは元斗の一部のみであり、曹孫劉の御三家を滅ぼすわけにはいかないとする北斗宗家に近い立場の神拳の一声で、南北元の討伐軍は解散となった。

南斗の象徴は争いを好まなかったし、各斗の最強格たる面子、サウザー、ラオウ、ファルコがいずれも分派の討滅に興味を示さなかったのが一因でもあった。

それぞれの軍が帰還の途に就くなか、北斗の長兄はそれに追従を余儀なくされていた。

離脱する直前に師父リユウケンに捕まり、解散のそのときまで兄弟とともに南斗の象徴の護衛を任されていたようだ。

普段は無表情で何を考えているかわからないその長兄が、本営で鎮座することが仕事であった慈母の星とその親衛隊のもとへ義務的に顔を出したあと、馬に乗りこもうとしたところで大樹の上で寝転んでいた親衛隊の一人に声をかけられた。

飄々としたその男はラオウと同世代。慈母の星の腹違いの兄でもあった。

「せっかくユリアと会えたってのに、仏頂面しやがって」

葉っぱを加えた自由気ままな青年が幼友達のような豪気な男へ、大功を立てたんだってなど語り掛けてくる。ラオウが虚空を見つめて答えた。

「門最強の男を退けたサウザーほどではない」

「またまた。あいつに比べておめえは無傷。トキも武功を示したことだし、兄弟ともに存在感を示してたと思うぜ」

「……何が言いたい、ジユウザ」

「ケンシロウの坊やは本陣でユリアを守るのみ。おめえは戦場を駆け巡っている。そのおめえほどの男が注目に値した奴がいたのか、ちよいと聞きたくてな」

「……」

「敵味方関係なくだ」

「なぜそれを聞く?」

雲と呼ばれる自由人がぼりぼりと頭をかいた。剛直な大男を見下ろす美男子がこれも五車星としての仕事でねと呟く。

「生真面目すぎる風や炎、おめえに隔意がある海のじつちゃんでは聞けるものも聞けねえって。そもそも山に至ってはまだ鬼が抜けきってねえってことで、この戦闘に参加すらしてねえし」

「……そうか」

ラオウにとって山のフドウに会えなかったのは逆に幸運だった。

かつて圧倒された大男を前にすれば、ここで雪辱を晴らすという流れになってもおかしくはない。

「で、誰かお眼鏡にかなう奴あいたかよ。当然あの帝王以外な。あれは強すぎて参考にならねえ」

「……いた」

「ほお?!」

素つ頓狂な声を上げながら起き上ったジユウザに、ラオウが眉を寄せた。

「おらん、って言うのかと思つてたぜ」

「気にくわぬが」

「何がよ」

「……眼中にもなかった者どもが小賢しい働きを見せていた。特に」

北斗の長兄が周囲に沸き起こる風で言葉を切った。

その風が吹き終えたとき、馬上のラオウのすぐそばに黒装束の機動部隊がいつの間にか姿を見せて首を垂れているのにジユウザが気付く。

「あれは」

あぐらをかいいた雲が彼らを見下ろして言った。

「極斗衆か。なんで奴らが潜在的な敵に跪いている……ってあれは女」

ポニーテールを揺らした小頭の女性が極十字聖拳から救ってくれた礼を述べている。

感謝の意を受け入れ慣れていないラオウは、面倒臭そうに首を少しだけ縦に振っただけだった。

ジユウザがそれを茶化す。

「よお霸王様よ。女の謝意は素直に受けるもんだぜ」

「南斗を助けた覚えはない」

「女を助けた自覚はあるんだな」

「……」

「なあ美しい嬢ちゃん。こいつは不器用な奴で素っ気ないけど、心意気はある男だ。気を悪くしないでくれ」

「もちろんでございますジユウザ様」

「あー……知ってんのね、おれの名を」

あぐらをかき直したジユウザがさらに吹いてきた風の方向を見る。

それに乗って飛んできたかのような動きを見せた何者かがラオウの前に着地して、完璧な礼の施しを馬上の相手に向けていた。思わず彼は口笛を吹いていた。

「おっお。極斗衆の棟梁かよ。珍しい野郎を見たもんだ」

「拙者も同意見だ。雲がこの討伐戦に参加しているとはねえ」

「ダガール様」

女性が面を上げた。独眼竜の異名を持つおのが長へ、面目なきように平伏している。

「おいやめろやめろ。美人に土下座なんてさせんじゃねえよダガール」

「うぬは」

ラオウが長い銀髪を後ろで結んだ隻眼の勇将に問いかけた。

さすがに隠密機動部隊の長までは見知っていなかったようだ。

「この娘の上役にて、謝意のために推参つかまつ 仕つかまつ った」

「……そのほうに問う。赤毛の小僧のことだ」

「紅鶴の御曹司でございますな」

格上の拳士の問いに、ジユウザには軽口を叩いていたダガールが丁寧な口調で対応している。

そのやりとりを聞いたジユウザがめんどくせえ、と再び横になる。

どういう存在だと問われた側が、あの帝王がこの世でもっとも警戒する男、と説明すると、北斗の長兄が気分を害したように独眼の青年を見下ろした。

「南斗聖拳ではサウザーを倒せないのではなかったのか」

「……状況は代ごとに大小なりとも変わる。あのお方が南斗絶影の拳法として昇華させ

た紅鶴拳を修めた時点で、その金言は以前のものになったようにで

「ほう」

「帝王の突破力に対し、唯一致命のカウンターを撃つことができる存在。それが」

「ユダか」

ラオウが赤毛の青年の名を苦々しげに呼んだことで、極斗衆の女性と首魁が同時に面を上げた。

意外そうな表情だった。

「このラオウではなくあの小僧が目障りだと……サウザーめ。司空おわとりの鳳め」

気に食わない表情の剛毅な男が馬首を返す。その静かな憤慨を初めて見たような様子で眺めていたジユウザが、遠ざかっていく幼馴染の背中を窺いながら足拍手を送っていた。

「はっはっは。こりやあ愉快だぜ。サウザーならまだしも、あの仏頂面が南斗の人間にあれほど興味を向けるたあ驚きだ」

その感想を聞いた南斗隼じゆんそうけん蒼拳そうけんの次代傳承者が反応した。

「珍しいのか」

「あいつとは長年のつきあいがあるが、最初雑魚扱いしていた存在の評価を変える、ってことはほとんどねえんだよ。ってか初めてかもな」



将星以外の南斗など雛鳥の集まり、とジユウザに語ってたことを聞いた極斗衆の棟梁がなるほどと頷く。黒髪の美男子が接近する何かに気づいたようだ。

それとともに影の連中が皆立ち上がった。

「とりあえずちやんとユダには言つとけよダガール。あの北斗の霸王にまともに相手にしてもらえそうだってな。まあおれにはよくわからんが」

「……伝えておこう」

少女の声が本陣から聞こえてきた。象徴の呼びかけに応えるように、ジユウザはほいよと大樹から降り立った。

彼女が姿を見せたときには、極斗衆は風とともに消えていた。

# 十話 放浪の極星

聖大導師の外の世界を見聞しておけ、という体の良い放任主義をシンは甘んじて受けた。

大聖殿の道場や北斗の里との往来は確かにハイレベルの修練を受けられるものの、前世では味わえなかった世の中を渡り歩くという経験は、今のシンにとって願ってもない機会だった。

その放浪にあたって、導師たちは一人の同行者を連れて行くことを要求した。

シンは護衛など必要ない、と言いかけたものの、日常的について回ることはないという約束で納得したようだ。

同行者の細身の男が徒歩で街から街へと移動する金髪の少年の背後に、影のようについてくる。

振り返ってシンが彼を見た。

「おい」

「何か」

「その道化のような恰好はなんだ？」

「はっはっは」

鋭い目つきのひよろ長い男が笑ったが、目は笑っていない。

薄緑の短い髪といい、鳥の羽をつけた防具といい、下界に降りて出歩くにしてはあまりにも場違いな恰好だった。

さすがに少年は南斗の道着ではなく、どこにでもいる若者の目立たない恰好に着替えている。

「若には今にわかります」

「若とはなんだ」

「わが拳は百八派のひとつ、南斗天翔拳」

「とは？」

シンが車の往来があまりない国道を眺めながら尋ねた。

広いその側の側道を歩く人数のほうが多い。

この時期、石油産油国が禁輸をしており、そのせいで世界の非産油国との政治的摩擦が発生していた。

大国どうしの経済戦争や領土紛争も絶えない、きな臭い時代になっていた。

「わしは南斗聖拳のどの派閥にも属さない孤高の拳です」

「で」

「しかし復古の拳が成されるとき、それはわが拳の流浪いくせいそうの幾星霜いくせいそうが終わるとき」  
「……」

「まああの独眼竜も孤高の男ながら、天才の呼び声高い御曹司に仕えるそぶりを見せているようですし」

「だからといってお前のその風変わりな恰好に納得したわけではないぞ」

押しかけ主従の契りのようなものを結ばされた気がして、シンは早足で街へと歩き出した。

「若君、そのうちにこの出で立ちが基本になる時代が来ますよ。乱世はもうそこまで来ているのです」

「ほざけ」

「われら南斗のなかでもアウトローな輩は、街に繰り出して目立たぬよう自由を満喫しているとも聞きます。それに実力で訓戒をたれるのも若のつとめ……まあそれは建前ですがね。わしの知ったことではありません」

「……あのじじいども。俺を元手のかからぬ見回り組として放流したわけではあるまいな」

「やっつ」

「ところでお前の名を聞いておこうか」

「ジョー。死神という不愉快な別名もあるようで」

「ジョーカーか。よからう」

「ジョーです！」

§

§

§

§

§

放浪といえば酒場。酒場と言えはこの世界では悪党が集まる場所ということ、見回り組としての側面もある少年が西部劇にでもあるような扉を開けて中に足を踏み入れた。

すでに夜になっている。この町の繁華街を進む際、金髪の美少年に声をかけてきたヤクザものやそれに酷似する職業の男たちを払いのけながらの行程になったため、この時間になった次第である。

「この付近では一番大きいバー……いやパブ……飲み屋ですか」

「適当なことを言う」

「下戸でして仕組みに興味はありません」

入店した瞬間、いかつい男たちに即刻周りを取り囲まれた。

「ここは会員制でボウズや変な恰好のオッサンが来るところじゃねえ、といった趣旨の

暴言を吐かれつつ、シンの胸倉を取ってきた男が目にもとまらぬ勢いで吹き飛んだ。

ごつい体が壁に埋まった形で痙攣するのを見て、今まで囁し立てたり哄笑を向けてきた男女が押し黙る。

「ヤロウ！」

「待てえや」

騒動を聞きつけたのか、奥のVIP席から声が出た。

身なりはいいがマフィアそのものな出で立ちの髭男が葉巻を啜え、シンとジョーカーがいる場所の一番近くのソファに座り込んだ。

「騒がしいのう。静かにせえ」

「へえ」

鶴の一言で部下たちが距離を取る。口から煙を吐く髭面の大男が整った顔立ちの少年を眺めながら目を細める。ジョーカーが言った。

「お前がボスカ」

「どうかね」

「手下の教育は徹底しておけ。若の機嫌次第ではこの店が吹き飛ぶぞ」

目つきの悪い薄緑の髪の男がそう説明すると、室内は今度こそどつと沸いた。

「何が吹き飛ぶってんだ？ 細目のおっさん」

「重火器でも持ってるのか、ああ?!」

「それに近いもんならわしらが持つてるぞ。ハチの巣にしてやろうか」

携帯の銃を見せびらかすほどの周囲の治安は悪くなっている。国際的緊張が平和であったこの国まで影響を及ぼしているようだった。

「どうやらここには雑魚しかいませんな。次を当たりましょう」

「ああ」

「死にてえのかおっさん」

血気盛んな若者の一人がその銃を抜いた。別名死神のこめかみにそれを突きつけてくる。少年が踵を返した。

「先に行ってるぞ」

「薄情じゃありませんかね」

「天翔拳に助太刀などいらん。一人でさばけ」

「手厳しいな」

シンが先に店を出ようとしたとき、若者が激怒して銃器を握る手に力をこめた。

その瞬間彼の手首が飛んだ。ひいいと絶叫を上げてのたうち回る若者にかまわず、やくざものたちが一斉に懐に手を入れる。

だが獲物を抜く暇もなく、十人以上の男たちが全て床に転がった。

それぞれの足にはカードが刺さっている。抜けねえ、と叫んで七転八倒する声が飛び交う。

そんな地獄絵図のなか、髭の大男が葉巻の火を消して立ち上がった。

「お、やるかね」

ジョーカーの問いに対し、上品なスーツを着たいかつい髭がにやりと牙を剥く。

扉に手をかけたシンが外から入ってきたプロレスラーのような体格の男と出くわした。

その登場を待っていたように、髭男が声をかける。

「来て早々に仕事だ。こいつらを斬り殺せ」

「……ん？ この小僧」

映画俳優のような顔をしたごつごつ体の男は、シンから一旦目をそらし、ボスの静かな怒りを遮り、阿鼻叫喚の場面を展開している奥のほうへと歩み寄った。

どこで居合わせようと場違いな恰好をしている薄緑の髪のひよろ長男を確認したとき、彼は顔をしかめて舌打ちを放っていた。

オールバックの髪型をした大男へ、ジョーカーが嬉しそうに呼び掛ける。

「ほう、ほうほう。なかなか珍しい奴と出会った」

「それはミーの台詞だ」



「おいダンテ。何で問答無用に一刀両断しねえんだ」

ボスがどういふことかと怒鳴りつけるも、ダンテとよばれたプロレスラー風の男は、どうしようもないというリアクションを見せて肩をすくめている。

「おめえほどの男が小僧とおっさんくらい斬り捨てるのはわけがねえだろ」

「それができればミーは南斗の帝王に目をかけられている」

「なんとのおていおう？ そりやまさかあの」

しようがないとひとつ息を吐いたダンテがジョーカーに表に出ろ、と顎をしゃくつた。

タイマンを要求されたひよろ長男が手中のカードを弄びながら言う。

「南斗百斬拳。こんなところで出会うとはな」

「ミーにとつては悪夢だよ。悪魔の小僧と死神に出くわすとは。導師に報告されたら懲戒では済まん」

夜の繁華街の大通りでやくざものや好事家、通りすがりに囲まれ見世物になったところで、ダンテとボスが少年や影と対峙した。

一歩踏み出した死神が不服顔な主に振り返る。

「ここは手柄を譲ってください」

「見物では修練にならん」

「なんの。あらゆる南斗の拳を道場以外で見るのは十分それに値しますよ」

筋肉質すぎて黒いスーツが似合っていない用心棒が百斬拳の構えを見せた。めずらしい指の配置の構えだ。彼が気合を溜めながら言った。

「口止めにはこれが夢だと認識してもらおう以外あるまいな。ちと手荒になるぞ」

「大柄のお前を運ぶのは骨が折れる。わが手勢の迎えがくるまで寝ていろ」

同じ南斗百八派の拳法、二人は龍の牙をすれちがいに斬り合わせた。

バスン、といった破裂音で双方の服がはじけ飛んだ。

周囲の観客がどよめいたのは、ダンテの指突で電柱がへし折れたからであり、ジョーカーの斬撃でネオンの立て看板が真っ二つになったからだ。

「すげえ」

「銃器にもまさるダンテの旦那と互角ってまじかよ。あんな化け物を他に見るなんて」

「ジャツカルの頭あ」

黒い口髭の大男が部下に意見を求められて、ジャツカルと呼ばれた男はしかめっ面のまま葉巻を取り出した。

彼も腕には自信がある。大の男二人くらいは両手で挟み潰せるほどの剛力を誇るマフィアのボスながら、今回ばかりは相手が違った。

鉄を素手で両断する。柔らかな土でも抉るようにコンクリートやアスファルトの地

面を削る。

あげくに重力を無視して飛び跳ねるような超人たちと比べられてはたまったものではない。

「あのダンテとまともに殺りあうつてのなあひよる長……まじで奥の手を考えとかねえと」

ポケットのなかの鍵を握りしめるジャツカルがふと思いついたことがあった。

「おいフォックスはどうした」

「シマを見回ってます」

「呼んで来い。二人がかりならあひよる長とて」

「ようがす」

二人の拳士が膠着する戦いのなか、見世物の輪の中に乱入してきた二メートルをゆうに越える巨漢が、何人かのやくさものを放り投げてからやってきた。

恐ろしくスーツの似合わない、異相の男だった。盛り上がる筋肉で服が破けそうなファイアの幹部は、額に走る傷に指をはわせながら、のっそりとジャツカルのそばへ歩み寄った。

「ボス」

「見ているか。あれだ」

「ダンテの旦那が手こずってる。そこに参加しろと？」

「二人でぶつ殺せ」

「冗談でしょう。あつしは一流の拳法家。あの化け物どもが何の拳か、もとより承知してますぜ」

「わかっとなる！」

「南斗聖拳。あんな超絶の殺人技なんて奮うやつあ、この世にほとんどいませんや。相手にするのは不毛ってもんでさ」

「てめえ」

拳士として鼻の利く巨漢へ、ジャツカルがならあれはどうだと死合いを見守っている金髪の少年を指さす。

「まああんなガキなら。ってかあつしなら格闘技の世界チャンプでもなぶり殺せませうぜ。アイツらが規格外なだけで」

「あのひよろ長に気付かれずに殺れ。今すぐにだ」

「へいへい」

大金で雇われているマフィアの幹部がしようがねえとばかりにシンに忍び寄る。

音もなく、そしてダンテとジョーカーの戦いを見入っている野次馬に誰一人として気付かれることなく、懐の刃を標的の首に当てた。

「つぎええ」

忍びの巨漢が悲鳴を上げて後ずさる。その様子に、他の誰もが視線を向けた。

「あ。フォックスの兄貴が仰向けに倒れやがった。あのガキがやったのか」

「あの指変な方向に曲がってる。折れたんじゃね？」

手下たちがざわめいた。フォックスは指を折られた痛みのなか、気絶の様相で突っ伏している。

その様子に少年が男に近寄る。目を剥き、舌をだして悶絶しているように見えるその姿を不思議そうに覗き込もうとした。

「ひゅ〜」

気合の呼吸音とともに、フォックスは仰向けのまま広背筋を使って跳躍した。

落下する際に金髪の少年の首めがけて仕込んだ鎌を奮う。

「跳刃地背拳……っえ」

フォックスの目算が達成されることはなかった。首元へ薙ぎ払おうとした鎌の刃はシンの二指によって白刃取りされていた。

背後を見ずに拳を見切られたことに驚愕した巨漢が、血相を変えて着地する。

「なんだ、なんだこいつ……あつしの必殺拳を見ずに捉えやがった」

「おもしろい拳法だな」

シンが興味深そうに相手を見やったが、奪われた鎌を素手で破壊するのを見たフォックスはさらに動転して後ずさる。

「まさか。まさかこいつも南斗の」

「フォーツクス！」

ジャツカルが叫ぶ。拳法家の勘で、相手にははいけないと悟った俊敏な大男が逃走を開始する。

その背中へ、シンが地を蹴って飛びかかった。

「クソがあゝー！」

気の波動を読める程度には達人であるフォックスが、迫ってくる恐るべき気合の少年に向かって振り向き、再度鎌を薙ぐ。

「若ー！」

空中にて得意の南斗獄屠拳を放とうとしたとき、死神の叱咤が飛んできた。

当然にして本気の蹴りを放つつもりはなかったが、このままでも相手の胴体をぶち抜くことは十分にできただろう。

それを制されて、シンは途中で地に降り立った。

相手の顔は汗まみれになっていた。死を垣間見たと思われる。

「ガキのくせになんちゅう殺気を」

「おやすみ」

顔面チョップを決められたフォックスがどきりと崩れ落ちる。繁華街の連中があの跳刃地背拳が子ども扱いだとどよめくなか、シンが同行者に声をかけた。

「膠着しているなら手伝おうか」

「どうやら百斬拳は思っていたより難敵のよう。そうしますか」

「冗談ではない」

死神の振り上げる斬撃をかわしたダンテが大きく後退する。

先の北斗の反乱軍を鎮圧した際、あの少年が曹家拳の伝承者候補を撃破したという報告も聞いている。

無敵の拳と名高い北斗さえも破る。そんな存在に参戦されてはたまったものではない。

シンの南斗獄屠拳の発動を瞬間に見たことで、映画俳優のような外見の巨漢は初めて己の判断が思い上がりであることを実感した。

眼前の大敵を捨てて、彼は跳躍しながらピルの間をすり抜けて行った。

「おいジョーカー、あいつ逃げたぞ」

「南斗の里の方向ですな」

「見回り組としての仕事は一応果たたということか？」

「まだまだ先は長いですよ」

「おいゴラああ!!」

ジャツカルが叫ぶ。大衆の前で面目を潰された形の彼が地団駄を踏んで小銃を抜いた。

抜いたと思ったら、ジョーカーが片手を上げていた。解体された小銃がパラリと落ちる。

恐るべき手練れと悪魔の小僧がマファイアのボスを見る。

こうなれば面子も何もない。ジャツカルは部下を捨てて野次馬を突き飛ばし蹴り飛ばし、繁華街の町から逃亡していった。



## 十一話 北斗の聖者

金髪の少年と影は繁華街の安宿に泊まり町から町へ、今度は賢者が時折姿を見せるといふとある区域へやってきた。

昨夜宿で飲んだという酒にやられたのか、ジョーカーはふらつきながら歩いている。振り向きもせずシンが言った。

「下戸が無理して飲むからだ」

「若があんなに飲けると思わなかったんですよ。それにつられてつい」

「たしかに飲めるが、とくにうまいと思ったことはないな。あれは手慰みの類だ」

医療の町という看板で発展しているようで、区画全体の規模はさほど大きくなくとも、町は混雑気味だった。

「ううむいかん」

死神がらしくなく通りの壁に背もたれて天を見上げている。

医療機関らしきビルに向かって並ぶ長蛇の列の人々が、今日は賢者様は来られないかもしれない、という関係者の説明を聞いて肩を落としている。

ちらほらと帰途に就く連中もいた。

「先に行つてゐるぞ」

「ほんとに若は薄情ですなえ」

「お前は地獄に置いてきても生還しそうな奴だ。心配する必要もない」

ビルルの近くへやつてきたシンが、列に並んでいたと思われる人々とすれ違う。

そんななか、建物の前の広場であぐらをかいている大男を見つけた。

、それでも成人男性の直立と変わらない。

大型のゾウに匹敵すると思わせる体積の、いわゆる肥満体が大きいため息をついてい  
る。

どこにいても目立つであろう肉塊の男は、聖者様が来るまでここで待つ、と職員の説  
得を受け入れない様子だった。

「おいデブ。あの方は今日は来ねえかもつて言つてんだろ。前が見えねえんだよ暑苦し  
い、帰れや！」

同じく聖者に用があつたと見える荒くれものたちが大男に向かって吠えている。つ  
いには手にした鈍器で殴る蹴るを繰り返り広げ始めた。

おれさまたちは院内で待つ、という文字通り無法を口にしてはいるが、職員たちは武器  
を持つ彼らに対し何も言えずにいるようだ。

モヒカンとは時代遅れな、と思つたシンは後年その感覚が間違つていたことを思い返

すのだが、このとき少年には知りえるはずもない。

数人がかりのリンチにひるむどころか反応もしない巨漢が、俯いたままため息をついていた。

「聖者さま〜」

「うるせえつつつてんだよデブ！」

「脂肪の塊。燃やしちまうか」

それを聞いてシンが動いた。しかし路地裏から姿を見せた何者かが渦中に踊りこみ、ヒヤッハー状態だったひとりのモヒカンの腕を掴んだ。

「なんじやいてめえは!!」

「ふっ、奇跡の町か。聖者の真似事くらいおれにもできる」

「あ?」

その乱入者がいきなり彼の肘を指で突いた。

するとモヒがいきなり武器を捨て、絶叫を上げて倒れ込んだ。

「……おかしいな。腕の筋肉を強化させるつもりで押したのに」

突かれたほうは悲鳴を上げ、パンパンに膨らんだ腕をかばって転がり続けている。

それを見た仲間がヤロウと殴りかかろうとしたものの、恐ろしく暗い男のまなざしを受けて何かを感じ取ったのか、一斉に後ずさった。

「仕方がない。お前らもデクになれ」

「うわわ」

「ひいひい」

センター分けの黒い長髪、まるで古い時代のヒッピーのような外見をした男が音もなく飛び上がった。

彼の双眼から狂気が見て取れる。わずかな間に続けて倒れたモヒの集団が、体を痙攣させて地に這いつくばっていた。

「どういうことだ。腕力脚力を上げてやろうとしたのに、的を外したかな」

「外したんじゃない、最初から当たってねえんだよ。気でもふれてんのか」

周囲にいた野次馬がそう突っ込んだ。その台詞を聞いた男は傾げていた首を後ろに向け、野次馬の一人を睨みつけた。

「首が真後ろを向いた……?!」

「バケモノか」

逃げ惑う人々に紛れたシンが空中から襲い掛かろうとした暗い目の男の手首を掴んで、暴走を中断させた。

「何……?!」

自身の襲撃を止められたのが信じられない、とばかりに男が驚愕しながら少年を見

る。

「小僧……お前か」

「いい加減にしろ。ぶつとびすぎだろキサマ。あの巨漢といい、いきなり情報量が多すぎる」

「……」

何か言いかけた暗い男は自分を知らないのか、といたりアクションを見せて押し黙る。

ならばよいと眩き、すつと身を引いて間合いをとった。常人ではありえない洗練された動きに、お前は拳法家か、とシンが呼び掛ける。

「拳士などではない。おれは聖者だ」

「そいつは今日は来ないと聞いたが」

「おれに恐れをなしたか。口ほどにもない」

「お前バカだろ？」

シン少年の台詞は容赦がない。こめかみに血管を浮かび上がらせた男はほざけと言いつつ、近くでうつむく巨体に近寄った。

「おい」

「見ろ金髪の小僧、おれにかかればこのデブであろうと」

金髪の小僧呼ばわりは耳慣れて久しい。なぜその呼び名をと言いかけたものの、ズブリと背中に指を押し込まれた巨漢がびくりと大きく跳ねたことで状況は一変した。

「お、おおお……!!」

「ほれ見ろ。デブも腰に力が漲みなぎって喜んでいる」

「おい死神。お前と似たような頭のおかしい奴がいてな」

シンが呼び掛けたひよる長い同行者は、未だ壁に向かって絶望のポーズで固まっていた。

「だめだこりゃ」

珍しく呆れた口調でシンがそう呟いたとき、肉の壁かと思われるほどの巨漢がゆっくりと立ち上がった。

口から煙のようなものを吐いている。そのぶよぶよの男が面を上げたとき、それが正気でないことが確認できた。

素人でもその狂気を感じたようで、周囲の人間が一気に逃散していく。

ぐおおおという唸りを上げて、一番近くにいた暗い目の男に巨漢が突進した。

「なにしゃがる」

広場にある木々や泉、椅子や石畳などを破壊する相手の平手打ちのような攻撃をかわしながら、原因を作った側がやれやれと肩をすくめている。

「まるで暴風のようなブタだ。狂ったか」

「狂ってるのはお前だつての」

さすがにシンが突っ込んだ。なんだと、と凄絶な形相を向けてくる暗い目の男の無防備な背中に、巨漢の張り手が炸裂する。

ボールのように跳ね飛んだ彼が車に激突して動きを停止させたが、そのまま気絶するかと思いきや、狂つたと表現された男がむくりと起き上がった。

「もう一度言つてみる。誰が狂つてるつて」

「お前だ」

金髪の少年の躊躇のない突っ込みに、男がブチ切れた。あれだけの衝撃を受け地に叩きつけられておきながら、その怪我を機にした様子もなくシンのもとへ大股開きで向かつていく。

雄たけびを上げて破壊行動に身を任せていた巨漢の拳が激高した彼にまたヒットした。

再度動きを邪魔されたことでヒッピーのような頭部をしたいかれた男は、ブワつと闘気を発動させる。

その男が目にもとまらぬ指突を連続して巨漢の体に叩き込んだ。

シン以外は何が起こつたかわからなかつたようだ。

「グオ」

「引っ込んでろデブ」

「……」

後ずさった巨漢が狂気のなかで肩についた自分の裂傷を認めた。次の瞬間だった。

「いてえよ〜」

先程までの狼藉がそよ風のように映るほど、巨漢の暴れっぷりは本格的なものになった。

その破壊対象は聖者を騙る男だった。鋼製のモニュメントを破壊し、土台を叩き割り、地震にあったかのように割れていく地面は狂気の大男の素手から発生している。

周辺は騒然となった。治安部隊に連絡しろという遠巻きからの声が聞こえてくる。

「うるせえよ死ぬデブ」

暴れまわる巨漢に対し、男が再度横薙ぎを払ったが、それは相手の分厚い肉に吸い込まれて動きを止めた。

「なっ」

「いてえよ〜!!!」

バゴっといういやな音がした。男の後頭部に彼のシヨベルカーのヘッドのような掌撃が炸裂したようだ。



ヒッピー男がまたも跳ね飛んだ。今度は素早く受け身を取ったことで、彼に余裕がないとシンは察した。

「ブタああああ！」

「いてえよ〜」

狂人と狂人の戦いが始まった。必殺の指突や斬撃が奥まで突き入れられないと悟ったほうが、トントンと小刻みに準備運動を始めた。

ぶつ飛んでいる状態のほうの雨あられな平手打ちを避けながら、鷹爪三角脚という蹴撃を放とうとしている。

ここに至ってシンも動き出す。すでに彼を南斗の使い手だと認めており、その奥義を食らいかけた巨漢を救うためだった。

残像に等しいおのが蹴りの動きを止められた男が、つま先を受け流して平然と立ちふさがる少年へその暗い目を剥いた。

「……小僧！」

「その辺でやめておけ」

「殺すぞ」

「やってみろ」

少年の気を感じた男がサツと引いた。額に流れる無意識の汗に気付いた彼がそれを

ぬぐいながら言った。

「……あの赤毛の御曹司が認めた小僧、今の気当たりは」

「いてえよ〜」

「うるせ……」

収まる気配のない巨漢を怒鳴りつけようとして、その口が開いたままになった。

三メートルほどもある体躯が静かに揺れ、派手な音を立てて地面に崩れ落ちたからだった。

煙が晴れたすぐそこには、別の人物が立っていた。その人物が少年の名を読んだ。

「すまなかつたなシン。いいところに居合わせてくれた」

「この町の聖者とはあんたのことだったのか。理解した」

暗い目の男が後光が射すようなオーラの青年を呆然と見た。

彼が追い求めていた究極の佇まいたたく、大賢者を思わせる雰囲気を纏まとった理想の存在がそこにいる。

「トキ……お前が聖者と名高い北斗神拳の次兄、トキだな」

暗い男があえぐように言いながら、憧憬と嫉妬のまなざしで穏やかな表情の青年を窺った。

全てにおいておれさまとは違いすぎる、と彼は正直に思ったが、今更自分を否定する

ことはできない。

§ 本物はおれだあと叫び、敵わぬ相手に撃ちかかった。

§

§

§

§

壁と向かい合いながらしやがんでいた死神が、若と呼んでいる少年の接近に気付いて面を上げた。

「何かあつたんですかな？」

「……今の状況で他人事のように振舞えるお前は、逆に称賛に値する」

「どういうことです」

「噂は本物だった。師父の許しを受けて下界へ降臨する聖者。巨漢の救命ついでの偽物退治は見ものだったぞ。少なくとも俺の出番はなかった。そしてどんな名医より有能な男がそこにいる」

「ほう名医。では自分も直してくれませんかね」

「患者たちは騒動で遠巻きになっている。あれらの先に行くのは今だな」

「おおそれでは」

スキップしながら広場に向かったジョーカーの、トキい?!という素っ頓狂な声で珍し

くシンが笑った。

その聖者からぼんぼんと肩を叩かれた巨漢が元の状態に戻ったのだろう、ニコニコしながら見物客をかき分けてどこかへ消えていった。

死神にそんな状況が理解できるわけがない。彼はすぐそばで倒れている男を見てアミバあ?!、と裏声でまた人名を叫んでいた。

## 十二話

## もう死んでいる

「お前は」

「ジョー様と交代でシン様のお供をいたします。レステイエと申します」

「……俺は女と放浪する趣味はない」

「ジョー様は影として多忙なお方。お嫌であろうとおそばに侍<sup>はべ</sup>らせていただきます」

「捨て子の小僧にそのような言葉遣いなどいらん」

「お戯れを」

死神の配下というその女がふと微笑んだ。

宿で目覚めたばかりのシンが、ベッドの下で跪く女拳士に声をかけられたのは、まだ夜が明けたばかりの早朝だった。

すでにジョーカーの姿はない。

「流浪の立場であつた天翔拳、誰にも仕えなかつたジョー様がようやく見つけた主と仰せになっておりました。ましてやあの赤毛の御曹司が貴方を南斗の光明であると公言しておりますれば、お供の光栄に身が引き締まるばかりです」

「……」

大仰な展開になっている、としてシンは返答せず、窓の外を見た。

ここでもあの紅鶴拳の貴公子の話が出てくる。前世と比べ、あの男はどれだけ強く鷹揚で大人物なのか、と思わずにはいられない。

旅はまだ途中であり、ここで引き返すわけにもいかなかった。

しようがなく少年は少し年上の女性の同行を認めて、新たな目的地に向かうことにした。

た。

§ § § § § §

名水が湧きだすと有名なとある村へとやってきた。

観光名所としても知られているようだが、核戦争への不安が広がるここ数年では治安も低下し、どの村や町も国の防犯も行き届かない状況が続いている。

それが及ばない以上、中央と断絶された地元の権力者や暴力集団が縄張り争いを始めるのも、また当然の成り行きだと言えた。

それでも自衛団の存在で、奪い奪われなどといった戦火は今のところかうじて避けられているようだ。

旅の者として迎え入れてくれたことで村のなかへ足を踏み入れた少年とお供の女性

は、とりあえず一泊できる宿を確保してから外へと繰り出した。

刺繍を施した頭巾で髪型はわからないが、レスティエと名乗った女はしなやかな肢体を青白い道着のようなもので身を包んでいる。

堂々としすぎる忍びの恰好に見えなくもない。

今年十八になるという。生活に追われることがないと推測できる身なりや整った顔立ちと相まって、追われるほうのこの村の女性に混ざっては、その存在は異質レベルに目立ちすぎた。

「もう少し控え目な風体にならないものか」

「光明のそばではそれも消えてしまいます。貴方はどれだけ自分が稀有な存在か、お分かりますか？」

「……」

「強く美しく凄然と。あのユダ様が花も実もある男だと絶賛しておりました」

「くだらん」

金髪の少年がこの町の役所から出てきた集団に気がついた。レスティエが彼らに向かって一礼している。

「なんだ」

「我々主従がこの町に入れた理由です」

「主従とは」

「来ました。彼らが自衛団のリーダーだそうです」

下界といわれる市井の人々のなかでも、自衛団に選抜される者は身なりはともかく、雰囲気がなかなか猛々しい。

そんな連中に囲まれてやってきたリーダーが女性だったことに気付く。

その相手がつけていたサングラスを外したとき、シンは思わず目を見開いた。後ろに控えるレスティエも瞠目している。

「なに、あたしの顔になんかついてる」

「……いや」

「お前が美人すぎるからびっくりしてんだよ。いつものことじゃねえかママヤ」

「ママヤにさほど劣らない女を連れてくるこの美少年も大概だけだな」

ママヤと仲間たちのやりとりを聞いたシンが守るべき対象との差を確認した。

年はこの女のほうが上。顔立ちと髪色は同じだが、クセつ毛と勝気な性格をのぞかせる佇まいは似ても似つかないものだ。

背後の忍びのような女と同世代だろう。

「……用心棒にしては子供すぎない？ この子たち」

ママヤの言葉で少年はお供に振り返る。顔が用心棒とはなんだと語っていた。



方便ですとポーカーフェイスで言うこの女、やはり死神の配下であることを実感したシンだった。

周囲の人々がその様子を見ていたものの、自衛団も彼らもマミヤの次の行動を察することができなかつた。

当事者以外でそれを見切ることができたのはレスティエのみである。

「シン様！」

そう叫んだ影のお供が手を伸ばす。

主人たる少年のこめかみを狙ったヨーヨーなものの刃を素手で止めきつたレスティエに、マミヤが信じられないといった様子でヨーヨーを引き戻した。そして口笛を吹いて言った。

「驚いた。女であたしのこれを受け止めた人は初めて」

自衛団の仲間や周囲がようやくリーダーの行動に気がついたようだ。

どよめきの声のなかでレスティエの鋭い視線を受けたマミヤが、そう怒らないでと肩をすくめている。

「なかなか過激な挨拶のようですね」

「用心棒として雇うからには報酬が必要でしょ。その報酬に見合う働きを期待しただけ。だいたい貴女のお連れは反応もできなかつたみたいだけど」

「ふっ」

彼女が薄く笑った。マミヤが眉を寄せた。女の戦いが始まるか、と誰もが思っていると、リーダーを呼ぶ声が町の検問のほうから聞こえてきた。

「マミヤさん新たな用心棒が見つかりましたぜ、こっちです」

「……今行く」

対峙する相手を一瞥し、マミヤは仲間を連れて歩き出した。忍びの女が微動だにしない主人にそつと語りかけた。

「あのまま眉間で受けきるおつもりだったのですか」

「……特に何も考えていなかった」

「女に甘い、と思わずにはいられません」

「女は守るものだ」

「あのふてぶてしい性格、見た目でごまかして虚をつく妙技。その対象ではありえませぬね」

「お前もな」

いきなりの爆発音で大地が揺れた。マミヤたちがいた方向だった。

問い詰める声と怒号が交錯し、検問近くの広場が騒然となった。

用心棒だと自薦してきた、ハゲ頭に刺青をほどこした二人がマミヤを捕らえ、出入口

からやってくるバイクの爆音のほうへ呼び掛けた。

「いましたあ、この女ですぜ、セイジ様！」

破戒僧のような入れ刺青男たちの合図で、大型の三輪バイクの後方で腰かけていた男が立ち上がる。

捕らえたママヤを守ろうとするいかつい男たちが、ボスの登場かと武器を奮って男のほうへ打ちかかった。

「いけない、その男は……！」

リーダーがそう止めようとしたが遅かった。

バイクから飛び降りた薄い青色の髪を逆立てたような男は、二人の自衛団を両足の開脚蹴りで吹き飛ばし、そして地上へ降り立った。

仲間の名を呼んだママヤの耳に、彼らの断末魔が聞こえてきた。

体が爆発したように飛び散ったそれを誰もが見た。

騒動を聞きつけてきたさらなる自衛団、町の人々、居合わせた人々、すべてがおののきながら悲鳴を放つ。

騒然となったそのなかで、金髪の少年だけがそんな光景を平然と眺めていた。

動揺を隠せないレスティエが主人の名を読んだ。

「あれはまさか……経絡秘孔を突いたのですか」

「そのようだ」

「……そんなばかな。あんな北斗の拳士は見たことがありません」

仲間を爆死させた薄い青髪の男は長身を揺らしてマミヤに近づき、坊主二人に拘束されて動けない状態の彼女の顎をつまみ、自分に向けさせた。

セイジと呼ばれた若者はマミヤをまじまじと見つめ、ふむと頷いた。

「……これほどのいい女は他では見たことがない。なるほど噂通り」

「放せ」

「おれの手下どもは皆怪力ぞろい。女の細腕でどうにかできる相手ではない」

顔を近づけられたマミヤが唾を吐いたが、それがセイジに当たることはなかった。

「気も強いのか。ますます好みだ。おれを愛する資格は十分にある」

「くたばれ」

「マミヤさん！」

新手の自衛団がリーダーを救おうとやってくる。

十人ばかりの大柄な男たちだったが、颯爽とそれに相対した男は構えもせず、彼らを殴り飛ばし、蹴り上げ、薙ぎ払って全ての敵を地に叩き伏せた。そしてそれらは皆爆散していった。

今度こそ金切声があがった。夫や恋人、息子をうしなつた家族のものだった。

「ふははもつと喚け騒げ。今日からこの町はおれのものだ。だがこの女を調教するためにひとまず本拠に帰還せねばならん。いくぞお」

長の号令にハゲの手下たちがかしこまってから戦利品を引きずりあげ、バイクに連れ去ろうとした。

何かの接近に気付いたママミヤが両親の名を呼ぶ。

「だめ、二人とも逃げて！」

両親らしき夫婦がなにをするんだ、とハゲの修行僧たちに詰め寄った。刺青の男がセイジを見上げる。

「ふ……おまえらが両親か」

見下した様子の長が目を細めた。

しゆるしゆるという気合の音を立てた彼が目を閉じ、そして見開く。

衝撃波がママミヤの両親たちを襲った。彼女の絶叫が終わる前に、両親たちはすばやい影の腕の中にかからめとられ、離れた場所へと後退していた。

「ほう」

一連の動きを目で終えたのはセイジだけだった。

坊主たちが何が起こったと顔を見合わせている。

ママミヤの両親を町の連中たちに任せたレスティエが一步前に出た。

それを見る長が唇を舐めて言った。

「頭巾で顔全体はわからぬが、マミヤほどの女でなくともなかなかの美形だな」

にいいと笑ったセイジがお前も戦利品にしてやる、と声高らかに宣言し、再びバイクから飛び降りた。

「くかか」

ドン、という重低音は青髪の男が踏み出したときのものである。そのスピードで忍びの女との距離を詰めた。

あまりもの蹴りの速さでレスティエが受け身も取れずもんどりうって倒れた。

「おのれ」

彼女が構えたときには、北斗の拳を使うという相手の拳がすぐ目の前にあった。

「しまっ」

「他の男のように爆散はせん。痛めつけて従順にさせるだけだ」

かの拳を見切ったはいいが、防御した手のまま押し出され、正拳突きを食らった彼女がまた吹き飛んだ。

転がるレスティエがそれでも上半身を起こし、近づいてくる相手を見上げた。

「なんとという剛拳……ひとつつひとつつが重い」

「女、なかなか拳法の心得があるようだな。体が丈夫なのはよいことだ。それに」

頬に走る一条の傷をなぞって、セイジが凄惨に笑った。

「おれに對し傷一つでもつけた者はここ最近まったくいかなかった。それだけでも持ち帰る価値がある」

首を掴んで持ち上げられたことでレスティエが口から血を吐いた。

「おそばに仕えます、と言ってみろ。この程度で許してやるぞ」

「……誰が」

「死にたいか」

かはつともう一度吐血した彼女がうつろな目になったとき、その唇が何者かの名を呼ぶように動いた。

拳法家としての勘が働いたセイジが横目からあらわれる何者かの殺気を悟る。

間髪入れずに大きく後ずさった。その相手を見た。

光り輝くような金髪が風に靡いている。感じたことのない戦慄を覚えた薄い青髪の男は、その対象を見て拍子抜けしたように嘲笑った。

「何かと思えば、まだ年少のガキか。今の殺気はお前が飛ばしたのか？」

問われた少年は返事もしない。レスティエを助け起こして近くにいた町の人に頼む、と告げている。

そして立ち上がった。

「その殺気は褒めてやるぞ、素質がある。だが運がなかったな。そんな鋭い気の持ち主がここで果てる。遠くない将来、必ず有望な使い手となったであろうに、残念な話だ」音もなく間合いをつめてくる男の動きで、バイクの近くから見ていたママヤがやめると叫ぶ。

セイジの突きを目で捉えたものは忍びの女も含めて誰もいなかった。

殴り飛ばして爆発、それで終わりだと思っていた彼が驚愕の目を見開く。

「なんだと……」

自身の拳を止められた過去はほとんどなかった、と行っていい男の反応だった。

その手首を掴んだシンの動きを、彼すらも見切ることができなかつたようだ。

「何者だ小僧」

渾身の力で相手の拘束を振りほどき、間合いを開ける。後方へ飛んだセイジがにやりと笑った。

いつの間にか少年の背後に近づいていた刺青の手下が音もなく倒れたのを見て、さらに目を見張っていた。

「シン様」

レスティエの声がある。

シンは心配するかと告げた。坊主ごときを殺す趣味は彼にはない。当身を食らわせ



ただけだった。

「小僧、拳ひとつを止めただけで思いあがるなよ」

構え直したセイジがふうふうと呼吸を整える。本気なった男が歯を剥いて闘気を高めていた。

「北斗の門の拳、久しぶりに全力で見舞ってやろう。細切れに爆殺してやるわ」

誰の目から見てもわかる沸き立つ闘気に、周囲の人間が怖気を奮って後退する。

手下の刺青たちがあんな長の気合を見るのはいつ以来だ、と顔を見合わせていた。

あのガキ人の尊厳がないほど潰されるぞと面白そうに笑っている。

「マミヤが金髪の少年の様子を窺う。そこに映っていたのは恐れおののく姿でも、気合十分な姿でもなかった。」

「せめてわが拳の名を聞いてから挑むのだったな。その時点でお前は詰んでいる」

「何……」

大仰な構えのセイジに比べ、利き手を上に、そうでないほうを下に、単純な構えのなかの異様な気配を感じた当事者がはっとしながら叫んだ。

「まさか……その型は南斗聖拳」

「よく気づいた。だがもう遅い」

「笑わせるぜ。おれが極めたのは北斗の拳、何千年もその影に怯えていた南斗ごときが

敵うと思っているのか！」

拳格の差を見せてやる、とばかりに突進してきたセイジの正拳がその数を増して放たれる。

北斗の百裂拳に等しい打撃の威力はすさまじいもので、辺り一面の障害物がすべて吹き飛んでは散っていく。

彼に破壊できないものはないかと思われた。

「逃げ足だけは速いな小僧！」

そう哄笑しかけたセイジに、少年の二本指が繰り出されてきた。

鍛え抜いた掌底で受け止め、小僧のひ弱な拳を握りつぶしてから剛拳を叩きこんでやろうとした彼が掌に痛みを感じたとき、咄嗟に察して腕を引こうとしたが、その判断が遅かった。

相手の指が自身の手のひらに刺さる。それはけして勢いを緩めることなく、そのままセイジの体へと突き進んだ。

両手で押さえ、闘気を最大に放出しても少年の一撃を止めきることはできなかった。レステイエに与えた攻撃そのものを返された形だ。

両手を貫通された男は右肩あたりを突き入れられ、さらにその体を貫かれて吹き飛んだ。

血煙を上げて転がり、途中にあつた木製の見張り台を破壊し、バリケードのような働きをしていた廃車に突っ込んでようやくその動きを止めた。

パラパラと破壊音のあとの静寂のなか、時間差を置いて配下たちが叫んだ。

「セイジ様あ!!」

誰もが呆然とする光景において、最初に反応した坊主たちが車に激突して跳ね転んだ長に駆け寄り、必死で安否を確認している。

ママヤも町の人間も、少年のあまりもの凄まじい拳の威力に声もない。

レスティエでさえ実際にシンの指突を見たのは初めてのようで、握った拳にさらに力をこめながら、あれが本物の南斗の拳、と呟きながら起き上がっていた。

恐ろしい拳法使いを一撃で倒したことで、うおおと騒ぎ立てる周囲の喧騒とは逆に、少年のテンションは低い。

彼にとっては北門の拳などというまがい物に対して何の感慨もない。

誇そしることも嘲ることもなく、その男が半死半生で立ち上がろうとするのを見て歩み寄った。

「頑丈にできているな。秘孔で出血を止めたか」

「こんな小僧に……ありえん……南斗ごときがこのおれを初撃で……!!」

「このガキい」

坊主の何人かがシンに襲い掛かる。忠義者たちへシンが必殺の拳を向けることはない。近づく女の影を悟って少し身を引いただけだった。

「じゃ」

彼女のかけ声で全ての刺青たちがどつと倒れ込んだ。斜めに胸を斬られた彼らが血が血があと叫んでのたうち回っている。

「女……！」

ふらつきながらも立っているセイジが、空中で回転して着地したレスティエを睨みつける。

彼女はふううと息を吐いて、口元の血をぬぐっていた。

「過去の南斗しか知らぬ、ゆえに主にあしらわれたのだ。わたくしより遥かに強い男。だが相手にしたのはいはずれ北斗の全てのを凌ぐであろうお方の拳。お前は修める拳法を間違った。せめて北斗神拳ならば」

「ほげく女あー！」

北門の拳が北斗神拳を継承できなかつた者の救済の拳だと知らず、セイジの逆鱗を踏んだ彼女へ飛びかかった。

鬼の形相といていい彼とレスティエの間に、金色の髪が割って入る。

龍の牙に例えられる指突ではなく、薙ぎ払いの指斬がシンから放たれた。

致命の衝撃を避けたのは、彼の天性の資質だったといえるだろう。

それでも胸を横切るように斬りつけられた男は、それが威力を大幅に減らした牽制程度のものであると思いい知らされながら、バイクのほうにいた手下の刺青男たちのほうへ飛ばされていった。

長を受け止めきれずに押しつぶされた坊主たちの隙について、ママヤが忍びの女に助け出される。

彼女は両親の元へ駆け込んだ。抱きあう親子をよそに、レステイエはバイクの近くで立ち止まったシンの姿を見つめていた。

「その体では自分ものの役に立つまい。鍛え直してまた出なおせ」

「……小僧……小僧……小僧!!!」

「次に出会うとき、俺はさらに強くなっている。手を伸ばして見上げたところで届かぬ対象がある以上、いかに拳威を高めようと俺が慢心することはない。以前と違ってな」

「キサマは必ず殺す。いずれ必ず」

「無理だ。俺はもう死んでいる」

「何……」

シンの言葉に要領を得ず、薄い青髪を血で染めた男は無理やり手下に担がれ、バイクに乗せられて去っていく。

不意の侵入者が撤退したことで沸き上がる町の連中のなか、両親とともにやってきて礼を述べるママイヤは、忍びとその主に丁重な謝意を告げていた。その際、シンはレスティエに清潔な白の手ぬぐいを渡していた。

「主自らそのようなお気遣いを」

「女は」

「守るもの、ですね」

彼女が柔らかく微笑する。その横にいる象徴に似た美しい女が思い詰めた様子でシンに向かって跪き、決意した表情の面を上げた。

その拳を教えてほしい、という内容の懇願に、少年は難しい顔で受け止めた。

その思いがよくわかるレスティエは助け舟を出した。

「この不安定な世においては、南斗聖拳の基本の型を教え込むのは無駄ではないと思います。彼女はわたくしめから見ても性根の正しい女性。悪用することはまずないかと」

「そういう意味ではない」

「は……」

薄い青の頭巾をかぶる忍びは一般門下生ながら、死神の眼鏡にかなったゆえか、なかの才能があり使い手であったが、彼女の身分では南斗の頂点、慈母の星の顔までは知らぬらしい。

よく似た顔つきのマミヤという女が門下生になったのならば、その先がどうなるか、シンには読めていた。

これほど好都合の影武者は他にいるはずもなく、親孝行の彼女をそんな騒動に巻き込またくないと考えて、彼はマミヤの懇願を一時保留とした。

必ず南斗の里へ伺います、という決死の表情を見て、シンは社交辞令に頷いていた。

## 十三話

## 南斗双演戒（そうえんかい）

「御曹司、演武が始まりやしたぜ。ほとんどの連中が集まっています」

「今行く」

私室から出てきた赤い髪の青年が、付き人の小男から赤紫のマントを受け取って聖堂へと続く長い廊下を歩いていった。

靴音が堂内に響く。燭台の火が揺れたとき、彼は立ち止まった。

それに呼応するかのように高い屋根の方向から声が降ってきた。

「名高い南斗の紅鶴。少し時間をいただきたい」

「……何用か」

いきなりの呼びかけでえっえっと周囲を見渡すコマクの目に、どこからか語り掛けてくる者の姿は見当たらない。

前を向いたまま微動だにしない主人を窺って、小男は懐中の暗器に手をかけた。

「小物よ。死にたくなければ懐から手を出しておけ」

「なにをこの」

憤慨しかけたコマクが押し黙る。ユダの反応が薄すぎて、かえって掣肘せいちゆうを受けたかの



ように面を伏せた。

「よく飼いならしておられる。さすがは赤い衝撃」

くつくつと喉の奥で笑った見えない誰かが用件に入ろうと告げた。

「貴方の演武の相手。どなたでもよい、手心を加えていただきたい」

「……」

「わざと負けろだあ?! おんしゃ」

「雑魚は黙っている」

「コマク」

「はっ」

忠義の小男が再度激怒するも、主人の一喝で押し黙る。

影のわしにもわからぬほど気配が小さい、と齒軋りしていた。

「そのほう」

初めてユダが首を上にも動かした。その先にある声はすぐさま位置を変えた。

赤毛の青年が虚空に視線をさまよわせている。それを止めて言った。

「南斗の智将の手の者か」

「だったら」

「リュウロウ?! そういえば御曹司が演武で勝ち進めば、当たるのはあの小賢しいガキ」

黙っていられないコマクが憤懣やるかたないリアクションを示しながら罵るも、実際リユウロウなる者の年齢は主人とそう変わらない。

「あの方をガキとは口が過ぎるぞ」

「推参者がほざきおつて……南斗の穩健派にして門下生きつての人格者が聞いてあきれ。ユダ様をどう脅そうつてんだ?!」

「うるさい小物だな」

「わしの目の前にあらわれてからほざけ小僧！ 卑劣な輩め」

ついには彼を無視して、どこかに潜む何者かが目的を語りだした。

「演武の頂点に立つことが確実なあの鳳凰の地位を唯一揺るがすことが可能なお人。それが貴方だ。つまり強すぎるのが問題なわけで」

「……」

「サウザーは帝王の矜持にかけて貴方と決勝で戦うことだろう。つまり模擬ではなく死合になる。それだけの覚悟をきめて彼はあの聖堂に身を置いている」

話が大きくなってきたことで中年の従者が唾を飲み込んだ。

潜伏者が話を続けた。

「おおとり鳳を迎え撃つて討ち取ることができる紅の鶴。大導師でさえも認めるそんな噂を、帝王はこの機会を借りて払拭したいと考えている。少なくともリユウロウ様はそう読ん

でござる」

「……」

「彼が未だ百八派を掌握しきれていないのは、貴方という存在があるからだ。あとの六星候補、人を率いる器に非ざる水鳥、先日北斗の小僧を助けて光を失った白鷺、狂気の沙汰がある孤鷲。独立独歩の独眼竜など、どれほど腕が立とうと組織だつて迎撃できるサウザーの敵ではない」

ユダはわずかに目を細めて言った。

「つまり、この演武における混乱を避けるために私にあえて敗れよと」

「然り。鳳凰の帝王への道は、貴方という強敵を倒してこそ舗装できる。だが紅鶴は自分を恐れて引いたという悔りがあれば、彼とて少しは隙ができればというもの」

「それがリユウロウの目論見だつてのか。だとしても決勝であるサウザーにお前の主人が挑んだところで、ボロ雑巾にされるだけじゃ」

「……あの方は知将にして南斗流欧拳の使い手。六星候補にも引けはとらぬ。帝王に食らいつくことも苦戦させることも可能なはずだ」

潜む何者かはコマクの叫びを聞き入れながらも、赤毛の青年に向かつて言った。

「いかにわが主リユウロウが手練れでも、帝王が暴走してその武を奮うことはありえない。その狂気は赤い衝撃のみ向けられる。貴方が敗れたとなれば、彼は正気のまま演武

の頂点に立つことができる。南斗は混乱せず、他門に横やりを入れられることもない」  
「……南斗六星が乱れることも、今の時点であるリュウケンが健在の北斗があらわれる  
こともない、か」

「御意」

「私は負けることは一向にかまわんが」

「ユダ様！」

コマクの劍幕に主人が珍しく言い訳を口にする。

「余興だ。それもまたよかろう」

「ユダ様はそのつもりでも、当事者以外は誰もそうは思いませんって。われらが御曹司  
が頭でつかちのパーマ野郎（リュウロウのことらしい）に負けるって、そんな番狂わせ  
はこのコマク、承服できませんぜ」

頭を抱える付き人の顔に笑みを誘われた赤毛の青年は、ここにいない金髪の少年のこ  
とを思い浮かべた。あれならばリュウロウの代わりに帝王のよい相手になるだろうと。

光を失ったばかりのシユウや、生真面目で腹芸のできないレイではその役を全うでき  
るとは到底思えない。そう考えながらユダがすつと手を上げた。

「?!」

潜んでいた影が赤い衝撃に気が付いたときには遅かった。足の一部に斬撃を食らい、

天井から崩れ落ちた。

「てめ、この野郎」

コマクが廊下に叩きつけられた影に飛びかかろうとしたものの、背後の靴音を聞いたことで大きく後退し、主人を振り返った。

「ま、まさか居場所がわかつていたのか……なんとという暗視」

冷や汗を抑えきれず、斬られたことより叩きつけられた打撲で体を押さえる男が、リユウロウ様の見通しは正しかったと内心で独語した。

影すら見えない恐るべき高速の拳に、帝王たる自負のあるあの司空の拳士が自制しながら戦うはずもない。

全力をもって相手の全力を引き出し、その上で完勝しようとするだろう。

そうなれば凄惨な同士討ちになる。どちらが勝つても無傷ではいられないだろう。

双方とも死ぬという可能性すらあるのだ。

「南斗はあの二人によって隆盛する。が、相食む結果となつては他門を利するのみと仰られておりました。そうならないためにも、ユダ様には名を捨てて実を取っていたかどうか……あの方が」

「実とは」

「百八派随一の名門の跡取りとして南斗の崩壊を防ぐ。それこそが歴代紅鶴拳の至上の

命題と聞いております」

「……なるほど」

影に向いていたユダがマントを翻した。

「御曹司」

コマクが後を追いかける。その主人が背中中で語った。

「策士策に溺れる。六星に次ぐ権威、南斗九龍衆が確実だと言われる男でさえも計れぬのが帝王たる所以ゆえんだとわからぬか……」

「お待ちください」

「まあよい。リュウロウもこの際サウザーという存在を知るがよい。乗ってやるが、そなたの主には負けるのではなく、もっと優雅で華麗な男に敗れるとしよう」

§ § § § §

「お、おい。あれは演武の域を超えているぞ。誰か止めたほうがいいのではないか」  
 「バカを言え。我々の腕ではあの二人の間に入ったら両断されるぞ」

聖堂内の演武会場が歓声から驚愕のどよめきになるのは、試合開始からそう時間はかからなかった。

「ユダ貴様……本気で」

「鮮血が目に入ったか。これで私の動きは読めまい」

殺気を込めた赤毛の斬指を、アイスブルーの髪的美男子が避けきれずに石畳にもんどりをうった。

「この天才と同時期に生まれたことを後悔するがよい、凡人め」

そう言いながらユダが致命の突撃を放とうとしたとき、レイが音もなく浮かび上がった。

水鳥は風になり、紅鶴のすぐそばをすりぬけた。舌打ちしながら着地したユダが背中を向けるレイとの間合いを詰めていく。

「逃げるばかりが水鳥拳か」

そう罵りながら赤い爪を薙ぎ払おうとしたとき、誰かがユダの腕を取った。その体術といい、高速の拳であるユダの腕を絡めとった見切りといい、一門下生はもとより、百八派でさえもそんな神技を見せられる者はほとんどいない。

それを成しえた男が言った。

「これ以上六星候補の名を汚してもらいたくはないものだ」

「……お前は」

隻眼の男だった。長い銀髪を後ろで結んだ南斗きつての勇将と謳うたわれるその拳士が、

レイとの間に割り込んでユダと対峙している。

その鋭い片目と赤毛の青年の美しい瞳が交錯した。

「ダガールか。私を阻むとは、殺されたいのか」

「いいのかな。いま貴方の拳のクセを見せてもらったばかりだが」

「……」

「やるかね。わが隼の拳、絶影の鶴に及ぶかこの際試したいところだ」

道場のざわめきが止まった。

そのなかで見物していた大物たち、座席には盲目の鬪将と呼ばれることになるシユウ、しかめつ面で肘をつくジュガイ、腕を組んで聞き入るように目を閉じて立っているリュウロウの三人は何かを感じとった様相だった。

その他は赤い衝撃と独眼竜の一触即発を驚天動地の思いで眺めている。

「くだらぬ」

ジュガイが立ち上がる。すでに腰を上げていたシユウも踵を返す。リュウロウが誰にも分らない程度に軽く口角を上げた。

不在のサウザーを崇める何人かの拳士も姿を消していく。

息を飲んで見守っていた南斗の群衆が一斉に安堵の息をついたのは、それからしばらく経つてのことだった。



「御曹司が去つていくぞ。ユダ様が自ら負けを認めたのか」

「さすがは独眼竜。あの傑物を引かせるとは」

「珍しいご乱心。若君におかれては何か事情がおりになったのだろうか」

「レイ様もとんだ気まぐれの巻き添えだったな。ともあれ伯仲の二人にわずかな優劣が現れたのは注目に値する」

そんな周囲の連中の声に、憤懣やるかたないお付きの若者が主人の後を追った。

頑丈な扉を開け、暗がりに近い廊下を進む。赤紫のマントの青年に追いついた少年がユダ様、と呼び掛ける。

「なんだ」

「あのそのあの。……確かにレイ様は強かった。あのいけ好かない独眼竜の仲裁も理には適つておりました。ですが、何故ユダ様ともあろうお方があんなにあっさり引いたのですか?!」

紅鶴拳の宿老ゲンガンの孫ゲンジユ。

南斗焰浄拳えんじょうけんの伝承者候補が必死の形相で主を問い詰める。

忠義者の彼にしては珍しい声色だった。それほどユダの敗退に我慢がならなかったようだ。

何か言いかけようとして歩みを止めた赤毛の青年は、不意に忠臣の孫の名を呼ぶ。

「ゲンジユ」

「はっはい」

「戦いの後だ。あれを所望しよう」

「……ユダ様、こんなときに」

忠犬は冷静な主人の声と求める内容にご乱心ではないと思つたのか、すぐに持つてまいります、と脱兎のごとく別室へと駆けだした。

長く広い廊下で一人になったユダが、柱の陰から姿を見せた瘦身の男を背中で感じて横顔を見せる。黒いチリチリ髪の彼が静かに言つた。

「わが提案を受け入れていただき、感謝いたします。紅鶴の御曹司」

「リュウロウ」

「はい。これで貴方と帝王が決勝で相対することはなくなりました。あとはこのリュウロウにお任せください。先程の乱入で独眼竜も失格となつたことですし、あとに残るは」

秀才として名高く、六星候補のレイだがこのときの彼はまだ純粹に過ぎ、老獪な自分が付け入るスキは十分にある。盲目のシユウは欠場、ジユガイは決勝までにサウザーと当たり、帝王の麾下もまた若く對抗策もある、と知将は告げた。

「名家の貴方には未だかつてない無様を演じさせてしまつて申し訳ないと思つていま

す。ですが」

「これで騒乱は避けられるか」

「御意」

「虎の尾を、いや龍の逆鱗に触れる所業だな」

「……は？」

間髪置かず、赤紫のマントが揺れた。空気が振動した。

「なっ」

リュウロウが驚きの目を見開く。どこから風が入ってきたのだろうか。

そう思った知将からは見えない何か、ユダのいた場所へと十字の斬撃を叩き込んだ。衝撃でリュウロウと大理石の破片がぶわつと浮かび上がった。

すさまじい音を立てて岩のような大理石の亡骸が廊下に落下し、飛散した。

完全に防音であり、紅鶴の私室へと続くこの廊下一帯の所有者は名門の若君のものだった。

騒動を耳にしたところで他流の一般門下生が足を踏み入れることはできない。

「紅鶴」

ズシン、という重圧は帝王の体から発せられる気合の産物である。

タンクトップのような鳳凰拳の道着姿の青年は、おとり鳳の型の闘気を放ちながら着地し

たりユウロウを一瞥すらせず、標的へと歩み寄っていく。

「つまらぬ三文芝居で余の前から逃げるつもりか……！」

空気を震わせるサウザーの怒気を受けても平然としながら、赤毛の青年は砕けた大理石を見下ろす。その彼に年長者が立て続けに問いかけた。

「下郎の弄する小細工に乗る。鼎かなえの軽重に問われよう」

「……」

帝王が敵だと認めた相手へと迫る。

南斗の知将はすぐそばを通るサウザーの動きを見切っていた。その蹴撃を予想しており、十字受けで衝撃を流し、間合いを取ろうとしたのだ。

だがその回し蹴りが来ることは予想していても、その軌道を捉えることができなかつた。ボギヤツという骨の折れる音を発しながら、リュウロウが弾け飛んだ。

コンクリートの柱を砕きながら奥にある壁へと激突した。

その様子を南斗の頂点に近い、と謳うたわれる二人は見えていない。

ユダが鳳凰の技の名を口にした。

「極星十字拳」

「……見えていたか。下郎には過ぎたる褒美を与えてやった。本来ならばお前かラオウに匹敵する者にしか奮わぬ奥義」

「手心を加えたことに関しては感謝しておこう」

「ほう」

将星が目を剥いた。妖星が初めて激突のほうを眺めやった。

「彼の両腕は折れるだけで済んでいる。本来ならば体は十字に裂けていたはず」

普段は意図的に口角を上げるのみの帝王が、今度こそ楽しそうに声を出して笑った。

得難い獲物を見つけたとばかりの様相だった。

「奥義で命を絶つに値するは余が認めた男のみ。下郎などしっけで十分」

「……言ってくれますね」

砂塵の中でリュウロウが両腕をかばいながら起き上がった。

打撲と擦り傷はあったものの、重傷ではないようだ。

ユダとのやり取りの間に、彼は折れた腕とは思えぬ動きで南斗流鷗拳の構えを取っている。

「洗練すぎたる蹴技はかえって仇となる。綺麗に折れた骨は結合させてもらいました。

帝王よ、見誤るとはこのことです」

知将の黒髪が揺れた。サウザーがゆっくりと標的へと振り向いたためだ。

その前にユダの影が動いた。

リュウロウほどの拳士が接近されたにもかかわらず、それが二人のうちどちらなのか

判別がつかないまま、先ほどから溜めていた気合とともに奥義を繰り出す。

「この妖気、紅鶴拳……?!」

破裂の轟音とともに一滴の血が流れた。

リュウロウが放った円状の衝撃はユダの白い頬をかすめ、その後ろの廊下を大きく切り裂いている。

それはサウザーが少し眉を動かすほどの威力を誇っていたものの、当人は無念の形相で態勢を崩していく。カウンター拳法の持ち主が姿勢を正した。

「これが……鶴翼かくよくの……羽ばたき、か」

リュウロウの胸に十字の斬裂が入る。サウザーによってつけられたそれは、赤い衝撃によって二度目の重圧を受け、傷口が開いた形となった。

名高い南斗の知将を一撃で倒した青年は致命の傷ではないことを確認し、倒れゆく相手を受け止める。

「サウザー」

殺そうとしたな、とユダが鋭く問いかける。

つまり帝王は知将を拳士として認めたとすることになる。

ゆえに妖星は機先を制してリュウロウを先に眠らせたのだ。

肯定するようにサウザーが口の端を上げた。

「お前の絶影の拳、間近で見せてもらったぞ。余と対等の相手が同じ南斗だということに、喜色を禁じえぬ」

ユダが一步後ずさった。

帝王が改めて腕を交差させる動きを見せた。十字拳の薙ぎ払いを放つつもりだ。

「ちっ」

リュウロウを抱えて離さない強敵に、額の司空の位置に印を持つ男が、興を削がれたように構えを解除する。

「下郎など放っておけばよいものを、見かけによらず情の厚い」

捨て置けばサウザーの鬨気や斬撃の巻き添えになることは見えている。

そんな赤毛を一瞥した黄金の短い髪の男がくるりと背を向けた。

「重石をつけたお前を屠ったところで何の誉れにもならん。時間切れか」

事態を察した紅鶴の郎党が扉の向こうからやってきた。

主がその手勢を出迎える。気絶したりリュウロウを彼らに任せている間に、コマク、ゲンガンなど名のある部下が次々と現れた。そして驚愕の反応を示していた。

帝王の存在に揺るがない人物は赤毛の青年だけだったが、新たに姿を見せた独眼竜の登場で、サウザーも改めて潮時だと悟ったのか、遊びは終わったとばかりに聖殿のほうへ去っていった。

「研ぎ澄まされた刃を首元に当てられているようだ。冷気すら感じさせる」

銀色の髪 of 勇将がサウザーを見送ってそう評した。

ダガールでさえ戦慄する気当たりの持ち主であり、コマクや他の配下などは圧倒されすぎて声もない。

かろうじて普段通りの虚勢を張れた老ゲンガンが、郎党ではない隻眼の男に頭を下げている。

「おぬしには今日だけで二度助けられた。水鳥のときと今だ。独眼竜がいなければ事態は一層深刻なものになっていた」

歴戦どころか古強者の老人の丁寧なる礼に、ダガールがよしてくれと言いたげに首を振る。

自分が生まれる前から南斗の拳士として名を轟かせる相手に対し、少なからず尊敬の念を抱いていたからだった。

やがて時は過ぎ、窓からは夕陽が差している。

騒動が一段落した広い廊下はユダとダガールの二人だけになっていた。

「いつもよいところに顔を見せる。演武での茶番といい、もはや私の片腕と呼んでもいいのではないか」

「……霸王すら憚る南斗の帝王。それとやり合いかけた拙者の気苦労を察していただ



れば」

「常在戦場じょうざいせんじょうは独眼竜の心得と噂で聞いている。私ならいつでもそれを用意することができるぞ」

赤毛の青年が微笑した。ダガールは肩をすくめている。

「ラオウ、サウザーといえど地上最強の拳士にも等しい。ところがあの傑物たちとの駆け引きを楽しめるような貴方も大概じゃないですかね。少なくとも拙者にはついていけない」

「私はラオウには興味がない……それより極斗衆ごくとうしゅうごとお前を引き受ける準備は整えておく。独眼竜の選択に期待する」

「……考えておきますよ」

南斗の勇将が高い壁の小さい窓を見上げた。

演武の勝者は当然、帝王の異名を持つ存在であることを、聖堂からの歓声で知った。

そこへ宿老の孫がやつと見つけましたよ若君、とワインを抱えて戻ってきた。

そこでようやく荒れ果てた廊下の惨状に気付いたのか、なんですかこれはあ、と素っ頓狂な声を上げ、ダガールの雄姿に慌てて礼を施していた。

## 十四話

## 五車と慈母

武者修行のような放浪を一旦引き上げ、金色の髪の少年が南斗の里に戻ってきた。

慈母の騎士として特別に設けられた象徴の館へと顔を出す。

一般門下生であるレステイエは立ち入ることを許されていない。

そしてそこで久しぶりに南斗五車星とも会うことになる。

海のリハク、娘のトウとはすでに知己となっていたが、風、炎という今まで疎遠だった面子とも言葉を交わす機会に恵まれた。

「お前がシンか。オレの名はヒューイ」

「シュレンだ。見知りおけ」

「二人とも」

傲然と自己紹介する二人の拳士にトウが窘たしなめるも、腕に覚えのある彼らは宗派を特に持たず、大聖殿や下界で修練を続ける少年にあまり好意を抱いてはいないようだ。

象徴を守るべきは我々だという自負がそうさせるのだろうか、しかし現世のシンにはどうでもよいことだった。

守りぬく以前に、無事であればそれでいい。

「五車の門下生においてこの二人は強すぎ、修練の人選にも事欠く有様。兄弟でしか練武の相手がおらぬのです」

やたらとガタイがいい海の男が口髭を撫でながら言った。

リハクの言葉に彼らはふんと鼻を鳴らし、上から目線で少年を見つめている。

「シン様」

「……いいだろう。相手になってやろう」

遙か年上であり南斗の重鎮でもある男の恭しさに辟易としつつも、無言の懇願に応えたシンが風と炎の青年に向き合う。

館の中庭でのことだった。

「どちらが先に？」

トウの何気ない言葉に二人が鋭く目を光らせた。

「オレだ」

「いやヒューイ。ここは兄に譲れ」

「できんな。門外といわれたわが五車が本家に劣らぬ拳であることを見せるよい機会だ」

「ふざけろ」

同士討ちを起こそうとした彼らを止めるべく、壮年の男は両手を上げた。

ともすれば五車の長でもある彼にさえ齒向かってくる血気盛んな年頃の二人に、リハクが遠慮のない奥義を奮おうとしたときである。

「五車波ごしやはすいけん碎拳。そう何度も食らうってやる義理はない」

「年を考えろ、リハク」

長老格の気合を迎え撃とうとした風と炎が、不意に別方向からの重圧を感じたことで弾け飛ぶように後ずさった。

いつの間にか双方の間にシンが立っている。

「小僧……」

少年は彼らを見ることもなく手で来いよと告げている。

ヒューイとシュレンが挑発されているのを悟って憤激し、同時に地を蹴った。

「その思いうがかり、後悔させてやる！」

「わが獲物だ。先にいたたく」

風と炎を身にまとった青年たちが左右から標的に襲い掛かる。

リハクがうぬら、と声を荒げた。

「心配するな爺、少し焦けてもらうだけだ」

「オレは容赦せん。しばらく修練ができんと思え」

先に到達したのは風だったが、その衝撃は遅れて放たれた炎もろとも一瞬にして霧散

した。

「なっ」

「これは……!」

風と炎の拳士の手首は金髪の少年の両手に捉えられている。

その光景を眺めていたリハクとトウが目を見張った。

「オレの風は鋼鉄をも切り裂く。素手でそれを受け流したというのか?!」

「炎上せず消え失せた……わが拳が不発だと」

シンがその手を放すと同時に、二人は素早く飛んで距離を取った。

本気になって構える彼らを横目に、過去の自身を思い出した少年は無意識に目を閉じている。

「なめるな小僧、余裕のつもりかっ」

「殺す!!」

火炎旋風が沸き起こる。竜巻も同時に発生した。

娘が父に心配そうな視線を送るも、リハクはその様子をまじろぎもせず見守っている。

そして五車の長は呟いた。

「刮目かつもくして見よ、ヒューイシユレン。あれが」

ズシン、と中庭の一部が揺れる。

鎮火したことを示す焼け焦げた跡、竜巻が芝生の上でつむじ風となつて消え、それぞれの使い手は互いに反発するように吹き飛ばされ、受け身も取れずに地に叩きつけられていた。

「南斗極聖拳」

南十字星をあらわすような両手を広げた構えは鳳凰拳にもあつた。

だがその奥義を知る者はほとんどいない。

それでも南斗の拳士であるトウが青ざめた顔で唇を震わせている。

「なんてこと……ヒューイとシユレンほどの拳士が二人がかりで一撃とは」

「……しかも相応に手加減されておる」

「えっ」

未だ昏倒して起き上がれない風と炎を見た後で、娘は父に振り返つた。

「今の掌底が見えたか、トウ」

「わたしには……黄金の十字の光が輝いたと思つたら、あの子たちがもう弾け飛んでいて」

「そうか」

リハクが構えを解いた少年に歩み寄つた。トウがその広い背中に問いかける。

「お父様、あのすさまじい闘気の放出で手を抜くって」

「……極星は無駄に光り輝かぬ。派手な炎や風、気などを纏まとう必要はないのだ。その指ひと突つきで全てを貫く。それが復古の拳の真髓」

背中で語る父を呆然と見送っていたトウが、はっとして倒れる二人に駆け寄った。

リハクが丁寧に礼を示し、遙か年下の少年に頭を下げて言った。

「思いついたこわっぱども。上には上がいると思いつたではありません」

「……他人事ではない」

「はっ?」

「はっはっは!」

すぐ近くの東屋あずまやの上から若い男の笑い声が聞こえてきた。

屋根に腰かける男が腹を抱えて大受けしている。

海の男が声を荒げた。

「ジユウザ!」

「そう怒んなよ爺、笑えるじゃねえか。生真面目だが傲慢なあいつらの鼻っぱしを一撃で折る。このジユウザでさえ同時に黙らせることは不可能だつてのに」

ラオウと同世代のような青年はおどけて失笑し始めたが、捉えどころのないその様子に隙はない。

少年が飛びかかれればすぐに退避し、反撃に移ることだろう。

完封された炎と風の声がある。意識を取り戻したようだ。

「くっ……屈辱だ。このシュレンともあろうものが……いまだに起き上がれぬ」

「腕の力が入らん……本気のオレが片手であしらわれようとは」

彼らの眩きに雲の声が重なった。

「お前には気合が足りん。いつもおれが言われてることだが、そのままそっくり返してやるぜ。子供扱いされて悔しくねえのか」

「おのれジウザ！」

「わははは愉快愉快。正統なる五車の拳士の無様を見ろよ」

足で拍手する雲が仰け反って寝転んだ。

そのふざけた態度の同僚から少年に視線を移したりハクが、いかがなさいました、と問いかける。

金髪を風に靡かせたシンがジウザを見ることはなかった。

「あれは不羈なる男なれど、拳才はあのラオウに劣らぬとリュウケン様から認められた逸材。ご容赦ください」

「風や炎が強すぎるゆえに思いあがる。才能に胡坐をかき、修練を怠って気ままに生きる。双方に違いはない」



空を見上げていたジユウザが、虚空を見る少年の台詞を耳にして起き上がった。

「いずれ必ず、敵わぬ相手を前にその不調法を後悔することになる。守るべきものがありながら半ばで果てるなど、男の風上にも置けん」

ジユウザのこめかみに血管が走った。

いつにないシンの饒舌にリハクが驚愕するも、後半は雲に向けての言葉ではない。

痛烈な皮肉はおのが前世に向けて放ったものだった。

「おれの機嫌まで損ねてどうするのかね、このガキは」

「煽られたと思っっているのか。それが事実だと気づかないようでは、お前とてわが敵にあらず」

静かに返答した年少の相手に対し、能面になった雲が屋根から飛び上がる。

シンに向けて急降下してくるその形相は憤怒に変わっていた。

迎え撃とうとしたシンの上空を飛び越え、ジユウザは宙返りをきめて降り立った。

その際に一瞬だけ黄金の光が煌めいたが、気付く者は誰もいない。

「浅かったか」

そう言ったとたんにシンの南斗の道着である肩のプロテクターが弾け飛んだ。

「おお」

「一発当てやがった、ジユウザのやつめ！」

風と炎が未だ腰を抜かしたまま歓声を上げた。

トウがまだまだ子供だと思いつながら二人を助け起こしている。

海の男がため息をつきながら言った。

「気ままな雲よ。その気になればラオウにも匹敵しように」

「面倒になるからおれのことはいふらすなよ爺。まあとりあえずこのガキには少し思  
い知らせて」

我流の天才は闊歩しながら声高に告げる。

得意顔のジユウザが何歩目かを踏み出そうとして、不意に動きを止めた。

「ジユウザ」

「どうした」

ヒューイとシユレンが立ち上がって問いかける。

それには答えず、立ち止まったジユウザが無言で口元をぬぐっていた。

手の甲についた血を驚愕しながら確認して、道着を砕いて一矢報いたはずの相手を眺  
めた。

その対象はすでに背を向けていた。リハクが追いかける。

「……わたしには一切見えませんでした。今の交錯で何をしたのですかな」

背を向けたまま歩くシンが答えた。

「奴が本気になって北斗なり南斗なりを修めれば、今頃転がっているのは俺だ。極きよくせいけん聖拳がゆえにこうして立っている。見た目ほど俺に余裕はない」

「……現在ユリア様は礼拝堂におられます」

「ああ」

「北斗の末弟が同行しておりますれば」

「そうか」

シンが草地を踏みしめた。

それを合図に意識をなくして倒れ込む雲へ、風と炎が驚いてにじり寄った。

トウも同じように寄り添った。

最後までジユウザをまともに見ることがなかった少年の謎の怒りを理解できず、五車の長が気圧された形でそれに続く。

南斗雷震掌という奥義の名を、彼が口にすることはなかった。

§ § § § § §  
「帰きってきた」

そう呟きながら、シンよりいくつか年下の少女が嬉しそうな笑顔を見せた。

幼馴染の北斗の末弟を連れて、やってきた相手を両手で出迎える。

以前の無表情とは違い、感情豊かなその娘が金髪の少年の胸へ飛び込んでいく。

妹のような存在を受け止めながら、シンも抱きしめ返した。

美しい顔を上げてユリアが言った。

「武者修行はどうだった？」

「ああ、いろいろ見聞してきた。得難い経験だった」

「腕を上げたなシン」

抱きしめる美少女の黒髪のむこうで、北斗の少年が少し怒ったように告げてくる。

幼さの残る顔立ちの彼も象徴同様、幼馴染のような存在だ。

五車星の何人かを一蹴した光景を見ていたのだろうか、ケンシロウはやりすぎだと表情で語っていたが、シンは無垢な少女の手前もあり、無言で頷くだけにしておいた。

「シン、今日は一緒にいられるのでしょうか？」

「ご機嫌伺いが終われば聖堂に報告に行く。おそらくそのまま修練に入る」

「なあに久しぶりに会ったのに。ご機嫌伺いだけって」

「その分ケンシロウに遊んでもらえばいい。リュウケン老師も夕方まではこいつが里に滞在することを許してくれるだろう」

自分の騎士のような少年の言葉に、やや不機嫌になっていた象徴の表情がぱつと花が

咲いたように明るくなった。

「ほんとね？」

「ああ。俺が話をつけておく」

「おいシン」

「なら行きましようケン、向こうでサキたちが呼んでる。いくつか新しい書物が手に入つたみたいだし、それを読解したい」

難解なものであろうそれを読み取るのが遊び、というませた美少女の誘いに、武勇一辺倒な北斗の末弟がうげつといったようなりアクションを示している。

当然にして愛する娘にそれを向けることはない。

上機嫌な慈母の星がケンシロウの手を引くのを、シンは目をほころばせて見守つていた。

黒髪の美少女が振り返る。

「今度また遊びましようね、シン」

「ああ、必ず」

手を振る相手に一度だけ手を振り返し、礼拝堂の向こうの本堂に消えていく二人を送る。

前世ではあれほどの温かいまなざしを自分に向けてくることはなかった。

それに比べ、ここでの彼女の信頼しきった姿はどうだ。

眩しすぎて見えなくなるほどの親族的な好意が感じられる。

だがそんな純粹さに応えられなくなるあの日が来ることを、彼は今から覚悟しなければならなかった。

殉星の宿命なのだろう。けして想い想われの間柄になることはない。

曇天の空を見上げて少年は思った。

ケンシロウが今のまま心に修羅を持たず、世紀末を迎えることは許されない。

やがて覇者を名乗るあの男は、将来必ずユリアを手に入れるために動き出す。

そのときに同年の幼馴染が甘さを捨てた強さを伴っていなければ、現世においても安心してユリアを託すことなどできないだろう。

思い悩みながら歩き出した彼に、背後の壮年の男が尋ねてくる。

「シン様どちらへ」

「ケンシロウがいたのだ。リュウケンもこの近くにいるはず」

「現在フドウが対応に当たっております。修道場かと。それにしても何用でございますか？」

「ひさしぶりに本物の北斗神拳を食らうのも一興」

叩きのめされるためにわざわざ行くのか、とりハクの表情が語っている。

生きていくうちにあの不敗の男の拳を受けることができるのは、四兄弟以外ではシンのみだ。

それがどれだけ貴重なものか、五車星の長は察することはできなかつた。

一切の勝機がない組手を望む金髪の少年の酔狂な姿を、リハクはあきれ果てて眺めるばかりだつた。

## 十五話

## トランプマークのならず者

「……」

二人のいかつい男が一人の女の前で地面に這いつくばっている。

金髪の少年は彼女との修練の成果を見るために一緒に南斗の里を下り、下界に降りた。

しかしながら、悪党や犯罪者であふれるデーターロインという街のストリートにわざわざ足を運び、ならず者たちの地の利を生かした襲撃を返り討ちにするほど腕を上げていたのは、さすがの彼にも意外だったようだ。

クセツ毛で黒い髪美人が息を弾ませて師に振り返る。

「先生、見ましたか」

「あ、ああ」

「これも先生という優れた拳士に鍛えられた結果です！」

一般人は昼夜を問わず歩けないと言われる国内屈指の危険なエリアで、息を巻いて力説している頭巾姿の女を、シンが引き気味に見返している。

目元まで覆った布ではつきりとはわからないが、どう見てもドヤ顔である。



目の前の愚連隊の男どもは、そんな彼女の空中蹴りを受けて未だ昏倒していた。まだ引いている年少の師が呟いた。

「わずか数か月でここまで上達するものなのか……」

「貴方に師事すれば誰でも伸びますよ」

「それはない」

シンはのびている連中を再度見下ろしながら首を振った。少年が教えているのはただの拳法ではない。

入門希望者の時点で万人を下らず、その入り口を突破できるものは千人前後。

さらにそこで門下生になることができる数百人のなかでも幼少より修練に励んだ一部の者だけが、南斗聖拳の拳士として聖大導師から認可されるのだ。

百八派ともなれば南斗の里の達人相手に十人組手を突破せねばならず、いよいよ人数が絞られる。

一般人の女が思い付きで習って数か月で会得できるほど、南斗の門下生という立場は楽なものではない。

元々戦士としての下地が十分にあるとはいえ、これほどまでに短期間に基本の型をものにした下界の女というのは、シンの知る限り覚えがない。

「非力な腕の力を補助すべく蹴りを磨き上げてきた甲斐がありました。これも先生のお

かげ」

「その先生というのはやめろと」

「わかりました、シン」

頭巾の女が目をはころばせて微笑む。

そうしている間にも、この危険な街にふさわしい新たな悪党たちが周りを取り囲んでいた。

彼らは物も言わずに銃火器を向けて撃つてきたが、誰一人として標的に当てられた者はいない。すべての弾は少年にかすりもせず叩き伏せられ、気を失って道端に倒れる人数を増やすのみだった。

「遠くのほうから新手が来ます。ボスのようですが」

「ママヤ。顔を出すな」

「はっ」

頭巾を下ろして敵を眺めていた美貌の女が、布地を目元まで引き上げる。

結局は彼女の必死の懇願に折れた形で、頭巾をかぶって顔を隠し、南斗の里で基本の型を教え込んだのは数か月前の話であった。

死神やレスティエの協力もあり、おのが修練の傍ら、ママヤに拳の手ほどきをしたという経験は、シン個人にも予想外な利点を生んでいた。

基本の型とは基本の拳。すなわち指突を一から鍛え直すという命題を少年自ら課すことができたのだ。

ちなみにママミヤには指突ではなく指斬による攻撃の組み立てを推奨している。女性拳士のほとんどがその例に漏れない。

やがて筋肉の塊のような長身の男やってきた。別方向からひよろ長い二メートルを越えるような大男も手勢を連れて姿を見せた。

さらに裏通りからロックミュージシャンに在るような化粧をしたごつい巨漢も長大な棒を手に、手下を率いてやってくる。

「また囲まれましたね」

「嬉しそうに言うんじゃない」

「せんせ……いえシンの動きが間近で見られます」

美しい瞳を輝かせる戦闘狂のような美人に、彼は珍しくため息をついていた。

三方向からの連中のボスたちが顔を合わせて互いに唾を吐きあっている。

「なんだてめえら。おめえらの出番はねえぞ」

「そう言うなスピード。ダイヤもおれさまも同じよ、抵抗しやがるよそもんには血を。あの曲がり角の惨劇を見せてやらねえとな」

「おめえが出張るほどのもんじゃねえクラブ。引っ込んでろ」

なんのコードネームか、スピードダイヤクラブという名のごつい男たちがそれぞれ獲物を手に持った。

スピードは斧を、ダイヤは三メートル近い杖じょうを、クラブは鉄爪てつそうをつけてマミヤとシンの前に立ちはだかった。

飛び道具に頼らない男たちを意外そうに見る少年に、くけけと薄笑いを浮かべたクラブが鋼製の爪を舂めながら言った。

「意外か？ この街じゃ火薬なんて使うやつあ雑魚のやることよ。本物はおのれの力のみで成り上がる」

「暗殺者か」

「そんないいもんじゃねえな。これで叩き潰すだけだ小僧、覚悟しろ」

杖じょうを持ち上げたダイヤがいきなりそれを横薙ぎしてきた。巻き添えを食らいかけたクラブがそれを避けたものの、その配下はまともにも当たって後ろへ飛ばされていった。

「てめえ、ダイヤこの野郎」

「ちよつと遠巻きにしてろ。派手にいくぜ」

棒術の心得がある化粧男がストリートで気合の声を上げる。

マミヤが一步踏み進んだ。

「さすがに相手が悪い。やめておけ」

「かいくぐって点穴を撃ちぬく。それも基本のひとつでしたね」

決死の覚悟の彼女が横顔を見せている。仕方なしにシンは腕を組んだ。

ズシンというアスファルトを砕く音で腕を解き、それがママミヤにヒットしてこないことを確認してまた腕を組む。

「どうしたダイヤあ、女に全然当たってねえぞ！」

スペードのヤジが飛ぶ。繰り出す杖術がごとごとく空を切ったことでダイヤは波状の攻撃を一旦止めて、大きく息をついた。

「ヤロウ本気になりやがった。ありや死ぬな頭巾の女」

クラブが悔しそうに言う。そのひよろ長い男は女を叩き潰す嗜虐しいきやくの趣味を取られて舌打ちを放っていた。

うおおと盛り上がった愚連隊がやってしまえと歓声を上げている。ダイヤの振り回す杖がママミヤの頭巾や道着にかすかに触れ、その布を裂いたからだ。

「あいつが本気になったら普通の人間には見えやしねえ。覆面女はすぐに肉塊だ」

スペードがそう言いながら何か取り出している。それがボウガンだと悟ったクラブがきたねえぞと叫んだ。

「女あおれさまがもらったぜえ、死ぬえつ」

ダイヤに意識を集中していたママミヤがスペードのボウガンに気が付いたときには、そ

れが自分の額に突き刺さろうとする直前だった。

「しまっ」

「ヒヤツハアアア……あ?！」

ボウガンの矢はマミヤの額を貫くことなく止まっていた。

彼女の背後にいた誰かの二本の指が矢をはさみ取っている。

それが方向を変え、スピードに向かつて目にも止まらず飛んでいった。

リュウケンに教わった北斗神拳の技、二指にししんくう真空把はだった。

情けない悲鳴を上げてごつい男が転げまわる。足に突き刺さったようだ。

「ハハハざまあねえぜクソ野郎が、飛び道具なんぞに頼るからそうなるんだ。そのまま

死んどけ」

ダイヤがその様子を見ながら標的目掛けて杖を振りかぶる。

一瞬だけスピードに視線を向けたことで隙ができた。

南斗聖拳を学ぶ女はそう思った。

「空舞の型」

宙に浮かんだマミヤが長い足でダイヤの後頭部に蹴り込んだ。女の脚力とは思えない衝撃で態勢を崩したプロレスラーのような大男が踏ん張ってこらえ、利かねえなあと咆哮する。

その前のめりになった首を両足で締めた彼女が、ダイヤの体重そのものを原動力に、彼の脳天をアスファルトに叩きつけた。

重低音が響く。

地面にはひびびが入っており、ならず者の頭がめり込んでいる。痙攣した巨体がどきりと崩れ落ちた。

歓声は一瞬にして静寂に包まれる。この街を支配する一方の雄が女に敗れるとは信じられず、転がりまわって悶え苦しむスピードとニヤリと笑うクラブ以外は皆呆然と立ち尽くしていた。

嬉々としたマミヤの声が響く。

「先生！」

「一時期シユウに師事していた経験が生きたな。裂脚の百分の一の威力はある」

「……」

「そうむくれた顔をするな。あの男の足技ならここにいる悪党どもをすべて撫で斬って肉片しか残らんし、この通りの地形が断裂されて使い物にならなくなる」

「わたしはそうなりたいのです」

冗談ではない、とシンは思った。

幼少から拳才を轟かせ、なおかつ修練に打ち込んで昇華させてきた彼の蹴術をそう簡

単に真似されてはたまったものではない。

少年から見てもママミヤの素質は一般門下生の枠に入らないが、いかんせん習う歳が遅すぎた。

逆に遅すぎたからこそ、ほどほどの成果にとどまり、象徴に瓜二つのこの女が南斗の里で大きく認知されることなく、ひっそりと拳を教え込むこともできたのだ。

彼女の異才を知る人物は少ないほうがいい。

「どこもいてんだ女あー！」

クラブが両手に取り付けた爪を振りかざして突進してきた。

咄嗟に構え直したママミヤをよそに、いい加減この茶番に飽きてきた少年が少しだけ地を蹴った。

ひよろ長い男の首がシンの手に絡めとられた。同時に男の顔に火花が散った。肉を粉碎し骨が砕かれる音が響く。

膝蹴りを受けた大柄なならず者が悲鳴さえ上げることなく、仰向けに沈んでいく。今度こそ声もない愚連隊の連中が金髪を揺らして着地する少年の姿を見た。

「ウソだろおい?!」

「あのクラブがガキに一撃……ダイヤも女に蹴り倒されるって」

「……スピードはうるせえし」



クソがああと雄叫びを上げ、刺さった矢を抜いたスピードが斧を振り上げ少年に飛び掛かる。

シンは背後を確認もせず、何気なく回し蹴りを放った。  
にぶい音がした。

三人目のボスが腕を折られ、肋骨も砕かれて廃車へと飛んでいく。

フロントガラスを突き破ってようやくその動きを停止させた。

悶絶するスピードを見た愚連隊たちが棒立ちになる。

呆けたようによそ者二人を眺めるばかりだった。

「これ以上両親がいるあの町を留守にするわけにもいくまい。成果も実感しただろう、そろそろ実家に帰ってはどうかだ」

戻りがたい様子を示している頭巾姿の彼女が、また機会があれば里に来るように告げたシンの言葉で愁眉を開く。

少年の手を取って先生！ と喜びをあらわにしているものの、美しき師弟の姿というには周囲はあまりにも凄惨にすぎた。

よそ者によって街の支配者層の三人が道端に倒れ、やがて恐慌に落ちいった愚連隊が仲間を置いて逃げ去ったあとの光景は、国内でも最も危険な区域、データーロイン始まって以来の出来事だった。

見物していたストリートの住人が後にそう証言している。

やがて災厄のような男女が街を去ってから、もう一人の幹部が遅れて巡回にやってきた。

腰の養生を終えてニコニコ顔の巨漢が、意識を回復して半死半生の姿で自分の元へやつてくるスピードダイヤクラブから事情を聴いた。

そのニコニコは怒気に代わった。

ハート、仇を取ってくれという泣き言にちかい要望を、彼は面子のうえでも受けざるを得なかった。

# 十六話 北斗の末弟、死角なし

「待たせたなシン」

「ケンシロウか。今来たところだ」

「やつと三人が揃った。久しぶりだね」

下界に抜け出してきた北斗の四弟と南斗の象徴が、見回りの修練に出ていた金髪の少年と合流したのは、とある港町でのことだった。

いずれも世間知らずながら、北斗南斗の門下生が護衛につくとあって、象徴の気晴らしは、聖大導師から半ば公認のように年に数回決行されている。

時には北斗の次兄であったり、南斗五車星であったり、護衛の面子は時によって変わるものの、基本的には彼女の気の置けない間柄が人選の目安になっている。

美貌の少女ということとでそれがわかりにくい変装を施し、ケンシロウもシンもなるべく目立たない若者らしい恰好で同行の任に当たっていた。

「聞いてよシン、ケンったらわたしとの交換日記に修練の報告しか書かないの。ひどいよね」

「ほう、日記とは初耳」

「今日あったこと思ったこと、その全てがそうなのだから仕方がない」

「だからこうして思い出を作るためにここにやってきたんだ。シンがいれば気兼ねなくお遊びできるし」

むくれたり笑ったりはしやいだり、美貌の娘の年相応な百面相がここにはある。

彼女の穢れなき慈母の微笑みは一途にケンシロウに向けられている。

そんな姿を後ろから見守るシンの表情は終始穏やかなものだった。

危険がわからないものを守ろうとする。この気持ちに至ってしまった少年は、誰の手も借りずして殉星の宿命に目覚めてしまったといつてよい。

南斗の先人たちが極聖の復活にこの執念の人物を選んだのは、間違いではなかったのだ。

フードをかぶった少女が港町を駆ける。ケンシロウが追いかける。まるで青春映画の主人公のような二人を、シンは周囲を窺いつつ保護者の気分で後に続いていた。

港に近いフードコートのテラスで食欲を満たす友達以上恋人未満の彼らを見守っていたシンが、不意に立ち上がった。ユリアが彼を見上げる。

「どうしたの？」

「水では味気ない。他を買ってくる」

「わたしストロベリーのやつ」

「わかったよ」

「生クリームたっぷりつけてね！」

「はいはい」

「おれも行こうか」

「二人で席を外してどうする」

「あ、ああ」

いきなりの行動は少年の気配りだと思いついたんだ象徴が、気の利かない黒髪少年の頬をつねっている。

そんな微笑ましい様子に背を向け、シンは少しの間別方向へと歩き続ける。

やがて裏通りへと足を踏み入れた。

そんな人影のないストリートで待っていたのは、少し前にマミヤと共に見回り組をした際、叩きのめした愚連隊とそのリーダーたちだった。

「よく気付いたなあ小僧。なかなか鼻が利くじゃねえか」

「今度はそうはいかねえぜ。おれらあには拳法殺しがいるんだからな」

クラブとスピードが持っている武器を遊ばせながら手下を引き連れてこちらにやってくる。

「あの化粧の男はどうした？」

「女に脳天をやられてまだうめいてらあ。あの女にも落とし前はつけてやるが、その前にダイヤの仇のおめえをブチ殺す」

南斗聖拳を学んだマミヤの全力の蹴落とし。その上達は本物だと再認識する彼だった。

眼前に影がおりてくる。巨大なものだ。

少年が知る最も大きい山のフドウに匹敵するほどの巨漢だった。

しかし山とは似ても似つかない肥満体には覚えがあった。

賢者の町でアミバという男と騒動を起こした男だ。

恵比寿顔のその男がニコニコ笑いなが言った。

「貴方が何者か知りませんが、われら四天王に手をあげたからには相応に償ってもらわないとねえ」

「ご機嫌だな」

「生まれつきこうなんですよ。でも覚悟なさい、貴方はダイヤ程度では済まさない」  
バシン、と巨漢がふくよかな腹を叩く。いきなり投げってきたスペードの斧を蹴り返し、突進してきた肥満体の腹へ膝蹴りを放つ。

だがその衝撃は肉厚に吸い込まれ、みぞおちに届くことはなかった。

「?!」

さすがにシンが体勢を崩す。

「出たぜハートの拳法殺し。こらあ拳法使いの小僧う！ 死んで後悔しやがれ」

斧をはじめ返されたスピードがドヤって叫んでいる。

片足を取られたシンが片手を振り上げる巨大な掌てのひらを確認するも、埋まった足が抜けることはなかった。

南斗の里でもあまり見ることがない重圧の平手打ちが少年に放たれる。

体重の乗ったその打ち下ろしを受け、彼は見回り組で下界に降りて以来初めて弾け飛んだ。

受け身すら取れず、石畳の地面を跳ね転がり、壁にぶち当たる。

レンガのそれを破壊して崩れ落ちたシンを見た愚連隊たちが、今度こそ歓喜の叫びを上げていた。

「ハツハーア！ やりやがった、さすがハートだ!! どれだけ腕の立つ拳法使いもあの肉の前ではただの人」

シンが切れた唇から流れる血をぬぐって立ち上がる。

拳法殺しという異名を聞いたからには、天邪鬼な少年としては打撃で戦ってやろうという、相手の土俵に立ってやりあう気になっていた。

不利な状況、今まで見たことのない特異体質と殺し合うのも修練のひとつだ。

§ § § § §

「シンが戻ってこない」

二人の時間をわかつていない北斗の末弟の鈍さに、ユリアは思わずテーブルの下で彼の足を蹴った。

「いつ」

里でのお上品なふるまいと今のお転婆は使い分けているんじや、と邪推したケンシロウが頬を膨らませて立ち上がる彼女を見上げる。

機嫌が悪くなりながらも、それでも遅すぎる同行者を迎えに行こうと、恋人未満な相手に手を差し出していた。その白い手を握った彼が怪訝そうに尋ねた。

「あいつがどこにいるかわかるのか」

「こう、目を閉じて……シンを想像ばなんとなく足取りがわかる」  
「……」

不思議な力を持つとは聞いていたものの、それを目の当たりにしたケンシロウが驚きを隠せず美少女の後に続いた。

しばらく歩き、止まっては歩きを繰り返していくうちに、歓楽街のストリーートの裏路



地の角を曲がったところで、多人数と一人がやりあっている状況に出くわした。

二人が間違えるはずもない。金髪の少年の背中が視線の先にあった。

騒動に巻き込まれている兄のような存在の名をユリアが呼ぶ。

シンと呼ばれた彼は何度も打撲を受けたとわかるほどの傷を負っていた。

前に向き直った少年が鋭く言った。

「何をしているケンシロウ。あれを巻き込むな」

「……お前、何をしたんだ。このごろつきどもは一体」

「下らぬ争いをユリアに見せるものではない。後は」

叱咤しかけたシンが、歩み寄ってきたフードをかぶった妹のような少女に手を取られた。

ケンシロウも駆け寄る。妹が兄に囁いた。

「修練？ シン」

「ああ」

「南斗は使わない」

「そうだ」

「それは貴方の矜持？ それとも」

「気まぐれだな」

特に何のこだわりもなく、ただの酔狂だと告げられて、フードの奥で表情に影を落としていた象徴が唇をほころばせた。

「余裕なのね」

「そう、余裕なのさ。だから気にせず向こうに……おいケンシロウ」

他門の幼馴染が拳を鳴らす。象よりも巨大な体躯の大男に、彼は躊躇せず立ち向かっていった。

ならず者たちが顔を見合わせている。

得体の知れない気を放つ黒髪の少年の戦闘準備を見て、唾を吐きながらほやき始めた。

「またおかしな小僧が来やがった。金色の次は黒の小僧。なんだってんだ」

「いいからやつちまえハート。いい加減倒れねえガキを見ているのは飽きたぜ。一気にぶっ殺せ」

クラブとスパーードの声にハートが頷き、ニコニコ顔のままケンシロウに平手打ちを食らわせてくる。

それをかいくぐって彼は正拳を肉の壁に打ち込んだが、当然にしてそれは脂肪に吸い込まれて急所に到達しなかった。

「その小さい体で何を放とうと無駄ですよ。無駄」

ハートは笑いながらそう言い、片手でケンシロウの蹴りを防いで持ち上げ、地に叩きつけようと腕を振り上げた。

「ケン！」

「あたあ！」

ユリアの叫びと北斗神拳伝承者候補の気合の声が重なった。

叩きつけられる前にケンシロウは巨漢の指の秘孔をついていた。

激痛で思わず手を放したハートの側頭部へ、彼は北斗昇雷脚を叩きこもうとした。

「避けた?！」

体に似合わぬ素早さで身を引いたハートの、俯き加減のまま動かない状態にケンシロウが眉をひそめている。

少年たちではなく味方であるはずのスペードクラブたちが一斉に引き始め、やりやがったと顔色を変えていた。

「おいスペード。手下どもを先に帰らせろ」

「さすがにおれさまたち以外はやべえな。おいてめえら」

幹部たちに言われる前に、部下たちはハートの背中の様子を悟って足早に逃走を開始した。

冗談じゃねえぞという捨て台詞を残し、大勢の男たちが路地裏の奥へと消えていく。

「下がっている、ユリア」

金髪の少年が象徴を後ろに下がらせた。

ハートが顔を上げる。恵比寿顔は悪鬼の形相に変化していた。彼の頬には傷がついていた。

ケンシロウの蹴りを避けきれず、食らった切っ先で出血したのだと思われる。

いてえよおくという雄叫びが路地裏に響く。スピードとクラブが大きく退いて、激昂する仲間との距離を取った。シンが叫ぶ。

「ケンシロウ！」

「わかつている」

「あれはトキなら止められた。お前はどうかかな」

以前賢者の町で見た光景を思い浮かべ、シンはケンシロウを挑発するように言った。

太い眉の幼馴染は心配そうなユリアに視線を移したあと、両腕を振り回しながら突進してくるハートに向き直った。

「北斗の拳は無敵だ」

シンの煽りに対する答えを口にしながら、ケンシロウが鬨気を漲みなぎらせた。

彼の上半身が膨らみ、体を包んでいた道着を吹き飛ばした。

背後の象徴が駆け寄ろうとするのをシンが遮る。

重低音とともに、巨漢の攻撃で粉碎された石畳の欠片が宙を舞う。

腹に埋まったケンシロウの蹴りに、きかぬわ小僧と吠えたハートが動きを止める。

裂帛の気合をこめて、後の北斗神拳伝承者は残像が残るほどの複数の蹴りを一点に叩きこんでいった。

「無駄だっっていつてんだろうが小僧、ハートの肉の壁は」

「待ておいあれ……に、肉がめくれてやがる。後ろからでもわかるぞ……」

幹部たちの声をかきけすように、ケンシロウは浮き上がって薄くなった肉の奥の急所に、重い一撃を突き入れた。秘孔を突かれたハートが完全に体の自由を奪われてぶると巨体を震わせている。

「こ、これは」

「ブタはブタ小屋に行つてろ」

ほあたあ、というかけ声とともに、ハートが蹴り上げられた。

浮き上がった巨漢の下敷きになったスピードとクラブが悲鳴を上げている。

「ウソだろ、あのハートがこんな小僧に足の蹴り一発で吹き飛ばるかあ?！」

「このブタ野郎、気絶してやがるぜ。動かねえ」

呼吸を整えたケンシロウが息を吐き終え、半裸のままシンたちの元へ戻る。

ユリアが彼の手を両手で包み込んだ。

「殺したの？」

「いや」

北斗の四弟の答えにほっとした様子の象徴が、恋人未満の少年を抱きしめる。

それを見守りながらシンが言った。

「いいものを見させてもらった。北斗神拳に不可能はないな」

「シンほどの男が打撲だらけになるほどやられていたのが不思議だ」

「南斗聖拳が使えないならただのガキ。身をもってそう認識した。打撃ではお前の足元にも及ばん」

ユリアから上着をもらったケンシロウがそれを羽織る。

この黒髪の少年の強さは前世以上だ、と金髪の少年は確信した。

純粹さはあるものの、甘さという弱点は持ち合わせていない。

果たして戦争後にこの男から愛するものを奪うという予定をそのまま実行してよいものか、シンは迷い始めていた。

## 十七話

## 死人（しびと）

第六十三代北斗神拳伝承者リュウケンは、正座を組んで畏まる他門の少年を見下ろしていた。

南斗の里の道場でのことだ。

南斗宗家の拳を復古させるべき、と定められたその存在は、壮絶に過ぎる修練のなか、自分の時間など必要ないとばかりに、己に打撃の手ほどきを乞いに来たのだ。

「理由は」

「今のままではケンシロウに及ばない」

「ほう、拳才がか」

「それもある。だが決定的に劣っているのは拳撃の才」

リュウケンは目を細めてシンを見た。

この年で南斗聖拳を極めつつある状況に満足せず、不利な部門で幼馴染のライバルに届かぬことさえ良しとせぬ執念は、この壮年の賢者にとって新鮮な驚きだった。

ラオウ、トキ、ジャギ、ケンシロウ。

野望に燃える長兄、求道者に近い次兄、おのが限界を悟りやさぐれて達観する三弟、た

だひたすら純粹に北斗の拳を修めようとする末弟。

その弟子たちや他の南斗の門下生も含め、この時点で自分のためではない動機で修練を積むものは誰ひとりとしていなかった。

後に聖者と呼ばれるトキでさえそうだったのだ。

血反吐を吐かせ、生死を越える教えを徹底している南斗の大導師たちが金髪の小僧を評して、執念の権化と呼んでいるのを彼は知っている。

「それほどまでの思い入れ、ただならぬ拘りこどわは南斗の象徴に対してだな」  
「然り」

「だがあの美しい娘がお前のその想いに応えることはあるまい」

無駄なことだ、と現実をつきつけるリュウケンの声は冷たい。

現時点で最強の拳士を見上げた少年はだからどうした、と返答した。

見下ろす側が眉をひそめ、しばし間を置いて言った。

「あれの想いなど必要ないというのか」

淡々とした様子シンのシンに、頂上拳たる北斗神拳現伝承者が瞠目する。

少年は多くを語らない。

死んでいる俺に愛など必要ない、とただ静かに告げたのみだった。

リュウケンが今度こそ絶句した。



ようやく絞り出した言葉は独り言に近いものだった。

「本物の死人しびとというわけか……こやつ」

金髪を靡かせた死人が立ち上がった。

それは本物の師になった相手が北斗の礼を示したからだった。

§

§

§

§

§

§

北斗の打撃をリュウケンから指南されたシンが、南斗の大聖堂を見上げるいつもの場所である男に声をかけられた。

四兄弟の長兄にして、慈母の星と交流を持つことが許された人物のひとりだった。

「北斗の霸王」

「……ずいぶんと偉そうな異名が噂されていると思えば、うぬが原因か」

見上げるべき対象がここにいる。

後に拳王を称する男は、南斗の門下生が北斗神拳伝承者に打撃指南を受けていることに不信感を抱いているようで、それが眼中にもない小僧に声をかけた理由だった。

「リュウケンも酔狂な。五番目の弟子に等しい面倒を見おつて」

「何の用だ」

「北斗の拳ならばこのラオウが叩き込んでやろう」

火花が散った。少年の目にはラオウがいつ打ち込んだのか見えなかった。

花崗岩かこうがんでできた壁に激突したシンがそれでも跳ね起きた。

年長者が指で手招きをしている。

「反撃してこい。うぬの得意な南斗聖拳でもよい」

「私闘ではないほざくな！」

負けん気の強い彼だが、繰り出す正拳突きはラオウに当たることはなかった。

逆に岩山両斬波を打ち込まれ、めくれ上がる地盤と爆風に巻き込まれた少年が再度跳ね飛んだ。

これがラオウの本気だと思ふほどシンは思い上がってはいない。

闘気すら纏わぬ組手程度の打ち合いで、彼は早くも手も足も出ない状況に陥っていた。

「半死半生のついでに北斗の修練を望もうなど、百年早いわ」

シンに見えた剛拳は幻影なのか、と思われるほど巨大なものだった。

わずかに触れたに過ぎない衝撃ですら、十字受けでも耐えきれず、鮮血にまみれながら草地まで転がった。

雛鳥を生かさず殺さず、という調整を自分でもしているようで、ラオウは震えながら

起き上がった少年との間合いを詰めず、ふと思い当たることを口にした。

「うぬのユリアに対する執念。それはけして報われることはなからう」

気力のみで振り絞ったシンの拳を受け流す。

本来ならば腕ごと彼を叩き潰すことも可能だったが、ケンシロウと打ち合う要領で甘い、と叱咤しながら相手の拳を掌で打ち払った。

ラオウは相手の執念に感化される形で不意に呟いた。

「あれも野望のひとつ。女に甘いうぬの轍は踏まん。奪い去るのみ」

「……ふ」

血に染まるシンの口角が上がった。北斗の長兄の眉が今度こそピンと上がった。

ふん、という気合の正拳突きを、先程よりもさらに強い衝撃であろうラオウの拳を、少年は初めて受けきった。

「……ほう」

「ラオウ。それ……いだ」

「何？」

それは愛だ、とシンは繰り返したが、霸王の耳に届くことはなかった。

朦朧とする意識のなか、さらに畳みかけてくるラオウの突きで彼の意識は飛んでいた。

「リュウケンめ、見る目のない……ん？」

崩れ落ちそうな相手が、その寸前で膝をつくことなく踏ん張っていた。

まだ倒れぬか、と思つた剛拳の主が腰を据えて掌底を打ち出す。

このときラオウは初めて鬨気を込めた。ごうつと風圧の波が駆け抜ける。

把天壞拳はてんかいけん、という奥義を無意識に放つていた北斗の長兄は、標的がそれを避けきつた

ことでわずかの隙を生じさせた。

彼の目にはスローに映つたに過ぎない相手の反撃の指突を、砲弾でさえ跳ね返す自慢

の肉体で弾き返そうとしていた。

「喝」

次の瞬間、静かだが心胆寒からしめる北斗神拳伝承者の叱咤がラオウの耳に飛んできた。

つむじ風が吹き抜ける。

壇上から石の階段を下りてくる師父に向かい、ラオウは相手を打ち捨てて歩み進めた。

「リュウケン。なぜ止めた」

「あれはすでに気を失っている」

壮年の男の答えに、一番弟子が喉の奥で珍しい笑い声を立てた。

「虎とも恐れられる貴方が……南斗の小僧には甘い」

「口ほどにもない、ラオウよ。こわっぱめ」

鬨気を使つたなと問われ、階段を上りかけた北斗の長兄が歩みを止めた。

「意識の外だ。ケンシロウにも劣り、打たれ強いがしつこいのみその他門の小僧に目をかける。貴方こそが口ほどにもない」

「救われたな」

「救つたのはこのラオウよ」

ガツ、と階段に足をかけ、霸王と呼ばれる男が大聖殿のほうへ消えていった。

その先には南斗の象徴がいたのであった。

それを見上げたりユウケンが、金髪を靡かせて立ち尽くす少年の前までやってきた。

「小僧。気はたしかか」

「……」

「やはり、意識は飛んでいるか」

返答のないシンの後頭部へ、リュウケンが気合の喝を入れる。

打たれたことで覚醒した少年が、かつと両目を見開き、血まみれの体で後方へ飛んだ。

そして言った。

「……リュウケン老師」

「目覚めるのが遅い」

「俺は」

「ラオウにやられて気絶していた。その際、失った意識のまままで何をしようとしたのか、おのれは覚えておるまいな」

「……一体何を」

「打撃であの男とやりあおうとしたはずだ。だがお前は最後に南斗で戦おうとした」

「……」

「たわけめ。無駄にあのラオウの注意を引くところであった。あやつを侮るな。北斗神拳は見切りの拳。お前の復古の拳はたやすく披露するものではない。その暴拳、死に値するふるまいよ」

再び氣を失って倒れ行く少年を受け止めたりユウケンが、じくじ 忸怩たる思いで呟いた。

「ラオウはとどめを刺さずこの小僧を救った。だがあのまま小僧のきよくせいけん 極聖拳を受けていたら、奴の胸板には風穴が空いていたのかもしれない……こわっぱめ、命拾いしたことに氣付かぬか」

また強い風が吹いた。北斗神拳至強の座が二千年ぶりに動くかもしれない、とリユウケンはさらに独語した。

復古の拳だけを恐れたのではない。

死人が南斗極星の拳を修めようとする、その想いに畏怖を覚えたのだ。

## 十八話

## 数年後

「ユリアさま、ユリア様——！」

「どうしたのサキ」

「あの金髪の幼馴染さん、とうとう大聖殿で南斗聖拳の認可が下りたみたいなんですけど」

「彼なら当然。でもそれがどうしたの」

「どうしたの、っておかしいじゃないですか！」

侍女サキが疑問を口にした。

聖堂で書物を手にする主人が当たり前のような顔をしているが、サキのような女の子でさえも異質に映る、認可の状況だったのだ。

彼女は興奮気味に叫んだ。

「普通、聖大導師さまが印を手渡すのは百八派の伝承者だけなんですから、つまり上位の拳士のみ」

「ええ」

「でもあの人は流派を持たない普通の聖拳使い。それが認可の際の十人組手に百八派の



達人を選ぶわ、その上位の拳士たちを蹴散らして平然としてるわ、さらに南斗の頂点、六聖拳に選ばれても眉一つ動かさないうですよ！ 門下生だけじゃなくほとんどの南斗の拳士さんたちが驚きから声もない様子で、里中が混乱してるみたいなんですつ」

「……そう。シンが六星に」

ユリアは象徴ということで、拳士への指名権や六星を動かす軍権はない。

あるのは五車星という独立部隊のみで、おおよその南斗を率いるのは大導師たちであり、神輿に徹するのが代々慈母の星の役割だった。

「鳳凰拳のサウザー、紅鶴拳のユダ、白鷺拳のシユウ、水鳥拳のレイ、孤鷺拳のジュガイ、そして極聖拳のシン」

新たに選ばれた六星は当然にしてみな若い。

そのサキから伝えられた情報を少し訂正してユリアが反復する。

南斗聖拳のシン、ではなく、南斗極聖拳きよくせいけんのシンだということを、彼に復古の拳を伝承させた聖大導師はこのとき初めて大々的に公表したのだ。

「六星のなかでも最年少の幼馴染さん。彼に反発する他の拳士さんたちの動きが不穏で、なんだか里が物々しい雰囲気になってるんですよ……つて、あ、トウさまが来た」

扉を開けてやってきた海のりハクの娘トウが、ユリアのそばにやってきた。

「サキから詳細をお聞きになりましたでしょうか」

ユリアが頷いた。

「父は他の五車を従え、後堂に控えております。鎧をもってしてお姿を変えたあと、六星に選ばれた彼らと謁見を、とのことですよ」

「ジユウザはどうしているの」

「あれは……自由気ままな雲ですの」

侍女と主従は聖堂の外に出た。

曇り空を見上げたとき、彼女は不安そうに眉を曇らせた。

いやな風だ、とユリアは思った。

§

§

§

§

かなりの余裕があった。

大聖堂は広く、百八派をはじめとする南斗の中枢やその他が結集しようと、空間には

鎧姿に身を包んだ象徴、慈母の星が謁見と称して居並ぶ六人の王、六星たちと初顔合

わせを展開する。

る。

王の背後には將軍格である九龍衆、佐官級である十六翼将と上級拳士たちが続いている。

「大儀」

声色を変えた彼女が玉座に座る。

跪くユダ、シユウ、レイ、シン以下、百八派がそれに倣っていた。

だが膝を屈しない王が二人いた。鳳凰と鷲だった。

「サウザー、ジュガイ、跪かぬか！」

導師の一人が叱責の声を上げる。

南斗の帝王との異名がある男からすれば、師父オウガイ以外の者はすべて下郎であつた。

鼻で笑つて相手にしていない。

隣のジュガイも師であるフウゲンを再起不能にして実力で伝承者となつており、玉座にある得体の知れない鎧武者に頭を下げることを良しとしなかつた。

やがて臙脂色えんじいろの髪の毛の猛将が吐き捨てるように言った。

「茶番だな。茶番。名もなき金髪の小僧が六星の一人として選抜されることも、南斗極聖拳きよくせいけんという復古の拳とやらを我らに黙っていたことも、何もかも不信でしかない」

「ジュガイ、無礼者め！」

「年寄りの冷や水」

導師の一人が力づくで膝をつかせようとジュガイの近くへやってきたが、すでに伝承

者となつて数年の孤鷲の爪は、古強者の拳を軽くあしらい、聖堂の壁まで吹き飛ばして悶絶させた。

シユウとレイが何をすると立ち上がる。

二人を眺めながらジュガイが両手を広げて高言した。

「六星になるべくして地獄の修練をこなし伝承者となつたのは、正体を明かさぬ象徴とやらに頭を下げるためではない。力こそ正義、もはやそんな時代になつたのだ」

サウザーが無言で腕を組んでいる。

南斗最強を謳うたわれる男が黙認していることで、ジュガイの威勢はさらに強くなった。

「盲目も蒼い貴公子もおのが欲望に素直になるがよい。それほどの腕を持っていながら、権威以外に何の力もない鎧男などに従うこともなからう」

「キサマ……南斗の序列を乱し、六星をも崩壊させるつもりか」

「レイ、偽善者よ。乱世が近いとわかつていように」

ここに及んで数名の導師たちが動き出す。

混乱の元のジュガイを取り押さえにかかると、孤鷲拳の配下となつた数派が長とともに反抗するそぶりを見せだした。

無言の睨み合いが始まった。

鳳凰の影響下にある二十派以上の拳士たちも、サウザーを中心に据すえて固まつてい

る。

人数的にも導師らを圧倒し、謁見の間は大混乱に陥った。

「騒ぐな、者ども落ち着け！」

導師たちの制止の声が響く。むなしいそれを誰も聞いていなかった。

このとき象徴はヒューイとシュレンによって守られ、玉座のそばにリハクが立ちはだかつて下克上の可能性を考えた立ち位置に変化している。

そのときだった。

「ハハハハハ」

不意に帝王が笑った。南斗聖拳は瓦解した、と高らかに笑った。

「小僧が六星とは世も末よ。さらに極星の拳とやらが復古することを余でさえ知らされぬ……愚弄しおって」

一旦台詞を区切った剽悍なる男が口角を上げて宣言した。

「よかろう、逆に余から見限つてやろう。慈母の星など論ずるにも値せん。今より余が

南斗の頂点、聖帝と名乗る」

「鳳<sup>おおとり</sup>め、気がふれたか」

混乱しつつも激昂した導師たちが打ちかかる。

彼らはサウザーによって一瞬に斬殺されたが、聖帝の歩みは止まった。

シユウとレイが立ちはだかったからだが、造反の理由として最大の原因の青年が玉座の前にいつの間にか移動していたからだつた。

「慈母の犬め」

聖帝の口から鋭い牙が見えた。

しかし彼の配下であろう影のような者から耳打ちされたことで、堂内で猛威を奮おうとしていた男が闘気を消した。

「リュウケンが」

「はっ」

「……行くぞ」

踵を返し聖殿から出て行くとしたサウザーが足を止める。

大理石に打ち付けられて跳ね飛んだのは、ジユガイについた数人の百八派の拳士たちだつた。

この騒動に加わらなかつた数十の中立派たちがおおつ、と歓声を上げる。

今まで沈黙していた彼の、赤紫のマントがはためいた。

開いた窓からの風で赤毛が揺れている。

長くなつたその持ち主が跪いた状態からようやく立ち上がる。

名門の御曹司の振る舞いに群衆は目を奪われていた。

そのなかで上位の南斗の拳士たちが囁くように言った。

「ジュガイについた者たちを一閃で薙ぎ飛ばした……」

「我ら百八派ですら見えぬ高速の拳。久しぶりに間近で見たぞ」

「南斗紅鶴拳……そうだまだあのお方がいた。ユダ様なら」

ヒユウウ、という風の音を纏まとったような錯覚を思わせる気を発し、赤毛の青年が玉座へ視線を向ける。

シユウとレイの名を読んでいた。

「双方は慈母の星に。コマク、ダガール、ゲンガン、ゲンジュ以下、わが手勢は導師たちを守れ」

それを合図として、問答無用に六星の彼らが飛んだ。

着地した先は玉座台の前、リハクをも護衛しようとしていた。

ユダ配下、二十三派の拳士たちがその指揮に従っている。

南斗の将帥のなかでも随一の規模であり、紅鶴拳が名門たる所以でもあった。

「赤毛の小僧……南斗の守護者を気取りおって。何様のつもりか」

影響下に収めた者たちが動揺するのを悟って、臙脂えんじ色の髪をした猛将は激怒し、孤鷲拳必殺の構えを見せた。

そんな気当たりを食らった大勢の連中が後ずさる。

ジユガイ配下でさえも怖気を奮って散らばった。

「何様とはこちらの台詞」

赤毛の青年の蒼い瞳が細められた。

このとき、大導師や南斗六星すらも見たことがない、と後に語り草になるほど、いつもは沈勇な男が怒りに包まれていた。

「ジユガイ、後が控えている。そうでなくともお前は引き金を引いた」

ユダの姿が消えた。少なくともジユガイの目には認識できなかつた。

それでも切っ先を読んだ彼が両手で赤い衝撃を迎え撃つ。

双腕を大きく上げて振り下ろし、両足を踏ん張ってようやくそれを相殺させたものの、キイインという音が抜けたあとのジユガイの頬には、片頬三本、計六本の傷が入っていた。

血が流れると同時に抜けていった斬風は、聖堂の固い壁を切り裂き、崩壊と崩落を産んだ。

轟音とともに大理石の床も八裂になっている。

大きい破片の落下地点にいた拳士たちは皆ジユガイの配下たちだった。

恥も外聞もなく、彼らはダイブして広範囲の落石から逃げていた。

「その罪」



ユダの声が冷たい。

冷気を感じさせる御曹司の姿に、聖堂の中のほとんどの人間が震えあがった。

「死んで償え」

「……小僧、思い上がりおって大言を!!」

南斗紅鶴拳の伝承者が指突を引いた。

ジユガイも同じように鷲の爪を弾き絞るようにして気合を溜めている。

「赤毛を大敵と見て最初から千手を放つつもりか。良い判断だ」

興味をそそられたのか、聖帝が六星どうしの戦いを見守る。

巨大な気のぶつかり合いを危険とみたシユウとレイが皆に下がれ、と叱咤し、リハク

は慈母の星を玉座の後方にある隠し扉から避難するように促している。

シンは堂内の大展開など興味はない、と言いたげに後に続く。

五車たちの先導で鎧武者の象徴が隠し通路を抜け、大聖堂の外に出る。

最後尾のシンが門をくぐったときには、すでにユダとジユガイの戦闘が本格的になっ

たことを知らせるように、轟音と地鳴りが向こうから聞こえてきた。

ユリアのすぐそばに控えていたトウが何かに気付く。

「お父様、あそこにトキ様とケンシロウ様が」

「来てくれたか。しかしリユウケン老師は」

武者鎧を脱ぎ捨てていたユリアが、やってきた北斗の次兄と末弟の元へ飛び込んだ。トキが若い二人を窺いながら、師父はラオウと話があるということでは来ないと語っている。

ひねくれもののジャギは、慈母の面倒など御免だとして不参加らしい。

「トキ様。ここはわれら五車が死守いたします。サウザーやジュガイの追っ手ならば風や炎で十分、おっつけ山も駆けつけるでしょう。ケンシロウ様ともども、ユリア様を安全な場所までお願いいたします」

五車の長の言葉に次兄が頷きながら、六星最年少の拳士を見た。

「シン、お前は どうする」

「……いやな予感がする」

長くなった金髪を風に靡かせた青年は、一人で北斗の里へ向かうと告げた。

己の名を呼ぶ南斗の象徴に目線で合図をし、ケンシロウとトキに頼むと告げてから、彼は守るべきものから背を向けた。

これがシンが大戦前に見たユリアの最後の姿だった。

## 十九話

## 大戦前夜

人里離れた北斗の道場への道筋を知っているのは、多士多才な南斗の人間においてもほとんどいない。

シンはその僅かなうちの一人だった。

他門の館を駆け抜け、聖堂にも似た北斗の道場へと駆け込む。

長い道のりの間に夜になり、外は雷雨が降り注いでいた。

シンが道場のなかの光景を目の当たりにした瞬間、その金髪が逆立った。

師に向かって致命の一撃を打ち込もうとした巨躯の男と、年齢を経て老いた先代伝承者の、倒れかけた背中を見た。

その惨劇を制止するように、青年の怒声が屋内に響き渡った。

「ラオオオオウ!!」

存外な人物の登場に、リュウケンより北斗の長兄が瞠目しながら振り上げていた拳を止めた。

「小僧……金髪の小僧か。何故ここにいる」

他門の先人、それも宿敵の師をかばう南斗の拳士に違和感を覚えたラオウだったが、

何年も前からリュウケンがこの青年に目をかけていたことを思い出し、くだらぬ情かと呟いた。

霸王と呼ばれる男はこのとき血まみれだった。

純粋な拳技では未だリュウケンには及ばないと知った弟子は、病に倒れた師をこれ幸いにと衝動的に殺そうとしていたのだ。

逆にシンが姿を見せたことで彼の理性は復活した。

南斗の小僧ごときに我を忘れた激情を見せるほど、彼の自尊心は小さくない。

呼吸を整えるラオウにシンが鋭く問い詰めた。

「貴様……リュウケンを殺すつもりだったのか」

「役目を終えた老人には退場してもらおう。このラオウが伝承者ではなく、その拳を封じると言われれば猶更よ」

「させん」

「情におぼれおつて。やはり南斗はサウザーの一強。その他はこのラオウからすればゴミクスでしかない」

後に世紀末覇者「拳王」と名乗る男の闘気が倍加した。

血まみれの上半身、その傷が筋肉によって塞がっていく。

「老人の拳など皮膚一枚を斬ったにすぎん。だが師父はともかく、うぬが生きてここ出

ることはもやはかなわぬと思ひ知れ」

「小僧、逃げよ……今のあやつは誰の手にも負えぬ……あの狂乱の相……まるで過去のジウウケイを見ているようだ」

ジウウケイが何者かを知らぬ金髪の青年はそれに答えず、リュウケンを大きく後ろに下からせた。

そして立ち上がった。

「魔相の霸王。ちようどいい、この場で俺が片付けてやろう」

「南斗ごときがよう言うた。大言の報いを受けい」

ぬうん、というかけ声でラオウが極大の闘気とともに蹴りを放つ。

それを片手で受け止めたシンが態勢を崩すのを見て、北斗の長兄はもう片方の足で捻りを加えたそれを繰り出した。

バゴンという音とともに石畳が陥没する。シンの両腕のプロテクターは粉々に砕かれていた。

だが青年はラオウ渾身の蹴りを受けても健在で、爆散などはしていない。

血まみれの巨漢が白い歯を剥いて告げた。

「あの日の続きを望むか小僧。よくぞわしの双蹴そうしゅうを受けて耐えぬいた。誉めてやろう」

閃光のあとで雷鳴が轟いた。

二人の対決を離れた場所から見守るリュウケンが上半身だけを起こして、ラオウの剛撃を受け続ける青年の背中を見た。そして呟いた。

「暴虐の念で拳威を増したあのラオウに、今の小僧では……」

「違うな、わが師リュウケン」

シンの背中が激しく揺れる。

それは北斗剛掌波を南斗の掌底で受け流した際の衝撃であった。

堂内が震撼したものの、泰然とした彼の背中が語る。

「狂乱の拳でこのシンを倒せると思っっているのなら、それは貴方ほどのお人でも見込み違いというものだ」

北斗神拳先代傳承者が南斗極星の拳の構えを背後から窺った。

地味な構えのなかで浮かぶ気纏きそとうは、荒ぶるラオウの闘気とは比べ物にならぬほど小さい。

だがその深淵から湧き上がる迸りほとばしを見たとき、リュウケンは暴風に立ち向かう光明の静かな声を聞いた。

「この男が愛に目覚めたとき、そのときが死人として相打つ覚悟の戦いになるだろう。だが」

「ほざく小僧!!」

石畳がビキリと割れる。高い壁にあるステンドグラスも飛散した。

雷によってではなく、北斗の長兄の剛気によるものだった。リュウケンが思わず叫ぶ。

「いかぬ、あれは天将奔烈！」

円を描く動きの構えの後、ラオウが渾身の波動を放つ。

幾重にも練られた闘気はシンの長身を襲ったが、それは建造物と地面を大きく吹き飛ばし、削りあげるのみで、金髪の青年の体を消滅させることはできなかった。

リュウケンは爆心地のような二人の間合いを見て固唾を飲んだ。

シンの上半身の道着が消し飛んでいる。頬や体に幾重にも裂傷が走っている。

だがしかし、彼はラオウのその極大の波動に耐えきった。

それを可能にしたのは内に秘めた闘気、彼にとつては念。執念にも等しい。

「こっこの奥義を……正面から弾きおった……小僧」

さすがの霸王が思わずどもって言った。

リュウケンと戦ったときでさえも放たなかった大技を、格下である南斗に見切られるとは思ってもいかなかったのだ。

「うぬの……その拳は」

ラオウはシンの手の甲にある十字に刻まれた傷跡を見た。

それはまさしく南十字星の型を示していた。

得体の知れぬ畏怖を覚えたラオウの様相がさらに禍々しくなっていく。

噴火のように湧き上がる気合はますます勢いを増すばかりだった。

充血した目の北斗の長兄が怒号する。

「小僧。うぬがいかにして南斗聖拳を極めようと、このラオウの体を突き抜くことは  
できん。わが前にはいかなる者も塵と化す……!!」

すさまじい闘気を放出するラオウ、内にそれを秘めるシン。

まるで太陽と月ほどの違いがある。

およそ南斗は北斗に比べ、気脈を操ることは不得手であり、聖帝サウザーでさえもラ  
オウに比べれば、総気量はやや少ない。

この二人は誰の目から見ても象と蟻の戦いに見えた。

双方の影が動く。

ラオウの剛拳とシンの指突が交錯する。同時に凄まじい轟音が轟き、道場に雷が落ち  
た。

リュウケンは闇に落ちた堂内のなかで目を凝らす。

やがて北斗と南斗の拳士の姿が雷光で浮かび上がった。

その衝撃的な光景を、リュウケンは髭を震わせて見つめていた。



指突を突き立てた側が龍の牙を抜き、血を振り落としたような腕の動きを示している。

鮮血はそれぞれから吹き上がっている。

だがどちらの体に深く拳<sup>けん</sup>が食い込んだかは、電源が復旧して明かりが再点灯したことで明らかになった。

「ラ、ラオウが……」

師父のかすれた声を合図に、北斗の長兄が吐血する。

その剛強なる鋼の肉体には南斗の指突の数だけ穴が開いていた。

だが打撃を受けたほうも無傷ではない。

秘孔を突かれた左肩は砕かれていた。

「な、にが起……った」

胸部を押さえて膝をつく巨軀の男が、地面に滴り落ちる血を見ながら自失している。

肩を砕かれた青年はそのまま立っていた。

北斗史上最強の剛の男に鍛え上げた師が、当人と同じく呆然としながら眺めるばかりだった。

「どれほど体を鍛えようと無駄だ」

雨風が窓から入ってくる。砕かれた肩に長い金髪が靡く。

シンは雷鳴のなか、憤怒の形相で歯を食いしばる相手を傲然と見下ろしながら言い放った。

「南斗極聖拳きよくせいけんは地上にあるどのような物質も力で突き破る」

さらに強くなる暴風で堂内が揺れている。

死人が修めてしまったがゆえに北斗を凌駕した極星の拳。

その神髄を改めて悟ったりユウケンが髭はおろか、体中を震わせていた。

「ユリアが関わらぬ以上、お前の北斗神拳は至上の極意に目覚めることはない。その腑抜けた拳で極星を沈められるとでも思っているのか」

「小、ぞう……！」

新たな血が噴き出すこともかまわずラオウが起き上がった。

これほどの屈辱を覚えたのは記憶にない。

だが彼は怒りのなかでも口角を上げて喉の奥で笑っていた。

「……このラオウに膝をつかせた。サウザー以外にこれほどの男がいようとは……神に感謝せねばなるまい」

霸王はさらに狂騒の気を増した。

その姿を見ただけでも、ほとんどの拳士が腰を抜かして失神してしまうほどの威圧を誇っていた。

だがシンは平然としてそれを見返し、笑止と告げた。

「闘気に頼っているお前など、俺の敵ではない」

黄金の羽ばたきを確認したりユウケンが、やめいとばかりに手を伸ばす。

あの執念の男の少年時代、数少ない極聖拳の技の発動を見たことがあった。

相手の四肢を切り裂く奥義だ。

「あれは南斗獄屠拳ごくとけん！ ラオウよ逃げいっ!!」

師父の叫びに長年の門下生は咄嗟に身を引いた。

そこで発動したのが北斗神拳、無想陰殺むそういんさつだった。

体術を駆使した高弟の動きは、シンの必殺の蹴りを紙一重で避けていた。

がらあきの敵の背中に、無意識かつ無想の後ろ蹴りを放つ。

強烈なそれは予測不可能であり、回避もほぼ不可能と言う、北斗神拳においてはラオ

ウでしか扱えぬと思われる奥義中の奥義だった。

死人を撃墜した北斗の長兄が片膝をついたまま、片足を軸にぎつ、と後ろに振り返る。

落ちていく金髪の青年がそれでも受け身を取った。

闘気を駆使せぬラオウの蹴撃しゅうげき。それはまさに実の拳だった。

南斗宗家の拳士に与えたダメージは相当なもので、斜めに走った背中の中で、彼はすでに立ち上がることも困難になっていた。

死合いを制したラオウだったが、後に拳王と名乗る男の矜持は地に塗まみれていた。怒りを抑えられず、悲鳴に近い怒号を放つ。

「リュウケン、なぜ助けたあつ!!」

一番弟子として自分を助けたであろう師に、狂乱の豪傑が詰め寄った。

「あのままではこのおれが……北斗神拳が南斗の小僧に敗れ去つていたと申すか!」  
病で咳を抑えきれないリュウケンが、怒声の主に言い含めるように言った。

「お前ほどの使い手ならわかるはずだ……あのとき、きやつキヤツの拳は霸王を目指す男を確実に捉えていた。そして超えていた」

「このラオウを愚弄するか……師父といえど」

倒れかけたリュウケンに向かってラオウが拳を振り上げる。

だが背後の気配で再び振り返った。

独り言のようなうわごとのような北斗の長兄の声が響く。

「無想陰殺、かつてこれを真せでとらえて起き上がった者は誰もおらん……」  
ゆつくりと起き上がった血まみれの青年がガツ、と靴を踏み鳴らす。

半死半生の姿で霸王との間合いを詰めていく。

「だが……うぬは死人ゆえ効かなかつたとでもいうのか」

そのすさまじい執念を肌で感じ取った巨漢が一步引いた。

今度は自分の意思で引いだのだ。

怖気を奮ったのは彼だけではない。リュウケンも同じだった。

背負っているものが違う、と北斗の大賢者は確信した。

今のラオウでは、目の前にいる瀕死の人物が背負っているものを超えられるはずもない。

愛に殉ずる男と、愛に気付かず野望に燃える男との差がここで出た。

それでも気圧されるほうの勝利を先代伝承者は確信していた。

ふううと長い息を吐いた老人が武者震いの弟子に告げる。

「ラオウよ、本来の目的を忘れるな」

「……」

「拳王を称するつもりならば、その小僧とは万全の態勢で戦い直せ」

再戦して完膚なきまでに南斗を叩き潰せ。

北斗神拳の拳士としてリュウケンはそう厳命していた。

ラオウでさえその言葉は否めない。天を目指す前に彼も北斗の男だった。

「師よ、すでに覚悟したか」

「このリュウケン……長く生きた。もうこのへんでよかろう」

座禅を組んだ師父に対し、胸部に深い傷を負った弟子が歩み寄る。

「敬愛するわが師リユウケン、苦しまず一撃で逝くがよい」

## 二十話

## 原作開始

199X年。世界は核の炎に包まれた。

海は枯れ 地は裂け、あらゆる生命体が絶滅したかに見えた。

だが……人類は滅亡してはいなかった。

「ヒヤッハー、ハハハアア！」

荒廃した大地で砂煙が上がっている。

男女が乗るバギーが転倒していた。

そこに群がるモヒカンの集団が半死半生の二人を槍で刺し殺し、車内を物色してから戦利品を引きずり出していた。

「水だ水だあ!!」

「固形食料も持ってやがったぜ」

「ケツを拭くしか用がねえねえつてのによお、札もありやがる」

大戦により文明が失われた世界は、暴力による弱肉強食の世へと変貌していた。

殺戮を繰り返す武装集団は一地方だけでも数えきれないほどに存在しており、ジードと名乗る彼らも行動原理は同じであった。

そんな彼らが派遣していた偵察隊からの報告を聞いて騒然とする。

這う這うの体でやってきた部下のただ事ではない様子に違和感を覚えたのか、ジードと呼ばれた男がバイクを駆り、すぐさま現場に駆け付けた。

部下たちの亡骸が転がる廃墟ビル前の一帯を見た光景に、巨漢が怒号を放つ。

「誰が仲間をこんなにしやがった……どこのどいつだ!!」

「……こりゃひでえ」

ボスが激昂を抑えきれず震えるなか、他のモヒカンたちがあらためて周囲を見渡した。

ありえない状況に彼らの顔が青い。

「見ろよ、こいつらすべて体に風穴を開けられて死んでやがるぜ。他にも武器や飛び道具、バイクが鋭利に切り裂かれて」

「……レーザーのような兵器がまだ残っていたのか」

「大岩にもぽっかり穴が開いてるじゃねえか。ロケット以上の大砲をぶつ放したつての。それにしても輪郭が綺麗すぎる……」

首飾りを下げたボスのジードが転がっているバイクを踏み潰した。

「そんな精巧なものが今も残ってるわけがねえ!!　そしてこいつが残した血文字……なんだ、とはなんだ」



ようやく仲間の死のメッセージに気付いた手下たちをよそに、荒くれ者の長が齒を剥きだして叫んだ。

「探せ！ この近くに村やら町やらがあるはずだ。そいつを探し出してぶっ殺せ!!」

§ § § § §

「村長、フードをかぶったあの男女の二人連れ、安易に迎え入れてもよかつたのですか」  
壮年の男からそう問われた白いひげの老人が、小さい黒髪の少女の頭を撫でながら言った。

「おなごのほうは何やら病を抱えておった。見返りにガソリンをもらっておる……それに」

村にある唯一の宿泊施設に消えていく若い男と女を、村長に撫でられていた少女が手探りで追いかけていく。目が見えぬようだが、その所作は慣れているのか、躊躇がない。施設前で見送りながら話し合っている大人たちに混ざって、老人の孫のレンという少年は黙って聞いていた。

「目が不自由ゆえに真実が見えるというあの娘。あれがどういうわけかあの髪の長い女に懐いておった。逃避行なのか旅をしているのかわからぬが、今の様子ならこの村をど

うこうしようとする意図はあるまい。レン」

寡黙な少年が祖父のまなざしを受けて頷いた。

「体を拭くタオルと水がある。それを彼らに持つて行つてやりなさい」

トレーを取り出した少年を横目に、村人たちはこのところ付近を荒らしまわっているという武装集団のことを口にした。

村長もわかっている、と答え、廃車を積んで壁のようになっていているほうへ目を剝けた。「ジード。きやつらの暴虐ぶりは聞いておる。ゆえに村の出入り口は封鎖し、周囲をバリケードで覆っているが、果たして」

「二十四時間体制で見張りを継続するのも骨が折れます。ましてや物資調達の男手が村を出入りすることですらどうしたつて隙もできませんし」

「仕方があるまい。本来ならばこれほど小さい村、他の豊かな町かどこかへ移住を考えなければならぬ状況じゃ。だが今はその踏ん切りがつかぬ」

村内は荒廃した建物と土地が広がるばかりの廃墟のような景色が広がっている。

それでも人々が住める程度には修復した状態なのだ。

文明をほぼ全て吹き飛ばしたあの核戦争から数年が経っていた。

もはや以前のような文化的な生活を送ることはない。

少なくとも一般庶民がその恩恵に預かることはない。

老人が村を見回ってしばらく経ったとき、宿泊施設の中にいた男女が外に出てくるの  
に出くわした。

目の見えない少女とそれを支える無口な少年が続いている。

村長がフードをかぶったままの彼らに声をかけた。

「お若いの。少しは落ち着いたかね」

「感謝する。連れも発作が落ち着いたようだ」

「そうかね」

フードから見える青年の金髪は薄汚れていたものの、その連れという女の黒髪は清潔  
で、透明感が感じられる。

顔は見えないが、おそろくかなりの美女だろうと海千山千の老人は推測した。

「ルイがお連れの女性に懐いておる。それがあんたらを受け入れた理由でな」

「あの盲目の娘か」

「亡くなった流れ者の忘れ形見じゃ。もう三年になる。じゃが聡明で前向きで、心の強  
い子でな。精神的に問題のあるわしの孫の心を開いてくれた恩人。もはやわが孫に等  
しい」

フードをかぶったままの女がしゃがみこみ、ルイという少女と言葉を交わしている。

それを見守る金髪の男が連れの女の口角が上がっているのを見て、いつぶりだと呟い

た。

「笑っている。心を閉ざしたあれに、出会ったばかりの娘が入り込めたというのか」

「……何があつたかは問わんが」

杖を突いた白髭の老人が少女ルイと、無表情ながらそのそばから離れない孫のレンを窺つて言った。

「男女は仲ようせねばならん。こんな時代じゃ。子を産む女は女神にも等しい」

何気ない年長者の言葉だったが、フードの青年は面を伏せた。金髪が揺れている。

「……まったくくだ」

§ § § § §

「死神か」

誰もいない廃墟の裏で一人になったフードの青年が、音もなく背後にあらわれた何者かに反応して声をかけた。

その者は薄緑の短い髪、鳥の羽をつけた防具と、道化の恰好がようやく時代に追いついたような出で立ちをしていた。

「わが主よ。どうやら聖帝軍に動きがあるようです。この付近にも部隊を派遣するかも

しません

「それで」

「……あのお方を連れて今のうちに」

「ここを早く出たほうがいいと目で語る男の無言の要請に、青年は頷いた。

「おつつけレスティエも駆けつけましょう。あのお方には同性のお付きが必要です」

「ああ」

言いたいことがまだ残っているような、一見極悪人のような瘦躯の男がはつと面を上げ、村の中心街のほうへ振り向いた。

地獄耳の彼が何か言いかける前に、フードの青年が踵を返す。

「お先にお逃げ下さい、と言っても無駄でしょうな」

「死神と呼ばれた男のため息に、青年は少しだけ口角を上げてそれに応じた。

§

§

§

§

§

§ 廃車のバリケードを破って侵入を果たした武装集団のボスは、規格外の大男だった。それ見た村長が、苦々し気にジードか、と苦悶の呻きを放つ。

モヒカン男たちの長はこの乱世においても稀に見る怪力の持ち主で、数台の廃車を

次々と持ち上げて侵入口を広げ、数台のバイクと数十人の徒歩の手下を村内に引き入れている。

その手下たちは斧や棍棒、弓などを手にすでに数人の村人を血祭りに上げていた。

「わが村の力自慢とて、あれほどの人外相手では戦いにももならぬ……」

「あ、あの集団は殺し合いに慣れた猛者揃い……普通の人間じゃ相手になりません……」

侵入者を遠巻きにして武器を構える男たちが震えている。

女子供老人は建物の影に隠れ、恐怖に身をすくませていた。

「今のうちに女、水、食料を用意してここに並べておけ。男どもは検問だ。ひとりずつ首をはねてやる」

そう吠えたジードが巨大な斧を一閃させた。

戦おうとした村の腕自慢を一撃に叩き斬ったことで、村民たちは大恐慌に陥った。

「仲間を殺ったやつあどこのどいつだ、ここにもいねえのか!」

「ジード、女たちはここに隠れてやがったぜ」

数人のモヒカンが女子供を引きずってやってきた。

ジードがそれを見て子供の一人をつまみ上げ、首を引きちぎろうと持ち上げた。

「残りの品はどうしたあ?! 男どもも早くガン首揃えて出てこい!!」

大男が持ち上げた少女に対し眉をひそめた。

悲鳴はおろか泰然としたその様子を見上げ、舌打ちを放った。

「なんだこのガキ、（放送禁止用語）か」

「ルイを放せ！」

全ての大人たちが硬直するなか、棒きれを持った少年がジードの前に現れた。

モヒカンたちがどつと沸く。この村には男がいねえのかへタレども、と哄笑している。

「いい度胸だな、ガキい」

つかみかかろうとするモヒカンの一人だったが、意外に素早い動きを見せた少年が相手の脛に棒を叩きつけた。

「うわっちい！」

「バカ野郎が、ガキに一杯食わされてやがる」

下卑た笑いが収まったのは、転がって跳ね起きた少年の、年に似合わない殺気を乱入者たちが察したからだだった。ジードが少女を持ち上げながら牙を剥く。

「情けねえ野郎どもだ、まともな男はこのガキだけか。やはり仲間を殺したやつあここにもいねえみたいだな」

「ルイを」

「うるせえ」

打ちかかってきた少年をジードが蹴飛ばした。

巨漢の蹴りを受けた彼が渴いた大地に叩きつけられ、跳ね飛んだ。

祖父たる村の長が慌てて駆け寄る。

「……無事か。無茶をしおつて」

「ルイを……ルイを助けるんだ」

「やめろレン。村長の孫のあんたが流れ者のガキのために命を落とすことはない」

村人の誰かの言葉は少年には届かなかった。

精神を病んでいたときに手を差し伸べてくれた唯一の光に向かって、彼はまた立ち上がった。

「よさぬか、孫よ」

「負ける……もんか」

勇ましい少年の小さい体に影が下りた。

モヒカンが棍棒を振り下ろそうとする姿を、レンはなすすべもなく見上げていた。

その瞬間、つんざくような悲鳴が村内に響き渡った。

「逃げて……レーン!!」

「ルイ!」

悲鳴の一つも上げなかった盲目の少女が、心の目で感じたのか、少年のほうを見て必



死に叫ぶ。

村長が駆け寄ろうとするも、村人たちに羽交い絞めされている。

「死ねえ」

モヒカンの棘付きの棍棒が少年の頭に叩きつけられる、と誰もが思った。

老人の絶叫のなかで、それは空中で停止していた。

何者かがならず者の武器を素手でつかんでいた。それも棘の部分をだ。

レンは涙と鼻血にまみれながら、かすれた声でかみさま……と呟いた。

「な、んだ?!」

ビクともしないその力に、モヒカンが棘の部分を握りしめる誰かを窺った。

逆光で見えにくい。

その光が雲によって遮られ、ようやく邪魔者がフードをかぶった男だと確認できたな

らず者は、腰に差してあったナイフを抜いた。

「邪魔しやがって、ぶっ殺す……」

そう呟えたとき、モヒカンが口から大量の血を吐き出した。

「あ……う？」

ごぼつと流れ出る鮮血を見下ろす。

仰天したモヒカンはああああと叫んだ。

信じられないことに、胸板にめり込む何者かの指が背中まで貫通していたからだ。

フードの下の目を、その恐ろしいまでの深淵なる瞳を見ながら、彼の意識はそこで途絶えた。

血の海の中で沈む男を、ジードも部下たちも村人も誰も彼も、現実を起こっていると、思えない感覚にとらわれて見つめていた。

一番最初に我に返ったのは、一番修羅場をくぐってきた大男だった。

「てめえか！ てめえが仲間をやりやがった野郎だな?!」

ルイを片手に持ちながら、ジードが巨体を踏みしめながらやってきた。

フードの男はまだ若い。

顎をしゃくったボスの合図で、斧を手にした何人かのモヒカンがその青年に襲い掛かった。

間一髪で助かったレンは村長に引きずり戻されたが、そのときいつの間にか姿を現していたフードの女がもう大丈夫、と少年に告げた。

「でも…でもルイが」

「あの男は地上最強の拳法すらも倒した存在。ならず者など」

女は言葉を切った。

十数人のモヒカンは武器ごと体を貫通され、あるいは切り裂かれてすれ違いざまに吹

き飛んだ。

ボウガンを持つ者は飛んできた衝撃波で体を真つ二つにされていた。

「ゴミクス同然」

女の台詞に軽蔑と憎悪がこもっているのを感じたのは村長だけだった。

老人がその女の横顔を見たときには、すでに彼女は無表情になっていた。

「な、なにもんだてめえ……手下どもを一瞬で」

金髪をひとなでした青年が手を上げた。

ジードの振り下ろした大斧は、その瞬間彼の指で砕け散っていた。

村人たちがさらにどよめいた。

「あ、あの巨漢のジードの斧を指一本で粉碎だなんて……化け物か」

「……村長?!」

側近たちが白い髭を震わせている老人を窺う。

その彼がいつにない動揺を見せて叫んだ。あれは南斗聖拳じゃ、と。

「なんとせいけん?!」

「二千年の長きに渡って伝えられてきた残虐非道の殺人拳。この世紀末となつては幻の

頂上拳のひとつ……」

村人たちのやりとりを聞いていたジードがうおおおと絶叫した。

そんな伝説なんざあるわけねえ、と強がりながら笑っている。

「金髪野郎、このガキの首をねじ切られたくなかったら近寄るんじゃねえ」

冷や汗が止まらないボスの言葉に反応せず歩き進む相手が、何気なくフードをめくり上げた。

「てめ」

ジードは見た。巨漢の自分の目の前に浮かび上がる長い金髪の青年の姿を。

スローな動きだと思った。その空中蹴りを避けるのは容易い。

しかし体は自由が利かなくなっただと思うほど鈍重だった。

片手でつかんでいた少女の首をねじきるような余裕もない。

視界がぐらりと揺れた。

そう思ったら彼は空を見ていた。大きく仰け反っていたことに気付く。

慌てて体勢を戻した。

すでに盲目の少女は青年によって助け出され、後方まで逃げている。

「へへへえなんだその間抜けな蹴りはあ?! このジードさまには蚊に刺されたほども

効いてねえぞ!!」

哄笑する巨漢が、周囲の村人の表情に違和感を覚えながら吠える。

仲間はずでに目の前の若僧に殺されて誰もいない。

それでも自分ひとりで逃げ通す自信があった。

得体の知れない拳法を奮う相手に、ジードが覚えていろと捨て台詞を吐く。

「いつか必ずこの村の全てを燃やしつしてやる、それまで」

悪態をつきながら感じた。風通しがいい。

そう思った巨漢が自分の体に風穴どころではない空洞が出来ているのに気が付いた。

村人たちの引きつった顔を見ながら、ジードは両膝をついたのち、笑顔のまま乾いた

大地へ崩れ落ちた。

§

§

§

§

§

§

§

§

夕陽に照らされた金髪が輝くように光っている。

村長をはじめ、村人たちが出立する二人の男女を総出で見送っていた。

そのなかに少年少女の姿もあった。

フードの女と盲目の少女が言葉を交わしている。

それを見ながら少年レンは、金髪の青年にルイを助けてくれてありがとう、と深く頭

を下げていた。

その傷だらけの面を上げたとき、彼は必死の表情で叫ぶように言った。

「貴方のように強くなりたい。強くなってルイを守りたい」

その真摯な瞳には覚えがあった。青年はかすかに表情を崩していた。

「だとしてもお前が報われるかわからんぞ」

相手の静かな声に、少年が口角を上げた。

以前に同じ言葉を投げかけられたことがある男は、それが会心の笑みだということを知っている。

夕陽に照らされたレンが迷いなく言った。

「ルイが無事ならそれでいい」

風に靡いた金髪が青年の顔にかかった。

ゆえに少年には彼の感情は見えなかった。

しばらく風の音を聞いていたレンに、長身の男が告げた。

「いつか落ち着いたら俺の元へ来い。本懐を遂げさせてやる」

「ほんと?！」

「ああ」

「約束だよ、お兄ちゃん」

男どうしが指切りを交わした時、女たちも指切りを交わしていた。

出立しようとする女に近づく彼の背をレンが追いかける。そして尋ねた。

「お兄ちゃんの名は？」

そう問われた青年は無表情になった女を連れ、振り向きざまに、シン、と告げた。

夕陽のなかに消えていったシンという青年の背中を、女は守るものという去り際の言葉、レンは生涯忘れることはなかったという。

## 二十一話　アスガルズル

南斗聖拳を修めた女拳士、レステイエは、頂点である慈母の星を初めて近くで見たとき、心が死んでいるとひと目で悟ったものだ。

その無表情はまるで人形のようにだった。

普段は飄々<sup>ひょうひょう</sup>としていたジョーカーでさえ、北斗の少年と出会う前に戻ってしまった、と寂しく肩を落としているのを眺めるばかりだ。

そんな連れ合いに金髪の青年が何も言わないのも気になった。

だが彼女からすれば双方とも雲の上の存在。

上司である死神にそのわけを聞こうにも、目つきの悪い男がノーコメントを貫くほど異様な間柄なのだということを、レステイエはしようがなしに悟るしかなかった。

焚き火の炎を眺める長い黒髪の美しい顔に生気はない。

影の女は平たい岩に腰かける女主人に、自分が何故現れたのか告げた。

うつろな目で美女が街の名を繰り返している。

「サザンクロス？」

「はい。ようやく完成のめどが立ちました」





「軍閥の奴らは総じて地獄耳だ。おそらくサザンクロスの場合、ないしはそれが完成間近なのを薄々察している」

「はい」

「そのなかでも最も活動が盛んなのは、南斗の聖帝だ」

砂塵の風が吹く。主人たちの姿はもやのなかにあった。

「象徴の居城となるサザンクロスの位置に至るルートは、おおよそ計算できる。おそらくお二人はこれから本格的な襲撃を受けるだろう」

「……」

「それが聖帝配下ならばこのジョーでも十分撃退できるが……将星自ら出馬となれば、この地上で対抗できる者はほとんどいない」

「シン様かラオウか、もしくは」

本来は象徴とともにある北斗神拳伝承者の名を、彼女はあえて口にしなかった。

死神も同様だった。

当然にしてラオウがこちらに合力することはありえない。

むしろ積極的に敵側につく可能性すらある。

将星が聖帝を名乗りだしたのとほぼ同時期に、ラオウは世紀末覇者、拳王の名乗りを上げた。



原動機を搭載する車両を拒否し続ける慈母の星が体調を崩したことで、シンは付き人のレステイエの情報から、最寄りの滞在施設として一都市に匹敵する城塞の存在を知らされた。

世紀末のこのご時世、水、食料、燃料とともに需要が増えているのが、女性の存在だった。

鉄条の門と高い壁、精鋭の護衛に守られたそこは色里としても知られる、難攻不落の街、アスガルズルだった。

「遊郭そのものな都市ですが、それをまとめるのは占星術に優れた女エバ、街の人々からは女王と呼ばれています」

レステイエが慣れた所作で正門を叩く。

影としての仕事からか、こういう場所も出入りする機会があるようだ。

そんなシンの視線に、本来はこんな所なんて近寄りたくもありません、と頭巾の下の頬を膨らませている。

弁解する影の先導を受け、ユリアを支えて金髪の青年が中に入ってみると、出迎えてきたのは踊り子のような服装をした女たちだった。

それぞれ髪や肌の色が違う。露出が多めの衣装は色里ならではであろう。

そして荒野のなかで会う村や小さい町の女と比べ、手入れが様々に行き届いた出で立ちをしている。

装飾品で着飾った何人かの踊り子がフードをかぶったままのシンの顔を覗き込む。

それを確認したとき、一瞬にして姦しい声が南街の出入り口付近に響き渡った。

「超お美男子！ 天然の金髪!! 長身で筋肉質……言うことなしの上客じゃない?！」

「うわあ王子様だ〜！ まじでこんな男が外の世界にいたのねえ、感激だわあ」

「うちならタダでいいよお兄さん。この中でも一番美人だし色々上手だし」

「なんですってえアバズレがっ」

目の前の展開に対応しきれず、助けを求めるように金髪の青年が影を見る。

レスティエとしても女を買う客だと思われても心外であった。

主人に群がる女たちを引きはがし、このお方は用心棒としてここにきたのだと説明する。

それでも纏わりつこうとした彼女たちが何かを察したようで、顔色を変えて一斉に引いた。

いつの間にやってきたのか、得体の知れない覆面男たちが姿を見せていた。

女や野次馬の男たちが遠巻きに見守るなか、様々な体格をした覆面の連中がこの街の警護を任されていると名乗り出て、レスティエとフードを被っている象徴を舐めるよう

に見つめながらシンに近付いた。

「腕を買ってくれとのことだが、女連れでこのアスガルズルに来るとはいい度胸をしているな。腕試しにその女どもを賭けてみるか若僧」

「そもそもわしらはいい男つてのが大嫌いなんだ。おめえごと奴隷商人に売り飛ばしてやるよ」

軽口を叩く相手が悪すぎた、とレステイエが肩をすくめている。

大斧を振り上げた覆面の一人がシンの裏拳を受け、武器ごと肋骨を折られて壁に激突していた。

痙攣する男を見た仲間が一齐に武器を手を取った。

「野郎、やりやがったな」

「素手で斧を粉碎しやがった……何者だこやつ」

取り囲もうとした覆面の数人が不意に絶叫を放つ。

彼らは首元を切り裂かれて仰け反っていた。

斬撃を放ったレステイエが空を舞って着地する。同時に彼らが倒れこんだ。

「女あ……!!」

「手ごわいぞこやつら、総がかりで」

そう言いかけた用心棒たちが何かに気付いた。

上空から降ってきたその声を確認するまでもなく、気配を悟ったとたんに覆面たちは引くぞ、と頷きあつて路地裏へと消えていく。

「ざまあないね、女にやられて逃げるとは」

武装した女の集団が壇上から降りてきた。

統一性のない恰好だったが、彼女たちはエバズヴァルキリアと名乗っていた。

南街の正規の自衛団だと付け加えた女は眼帯をしていた。

そのリーダー格の背の高い女がシンに握手を求めてくる。

「あたしはフリーダ。あんたらの拳を見せてもらったよ、あれが残虐非道の殺人技、南斗聖拳だね」

「南斗を知っているのですか」

フリーダと名乗った真紅の髪的女とシンの上に滑り込み、レスティエがそう言った。

ヴァルキリアのリーダーからの握手を阻んだものと思われる。

それを気にせず眼帯の女は返答した。

「アスガルズルでは色々な派閥が混在してる。あれはあたしらとは敵対する北の街の用心棒だね。喧嘩っ早いあいつらに対抗できる凄腕を求めていたところなんだ」

そう説明しながらついてきな、というべらんべえな女の後に、ユリアを抱えたシンと影が続く。

それをどこからか見ていた誰かが気配を消した。

§

§

§

§

フリーダたちの根城となっていたのは酒場を兼ねるホテルだった。

一旦シンと慈母の星が二階の部屋に消えていく。

交渉を担当する影の女が一階の酒場でヴァルキリアたちと向かい合った。

テールには酒が置かれていたが、レスティエはそれを口にしなかった。

彼女が尋ねた。

「女王エバの下で発展してきた街ではなかったのですか」

「最初はそうだった。でもこの頃は力をつけてきた用心棒どもがアスカルズルの一部を占領し、女を奴隷化して男たちを傘下に加えながらやりたい放題。だからあたしたちのような存在がいるわけで」

「ブランデーを口にするフリーダがグラスを置いた。」

「北街の奴らは無法者だらけで数も多い。外にいる軍閥とも繋がってるらしいんだ。街中を巻き込んで討滅するっていうわけにはいかない」

「どちらに腕の立つ男はいないと」



「いる。あの連中を一蹴できる力を持った者が二人ほど」

「その方たちは今どこへ」

眼帯の女は肩をすくめた。知るもんかと言いたげだった。

「二人は放浪癖があつて気まぐれ、もう一人はこの用心棒じゃなく、たまに顔を見せる客のような奴でね」

「話になりませんね」

「だからあんたらの働きに期待したくてさ」

ブランドーのボトルを手にしたフリーダが、外からの喧騒を聞いて眉を寄せた。

この場にいたヴァルキリアたちが立ち上がる。

時間差を置いて、外から仲間と思われる女が扉を壊しながら吹き飛んできた。

彼女はテーブルを壊しながら転がった。それを見たヴァルキリアたちが騒然となる。

扉を蹴破つてやってきたのは、先程の覆面の集団だった。

フリーダが牙を剥く。

「何しにきやがった?!」

「眼帯女、仲間を殺しやがった男はどこかくまに匿かくまった?」

「知らんな」

「死にたいか」

「どうせ殺すだろふざけろよ」

フリーダとヴァルキリアたちが抜刀した。広い店内に戦闘員ではない男女の悲鳴が響き渡る。

そこへ場違いな軍服姿の男が数人、覆面たちのなかからやってきた。

「……誰だ？」

異様な連中を見たフリーダが悪寒を覚えて仲間を後ろに下がらせた。

長らしき髭の軍服男が透明のゴーグルの下の目をさらに細め、薄く笑って言った。

「なるほどなかなかいい女ども。健康そうだ。神の子を産む資格を擁している」

クソ野郎、と吐き捨てたフリーダが板間を蹴る。

敵の軍服の袖から何か光るものを見た彼女が咄嗟に動きを止めた。

そして飛んできた短剣を刀で弾いた。

「ほほうやるな女。わが部隊の初戦を躲かした女など今までいなかった。活きがいいな、

さぞかし締めも」

「下種が」

憤怒のフリーダが短剣をかいくぐって軍服の一人を斬り下げる。

その鮮やかな踏み込みに背後のヴァルキリアが喝采し、覆面たちが気色ばんだ。

神の軍隊と称する長が喉の奥で笑いながら、糸のようなもの手に取った。

「この斬糸が見切れるかな」

奇妙な構えの軍服男が突っ込んでくるのを、歴戦の戦士の勘でフリーダは避けきつた。

巻き添えになったテーブルと椅子が一瞬にして二つに割れる。

自身の防具も切り裂かれているのを見て、隻眼の女が舌打ちを放った。

長の髭男が気に食わぬといった体で鼻を鳴らしている。

「フン、反射神経の良いことよ。だがこの糸に断てぬものはない。お前の四肢を切り取っても用途には耐える。覚悟するのだな」

「フリーダっ」

「みんな引っ込んでろ、こいつはお前らの敵う相手じゃない」

今度は逆に覆面の男たちが歓声を上げた。

解体ショーの始まりだとばかりに囃し立ててくる。

それを見守っていたレスティエが腰を上げた。その時だった。

扉からまた何かが飛んできた。今度は用心棒の仲間だった。

板間に叩きつけられ、転がり回った彼らはクソっ、と悪態をつけて起き上がったものの、その仮面の頭部にはすでに断裂が入っている。

輪切りにされて倒れる覆面を見たフリーダが、靴音を鳴らして中に入ってきた人物を

見たとき、決死の緊張を解いて悪態をついた。

「おせえよバカたれが」

「取り込み中か？ 忙しいならまた出直すが」

「ふざける。ちよいと修羅場だ」

「のようだな。しばらくぶりの来店でこれとはついてない」

緊張感のないその男はフリーダを助け起こし、店の入口付近にいるヴァルキリアの敵と対峙した。

「なんだキサマ」

「あっあっ」

軍服の集団は怪訝な様子だったが、覆面たちは怖気を奮って後ずさる。

ごつい用心棒らしからぬ恐れようだった。

「ここ、こいつです！ こいつがフリーダに合力してこの街でのさばっている悪党」

「悪党だつてよ、ザン」

「そいつは心外だ。おれほど紳士な男はこのアスガルズルにはいないっていうのに」

レスティエが目を剥いた。

その男を南斗の聖堂で、演武場で、修練の広場でよく見たことがあった。

一般門下生ではない。

南斗の聖大導師から正式な認可が下りた拳士、百八派のひとりだった。思わず彼女は声を上げた。

「ザン様?!」

「ん?」

襟足が長いリーゼントのような髪型をした男はノースリーブの革ジャン、ボトムにブーツという独特な恰好をしていたが、見間違えようもない。

一般門下生にとつて左官級の彼は雲の上の存在だった。

「おれを知っているのか」

「南斗の門下生でありました。まさかザン様とここで会おうとは」

「おい敵に後ろを見せるなよザン」

フリーダの声にザンと呼ばれた男が手刀を一閃させた。

軍服の誰かが投げた暗器を素手で弾いたようだ。

その動きを捉えた敵は長の髭男だけだった。彼だけが瞠目していた。

ようやく余裕を得たフリーダが、ブランデーのボトルに手を伸ばして言った。

「来たばかりでなんだけどよ、このコスプレ野郎どもの掃除を頼むわ」

「いきなり仕事か。ふかふかのベッドでワインを手に一息入りたいんだが」

「あとで用意させるよ」

「話が早いなフリーダ。了承した」

「怪しげな術を使う男、何者だ？」

髭男が飄々とした長身の乱入者に問いかける。

ザンがようやく相手に向き直り、人差し指で来いよと挑発してくる。

された側はこめかみに血管を浮かべていた。

士官である彼からすると、ここまで舐められた記憶はない。

その長が舐めた男の胴体を両断すべく、死ねえと叫びながら突進していく。

酒場内で悲鳴が響き渡る。

迎えうったドジョウ髭の拳士が鬨気を発しながら告げた。

「わが拳は南斗十六翼のひとつ」

彼の腕が何本にも見えた。そんな構えだった。

殺気だけで死んでもおかしくなかった、と生き延びた覆面たちは後に証言している。

その拳法の名を、男が告げた。

「南斗紅雀拳」

二人が交差した。

軍服のほうの髭が舌打ちをしながら糸を手に振り返る。

背を向けたままの素手の髭が、サヨウナラとばかりに片手を振る。

長のつけた透明ゴーグルが二つに割れた。

鉄をも断つといわれる糸がビィンと斬れた。彼の視界が赤く染まった。

「な……」

ゆっくりと倒れていく長が、自分の体が一瞬にして卍斬りにされていることに気付く。

ばかなと唇が動いた。それが遺言となった。

「長が……あのお方が速さで敗れるなんて」

「いつ斬り抜けたんだ、化け物か?!」

軍服姿の男たちが指揮官を失って外へと逃走していく。

覆面の用心棒もさまざまい南斗の斬撃を見たことで戦意をなくし、捨て台詞すら残さず逃げ去っていった。

ヴァルキリアと店内の女たちが勝利の雄叫びを上げている。

やったぜと手を合わせあう連中をよそに、フリーダがさすがだね、と偽りない拍手を依頼をこなしした相手に送っていた。

ザンは慣れているのか気にした様子もなく、周囲を見渡している。

「仕事に厳しいお前の前で手は抜けん。それにしてもリマの奴はどうした」

「どこをほつつき歩いてるのか、あのバカは」

二人の会話を遮るように、レスティエが百八派の上位拳士に問いかけた。

「ザン様は帝王の異名があったところからのサウザー配下の勇将。それがなぜここに」

「……お前の名は？」

「レスティエと申します」

頭を下げる影に対し、ザンがサボリ気質の自分と帝王では気があわん、と告げた。

「……聖帝の武威には今も心酔しているがね。それとは別の話で、このせつかくの乱世、気ままに生きてみたいと思つてな」

「遊び人になって自堕落したいらしいぜ。南斗十六翼将つていう高官のくせに」

フリーダの横槍にザンと呼ばれた男がニヤリと笑い返す。

そのニヒルな男に眼帯の女が尋ねた。

「そうだ、エバ様に挨拶していかねえのか。あんたの働きを聞けばお声をかけて下さるかもしれないぜ」

「遠慮しておこう。女王の目に叶うほどおれは大物じゃない」

とりあえず寝る、と呟いた彼が酒瓶を手に館の何階かに上がっていく。

風のように現れて去っていった自称紳士と行き違いに、今度はシンが階下へ降りてきた。

女主人の容態が安定したようで、影の女もほっと胸をなでおろした。



金髪の青年が用心棒としてどう働けばよいのか、フリーダにあらためて尋ねている。ヴァルキリアのリーダーはそれに答えるために何か言いかけたが、女王の元に行こうとする前に、その本人が急に酒場に入ってきた。

「エバ様?!」

跪く彼女たちに微笑みかけ、シンに近づいた褐色肌の美女は、自身の館に案内するとだけ告げてきた。

問答無用の様相にフリーダたちの驚くまいことか、あの男、一目でエバ様のお眼鏡に叶ったのか、と顔を見合わせていた。

## 二十二話 女王エバ

エバの居館の寢室に通された金髪的青年が、褐色肌のあらわな女の背中を見た。

その持ち主は下着が透けるネグリジェという官能的な恰好をしており、自分の目に叶った様々な群雄と一夜を共にしてきた、と語り出した。

「乱世に覇を唱えようとする天の霸王、南斗の聖帝、独歩の鷲。これから出会うであろう蒼き餓狼、金色の男など……さまよう心を持つ彼らに一夜の安らぎを与えるのがわたしの務め……そして貴方もこの乱世を彩る一筋の光」

「……」

黙り込むシンに振り返り、長いカールの金髪の女は貴方こそが希望の光、と告げた。そしてかぶりを振った。

「わたしの神託ではまだそこまでしか言えません。ですが肌を合わせればもつと」  
花が咲き誇らんばかりな美貌の主は、スーパーモデルのように背が高い。

そんな女が抱き着こうとしてくるのを、シンは優しく引きはがした。

拒絶された過去はないと言いたげにエバが美しい瞳を見張る。

「なぜ」

「俺に安らぎなど必要ない」

「貴方の状況はヴァルキリアたちから聞いています。病人を抱えての逃避行、それがどんなに厳しいものか、わたしにも覚えがあります」

「……そんな話をするためにここに呼んだのか。仕事の話でないならここにいる義務はない」

踵を返そうとするシンに女王が呼びかけた。

「待ちなさい。このエバの目に適う男などこの世にほとんどいない。貴方はそのうちの一人なのです」

「……俺の目に適う女はこの世にただひとり。少なくともお前ではない」

冷たく言い放ち、背を向けて扉のほうへ向かったシンが、気配を消していたのか、縮こまって柱の陰に隠れていた青白い頭巾の女を発見した。

そのレスティエかもじもじとしながら、蚊の鳴くような声で言った。

「お付きの務めです……」

押し黙る青年の背中に、エバがそつと近づいて告げた。

「シン。現在貴方はあの女性と良好な関係を築いているとは思えない。わたしも女。あの人の佇まいから、貴方に心を閉ざしていると同時に、嫌悪している様子が見えつきりとして取れました」

エバの言葉にレスティエが眉を寄せた。青年はまじろぎもせず聞いている。

「それでもこの世でただひとり、と言うのですか。けして振り向くことのない感情を持つあの女性だけを見続けると」

「シン様の行動が無駄とでもいうのですか」

影の女は部外者ですが、と言いながら間に入る。

主が否定されたようで機嫌がすこぶる悪いようだ。

その健気な様相に、年上の褐色肌の女が微笑しながら返答した。

「だからこそわたしのような存在がいる。一夜でもそんな状況を忘れさせるのが乱世でのわたしの役目。何があったのか、何をしたのか、そして今どう思っているのか。吐き出す相手が一人くらいいてよいでしょう」

長身の美女に向き直った長身の青年が、真摯な瞳を向けてくる相手と視線を交錯させた。

一対の美男美女を窺うレスティエがむううと唸っている。

「このままでは……あの人は貴方を許すことは永遠にない。それほど心に闇を落としているのです」

金色の髪を持ち主どうしが見つめあった。

先にバルコニーから広がる夜の街の景色へと視線を逸らしたのは、男のほうだった。

「いずれ晴れる」

「…………え？」

金髪を揺らした南斗の拳士の横顔を見上げたエバが、その横顔の秀麗さに思わず見とれてしまった。

異性に対しそう感じたのは人生で初めてのことだった。

彼の言葉にはつとして意識を戻す。

「この旅は長くは続かない。いつか必ず終つひの棲家すみかを見つけられるだろう」

「それは不可能でしょう。貴方とあの人の二人では」

「俺ではない」

再びシンが館の外の景色を見る。

夜景というより闇に近かったが、もう数時間もすれば朝日が昇る。

「女王エバ。この件だけではありますまい。シン様に対し用心棒として何を望むのか、それを貴方自ら説明するほうが建設的な話となるはずですが」

沈黙に耐えられず口を挟んだレスティエの言葉に、彼の姿を見つめていたエバがゆっくりと同性に目を移した。

「この街を手に入れ、拳王や皇帝に対抗すべく暗躍している者たちがいる」

「北の街の用心棒たちですね」

「ええ。でもそれを指揮する者は容易く姿を見せず、内応者や外の世界の軍閥を使ってわたしたちを揺さぶっている。そしてその男にはそれだけの力もある」

「……わたくしは宿で南斗紅雀拳のザン様と会いました。あのお方でも敵わぬ相手となれば相当なもの」

「そう。あの紳士やリマでさえアスガルズルの支配者になろうとしている黒幕には及ばない。ゆえに南斗六星のひとりたる貴方に助力を仰いでいる」

ザンという名を聞いた金髪の青年は意外そうな顔をしていたものの、サウザーの元から離れたと聞いて納得していた。

腕は立つがぐうたらで放浪癖がある、と有名なドジョウ髭の性格は彼も知るところだ。

不意にシンとレスティエから離れた館の主が、街を見下ろして寂しそうに言った。

「わたしには時間がありません。蒼き餓狼が訪れるとき、わが命の灯ともしびが消える。だからこそ……今のうちにもうひとつの懸念を排除しておきたい」

「時間がないとは病か」

「違います。運命によってわたしは」

「運命など変えられる。女王と名乗るからには課せられた責任を果たしてから好きにしろ」

静かだか吐き捨てるようにシンが言った。

その口調に驚いたのは言われた側ではなく、彼を主と仰ぐ女のほうだった。

「安易に運命を受け入れることはない。この街の女を見ればわかる。お前は必要とされ  
ている」

「……」

「死ぬな」

金髪の青年の言葉はわたしのためだけに向かって論しているのではない。

褐色肌の美女はそう悟りながら、こみ上げる何かを抑えきれず、わずかに震えていた。  
振り返ってみれば、誰かに盲を解かれるなど今までの人生にあっただろうか。

彼女の心は漣さざなみが立っていた。

この見目良い男はどこの世界から来たのか、と邪推するほどの達観ぶりだった。

まなざしを見返すたびに死ぬなど語りかけられているようで、その視線に耐え切れ  
ず、エバともあろう女が逃げるように面を背けた。

「もしやむを得ない状況ならば……人を頼れ」

シンの言葉でエバがわずかに表情を歪ませた。

「依頼通り、俺がその懸念とやらを片付けてやる」

「……貴方に求めたいのは軍服を着た狂信者の排除。ゴッドランドなる集団の討伐」

背を向けた女王の、黄金の長い髪が揺れている。両親の仇のようだった。

小刻みに震える女の願いを叶えるべく、シンは影の女に後を任せてエバの館を出た。

レスティエには象徴の看病も任せることになるが、本人は大役を任されて気合十分の様子だった。

やる気が空回りしないように言い含めた金髪の青年は、来て早々色里を後にした。

§ § § § §

アスガルズルから出発し、女王からの情報で目的地に向かって荒野を歩き続けるシンが、朽ちたビルなどの建物にまぎれて村のような集落があるのを発見した。

食料や水の調達に立ち寄る必要があった彼が、建物前の広場を覗き見る。

そこでは野盗と奴隷商人たちが商品の取引を巡って、大声で争いを始めていた。

「男はいらねえ。女の分の報酬は払ってやるよ、ほれ」

わずかの食料と水が放り出された。

野盗が激昂するのも無理はない。

だがこのころの奴隷商人たちは職業柄体格がよく、腕っ節も肝っ玉もそこらへんのな

らず者など一蹴できる実力がある。



肌の黒い大男たちを見て敵わぬと見た野盗が、背後の何者かに向かつて呼んだ。

「雇ったからには働け用心棒！」

「……」

それに返答せず、髪の高い青年が荒地を踏み進む。

黒い集団に対して彼が尋ねた。

アイリという女を知っているか、という問いかけに、数においても有利な状況であるためか、連中が余裕を見せて嘲笑う。

おれが買った女かもしれないねえな、と答えた瞬間、その男は細切れになって崩れ落ちた。ありえない光景に、敵味方双方が驚愕の声を上げながら後ずさる。

「なっなんだこいつ……」

「ヤロウ、ふざけやがってぶつ殺す」

黒い集団が数を頼りに蒼い男を押し包む。

だがそれらは数瞬の間に、全て輪切りされて生涯を終えた。

商品たる女子供が怖気を奮って逃げ惑う。

全滅した商人たちが連れていた奴隷も捕獲して意気揚々の野盗たちだったが、その際子どもを殴りつけたところで、誰かが兄さん、と泣きながら呟いた。

その一言で状況がまた変わった。

彼らがスゴ腕の男と呼んだ存在は、鬼の形相で雇い主にも猛威を向けていた。

抵抗どころか逃走する暇もなく、野盗たちの欠片が風と消える。

敵も味方も皆殺し。

そんな殺人鬼に、村の生き残りも女子供も震えて声もない。

蒼い髪の男は死んだ外道たちから食料と水を奪い取る。

それを懐中に収めて立ち上がったとき、一人の男がこちらに歩いてくるのを発見した。

南斗聖拳を極めた男たちが世紀末の荒野で対峙する。

「……お前は」

「懐かしい顔に出会ったな。レイカ」

容貌に優れた若い男たちが互いに声をかける。

金髪の青年が青い髪の青年の荒みきった雰囲気を見た。

戦争前は純粋で生真面目だった相手の変わりように、彼は驚きを隠せずに呟いた。

「人相が悪くなった」

「……アイリという女を知っているか？」

「知っていたらどうする」

涙袋が黒い。美男子が台無しな目元だった。

そんな青年が音もなく前進した。

「案内させてから殺す」

大胆に距離を詰めてきたレイの凄まじい斬りこみで、シンの金髪のひとつふさが宙に舞う。

暴風のようなそれを避けていた彼が、背後の巨大な岩まで追い詰められ、後退を止めた。

南斗水鳥拳の伝承者がカツと目を見開く。

「かくー！」

ブシャツ、という風を切る音とともに、数え切れない掌底がシンに迫る。

その千手の押し込みを、振るわれる斬撃をシンが受け流す。

その攻勢の最後に双龍の牙が振り下ろされた。

からも両手で受けきった金髪青年だが、その背後にある壁のような岩石が衝撃に耐えられず、微塵切りになって砕け散った。

村の男たちは声もなく、女子供は悲鳴を上げていた。

防ぎ切った側がふうと息をついた。その頬にはいくつか傷がついている。

流れる血をぬぐうため、シンは餓狼となった男の両手首から手を離れた。

レイが思わず舌打ちを放つ。すべて避けられたことが信じられない様相だった。

「……このおれの速攻をしのぐとは」

「本気の水鳥拳、楽しませてもらった。だが」

シンの残像が残る構えをレイは初めて見た。

利き手を上に、そうでないほうを下に、それが南斗極聖拳きよくせいけんの型だった。

その伝承者が告げた。

「今のお前の……餓狼に陥った心なき拳では俺には通じん」

「綺麗きれいごとを!!」

ぎりつと歯を食いしばったアイスブルの髪の毛の拳士が飛び上がった。

金色の髪を風に靡かせた拳士も迎えうつ。

「綺麗きれいごとで修められる拳がどうか、見せてやろう」

## 二十三話 世紀末救世主伝説

己のみじめな悲鳴を聞いた彼が、逆光の相手に向かって手を伸ばす。

その相手は十字を象かたどった構えのまま滞空していた。

地上に向かって落ちていくアイスブルーの髪青年がまともな受け身もとらず、乾いた大地に叩きつけられて転倒する。

得意の空中戦で後れを取ったことを恥じたのか、起き上がる体は負傷以外の理由で震えていた。

右肩のプロテクターは吹き飛び、左肩の羽毛のような肩当ては血に染まっていたが、矜持を傷つけられたことで痛みなど忘れている。

「飛燕流舞が利かぬ……?!」

いや違う、と吐き捨てるように彼が言う。

奥義が通用しなかったのではない。旋回する前に叩き落されたのだ。

空中で見た金髪の主は、南斗の象徴たる南十字の型に両腕を広げ、さらに上に舞い上がろうとする水鳥を撃墜した。

かろうじて避けたものの、戦争以降これほどの傷を他人から与えられた記憶はない。

暗い目の餓狼が立ち上がった。口元を拭いている。

「……復古の拳は初見。ゆえに競り負けた」

「そういうことにはしておけ」

着地した相手の余裕の返答に、レイが怒気を発しながら舐めるなど叫ぶ。

さらに速度を上げて距離を詰める。

人間の目では捉えることができない体術だった。

鴛鴦双掌と呼ばれる、内から外に向けて羽を広げるように振り抜く奥義を放つ。

だがシンは斜めに仰け反りつつ余波を掌で受け流し、黄金の髪を切らせる程度で避け

きつっていた。

餓狼が牙を見せながら振り返る。

今度こそ暗い目が驚愕で大きく見開かれた。

「なっ」

南斗の拳であのような技は見たことがない。そうレイは思った。

奴隷にされかけた女たちと村の連中もどよめいた。

手の甲に十字の傷跡がある拳士が、それを地に向けて叩き込んだからだった。

「無明封殺陣」

轟音とともに大地が揺れた。

地面が割れ、砂埃が舞う。ごうつという衝撃破も円状に広がった。飛んで避けようとした水鳥拳伝承者が、黄金の光に絡め取られる。

強引に着地させられたレイは反撃に移ろうとしたものの、不意に体内から弾けるような痛みを覚えて再び転倒した。

「ぐ、あ」

華麗な男が痛みのなかで相手を見上げる。

どこの生まれかわからぬ一般門下生、金髪の小僧と揶揄された青年が、動きを封じられて転がる自分に追撃もせず、踵を返すのを窺った。

どの南斗聖拳にも見当たらない奥義の数々に完封され、レイは荒地を握り潰してバカな、と叫んだ。

人生でこれほどの屈辱を与えられた覚えはない。

だがその男は攫さらわれてきた女と村人に近寄り、ここは危ないと告げている。

サザンクロス、という聞きなれぬ街の名をレイは聞いたが、今の彼にはどうでもよいことだった。

南斗の貴公子、水鳥拳始まって以来の秀才とよばれた男が、屈辱にまみれたまま激痛を忘れて跳ね飛んだ。

「余裕のつもりか!!」

シンのがら空きの背中に斬りかかる際、女や村人たちの悲鳴が耳をつんざいたものの、妹以外の女などレイの眼中にはない。

巻き添えになろうが知ったことではない、と襲い掛かっていく。

同門の青年が振り向いて言った。

「歪んだな、レイ」

「ほざけー！」

「……お前は過去の俺」

意味不明の台詞をレイは聞き流した。

地形を削り斬りながら、広範囲の龍の牙を放つ。

怒りによって覚醒し、速さ鋭さを増した拳がシンに襲いかかった。

周囲を確認したその標的が闘気を繰り出す。

巻き添えになりそうな人たちを触れずして弾け飛ばしたことで、間合いは南斗聖拳伝

承者たちだけになった。

レイの千手の貫手と、一撃必殺のシンの貫手が激突する。

激高の男の片手を捉えた深淵なる気合の持ち主が、冷ややかに告げた。

「俺に指突で挑もうなど十年早い」

利き手を封じられたことで勢いをなくした水鳥のそれは、同じ突撃でも剛の面で違い



がありすぎる極聖の牙により、すべて弾かれ、そして折れた。

拳圧でのけ反ったレイの胸元へ復古の拳が迫る。

だがシンは握り拳こぶしで標的を打ち抜いた。

正拳突きを食らったレイが弾け飛ぶ。

昔リユウケンに師事した甲斐があつたのか、南斗の拳士とは思えぬ打撃は同格の六星をコンクリートのビルに叩きつけ、破壊させるほどの威力を誇っていた。

百八派随一の華麗な拳士と謳うたわれた男は、崩れ落ちる瓦礫をかき分けて這い上がるように起き上がった。

醜態だと呟いている。

そして彼は胸を押さえながら修羅の形相で叫んだ。

「……手心を加えやがった……! 南斗極聖拳きよくせいけん」

「怒りによる覚醒など水鳥拳の神髄ではない。お前もいつか他のものに目覚めるときがくる。その際は本気で相手をしよう」

「目覚める……?」

待て、と呼びかけるレイに背を向け、村人たちに向かつてシンは歩き出した。

歩きながら彼は言った。

「激情や無自覚の覚醒、餓狼などといった力では俺は倒せん。勝負は預け置く」

「目覚めるとは……それは一体どういうことだ?!

女や村の連中を連れ、シンがこの場を後にしようとするのを、足を引きずってレイが追いかけた。

金髪の青年が立ち止まる。しかし別のことを告げた。

「奴隷の女たちが集まる街がある」

彼はつい先日滞在していたアスガルズル、という皆殺しの色里の存在を彼に伝えた。

「上玉が幾人も揃っているらしい。そこならお前の探し物の手がかりが掴めるかもしれない」

「……アスガルズル」

ぺっと血の唾を吐いた美男子が、礼は言わぬと背を向ける。

シンはその背中に何気なく言った。

何か意図して告げたわけではない。

「女を守るもの。それは探し物に限ったことではない。あの街の女たちも同様」

「……知るか」

「死にたがりはその街の女王になっている。南斗の男の誇りにかけて守り抜け」

§ § § § § §

村人と女たちを連れしたシンは、滞在先の別の村で依頼の標的が何者かに壊滅させられた、と聞いた。

曰く、ゴツドランドと名乗る神の軍隊が七つの傷の男に倒された。

曰く、札付きのワルで名を轟かせていたジャツカルなる勢力が滅亡し、その際デビルリバースと呼ばれる悪魔が討伐された。

曰く、とある城塞都市を支配するジュガイという高名な拳法家を撃ち破り、暴政から解き放った。

そのほかを数えればきりが無い。

世紀末における救世主の伝説が広がり始めたのは、このころからであった。

しばらく姿を消していた死神が先日からシンたちに合流しており、彼が用心棒として連れてきた拳士からの情報も、概ね同じようなものだった。

ジョーカーの連れの男が、ソファで寝転びながら呟くように告げた。

「その男は北斗神拳の使い手」

ひげを生やしたごつい男が帽子のつばを弾く。

「おいダンテ」

「勘違いするなよ死神。ミーがこの青年の元へ来たのは、安定した基盤の街が存在する

と聞いたからだ。領土を拡張する意思のない軍閥、その客分になら収まると言つたはずだ」

独歩の気概が強い大男の言葉は、シンにとっては不快ではなかった。

南斗百斬拳のダンテといえ、地方の軍閥の長すら務められるほどの拳士だ。

そんな腕の立つ男がサザンクロスの守衛に就く前に、村人と女たちの護衛に当たつてくれるのは有難い限りだった。

寝そべりながら帽子を手にするダンテの後ろに立つのは、ナリマンという男だ。

巨大な熊手を持つ歴戦の武人がシンの名を呼んだ。

「あんたは南斗の象徴を迎えに戻るべきだ。時間がない。すでに聖帝の魔手がこの村付近にも伸びている」

「若」

右目を長い前髪で隠した策士の言葉で、死神が腰を浮かせた。

「エバなる女王の依頼、ゴッドランドの討伐は凶らずも胸に七つの傷の男によつて達成されたことですし、今はナリマンの言う通りアスカルズルに帰還すべきかと」

「……」

「女どもはわしらに任せるんだな。無事南十字の島へ送り届けてやる」

「頼むぜ金髪的美男子。さすがに南斗の帝王が現れたらいかにもミィたちでも相手になら

ん。奴らの軍勢がサザンクロスに来る前で止めてくれ」

ナリマンが高言し、ダンテが起き上がった。

三人の拳士たちにそう言われてはシンも否やはない。

死神を連れて、村人と女たちとはここで別れることになった。

§

§

§

§

§

「アスガルズルは無事でしょうか。若のお言葉通りなら水鳥拳がなんとかしてくれるはずですが」

「さあな」

「レイ殿はともかく、噂ではあの色街は拳王や聖帝でさえ容易に手は出せぬ要地とか。であればサウザーを迎え撃つのはあの場所がいいのでは」

「……かもしれん」

ユリア自体が囧となる。

不愉快だがそういう選択を認めないわけにはいかない金髪の青年は、数日かかってやってきた道を引き返している最中だった。

荒れた大地を進むそんな男の二人旅は、早々に南十字の旗を掲げた軍隊と遭遇するこ

とで足止めされた。

「見つけたぞ金髪の若僧！ 慈母の星はどこにいる?!」

主張が激しいモヒカン軍団が、バギーやらバイクのエンジンを吹かしてそう告げてる。

荒野の中で二人と百を超える集団とが対峙した。

「ここはわしが」

「任せた」

「ようやく部下として扱ってくれますな。光栄ですよ」

にやりと笑う目つきが悪い男に、シンは一瞬だけ苦笑して地を蹴った。

突進してくる機動部隊に対し、南斗極きよくせいけん聖拳の蹴りで迎え撃つ。

二輪と四輪駆動の車体を破壊し尽くした青年が降り立ち、そして駆け抜けた。

## 二十四話 七つの傷を持つ男

皆殺し色里、アスガルズルに戻ってきたシンが見たものは、内乱による荒廢の様相だった。

だが騒動以前から勢力を二分していた不穩な空氣はほぼ一掃され、女王エバの元で再興しようとするエバズ・ヴァルキリアと街の人々の表情は明るい。

一部ではまだ混乱状態にあるものの、城塞内は建物の再建作業で活気に満ちていた。

そんななか、最上階の居館でシンは褐色肌の美女と再会を果たす。

巫女のような格好の彼女は今までにない笑顔を見せている。

吹っ切れた様子で、このアスガルズルの女王としてこれからも生きていく、と晴れやかに告げていた。

金髪の青年が頷きながら言った。

「どうやらレイは勝手に仕向けた俺との約束を守ってくれたようだな」

「それどころか彼は街の悪党を追い払い、外敵であった水鳥拳の先代伝承者を倒してくれました。数人のヴァルキリアとリマはまだ重傷ですが、南斗紅雀拳のザンがいることで治安は保たれています」

そして彼女は表情を改め、言葉を継いだ。レイは妹を求めて旅立ったと。その話を聞いた後で、シンは依頼を達成できなかったことを話した。

「ゴツドランドは壊滅した。俺ではない。七つの傷の男がやったそうだ」

「そのようですね。星がそう語ってくれています」

「ならば話は早い。数日中に俺はあの女を連れてこの街を出る」

「滞在のあいだに体調は良くなったようですね。南斗の象徴」

エバの何気ない問いかけにシンは間をおいて答えた。

「……知っていたのか」

「それを奪いに聖帝が動き出した。情報通なら誰でも知っていること」

彼女が街を見渡せるベランダに出た瞬間、ヴァルキリアの何人かが動転したように堂内に駆け込んできた。

慌てふためくパーマ女に主人が近寄った。

「何事ですか？」

「あつあつあの、あの用心棒たちが……！」

「用心棒？　ロフウを崇める残党はほとんど追い払ったはずですが」

「違います！　われらの用心棒たちが殺されたのですっ」

そばかすの女が叫ぶ。スピードダイヤクラブ、このアスガルズルでも手練れの猛者た



ちが相手にならず、爆発したように肉体が飛散したという。

「ではハートも」

「あのブ……いえあの男はまだ善戦しているようで」

それを聞いたシンが部屋を出ていく。

彼らの根城はあっち、というそばかすの声に、青年は首だけ横を向けて了解を示した。途中で連れれの女の部屋の前を通りかかった際、戦争前から近侍であったサキという少女と出くわした。南斗の門下生レステイエの姿もあつた。

「シン様、ユリア様がいきなり起きだして、「来た」と」

レステイエの説明にシンが頷く。

その唇がわが友ケンシロウか、と動いたのを彼女は見逃さなかつた。

その瞬間、部屋の扉が勢いよく開いた。

奇妙な能力を持つ慈母の星の予感が断定に変わったようだ。

上着を羽織った長い黒髪の美女、ユリアの姿があつた。

金髪の青年を見たことで輝きに満ちた表情を消す彼女に何も言わず、シンはならず者たちの根城の向かつて駆け出した。

§ § § § § §

ほあたあ、という掛け声が最上階に駆け付けたシンの耳に届いてきた。

あその扉の向こうです、というヴァルキリアの説明で、彼はドアを蹴破って大広間の中に足を踏み入れた。

姿は見えない。ここは壇上になっており、階段の下から二人の男のやりとりが聞こえてきた。

「あのとぎ命拾いしようだが、今度はそうはいかんど、ブタ」

「……あの三人の仇をとるまでは、わたしは」

「無駄だ」

あつたあという、またも聞き及びのある気合が聞こえてくる。

その後にはハートの巨大な体が階段上まで浮き上がってきたのを、ヴァルキリアたちが驚愕しながら見上げていた。

蹴り上げられた巨漢が壇上の大理石へと叩きつけられ、ゴムボールのように転がって彼女たちへ迫るのを、シンが片手で止めていた。

「この巨体をその体で」

彼は長身で筋肉質だったが、ハートと比べると瘦躯の小男でしかない。

エバの親衛隊が瞠目する中、シンは靴音を立てて壇上を進む。

そして階段の下でこちらを見上げていた何者かと対峙した。

「北斗神拳。生きていたのか」

シンの声に男が立ち止まる。

見上げる黒髪の拳士は彼がここに滞在していることを知っていたのか、わずかに驚いた様子を見せただけで、震える指を壇上に向けて冷酷に告げた。

「シン。てめえに会うために地獄の底から這い上がってきたぜ……」

あの日。核戦争で文明が崩壊した後……

シンはユリアを連れて旅立つ北斗神拳伝承者を襲撃した。

未だ純粹さが抜けきっていないその男から、彼は力づくで象徴を奪い去った。

その際胸に七つの傷をつけた。

信頼していた親友に騙し討ちにされ、愛する女を奪われた男は、以前とは比較にならぬ殺気を漲らせ、みなぎ壮絶な雰囲気みんぎを漂わせている。

まさしく暗殺拳を奮うに値する人物に変わっていた。

殺されるためにか、とはシンは返答しなかった。それは前の世界の話だ。

「ユリアはどこにいる」

一歩一歩、踏みしめてやってくるケンシロウの禍々しきで、シンはあらゆる滞在地で聞いた軍閥たちの全滅が噂ではなかったと悟った。

練られた闘気が体中から発せられている。

前世より遙かに強い、と一目でわかるほどの気合だった。

黒い革ジャンに黒いボトム、右肩だけのプロテクターは変わらずだ。

あの日から表情を失くしてしまった男は、りょうぶし両拳の骨を鳴らし、シンの前に立ちふさがった。

金髪の青年も表情を消して言う。

「お前のことなど忘れたとき」

「……生きているのならそれでいい」

目を瞑ったケンシロウが万感の思いで返答するのを眺めながら、シンは南斗聖拳の構えをとった。

残像で両腕が無数に展開していく。それが止まった。

「ケンシロウ。お前ではこの俺の技を見切ることはできません。もう一度あの地獄へ突き落してやる」

面を伏せている北斗の宿敵へ、シンは千手の指突を撃ち放った。

どよめいたヴァルキリアたちの歓声途切れた。

目にも止まらぬ無数の貫手を見切り、片手で造作もなくつかみ取ったケンシロウのすさまじい闘気を改めて感じたのか、彼女たちは息を飲んでいた。

「やはりお前は……以前のケンシロウとは違うようだな」

金髪の青年の手首を掴んだ黒髪の男は、それに力を込めながらシンの名を呼んだ。

彼の双眼が燃え上がったように青年には感じられた。

「おれを変えたのは貴様が教えた執念だ」

§

§

§

§

§

睨み合いの後、シンが手首の拘束から抜けて間合いを取った。

あえて離れたのだ、と言わんばかりのケンシロウが見下すように、以前の宿敵を見つ

めて言った。

「今のおれにはおまえなど敵ではない。やめておけ」

その挑発に乗ったシンが大振りの斬撃を放ったものの、凄斬爪という名の技を飛んで回避したケンシロウが初めて北斗の構えを見せた。

前世とは違い、その体には一条の傷もついてはいなかった。

「シン、貴様の技は全て見切っている。貴様の負けだ」

「俺を見下したようなセリフは吐かせん」

龍の牙の三連突は紙一重で交わされ、逆に裏拳で頬に、のけ反った際に蹴りを食らっ

たシンがなんとかこらえて後ずさる。

彼の肩のプロテクターが砕け散った。

ヴアルキリアの悲鳴とともに、ケンシロウがゆっくりと浮かび上がった。

あのときの再現のような動きを見せる相手に、シンも跳躍して蹴りを放つ。

交差する二人が地に降り立った。

以前は発動しなかった北斗飛衛拳ひえいけんが南斗の拳士の肩に炸裂する。

すでに防具を失っていたそこへ衝撃が走った。

シンが肩を押さえながらしやがみこむ。

「安心しろ、秘孔は外してある」

拳を鳴らしながら近寄ったケンシロウが、金髪の青年を今度こそ両方の意味で見下し

て告げた。

「ユリアを返してもらおうか」

「ユリアは俺が殺した」

一瞬、壇上の空気が止まったかのように黒髪の男が動きを止めた。

「何……?!」

絶句する北斗の男に、形勢不利な南斗の青年が吠えるように語った。

「いつまでも俺のものにならぬあの女、さすがに強情が過ぎた。ひとおもいに刺し殺し

てやったわ……!」

シンの高笑いが響く。ヴァルキリアたちが顔を見合わせている。

彼女らの表情が凍ったのは、恋人を殺されたと思つた側が、修羅の様相に変化していったからだ。

地の底から唸り上げるような、あああああ、という気合によつて膨張した筋肉は、男のそれを包み込むプロテクターと服を弾き飛ばした。

ヴァルキリアの誰かが震えて言つた。

「なんてこと……レイやロフウの比じゃない」

彼の放つ闘気が風圧を生み、仰け反る女たちを吹き飛ばした。

その殺意の塊のようなものに揺り動かされた巨漢、ハートが眼を覚ます。

「シン、てめえは殺す……!!」

ケンシロウの赤く充血した双眼が見開かれた。

そこへ腹を押さえながらやってきたハートが間に入ろうとした。

「お待ちなさい、あなたたちは親友ではなかったのですか?!」

「もはや友情などありはしない。殺す……」

「……友だ」

小さい声でそう答え、シンが立ち上がった。

その際の眩きに反応を示したのは、巨漢と吹き飛ばされた女たちだった。激昂中のケンシロウは当然耳にしていない。

修羅になった男は、死ねと声高に言いながら突き入れてきたシンの龍の牙を掌で止めた。

それは突き抜けた時点で筋肉によって止まっていた。

彼の指を握りしめ、ケンシロウは渾身の正拳を突き放つ。

今度はシンがそれを受けるために手をかぎす。

憤怒の拳は相手の掌低を打ち破るように突き進むかと思われたが、金髪の青年はそれを受けきるのではなく、横に流して貫通を避けていた。

それでも北斗神拳はシンの胸部に最初の一撃を叩き込むことに成功していた。

「ゲフッ」

「おおおおおおお」

女王を救ってくれた青年の表情が歪んで、ヴァルキリアたちが悲鳴を上げる。

ケンシロウはぶるぶると震えながら、さらに気合を溜めた後に、目にも止まらぬ十字の型の百裂拳を立て続けに打ち込んだ。

「うおあたたたたたたた!!」

最後の一撃におわったあ、と言いつち、宿敵の体を打ち飛ばした。



弾かれたシンがすさまじい勢いで石柱に叩きつけられた。

めりこんだ長身の、砕かれた肩に触れている柱が粉みじんに吹き飛んだ。鋼の上半身を鬨気で纏った北斗の男は、無表情に戻って傲然と言いつつ。

「……貴様の奥義を破つたのは怒り……執念に勝るおれの怒りだ」

「怒り」

誰の目にもわかる上昇気流の鬨気で広間が震えている。

ケンシロウが崩れ落ちるシンをまとも見下す。

この戦いで彼は、シンの素早い動きを止めるために犠牲にした手のひら以外、まったくの無傷だった。

「南十字星の形に秘孔を突いた。お前の紋章を抱きながら死ぬ」

血に染まった手をかざして北斗神拳伝承者が宣言する。

「一分だ」

背を向けたケンシロウがヴァルキリアたちの阿鼻叫喚の反応に眉一つ動かさず、その場を後にしようとした。

ハートが口から血を流しながら待ちなさい、と追いかける。

「奴の登場で死にかかった命を捨てることはない。やめておけ」

開いたままの扉の向こうに出ていこうとしたときである。

ケンシロウが女たちの驚倒せんばかりの声を聞いて振り返った。

## 二十五話 南斗乱れるとき

ケンシロウは目を見開いて仇敵を見つめていた。

秘孔を突いて絶命するはずの男が立ち上がった。

こちらに向かつて手招きするように手の甲を見せつけている。

そこに広がった十字の傷に違和感を感じながら、彼は動揺を隠せずに構え直した。

金髪の青年がよろめきながら告げた。

「……致命の突きは外してある……お前の怒りとやらがどれほどのものか、読み違えたことで不覚を取ったものの……俺はまだこうして生きている」

黒髪の男は衝撃から立ち直れないまま、呆然とシンを眺めていた。

ユリアを奪われたあの日。

そこから数々の修羅場を潜り抜け、死線を制し、南斗六聖拳であるジユガイすら撃破してこの戦いに挑んだのだ。

シンに対する見切りは北斗神拳伝承者の名に懸けて発動させたはずだった。

「なぜ」

手の甲に十字の傷を持つ青年は、胸に七つの傷を持つ男の奥義から耐えきった理由を

口にした。

「北斗と南斗は表裏一体。俺はこの意味をようやく悟ったぞ……見切りを備えているのは北斗神拳だけではないことを。わが拳もまた」

「バカな?!」

北斗の男が吠えた。わかるはずもない。

シンの見切りが発動したのは、一度宿敵の奥義を死をもって見たからだ。

だが彼は別の言葉を口にした。

「ケンシロウ。執念に対する怒り……それで俺を上回ったと思っているのか。怒りごと  
きで今の俺の執念を超えられると思っていたのか。怒りに目覚めた程度で、南斗  
極聖拳を見切ったと思っているのか」

ヴアルキリアたちがおおっと歓声を上げた。

レスティエも見た。

両の掌てのひらを上下にし、相手に向ける。

シンのみが構える拳法の型に闘気の迸りほとばしはない。

それに対してケンシロウが闘勁呼法、という型で迎え撃つ。

彼の体から沸き立つ闘気は広間を揺るがすほどすさまじいものだ。

両者は対極だった。

「どつちが勝つと思う?!」

「……どう考えても北斗の男だ。気圧が違いすぎる」

エバの親衛隊たちの悔しそうな声を聞きながら、広間に入ってきたばかりの影の女は、まじろぎもせず己が主人を見つめていた。

気そのものを内に秘めている、とレステイエは思った。

南斗の拳士としての直感だった。

北斗の男の熱気により彼の金髪が揺れている。

その青年が静かに言った。

「目覚めるのは怒りなどではない。お前もラオウ同様、リュウケンには程遠い」

恐れるものはこの世でただ一人。

北斗神拳先代伝承者リュウケンのみ、とシンは公言している。

ユリア強奪の際、ケンシロウを襲撃したときもそう告げていた。

愛に目覚めない北斗神拳など敵ではない。彼は核戦争前、ラオウにすらそう言い放つたのだ。

北斗七死星点。

極限にまで力を溜めて秘孔を突くという剛拳をケンシロウが繰り出す。

初撃を躲かわした金髪の青年が身を沈めて羽ばたいた。

§ § § § §

ユリアが息を切らして階段を駆け上がる。

最上階の開いている扉の向こうに見たのは、数年前に生き別れた最愛の恋人が宙を舞う姿だった。

「ケン!!」

白い手を伸ばし、高い天井にぶつかって落ちていく黒髪の男の名を呼ぶ。

大理石の床に巨大な十字の断裂が入っている。

それが極星の拳の奥義であることを、慈母の星は知っていた。

胸を十字に裂かれた北斗神拳伝承者があまりもの衝撃で受け身も取れず、扉の近くに転がり落ちてくる。

彼女がそれに駆け寄った。

「ケン……い！」

長い黒髪の美女が血だるまの恋人を抱き上げて叫ぶ。

抱き上げられたほうは意識をなくしていたが、人の温もりを感じ、頬に落ちてくる涙で目が覚めたようだ。

号泣寸前の彼女を見上げ、震える声で相手の名を呼ぶ。

「ユ…………ユリア…………生きていた…………のか」

「ええ、ええケン…………」

涙をぬぐった象徴が、やってくる金髪の青年を睨みつけた。

必死の形相でケンシロウをかばいながら叫ぶ。

「貴方は……………またしても彼を……………」

「ユリア。どけ」

「どきません」

この恐るべき男は北斗神拳伝承者を二度も破りながら、深淵なる瞳の色はいつもと変わらぬ動じない。

ユリアは思わず大きく息を飲んだ。

北斗の男が南斗の女を優しく押しつけて起き上がる。

しかし再び胸から血を噴き出し、膝を折って倒れこんだ。

そんな恋人を抱きしめながら、彼女は周囲を窺った。

垣間見た技の凄まじさを肌で感じつつ、糾弾するように言った。

「南斗化血十字葬……………極星拳の必殺奥義。本気でケンを殺そうとした」

「……………だが彼は生きています。必殺ならば、この伝承者は今頃十字に切り刻まれて死ん

でいた」

レステイエが冷や汗をぬぐいながら、ケンシロウを眺めて呟く。  
ゆつくりと近づいてくる南斗の光明も無傷ではない。

同じように十字の打撃を受けたあとが胸部にあり、左肩は砕かれているようだった。  
金髪の青年の靴音が止まる。

静かな双眼で自分を見下ろす宿敵に向かい、黒髪の男が声を振り絞るように尋ねた。  
「なぜ……なぜだ?! ユリアを殺したと嘘を」

「……」

「おれの怒りを誘うためか……おれのユリアに対する執念を見ようと」

言い終える前にケンシロウが吐血した。ユリアが手にした布で血をぬぐっている。

見下す側は黙って二人を見守っていた。

そこへ用心棒の生き残りが足を引きずってシンに歩み寄り、頭を下げて語りかけた。  
「助けていただいたようですね……金髪の小ぞ……いや紳士」

仲間の仇討ちのために満身創痍になった巨漢へ、青年は目を向けた。

「ハートか、傷だらけのようだな。レステイエ」

「はい。ヴァルキリアに医務室にでも連れて行ってもらいます」

「いいものを見させてもらいましたよ。内に秘めた闘気で……あふれる闘気のあの男を



制するとは……感服いたしました。あなたのような強い男がこの世にいようとは」

ほれ行くよデブ、という女たちと、なんですつてえ、とすぐむ脂肪の塊が扉の向こうへと消えていった。

シンが膝をつく宿敵を再び見下ろす。

「ケンシロウ、お前は強くなつた。だがまだ北斗神拳の神髄を会得するには至っていない」

「……」

「恐怖の暴狂星と南斗の聖帝。それがひとりの女を奪うために、世界を揺るがせようとしている。怒りなどで己を滾たぎらせることしかできぬお前では、あの兩名からユリアを守り切ることはできない」

「貴様なら……それができるといふのか?! ユリアを守り通すことができるのは自分だけだ。ゆえにユリアは渡さぬと!」

歯を食いしばり、血を流しながら今度こそケンシロウは立ち上がった。

彼の身を案じる恋人を後ろに下がらせた七つの傷の男が、再び気合を入れ直して構えなおす。

死を覚悟した後姿に、象徴がやめると叫ぶ。

手の甲に十字の傷を持つ青年が、天をも破るとも言われた秘奥義の名を口にす。

「天破の構え」

「これはわかつていても避けきれぬものではない。連動する次の技は見たことがあるまい」

レスティエが象徴を抑え込む。抑え込みながら身震いを抑えきれなかった

極小の範囲に極大の闘気を浮かび上がらせる北斗の男に、恐怖を覚えたようだ。

だがシンは躊躇せず宿敵に向かっていく。

迎え撃つケンシロウが発動の絶好の間合いを逃さず、今だとばかりに闘気を放出した。

「極星墜ちるべしー！」

「シン様っ」

影の女が悲鳴を放つ。周辺の大理石の床にひびが入った。

砂塵のようなものが宙に舞う。

触れずして秘孔を突く、という闘気の指弾とシンの貫手が激突した。

凄まじい風圧が巻き起こった。余波からか、轟音を立てて石柱が崩れ落ちる。

「な、何が起こったか見えない……」

風と砂埃にまみれる渦中の二人を、ヴァルキリアたちが手をかざして眺めている。

ただ何かを打ち抜いたかのような音、その際の黄金の光を誰もが見た。

「……あれは」

呆然とするレステイエと同じように、長く美しい黒髪の美女がもやが晴れてきた光景を見つめて青ざめている。

何かを確認したヴァルキリアたちが、うおおおと雄叫びを上げていた。

渦中の男たちの姿がはつきりと見える。

北斗の鬪気の残滓ざんしが金髪を逆立てている。

シンの両頬に、両手両肩両足に、抉えぐるように駆け抜けたような傷がついていた。

だがそんな衝撃も彼の一点突破を揺るがすことはできなかつた。

北斗神拳の秘奥義、天破活殺の芯を完膚なきまでに撃ち抜いた彼が、その伝承者の胸に龍の牙を突き立てている。

「指突のみで鬪気ごうきごとケンを撃ち抜いた……い！ あれが……南斗極聖拳きよくせいけん」

かの極意を改めて思い知ったユリアが真っ青になりながら、唇を震わせて呟く。  
レステイエも頷いた。

二人は先ほど退出した巨漢の言葉を思い出す。

内に秘めた気合で外へ放つ相手の気合を制する。

それを成し得た側は微動だにしなかつた。

制されたほうの短い黒髪がガクリとうなだれた。

「ケン!!」

ようやく我に返ったのか、北斗神拳伝承者の名を呼ぶ彼女の絶叫が広間一帯に響き渡る。

ケンシロウが気力をなくして膝をついた。

レスティエの制止を振り切り、慈母の星が二人の間に飛び込んでいく。

ユリアの視界は涙で揺らいでいる。

自分でも何を言ってるのかわからない悲鳴を上げていた彼女が、何かに気づいた。

恋人の胸に突き立てた復古の拳の指突が、第一関節までだと悟ったのだ。

龍の牙を抜いた金髪の青年が一步後退する。

ケンシロウの無事を確認した南斗の象徴がいつぶりか、旅の連れをまともに見上げた。

「……」

幼き日より見慣れていた彼のまなざしがそこにはあった。

この人は何ひとつ変わっていない。

ここに至って今更ながらユリアは悟った。そして問い詰めようとした口を閉じた。

俯いていた男が低く唸るように叫ぶ。

「北斗神拳の……秘奥義が……ただの指突に敗れた。なぜ途中で……貫手を止めた?!」

なぜだ、と震える北斗の男を南斗の女が抱きしめる。

ケンシロウは口から流れる血をぬぐおうともせず、齒を食いしばって手加減という屈辱に耐えていた。

「ケン……」

彼の横顔は蒼白だった。自分も同じような表情なのだろう。

ユリアがそう思いながら目を閉じたものの、気配を感じてふと瞼を開けた。

いつの間にか近くにあったレステイエが、静かに口を開いた。

「わかる気がします。わたしののような未熟者でさえも……なんとなくわかったような気がします……」

ケンシロウとユリアが部外者のような女性拳士を見た。

青白い頭巾を被った彼女は両手を胸の前に合わせ、指が白くなるまで握りしめていた。

「ケンシロウ様の拳は殺意と怒りにまみれていた。でもシン様のそれは違う」

言葉を切った影の女が、相思相愛の二人から主へと視線を移す。

「……執念の拳ではあるのでしょうか。でもそれはユリア様だけに向けられたものではない……お二人に向けられる想いだとようやくわかりました。そんな拳だからこそ、独りで挑んだ貴方を破ったのです。ケンシロウ様」

「……」

外からの風が広間を吹き抜ける。

表裏一体の斗の男女は、無関係の女に何がわかる、と抗弁しなかつた。

静かに佇む金髪の青年を見つめるレスティエの瞳に、いつしか涙が浮かんでいた。

「幼少の頃より守つてきたユリア様の信頼を自ら壊し、不信と憎しみを受ける……そんなシン様の姿をわたしはずっと見てきました……不器用なお人です。自己満足と言われても仕方のない行動だったかもしれない。でも未だにケンシロウ様を友と呼び、ユリア様を守るべき人と定めて揺るがないこのお方の想い、秘めた心は誰にも砕くことにはできません。天をも衝く剛拳も、天空を翔ける鳳おわとりでさえ」

レスティエの大粒の雫が頬を伝う。

その姿に、目を赤く腫らしていたユリアが泣くのをやめた。

青白い頭巾をかぶった女が上司の声を聞いた。

「わが主。復古の拳を極めた南斗の光明たるわが主……」

大理石の床に影が下りる。

金髪の青年の近くに膝をついていたのは、目つきの悪い男だ。

死神の異名を持つ韋駄天がご報告を、と告げてきた。

「南十字の旗を掲げた一軍が城塞の外にまで侵攻中。おそらく本隊」

「そうか」

靴音を鳴らしてシンが二人に背を向けた。

さめざめと泣くレスティエの肩に手を置いた後、彼は言った。

「ケンシロウ。決着は預ける」

ユリアに抱きしめられながら、北斗神拳伝承者は己を二度破つた南斗極聖拳伝承者きよくせいけんの背中を見た。

「怒りや覚醒ではないものから解き放たれたとき、そのときが三度目の戦いになるだろう。それまで——」

彼が振り向いた。レスティエと死神が黄金の髪をした青年の横顔を窺った。

「ユリアを……生かせよ」

§ § § § § §

「若……いえ主。ケンシロウと我らが象徴をあのままにしておくべきなのではないでしょうか。貴方にはまだ及ぶべくもないあの男が、慈母の星を守り抜けるとは思えません」

城外へと出たシンの後を追いつながら、死神がそう告げてくる。

それにくレステイエも頷いていた。

彼らの主が言った。

「二度目は急襲のようなもの。だが二度目は真つ向から戦い、そして突き碎いた。あの敗北がケンシロウをさらに強くするだろう。そうなる以上、ユリアも望まぬ男と共にいることはない。生ける者どうし、目覚めるために必要な何かを育む旅はぐむになればよい」

「……何度やつても同じのような気がしますがね」

南斗の旗を掲げる一隊が、荒れた大地の向こうから現われた。

これほどの機動部隊を擁する勢力は、この世でそうはいない。

「来ましたか……御大層なバイクに乗ってますが分相應だ。あのお方にふさわしい派手な登場です」

死神が舌打ちを放ち、軍を率いる頂点の男が、巨大バイクの後部座席から立ち上がるのを見ていた。

鳳凰が舞った。

陽の光を浴びて羽ばたくその姿は、まさしく鳳おわとりだった。

着地した剽悍な男は金髪。対峙する長い髪の青年と同じ色をしている。

白いマントを羽織った南斗の帝王は、仮面のままシンと対峙する。

背後でゆらめく旗の数からして百を超える軍勢を従えていたが、彼が腕を伸ばしただけで、数名を除いたそれらが一斉に後退した。



ベジ、ギジと呼ばれた隠密機動部隊が主の傍に控えるのを見て、死神がさらに舌打ちを放った。

「南斗双斬拳の双子ども……あやつらがアスガルズルの情報を掴んでいたとなれば、全ては聖帝の耳に筒抜けか」

影の女がそれに答える。

「ではユリア様とケンシロウ様のことも」

「おそらく水鳥拳師弟の身内騒動も、その後で主が北斗神拳を再び破ったことも承知だろうよ」

レスティエが上司の言葉で城塞を振り返る。

不意に響いたズズンという地鳴りは爆発音だろう。

アスガルズル内部でなにか騒動が起きたのだと推測できた。

「ケツケケ。わしらの調略に応じた生き残りの不満分子、そやつらが騒ぎ出したようじゃな」

「あの色里には火炎放射の機動隊を潜ませてある。主への添え物としてあの街は頂いたぜ」

トゲトゲの防具を着た双子のモヒカンが、偃月の刃を取り出した。煙が上がつった城塞を見上げて哄笑している。

影の長が城門へと引き返そうとするのを、彼らは飛び上がった。その進路を塞いだ。  
「死神、いかせんぞ」

意気揚々と威嚇する二人を前に、ジョーカーは鼻で笑って告げた。

「うぬらごときすばしこいだけが取り柄の拳法で、この天翔を抑えられると思つているのなら」

「バカめっ」

跳躍した双子はレステイエに目掛けて襲い掛かった。

不意を衝かれた目つきの悪い男が部下のもとへ翔けようとしたとき、何者かの殺気を感じて着地する。

やってきた男の姿を認めて、珍しくも彼がうめいた。

「お前まで来たのか……リゾ」

「主に対する鉄心の忠誠。腕が立ち、影を駆使する韋駄天。聖帝は貴様の排除もお望みだ」

「……やるかね。どうやらわしも死を覚悟せねばならんようだな。南斗善知鳥拳」

鳳凰の紋章を象かたどったつたヘッドバンド、短い黒い髪、黒い髭のダンディな男はジョーカーと同格の拳士だった。

飛来した死神のトランプカードを苦も無くさばき、それを斬り捨てる。

岩をも砕く高速の刃だが、兇戯に等しいと一蹴されていた。

「レスティエー！」

ジョーカーが彼女の危機に思わず叫ぶ。

だが大敵の前に動くことはできなかつた。

門下生として南斗聖拳を奮うことができる女性ながら、百八派のひとつである双斬拳、ベジ、ギジを相手にできるほど強勢ではない。

## 二十六話 天地を穿（うが）つ将星

「女ごときを助けるために余から遠ざかる。ふぬけめ」

仮面のサウザーが天を翔け、門下生を助けるために地を蹴った金髪の青年の前に降り立った。

シンが叫ぶ。

「邪魔だ……！」

「そのほうの存在が、だ」

足を上げた残像を見たときには、彼は吹き飛んでいた。

極星十字拳をまともに受けたのは初めてだった。

以前北斗の分派の争乱においてかの技を遠目に見たとき、さほどに感じなかった重圧を、その凄まじさを今更にして知る。

対戦相手であるソウブがシンの思う以上の豪傑だったのだ。

転がりまわる前に跳ね起きる。

そのときにはすでに、鳳凰の剽悍なる体軀が目の前にあった。

「散れい」

後退と突進という大振りの動き。

だが鳳凰にかかつては、紙一重で避け、大胆に迫るといふフットワークのひとつにつきなかつた。

極星の突き、薙ぎは聖帝の体術でことごとく流されるばかりだ。

逆にサウザーの貫手が極星の頬や体に裂傷を与えていた。

剛柔の均整がとれた、恐るべき仮面の男が告げた。

「北斗神拳伝承者と戦い、破ったそうだな。その際の龍の牙、見事な一点突破だったと聞いている。北斗の秘奥義を力で打ち砕く。まさに余が目指す南斗の戦い方そのものよ」  
「ぐっ」

「いかにして北斗を超えるのか、それが余の命題であった。その手がかりをつかませてもらおうか、南斗極聖拳。きよくせいけんラオウを倒す前にここに来たのは宿命だったのかもしれぬ」

ブワツという空気を薙ぐ音で、シンが大きく後退した。

聖帝の回し蹴りをなんとか防いだものの、その衝撃で痺れたのか、腕の感覚がまるでない。

彼の視線の先の聖帝軍がやつちまえ、とどよめいた。

双子がレスティエの奮戦を退け、今まさに彼女に偃月の刃を突き立てようとしたからだった。

「レ」

シンが彼女に手を伸ばした。

ユリアだけではない。

女は守るものとはぎいておいて、どの口でケンシロウに愛を説くというのか。地上最強の相手に背を見せながら彼は叫んだ。

「あのリュウケンが認めた唯一の南斗の男。その無様を見よ」

「若!!」

鳳凰の羽ばたきが金髪の青年の背中に炸裂しようとしていた。

リゾの拳を受け止めた死神が絶叫する。

ブシユウウと血が沸き上がった。

斬撃を放った当人が、間に入ってきた何者かを斬り捨てる前でその手を止めた。

聖帝は奥義で葬る敵を選ぶ。

彼は宙返りを決め、跳ねて間合いを取っていた。

乱入者は背中を鬨気で裂かれながらもシンを抱き留め、離れた場所に転がった。

獣のような声を上げてのたうち回っている。

「いっ………てえええ!!」

「お前は」

呆然とするシンの問いに、ヘビメタミュージシャンのような風体の大男が、呻きながら答えた。

「……女王を救ったんだってな、いろんな意味で。あれを助けた以上、おれいとしての借りは返さなくちやならねえ……」

長い髪のサングラス野郎が膝をつきながら、助けた青年を見上げる。

口からぺつと血を吐いた大男の名はリマ。

エバの親衛隊である彼のことをシンは思い出した。

「その背中」

「深すぎるけどよ、そのうちほとんど塞がる。こちとら生物兵器なんでね」

獣のような男が牙を剥きながら聖帝を窺う。化け物めとその唇が動いていた。

起き上がったシンに彼は声をかけた。

「待てよ色男。あの美人ちゃんは大ぶん助かる」

レステイエの元へ走り出そうとする恩人をヘビメタ男が止めた。

彼女に襲い掛かった双子が不意に何者かに弾かれるのを、誰もが見た。

トゲトゲ防具のモヒカン二人は、着地しつつも衝撃を流せず後退する。

「へっ、いいところに来やがる」

リマがサングラスをかけ直しながら鼻を鳴らす。

南斗双斬拳の伝承者が女を助け起こす何者かを確認し、この野郎と怒鳴った。リーゼント頭のドジョウ髭。同じ南斗の拳士だった。

「まじかてめえ、よくもわしらの前に姿を見せやがったな！」

「聖帝軍の将軍でありながら野に下りやがった裏切者め……!!」

素肌にもスリーブの革ジャン。黒の長ブーツ。

攻めた格好の男は長い後ろ髪を風に揺らし、やれやれといった体ていで口を開く。

「アスガルズルに忍び込んだネズミを退治しろ。そう女王から仰せつかった」

そう彼が言ったとたん、双子が持つ偃月の双剣が砕け散った。

その拳の冴えを見たことがあるレステイエが、南斗紅雀拳、と呟く。

「ザンよお、恰好つけやがってヒゲ野郎」

リマの悪態に、キザな同僚が肩をすくませて返答した。

「おれは帝王の斬撃を受けて回復できるような超人ではないのだよ。適材適所だ」

「いけ好かないナル男め。さっさとハエを駆除しやがれ！」

「ハエだと?! このゴリラが」

「獣人め死にてえのか！」

虫扱いされた双子が新たな双剣を取り出し、跳躍した。

上空からリマに迫る。



しかし彼らは、自分たちより上空へと舞う男の姿を確認した。

追撃者を打ち落とそうと、ベジ、ギジの二人がザンを間に挟んで刃を繰り出す。斬ったと思つたそれは幻影だった。

そう理解したとき、双子は互いの瞳の中で孔雀の羽が広げられるのを見た。

「南斗紅雀拳、啄殺乱破」

無数の両の手が滞空中の双子を突き抜いた。

ハチの巣にされたベジ、ギジが鋼鉄製の双剣を持ったまま、その武器が根元から折れていることに気づかず絶命し、落下していく。

飛燕の体裁きで着地した男の動きは、外見に見合わぬ華麗なものだった。

かつて鳳凰配下の勇将として知られた男の凄まじい拳さばき、その健在を見た聖帝軍が恐れおののいて後退していく。

南斗善知鳥拳うとうけんの伝承者が味方の失態に色を成し、十六翼将の同僚に殺気を向ける。

「ザン、貴様」

「そう怖い顔をするなリゾ。主命だ仕方がない」

「よそ見している場合か」

死神がリゾの背中へ斬りかかる。

なんとか避けきつたものの、仕事は終わった、とばかりに城塞へと去っていくザンの

後姿を、齒噛みしながら眺めていた。

「奴は城の内乱を鎮めに戻った。おれいはいあんたとあの化け物の戦いを見届けよと女王から命じられている」

リマが傷ついた背中を気にしながら、レスティエを守るために移動した。

彼女の安全を確認した金髪の青年が、空を見上げて佇む南斗最強の男と今度こそ対峙した。

その聖帝が低く呟いた。

「ザン。余が目をかけた天才だったが……覇権を握ったあとでまた招聘するでしょう」

一歩踏みしめた鳳凰が余興は終わりだとばかりに仮面を外し、闘気全開で立ち向かってくる。

帝王に構えはいらぬという無言の圧で、リマやレスティエ、リゾや死神までもが身の危険を感じて大きく引き下がった。

ヘビメタ男が我知らず呻く。

「ものすごい暴風じゃねえか。あのロフウでさえ、あそこまでやべえ威圧は出せねえ」

「ロフウ……あの程度のご老人と一緒にしてはもらうまい」

先代に一応の敬意を表するのは、ロフウが彼の師オウガイと親交があったからだろう。

レイと死闘を演じた水鳥拳先代伝承者でさえ歯牙にもかけぬ物言いに、どんだけ強えんだあいつ、とリマが毒づく。

「おい勝てるのか色男。あの野郎、禍々しすぎて尋常じゃねえぞ……噂に聞く拳王とやらが戦いを避けるほどの怪物なんだろ」

「さあな」

「胸に七つの傷の男と戦つて受けた傷もある。あんたの勝機がほとんど見当たらねえんだが」

長い金髪を風に靡かせた青年の背中には、一切の躊躇も怯みもない。

それを見守りながらリマが呟いた。

「あのエバが……あの死にたがりか光明の行く末が見たいと……生きる希望を与えてくれた存在だつて言つてたぜ……見せてもらうしかねえだろ。女王が言うあんたの執念とやらを」

§ § § § § § § §  
リゾとジョーカーが戦いを止めた。

彼らの頂点に立つ男たちの死合いの始まりに、それどころではなくなつたようだ。

気が付けば若いほうが地に叩きつけられていた。

鳳凰の動きをようやく理解したのか、南斗の二人が最強の男の拳技を解説した。

「南斗鳳凰拳、武帝衝破……」

「闘気だけで金髪ぶていしよはの若僧を撃墜する、帝王の誉れたる攻防一体の拳」

死神がうめき、聖帝の側近であるリゾが滅多に見られない主の奥義を見届けて声を震わせている。

北斗の闘気すら撃ち抜いた極星が、鳳凰のそれを仕留め損ねた。

気合の練度はケンシロウの比ではない。

まさしく聖帝の名にふさわしい男だった。

そんな彼を前に、シンは成すすべもなく血反吐を吐いていた。

「立つがよい。極星の拳とやらを余にもっと見せよ」

このままではラオウとの前哨戦にもならぬ、と告げたサウザーは、いつでも振り下ろせる羽を止めて、眼下に倒れる青年を見守っていた。

「北斗との闘いなど言い訳にはさせせん。立ち上がるまで待つてやる」

屈辱以外の何物ではない台詞を聞きながら、シンが身を起こす。

悔る台詞を吐きながらその表情に悔りなどなく、無防備な姿に隙はない。

片方のプロテクターを破壊された金髪の青年が、南斗凄斬爪を撃ち放つ。

黄金と紫の閃光がぶつかり合った。

## 二十七話 落鳳破

鳳凰の形をした紫炎しえんの刃が、振り下ろされる黄金の爪を薙いだ。

広範囲に及ぶ武威は大地を巻き込み、津波のように砂塵を浮かび上がらせていた。

南斗最大級の闘気を備える人物がゆっくりと降り立つ。

居合わせた誰もが惚けたように見つめていた。

乱世においても練武に余念がなかった帝王の一閃。

死神やレスティエ、リマだけではなく、リゾや部下たちさえ初見であった。

鳳凰炎舞刃えんぶじん、という奥義の名を、全ての者が初めて聞いた。

「見事」

真つ向勝負で後方へと薙ぎ飛ばされた青年に向かつて、勝者は偽りない賛辞を贈った。

「見事だ南斗極聖拳きょくせいけん。そのほうの体を両断させるべき余の刃をよくぞ防いだ」

必殺の気合を流し防がれたのにも関わらず、彼は上機嫌で笑っていた。

「凄絶を込めた鳳翼ほうよく。それに対し一矢報いおった。羽一枚をもぎ取ったか」

サウザーが指から流れる血を眺めて口角を上げている。

受けた斬裂によるめきながらも構えを崩さない復古の拳士、その牙が自分に当たればただではすまない、ということを感じたと思われる。

剽悍な男が拳を握りながら独語した。

「フフ……これだ、この感覚だ。神より選ばれし余の肉体を撃ち抜くことができる対等の存在を待っていたのだ。それがラオウだけではなく、赤い衝撃とそのほうであることの喜び。南斗の強勢、これに勝る痛快はない」

斗の枠を超えて帝王足らんとする男。

南斗百八派の崩壊を目論んだと思われる男は、実はどの同門より南十字星を司る拳法に矜持を持っていた。

死神やレスティエ、リゾといった拳士たちはようやく思い知ったのか、声もなくその雄姿を眺めるばかりだった。

南斗聖拳とはサウザー也。なり

世紀末覇者、拳王と呼ばれる北斗の長兄が、鳳凰拳以外を南斗と認めなかったのには理由があつたのだ。

その彼が呼吸を整える。

「ほ、鳳凰拳に構えが」

死神があえぐように言った。リゾすらも初めて見た。

今まで無防備だった司空の位置に印を持つ男が、初めて構えを見せたのだ。

「そのほうに敬意を表し、対等の相手として遇してやろう。将星自ら極星に斬を下す、わが神髓を見るがよい」

燃え盛る紫の鬨気が鳳おおとりを象り、羽ばたいたように見えた。

うおおおという聖帝部隊の歓声のなか、リマが青白い顔でまた毒づいた。

「シンの野郎がようやく指に当てたってだけなのに、あの紫炎しえんの刃を上回る奥義があるってのか?! オーバーキルにも程があるぞあの化け物め」

南斗鳳凰拳、天翔十字鳳。

十字の構えを見せたサウザーの、獅子搏兔ししはくとの気合を見た金髪しんぱんの青年が、我知らず口角を上げた。

見識、風格、その強さに至るまで、前世よりはるかに優れた南斗の頂点がこれほどの覚悟を示しているのだ。

「南斗の拳士としてこれ以上ない果報……主の骨は必ずこの死神が拾って」  
「ジョー様!」

影の長にレスティエが吠えた。敵であるリゾも万感の思いで頷く。

リマがサンングラスをかけ直す。

おれいも死ななくちやなと拳を鳴らし、乱入の構えを見せている。



音もなく鳳凰が舞い上がる。

両の掌てのひらを上下に構えたシンは逆光で目を細めた。

降りかかってくる大仰な動きに、金髪の青年が指突を合わせにかかると。

だがそれは空を切った。逆にシンの背中に断裂が走る。

振り向いて標的を薙ぎ払うも、天空を舞う羽にかすりもしなかった。

髪一本も触れられず、鳳翼ほうよくが天舞するたびに青年の体は血煙に包まれた。

よろけながら膝をついたシンが、瓦礫ビルの上に降り立ったサウザーを見上げる。

十字鳳という奥義は、先ほど見せた二つのそれとは明らかに質が違っていた。

凄絶の構えのなかで聖帝が笑みをこぼす。

「フッフ気付いたか。わが南斗鳳凰拳の神髓が闘気などではないことを」

「気というものは外に放つのではなく……内に秘めるもの」

気付いたのではなく、すでに知っていたかのような相手の台詞に、サウザーが眉を上げた。

「ほう、復古の拳とやらの極意もそうであるか。ならば話は早い」

爆発寸前の紫の闘気はいつの間にか消えている。

だが違和感など何もない。

その気脈はふつつつと、内側で沸き立っているかのようだった。

「気だの結界などというものは曲芸であつて拳法ではない。そのような見戯など余の羽ばたきでいくらでも吹き飛ばせる」

彼が登場してからというもの、北斗神拳は無敵ではないと言われて久しい。

神々しい姿の南斗の頂点が傲然と語り始めた。

「ラオウが戦いを避けていたのは秘孔が通じぬだけではなく、荒ぶるだけの狂気では余を撃つことなどできぬ、と本能で悟つていたからだ。己が肉体のみを駆使した全霊の拳。それこそが余を打ち破ることができる唯一の戦法であることに、あの男はまだ気づいておらんらしい。重畳なことよ」

胸の前で交錯させるサウザーの、腕の残像が見える。

だがそのほうはその境地に至つたようだ、と聖帝が鳳眼を見開いて言った。

それとは逆に、両の手を上下に構え続けるシンは先ほどから目を閉じている。

「おいあんた死ぬ気か。鳳凰を捕らえきれねえからつて、付け焼刃の心眼で奴の芯を射抜けるわけねえだろ！」

我流拳法のヘビメタ男が投げやりに突つ込んだ。

サウザーがリゾや死神を一瞥した後、珍しく見知らぬ相手に関心の目を向けた。

「……南斗の拳士どもではなくがさつな下郎が見抜いたか。この世は広い」

そう呟きながらサウザーがビルから飛び上がった。

虚実の体で聖帝が迫ってくる。

余分な殺気などないそれを目で追えば判断が遅れる、と考えたシンは、薙ぎではない鳳おとりの爪の気配を肌で感じていた。

その爪に対し掌を合わせるように、彼は自分の指と相手の指を絡ませ、天空の標的を捕らえることに成功していた。

周囲がどよめいた。

それでも青年はそのときが来るまで目を開けなかった。

サウザーはもう片方の手で渾身の両斬破を放つ。

その気脈も瞼の裏で見取れる。

体をひねって一刀両断のそれを辛うじて躲かわした。

空振りした聖帝の柔軟な体軀から、捻り上げた蹴りが放たれる。

それはシンの脇腹から肩にかけて裂傷を与えていた。

「主おとりが鳳を捕らえた。だがそのあとだ。何が起こったのか見えん……」

「われらの目ですら追いきれぬか！」

南斗の上位拳士である死神とリゾが、金色と紫の波動を持つ男たちの攻防を見守る。

レスティエや聖帝軍には暴風のなかの影を見ているようで、何が起きているのか理解

解していないようだ。

しかしひとりだけ、獣の感覚で察知した男がいる。  
リマが大声で呼びかけた。

「おいシン逃がすなよおツ！　せつかく奴の片翼を捕捉したんだ、その手は死んでも放すなっ」

「ちっ」

サウザーが舌打ちしたのは珍しい。

天空を舞う羽の機動性を封じられたことで、肉弾戦という真っ向からの打ち合いになった。

「互いに利き腕を封じられたままか。よかろう、帝王は剛の面においても他の南斗を凌ぐと証明してやる」

「そろそろいいんじゃないやねえか、おい！」

さらにリマが激励を送る。

女王エバの命を救った大恩ある青年に、彼は柄にも似合わない激情のセコンドを担おうとしていた。

「目え覚ませや!!　あんたの内に秘めた気合……その溜めに溜めた集中を、いい加減ぶっ放してもいいんじゃないやねえか?!」

「な、に……」

サウザーの鳳眼が今度こそ見開かれた。

野獣の異名を持つサングラスの大男を見る。

ふと視線を移した瞬間、聖帝が無意識に鳥肌を立てた。

「南斗の極意は指突にあり。指突とは基本、ゆえに基本こそ最強。極聖拳きよくせいけんの龍の牙こ

そ、名のある奥義を超える究極奥義……」

ズシン、と大地が揺れる。眩き終えたシンの目が見開かれた。

同時に捕えていた相手の手を無意識に握り潰した。

聖帝と呼ばれる南斗最強の男の指と掌てのひらは、一瞬にして砕かれた。

かつてこれほどの傷を他者から受けたことはない。

サウザーは苦痛より精神的に衝撃を受けたようだが、それでも極星十字拳しゅうじゅうけんの蹴撃しゅうげきで対

応したのは、シンに対する無意識だった。

ゴキヤつという音をたて、金髪おもとりの青年の肋骨が砕かれた。

その感触を得た鳳おとりが、とどめとばかりに無事なほうの腕を引き絞り、天地分断の気合

を込めた鳳凰割絶かつぜつそう爪、という突撃を放つ。

死人がひるむはずもない。

合わせるかのように、黄金の貫手はすでに放たれていた。

それらは交差せず、そのまま激突する。

踏み込む二人の拳士の重圧に耐えられず、地盤が割れ、風圧で砂塵や岩の欠片が舞う。  
「フハハハハ、鳳凰の爪に耐えきるか。だがこのまま押し切って」

聖帝の高笑いは途中で消えた。

肉の割れるいやな音がした。

南斗最強を謳うたわれる男の、強靱な手甲にヒビが入った。

それが徐々に裂けていく。

かの者の手に南斗の証が刻まれていたのを、サウザーはこのとき初めて知った。

「その甲の傷……南十字星?!」

「振り抜けえええ!!」

リマの大音声が聖帝の驚愕の声を消し去った。

サウザーの目には全てがスローに見えた。

それはいつものことであつた。

だが碎かれる側として身を置いた覚えはない。

どうすることもできない立場になつたのは記憶にない。

わが肉体の反応が遅すぎる。

苛立ちとともに舞う鮮血のなか、紫の爪を突破してやってきた黄金の牙が、己の不死

身の肉体突き立てようとするのを、呆然として見下していた。

破壊された指先から抑えきれなくなった鳳凰の鬨気が噴出する。

この期に及んでは是非もない。それを駆使するしかなかった。

突き立てようとする牙を鬨気の斬撃で阻み、宙を舞いながら退いて、ようやく極星の拘束から逃れることに成功していた。

「クツ、クツが。あの状態から抜け出しやがった……また飛ばれちやかなわねえ……！」  
猛獣が口惜しいとばかりに、かああと叫ぶ。

南斗の拳士たちはすでに声もなく、息をするのも忘れて鳳凰拳と極聖拳きよくせいけんの死合いを見つめていた。

「みつ見ろ。サウザー様の手から極大の鬨気が溢れている。すでに気力をなくした金髪の男があの迸りほとばしに抗う術はなさそうぞ」

聖帝軍がやったとばかりに歓喜の声を上げている。

双方とも出血していたが、体中にそれがある青年と、両手にしか傷がない剽悍な男との差は明らかだった。

無防備に歩いて間合いをを詰めてくるサウザーの形相は、修羅そのものだ。

迎え撃つシンはあと一步で相手の体を貫きかけたにもかかわらず、その機会を失つても平然としているように見えた。

修羅の男が問いかけた。

「余を撃ち損ねた……それでも自若は変わらぬか。お前は一体「すでに守るべき者は託した。であれば」

シンが三度構え直した。風が荒地を吹き抜けた。

「俺は刺し違えても将星を仕留めるのみ」

サウザーの闊歩が止まる。

しばらく対峙していた彼が、不意に声を出して笑い始めた。

「ふっ……フッフフ死人の拳か。わかっではいたが、こうして目にするとなんとも小気味よい男よ。だが殉星たるお前がその囚われから解き放たれた今、何をもって死兵と化するのか……」

「貴方ゆえに死兵となれるのだ、聖帝サウザー」

「……なに」

捨て子だったらしい赤ん坊が育てられ、南斗の門下生となったあの日。

個人的には少年の姿で目覚めたあの日。

それから遙か高みを見上げてきた。

偉大なる南斗の帝王サウザー。

その目指すべき男と最後に戦えるのは武門の誇りであり、南斗の拳士においては誉れといってもよい。



「恐るべきはリユウケンなり。されど敬愛するは北斗の長兄すら憚る南斗の頂上拳」  
 今度は風の音ではない。

南斗極きよくせい聖の拳の構えから発せられる秘めた闘気の音だ。

「貴方を見上げるすべての南斗は、屈折する想いを抱く者はあれど、頂くに足らんとする者は誰ひとりとしていない。聖帝の名にふさわしい、南斗最強の男」

サウザーは見た。

大聖殿で、または道場で、視界の端に映っていた金髪の小僧の姿がここにはある。

大導師でさえ道を開ける己が颯爽とした姿を見つめてきた、あの少年の姿だ。

彼は心の底から笑っていた。

「フッフ小僧……金髪の小僧。あの慈母の星より余を選んだか。この聖帝を道連れに選んだか」

常に満たされぬ憤懣ふんまんを内に込めて生きてきた男。

その彼が偽らない笑みを浮かべていた。

修業時代にオウガイに稽古をつけられ、結果を出したときに撫でられる頭の感触。

過去を思い出したかのように相好を崩したが、それは一瞬で消えていた。

「その意気に応えよう、南斗極きよくせい聖拳のシン。復古の拳を極めた男よ。もはや余に内に込める気力はない。よくぞ両の羽をもぎとった」

サウザーが両手を広げた。

鬪気など曲芸とまで言い切った拳士が、ラオウですら凌駕する鳳凰の形を成した曲芸をもつて自身の体を浮かせ、そのまま滞空していた。

「南斗鳳凰拳伝承奥義、落鳳破らくほうは」

## 二十八話 極星の腕のなか

鳳凰を象かたどった衝撃が大地を穿うがつ。

それが羽を広げた際、かの地中にめり込んでいたオーラは地盤を割いた。

飛び上がる鳳おとりとともに岩石の破片が浮き上がった。

その過程で、聖帝軍が巻き添えになった。

死神がレスティエを担いで遥か後方へと必死に翔ける。

リゾが己が持つ体術を全て駆使して跳躍し、闘気に巻かれながらもなんとか爆風から逃げ切った。

ソニックブームを思わせる効果音を残し、派手な紫色の気合が地平線へ向かって消えていく。

野獣の震えた声とその惨状を語る。

「この荒地一帯が壊滅しやがった……なんてでけえ爆発だ……砲弾どころか戦略兵器並みじゃねえか」

彼も殺傷範囲から逃げる際に、上半身の服や防具が消し飛んでいた。

そんな生物兵器の男がひび割れたサングラスをかけ直しながら、改めて周囲を窺う。

舞い上がった物質が雨あられと荒野に落ちていく。

聖帝軍だったものの、廃墟ビルの資材、抉られた地盤も含んでいる。

紫炎を放出しきった男がゆっくりと地上に降り立つ。

彼は大きく息をついていた。

これほどまでに巨大な気合を、かつて消費したことはなかったようだ。

精神的な疲れもあつただろう。

視線を落としていたがゆえに、その先にある存在に気が付くのが遅れた。

「あ、あの極大の瞬激しゅんげきを……凌ぎしの切りやがった、あの野郎オツツ！」

ほんのわずかな隙だった。

リマの驚愕の叫びでサウザーが我に返る。

握りつぶされた片手、龍の牙で突破された片手、両の手は機能的に死んでいる。

血とともに湧き出るのは紫色の鬨気であり、実体はない。

その左右の翼で迫りくる標的の急所を、寸分たがわずに薙いだ。

……つもりだった。

「?!……聖帝の羽ばたきが黄金の牙に」

「突き消された……!」

逃げのびた死神とリゾが、爆風に仰け反りながらもそれを窺う。

サウザーの闘気が実の拳によって霧散、消滅するのを見た。

レステイエが震えながら立ち上がる。

主が今一度、弓を引き絞るようにして貫手を後ろに下げている。

それを確認した彼女が、かすれた声で告げた。

「……今度こそ届きます。復古の拳の一点突破が」

天翔十字鳳の構えを成すサウザーの、そのがら空きの胸へ、五本の牙が食い込んだ。

世紀末覇者ですら撃滅できない、と謳うたわれた不死の肉体に侵入を果たしたそれが、骨を砕き肉を破っていく。

ボツ、という鈍い音とともに、牙は背中まで突き抜けた。

溢れ出た血が舞い、虹のような弧を描いて地上に降り注いだ。

落鳳破の巻き添えになった聖帝の部隊はすでに壊滅している。

生き残ったのは三人の拳士と一人の生物兵器。

その誰もが歴史的瞬間の一場面を呆然と見つめていた。

「し、信じられん……サウザー様を……あの南斗の帝王を貫ける人間がこの世に……存在しようとは……！」

「基本の型で全てを撃ち砕く……あれが南斗極きよくせいけん聖拳」

リゾと死神が腰を抜かした状態のまま、鳳凰の返り血に染まる金髪きんぱつの持ち主を眺めて

いる。

龍の牙を引き抜いた青年が、膝をついて前屈みになる南斗最強の男を見守っていた。「ふっ、フツ……最後の最後で……曲芸などに頼らざるを得なかった余の不明……」

血だまりの大地を見下ろして聖帝が苦笑する。

彼はそうだ、と自答していた。

「闘気などで余が認めた男を砕くことはできんだ。それが南斗を極めし者の神髓……北斗を破る……唯一の心得」

サウザーが吐血しながら言った。

「その心得で北斗でさえ通じぬ余の肉体を貫き通した……まさに執念」

「執念だけではない」

シンは静かに返答した。

南斗の人間ならば鳳おわとりを見上げるのは当たり前のことだ。

誰もが頂点を目指す。

彼はそれを実行したひとりに過ぎなかった。

原動力はサウザーの存在そのものにあつたのだ。

流れる血に染まる唇を動かし、余は敗れたか、と彼は呟いた。

そして頷いていた。

「……笑止。この爽快さが笑止よ。敵<sup>かな</sup>う相手ではなかった。だとすれば泣き叫んで転がりまわり、無念を噛みしめて死んでいく事態なものを」

この晴れやかな気分はなんだ、と自分でも理解し得ない表情のまま、サウザーが面を上げた。

「後進に望みを託す、か……くだらん。余がそのような世迷言を口にする事になろうとは……北斗を凌駕するという南斗開闢以来の宿願を……金髪の小僧に任せる事になろうとは」

聖帝ががくりとうなだれる。彼の忠臣が思わず叫ぶように声をかけた。

「サウザー様……!!」

「リゾ」

駆け寄ろうとした配下の將軍の名を告げたことで、南斗善知鳥拳<sup>うとうけん</sup>の伝承者は直立不動で礼を示した。

帝王による発信は、誰の耳にも聞こえないレベルの声であろうと、彼らは反応するようだ。

「はっ」

「これより余の仇討はまかりならん。麾下の南斗九龍衆の者どもにも伝えておけ。世紀末覇者という大敵がいる以上、同士討ちはまかりならん」

「……ですが」

「本来は余を討つべき同門は赤い衝撃の役目であった。あの赤毛め、先を越されたと気付けば……己が失態で途方に暮れるだろう」

だが名門の御曹司については問題ない、とサウザーは告げる。

「その代わりラオウが動けば当ててやれ。あれのことだ、贖罪として覇者を名乗る男すら恐れさせるほどの働きを見せるはずだ」

「……つまり妖星とこの若僧の邪魔はするなと」

「あくまで拳王を倒すまでの話だ。そのあとは個々の好きにしろ……」

膝をついていた聖帝がゆっくりと大地に倒れ行く。

リゾが慌ててそれを止めようとしたものの、主の体を支えたのは金髪の青年だった。

どちらが死にゆく者かわからないほどの傷を、シンも負っている。

その彼が南斗の頂点の名を呼んだ。

「サウザー」

「極星の腕のなかで死ぬ、か……余は運がいいのか悪いのか」

「待って、待ってくだされサウザー様。われらを置いて」

涙と鼻水まみれのリゾが手を伸ばして二人の元へやってくる。

年季の入った小僧がここにもいたか、と鳳凰はクセである口角を上げている。



彼の青ざめた顔は若き日の己に等しい。

オウガイと知らずに倒してしまったあの日……

雷雨のなかでいかないで、と絶叫しながら泣きわめいていた自分の姿を見ているようだった。

「お師さん……そばに」

§ サウザーが目を閉じた。

§

§

§

§ 「将星が墮おちました」

「……そうか」

アスガルズルにある城館の一室で、瞑想していた女が顔を上げて告げた。

ベッドに横たわっていた黒い髪の男が、相手の様子を見て上半身を起こす。

彼女は目を開けて断言した。

「彼はサウザーを……北斗の長兄すらはばか憚る存在を真つ向から撃ち破つたようです」

それを聞いたケンシロウが俯いた。

両の手を握り、小さく震えていた。

「ケン？」

「このオレと戦った後だ。それでも尚、南斗最強の男を倒してしまつた……奴の執念……いや」

重症の北斗神拳伝承者が傷の痛みに耐えながら恋人を見つめ、虚空を見上げた。

ユリアへの愛、だがそれだけではないような気がする、と彼は思った。

「オレとあいつの差は……今どれくらいある。どれだけ死線をくぐれば奴に届く……」  
「おそらく彼ならば……」こう言うでしょう」

南斗の象徴が優しく微笑んだ。

「そう思っているうちは強くはなれない」

「……」

ユリアが近くの窓から空を見た。

彼のことをわかつていないのは自分も同じだ。

幼き日から彼の何を見てきたのか。

あの執念の男が、今まで自分という女のために、それ以外の行動を起こしたことがあつただろうか。

ケンが胸に七つの傷をつけられ、荒野に捨てられたあの日。

それさえも意味があつた。

今の恋人を見てそう確信した。

考えることを拒否していた彼女が自身の首を払うかのように、吹っ切れたかのように笑顔を見せていた。

「あの人は最初から、出会った時から何も変わっていない。気付くのが遅すぎました。そう、あの人は私の愛など望んでいない。そんなことは微塵も考えてはいないと」

「……何故だ」

ケンシロウの疑問はもつともなことだ。

ユリアでさえもそれがどうしてなのか、具体的には理解していない。

ただ漠然とした感覚があるだけだ。

「あの境地は……生まれ変わったとしか言いようが」

「バカな」

二人の美男美女が見つめあう。

黒い長い髪の方が黒髪の男との距離を詰めた。

## 二十九話 旅立ち

「わが主君の遺命は受け取った。同士討ちはならず。その命をもって若僧、うぬの首は預け置く」

たったひとりの聖帝軍の生き残りが、主の亡骸を抱えてそう告げた。

敵愾心と殺気の凄みで思わずスステイエが息をのむ。

それを向けられた半死半生の青年は死神に助け起こされたばかりで、まともに返答できる状態ではない。

極聖の影たる女の反応に、リゾは泣きはらした目を地平線に向けて吐き捨てた。

「……気などで倒せるならば……主君は百度、こやつを屠ほぶっている」  
空を見上げて彼は眩くように言った。

「聖帝軍の巨大な機構はこれからも生き残る。突出した存在がいなくなった今、幹部の連中がその覇権を求めて内部分裂を起こすかもしれない」

「……貴方はどうなさるのです？」

「わが忠誠心は聖帝サウザー様のみ向けられる。いかに上司とはいえ、九龍衆の將軍たちに仕えるなど、夢にも思わぬ」

野に下るとでも言いたげな髭男の捨て台詞だった。

シンを殺しかねない一瞥をもう一度くれたリゾが、爆滅を免れたバギーへ乗り込み、主君とともに荒野の彼方へと去っていく。

ジョーカーが主の肩をかつぎながら告げた。

「しばらくアスガルズルで静養しましょう。傷がひどい」

「……いや、このままここを後にする」

「シン様！」

死神とシンの会話を聞いて、レスティエが満身創痕の青年の言葉に血相を変えた。

「俺がそばにいること自体、ユリアを傷つける」

「……」

「であればこの拳、ユリアが望む世界を創るために奮うのみ」

死神がその言葉を聞いて頷いた。レスティエは言葉を紡つむいだ。

「ケンシロウ様にあの方を託して終わり、ではないのですね」

風で血塗られた金髪が靡いた。

乾いた風に吹かれ、復古の拳の伝承者は影の助けを借りて歩き進んでいく。

青白い頭巾の女拳士が万感の思いでその背に向かって呟いた。

「悲しい人……なんて悲しい宿命なのか……」

それでも、と彼女は思った。抑えきれずに声に出した。

「わたくしにはわかります……いえ、わたくしでもわかります。あの人かゆえに、南斗極きよくせいけん聖拳はいつか必ず北斗を凌しのぐのでしょう……拳ゆえではない、あの人だからこそ」

§

§

§

§

§ 女王エバはアスガルズルの最上階で、地平線へと向かう三つの人影を眺めていた。

赤褐色の肌、黄金の髪的美女が振り返る。

彼女は忠臣たる男の帰還をヴァルキリアたちと出迎えた。

「世話をかけました、リマ、ザン」

「……やれやれだぜ。あいつらは真正銘、まじもんの化け物だった。ロフウとレイの闘いが兇戯に等しく見えるとはな……まあそれにすら及ばねえてめえの無力に死にたくなるんだが」

その後に続いてやってきた南斗紅雀拳の拳士も、まったくだと肩をすくめている。

二人に頭を下げた女王がテラスのほうへ一歩踏み出した。

「南斗の聖帝が倒れた。これからが本当の乱世になるでしょう。少なくともこの地ではもうあの世紀末覇者の進撃を食い止める存在はいない。彼の独壇場になるはずです」

「でも……まだあいつがいる」

ヴァルキリアの隊長、隻眼のフリーダが口を開いた。

景色を眺めるエバは背を向けたまま頷いている。

「そう。彼は拳王を名乗った暴狂星に対する希望の光。けれどあの光明ならばこう言うはずです」

エバの元に、血のつながらない妹がドレスに着替えてやってきた。

ユウを抱きしめた彼女はその妹と手をつなぎ、テラスに出る。

そして微笑みながら言った。

「俺は救世主の器ではないと」

その断言にリマが腹を抱えた。

傷に響いたのか顔をしかめたものの、大受けしたのか爆笑している。

「言う言う。あの捻ひねくれた野郎なら絶対ほざく。そういう大仰な肩書はケンシロウにさせるってな」

「あれほどの力を持ちながら武名はおろか、たったひとりの女に対しても何も求めない。ある意味あの青年は狂っている」

煙草を取り出したザンが心底呆れたようにぼやいたが、周囲の環境を考えたのか、それを懐にしまい直していた。

エバが南斗の用心棒に首を傾げながら尋ねる。

「貴方ならどうすると?」

「……快樂主義のおれにつまらぬ答えを言わせるつもりですか、女王よ」

キザな男の諧謔かいぎやくに、腕の中のユウの髪をなでながら、エバが白い歯を見せた。

しばらくの時間を経て、やがて救世主の伝説を創るであろう男の訪問を受ける。

終生の連れ合いとともに、数日後には街を出るといふ。

彼の驚異的な傷の回復力に驚愕を覚えながら、エバは北斗神拳伝承者と握手を交わす。

§ § § § § 本当に触れ合いたかった男はすでに地平線の向こうへ消えていた。

§ § § § § 「主。行先は孤島のサザンクロスでしような」

「そう思っていたが……気が変わった」

「なぜ?」

「あの島は五車星を連れたユリアが居城とし、組織的な機能を備える街になる。ケンシロウも傍にいるだろう。俺は邪魔でしかない」



「……ではいいえ」

レスティエが後に続きながら訪ねた。

シンに肩を貸そうとするも、血で汚れるという理由で遠慮されたのだ。

彼女からすれば白頭巾や衣服がそうなるうが身の誉れなのだが、彼は断固として受け付けなかった。

なぜか得意気なジョーカーを横目に、彼は小さく言った。

「しばらくどこかに身を潜め、傷を治す」

「その後は」

「ある人物の消息を追う」

金髪の青年の横顔を死神とレスティエが窺った。

北斗拳拳伝承者にもっとも近いと言われた男。

核戦争の折にユリアとケンシロウを助け、シエルターの外で被爆した聖者。

そう説明された影の長がトキですな、と答える。シンは頷いた。

「人格見識、そして武威。彼ほどそれを均衡させている人物は他にいないでしょう。ですがいかにあの聖人として、病となれば拳王には及ぶべくもありません。今更あのお方になんの用があるのですかな」

「俺ではない。彼に用があるのはユリア」

「……………」

ジョーカーとレスティエが顔を見合わせた。

「トキを探しだしてサザンクロスに送り届ける。あれは医術の仁でもある。今ならまだ……間に合う」

## 三十話

## 南斗二十三派

ブルータウンという街がある。

湖を含めた風光明媚な外観を見下ろせる大城塞だ。

緑や水が豊富なこの地域を支配するのは、赤い衝撃の異名がある南斗六星のひとりだった。

この世紀末となつては得難い資源を持つ要地ながら、ここ近年は他の軍閥の侵攻や謀略の類ですら見る影もない。

実際にその領土を侵したものは全て鶴翼の餌食となつている。

その配下も規律正しく強力で、主人の出陣すら仰ぐ機会すら減つていくという。

死屍累々を晒した敵対勢力は滅亡を恐れて勢力基盤を退転するほどで、そのためにブルータウンの治安は核戦争前の大都市より良好だと名高い。

赤毛の支配者はフェミニストであり、リアリストであり、信念を遂行して余りある力を持つ人物で、そのためかこの街は女子供の駆け込み寺としての側面を持つていた。

国中の美女が集まるアスガルズルより女性の質がよい、とも言われているのだ。

ブルータウンの主が街並みと湖を眼下に眺め、風に吹かれて佇んでいる。

不意に現れた小男が跪いて彼の名を呼んだ。

「ユダ様」

風に靡くマントに手をやり、赤毛の美男子は影に横顔を見せた。

「拳王はまだ居城に戻らぬようです」

「……」

「きやつは聖帝沈むの報を受けて以来、狂ったように領土を拡張しているようで」

隠密部隊の小頭である男はコマクといった。

長旅を終えて帰ってきた中年に水を差しだす侍女は、駆け込み寺に相応しい庇護を受けた女性だった。

タオルを持つもうひとりの女も、同じく美貌の持ち主だ。

見目好いそれを鑑賞しながら水を飲む丸眼鏡の小男が、満足気にグラスをトレーに返した。

「コマク」

「ははあ」

影の名を呼んだのは、主人の一番近くで控える老人だった。

妖星の宿老である南斗焰浄拳えんじょうけんの伝承者だ。

「慈母の星は極星の元にいるのか」

「聖帝崩御で情報が錯綜しておりましてね。しかしあの若僧が生きているということは、聖帝から象徴を守ったと同じ事」

「……ならば拳王はこの機を逃さず追撃に入るであろうな」

「若僧が負傷しているのなら猶更です。野望の品を手に入れるために自ら陣頭に立つはずでや」

「ユダ様」

互いに向かい合って列になり、主人からやや離れた場所で侍立する配下の武将たちがいる。

そのなかで、まだ若い青年が末席から主人の名を呼んだ。

「先ほど姿を見せてすぐ消えた死神……奴の情報は事実だということになります。あれの要請通り将帥を救援に向かわせますか？」

「ゲンジユ」

「おじい様は黙っ」

「小僧」

若気の至りな青年が祖父の叱咤に抗弁しようとしたとき、居並ぶ列の先頭から声が出た。

吹き抜けの大広間の雰囲気が一瞬にして凍り付く。

その者は鷹の嘴のごとききひと房の前髪、その他はオールバックで後ろは長い。

腕を組んでいた赤銅色の髪の男が虚空を見つめながら言った。

「ゲンガン老直系の孫ゆえ許された列席を弁えず、本来は末将にも及ばぬ未熟者がわが紅鶴に意見する不調法……」

鋭利な顔つきに相応しく、鋭い声の持ち主は長身だった。

羽織った斑模様まだらもようのマントを煩わしそうにかき上げながら、末席の青年に一瞥もくれないことなく控えろ、と告げる。

反抗期のような年頃のゲンジュが最前列の彼に敵愾心の目を向けたが、ユダのすぐそばに控えることを許された最長老がたわけつ、と孫を一喝した。

「おのれは誰に不平を述べようとしている?」

「……二十三派筆頭、南斗羽鷹拳はおうけんのイルフォン將軍でしょう」

「その將軍に対し、下士官のそなたが迂闊な口を利こうとするでない。下がりおれ!」  
「……」

祖父に面罵された孫が不承不承に列の末席に戻る。

当然にしてこれはゲンジュを守ろうとしたもので、本人のみが叱責されたと拗ねている様子だった。

「そう目くじらをたてることもあるまい」

あくびを噛み殺そうとする緊張感のない男が、初めて口を開いた。向かい合うように二列で立ち並ぶ彼らのなかでは、筆頭イルフオーンに相對するような位置にいる。

妖星配下において、鷹とともに「双壁」と讃えられる隻眼の男だった。

独眼竜の異名を持つ南斗隼蒼拳じゅんそうけんの伝承者は新参者にかかわらず、わずか数年でこの地位まで上り詰めた百八派きつての勇将である。

「ダガール。よそ者よ」

イルフオーンが目の前に立つ隻眼に視線を移す。

歯牙にもかけなかったゲンジユとは違い、明らかに同格に對する反応だった。

「そのほうは死神と変わらん。信用ならぬ影め」

鷹の両目と隼の片眼が交錯する。

股肱の臣であるイルフオーンが、成り行きで配下になった極斗衆ごくとうしゅうの棟梁に不信の目を向けるのはいつものことだ。

他の幹部たちも見慣れている。

誰も取捨しようとする者はいなかった。

もともと鷹と隼は南斗六星を支える九人の將軍、南斗九龍衆の地位にあり、そのなかでも三傑と呼ばれた武刃者どうしだった。

互いにライバル視し、何かと張り合おうとするのは当然のように思われている。

しかしイルフォーンはともかく、ダガールはそういつた展開に一切興味がないよう  
で、相手の威嚇を無視して主人の背に問いかけた。

「極斗ごくとならいまずぐ動かせませんがね」

「貴様」

眉を上げた鷹が一步踏み出した。

同時に湖を眺めていた男の赤紫のマントから、薄い紫のアームバンドが伸びてきた。

それが主君による制止の声だということを、居並ぶ将帥たちは知っている。

筆頭の將軍が音もなく定位置へと戻った。

独眼竜が一礼しながら自薦の言葉を告げる。

「わが部隊で十分。拙者が拳王の軍を蹴散らして参りましょう」

「きやつらは兵の数も多く、一癖も二癖もある難敵や猛者がひしめいている。わたしも  
ダガール様についてまいります」

黒く長い髪をポニーテールにした女が一步進み出る。

彼女は隻眼の勇将の配下であつたが、現在は影ではなくユダの親衛隊として仕えてい  
る。

名はメイエルといった。



そのかつての配下に、ダガールが問いかける。

「南斗紫蝶拳<sup>しちようけん</sup>。守りばかりで血に飢えたか」

「世紀末覇者が率いる名将たち。それを狩る機会を逃すべきではないかと」

熱のない上司と気負いのない部下の会話が途切れた。

主人がふわりと音を立て振り向いたためだ。

その赤毛の美男子が言った。

「私が出陣する。メイエルはここに留まり、湖の守りに備えよ」

「御曹司！」

「ユダ様!!」

ゲンガン老は思わず傳役<sup>もりやく</sup>が抜けきれぬ言葉を発し、南斗紫蝶拳<sup>しちようけん</sup>の伝承者も我知らず声を荒げて主君の名を呼んだ。

だがブルータウンの主は微笑しながらそれに答えない。

「コマク」

「ははあ。赤兎<sup>せきと</sup>の準備はできておりますぜ」

「仕事が早い」

「この下僕、ユダ様が幼少の頃よりお仕えしておりますれば」

居並ぶ将帥たちに向かってドヤ顔を向けたコマクが、大広間から出ていこうとする主



やぼ用だと告げ、長い間姿を消していた死神が、ようやく顔を出したからだった。

砂埃や擦り傷にまみれていたのは、機動力のある凄腕の男に見合わぬ様相だったが、そのわけを聞いて、配下の影の女は納得していた。

目つきの悪い男が包帯塗れまみの主に告げる。

「カサンドラに侵入するのは骨が折れまして」

「カサンドラ……」

「一度監獄に入れられると脱出不可能と呼ばれる収容所です。まあわしを捕らえることは叶わなかったわけですが」

「自慢ですなジョー様」

「事実だ」

ベッドの横に座った韋駄天が一気に水を飲む。

そして大きく息をつきながらぼやいていた。

「北斗の聖者がそこにいるとつき止めたものの、どの牢獄にいるのかまでは不明で」

「長を倒して吐かせるしか」

「そんな簡単にはいかん。あそこは獄長ウイグルを別格としても、拳法の達人が多い。軍閥を相手にする覚悟が必要だ」

レスティエに答えながら死神がシンを窺う。

「主の回復が追い付いていない。ここであの獄長と闘うのは早計かと」

「それほど強いのですか？ そのウイグルとやらは」

「強い。わしでも相打ちがやつと」

「それほど……」

「あやつはカサンドラの伝説そのものだ。かつてあれを倒したのは拳王のみ」

金髪の青年が身を起こした。

ベッドの背にかけてあつた肌着に手を伸ばす。

影の長が肩をすくめてゐる。

「やはり行きますか」

「ここ最近は何て寝てばかりだ。運動不足を解消する」

「まあ」

レストイエが目を見張る。

北斗のケンシロウといいこの主といい、負傷からの回復は驚異的だった。

それが時代の光明たるべき資質というか才能なのだろうか。

そう思いながら彼女は、立ち上がったシンに上着をかけた。

「あのウイグルが準備運動の相手にしかなりませんか。鳳凰を倒していなければ、わし

でさえ貴方はほら吹きかと錯覚しますよ」

ジョーカーがそう嘆息したが、配下の様子に気付いてどうしたと問いかけた。

耳に手を当てて目を閉じていたレスティエが顔を上げる。

「……この村で何かがあつたようです」

地獄耳の女の報告で、シンがドアノブに手をかける。

拳王侵攻隊か先遣隊か、どちらにしる腕慣らしになるといつた主の背中を、目つきの悪い忠臣がやれやれといった体ていで追いかけた。

§ § § § §

小さい村でさえ標的にする拳王侵攻隊の面々は、急襲後に生き残った人々を広場に集めていた。

拳王様に忠誠を誓わせる、という名目で烙印を押すか、燃えた鉄板の上で黒焦げになるかの二択を迫っている。

すでに数人がその鉄板で亡き者になつていた。

生き残った全ての村人が奴隷になると選択し、長い列をなして待つていたときだつた。

とある少女が引き立てられた。

焼いた鐘のようなものに自ら腕を押し付ける、という烙印の行為を拒否した彼女は、靴下を脱ぎ、自ら燃え盛る鉄板に向かって歩き出したのだ。

侵攻隊の隊長以下、モヒカンたちがどっと沸いた。

「おっおっ、健気なガキだぜ。お手を貸してあげましょうねえ、お嬢ちゃん」  
異相ともいえる巨漢のモヒカンが、少女を掴もうとしてにじり寄る。

初老の村長が助けようとするも、仮面のならず者に殴られて地に転がった。

「り、リン……よすのじゃー！」

「うるせえぞジジイ」

何度も蹴られ、意識が薄くなった村長が、同じように足蹴にされている少年を見る。

リンという少女を守ろうとした彼が再び起き上がった。

「バット」

「くそつたれが、リンに近寄るな！」

「小僧、まだ死んでなかったのか」

仮面の男がバットという少年に掴みかかる。

次の瞬間を予想して、村人たちは一斉に面を背けた。

ひとりだけ眼を逸らさなかった少女が何を見たのか、女神さま、と呟いた。

## 三十一話 天をも砕く拳

近くににいるのも汚らわしい。

そういつた女性の表情だった。

青白い頭巾のその人物は、リンとその近くにいたバットを優しく見守りながら言った。

「小さいながらも貴方たちは戦士。このレスティエ、その思い確かに受け取りました」

「ああ?! なんだあ女あ」

「絞め殺されてえのか!」

大柄なモヒカンが女性の目の前ですごみだし、仮面のならず者が挟み込むように立ちふさがる。

村人たちの悲鳴が響く。

不意に、彼女がモヒカンの顔に手をかざして言った。

「人の皮を被った悪魔め……!」

ごつ男の顔面に、女の白い指がさくつとめり込んだ。

指の数だけ斜めに斬り裂かれたモヒカンが、なにをばら、と意味不明の叫び声をあげ、

血をまき散らして倒れ込む。

周囲がどよめいた。

大仰な椅子に座り込んでいた侵攻隊の長が、あれは、と瞠目しながら腰を上げる。

「南斗聖拳……?!」

「てめえアマあ、ぶつ殺して」

「死ぬのはお前だ下種」

我に返った巨漢の仮面男が見たのは、青白い頭巾の女が舞うように片腕を一閃させた姿だった。

音もなく着地した相手に、ふざけやがってと棍棒を打ち下ろそうとしたものの、息ができなくなつて喉に手をやった。

仮面男がつんざくような悲鳴を放つ。

「ちっ、ちちちち、血いいいい!! 切れてるきれてる切れて……」

喉を裂かれたならず者が絶叫を止めた。

ひびく 跪いて泣きわめく巨漢の脳天に、南斗聖拳の手刀が振り下ろされたからだ。

鉄の仮面が用を成さず、頭の半分がスイカ割りになった標的が静かに倒れ行く。

一瞬にして侵攻隊の二人が斬り殺されたことで、モヒカンたちが引き下がる。

そんな士気の乱れを悟った隊長が一喝した。



「静まれい！ 南斗の使い手とてたった一人の女、押し包んで踏みつぶせ!!」

十数人の大柄な男たちが武器を手に、レスティエを囲む。

リンを抱き寄せた彼女がバットのいるところへ跳躍し、彼も救って両の脇に抱え込んだ。

「すばしい女め、このジジイがどうなっても」

村長を人質に取った一人のモヒカンの背後に、いつの間にか誰かが立っていた。

はつと周囲が気付いたとき、その大男は脳天から股まで唐竹割りにされていた。

村人たちと侵攻隊がそろって驚愕の声を上げる。

そのすさまじい一刀両断を見たならず者たちが、本能から怖気を奮って後ずさる。

「お前は」

侵攻隊長、ガロンが黒い髭をしごきながら、薄緑の髪の毛の乱入者を見て言った。

「死神。鬼の哭く街で捕らえられたはずでは」

「この天翔が囚体のでかい獄長やその他の連中にか？ 笑わせるな。それより侵攻隊の

なかに、カサンドラの獄卒が混ざっていることのほうが驚きだ」

「ほごきおつて。わしの火闘術で黒コゲにしてくれるわ！」

ガロンが立ち上がり、二本の偃月刀を抜き放った。

その侵攻隊の隊長を呼び捨てにし、獄卒の中から進み出た何者かがいる。

「噂に聞いていた韋駄天とはお前か。いいところに出くわせた。ガロン、この敵はおれに譲れ」

「ターゲル」

長めの白髪、額のヘッドバンド。

カサンドラの拳士のなかでも別格の雰囲気を持つ男が、ジョーカーと向かい合った。

「ジョー様」

「レステイエ、子供たちを連れて下がっている」

目つきの悪い上司が部下へそう告げ、強敵に向き直る。

「ターゲル、黒掌十字拳か。ウイグルの右腕が登場とは、探す手間が省けたな。わしが直々に退治してやろう」

「大言を軽々しく口にする、薄っぺらい疫病神め」

腰を落とし、十字に構えた男がトランプを手にする死神と睨みあった。

「わが拳を見たものには死、あるのみ！」

「シッ」

死神が放つトランプのカードは空を切るばかりだった。

それをつかみ取ったターゲルが高らかに笑う。

「ハハハ下らぬ術だ。舐めおって」

南斗の拳と十字拳が交錯した。

双方とも軸足を回転させてまた対峙したが、目つきの悪いほうの男だけに出血があった。

「ほう避けきった。なかなかどうして、やりおるな死神い」

レスティエにはいつ彼が上司を斬ったのかわからない。

それほどの早業だった。

「お前が初めて見る拳法。果たしてどこまで避けきれるかな」

十字に構える相手に本気になった男が、あつという表情でターゲルの背後を見た。

「やめましようや、それはない。ここは黙って手下の活躍を見ているべきです」

「何を世迷言を。背後に注意を向けて隙を作ろうなどと」

「ターゲルよ振り返れ、そして渾身の気合で迎え撃て」

「あ?」

ジョーカーの自分を案ずる形相で、彼は反射的に後ろを向いた。

警戒を込めて構え直しながら、彼が鼻で笑う。

「このターゲルの背後を取れる者などいようはずが」

言いかけた白髪の拳士が押し黙る。

ガロンが火闘術発動のために飲んでいたガソリンのドラム缶を、無意識に落としてい

た。

煙の中から歩み寄ってくる影の方向を見つめる隊長は、顔一面汗まみれになっていた。

侵攻隊の面々が誰だかわからず打ちかかろうとしたとき、死合いに慣れたガロンが大音声で命令した。

「おのれら、下がれい!!」

風に吹かれた金髪が靡いている。

見た目は線の細い美青年にしか見えない男だが、そこから発せられる押し込めた何かは、他のどの強者とも違っていた。

そのことに気づいたのは隊長とターゲルだけだった。

「あいつが……あれが南斗の帝王を貫いた極星の牙」

「おいターゲル」

火闘術の髭男が、僚友の昂<sup>たか</sup>ぶりを戒めようと声をかける。

だが拳士として自負があるウイグルの片腕は、何かに魅せられたように十字の構えのまま、その相手との間合いを詰めていった。

「黒掌十字拳、その金髪首は頂いた!」

ターゲルの技の発動を見てから、その青年が動いた。

高速の相手ほど素早い所作ではない。

だが彼が十字の傷がある手の甲を向け、指突の形に変え、それを引き絞って突き放つと、突進してきたカサンドラの拳士は一瞬にして撃ち砕かれた。

その体は衝撃音や爆風とともに跳ね飛んでいき、粉微塵になりながら、荒野の彼方のつむじ風となって消えていった。

「……」

村人も拳王侵攻隊も獄卒も、呆然と固まって声もない。

信じられない破壊力に、今何が起きているのか理解が追いついていないようだった。

「南斗極聖拳きよくせいけんの一撃、たとえ相手が歴戦の戦士でさえ問答無用ですね……まさに悪即斬」

「あの方と対等に戦っていた聖帝や北斗神拳伝承者が異常なのだ」

主の拳の復活を見た上司と部下が無表情に語り合う。

ようやく状況を呑み込んだ侵攻隊が恐慌状態に陥った。

「村人を盾に取られると面倒だ、レスティエ」

「はい、できるだけ討滅致します」

罪もない人々を奴隷に仕立て上げようとした悪魔どもに容赦はない。

南斗聖拳の前にはゴミクス同然、という言葉通りの一方的な追討戦が始まった。

「あばばあばあ、あ」

死神に腹を斬られたガロンが断末魔を残し、口から吐いた炎に引火して大爆発を起した。

それに巻き込まれた侵攻隊は全て消し飛んだ。

獄卒は幾人か逃げ伸びたようだが、それ以上の追撃をやめた二人が戻ってきた。

村の人たちから謝意を受ける影たちが主を窺う。

金髪の青年はリンとバットの質問攻めにあっていた。

「北斗神拳を知ってるの？　じゃあケンって人の名前は？」

「知り合いなんだろう？　じゃあどこにいるか教えてくれよ」

子供らしい台詞で纏わりつく少年少女の攻勢に、彼が辟易として言った。

カサンドラでの用事がすんだら、病人を連れてここに戻ってくると。

ケンと会えるの？　やったあと早合点に喜ぶ二人に、シンは何も言えずにいた。

それを微笑ましく見守るレスティエとは違い、頭痛の種が増えたばかりの死神が、主に向かつて肩をすくめていた。

「トキをこの村で一旦療養させるのはわかります。ただ、そのあとこの子らを連れてケンシロウがいるサザンクロスへ向かうとなると、色々と手間が」

「……」

「大人だけならともかく、小さき者は色々厄介ですぞ」

「ジョー様！」

部下らしからぬ叱咤の声が村に響く。

その劍幕に死神が肩をすくめている。

二人くらいの子供をどうにかできないで世を救えますか、というのが彼女の言い分である。

ユリアが望む世を創るために拳を奮う、と公言してしまったシンも、これには押し黙るしかない。

天をも砕く拳の持ち主と、影の実力者が女性の意見に唯々諾々と従っている。

リンはその様子を不思議そうに眺めていた。

力こそが正義の世界でももしれえことがあるもんだ、とバットが腹を抱えて笑っていた。

## 三十二話　カサンドラ伝説

カサンドラ。

各地から集められた拳法家、武道家を保護するという名目で建てられた監獄である。

それらの極意書を収拾、管理し、一度収監されると二度と生きて門から出る事は出来ない、と言われる脱出不可能な城塞でもあった。

札付きの極悪人でさえも哭ないて出獄を乞うと呼ばれることから、鬼の哭なく街という異名を持っている。

支配者は獄長ウイグル。

ラオウすらしのぐ巨軀を誇る、泰山流鞭術べんじゆつの使い手だ。

彼が就任して以来、カサンドラ不敗伝説を破ろうとしたものは多々あれど、その安定した基盤を揺るがしたものは誰も存在しなかった。

今では獄門の前に近寄ろうとする軍勢すらいない。

門番である壮士たち、その二人が久しく見ていない来訪者の登場に、思わず仁王の役目を忘れて動いてしまったのは、仕方のないことだった

「そんなところに突っ立ってないで降りてこい」



目つきの悪い薄緑の髪の方が彼らの目の前にやってきた。  
指一本で手招きしている。

連れに女がいることも謹厳な衛士の敵意を誘った。

仁王像のごとき構えの彼らが跳躍した。

上空から死神を急襲する。

標的を挟み込むようにして翔け抜けた際、上司が上半身を反らして何かを避けているのをレステイエは見たが、それが何かまでは確認できなかった。

「これは……」

態勢を整えて振り返ったジョーカーが思わず瞠目する。

両頬に傷が入ったことを今知ったようだ。

「奴ら、何か妙な暗器を持ってやがる。いつの間」

「二神風雷拳。我ら二身一体、寸分たがわぬ感性にして培われた殺人拳」

鉛のような肌の色の衛士たちは、ライガフウガと名乗った。

顎鬚があるかないかでしか判別できない。

そんな双子が傲然と告げた。

「このカサンドラに立ち入ることは許さぬ」

そう言い切った彼らが目を剥いた。

女のほかにもう一人いたはずの、フードを被った男が見当たらないのだ。

「奴はどこに」

「主はどこだ？」

彼らは目つきの悪い男が同じようによそ見していることに気が付き、何の余興だと呟く。

そのとき、女があつという顔をしながら鋼鉄製の城門を指さした。

二人の巨漢が振り返る。

「な、何?！」

固く閉ざされた門にヒビが入った。

ライガフウガが何事か、と取っ手に腕を伸ばす。

金属の割れる重い音が響いて、双子は咄嗟に退いた。

そのすぐあとで、難攻不落の象徴であった大手門が、硬度などないかのように真つ二つに割れた。

「あ、ありえぬ……」

砕け落ちていく破片、同時に門枠も崩落していく。

そんな轟音のなか、城塞の内側からフードを被った男がこちらを向いて、ぼそりと告げた。

「開いたぞ」

「ふっ、ふざけるな貴様!!」

「まさか、まさかこの高さの城壁を一瞬で飛び超えたというのか……?!」

仁王のような男たちが泡を飛ばして吠える。

想定外な方法で城門を破られたことで、血相を変えながら中に引き返していく。

死神やレスティエはいい加減慣れている。

広くなった入り口から堂々と城内に入り込んだ。

「城門を超えればすぐに処刑広場か。改めて見ればさすが鬼の哭<sup>な</sup>く街」

上司の口笛に、生真面目な部下が眉を上げる。

その彼女が広場の奥のほうに鎮座する支配者の姿を認めて、思わず一步後ずさった。

人間において限界かと思わせる上背、それを支える剛体、猛牛を模した兜、白黒まじった口髭に顎髭。

尋常ならざる様相は、一目でカサンドラ伝説を担う存在だとわかる。

その剛毅な支配者が口を開いた。

「ライガフウガともあろうものが……しくじったな。外からではなく内から門を破られようとは」

「まつ待て……!」

「ウイグル、貴様」

処刑広場に引き立てられてくる少年の姿を見て、双子は狼狽しながら駆けようとした。

「止まれい！ 寄らば鷹を放つ」

腰かけた獄長が、肘をつきながら鞭を振る。

その巨漢の肩に止まる猛禽類を見た彼らは、歯ぎしりをしながら立ち止まった。

カサンドラ処刑隊、と呼ばれる獄卒たちが武器を手に、ミツと呼ばれた少年の首に二つの刃を交差させた。

「カサンドラの歴史のなかで、こころも容易く前衛を破られた覚えはない。このわしの伝説を汚す者ども、万死に値する」

「弟に罪はない。拳王の走狗め、虎の威を借りおつて！」

怒髪天を衝くライガフウガの苦し紛れの放言に、ウイグルが口角を上げた。

叛逆の言質を取ったとばかりに鷹に合図を送る。

拘束され、身動きの取れないミツを串刺しにしようと、鷹が飛び上がった。

「や、やめろー！」

少年の兄二人は行く手を阻む何人かの獄卒を鋼線で切断したが、間に合わない。

鷹の嘴が少年の胸を貫こうとしたとき、兄の絶叫が鬼の哭く街に響いた。

ぼとり、と猛禽類の切っ先が落ちた。

少年の胸にぶつかっただけの鷹が、地面に落ちてのたうち回っている。

その広場にいる誰もが、一人の男に視線を集中させていた。

フードを被ったその男が処刑台の少年のもとへ飛び込み、彼を救ってライガフウガの前に着地する。

ミツを殺そうと抜刀していた獄卒たちの首はすでに飛んでいた。

いつ縄をほどいたのか、いつ処刑人を屠ほぶつたのか、あまりもの早業にカサンドラの面々は哑然とするばかりだった。

抱き合う三人の兄弟と、それを見守るフードの男を眺めて固まっている。

「フフフついに現れたか……このウイグルに挑む真の勇者が」  
獄長が立ち上がった。

それだけで広場一体の空気が震えたと思われるほどの重圧だった。

「カサンドラ伝説の生贄となるべきは誉れ。勇者よ、死後は花を手向けてやろうぞ」  
ズシンズシンと大地を踏み鳴らし、フードの男に向かっていく。

その巨漢がふと足を止めた。

レスティエと死神が強制労働者の手と足の枷かせを外し、彼らを救い出しているのを見たためだ。

「小物ども。勝手な真似を」

目にも止まらぬ鞭を死神に放ったが、それは空を切るばかりだった。

「ぬっ」

ここ近年、小手調べの鞭の動きすら見切ったものはいない。

何者だと瘦躯の彼に標的を変えようとしたとき、その男がトランプを取り出して労働者の鎖を断ち切った。

「……トランプのカード。そうか貴様が死神」

「お前の右腕、ターゲルが鎧袖一触で敗れたのを知らんのか。偵察の獄卒どもは主に似たのか無能だな」

「つまりこの勇者が」

ウイグルがフードの男に振り返る。そして豪快に笑った。

「このカサンドラの城壁を飛び越え、内からとはいえ素手で鉄条の門を斬り破る。なるほど只者ではないと思っていたが……フハハこれが南斗聖拳か」

豪快な長の豪快な鬨気が風に舞う。

その気合に押された部下たちが遠巻きになっていく。

「この世紀末における救世主。あの聖帝を突き破った極聖の牙。よくぞこのウイグルの前にあらわれた！」

その台詞を聞いた男は、フードの下で顔をしかめている。

救世主呼ばわりはあの方への暴言にも等しい、と死神は思った。

しかめっ面の青年が、近くにある墓穴に目を止めた。

それが自分のものだど獄卒から嘲笑まじりに伝えられたとき、フードが薙ぎられて細切れとなった。

「泰山流双条鞭そうじょうべん」

切り裂かれたそこから金髪が靡く。

大多数のカサンドラの住人から見れば、彼の風貌は線に細く、武威を示す外觀もなく、鬪気もないように思われた。

「これはこれは……南斗の帝王を倒した男がこのような懦弱な見た目をしていようとは」

美男子じゃね、と呟いた獄卒が獄長のひと睨みで人垣のなかに消えていった。

「男はこのウイグルのように剛健であるべし。男子に脆弱な要素はいらぬ。武骨の相こそがよい面構えというものだ」

「……たしかにお前はいい顔をしている」

金髪の青年がとくに何の煽りもなくそう言い放った。

事実、彼は嘘偽りなくウイグルの容貌を褒めていた。

「お人が悪い。主ほどのいい男からそう言われて真に受ける者などおらん」  
「がははははー！」

本気にした巨漢がそうであろう、と何度も頷くのを見て、死神がぶつと吹いた。

「あの野郎……額面通りに受けやがった」

「ジョー様。腹芸などできない不器用なお方が褒めるときは、その質感が相手に伝わるものです。獄長へのよい手向けとなつたでしょう」

「……ときどきお前の辛辣さに身が震える」

上司と部下の軽口の間、戦闘はより激しくなっていた。

二つの鞭が乱れ飛ぶ。

ライガフウガの目ですら追うことができない速さのそれが地面を抉り、遮蔽物の岩や石などを砕いて、シンの身に迫りつつあった。

「千切れとべ、若僧」

そう言い放ったウイグルが双腕を振りかぶる。

だが不意に彼の目の前に飛んできた何か、その顔面をしたたかに打った。

思わずのけ反った巨体が荒地を抉る。マントが翻った。

「( )……………( )れは?!!」

自分の鞭が結び付けられ、打ち返されたことを知ったウイグルがしばしの沈黙の後、



顔を真っ赤にしてそれを手で引きちぎった。

「むははは、やるではないか！ わしの小手調べを手玉に取った男は初めてじゃ」

猛牛の形の兜、その二本の角に手をかけた豪快なる人物が、一気に角を引き抜いた。

それは二本どころか幾重にも重なった多数の双鞭だった。

「この千条の鞭……目で追いつけるかな、勇者よ」

いかん、とライガフウガが加勢に加わろうとするも、解放作業で忙しい死神とレス・ティエに止められて振り向いた。

「あの男はお前たちの仲間ではないのか！」

「どころか主です」

部下の女が答える。双子は顔を見合わせた。

「どういふことか？」

「いいから黙って見ている。泰山流ごときに極星の牙が一本でも折られようものなら、わしがこのトランプで腹を切る」

「……余興ではないのだぞ、死神」

「余興だ。こんなものは皇帝との死闘を見たあとでは兇戯にも及ばん」

ライガフウガはしばらく呆然としていたが、影の男が影の女に「ここは任せる、と告げながら施設内に入ろうとするのを見て、その背中に声をかけた。

「待て、よそ者がカサンドラの迷路に入り込めば二度と出られんぞ」

「仁王たちよ、わしを誰だと思ってる」

「……韋駄天か」

「この騒動の隙をつくのは今だ」

泰山流千条鞭せんじょうべん、という名の無数のそれで全身を絡めとられたシンを見ても、死神は平然と飛び上がった。

二階にある窓の中へと姿を消した上司をよそに、レステイエは巨漢の突進をまともに受けた主が、鞭を引きちぎりながら弾き飛ばされるのを眺めていた。

「まずい、あれは蒙古覇極道!!」

「ウイグル必殺の体当たり……あれを受けて人間の形を保っている者は今まで誰もいなかった。あの極星とやらも肉塊に」

双子の断定に彼女はかぶりをふった。

すさまじい地響きを立てて墓場を破壊し、吹き飛んだはずの青年が、何事もないようにゆっくりと立ち上がる。

その動作を見た獄卒たちが、歓声を止めて驚愕へと表情を変化させている。逆に収容された人々はおおっというどよめきを放っていた。

「バカな……芯を当て、撃ち抜いたはずだ」

ウイグルが信じられぬ光景を見た。

相手の体には擦り傷があるものの、肉塊どころかまともなダメージがほとんど入っていないと気付いたのだろう、もう一度バカなと呟いた。

「わしの覇極が外れた……いや、もしくは流されたのか」

「あの巨体の闘気と物理の攻撃を……拘束されたままで躲<sup>かわ</sup>せるはずはない……あの男はまともに受けてあの程度なのだ」

仁王のごとき男たちの確信の感想で、ウイグルがうぬつと怒気を発した。

彼が手を上げた。

何かの仕掛けなのか、シンの背後の地面から、三方の壁が持ち上がってくる。

その鉄の壁には同じ材質の鋭い棘が生えていた。

もはや逃げ場はない、と奥義の構えを見せたカサンドラの支配者が、再度標的に狙いを定めている。

「その余裕の優面をすり潰してくれるわ。わが肉体と鉄板の間で圧死せい！」

砂煙が上がる。

先ほどの激突を上回る気合をこめた巨漢が、咆哮しながら荒れ地を蹴った。

## 三十三話 銀の聖者

カサンドラ城内に潜む獄卒を斬り捨てながら死神が進む。

迷路のような牢獄ながら一度侵入している韋駄天は、やや迷いはしたものの、やがて見慣れない区画へたどり着いた。

ウイグルやその側近がいない牢獄内など、彼にとつては障害にも値しない。

薄暗い回廊に足を踏み入れた途端、どこからか暗器が飛んできた。

目つきの悪い薄緑の髪の毛の男はそれを造作もなく躲かわし、ふと目を細めた。

わざとらしくぶら下がる厚手のカーテンを手に取り、それをはぎ取った。

「な、なぜおれの気配がわかった?！」

カーテンに隠れて壁にへばりついていた男が、驚愕しながら偃月刀を抜き放つ。

もうひとりの髭面の男といい、中東系とすぐにわかる顔立ちをしていた。

「潜むのならば殺気を消せ。拳王親衛隊とは未熟者の集まりか」

「ほざけ道化師めが！ ベラ、ベラよお前の出番だ」

暗闇の向こうからやってきたその拳士は、ターバン姿の二人とは格が違う雰囲気を感じていた。

ジョーカーがそのしなやかな肢体を見て女か、と告げる。

「女なれど蘭山紅拳らんざんくれないけんの伝承者。その力は貴様の南斗聖拳に劣るまい。ベラ、相打ち覚悟でその道化を殺せ！」

ジョーカーと同じ髪色をした女は、薔薇を口にしながら構えだした。

無口なのか、名乗りも言葉もない。

彼女は石畳を蹴って相手との間合いを一気に詰めてきた。

振り下ろしの指拳は死神の想像以上の速さだった。

思わず反応が遅れてのけ反ったところへ、弧を描く鋭い蹴りが飛んでくる。

「ちっ」

胸に入った切り傷を抑え、ジョーカーが舌打ちを放つ。

この女の実力はウイグルの片腕と名高いターゲルと同等以上のものだ。

中東系のむさい男たちが歓声を上げる。

「押しているぞベラ！　だが時間がない、早くそやつをぶち殺せ」

右側の前髪が長いその女拳士が紫色の唇を動かし、深呼吸をし始めた。

気合を溜め終わったのだろう、再び堂々と正面から踏み込んでくる。

派手さや闘気はないが、実の拳の力を持つであろう彼女の一撃を受け流す。

重い蹴りで南斗の拳士の表情が歪んだ。

それでも己の間合いを獲得した死神は、天翔拳の奥義を発動させようと両手を交差させた。

だがそのとき、小さいが重厚な何者かの声が、通路に響き渡った。

「私はここにいます」

二人の拳士がそれを合図に飛びずさる。

ベラは何が起こったのかわからず周囲を見渡している。

そのとき、少し奥の回廊の壁にピシリと亀裂が入った。

コンクリートが崩落していく。

窓からの風が砂塵のカーテンを吹き飛ばした。

「な、なんだ?！」

侵攻隊の髭男たちがそのなかから進み出てきた何者かを見た。

戦っていた男女が同時に目を見開く。

「あ、貴方は」

無口だった彼女が薄暗がりから日向へと姿を現した男を確認して、狼狽しながらその名を呼んだ。

「……銀の聖者?！」

「この男がトキか！」

死神も思わず口を挟む。

その彼に対し、無精ひげを生やした瘦躯の囚人が声をかけた。

「彼女を殺そうとした。褒められたものではない」

「……手を抜いて戦える相手じゃないんですよ、蘭山紅拳は」

教師から叱られた生徒のごとく、死神が首をすくめている。

ペラに視線を移した北斗の次兄は、望まぬ戦いならおやめなさい、と優しく忠告した。

「あぶないっ！」

無口な彼女が思わず叫ぶ。

背後に忍び寄っていたターバン二人組の剣がトキに迫る。

だが聖者は振り向きもせず、両手をかざした。

「うお」

眩しさにジョーカーが手をかざす。

北斗の闘気が親衛隊たちを貫いた。余波でコンクリートの壁に断裂が走った。

動きを止めていたごつい男たちの顔に、愉悦の表情が浮かぶ。

彼らは痛みも苦しみもなく爆散していった。

「これが北斗有情拳……」

沈勇の男が放つ凄まじい離れ業に、死神が冷や汗をたらしながら言った。

「……聖者自ら牢から出てくるとは、何か天啓でも受けたのですかな」

「獄長が敗れる兆しを感じた。私の元へやってくるべき人物、それは」

「北斗神拳じゃありませんよ」

目つきの悪い男の言葉でトキが眉を寄せた。

ケンシロウのつもりが別人だと聞いた彼が、聖者らしくなく動揺している。

「では……では私が先ほど感じた恐るべき気脈の持ち主は?!」

「わが主」

「何?」

しおれている蘭山紅拳の伝承者に事情を話せば助けになる、と小さく告げた死神は、遥か格上の存在に向かってドヤ顔をしてみせた。

「南斗の光明が北斗の聖者を迎えに来たのですよ」

§

§

§

§

§

獄長による二度目の蒙古覇極道が、標的を押し潰そうとしていた。

「ぬうはははバカめが、その細腕一本でわしの突進を防げるとでも思うたか!」

ズシン、と重低音が響いた。



それは打撃を受けて立つ者からではなく、タツクルをしかけた側が地面を踏み潰す音だった。

それが抉られ、めくれ上がる。砂煙が空に舞った。

圧殺したつもりの剛毅な男が、兜の下の表情をいきなり歪ませた。

青年がかざした牙の一本、それが徐々に己の剛体にめり込んでいったからだ。

肩から背中まで突き抜かれる……咄嗟に察したウイグルは、苦悶の声を上げて覇極の体勢を崩し、二歩三歩と後退していった。

「あああああ?!」

獄卒たちが腰を抜かして眺めている。

ライガフウガが唇を震わせて迸ほとほとる鮮血を見上げていた。

それがカサンドラの支配者のものだと知ったとき、囚人たちの大歓声が沸き上がった。

「ご、極長の……全身を一弾と化した必殺の重圧を……かっかつ、片手であしらいやがった……!!」

うおおおと雄叫びを上げる処刑広場の連中のなか、双子の衛士が汗まみれになりながら驚愕の叫びを放つ。

「……片手ではない……奴は指一本でウイグルの肩を貫いたのだ」

鬼の哭く街の処刑広場が今度こそ静寂に包まれた。

囚人や強制労働者たちだけではない。

歴戦の戦士である獄卒ですら武器を落とし、眼前の光景に硬直するばかりだった。

金属が響く音がした。

三方から標的を囲ったはずの棘付きの鉄板が、いとも簡単にひしゃげ折れた。

金髪の青年が振るう裏拳の三振りで起こった現象だった。

「獄長だけじゃねえ、なんであの棘付きの鉄の壁を素手でぶち折れるんだ……」

ウイグルの側近たちが過呼吸になりながら、不敗伝説を担っていたはずの豪傑を窺う。

彼の肩はシンの指突によって完全に砕かれていた。

レスティエが多くを語るにぬ主の代わりに、その拳の神髄を語る。

「どれだけ体を鍛えても無駄です。南斗極聖拳きよくせいけんは地上のどんな物質をも力で撃ち砕く」

彼女の言葉に、広場が改めて静まり返る。

そんななか、肩を砕かれた髭面の巨漢はよろめいていた体を立て直し、気圧された自分に対し喝を入れた。

戦闘民族の末裔としての矜持であろう、深淵なる闘気の持ち主にひるまず立ち向かっていった。

ライガフウガでさえも後ずさりする程の彼の気当たりに対し、指一本で伝説を破壊した金色の髪青年は、淡々とした表情で告げた。

「極悪人を収監するのはよい。だが無辜の民には今後一切関わるな。お前の拳士としての誇りにかけて誓えば……仕置きはこの一撃で終わらせる」

「ふはははは！ わし相手に子ども扱いの折檻で終わらせるつもりか、舐めるなあ!!」

憤怒の形相で咆哮したウイグルが、身をのけぞらせて力を溜めている。

死兵と化した豪傑による渾身の頭突き。

そんなすさまじい重圧に対し、シンが片手を振り下ろす。

北斗神拳先代伝承者に鍛えられた南斗の男の一撃は、相手の頑丈な兜を砕き、脳天へ裏拳を叩きこむことに成功していた。

「ぼあ」

自分の半分の背丈しかない男の打撃を受け、ウイグルが轟音とともに大地に打ち付けられた。

頭部が陥没するだけで済んだ代わりに、彼は地響きを立てながら頭から地中へと沈み込んでいった。

ばたつかせていた彼の両足の動きが止まる。

上半身が埋まったまま昏倒した相手を一瞥し、シンが広場を見渡す。

それを見た大多数の獄卒たちが、うわああつと悲鳴を上げながら逃散していった。カサンドラの囚人たちが拘束から解放され、周囲は歓喜の声で沸き立った。

「あれが……あれが我らが待ち望んだ本物の救世主」

「……まさしく。あの男ならこの乱世を終わらせることが」

双子が弟の手当てを施しながら感慨深く頷きあう。

そこへ新たななどよめきが聞こえてきた。

城内から姿を見せた何者かを遠巻きにしながら、彼を知る囚人たちが跪いて特別収容人の登場を出迎えていた。

「あのお方がトキ……銀の聖者」

「あえてウイグルに捕らえられていたと聞いたが、今こうして自ら出てきたのは……」

「あの男だ……！ 獄長を赤子の手をひねるように倒したあの金髪の青年。彼が来たからだ」

人々がそう囁きあうのをよそに、死神とベラを従えた瘦躯の男がシンと向かい合う。

主の近くにいたレスティエは女拳士がベラだということとは知らなかったが、ひとかどの使い手であると理解しつつ、渦中を窺う。

「トキ……瘦せたな」

「無茶をした。しかし後悔はしていない」

ケンシロウとユリアを核シエルターに避難させ、自ら外に出たことで被爆した男の髪は、全て銀髪になっていた。

見るからに不健康そうだった。

日の当たらぬ牢獄での生活からか、顔色は青白く、足取りも頼りない様相だ。

その彼がため息をつきながら呟いた。

「わが弟だと……このカサンドラを破るのはケンシロウ以外にないと思っていた」

「旅の途中でそのうちここに来たかもしれん。だがあえて俺が横槍を入れた」

「……その理由を聞こう」

そう言ったトキがいきなりせきこんだ。

ベラが肩を貸し、レスティエも駆け寄る。

元々見目が良い銀の聖者は、彼を知る全ての女拳士の憧れだった。

こうなった今もその仁は失われていない。

本来ならば最も世紀末の救世主に近い男だったのだ。

今も興奮冷めやらぬカサンドラをライガフウガに任せ、シンたち一行はリンとバットのいる村へ引き返すことにした。

§ § § § § §

足腰の弱った病人が歩き続けられるほど、核戦争後の荒野は穏やかではない。照り付ける太陽や砂嵐が行く手を阻む。

そんな過酷な道中において、彼が拒否するのをかまわず背中に背負った青年が、地平線からやつてくる軍団を確認して歩みを止めた。

「あれは」

「拳王陸戦隊……!」

彼らの出で立ちや駆動車輪の武装具合から、ベラは顔色を変えて走り出した。

レスティエと死神も後を追う。

「やはり裏切ったからんざんくれないけん蘭山紅拳!」

ヘルメットにライダースーツ、車体に刃や突起物を仕込んだ十数台の軍団が、エンジンをふかしながら女拳士を取り囲んだ。

ベラが身構えながら尋ねた。

「おのれら……母様はどうした」

「造反者の親は収容所送りよ。今から別のシテイに運ぶ」

「そこにいるのか?!」

「おっと動くな」

後方のバギーの上で捕らえられた老母を発見し、彼女が構えを解く。

母の首に白刃が煌めいているのを見て、ベラは身を震わせながら立ち尽くしていた。

「トキを殺せば解放してやる」

「……………」

「処刑隊は腕力がねえんだ。うっかり刀を婆の首に落とすかもしれん」

「貴様ら」

「おっとつと。おっと」

老母の後ろで武器を弄ぶ二人の隊員が嘲笑う。

その笑い声が不意に途絶えた。

陽の光に反射した誰かの姿を、ライダーたちはヘルメット越しに見た。

それは一瞬の出来事だった。

「ほあ?!」

「え」

陸戦隊が揃いも揃って何も出来ないほどの早業だった。

いつの間にか銀髪の男が自分たちの背後にいた。

そしていつの間にか人質を抱え、翻ってベラの近くへ舞い降りた。

開いた口が塞がらない様子で一連の動きを眺めていた彼らが、いきなり体をガクガク

と震わせた。

ちにやくといった断末魔を放つて、それらは皆爆死した。

再会を喜ぶ親子を優しく見守ったトキだが、激しくせき込んで大地に突つ伏した。

「トキ」

慌ててベラが助け起こす。

血を吐いた彼が大丈夫と健気に笑って答えている。

死神とレスティエが水やわずかな薬を手に、介抱しにやつてきた。

北斗の次兄の神技に呆気にと取られていた陸戦隊が我に返り、邪魔者をひき殺そうとエ  
ンジンとをさらにふかし始めた。

「もろとも踏みつぶしてやる」

重量級のバイクを突進させた集団の前に、金髪の青年が立ちはだかる。

「若僧うううう！ 一番最初に死にてえか?!」

それがバイク部隊の遺言だった。

突っ込んでくる機動車両に向かって、シンの飛び蹴りが放たれた。

数台の二輪駆動が空へと舞い上がる。

バラバラになった機材と肉塊が降り注ぐ衝撃的な光景を、ベラは表情を凍り付かせた

まま眺めていた。



世紀末覇者でさえ認めざる銀の聖者が呆気に取られている。

それほどの蹴撃しゅうげきだった。

やがてトキが独り言のように口を開いた。

「……あれが南斗では倒せない、といわしめた聖帝を貫いた……極聖の拳」

「奴らのバギーがまだ残ってますね。ちようどいい、足代わりにいただきましたよう」

「ヘルメットの野郎ども、死にたくないのか這う這うの体で逃げていきましたぜ」

見慣れている影の女と影の長は平然と言いながら、トキの肩を担ぎ上げる。

自分の元に現れたのがケンシロウではないことに違和感を覚え続けてきたトキが、南斗獄屠拳を目の当たりにして、ようやく理解したように頷いた。

しかしその顔には一抹の寂寥感が浮かんでいた。

## 三十四話　メデイスンシテイー

四輪駆動を手に入れたシンの一行が、リンとバットのいる村に引き返すのはさほど時間を要しなかった。

銀の聖者、医療の仁を知る者は多い。

当然にして村からは諸手もろてをを挙げて歓迎された。

しばらく静養に専念したあと、宿舎の部屋で改めてシンと対面した。

寝食を得て数日、ベッドから身を起こした彼の顔色は悪くはない。

そんな彼が傍らに立つ金髪の青年に尋ねた。

「わが弟よりも先に私に会いに来た理由とは」

「ユリアだ」

「……ユリア?!」

伝承者だけではなく、北斗の長兄や次兄にとつても南斗の象徴は青春だった。

トキほどの人物が水の入ったグラスを震わせたほど、その名は衝撃的だったようだ。

「あれは病に体を蝕まれている」

「……」

シンの言葉に、影主従が神妙に頷く。

貴方の仁術ならばまだ治せる、という青年の言葉に、トキは水を飲み干してから頷いた。

「……私の力が及ぶ限りその期待に応えよう。だがケンシロウとユリアは今どこに」「いずれサザンクロスに向かうはず。主がユリア様のために建てた南の孤島です」レスティエが代わりに告げた。

しかし目的地は遠い。トキ自身も体調を整える必要がある。

「組織だった抵抗ができる城塞。そのサザンクロスでわが兄ラオウを迎え撃つ、か」「五車星やダンテ、ナリマンなどの手練れが北斗神拳伝承者の脇を守る。備えは万全です。まあ時間稼ぎは必要でしょうが」

死神がトキの言葉に答えながら、シンを窺った。

まだ完全に傷が癒えない状態でラオウと戦うのか、という表情をした銀の聖者へ、南斗極聖拳きよくせいけんの伝承者は当たり前のような顔をして応じている。

獄中にいたトキが外の世界の流れをレスティエから聞いて、思わず嘆息した。

天を仰ぎ、そして俯く。

やがて感無量といった体ていで、末弟と同世代の青年を見上げた。

「そこまでしてユリアに殉ずるといふのか……決して報われぬと知っていてあの娘を

……いや、ケンシロウを含めた二人を生かそうと」

「……」

「ならば救世主はあれではなく」

「おっと、そこまでです仁のお方。主はその呼び名に相応しいお人ではありません」

おどけた様子でジョーカーが間に入った。

そう評する影の長は得意気だ。

誇るかのように仰け反っている。

「北斗神拳伝承者こそ救世主の器。主の動機はあくまで慈母の星。それ以上ではありや

せんぜ」

「……」

名も実もいらぬ、か。

隠遁者であるトキが静かに独語する。

であるからこそ聖帝を倒し、自分ともあろう者がケンシロウの気と読み間違えたのだらう。

休養が今の貴方の仕事だ、とシンから告げられた聖者が部屋で一人になった。

一抹の寂しさを消せないまま、彼はベッドで横になる。

目を閉じたたん、その意識はすぐに消えた。

§ § § § §

蘭山らんざん紅拳くわんないけんのベラやレステイエに村の守りを任せ、シンはトキの薬の調達のために再び荒野を歩き始めた。

当然のような顔でついて来る死神が、各軍閥の新しい情報を告げてきた。

「カサンドラを落とされた拳王の動きが今以上に活発になりました。ですがそれに匹敵する一大勢力が不穏な動きを示しているようで」

「とは」

「元斗皇拳です」

「元斗……。天帝の忠臣たる拳士たちか」

「それは核戦争前の話。今は事情が違っておりましてな」

地獄耳のジョーカーが語る。

現在帝都の実権を握っているのは総督ジャコウ。

事情があつて、その狡猾な男に元斗の拳士たちは従属を余儀なくされている。

天帝が人質に取られているというのは噂であり、真偽はわからない。

「それにしても金色のファルコ率いる元斗の伝承者たちは、北斗四兄弟や南斗六星にも

引けを取りません。軍勢や装備に至るまで、その規模は軍閥中随一でしょう」

恐れていた乱戦の様相に、ジョーカーが苦い表情を浮かべている。

「拳王の脅威がある今、帝都などを相手にしている余裕はなく……ましてや金色はその世紀末覇者に匹敵する豪傑。いつそ化け物どうし相打ちでもしてくれませんかねえ。それだけでこの世は平和になりそうだ」

砂塵の中を進みゆくこと数日、久しぶりに見る街並みを指さして、死神が言った。

「やっと思つかったか。あれが近頃拳王の影響下に入った街、メディスンシティです。支配者の長寿のために、霊薬が作られているとも聞きます」

「くだらぬ」

カサンドラでは拳法家の極意書を取り上げて解説し、手に入れたばかりの街で薬剤を研究させる。

ここ一連のラオウの動きは、今のシンにとって唾棄すべき所業でしかない。

前世での己が悪行を思い出す。

自身に向けて怒気を発しているのも同じだった。

「慎重に見定めるべき鳳おおとりが崩御したことで、タガが外れてしまったのでしょいな」

ジョーカーが目を凝らして、砂のカーテンの向こうにある目的地を眺める。

そのときステンレスの水筒が飛んできた。

「おっと」

「……薬の他に水や食料も必要だ。サザンクロスまでの道は長い」

小型のスキットルを受け取った死神がそれを口に含む。

§ § § § § §  
アスガルズルで手に入れたブランドー。年代物だ、と影は相好を崩した。

§ § § § § §  
霊薬の街、メディスンシティーを任されたのは拳王陸戦隊の將軍だった。

槍使いとして高名な男だ。

銀に統一されたプレートアーマーで全身を覆っており、長大な三叉の槍を手に幾多も  
の戦功を挙げた歴戦の勇士である。

古風で謹厳な騎士である彼が、配下の騎士団を率いて城外の敵を迎え撃つ。

バルダと呼ばれた將軍は、翻る多数の旗の紋章を見て、それが帝都の軍であることを  
確信した。

「長槍部隊、行くぞ」

帝都の鉄機兵団と守衛の槍歩兵が門前の荒野で激突する。

剣戟が鳴り響く乱戦のなか、防戦側の騎士団が噴水のように舞い散った。

軍団のプレートアーマーを撃ち抜く閃光が戦場に煌めく。

その青の鬨気が振るわれるたびに、侵攻軍の敵が砕け散った。

猛者ぞろいの長槍部隊が隊列を乱して後退していく。

団の崩壊を防ごうとバルダが先頭に立ったとき、巨漢の拳士が湧き上がる鬨気を纏い、死骸の中から歩み進んできた。

「青光將軍ボルツである。暴狂星の飼犬どもよ、この街は天帝の指揮下に入る。慈悲により奴隷として生かしておいてやろう。滅光の痛みを受けることはあるまい。降伏せい」

長く青い髪、青いマントを靡かせた男は、帝都の将をあらわす太極星の胴着に身を包んでいる。

腕組みをするその相手に、バルダが槍を構えながら一喝した。

「ばかめ。世紀末覇者の知遇を得てこの街を任された以上、うぬら得体の知れぬ輩に下る者などおらん」

「ならばその首を置いていけ」

ボルツの体が青い光に包まれた。

湧き上がる気脈で髪が逆立たせた彼が、嘲るように言った。

「元斗の滅光、初めて見たか」



「その程度の闘気で粹がるな。わが獲物で突き殺してやろうぞ！」

そんな城門前の光景を窺う二つの影がある。

倒壊したビルから顔を出した死神が、主に振り返って尋ねた。

「なんか殺伐としてますが……どうしますか？」

「放っておけ。それより薬の調達が先だ」

「調達というより窃盗ですがね。まあ代替えのガソリンは置いていきますが」

主従が気配を消してシティーへ潜入していく。

それを知らぬ街の支配者と侵攻部隊による、大将どうしの一騎打ちが始まった。

「しえあー！」

無数に突き出される三又の槍を見切ることができたのは、元斗の戦士だけだった。

巨体に似合わぬ体術で避けていた彼に、なんであれが見えるんだと拳王軍が瞠目する。

薙ぎ、払い、突きと縦横無尽の槍がボルツを追い詰めていく。

その切っ先が青い髪の猛将の頬を抉った。

「ほうこれは」

槍を避けたつもりだが、と呟いた巨漢が流れる血をぬぐいながら言った。

「ふむ拳王め。なかなかよい手駒を飼っている」

「播らぎが真隨、わが華山三叉槍。拳法の達人とて見切ることはできん」  
 「なるほど……わしの体術を上回るか」

ボルツが槍を振りかぶる構えを取った。

死ねいと咆哮したプレートアーマーの騎士が歴戦の獲物を奮ったが、それは相手の槍の形の鬨気に払われた際に、あつけなく曲がって二つに折れた。

「なっ?!」

「帝都にもそうはおらん槍使いよ。この体に傷をつけた褒美である。今度はわが奥義を見せてやろう」

むーんと気合を込めたボルツが両の手に鬨気を漲らせた。

長剣を抜き放つてくる相手を武器ごと、その分厚いプレートアーマーを撃ち抜く。

元斗の青い滅光はそれだけでは止まらず、後方にいた長槍部隊も巻きこんでいった。すでにバルダは袈裟懸けにされている。

青い炎にまかれる槍使いの死にざまを見て、生き残った配下たちが浮足立った。

「元斗双影迅。わが拳の前では硬質の防御とて役に立たぬ。防具ごと肉体を滅するのみ」

鬨気を消したボルツが、城内へ退散していく敵軍をあえて見送る。

周辺の状態を探らせていた斥候が戻ってきたことで四輪駆動に引き返し、その報告を

受けた。

「巨馬に率いられた一軍が近づきつつあります。あれを乗りこなすことができるのはこの世でただ一人」

「……来おったか」

帝都の将軍が我知らず武者震いを見せる。

シテイの攻略より本命の首を取ることを優先した彼が、重歩兵に転進を命令した。「天帝の兵つわものどもよ。北斗の伝承者になれなかつた落ちこぼれと、その軍勢を叩きのめしにいこうぞ」

## 三十五話 拳王登場

黒い兜、赤いマントの世紀末覇者が手綱を動かした。

両前足を上げていなく雄姿を知らぬ者はいない。

その巨大な黒い馬の名は黒王号といった。

そんな黒王の威嚇に、対峙した帝都の重歩兵が後ずさる。

やがて青い髪の元斗の将軍が進み出た。

荒野のなか、異様な闘気を放つ無言の存在と向かい合う。

「貴様がラオウか。聖帝が斃れて以降、随分と動きが激しいようだが、我ら太極星がいる

以上そうはいかん」

ボルツが両の手に光を宿し始める。

青の波動を纏った際に、地面が抉れて砂煙を上げていた。

それを見た拳王侵攻隊が大刀や斧を振りかざし、相手に打ち掛かる。

主に劣らぬ巨軀を誇る男たちだったが、ボルツが奮う重い拳撃に耐えられる者は誰もいなかった。

青光に溶けていく猛者たちの数は増えるばかりだ。

それを見守っていた北斗の長兄が、傍に控える兜武者の名を呼ぶ。

「ザク」

「はは」

陸戦隊の將軍である兜武者が配下の隊員に下がれい、と一喝する。

波が引くように彼らが後退する。

そのなかを歩み来るボルツが、ラオウを見上げる距離まで近づいた。

帝都の猛将に向かい、馬上の主が静かに言った。

「バルダをやったのはうぬか」

「……あの槍使いか。なかなかの使い手ではあつたが、このボルツの元斗皇拳には及ば

ぬ。ラオウよ、貴様も例外ではない」

滅殺の光の持ち主がぬははと高笑う。

鬨気の槍を作り出した彼がそれを投げ放った。

「ぬっ?!」

ラオウは手綱ひとつ動かさない。

ブシャツという効果音を残し、その青い光は一瞬で霧散した。

馬上の主がどうやって防御したのか、いつ弾いたのかわからず、ボルツが目を剥いた。

「わが光槍が消えうせた……?」

「間合いを飛び道具で詰めようなどと小賢しい。来い、うぬ自身でこの拳王に寄ってみせ」

赤いマントが風に靡いた。ラオウが初めて構えたのだ。

しかし馬上からのその様相に、ボルツがさらに瞠目した。

「なにイ降りぬのか?!」

ラオウが低く笑った。

その心胆寒からしめる唸りのような音に、元斗の拳士が我知らず一步引いた。

己に逆らった達人たち、そのすべては同じ反応を示してくる。

その矜持を砕いてから肉体を砕く。

世紀末覇者は馬上で凄まじい気炎を上げていた。

無言ながら、心得のある拳士には伝わるものがある。

下馬して戦うまでもないというラオウの反応で、帝都の将軍が激昂した。

「思い上がりおつて……！ 天帝の戦車にすぎぬ北斗如きが図に乗るとは!!」

馬上で死ぬ、と叫んだボルツが巨体に似合わず俊敏に飛び上がった。

青光が標的を薙ぐ。

遠巻きに見ていた拳王侵攻隊がおおつとどよめいた。

覇者の赤いマントの一部が細切れになっている。

ラオウが珍しく眉を上げた。

「元斗皇拳……わが闘気の防御を斬り破りおったか」

「次はマントなどでは済まさん、その駄馬ごと突き殺してくれよう」

「皆の者下がれっ、まだ足りん!!」

將軍ザクが部下を振り返り、さらに後退するよう叫んだ。

その瞬間、戦場がカツと煌めいた。

青い光を纏い、再び舞い上がった青い髪の拳士が、世紀末覇者の極大の闘気をまともに受けて吹き飛んだ。

バカナ、そんなバカナああとという断末魔を残し、元斗皇拳伝承者は衝撃の波に飲み込まれていった。

技の発動後も消え失せぬ風圧に耐えながら、ザクが思わず呻く。

「北斗剛掌波……さしもの帝都の猛者も拳王様にかければ一撃掃滅」

ボルツだけではない。

彼の率いる重歩兵の軍団も巻き込まれ、ラオウによる渾身の掌底で塵と化していた。

奥義が突き抜けたあとの地形が抉られ、一本道のように続いている

ラオウが拳を握る。指の間からは血が流れ落ちていた。

彼からすれば屈辱の負傷とっていい。

元斗皇拳侮るべからず、という意識を強くした不機嫌極まりない覇者が、不意に馬首を返した。

「メデイスンシティー、現在は城代がおりません。誰を使わしましょう」

ザクの言葉にラオウが天を見上げながらガルダ、と名指しした。

「ガルダ……別動隊を率いて近くの村を攻略中ですが……あやつは南斗」

「かまわん、聖帝にも従わなかった反骨の男。あやつならバルダの後任に値する」

「……御意。ではその村を鎮圧後、シティーへ赴任するよう伝達いたしましょう」

ザクが一礼した。

先に霊薬の街へと侵入したシン主従のことを、現在のラオウが知るはずもない。

治安維持のために軍勢を駐屯させるよう命令しただけだった。

§ § § § §

メデイスンシティーの医療施設に侵入した二人組がいる。

残虐非道の殺人拳の伝承者である彼らは、施設の倉庫内で堂々と犯罪行為に勤しんでいた。

だがそんな窃盗犯は当然にして、防犯の網に引っかかることになる。



阻んだ者としては当然の誰何<sup>すいか</sup>だったが、初めて犯罪者扱いされた金髪の青年は、むずかゆい表情を守衛の男に向けていた。

その男はゾリゲと名乗った。

「拳王様のための霊薬の街で、白昼堂々リュックを背負って、ですか。いい度胸をしていますな。そんな命知らずは今までほとんどいなかっただけです」

「……あやつ、変な玉を持ってますぜ」

窃盗組のなかで、目つきの悪い男のほうがあふと告げた。

浅黒い肌の守衛は、白いその球を何個も懐から取り出している。

重そうに見えるそれをお手玉し始めるのを見ながら、死神は中身は詰まっていると察した。

「盗人どもには死を」

爬虫類系の薄気味悪い男が、白い玉を放り投げてきた。

当然にしてそれはジョーカーに当たることはない。

しかし玉が当たった壁や地面が煙を上げて溶解しだしたのを見たとき、彼が舌打ちを放った。

「物質は砕けても液体は砕けない。いかに名のある拳士であろうと、硫酸を防ぐ手立てはありません」

「つと」

死神が踊る。

次々と投げられてくる硫酸の入った玉を躲かし続けていた彼だったが、そのうちのひとつを斬撃で切り落とした際、死角から飛んできたそれが肩のプロテクターに命中した。

激痛を堪えしやがみこむ犯人を見たゾリゲが、ほうほうと感心しながら呟いた。

「硫酸を密封する厚い素材を素手で斬り落とす。そんな芸当ができるとは貴方……ただのコソ泥ではありませんね」

浅黒い男が喉の奥で笑う。

連投される玉から逃げるため、ジョーカーは高い天井に向かって飛び上がった。

「ほうほう脚力も尋常ではない。しかし小官も空中戦には自信がありません」

盗人と守衛が空中ですれ違った。

決定打を与えられず、双方が着地する。

「やりますねえ！」

ゾリゲが構え直しながら振り向いた。そのときだった。

鳥の羽が目の前に舞った。敵の首元の飾りから落ちたものだった。

「せんかいせんし旋回残指」

目つきの悪い男がゾリゲの眼前で膝をついて着地する。

その際、×の形に相手を斬り下げていた。

時が止まったように二人は動かない。

やがて守衛が血を吐きながら口を開いた。

「人間のうご、きじゃない、ですね……すばらしい……舞いだ」

「南斗天翔拳。せめて名乗りを聞いてから挑むのだったな」

「そう……か……キサマがああ、いだ、てん」

体にヒビが入ったたひよる長い男が、職務を全うできずバラバラになって崩れ落ちた。

余計な負傷を負った死神に、金髪の青年が消毒薬と包帯を手渡す。

「……お前がここまでやられるのは珍しいな」

「奴の言う通り、液体には勝てません。それより薬ですが」

「健康飲料、真空密封された薬剤、錠剤。そのほか医療器具が見つかった」

「それはそれは。では水や食料もろとも、背囊はいのうに収納してとんずらしましょう」

天をも砕く拳の持ち主が、盗品をリュックにつめて背負う姿は見ものだった。

気配を消して進むそんな美男子に思わず笑いそうになる死神が、トランプカードを一

閃させた。

施錠を破壊し、扉を蹴破っていく。

もともと善人ぶるような二人ではない。

世紀末のこの世において珍しくもない悪党そのものな姿だった。

拳王が支配する街に堂々と押し入り、強盗に及んだ男たちの噂は、一時休憩のために滞在していたラオウの耳に入ることになる。

手練れであつた医局の守衛を倒した痕跡から、將軍ザクはそれが南斗聖拳であると断定して主に告げた。

聞くや否や、奴らを追う、とラオウが黒王号に乗り上げる。

機動力のある部隊のみを率いて、すぐにシティーを後にした。

薬や食料品だけではなく、車も乗り逃げした凶悪犯を逃がすわけにはいかない。

かくしてシンたちからすれば自業自得の振る舞いで、世紀末覇者を招き寄せることになつた。

## 三十六話 邂逅

「王よ」

「……」

「主のことです」

「聞きなれぬ呼び方はよせ」

「ではK I N G」

「……なんだ」

四輪駆動のハンドルを握る死神がバックミラーを見た。

察して振り返る助手席のシンが、遠くにはためく拳王軍の旗を確認して立ち上がる。

「何をなさいます?」

「お前はそのままトキの元へ行け。医療品だけではなく水や食料も必要な村だ。ここで

俺が足止めする」

「足止めは普通部下がするもんですが」

「お前の韋駄天は得難い。それに」

追手の先頭に立っているのは巨大な馬だ。

砂煙を上げて疾走してくる黒い影。

あの追撃を止められるのは自分しかない。

「あれはラオウ本人だ」

「なんですと?! しかしまだ貴方は万全ではない」

「任せたぞ」

シンが車両から飛び降りた。

遠ざかるバギーから死神の迎えに上がります! との叫びが聞こえてくる。

それに背を向けて、金髪の青年は砂煙のほうへと歩き出した。

かくしてわずかの時間で黒王号は標的に追いついた。

いなく巨馬の手綱を握り、世紀末覇者が久しぶりに会う人物を見下ろす。

そして言った。

「若僧。 多少は男の顔になったか」

「そういうお前は人相が悪くなった」

兜の下で眉を上げたラオウが重々しく告げる。

「……聖帝を破つて驕わったか。 わが街に押し入って物資を強奪しようとは」

もしくはそれはユリアのためか、と彼が虎眼を見開く。

その推測を南斗の男は否定しなかった。

再び北斗の男が尋ねた。

「あれをどうした」

「……知らんな」

「うぬがケンシロウからあれを奪い、連れまわして旅をしているのは聞いている」  
「見ての通り、ここにはいない」

シンが両手を広げた。強盗の被害者側がさらにたたみかける。

「カサンドラを崩壊させ、トキを救い出した。それだけで万死に値する」

「ごうつと風が吹いた。」

自然現象ではなく、馬上の主から放たれた迸りほとぼしだった。

金髪が靡き、その体は後退したが、そんな気当たりは南斗極聖拳きよくせいけん伝承者を一ミリもひるませることはできなかった。

シンにしては珍しく、その語気に侮りの色がある。

「万死に値するのはお前だ。リュウケンを殺し、世紀末覇者を名乗り、その勢力を築くために、どれほどの暴虐を繰り返した？ あまつさえカサンドラやメディスンシティーの建設など、凡百の権力者に成り下がる」

無言の馬上の男が手綱を動かした。

衰えたな、という地上の男の台詞で、それを握りしめた彼が黒王に突進を命令する。

土砂がどつと跳ね飛んだ。

馬の蹄による砂塵であったが、地上の男が飛んだ際の破片でもあった。

「ぬうりゃ」

拳王の気合の声が響く。

元斗の戦士に破られた防御とは比較にならない厚みの闘気を発し、飛び上がった相手を迎え撃った。

金髪の青年の蹴りは鋭かったが、その防御を突破することはできなかつた。

ラオウが体勢を崩した相手へ正拳突きを放つ。

シンはかろうじて十字受けて耐えたものの、衝撃を完全には受け流せず、防具を粉々にされた状態で大地に叩きつけられた。

包帯だらけの体を露出させてからようやく、彼は跳ね起きた。

馬上の豪傑が負傷者を鼻で笑う。

「サウザーを倒したものの満身創痍。有象無象ならばともかく、その状態でこの拳王に立ち向かおうとは」

練られた気脈の凄まじさで大地が震える。

気宇の大きさに相応しい強さの覇者に対し、かの防御を突き破る力はまだ戻ってはいない、と確認したシンが、ボトムの埃を払いながら立ち上がった。



「このままで十分。南斗ごときの細腕などこの黒王が噛み砕いてくれよう」

馬で始末をつける、とまで宣言された瀕死の男が、十字の傷がある手の甲を相手に向けて動かした。

「もう一回やってみろ」

ラオウが無言で馬を駆る。

蹄を繰り出して蹴り殺そうという、彼の目算は見切ったものの、人馬一体、拳王たる男の剛腕まで防ぐことはできなかつた。

「ちっ」

舌打ちを放つたのはラオウ自身である。

手応えのなさど、黒王のたてがみが斬り取られたことへの驚きも混ざっていた。

砂埃まみに塗れ、大地に手をつく青年が呼吸を整える。

勝機が一切見えない戦いのなか、シンは口角を上げていた。

不世出の剛拳の持ち主に死の稽古をつけられているようだ。

あの日に戻った感覚に囚われていた。

不審そうにラオウが問いかける。

「若僧……何が可笑しい」

「俺のように恵まれた男はいないと思っている」

震えながらシンが立ち上がって独語した。

「南斗、北斗の頂点と拳を交えるはもはや武運。冥利というものだ」

燃え滾る闘気や感情の迸りのない半死半生の相手に、ラオウはとどめを刺す動きを停止させた。

この男は筋金入りの死人である。

そして南斗六星の拳士には、断固相殺拳という奥の手があることも知っている。

「俺はすでに飛び掛かる力はない。とどめを刺しにこい、ラオウ」

世紀末覇者を名乗る男には野望があった。

北斗神拳伝承者を破り、乱世に覇を唱え、ここではない別の大陸を制する。

そんな野望とは別のものも、未だ手にしていない。

金髪の若僧一人に拘っている時間などはないのだ。

そうでなくても元斗や北斗の分派、そして正体をあらわさない他の斗の拳の存在もあつた。

「拳王サマあ、もはやこんなゴミにかまっている時間はありやせんぜ」

拳王偵察隊のシーカーと呼ばれる奇妙な男が、軍勢のなかから姿を現した。

舌が異常に長い。

そのゴーグル男がラオウに跪き、カサンドラが落ちたことで各地に反乱の狼煙が上

り、帝都の新手、聖帝の残党などが蠢動していることを告げてきた。

配下の早耳にラオウは満足したものの、それぞれの地域に名のある武将を差し向けることを命令したのみで、この場から動かない。

「こいつの始末はお任せを」

シーカーが数名のならず者を従え、爬虫類のように舌をくねらせながらヌンチャクを手にし、シンに迫る。

黒王がぶると鼻息を放ちながら主人を窺うような動きを見せた。

馬上の主の虎眼に揺らぎはない。

己の体を突き破った唯一の男、黄金の牙の持ち主を一瞥し、その最後を見ずに馬首を返そうとしたそのとき、地平線から煙を上げてやってくる軍勢を発見した。

ラオウほどの男が珍しく瞠目した。

肌にピリツとした緊張を覚えたのは無意識のことだった。

紅に統一された部隊の装甲が陽の光に照らされている。

その様はまるで火の玉だ。

斥候を放った拳王の機動部隊が軍旗を発見して舞い戻り、黒王号の前に跪いて驚愕を隠せずに叫んだ。

あの赤紫の旗はU・D、ユダの軍勢です、と。

§ § § § §  
そのころ、とある村を攻略しようとしていた人物がメデイスンシティーの赴任命令を受けた。

霊薬の街の城代とは大役ながら、とりあえず優先させるべきは目の前の村落である。数十名の部下とともに村の前で陣を敷いた。

指揮官がぺつと唾を吐き捨てる。

「ザクの奴め。このオレを駒扱いとはいいい度胸だ」

「これでは急襲どころではありませんな。しかしどちらにし標的は小さい。將軍のお手を煩わせるほどではありません」

側近の言葉に將軍と呼ばれたツンツン頭の青年が頷いた。

灰色の髪、顔の右面だけ仮面で覆い、希少な羽毛を首元に巻いた男の名はガルダ。

南斗尉鳥拳の伝承者であり、六星に次ぐといわれる南斗九龍衆のひとりだった。

核戦争前からあつた南斗の権力争いのなか、師でもある母を殺された経緯から、彼は配下以外の全ての南斗に憎悪を抱いている。

そんな復讐に身を焦がす男が拳王軍に入ったのは当然の成り行きだった。

「ん」

ガルダが椅子から身を起こした。

籠城の構えを見せていた村から二人の女がやってくる。

双方とも容貌に優れているようだった。

戦利品じゃあ、と味方部隊から口笛を伴った歓声が上がった。

「たわけどもめ」

「女どもを生け捕りにして褒賞となさるべきでしょう。このあとメデイスンシティーにも赴任せねばなりません。士気を高めるにはちようど良いかと」

側近がお任せくださいと進み出る。

彼も百八派のひとつ、南斗牙翼拳の使い手だった。

生え際が怪しい壮年の姿を見た女の片割れが、貴方はコウシユウ様、と驚きを隠せない反応を示している。

「ほう吾輩をいつているのか、南斗の女か？」

青白い頭巾のなかの表情をひきしめて、レスティエが頷く。

片側に仮面をつけたガルダを認識するにはもう少しの時間を必要とした。

百八派のなかでも最上位に近い九龍のひとり、それが総大将だと気づいた彼女が、裂帛の気合を見せて構え直す。

「死を覚悟したようだな。よい顔をしている」

コウシユウが武人然とした面に同情の色を浮かべたが、そんな感傷はすぐに消えた。今は乱世だ。

彼女の隣にいる黄緑の髪の水ともども、自軍への生贄にするつもりで間合いを詰めていく。

「ここはわたくしが押さえておく。ペラはトキ様を呼んで」

「何故だ。二人がかりなら倒せるはず」

「おしゃべりとは余裕だな女」

南斗牙翼拳の牙が大地を薙いだ。二手に分かれた女たちがコウシユウを挟み込む。

「シヤ」

レストイエの南斗聖拳を躲かわし、牙を薙ぎ払う。

そんな自分の反撃で一瞬にて終わるところか、服を破く程度にあしらわれたことで、コウシユウが何つと驚愕する。

それとは別方向から、緑の髪の水の拳が放たれた。

バラの棘の如き一撃が彼の脇腹に食い込む。

彼は攻勢を中断し、後退せざるを得なかった。

その棘の跡を見たコウシユウがなるほど、と眩く。

「蘭山紅拳……古臭い拳法め、まだ伝承されていようとは」

「どうしたコウシユウ押されているぞ、オレが出ようか」

「お戯れを」

南斗牙翼拳の伝承者が本気を出す。

蛇割斬じやくざんという奥義の発動を見たものの、レスティエはその影すらも捉えることができなかつた。

達人たちの闘いを見続けた彼女は、門下生には収まらない見切りを備えていたものの、百八派の正当な伝承者にはまだまだ遠い。

肩口から斬り下げられたように見える青白い頭巾の女が、どさりと荒地に倒れこんだ。

それを見たベラが怒髪天を衝いた。

おのれつと叫んでコウシユウに撃ちかかる。

「……確かカサンドラの拳士として雇われていたはず、なぜ裏切つた蘭山紅拳」

「母を人質に取るような輩に心から合力するはずもない。レスティエの仇だ、ハゲ野郎！」

ベラの煽りは彼の逆鱗に触れたようだ。

門下生に放つたものよりさらに速い斬速の踏み込みを受けながら、練達の士である彼

女はそれをなんとか避け切っていた。

腕を組んで眺めていたガルダがその殺気を察したのか、おいと口を挟む。

「……コウシユウ。女を殺す気か」

「蘭山紅拳は侮れません。戦闘不能にしようとするれば吾輩が殺られます！」

手の甲に薔薇が刺さったことで捕らえることを諦めたようで、生え際の怪しい男が、百手の拳をベラに突き放った。

「くっ」

数十もの牙をいなしたものの、ベラが態勢を崩して膝をつく。

目の前に避けた以上の南斗の指突が迫っていた。

彼女が死を覚悟したとき、銀色の羽が舞った。

牙翼拳の百の手はすべてその羽の持ち主によって捉えられていた。

「ガルダ様?!」

「女は戦利品だ。殺すな」

己の奥義をあつさり見切られたこと、そのついでに蘭山紅拳の拳士の腹に当て身を食らわせた主の早業に、コウシユウが畏怖を抱きながら拳を収める。

崩れ落ちたベラを抱える南斗九龍衆のひとり、もうひとりの女を眺めた。

壮年の配下が彼女の呼吸を確かめようと、レスティエの近くで膝を折る。



そのときだった。

コウシユウが鳥肌を立てながら動きを止めた。

ガルダもその方向へマントを翻した。

「コウシユウ避けろっ!!」

怒声に近い主の叱咤が荒野に響き渡る。

南斗牙翼拳の伝承者が大宙返りを決め、大きく距離を取った。

彼の額には汗が浮かんでいた。

これほど強烈な気当たりを受けたのは久しぶりのことだった。

自分のいた場所の荒れ地は大きくひび割れ、煙が沸き立っている。

ガルダの目にはそれが隼の爪だということがわかっていた。

羽を広げたような構えで上空からやってきた何者かを迎え撃つため、コウシユウも飛

び上がる。

その誰かを認識していれば、彼は空中戦など挑まなかっただろう。

だがガルダほどの拳士が退けという暇もないほど、二人の激突は瞬間のものだった。

「つか……!」

着地する前に壮年の拳士は口から鮮血を吐いていた。

「なん……の……風か」

薄れゆく視界のなか、コウシユウは背中を向けて大地に降り立った銀髪の男を、空から眺めていた。

主と同じ髪色だった。

しかし硬質の主とは違い、艶やかな長いものだ。それを後ろで束ねている。

「そ、うか……あれは」

独眼竜、という異名を言い残し、地上に叩きつけられたコウシユウが目を閉じた。

いきなり渦中に現れた隼の羽ばたきが見えたものは、ガルダだけだった。

南斗百八派の拳士でさえも一撃即斬、という凄まじいまでの神業を見た彼の部隊が、声をなくして硬直している。

ようやく事態を把握したのか、新たに現れた影の手勢を指さして、極斗衆だと叫び、狼狽し始めた。

ガルダが呟くように言った。

「南斗の影衆、極斗。どの派閥にも属さない男がああ赤い衝撃に仕えたと聞いていたが……」

黒装束の影は少数であるものの、それを率いる長は南斗九龍のひとりでありながら六星にも匹敵する、とまでいわしめた百八派きつての勇将であった。

「疾風の拳、南斗隼蒼拳じゆんそうけん。やってくれるじゃねえか」

久しぶりに会う真の強敵に武者震いをしながら、ガルダがマントを投げ捨てた。

委縮した兵たちに己が武威を示そうと、同格の相手へ歩み寄る。

高揚すると口調が悪くなるのは彼のクセだった。

「ダガール！ てめえ」

「この展開は……やれやれだな」

独立性の高い軍団を率いる二人が対峙する。

南斗においては、この二人にユダ配下筆頭の鷹、イルフォーンを含めた三人が九龍衆三傑、あるいはもうひとりを加えて四天と呼ばれており、互いにライバル視し、競い合う間柄だと讃えられている。

しかしながら、ダガールが他二人ほどそれを意識している様子は以前も今も見あたらない。

剛毅な二人に対し、この男は飄々として捉えどころがないのが特徴だった。

独眼竜、強さに見合わず重厚さがない。そう言われて久しい。

本人は重々しいのは嫌いでねとうそぶいて、身の軽さを自ら認めている。

そんな彼が頭をかきながらばやいた。

「拳王軍を蹴散らす、と主君に息巻いたものの、相手がガルダでは骨が折れそうだ」

「折れるくらいでこのオレを蹴散らせると思っているのか単。わが忠実なる配下の弔

い、その首をもつて晴らす……!!」

「花鳥風月。ご婦人を助け出せ」

ダガールの呼びかけに黒装束の影が動いた。

花、鳥、風、月の四人がレステイエとベラを助け起こし、応急処置を施している。

気絶していたにすぎない黄緑色の髪の拳士は、すぐ目を覚ましたようだ。

レステイエは傷の具合から、花鳥の二人が村へ避難させる流れとなった。

「ダガール様……この場を……お頼み申し上げます」

一門下生からすれば、九龍の一人である南斗隼蒼拳じゆんそうけんの伝承者は雲の上の人である。

そんな彼女からの平身低頭を受けて、ダガールはひらひらと手を振った。

「あれが独眼竜……」

ベラも拳士として彼の異名を知っていた。

南斗聖拳の最上位に近い戦いを見守ろうとする彼女も、武者震いで昂たかぶっていた。

## 三十七話 妖星の赤い牙

「おおおあれですぞユダ様！ 金髪の若僧、まだ生きてやがった」

近侍の小男、コマクが赤毛の馬を見上げながら叫んだ。

黒毛の巨馬がそれに気付き、高らかに咆哮する。

その手綱を握る豪傑は赤兎せきとと呼ばれる駿馬を一瞥するも、無言だった。

紅の兵団、別名赤備えを率いる美男子がひらりと下馬する。

拳王偵察隊のシーカー以下、数名の大男たちが、なんだあてめえはあとすごみながら近寄っていく。

「いいんですかね、拳王様。あの小虫ども……相手が誰だが理解してない様子ですが」

拳王親衛隊とは違う風体のとある小男が、ラオウの傍に跪きながらそつと告げた。

コマクと体格は似ているが、ふさふさ髪な妖星の配下と比べ、毛髪は寂しい。

そのウサいう影が、二メートルを軽く超える体躯のシーカーたちを小虫と呼んだのは意味がある。

彼らは勇猛だったが、今回ばかりは相手が悪すぎた。

反応がない世紀末覇者を窺ってウサは肩をすくめている。

「赤い衝撃。久方ぶりに見たいのでございますな」

従者の言葉にラオウがぎよろりと目玉を動かした。

影が首をすくめたそのとき、荒野に風が吹き抜けた音がした。

「な、なんだ」

ウサが渦中の様子に思わず立ち上がる。

いつ音が発生したのか、いつ斬撃を放ったのかもわからない状態で、赤毛の青年が片手を斜めに上げていた。

標的に襲い掛かろうとしたシーカー以下三名の猛者たちは、すでに動きを停止させている。

赤紫のマントの人物が歩み始めた。

巨漢の彼らとすれ違う。

同時にそれらは細切れになって血煙の中で消えていった。

「一振りでも千条斬り……小虫が何匹かかったところで無駄ですな」

ウサがこめかみに流れる汗を拭きとりながらうめいた。

拳王と名乗る相手に対し、あれほど躊躇なく立ち向かってくる男を、彼は他に知らない。  
い。

気負いのないその男が歩みを止めた。

「光明。そろそろ起きろ」

ユダの呼びかけにシンがよろけながら立ち上がる。

黒王号の上から放たれる凄まじい闘気の威圧を受けながら、涼しい顔の持ち主が言った。

「ボロボロだな。まるで歯が立たずか」

「……生きていることが不思議なくらいの大負けだ」

「正直でよろしい」

無言で馬腹を蹴った大敵が突っ込んでくる。

赤紫のマントをばさつとめくり上げた赤毛が、軽く地を蹴った。

人馬一体の攻勢に耐えられる者などこの世にあらず。

そういった傲慢さの突撃に対し、真っ向から飛び込んでくる紅鶴の意外な跳躍に、馬上の霸王が牙を剥いた。

「このラオウと正面から撃ち合うつもりか！」

ボツ、という音を立てた指突が相手の体を粉碎するかと思われた。

だが世紀末覇者の波動と拳は空を切った。

心得ている黒王が主の命令なしに馬首を返す。

荒れ地を踏み碎き、標的に軸合わせをしてから再度突撃しようとしたとき、その巨馬

はゆっくりと動きを停止させた。

「小鳥めが」

思わずラオウが悪態をつく。

同時に自身の兜が弾け飛んだ。

それを眺める拳王侵攻隊の面々がうおつ、とどよめいた。

ウサが歯噛みをしながら眩く。

「け、拳王様の正面に舞い上がり、その気纏きせうをぶち破って兜を叩き割る……どころか、あのお方の額も割りやがった。あれが聖帝が憚はばかったといわれる絶影の拳……！」

ラオウの顔をつたって、手の甲に血が流れ落ちた。

彼の額は斜めに裂傷が走っていた。

世紀末覇者を名乗って以来、これほどの傷を受けたのは初めてのことだった。

逆に傷をつけた側が驚いている。

その様子に本人ではなく、ウサが怒号を発していた。

「ヤロウ、あれだけで済んだのかって顔してやがる！ われらが天の覇王を舐めやがっ

て!!」

一方シンも、赤い衝撃を久しぶりに見た。

馬上のラオウはおろか、自分の目にも追い切れないカウンターの冴えに、奴がサウ



ザーを倒すべきだったのだ、と彼は内心で吐き捨てた。

「俺の苦勞が半減したはず」

そう独語した金髪の青年が、赤紫のマントを靡かせる妖星の雄姿を眺める。激昂寸前の相手を一本指で挑発している。

煽る相手は拳王だ。あいつはやはりイカれている、とシンはまた毒づいた。

「このラオウをここまで愚弄するか。うぬは六花八裂では済まさぬぞ……」

馬腹を蹴った彼がガクンと体勢を崩した。

疾走するはずの愛馬が、駆けようとするのをいきなり停止させたからだった。

「どうした黒王」

いなそうとするも、黒い巨馬は首を振って吠えるばかりだった。

その様子を察した主が頭の毛を握りしめ、静まれいと一喝する。

「どうどう」

歩法を乱し、未だ収まる様子が見えない黒王の動揺に、北斗の長兄が目を細めて腕を上げた。

「ラオウ」

ふとユダが口を開く。

何をしようとしているのかわかっているような、彼への一喝だった。

「拳を奮う相手が馬か。見苦しい」

「……」

パニックになったまま収まらない愛馬から飛び降りた巨漢が、無造作に裏拳で馬腹を叩いた。

ほつとした様子の黒王号がウサのもとへ退避していく。

「あ、あの黒王が恐れをなして拳王様に従わぬとは、ありえん話だ……畜生の本能で死を垣間見たのか」

ウサが配下の大男に担がれ、巨馬の手綱を取りながら部隊の元へ引き返す。

沈毅ちんぎな赤毛の青年の姿を憎々しげに窺って言った。

その声は震えている。

「たった一撃で世紀末覇者を地上に下す。聖帝や天帝といった大勢力でもないあの赤い衝撃……拳王様が最初に潰しておくべき一番の難敵だったのではないか……」

ズシンという両足の踏みしめで大地が揺れる。

核戦争以降、彼が下馬して戦うのを見た拳王配下はひとりもない。

その最初がああの線の細い美男子であることは、配下の面々はもとより、本人が一番存外ぞうがいに思っていたに違いない。

その相手は聖帝しかありえないはずだったのだ。

「それを倒したこの若僧といい、赤毛のうぬといい」

うわあツという侵攻隊の悲鳴が聞こえた。

霸王の燃え盛るような気合で、部隊ごと吹き飛んだからだだった。

「いけ好かぬ南斗の雛鳥ども……皮を剥いで食ろうてやるわ」

足音には思えない轟音を立てて、ラオウが標的に近づいていく。

これほどの怒気を放つ主君は見たことがない、とウサは思った。

「私はついにサウザーを倒すことができなかった……光明に比べ、なんとという不明かであらば」

ゴゴゴと唸りを上げるラオウの闘気に対し、ユダのそれは深淵にして内にこもる静かなものだ。

そのアイスブルーの眼が見開かれた。

「北斗の長兄の首をもって、わが失態を取り戻す」

「ほざきおつたな……！ このラオウが地上に降り立ったからには、うぬには死、あるのみ!!」

ラオウの構えで周辺の地形が揺れに揺れた。

その間合いへ赤い髪の青年が臆することなく進んでいく。

シンはそれを見てあいつも死人だ、と思わざるを得なかった。

§ § § § §  
たたと雫がしたり落ちた。

赤い髪がかかる白い頬に、妖星の血が何本か流れていく。

それを拭った美男子がふむ、と納得したように小さく頷いた。

離れた場所からコマクの悲鳴と紅の軍団の動揺が伝わってきたが、それどころではない。

彼は不機嫌そうに呟いた。

「かいくぐったと思ったが……甘かったな」

元斗皇拳の拳士すら一撃で消滅させるという、世紀末覇者の剛掌破が不発に終わった。

だけではない。

体を空に消した男の反撃を受け、その巨体の横腹は撫で斬られていた。

体格が良い彼のほうが出血は多い。

脇腹に手を当てたらオウが、ぺつと血を吐いて捨てた。

「元斗の闘気すら弾く拳王様の剛体に……あれほどの傷を植え付けようとは」

ウサのうめくような感慨にシンが応じた。

南斗聖拳を極めし者の牙、当たればラオウとて無事では済まぬと。

「やりおるわ小鳥ども……!」

ぐきぐきと首の骨を鳴らしたラオウが、さらに闘気を増幅させて前進する。

その双眼には狂気が宿っていた。

「この身を扶<sup>え</sup>れ。そして貫<sup>く</sup>がよい。されどうぬの細腕を握ったが最後、そのすばしい体を微塵に押し潰<sup>つぶ</sup>してやろうぞ!!」

「笑止。お前の雑な拳法でこのユダを捕らえられると思つていいのか。闘気ごときでこの私は倒せん」

いかん、とシンが刮目した。

この世であの奥義を食らつて生きているのは若き日の彼だけだった。

無想陰殺。

ケンシロウやトキでさえも習得していない、と思われるラオウ独自の極意だ。

雑どころか、二千年の北斗神拳伝承者のなかでも、あのような無意識のなかの意識の拳を繰り出せる者はいない。

今度は逆に妖星が拳王に誘われた。

あえて背後を取らせたラオウの無想の蹴り。それが赤い衝撃を打ち抜いた。

あの日のシンと同じように、ラオウにあれほど華麗な蹴りを受けるとは思ってもいない赤毛の青年が、脇腹に蹴撃をを食らって弾け飛ぶ。

渾身の秘奥義は相手の骨を砕き、肉を打ち抜いていたが、ラオウの表情はしかめっ面だった。

荒地にもんどりうって転がり、美しき鶴が似合わぬ無様を晒して倒れこむ。

その一部始終を見て喜んだのは、ウサと侵攻隊のみだった。

ユダが率いてきた一軍は葬式のように静まり返っている。

「ぞまを見ろ思い上がりの若僧めが！ あれではもう戦えまい」

ウサの雄叫びに、ラオウは表情を歪めたままだった。

北斗神拳としては秘孔をずらされたのが屈辱だったようだ。

あれではただの回し蹴りでしかない。

実の拳を放ち損ねた、と本人が一番理解しているのか、不本意ながらとどめを刺そうと妖星との距離を詰める。

未だ膝をもつげず昏倒するユダに、シンが声をかけた。

「俺にも負けぬボロ雑巾になっっているな。手伝おうか」

「……遠慮しておこう。さすがに失態が過ぎる。このままでは帰れぬ」

手をついて立ち上がった赤毛の青年は重傷だった。口からも血を吐いている。

「珍しいな。お前ともあろう者が下手をうつとは」

「光明が楽しそうでは何よりだ」

うそぶくユダの前に立ちほだかったラオウが傲然と見下ろす。

「拳王様の前では南斗などゴミクス同然。六星の二人を連続撃破じゃ！」

「なにおうこのハゲ野郎が!!」

ウサとコマクが離れた場所から唾を飛ばしあう。

それをよそに、ラオウは並みの拳士が見れば失神しかねない眼光を、赤毛の青年に向けている。

その極大の闘気を迸ほとばしらせる巨漢が、無意識に呟いた。

「サウザーめ。このような道化を注視し、さらにあの若僧程度に倒されるとはな」

二人の南斗の男たちがびくりと反応する。

「聖帝を騙かたるあやつ……見込み違いであったか。であればこのラオウの拳で屠る価値もなかったな。同門のこわっぱにさえも劣る帝王……二度とその不愉快な弱者の名を思い出すことはなからう」

ラオウが拳を突き上げた。

やれやれやつちまえい、というウサと、やめろやめんかというコマク、小さいおっさんどうしの声だけが荒野に響いている。

「死ねい」

ラオウの唸り声とともに、ブシユウウと血が吹き上げた。

彼の赤いマントが靡いたとき、それが風に乗ってばらばらになり、宙を舞って消えていった。

黒いプロテクターが砕け墜ちる。それも両肩同時だった。



## 三十八話 三つ巴

「ああああ?!」

金切り声を上げたのは妖星の忠臣ではなく、世紀末覇者の影だった。

とどめとばかりに振り下ろした彼の剛腕がめり込む先は、標的の胴着ではなかった。

撃ち抜かれた固い大地が、円状に大きく陥没している。

隕石の激突かと思われる重い衝撃で、岩盤や土砂が舞い上がった。

そして誰もが見た。砂埃の向こうで大きな影が跪いているのを。

渦中の方向を眺めた金髪の青年がよろめきつつ、憎まれ口を叩いた。

「奴がとどめに刺しに来るあの瞬間を……待っていたな。文句のつけようもないカウン

ターだ……食わせ者め」

眩き終えた彼がふと村の方向を窺う。

そこからバギーが戻ってくるのが見えた。

「KING、……無事ですか?!」

そう呼びかけてくる者はこの世でただひとりしかいない。

その目つきの悪い男が慌てながらも静かに車両を停止させ、主の元へやってきた。

「ご無事でよかった……地震の発生源はあれですな。恐怖の暴狂星め、いったい誰と戦って」

目を凝らした死神が、爆心地で湧き上がるもやの中の影を見ながら周囲を見回した。よほど気が動転していたのか、拳王侵攻隊の他に紅の軍団がいるのをようやく気付いたようだ。

「あれはU・Dの紋章。しかしなぜ赤備えが……あッ」

突風が吹いた。砂煙にまみれたもやが晴れていく。

おおっと両軍がどよめいた。

そこからうわあつという悲鳴に変わったのは紅ではなく、黒い軍団だった。

彼らの主が羽織っていたはずの赤いマントは、斬り裂かれて跡形もない。

両肩にある黒のプロテクターも、頑強な上半身を覆っていた黒い胴着も存在しない。

膝をついたまま、世紀末覇者を名乗る男か踏ん張って地面に倒れるのを防いでいた。

だがついに堪えきれず、思わず両手をついた巨漢の男が吐血した。

「け、拳王を相手に……真っ向から殺りつて撃ち破ったというのか?! ユダ、赤い衝撃め

……! 聖帝以上の化け物ではないか」

ジョーカーが怖気を奮いながら独語する。

一方、赤毛の青年は、崩れ落ちる一步手前の巨漢の直線上で、片手を天に衝いていた。

ラオウを下したその雄姿を、誰もが惚けるように眺めている。

赤紫のマントを靡かせる彼がゆつくりと腕を下げていく。

そして標的へ向けて一步踏み出したあと、静かに告げた。

「サウザーは死してなお南斗の帝王。彼に大口を叩ける者は彼を倒した男ただ一人」  
両手をついたままの北斗の長兄に向かい、南斗の拳士が優雅に歩み寄る。

いつもと変わらず淡々とした様子に見える。

しかしそれは憤怒の形相だということを、長年仕えたコマクだけが知っていた。

そんなユダの押し殺した声が戦場に響く。

「……何もできなかつた貴様があの司空おひとりの鳳を見下すことは、この私が許さぬ。身の程

を知れ」

「け、拳王様が……」

ウサが腰を抜かした。

先ほど吹き上がった鮮血は拳王を名乗る男のものだった。

巨体の上半身が血まみれになっているのは、防具ごと斬り裂かれたためだ。

それにしても世紀末覇者を相手に、身の程を知れと言える男が他にいるだろうか。

しかし誰も違和感を覚える者はいなかった。

膝をついたまま胸を抑えるラオウのダメージのほうが大きかったからだ。

起き上がれない自身の体に喝を入れるため、彼はバシンと膝を叩いたものの、それが思うように動くことはなかった。

「おのれ……！」

ギリつと歯を食いしばった剛毅な男が面を上げる。

睨みつけられた相手は涼しい顔に戻っており、傲然とラオウを見返していた。

死神が気付いた。

ラオウの胸ではなく背中に斬撃が走っている、とあえぐように呟く。

「あまりもの速さの拳ゆえ、衝撃は背中に衝き抜ける。そしてその背から裂ける」

戦場には場違いな程の、誰かの静かな説明がバギーのほうから聞こえてきた。

今まで気配を消していたのか、口を開いたことでジョーカー以外の誰もが初めてその存在に気づいた。

「南斗紅鶴拳、見事だ。わが兄の奥義、北斗滅天把めってんはに合わせてカウンターを放つとは」

その人物が車両から降りてくる。

混乱する双方の軍はさらにどよめいた。

「とつとつとつ、トキ、貴様はトキだな?!」

腰を抜かしたままのウサが銀の聖者を指さして叫ぶ。

小男の驚愕をよそに、瘦躯病身の男がゆっくりと兄に近づいた。

シン主従の横を通った際、彼に大丈夫かと声をかけたものの、金髪の青年は治療が必要なのは俺ではないと吐き捨てる。

その強がりならば問題あるまいと微笑したトキが衆目のなか、クレーターの震源地で立ち止まった。

うぬは、と目を怒らせる兄に憐憫の眼を向けた弟は、静かに佇む赤毛の青年に向かって言った。

「サウザーの目に狂いなし。地上最強のカウンター拳法……とくと見せていただいた」

「……」

肩をすくめる美しき鶴は血だらけだ。

そういう所作も絵になる相手に、トキは続けて告げた。

「……南斗聖拳を真に極めし者。兄ほどの男でさえ一撃で衝き抜く」

トキの視界には金色と赤い髪を持ち主が映っていた。彼は目を閉じた。

「兄者よ。野望と怒りに任せた拳では北斗神拳を極めたといえぬ。われらの拳の神髄はそのようなものではない。師父からの教えを忘れたか」

「……」

「貴方の気質では口が裂けても言えぬだろう。だがそれに目覚めたとき、北斗神拳を凌駕しようとする者たち……その牙を折ることができるだろう。何もそれは伝承者に

限ったことではない」

病身のわたしには無理な話だが、と付け加えた弟に、兄は舌打ちを放つて面を背けた。師に叱られた若い弟子のようだった。

銀の聖者がユダに向き直る。

「すまぬ妖星よ。わたしも北斗神拳を学んだ拳士、この場で敬愛する長兄を討ち取られるわけにはいかぬ。まだ戦いを続けようとするのならば……不本意ながら相手をせざるを得ない」

それを聞いた赤毛の青年が目を輝かせた。

死神がその様子に、見目良く優雅だが、あの人は戦闘狂だと小さく毒づく。

「この身では赤い衝撃に到底敵わぬが、抵抗させてもらおう」

無精髭で瘦躯の拳士が身構える。

口角を上げていた紅鶴がブーツを踏みしめた瞬間、金髪の青年が間に入った。

「いかにお前とて、トキに手を出すのなら俺が黙ってはいない」

南斗の頂点、その双壁が対峙する。

シンのその姿に感心した様子を見せたユダだが、そこへ忠実な小男が駆け寄った。いい加減になされませ、と叱りつけている。珍しい光景だ。

「ラオウ、トキ、シン。奴らは揃いも揃って最強と自負してよい存在です。さしもの御曹

司も三人相手では確実に死にますぞ」

「彼らを下せばおつりがこよう」

「サウザーを倒せなかった無念はこのコマク、重々承知しております。しかしラオウを撃墜し、トキに死を覚悟させ、シンにも決死の表明をさせたところで十分でしょう。もはや貴方を侮る者はこの世のどこにもおりませんまい」

「……つまらぬな」

「どうせなら何かに目覚めた後のラオウと戦つて下せばよいのです。そのときこそ無念は晴れましょう」

トキの受け売りで、何に目覚めるのか理解していない小男の言葉だったが、その一言で主人が盲を開いた。

「強すぎるのが弱点という矛盾にして唯一のお方。あの三人を相手どつて心を躍らせるなど、正気の沙汰ではない。ワシの毛根がいくらあつても足りませんわホントに……」

ぶつぶつと文句を言いながら、影が主人の愛馬、赤兔せきとを連れてきた。

ここに至つてはさすがのユダも長年の忠臣の意見に従い、何も言わず馬に乗り上げる。

「感謝する」

トキがシンを支えながら馬上の青年に呼び掛けた。

彼は相手が強ければそれに反応し、殊勝ならばそれに倣う鏡の人であった。

聖者が頭を下げたことでむずかゆい表情を浮かべたものの、さあ行きますよという御者に連れられて紅の軍団を撤収させていく。

その後姿を見たシンが珍しく感心したように呟いた。

「あのユダが子供に見える」

「実際あの方は知勇に優れど名門の御曹司。浮世離れしているのは道理でしょう」

主の独語に死神が答えた。

シンにすらその牙を向けようとした恐るべき手練れの撤退に安堵しつつ、北斗の兄弟を窺ってその会話を聞いていた。

「貴方ほどの男がここまで深い傷を受けようとは。それがサウザー以外の南斗の拳士とは……考えもしなかった」

「……フン。あの拳は以前に見た。ゆえにあえてあのカウンターに向かっていったのだ」

不貞腐れた兄の言葉で弟が目を見開く。

「なんと……では妖星は貴方の見切りを超えて」

「南斗紅鶴拳、血冥断指けつめいだんし。北斗孫家拳の老タイゲンを一撃で倒した衝撃は今も目に焼き付いている……それを正面から砕こうとしたが」



舌打ちを放つラオウにトキが頷く。

「避けようと思えばできたものを、貴方は真つ向から討ちあつた」

「……このラオウに一度見た拳を躲かわすという逃げはない」

「なるほど。彼の土俵にあえて上がりこんで横綱相撲をされたわけか。あの青年もそうだが、貴方も大概救いがたい」

聞き耳を立てていた死神が冷や汗をかいている。

ユダの奥義に膝を屈したのは事実でも、ラオウにとつては己が矜持という縛りやら足枷を背負った戦いだつたようで、彼はげんなりしながら天を仰ぎ、そしてぼやいた。

「妖星の凄絶なること世の常ながら、あの拳王が何かとやらに目覚めたときのことを考えると胃が痛い。下らぬプライドが邪魔しなければ、いまごろ血煙のなかで沈んでいたのは紅鶴のほうだつたと考えると……」

そのぼやきを主が聞いた。肩を担がれた彼は小さく呟く。

「あのユダなら沈みゆく前にラオウを道連れにしようがな。どちらにしろ双方とも俺が見上げるに値する男たち。いずれ必ず捉えてみせる」

「……鳳凰を超えた今もなお見上げる存在がいる、と嬉しそうに宣言するKINGが一番気がふれていると思えますがね」

シンとともにバギーに乗り込んだ死神が、トキの乗車を待つてその場を後にした。

ウサに応急手当をされたラオウも馬上の人となった。

彼が率いる侵攻隊がメディスンシティーへ再度帰還しようとしたとき、ザクの命令で近くの村を制圧しようとしていた友軍に出くわした。

「拳王様、あれはもしかやガルダ將軍の手勢では」

ウサが潰走してくる機動部隊に向かつて、何があつたと大声で問いかけている。

そのころになるともう拳王軍の幹部、ザクも一軍を率いて主君を迎えに姿を見せていた。

何か思いを馳せて虚空を見つめる世紀末覇者の反応は薄い。

鎧兜の將軍ザクが、ウサとともに敗軍のなから重傷の指揮官を見つけ出し、問いかけた。

「ガルダ。お主ほどの男が、小さい村の攻略もできずに戻ってくるとは」

「……ほざけ髭野郎。てめえのように後方でふんぞり返って督戦するお偉いさんとはわけが違う。オレが戦っていたのはてめえの何十人分も強え疾風の拳だ」

灰色のつんつん髪かしよくの青年が口汚く吠えたてた。

興奮しているようで、これほどまでに僚友を罵るのは珍しい。

体中傷だらけ、胴着や防具が破壊された状態の手負いの將軍が、血の混じった唾をぺつと吐き捨てた。

ウサも南斗尉じょうちようけん鳥拳の使い手が、余裕をなくした口調で息を切らせているのを初めて見た。

こつぴどく敗れたと一見にしてわかるその様相に、影の小男が誰にやられたのか尋ねてみた。

「ガルダ將軍を敗走させるほどの難敵……それがあの村にいたということですか」

「いたというより邪魔されたというほうが正しい。いきなりあらわれやがった。隻眼のクソ野郎……」

「……隻眼、まさか」

「察しがいいなハゲ。そうだあいつだ。独眼竜」

「ダガール?! 妖星め、拳王様に横槍を入れる前に、腹心まで近辺に派遣していたのか」  
毛根のない頭に手をやってむむむと唸るウサの隣で、ザクが驚愕の声を上げて馬上の主君を窺った。

満身創痕の南斗の拳士が陸戦隊の將軍の説明を聞き、ユダ、あいつかと表情を歪めている。

そして黒王号の主に皮肉な目を向けて言った。

「なるほどあのお方すら深い傷を負っている。オレが奴の腹心に後れを取っても失態に値せんな」

「……拳王様は黄金の牙と赤い衝撃を相手に連戦されたのだ。いかに隼が相手といえど、一蹴されたお主と同じにするでない！」

「まじか」

極星と妖星。

南斗の頂点の男たちを撤退させたと知ったガルダの驚きようは尋常ではなかったが、ザクから不甲斐ないと煽られたことで、再度激昂した。

地団太を踏んでいる。

「あいつも無傷じゃねえ、当分影働きができねえほど斬りたくってやったぜ。オレのほうがちよびつと傷が深いだけだ」

「さすがは独眼竜。六星以外の南斗においては最強か……ユダといい、あの勢力は小さいながらもわれらが覇者の最大の敵となるかもしれないな」

「ヤロウ無視しやがったな、死ね！」

「巻き込まんといて。ワシはあんたらと違ってもう若くないのよ」

ガルダがザクに掴みかかる。

それを察したウサが跳ねながら逃げていく。

その間も世紀末覇者は空を見上げていた。

目覚めるための誰かは今どこにいるのか。

ケンシロウと旅をしていることなど、さすがにラオウは知らずにいた。

## 三十九話 弟子との再会

世紀末覇者が赤い衝撃と相討つ形で傷を負い、自領へ引き返した。

それは拳王軍の領土拡大のスピードが停止することを意味する。

そんな龍虎の静養の間に躍進したのは帝都であった。

他に中小の軍閥も蠢動しゅんどうし始めている。

そのなかで銀の聖者は村で一定の治療を受けた後、慈母の星の本拠となるべくサザンクロスに旅立っていった。

最も重症であった金髪の青年はまだ出立できず、彼はトキの共として死神とレスティエをつけて送り出している。

ちなみのその一行のなかに、リンとバットという子供たちがいたのだが、トキや韋駄天、女性の影がいる以上何の問題もない。

蘭山紅拳のベラは年老いた母親を静養させる理由で、シンと同じく村に滞在中であった。

体が九分九厘死んでいようと、自分の食い扶持は自分で稼ぐ。

起き上がれるようになってすぐ、彼はベラに村を託し、水や食料の調達に出かけた。

旅に出て一日も経たぬうちに、野盗や軍閥の部隊といった面々と遭遇したが、それは拳王という重石が無くなったことの証でもあった。

「ラオウ隠れてさらに乱れるか。あの男の覇権を阻むことが果たして……」

野盗に亡き者にされた親子を埋葬し終えたシンが立ち上がる。

少し離れた場所では、彼の怒りに触れた数十人のならず者が六花八裂となつて屍をさらしているのが見えた。

§ § § § § §

かつては教会であつた場所において、一對の男女が結婚式を挙げている。

二人だけで神を象かんじつたものに祈りを捧げている。

シンは感無量で、夫婦となつた見知らぬ若い男女を遠くから眺めていた。

あれがユリアが望む世界だ。

それを改めて実感した彼が踵を返したとき、二輪駆動にまたがる何者かが同じように教会を見つめていたことに気付いた。

エンジンを切つたその相手が震える声で自分の名を呼ぶ。

彼は珍しく戸惑いながら、女らしき体格のライダーを窺う。

フルフェイスのヘルメットを脱いだそこから、クセのある長い黒髪がこぼれ落ちた。若い女がそれをかき上げる。

この世紀末の世界においては、稀有と言つていいほどの美貌の持ち主だった。シンが思わず目を見開く。

「お前は」

「お久しぶりですね先生」

「……先生はよせ。もう戦争前のことだ」

その言葉に微笑んだのは、かつてシンに南斗聖拳を学んだ女、マミヤだった。

数年ぶりの邂逅に興奮したようで、彼女は立ち去ろうとする師のような人物を引き留めにかかる。

シンを屋内に引つ張つていった彼女は、ソファのようなものに座る相手の正面に腰かけ、その痛ましい姿を氣遣つていたものの、偶然の出会いに高ぶりは冷めやらぬ様子だった。

運命ですね、とまで言い切るライダースーツの美女が、シンに向かって水筒を投げ放った。

「お水です」

「もらつておこう」



「食料もありますよ?」

「それは自分で調達する」

「……本当に貴方は戦争前と何も変わらない」

人に頼らずぶつきらぼうで女に冷たい。

拗ねたよう呟くマミヤだが、彼にとつては自分の生徒であり、その無事は喜ばしい。いくつかの世間話の後、クセツ毛の美人は現在の状況を話し出した。

「ちゃんと村人として暮らしてる、と言いたいけど……少し前に衝撃的な人と何人も会って。今はなんとなしの一人旅です」

続けて彼女が語った内容でシンが思わず水を吹きかけた。

いたずらっぽく語るマミヤの話聞きながら、天邪鬼な彼がなんとか平静を装う。

南斗水鳥拳の使い手が村に現れた。

すぐあとに負傷中の北斗神拳伝承者も用心棒として姿を見せる。

牙一族という集団が以前から村周辺で暗躍していたが、実際襲撃してきたところで彼らが撃退してくれた。

様々な紆余曲折を経て、南斗の男は妹を助け出して本懐を遂げ、北斗の男と友情を交わして人間の心を取り戻したという。

「そうそう、ケンが連れていた女の人わたしにそっくりで」

「……」

「わたしは南斗聖拳を学んでいたつて知ったら、色々話してくれました。レイやケンも当然知っていましたよ、貴方のことを」

シンが返した水筒を受け取り、当たり前前のようにそれを口に含む美人が、ふうと息をついて小さく笑っていた。

「つれない人。不器用で頑固で……誠実すぎて逆に女を不幸にする人」

前世の自分の悪行を知れば、この女はどう思うだろうか。

そうシンは考えたが是非もない。視線をさまよわせるばかりだった。彼女が長い足を組む。

ライダースーツのピツタリ感で体の線が浮き上がり、そのスタイルの良さを誇らしげに見せつけているようだった。

それにしても、とママヤが言った。

「わたしに似ているあの人は見る目がない」

いきなりそう言い切った美女は、再度足を組み直す。

「ほんとうに……男を見る目がない」

膝に肘をつき、シンを覗き込むようにして同じセリフを繰り返した。

指にクセ毛をからませた彼女がふと目元を和ませる。

「趣味が違ってよかったです」と思います」

「……」

「ケンはいいい人だけど、わたしには重苦しくて」

「友としては何とも言えん」

「あ、レイもいい男なんだけど……人間に戻った本当の彼は純粹すぎて、以前の姿を知っているぶん、なんだか」

偉そうに品定めをしているが、それに値する美女なのだから始末に悪い。

そんな相手が固形食糧を半分ちぎって投げてきた。

「おいしいですから、これ」

「ああ」

「重苦しすぎず純粹過ぎない……彼らを上回る美男子。そして何よりも強い。あの二人ほどの拳士が自分より強い、と断言してたんですよ。手放しの賛辞でした」

そんな条件のいい男がこの世にいますかね、と彼女が尋ねてくる。

そう問われるも答えようがなく、シンは固形食糧を口に放り込んだ。

その姿を見てまたママヤが微笑んだ。

戦争前の、ともすれば生真面目な彼女とは少し氣質が違って思うように思える。

それが相手に伝わったのか、慈母の星にも負けない美貌の主が、乱世ですから、とふ

てくされたように背もたれに倒れこんだ。

そんな彼女が思いついたように勢いよく起き上がった。

「なんだ」

「わたし、あの人にそっくりですよね？」

「……そうだな」

「身代わりになりませんか。少し髪をとかして大人しくすればそっくりに」

「……」

「影武者です。わたしならある程度拳法の心得がありますし、何より無駄に健康ですから」

核戦争前ならばともかく、この乱世においては改めて有用かとシンが考え込む。

実際、ケンシロウがユリアを連れている現在よりも、自分がユリアを連れ回していた過去を知る軍閥が多いのは事実だ。

「こつちに目を向けさせることで、あの人に迫る危険を回避できるかもしれません」

「……」

「先生への恩返し。今こそさせてください」

「しかし」

「優先させるべきはあの人でしょう。使い勝手がいいですよわたし」

目を輝かせる美女の積極性に少なからずうろたえて、彼は黙り込んだ。

「その前にボロボロの貴方を放っておけません。どこかで療養しましょ」

姿形は似ていてもユリアと違いすぎる。

そんな人柄に戸惑うシンながら、押しの強さで同行巻けて行動を共にすることにした。

た。

§

§

§

§

§

荒野を走る。バイクを運転するのは金髪の青年だった。

後部座席の女があれ、と遠くを指さした。

長時間走り続け、ようやくとある里を見つけてそこで休憩をとることにしたのだが、

出入り口にも見張り台にもなぜか人がいない。

「内から女の悲鳴と……男たちの怒号が聞こえる。何かあったんでしょうか」

ヘルメットを脱いだ彼女が耳を澄ませている。

待っていると告げた運転手がバリケードを飛び越えた。

里のなかは外観から思えないほど栄えている。

老人たちより子供の数のほうが多い。

侵入者である彼にぎよつとした顔を見せるものの、今はそれどころではないといった体で、若者たちが平屋の白い建物に入っていくのが見えた。

悲鳴や怒号の発生源を見つけたシンが、屋根に飛び上がり、割れたガラス窓から屋内を見下ろす。

「今のオレは機嫌が悪い。手を出せば死ぬぞ」

タンクトップ姿、短い黒髪の男が、大柄な男が率いる集団と風呂場の中で睨みあっている。

悲鳴を上げて逃げ惑う若い女たちは、当然にして全裸だった。

そんなけたたましい効果音のなか、黒髪の男前は、連れの帽子姿の男たち二人を突き飛ばしている。

もう一度同じように告げた彼の言葉で、長と手下たちがどつと沸いた。

「色ボケの覗き野郎、おめえみてえなチビがどうやったらボスをぶつ殺せるって言うんだよ」

土星の輪のような髪型の長はかなりの巨漢だった。

それに比べれば小さいだけで、男前の身長は低くはない。

彼の背中を見ていたシンがその横顔を確認した。

やたら不機嫌な彼の名を思い出す。

ジユウザという男がボスと呼ばれた者を指さして低く唸った。

「御託はいいからかかってこいクソヤロウ！」

「……てめえ死んだぜ」

ゲルガと名乗った大男がバン、と掌てのひらを合わせて気合を入れた。

ジユウザがおつという顔をしている。

「泰山破奪剛」

突き入れた剛腕はジユウザにあつさりかわされた。

それでもその衝撃は凄まじい。

素手で石畳の床を割つてを抉り、浴場を半壊させていく。

「むう……こんな小さい里にこれほどの猛者がいようとは」

ジユウザの連れ二人が冷や汗を流して顔を見合わせている。

その帽子に五車星の印がついているのを、屋根の上の青年は見た。

「すばしいネズミめ！」

「フン」

さらに勢いを増した破奪剛が標的を撃ち抜こうとしたとき、ジユウザが初めて構えた。

彼の両腕がゲルガの剛腕をねじ切ろうとしたとき、シンは屋根から飛び降りた。

「うっ」

里の長が片腕を抑えて後退する。

ねじ切られる前にその回転から抜け出せたものの、その利き腕は折れているようだった。

黒髪の男が乱入者と組みあう。それが誰かを知って舌打ちを放っていた。

「てめえは」

我流の拳の手首は捕らえられ、ビクともしない。

周囲のおおっという歓声にまぎれて、五車星の使い二人があれば極星！ と一番大きく叫んでいた。

「シン……なんでてめえがこんなところに」

「それは俺の台詞だ。覗き野郎ということは女風呂に侵入したのはお前のほうだろう」

「だからどうした?!」

雲が不機嫌そうに唸る。

傷だらけの男は相手の手首を放して言った。

「正当な理由で防犯にやってきた長を逆ギレで殺そうとする。飄々ひよひようとしたいつもの調子はどうした。あれはポーズだけか？」

「……死にてえのかガキい」



「やってみろ。お前ごときに後れを取るような南斗聖拳ではない」

こめかみに血管を浮かび上げらせた男前が外に出る、と顎をしゃくった。

腕を抑えるゲルガの肩をポンと叩いた青年が彼の後に続く。

そこへ五車の使い二人がお待ちくださいと駆け寄った。

「シン様、あのお方と旅をしていたはずでは」

「……あれは」

「なにごちやごちや言つてやがる。早く来やがれ！」

「せつかちな男だ」

建物の外に出た二人が対峙する。

支配者であるゲルガとならず者に見える自衛団、そのほか女子供や老人も、珍しい騒動だとして里中から集まってきた。

「始める前にひとつ聞いておくれ。てめえあの女はどうした」

「忘れた」

「ああ?!」

「他の女を気にしている場合か、女々しい男め。その精神を叩き直してやる。かかって

ハッ」

「殺す……!」

ジウウザが飛び掛かった。

その影すら見ることができず、人々はえっと左右に首を振るばかりだった。至近距離で放つ態勢の蹴りを、シンが手の甲で受けようとしたが消えてなくなった。四方から繰り出されるその動きは無軌道だった。

かろうじて見えたのか、ゲルガだけがうおつと雄たけびを放っている。

彼の片足を両腕で支え、その蹴撃を受け止め切ったシンが、ふうと息をついた。痺れて感覚がなくなるほどの威力だ。青年の表情が歪んでいた。

里の長があれを見切るかあオイ?! と驚愕の声を上げている。

膝についてバランスを安定させなければ吹き飛んでいたほどの蹴りに、ジウウザの怒りのほどがよくわかる。

象徴を匂わせる台詞は厳禁だ、と五車の使いたちが痛感していた。

「変幻自在、わが型に定石はない。大戦前の借りを返してやるぜ若僧」

見た目は若いがラオウと同世代、シンにとっては十歳以上も年上である。雲の異名を持つ男が眉を寄せた。

膝を折ったまま立ち上がらない相手の不調に違和感を感じつつも、大言の責任を負わせようと渾身の正拳突きを放った。

見物客の悲鳴が上がる。

「……!!」

何者かが間に入ってきたことで、ジユウザが拳を止めた。

男ならそのままぶちのめしていたところだが、彼は怒り心頭のなかでもフェミニストだった。

邪魔をした女を見下ろす。シンをかばって身構えている。

その容貌に気付いた彼が、あらゆる意味で度肝を抜かれて立ち尽くしていた。

五車の使いたちもええっ?! と素っ頓狂な声を発している。

「ユ」

言いかけた雲が手で口を覆った。

体を震わせてその女に近づく。ユリア、と呟き、夢見ていた存在に手を伸ばそうとした。

「触るな!!」

強く手を跳ねのけられたジユウザが、えっという表情で女を見下ろす。

すさまじい敵愾心とともに睨みつけてくる美しい面に、彼がうろたえた。

ユリアオレだ、と表情を和らげて膝を折る。

顔を近づけたことでようやく違和感を覚えたようだ。

幼馴染であり異母兄妹の間柄で気付かぬはずもない。

顔立ちは似ていたが、その長い髪 of 質や、滲み出る雰囲気 that 清楚なあの娘とはまるで違う。

「お、お前はユリアではないのか……」

小声でそう呼びかけられた女が、シンを抱きしめて鼻で笑う。

血管が千切れそうないでそれを見つめたジユウザが、気の強すぎる美人の一喝で我に返った。

「わたしはママヤ、あんたのいう象徴じゃない。気安く触れるな」

怒りを削がれた雲が躊躇しながらも立ち上がる。

「どうですシン。あの男でさえわたしをあの人と見間違う。影として使えるとは思いませんか」

「……かもしれんな」

疲労の色が濃い金髪の青年が、美女に助け起こされている。

腕を組み、片足で地団太踏みながら、ジユウザがけつと吐き捨てた。

嫉妬じゃねえぞ、という言い分を信じる里の者は誰もいなかった。

慈母の星に似たママヤという女が影という台詞を発したことで、五車の使い二人が顔を見合せている。

ジユウザ様これで失礼します、と慌てて去っていく彼らにジユウザは何も言わなかつ

た。

ユリアに利がある企みだとわかつているのだろう。

殺り合う気をすっかりなくした雲が、不貞腐れたまま因縁の相手に向かつて言った。

「シンてめえ……満身創痍じゃねえか。それでオレにケンカを吹っ掛けたのか」

「戦争後もお前が壮士なのか知りたくてな」

「昔とは違う。生きたいように生きるためには力がある。その修練を怠るものかよ」

吐き捨てた彼が、シンからユリアの行先を知らされて表情を改めた。

「ラオウが隠れた以上、天帝やほかの勢力がサザンクロスへ侵攻しないとは限らない。

「オレもその街へ行けつていうんじゃねえだろうな」

「他の五車が集まるそうだ。おそらくユリアもお前に」

「……北斗の末弟がいるならその必要はねえな」

肩をすくめたジユウザが踵を返す。

その背にシンが告げた。

「あれが元気でいるうちに会っていけ」

「……なんだと?！」

「トキがなんとかしてくるだろうが、万全の確証はない」

ちつと舌打ちを放った彼が、わーったよと不承不承に消えていった。

野次馬たちが去っていく。

シンがゲルガに近寄る。

その腕は大丈夫かと問われ、見た目は極悪人ながら気の良い巨漢は、がはははと笑ってその腕を叩いていた。

「なーにそのうちひつつくだろ、問題ねえ。それよりあれがジウザだって知らずにケンカ売っちゃったぜ、危うく死ぬところだった」

命拾いした大男がその礼に歓待する、とシンに肩を組んできた。

手を叩いて女たちを呼ぶ。

この乱世、彼の剛腕で不自由なく暮らしている彼女たちが、当たり前のような顔をしてやってきた。

その薄着な恰好にマミヤが目を怒らせる。

師に近寄るな、と叫ぶやかましい女はこの里の誰よりも美人であった。

そんなマミヤに女たらしの支配者が口説こうとしたものの、彼女の機嫌は最悪だった。

シンとしてはせつかくの逗留所を失ってはたまらない。

南斗聖拳を奮おうとする弟子を押しとどめ、水や食料などの提供を求める。

その代わりに労働力を駆使することになった。

地下水くみ上げの作業に勤しむ彼を心配するママヤは、シンが弟のように見えるのだらう。

## 四十話

## 余波

拳王倒れるの報を聞いた各地の軍閥は、急速に勢力を拡張した世紀末覇者の領分を侵し始めた。

彼の配下の軍勢は多士済済の人材がいるのもので、各地の鎮圧に追わる日々が続く。

戦線後退、支配地域縮小の流れにあたり、その消極性につけこむ敵も数多い。

「拳王軍などラオウがいなければシヨンベンよ、徹底的に押し潰せ」

野盗や中小の軍閥までもが共闘する状況になっている。

「ネズミどもめ生かして帰さんぞ」

拳王軍創成の時期から配下だったという女剣士が、ならず者どもを双刀で迎え撃ち、あつという間に数人を斬り殺した。

その近くにいる男の蹴りで、モヒカンたちが円状に吹き飛んでいく。

「他の部隊は壊滅したようだな、レイナ」

「残念ながら。指揮系統が生き残っているのはあたしとソウガ兄さんの二軍だけです」

「……まさに拳王包囲網。皇帝の残存勢力も敵に回るとは」

妹は親衛隊長、彼は軍師として軍団のなかで重職にあった。



武張った集団でしかない拳王の兵に戦術や兵法を教えていたが、さすがに絶対権力者を欠いたまま包囲網を敷かれては、その知力も半減する。

リュウガやザク、バルガ、ガルダ、ヒルカといった手練れを要所に配置して内部を固め、絶対防衛圏の維持は万全だったもの、その外側の反乱の連続で、このところ彼の疲労の色が濃い。

「雑魚どものちよつかいならばまだよい。だが天帝の軍をはじめとする組織が相手となると、われら遊撃隊では厳しいな」

「ではリュウガたちを前線に」

「……その判断が狂えば拳王軍が内から滅ぶ」

レイナの剣で巨漢の野盗が手首を切られてもんどりうった。

「……なんてこと。あの赤い衝撃一人のために我らがここまで押し込まれるなんて」

「本人の意図ではない結果だがな」

ソウガがやるせない表情で舌打ちを放つ。

「もはやあれを倒せるのは拳王様ただひとり。報復として奴の領内にわが軍が侵攻したが……相手にもならず殲滅の憂き目にあつた。主だけではなく手下も手ごわい。当面ブルータウンには関わらないほうがよかろう」

「ほんと、憎らしいわ妖星め」

配下の鎧武者たちが指揮官二人の名を呼ぶ。

何事かと渦中に目をやると、そこには友軍の亡骸を越えて堂々と進みゆく一隊があった。

「あれは」

「南斗の旗……?」

目を凝らした兄妹に、側近の武將たちがあれはハッカとリロン兄弟です、と告げた。

「ハッカリロン……たしか聖帝軍の將軍」

「南斗飛燕拳の使い手か。サウザー亡き後は野に下ったはず。この状況において再び立ち上がったようですね」

「まずいな」

「ええ」

兄弟が凄まじい気を発しながら兄妹のもとへやってきた。

その二人の双眼は血走っている。

「サウザー様の崩御に伴ってようやく動き出したふぬけの拳王。その残党どもは皆殺しだ……!」

彼らの怒気に配下たちが後ずさる。

だが別大陸出身であるレイナとソウガは、相手の殺気を受けても平然としていた。

「ふぬけはお前だろう。拳王様がお隠れになったことで安心して出てきたか」

「だいたい将星を倒したのは南斗の極星でしょう。ラオウ様は関係ない」

軍師と親衛隊長の返答を彼らは鼻で笑った。

「聖帝自らあの若僧に仇討はならんと仰せになられた。そうでなくとも主を倒したあの金髪の男。赤毛以外の南斗が倒せる存在ではない」

「まさにふぬけ。どの口で拳王様にほざくか」

「覇者を名乗りながら器の小さい行動に塗れた暴狂星。きやつがふぬけでなくてなんだというのだ女……指揮官のお前らはとくに念入りに殺してやる！」

§ § § § §

「お§§いいの§§かよ、ソウガの野郎から主要都市を守って言われてたろ」

「手勢は置いてきた。このリュウガ一人なら問題あるまい。そういうお前も持ち場を離れて前線に來たではないか」

「けつ。おらあ兄者の配下じゃねえんだ。兄弟のよしみで少し動こうって気分になっただけだ」

「見えたぞ。あそこに兄妹がいるはずだ……ん？」

泰山天狼拳の使い手が最前線の戦況を見て眉を寄せた。

状況を察してひとりですの場に駆け込んだ彼は、倒れているのがほとんど友軍だということに衝撃を受け、馬から飛び降りた。

レイナとソウガは善戦したようだが、他のならず者ならばともかく、相手が悪かった。「南斗百八派のひとつ、南斗飛燕拳……傷は与えたが妹を執拗に狙われてこのざまだ」兄を助け起こしながら、リュウガが妹を見る。

昏倒しているのか意識がなく、草地に突っ伏していた。

ハツカとリロンが残った拳王軍をあらかた斬り捨てたのか、こちらに戻ってくる。

「貴様はリュウガ……要地で防衛に当たっていたのではなかったのか」

「お前たちのような手練れが湧いてきたことで戦況が変わった」

銀色の髪的美男子を大敵と見たのか、二人は髪のを逆立てて気合を溜めている。

「拳王配下屈指の拳士たる天狼を討ち取ればその影響は計り知れん。ここで死んでもらうぞ」

構えだす南斗の兄弟を見て、リュウガが立ち上がった。

ソウガがよせと呼び止める。

「お前ほどの男が討たれれば……わが軍は士氣的に壊滅する。やつらの連携奥義をひとりで見切ることは難しい、こいつは」

「心配するな。口も性格も悪いが、頼りになる人物を連れてきた」

リュウガが背後を振り返る。

肩を鳴らしながらやってきたヘルメット男が、レイナを起き上がらせて生き残りの兵に任せている。

その兄が驚いて言った。

「貴方は」

「なかなかボコられたようだなソウガ。つたく世話のかかる野郎だ。軍師なら後方で鎮座しとけ」

鋼のような筋肉を持つ男の声に、ハツカとリロンが反応した。

「そのダメ声……そのヘルメットに防具。そうか貴様は北斗の落ちこぼれ、三男のジャギだな」

指をさす二人が侮蔑の声を上げた。

四兄弟の中で師リュウケンに当て馬、と揶揄された男だと嘲笑している。

レイナがおのれつと牙を剥いて刀を抜こうとした。それをジャギが制した。

彼が立ち上がる。

その様子にソウガが口角を上げた。

「リュウガ、なかなかの曲者を連れてきてくれたな。だが感謝しておく」

「その風体言動から過小評価されがちだがな。あの南斗どもはすぐ思い知ることになる」

リュウガがジャギと同時に身構えた。

「片方はもらったぞ」

「……なんでえ。二人相手だからちよいと気合を入れたのによ」

「こやつらを倒せば周辺の敵部隊など相手ではない。まずはかの首を取る」

その大言を聞いた南斗の兄弟が高笑いをしながら跳躍した。

「落ちこぼれと泰山ごときに南斗聖拳が遅れをとると思つたか、まぬけども！」

「ジャギ様、リュウガ様！」

レイナが叫ぶ。ジャギが飛び上がり、リュウガは地上で天狼の凍気を溜めていた。

「死ねえ南斗燕舞刃!!」

リロンが下から飛び上がってきたジャギに裂帛の斬撃を放つ。

その爪は彼の手の甲に遮られ、鬨気はあさつてに流された。

「なっ」

「南斗はちよいと心得があつてよ。稽古をつけてもらつたことがある。金髪の若僧にだ」

「ほざけ落第者め……」

「とりあえずな、おめえには口がすぎる代償を払ってもらわなくちゃいけねえ。南斗で相手してやるよ」

「舐めるな！」

組み合つて落ちていく二人が何度かの攻防のあと、落ちこぼれと笑われたほうが上になつた。

その凄まじい剛腕にリロンの表情が歪む。

「ぐっ……い……この」

「力でおれいに敵うとおもつてんのか、その細腕だよ」

ジャギが指突の構えを示した。

南斗邪狼撃じやろうげきと呼ばれたその貫手は音もなくリロンの掌を突き抜け、そのまま胸を貫通

していく。

そして二人は地上に激突した。

「バカな……そんなバカな……い……リロンほどの男があんな落ちこぼれに」

ハツカが髭とともに声を震わせる。

ゆらりと身を起こしたのは、上になつていたヘルメットの男のほうだった。

ジャギがノンノンと人差し指を振つて答えた。

「あのなあ、勘違いしすぎなんだよおめえらは。誰と比べて落ちこぼれつて思つてるん

だつて話よ」

不世出の剛拳の持ち主、世紀末覇者ラオウ。

北斗二千年の歴史のなかで白眉と言われる華麗な男トキ。

リュウケンが認めた北斗神拳伝承者ケンシロウ。

それと比較して一体誰がひけをとらないというのか。

現存する拳士のなかで、彼らと比肩しうるのは南斗においては二人、元斗においては一人。

せいぜい三人程度だ。

北斗の分派を含めたとしても数人。両の手に余る。

北斗神拳伝承者争いに最後まで残つたという時点で、本来は評価されてしかなるべきなのだ。

「シン、ユダ、ファルコ。そのほか二、三人。おめえはそいつらに匹敵するつてのか？

恐れ多くて涙が出るぜ」

「……」

「おかげさんで侮つてくれる小物が多くてよ。おれいの奇襲でみんな切り裂けるか弾け飛んじまう。逆に楽な話さ。そんなバカなつて死んでいくあほうどもが後を絶たねえ」

ジャギが今度こそ北斗神拳の構えを見せた。



「おめえには北斗の拳を食らわせてやる。ありがたいと思え」

「くっ」

形勢不利と悟ったハツカが大きく跳躍した。

退散しようとする身軽な相手を見上げてあらまと呟いた男が、そのそばで気合を溜めていた同僚が天狼の拳を撃ち放つのを察した。

「あつ、コラてめ」

「天狼咬裂弾」  
こうれつだん

凍気を纏まとったリュウガが、ハツカの着地点に目掛けて水平に飛行していく。

それに気付いた南斗の拳士が降り立つと同時に斬撃で迎え撃つたが、天狼の牙は飛燕の翼を噛み破った。

「か、あぐ」

片腕がねじ切られて宙を舞う。

そのまま喉に氷の削撃さくげきを食らった百八派の拳士は、受け身も取れず地面に倒れこみ、急所を撃ち抜かれたことでそのまま即死した。

優雅に立ち上がる同僚に向かって、ジャギが声を荒げた。

「てめえ……リュウガ。必殺技の時間稼ぎにおれいを利用しやがったな?!」

「おかげで手間がかからずに済んだ」

ハツカとリロンが続けて倒されたことで、彼らの部隊は散り散りになって逃げ惑った。

その様子を眺めていたソウガが、妹に寄り添われながらさすがだ、と独語する。

「わが軍を翻弄できる南斗の上位拳士があのだ二人にかかれば即殺か。リュウガとともにあのジャギは、やはり拳王軍になくなくてはならぬ存在」

「北斗南斗の拳を駆使する食わせ者の需要は大きい。各地の鎮庄にあの剛腕を奮つてもらいましょう」

「おい兄妹ども、過重労働させようつてんじやねえだろうな。おりやもう帰つて酒飲んで寝るぞ」

その襟首をリュウガが掴む。兄妹に向かって天狼が言った。

「内部には戻らずこのまま各地を転戦する。双方ともそれでよいか」

「頼む。ただ相手が元斗などの強敵であれば時勢を読んで撤退してくれ。お前たちを失えば組織が崩壊する」

「そのときは内で防衛に当たっている逸材を呼び出せ。拳王軍には知られていない猛者どもがまだまだいる」

「領内中枢部の治安が悪くなるぞ……」

頭を痛める軍師にお前の仕事だと言ひ残し、リュウガが北斗の三弟を引つ張つてい

く。

やめろお働きたくないともがくジャギの声が遠くなつていった。

それを見送っていた兄妹が伝令の報告にまた青ざめる。

各地のならず者どもの侵攻がやまないなか、ついに帝都の正規軍が動き出したというのだ。

元斗の將軍、ボルツが私兵を率いてメデイスンシティーを襲つた規模より上らしい。

「内部から諸將を呼び出さねばならんか」

ソウガの苦悩が色濃く表情に出る。

それを窺つたレイナが一時兄と戦線を別にすることにした。

行先は主ラオウの潜伏先だ。

§ § § § § §  
夜でも明りに照らされた帝都の実権を握るのは元斗ではなく、総督ジャコウという男  
だった。

わが言葉は天帝の言葉、と偽つてその支配にあたつている。

天帝に絶対の忠誠を誓う元斗の拳士たちを顎で使える理由はひとつ、忠誠の対象その

ものを人質にしている、という体を装って、彼らを恫喝していたからだだった。

老年に近いその男がファルコや元斗の將軍たちを外征に派遣し、周囲を側近で固めたあとで宮殿に籠り、贅沢三昧の日々を送っている。

そんな宴会のなかでジャコウはスキンヘッドの息子二人に問いかけた。

「ジャスク、シーノ。天帝……いやあのガキの行方はどうなっている？」

髪の毛がある親の質問に、ない息子たちが豪華なソファに寝そべりながら答えた。

「野垂れ死ぬように荒野へ放り出した後はどうなったか知らねえな。まあある程度地域は絞れるけどよ……そもそもいねえのにここにいてるって匂わせる芝居が疲れたから、ファルコどもを辺境にやったんじゃないかねえのか」

「……金色どもが敗れたときの保険で、あのガキは戻したほうがよいと思ってるな」

「あのガキの居場所が大体わかっているってんなら、おれさまが探しに行こう。規律規律とうるせえファルコがいけないことだし、外で派手に略奪してくらあ」

マスク姿のシーノが酒瓶を手にしたまま、ソファから立ち上がった。

宮殿の中で閉じこもっているのは飽きたと言いたげだった。

ジャスクは鼻から何かを吸い込んでいる。

そういう薬物的なものを忌避する総督の次男が、快樂は暴力と女よと下卑た笑いを浮かべて広間を出ていった。

## 四十一話 サザンクロス

南の孤島に建設された城塞、サザンクロス。

海に囲まれ、さらに城壁で守られた街にやってきたケンシロウとユリアが、先回りしていた五車の面々に迎え入れられた。

海のりハク、その娘トウ、山のフドウ、炎のシュレン、風のヒューイ。

雲を除く彼らが全部隊を率いて当地に常駐している。

二人を迎えた時点で、シンとのつながりがある南斗の拳士ダンテや、その友ナリマンなど、正統血統直属ではないものの存在もあり、守勢を専らとするものの、サザンクロスは各地の軍閥も無視できないほどの一大勢力と化していた。

放浪癖がある胸に七つの傷を持つ男も、今回はかりはこの街で腰を据える気になっている。

体調が優れない恋人に、寝食が足りた状態で十分に療養してもらおう。

そしてそのうち北斗の次兄がやってくる、と聞いたケンシロウが安堵の息を放った。

「トキ……生きていてくれたか」

「彼の共にはリンとバットという子供がいるとか。ケンシロウ様の知り合いですかな」

リハクに言われてケンシロウが頷く。

五車筆頭のこの壮年の男がサザンクロススの政治を担当し、フドウなどが軍事を担当する以上、北斗神拳伝承者としての彼に後顧の憂いはない。

またシンが送ってきた人材も手練れであり、各地域を防衛するに足る達人たちばかりだった。

ふと気付いて彼が眩く。

「……まさか兄をここに派遣してくれたのは」

「それはお心に留めておいて下され。とくにユリア様にはけして」

リハクの表情にケンシロウがうむと答えたが、この街を建てた周到な用意といい、その他幼馴染の行動には驚かされるばかりだった。

自分の彼女に対する想いが足らぬのか、と時々考えさせられるほどだった。

「ケンシロウ様、ひとまずトキ様があのお方を治療し、病状が快復に向かうまで、この街に留まってもらいますぞ」

「わかつている」

「それまで拳王や帝都、その他の軍閥は海という壁がある程度阻んでくれましょう。それ」

海の男が咳払いをしながら、南斗の男としての見解を口にする。

われらが慈母星には極星と妖星あり。

かの者は南斗の双壁。

象徴を守るために死んでくれるでしようと言いつつ切った。

サウザーを倒したシン、ラオウを退けたユダ。

ユリアを奪い、覇権を目指そうとした男たちはいずれも彼女の守護星に阻まれていく。

それに対しおれはどうだ。

確かにいくつかのならず者、牙一族やゴッドランド、ジャツカルとデビルリバーなどを駆逐したものの、それらは世界を変えるほどの戦略的な効果はない。

ユリアが望む世を創るために、聖帝や拳王と戦った彼らほど目立つ働きはしていない。

そんな黒髪の青年の葛藤を感じたりハクが、その横顔を見た。

「今の己の役目は理解しているはずだが……」

「あの二人は武勇を奮うが宿命。貴方はユリア様とともにいるという、他の誰にもできない使命があります。それをわかっているからこそシン様は」

「……ああ」

サザンクロスの城から見えるのは、眼下の街並みと水平線だった。

北斗神拳伝承者の握り拳はわずかに震えている。

耐えることもまた使命だと壮年の男は思った。

ケンシロウはまだ若い。

いずれ彼こそが世紀末救世主になるのだと、その点では僅かのゆらぎもなく確信しているリハクなのだった。

§ § § § §

ゲルガの村で数日逗留した後、バイクに乗ったシンはマミヤを連れて荒野を駆けていった。

旅先で聞くのは、ラオウが隠れて拳王軍が弱体化したこと。

それによつて大陸全体の治安が一層悪化したこと。

その混乱を衝いて帝都という大勢力が動き始めたという、きな臭い情報ばかりだった。

そんな道中、弟子の懇願によつて彼女の両親が住む村に立ち寄ったとき、金髪の青年はいつぶりか、同門の拳士と再会することになった。

ライトブルーの髪的美男子だ。



「ママヤが父と母に一時帰還の挨拶へ向かったとき、出迎える村人たちのなかで顔を合わせた二人は、<sup>ひとけ</sup>人気のない場所では言葉を交わすことにした。

シンは南斗水鳥拳の伝承者が以前に会った顔とはまるで違っていることに言及し、それはわが幼馴染と出会ったためだろう、と告げる。

レイが感慨深く頷いた。

「ケンには妹を助けてもらったただけではなく、あれの目も治してもらった。奴にこの村を頼まれた以上、その恩に報いる意味でおれはここを動けない」

ママヤと行動を共にしていたシンに向ける彼の視線は、少々複雑なものだった。

それはそれとして、レイはすぐに話題を変えた。

「知っているか。帝都のことだ」

「ああ、聞いている」

「おれがいる以上この村は何の問題もないとして……われらが南斗の仁星が帝都の侵略に対して再び立ち上がったことは知るまい」

サウザー健在の間は、彼は病に伏していたという。

戦争以降初めて聞いた闘将の名を、金髪の青年は驚きながら聞いていた。

「シユウが一団を指揮するとなれば天帝はともかく、他の軍閥などは容易に動けまい。彼がいるだけで抑止になる」

「うむ」

「お前もいずれ仁星と会うことになるだろう。そして彼は南斗百八派の誰よりもこの世に必要な男だ」

レイの断言に、満腔の意をもってシンが首を縦に振る。

「妹やマミヤの両親が、この村から動けないおれが……どの口で言うのかと思うかもしれないが」

「そんなことはない。シウは南斗の拳士でなくとも得難い仁者。トキと同じくけして失ってはならぬ光だ」

そのために自分や妖星のように戦うしか能がない男がいる。

ユダがこの台詞を聞けば、口角を上げて渋く笑うであろう。

しばらく滞在してからまた旅立つと口にしたシンが、崩れた建物の奥からやってきた女たちに気付く。

振り向いたレイが紹介する、と告げた。

「あれは妹のアイリだ。この男はおれとともに南斗聖拳を学んだ同門」

兄妹といえど髪の色は全く違う。

その程度の認識でシンがおじぎをするアイリを見た。

その彼女がマミヤに耳打ちしている。

クセのある長い黒髪の美女が何を聞いたのか、眉を寄せていた。

レイがそんな妹の様子に声を荒げる。

「おいアイリ、今なんと言った？」

「聞こえてたの兄さん」

「お前の声を聞き逃すはずもない。奥ゆかしいお前が、ケンと会った時も普段と変わらなかつたお前が……なんだその羞恥の表情は！」

「だってほらこの人……黄金の髪的美男子じゃない。こんなハンサムな人初めて見たから」

「い、色気づくにはまだ早い！」

「もう十八よわたしは」

いきなりの兄妹げんかが始まった。

ママヤがいきましたよ、とささやき、師の手を取る。

彼女の先導でこの場を後にしようとしたシンだが、気安く手をつないでいる、とレイに見咎められ、二つの意味であやうく決闘騒ぎになりかけた。

§ どうやらこの村を後にするのは早くなりそうだとシンは思った。

§ § § § § §

領内に潜んでいるラオウの隠れ家を知っているのは、側近でもごく一部だった。

ザクやバルガといった將軍、見た目や所作は怪しいが、忠実な影のウサ、あとはレイナやソウガといった拳王軍旗揚げから付き従ってきた者だけである。

情報屋としても小間使いとしても有能な小男が出先から戻り、主に状況を報告していた。

すぐそばにはバルガがいた。

直立不動の鎧武者が絶対君主の指示を待っている。

「前線にリュウガ殿やジャギ様を投入したのは正解であつたようで。サウザーの残党の一部を殲滅し、未だ領内を侵犯する他の勢力の排除にとりかかりました。あとは」

「天帝か」

バルガが思わず口を挟む。

ベッドに座る主の前で跪く小男は、肯定するように面を伏せた。

やはりあのとき総督ジャコウを殺しておくべきだった。

片足を差し出したファルコの矜持に応えたために、奴らは強大な勢力となり、ラオウ様が不在の間に軍勢を動かそうとしている。

正直ウサはそう思った。

しかし目の前の豪傑は、そんな行動を今も後悔していないようだ。

「金色ならばこのラオウが相手をする。だがそれ以外ならば」

「御意」

バルガが一礼する。

ファルコ以外の将軍もかなりの使い手なのだが、拳王配下たるもの、それくらいは撃退してみせいという無言の圧に、ウサが心の中でうへえとのけ反っていた。

それを面に出さず、影は別の報告を口にする。

「それと……南の孤島サザンクロスに」

「……金髪の若僧が秘密裏に建てた街か。そこにあれが入ったのか」

「はい。それと五車星も入城しました」

ラオウが初めて眉を動かした。

風、雲、炎、山、海の機動部隊は少数精鋭であり、率いる将は知勇の拳士であつて、彼らが強固な城塞に籠ったことは看過しえない状況だった。

「そこに……確定情報ではありませんが」

「……」

「さらに銀の聖者が加わるとか何とか」

それを聞いた北斗の長兄は、二つの石をぎりぎり握りしめている。

感慨に耽つてゐるようだった。

次の瞬間、バルガが姿勢を正して直立する。

反射的に俯いた北斗史上最強の剛拳の持ち主が、無意識であろう、回復の兆しを図るその石を粉々に握りつぶしていた。

以心伝心で主が何をしようとしているのか、大柄な忠臣にはわかつていた。

「バルガ、所定の守備に戻れ」

「はっ。ではウサがお供を」

「このラオウ一人で確かめに行く」

まだ傷が癒えぬ包帯だらけの体で立ち上がり、彼が肌着を手にとった。

將軍たる重厚な武人は敬礼を施していたが、影の小男は静かに頭を下げただけで何も言わなかった。

同時に親衛隊のレイナが到着した。

彼女も負傷の身で単独行動を遂げようとしている主の行動に、驚くばかりだった。

## 四十二話 塵芥

一組の少年少女が荒れた大地のなかで逃げていた。

少女のほうは盲目だった。

少年はその子の手を引き、後ろから追つてくるジープらしき車両から逃れようとしていた。

「にげろ逃げろガキいゝ。もう追い付くぞお」

ひやはははという下卑た笑い声の聞いた少年レンは、少女ルイをかばって背中を見せた。

ならず者の鞭が彼の頬をかすめた。

薙ぎ飛ばされたレンの声でルイが悲鳴を上げる。

「つまらねえなもう終わりか。男のガキには用がねえ。女のガキは色々を使い勝手が」  
その台詞を聞いたレンが震えながらも立ち上がる。

「お前らみたいになクズどもに……ルイは渡さない」

「おっおっ、ほぎきやがる。いい根性してんなあ」

「その子に触れるな！」

モヒカンの一人がジープから降りてきた。

ルイの元へ近寄ろうとしたものの、その背中へレンが飛び掛かる。

「つゝの」

茶髪を掴まれた少年が、ごつい男によって地に叩き落された。

その音を聞いたルイがレンの名を叫ぶ。

「このガキ、首をかみやがった」

激昂したモヒカンが少年を蹴りつけ踏みつける。

やめてという少女の金切り声を聞きたならず者だが、それでも上機嫌に笑っていた。

しかし少年の瞳は力を失っていなかった。

ジープの後部座席にいたヒゲ男が、その眼力を受けて再度鞭を手に取った。

「生意気な虫ケラが。そぐわん殺気を放ちやがって」

空気を切り裂く音がした。

その前に、目が見えないはずのルイがレンの上に覆いかぶさった。

「おい商品が」

「あーあ」

男たちの落胆の音が放たれた。しかし鞭に打ち付けられた者はいない。

それは何者かの腕に巻き付いていた。



膝をついたその男は、もう片方の手で少女と少年の安否を確かめている。

やがて金髪の髪の下の双眼がならず者たちに向いた。

「ひ……」

生死に関わる戦いを何度経験したかわからない。

モヒカンたちはそんな嗅覚に長けていた。

そんな彼らが、鞭をつかみ取った男の目にこめられる凄まじい怒りを感じ取ったのか、何も言わず、蛇に睨まれたカエルのように硬直していた。

「なんだこいつ……ぎぎあ」

レンを蹴っていたモヒカンがいきなり絶叫を放った。

どこからか出てきた女の飛び蹴りで、喉を突き抜かれたのだ。

その見目麗しい出で立ちに、彼らは平時ならばおっつい女と感嘆しただろう。

だがそんな暇もなく、鞭を持ったリーダーは金髪の男に引つ張られ、彼の元へ飛んできた。

「ひ、ひいええええ」

それを遺言に、ヒゲのモヒカンは頭から股まで、素手で一刀両断にされ即死した。

何かがおかしいと悟ったならず者たちは、うわあつと雄叫びをあげてジープに乗り込む。

エンジンをふかして去ろうとするその相手に向かつて、金髪の青年が飛び上がった。

「びあ」  
「ひいえ」

車のスピードに追い付くほどの跳躍を、モヒカンたちは陽の光のなかで見た。斜め上空からやってくる得体の知れない男は、彼らにとつてまさしく悪魔だった。

痛みすら感じる暇もなく、彼らはジープとともに碎け散った。爆発と煙のなかからその男は戻ってきた。

クセのある長い黒髪の美女が、ルイを抱きしめながら問いかける。

「貴方の知り合いなのね、シン」

マミヤの言葉に頷いた金髪の青年がレンを助け起こす。

鞭の傷と打撲のなかで気を失いかけた少年が、彼に助けを求めていた。

マミヤがレンに優しく言った。

「大丈夫、奴らはもういない」

「……ちが、うんです」

「え？」

「ルイと……二人だけでいたのは……村長たちがぼ、くらを……逃がしてくれたから」

「レン！」

少女が少年の手を握る。それを握り返し、大丈夫と告げてから少年は気を失った。

「シンさまお助けください。レント、あの村を」

盲目の少女が跪き青年を拝んでいる。

その手をそつと包み込み、同じように膝をついた南斗の拳士は当たり前のように請け合つた。

§§その自然な行動の意味を、シンは後ほど知ることになる。

§§

§§

§§

§§シンとマミヤに連れられて村に戻ってきたルイが、もどかしいとばかりに車両から降りて走り出した。

りて走り出した。

行つてはいけないという美女の声は、耳に届いていないようだった。

視界ではなく心の目で見える。

以前村に立ち寄つた心優しい仁者に教えられたことがある。

その言葉が恩人たる村長の危機により彼女を覚醒させたのか、驚くほど鮮明に、景色が脳裏に浮かんでいる。

駆け出すことができたのはいつぶりだろうか。

後を追ってくる頼もしい気配を感じながら、ルイは村長の姿を求めて村役場の前に駆け込んだ。

そこには大極旗を掲げた部隊と村人たちがいた。死屍累々の光景だ、とルイは思った。

「おつ、このガキじゃね？」

「シーノ様あいしましたぜ！　頭に飾りをつけた盲目のガキが」

戦利品として女たちを一同に集め、用のない男たちを惨殺していた凶悪な愚連隊が、少女を捕らえようとやってくる。

井戸の近くで倒れる老人の気配を感じ、ルイはわき目も降らずに走り寄った。

村長の名を呼んで突っ伏しているところへ、長らしきハゲ男が親衛隊を連れて姿を見せた。

マスクや胴着、その出で立ちが道化だと言える者は誰もいないのは、その男が親衛隊に負けない筋肉質のならず者だからだろう。

帝都の総督の子として絶大な権力を持つその大男が、ルイの姿を認めながらワインボトルを傾けていた。

「おうおういたかあ。こいつだ。このガキが天」

言い終える前に、シーノの眼前の景色が変わった。

帝都の鎧を身に着けた正規兵も一緒に連れてきたのだが、その十数人が一斉に吹き飛んだ。

彼らが手にする武器と防具が血煙のなか、宙に舞う。

雨あられのように降り注ぐ肉塊を見たシーノと親衛隊が、何が起こったのかわからない状況に固まっていた。

蹴りひとつで十数人を滅殺したその男は、ようやく我に返って打ちかかる親衛隊を悉く貫き、その全てを血の海に沈めながら少女のもとへ近づいた。

「あ、あつあつ、あいつあ」

血の気を失ったシーノがその地獄絵図を見て思い出す。

以前父親たるジャコウから聞いたことがあった。

「あれが北斗神拳すら凌ぐと噂される南斗の極聖拳?! じよ冗談じゃねえ、こんなところで会うなんて……!」

長い金髪の青年が小さい娘の肩を抱く。

村長に抱き着く少女の、悲鳴に近い泣き声を聞いたその男が、ゆつくりと身を起こした。

「あつ、あわ、あわわわ……」

深淵にして極限の怒りを込めた南斗の拳士が、一步一步と大地を踏みしめてやってく

る。

その凄まじい気炎を見たシーノが背を見せて逃げた。

残った親衛隊も同様に後に続いた。

装甲車の中まで逃げたらこつちのものだ。ハッチを開けて自分だけ中に入る。

待機させていた運転手に出せ、と怒鳴りつけ、振り返って防弾ガラスのむこうの追っ

手を窺った。

「あ……?!」

こちらに向かって逃走する親衛隊の連中が、後ろからの衝撃で飛散した。

スピードを上げると前の運転手に言いつける暇もなく、その衝撃は凄まじい速さでこ

の車に到達しようとしていた。

これが龍の牙、南斗聖拳の指突だ、と思いながら、シーノは車ごと突き砕かれて生涯

を終えた。

素手で鋼鉄の装甲を鉄塊に変えた男が少女の元へ戻る。

そのときにはマミヤがレンを負ぶって姿を見せていた。

「わしは元々帝都の役人……それを辞して故郷に戻った。先代の天帝の時代じゃ……」

シンに抱えられた村長が、声を震わせながらルイに告げる。

「それでも次代の赤子の姿は覚えている。ルイ……ルイさま」

嫌だと首を振る少女へにっこり笑ったあと、村長はシンを拝みながら懇願した。

「お、お願いじゃ、南斗のお方……このルイさまは天帝の血を引く忘れ形見のひとり。帝都は今……総督ジャコウの手にある……しかし退役したわしにはわからぬ事情ばかり。ゆえにお頼み申す……このお方をお守りください。元斗はもはや頼りにならぬ……貴方様しか……」

血と涙にまみれた老人の決死の表情に、シンは任せろとその皴深い手を握る。

彼の言葉を聞いた村長は安心したように頷き、ルイの黒髪を撫でてから事切れた。

ルイが天帝の子だと知ったマミヤが、さすがに動揺しながらシンの名を呼ぶ。

金髪の青年が答えた。

「天帝ゆえこの子を引き受けたのではない。南斗ゆえに村長の願いを聞いたのではない。」

「女は……守るもの……」

マミヤの背に負ぶさるレンが小さい声で呟いた。寝言のようだ。

クセのある長い黒髪の美人がシンの横顔を窺いながら、この人の意思を受け継ぐものがあらわれた、と大げさだがそう思った。

このときは若い師と若すぎる弟子の将来のことなど、マミヤは想像しようもなかった。

§ § § § §  
生き残った村人たちをアスガルズルに避難させるために、シンとマミヤは先頭を歩いて地平線へと進む。

負傷者や老人は、ジープや他の車に乗って低速で追尾させていた。

ルイは歩くと言えなかったが、レンの傍にいてあげてというマミヤの言葉に従い、今は車両に乗って少年の横に座っている。

砂嵐が吹き付ける道中で、物見に出かけていた健脚自慢な村人のひとりが戻ってきた。

この先で帝都の大軍が陣を張り、レジスタンスらしき小勢を包囲殲滅中であると。

それを聞いたシンが、村人たちを廃墟ビルの影へと一旦避難させた。

マミヤに後を任せると言い残し、ただひとり物見が指さす方向へ歩き進んでいった。村長代理の老人がその背中を見送って、救世主じゃ、と感慨深い台詞を口にする。

マミヤはそれを聞いて微笑みながら答えた。

「その呼び名に相応しい男は他にいますよ、って嫌な顔をすると思いますよ、あの人は」

「……なんですと?」



「権力と同じくらいそういう名声を嫌ってますから。何日か一緒に旅をして……あらためてわかったことですけどね」

老人の驚くまいことか、そんな男がこの世にいるのかと首をひねりつばなしだった。

わたしもそう思いますと答えたママヤが、吹き付ける風の中で呟いた。

「不動の地位を手にして得るものが何か……知っているんでしょね。今の彼の生きざまを見ていると、そんなものは塵芥に過ぎなかつたんだなって推測できます」

## 四十三話 仁者と熱血漢

「シユウ様あれを。奴ら、女子供を人質に取って我らに投降を進めています」

「父上」

敵の大軍に半包囲されたなか、仲間や息子のシバが指をさす。

レジスタンスを率いて奮戦してきた盲目の闘将が、心の目でそれを窺った。

彼は進退窮きわまったかと独語する。

「南斗白鷺拳はくろけんのシユウ、これ以上抵抗すれば女やガキたちの命は保証せん！ 仁者ならばこの場面は捨て置きまい。潔く下るがよい!!」

帝都の重機動部隊が南斗六星のひとりに辟易としたのか、戦法を変えようで、人質を前面に押し出してきた。

見渡す限りの死屍累々は、重装備の彼らのものである。

シバがその光景を見ながらクソつと悪態をついた。

「卑劣者どもめ……このぶんでは元斗とやらもおそらく」

「……いや。金色率いる誇り高き拳士たちはあのような手段を好まん。こやつらは総督ジャコウの直属の配下だろう」

シユウの説明に、息子が真つ青になりながら人質たちを窺う。

そこへさらなる援軍がやってきた。

太極と呼ばれる紋章の旗は元斗の軍を示している。

重装歩兵のなかを割って入ってきた部隊の長が、人質を取る正規兵たちを蹴散らそうとするのを、ジャコウ直属の部将がやめんかと止めている。

内輪揉めのその成り行きを見ながら、シユウが仲間の輪の中に身を潜ませた。

赤い旗の元斗の將軍と、ジャコウの正規軍とが睨みあう。

「シヨウキ貴様……戦線を離脱して何しに来やがった。命令違反で叩き切るぞ」

「外道め笑わせるな。うぬらじじいの走狗ごときに、わしを實力で排除できると思っているのか」

ベロンと名乗るエリアの長官とその配下が白刃を連ねて、黒髪黒髭の元斗の拳士と対峙する。

女子供が正規軍に囚とらわれているのを改めて眺め、シヨウキが不満気に吐き捨てた。

「装備兵数、あらゆる意味で圧倒的に勝るわがほうが、なぜ人質などという姑息な手を取らねばならん。南斗などわしが片づけてくれよう。か弱き者らを放すのだ」

「そうはいかんなあ。こやつはあの妖星や黄金の牙が名を連ねる南斗六星のひとり。貴様といえど勝てる保証はない。切り札を捨てるあほうがどこにいるのか」

額に帝都の紋を施した長い髭の大男が、人質に対し鞭を奮う。打たれた女のひとり悲鳴を上げて倒れ込んだ。

「おいクソ野郎……」

「いいから貴様はシユウとやらを早く始末しろ。おいバロナー！」

「へへい」

ベロン配下のバロナという黒い肌の巨漢が斧を手に、人質のなかから子供の一人をつかみ上げた。

「てめえ」

シヨウキが気色ばむのを見たベロンが薄く笑う。

同じようにがははと笑ったバロナがつかんだ子供の首をへし折ろうとして、不意にその動きを止めた。

「うお」

帝都の正規軍がどよめいた。

上空に舞う白鷺しろぎすの姿を皆が見上げる。

その片足の切っ先が、黒い巨漢の額に音もなく振れた。

ピシ、という音がした。

バロナの頭から順に胸、腹、下半身に向かって亀裂が入る。

「んなあ?!」

帝都の長官の素つ頓狂な反応とともに、黒い巨漢が真つ二つに分断されて吹き飛んだ。

それだけではない。

勢いの止まらないその斬蹴せんしゅうは地を走り、正規軍のほうまで到達した。

帝都の軍の一部が噴水のように打ち上げられ、細切れになつて飛散していく。

本気のシユウの一撃を見て、レジスタンスの面々がうおとおおと氣勢を上げている。

元斗の將軍シユウキが腕を組みながらそれを見守っている。

疾風の体術、練達の斬撃に感心したのか、何度も頷いていた。

「六聖拳のひとつ、南斗白鷺拳はくろけん。雑魚どもが千匹かかっても無駄だな」

「シユウキー!」

「わかつておる。走狗はそこで見ていろ、わしとあの男との戦いをな」

長官を一瞥し、髭面の武人が意気揚々とシユウの前に立ちはだかった。

盲目の闘将は正規軍のベロンと彼との違いを明確に察している。

闘気を内に秘めながら構え直した。

「わしが負けたら帝都の軍は引く。お前がそうならレジスタンスに投降を促せ。お前以外の命は保証する」

「シヨウキと言ったか。その申し出を受けよう」

「ドブネズミとその親玉にそんな温情はいらん、余計なことを」  
 「黙っている狗めが。その口を引き裂かれないか」

正規軍の長ベロンは帝都においても歴戦の猛将だったが、さすがに元斗の將軍であるシヨウキには敵わない。

齒噛みしながら彼の後ろ姿を睨みつけていた。

§ § § § §

元斗の赤光將軍と南斗の仁星との戦いはほぼ互角だった。

だがそんな好勝負を良しとせぬ戦果重視の正規軍が、ようやく現地に到着した遠距離攻撃の兵器をレジスタンスの長に向けて発射する。

大敵を前にしていたシユウの反応は、元斗皇拳の鬨気の前に反応が遅れた。

弩兵部隊から放たれた巨大な矢が南斗の拳士に迫る。

元斗の剛腕を避けながら、それを裂脚空舞で弾き飛ばした。

「父上！」

息子の叫びを聞きながら、彼は必殺の間合いを得たシヨウキの奥義が炸裂するのを垣

間見た。

「元斗赤光烈弾」

轟音のなか、滅殺の赤い光に包まれたシユウが弾き飛ばされ、地に叩きつけられて転がった。

レジスタンス側から悲鳴が上がる。

勝者であるはずのシヨウキが蒼白になりながら、背後の味方を振り返る。

てめえら邪魔しやがったなと怒号を発するも、正規軍のベロンは弩ではまったく通じなかった南斗の闘将に向けて、舌打ちを放っていた。

「わが軍が誇る床弩しょうどでさえもきかぬとは……化け物め！」

「横槍を入れおったな、ベロン!!」

「その厄介者に早くとどめを刺せ。お前の奥義で奴はもう炎上したまま起き上がれん」

「……舐めた真似を」

シユウにとどめを刺すどころか、長官に向かってその拳を奮おうとしたとき、シヨウキが巨体の歩みを止めた。

燃え続ける敵将が起き上がるのを、背中を察知したのだ。

両軍がさらにどよめいた。

「げ、元斗の滅光を受けて立ち上がるとは」

ベロンの呻きを聞いた赤い将軍が、両目を輝かせて向き直る。父上、と呼びかける少年の叫びが響いたが、当人はそれに一切反応しなかった。

「練り込んだ闘気を受けてなお燃え尽きぬか。さすがは南斗六星のひとり」

「……手加減は無用。遠慮なく終撃を手向けるがよい」

シユウが震えながら手招きをしている。

赤い滅光は、彼の内から滾る闘気によって消え失せていた。

だが炎に巻かれたあとのその身は焼け焦げており、到底戦闘を続行できる体ではない。

「闘将の気概を受け取った。わが秘奥義をもって敬意を示す。いくぞ……」

瀕死の相手に向かって、シユウキが赤い気合を放ちながら突進する。

その両手を振りかぶって咆哮した。

「元斗紅煉掌！」

やめろおおというレジスタンスの雄叫びとともに、赤い光がシユウを押し包んだ。

地鳴りと轟音が周囲をつんざき、岩盤がめくれ上がる。

不明瞭な光景ながら、ベロンが髭をしごきながらほくそ笑んだ。

「爆炎そのものなシユウキの気烈。奴として粉々に」

滅殺の赤い光に包まれた相手に手を伸ばす元斗の将軍が、ぴくりとその指先を動かし



た。

「こゝ、れは幻」

反乱軍の長の姿は消えていた。

砂塵と煙のなかで視界が不明瞭になっている。

シヨウキが鬨気のガードを放ちながら周辺を見渡した。

「無駄だ。気操きせうにおいて南斗は元斗の足元にも及ばぬ。お主の斬撃はわしのガードを破ることはできん」

気配を断つた鬨將の動きに、シヨウキは両手に赤い光を纏まとって迎撃の態勢を整えた。

カウンターを放つべく、心眼で相手を見切るつもりで彼は目を閉じた。

「なんだ、どうなっている?! シヨウキめが起こした爆炎で奴らが見えん」

ベロンが目を凝らして二人の影を追う。

正規軍も赤光の配下もレジスタンスも、誰もが当事者の姿を見失っていた。

だがそのベールはすぐに引いた。赤い光がもう一度閃いたためだ。

同時に凄まじい斬裂音が轟く。

大地を抉るその奥義が南斗の拳であることを知るのはレジスタンス側だった。

うおおおという歓声が沸く一方で、帝都の軍が啞然としながらその光景を見守っている。

「南斗白鷲拳、誘幻掌」

両の手を合わせたシユウの指突が、元斗皇拳の將軍の右肩下を貫いていた。

シヨウキのマントが切り裂かれ、背中から血が迸った。

元斗の軍勢が主君の名を悲痛に叫んでいる。

シヨウキは齒を食いしぼり、眼下の吐血を見下ろしてから呟くように言った。

「は、白鷲拳の蹴撃を警戒していた……それを逆手に取った貫手とは」

「南斗聖拳の神髓は指突。奥の手は最後までとっておくものだ。油断したなシヨウキ」

元斗の猛将がフフやられたわと告げて薄く笑った。

膝をつく相手とは正反対に、奥義を放った側が立ち上がる。

「見たか！　これが南斗六聖拳の闘将だ。帝都め思い知ったか!!」

士気を鼓舞するために息子のシバが囁し立てる。

劣勢だったレジスタンスの面々が今度こそ息を吹き返した。

「シユウ様に続け、女子供を人質に取るやつらを突き崩すぞ！」

戦況が一変した。

だが戦意百倍して敵に打ちかかる仲間を制したのは、彼らの長だった。

「引けい！　皆後ろに下がれっ」

シユウの一喝でシバが空を見た。

レジスタンスが咄嗟に大きく後退した。

弩の矢の嵐が地上に降り注ぐ。それは斗の拳士二人の場所にも降ってきた。

二人とも死ねえ、というベロンの高笑いが聞こえる。

「……クソ野郎が。おいシユウ……巻き込まれたくなかったらお主は逃げろ」

「最後の二撃で力を使い果たした。もう逃げる気力がない」

言葉と裏腹に、南斗の仁星が赤光將軍の背後に回る。

特大の弓が元斗の拳士を目掛けて打ちこまれてきたからだ。

鋼製のそれをシユウが脇に挟み込んで防ぎとめた。

大きく後退する鬪將の体から血が湧き上がる。

シユウキが目を見張って振り返った。

「お主……」

「この傷は赤い閃光から受けたもの。飛び道具ごときで」

シユウの体を支えた髭面の男が上空を見上げる。

続けて飛んできた二本目の矢を二人で受け止めてから、なぜ助ける、と敵將に尋ねた。

問われた側が呟くように言った。

「目は見えずとも……真贋しんかんを見抜く心はある。お前は帝都の民のためにも死んではいけ

ない男だ」

済まぬなシバ、と親は唇を動かした。

空から降る何本もの矢を受け止める余力はさすがにない。

シヨウキが男泣きに泣いた。

そんな熱い男と人生最後に戦えた。そういう最後もよかろうとシユウは思った。

「父上ッ!! ちちう……え?」

シバの泣き声は途中で止んだ。

飛んでくる矢の前に立ちふさがった何者かがいる。

その背中には金色の髪が靡いていた。

少年が彼の名を口にしようとしたが、震えて声にならない。

「あ、あ、あの人は……!」

何本もの矢は黄金の爪のひと薙ぎで、まとめて撃ち落とされていた。

明後日の方向に落下していく飛び道具の金属音が聞こえる。

最後に打ちこまれてきた弾頭のような矢は大きさのレベルが違ったが、その男は飛び上がって迎え撃った。

シヨウキが思わず叫ぶ。

「真っ向からだ?!」

「……見える。あれは……極星の羽ばたきだ」

シユウの断定を聞きながら、元斗の將軍は見た。

金髪の男は巨大すぎる矢を正面から軽々と蹴り碎き、その後の矢も飛散させていた。全ての弾を放ち終えた帝都の正規軍が、着地した男の歩みが自分たちに向かつてくることを知った。

大砲にも等しい兵器を打ち落とす得体の知れない敵から逃れようと、彼らは一斉に後退し始めた。

「う、狼狽えるな！ こちらにはまだ人質がいる!!」

長官ベロンが親衛隊に命じ、何人かの女子供を前面に押し出した。

止まれと怒鳴る暇もなく、その男はいつの間にか親衛隊の背後を取っていた。

「近寄」

言いかけたヘルメット装備の彼らの首が、一瞬にして宙に舞った。

もともと南斗聖拳は暗殺の用途もこなす残虐非道の殺人拳である。

それを極めた存在が、標的の背後をとるなど造作もないことだった。

ベロンが辺りを窺えば、自分以外の正規軍が遠巻きにして半ば撤退しかけていることに気付く。

「きつ貴様ら……ワシの命令を」

「人に命じるのではなく、自分の力で戦ったらどうだ」

金髪の青年が人質を後ろに下がらせた後、ベロンの前に立ちふさがった。大男である帝都の長官が大刀を抜き放って構える。

だが腕に覚えのある武人だからこそ、相手の凄絶さが肌身で感じられた。

この迫力はファルコにも匹敵する、と思い知ったベロンが、大汗を流しながらシヨウキの名を呼んだ。

「ワシを助ける！ 元斗の部隊もだ」

「シヨウキ様、下種が何か言ってますぜ」

赤光將軍の子飼いが主人の手当てをしながら、憎々しげに長官を眺めている。

どうしますと問われた髭面の熱血漢が、重傷の身で起き上がった。

「約束は守る。わしを倒したことで帝都の軍は撤退させる」

シヨウキの言葉にシユウが頷いた。

彼はレジスタンスに人質を救出するよう言い含め、敵の首魁を一瞥した。

「おい待てシヨウキ、ワシを置いていくのか?!」

勝手に撤退し始めた元斗の私兵に続いて、正規軍も我先にと逃亡していく。

一人になった長官がこのままでは済まされぬぞと息巻いていたが、詰め寄ってくる怒りの闘將の姿を見て、一目散に逃走し始めた。

「冗談じゃねえ、盲目のクセにシヨウキを倒す化け物なんかとやり合っていてられるか！」

それが最後の言葉となった。

空から降ってきた白鷺の両足が彼のごつい両肩に乗った。

あ？ と間拔けな声を上げながら顔を上げた瞬間、その頭は唐竹割となった。

倒れこむ大男には目もくれず、再度飛翔したシユウが同門の近くに着地した。

「南斗白鷺拳。衰えていないようだなシユウ」

「そういうお前は……わたしが思っていたよりさらに強くなったようだ」

壮年の男が青年の手を握り、感慨深げに告げた。

シバが感無量な武者震いをしながら、六星どうしの邂逅を見守っている。

「言いたいことはいろいろある……とりあえず詫びねばならぬ。サウザーを倒す際、わ

たしは病で何の役にも立てず、お前に任せきりだった」

同門だが遙か年上の仁者の懺悔に、シンは頷くのみだった。

南斗のなかで最も死んではならない男が無事な以上、何の問題もない。

逆に彼が盲目の鬪将に要請する。

この先で控えている村人を含め、ここにいる女子供を避難先まで護衛してほしいという内容だった。

「アスガルズル……皆殺しの色里だと聞いているが」

「以前とは違い、女子供や老人が住まうには最適な城塞となっている。エバが長である

間は大丈夫だ」

「助けてもらった返礼だ。その件は進んで受けよう。だがお前はその後どうするのだ？」

「帝都を討つ」

シンの断言にシユウが眉をひそめた。

そうさせるほどの理由が彼にあるのかと思つたようだ。

「元斗皇拳は脅威だ。金色のファルコとやらがラオウに匹敵する存在ならば、それを擁する帝都がこの機を逃すはずもない。かならずまた侵攻の手を伸ばしてくるだろう」

仁星が相手とはいえ、天帝の子ルイのことは易々と離せない。

一般論でごまかした。

わたしも手を貸そうというシユウに形式的に頷いたシンだが、他にも心当たりがある。彼は具体的な助力を仁者に求めることはなかった。

女子供に囲まれたシンがシユウたちを連れ、マミヤや村人の元へ戻る。

クセのある黒髪の美人が、鬼の形相で師に纏わりつく女たちを蹴散らしたのは余談である。



## 四十四話 目覚めるとき

黒王号を機動部隊に任せた後、ラオウは影のウサと親衛隊長のレイナのみを連れて海路に出た。

その風体から威圧から、船旅に余人を混ぜるわけにもいかない判断したウサの機転で、モーター駆動の小舟を用意し、それでサザンクロスへと秘密裏にたどり着いたのだ。凶体が大きい男ながら、北斗神拳は長きにわたって伝承されてきた暗殺拳である。

気配を潜めて城のなかに潜入することは、彼の矜持に合わぬにしても、できない所業ではなかった。

城壁から音もなく飛び降りたラオウが、背中に何者かの気配を感じるも、そのまま立ち上がる。

「このヒューイに後ろを見せて動じませぬとは……さすがは世紀末覇者」  
ラオウが歩みを止めた。

目の前には、紅蓮の防具に身を包んだ赤褐色の髪の毛の男が待ち受けていた。  
「その巨体で……このサザンクロスの衛兵に誰にも気づかれず侵入するか。さすがというべきか」

「だがわれらが主の心の目は欺けぬ。ここからは通さんぞ」  
風と炎の拳士に阻まれた北斗の長兄が低く笑う。

それ以上言葉を発することはなかったが、ヒューイとシュレンは明らかに侮られているのだと察して身構えた。

「やめておけ。ユリアの街に影の真似までして忍んだのは、人を殺さぬため。ましてや側近のうぬらに手をかけるつもりは毛頭ない。退けい」

「恐怖の暴狂星め、舐めおつて」

城壁からすぐの路地裏で覇者と五車の戦いが始まったが、風と炎の二人がかりの攻撃でさえも、ラオウに傷一つつけることはできなかった。

弾き飛ばされたヒューイとシュレンが回転しながらも受け身を取る。

だが双方はいきなり崩れ落ちた。

体の自由が利かず、地面に伏せたまま身動きが取れないようだった。

「ぐっ、これは」

「秘孔だと……いつの間に」

五車の若手が屈辱だ、と叫びながら地面でもがいている。

それを一瞥した北斗の長兄が、とある建物の二階まで跳躍して窓から侵入した。

長く薄暗い通路を進む。

そこで様々な衛兵の待ち伏せにあつたものの、そのすべてを指一本で軽くひねつて撃退していく。

しかし戦闘不能にさせるだけで殺しはしない。

そんな自分の行動に不思議な感覚を覚えつつ、ラオウは通路を抜けた。

見えてきた広い空間には、光源が設置されていた。窓からは光もさしている。

その広間で寝ころんでいた男が、酒瓶を手に立ち上がった。

「ヒューイとシュレンは相手にならなかつたか。若僧どもはまだまだ未熟」

「うぬは」

「久しぶりだなラオウ。赤い衝撃にしこたまやられたつて噂を聞いたが、思ったより元

気そうじゃねえか」

「ジウウザ……世捨人よ、雲のお前までいようとは」

幼馴染どうしが広間で向かい合つた。

拳王の異名がある巨漢が初めて闘気をほとぼし進らせた。

「南斗紅鶴拳……あの道化ごごときに後れをとるたあ、衰えたなおめえも」

ジウウザが傲然と胸を張る相手に躊躇なく踏み込んでいく。

その標的は珍しく口角を上げていた。

目の前にやってきた雲を前に、彼は剛腕を奮う。

「当たるかよ」

飛び越えて相手の額を割ろうとしたジウザの動き。

しかしそれはラオウに読まれていた。

ぬん、という掛け声の掌底を五車の男は見切ったものの、体操選手のように捻りを加えて着地したときには、自分の額が割れていた。

「な……」

額を抑えてしゃがみこむジウザに、無防備の背中を見せる覇者が静かに告げた。

「南斗の道化か……以前はこのラオウもそう思っておった……だがそれは思い上がりであつたわ。きやつは道化どころか、地上最強のカウンター拳法の使い手よ。妖星を侮ることなかれ。うぬではおそらく相手にもならぬわ」

「なんだと」

後姿のまま手招きするラオウの挑発に奮起したジウザが、闘気を発しながら地を蹴った。

§ § § § § §

「風と炎を一蹴し、雲まで無傷で倒したか。恐るべきは世紀末覇者……」

次の広間で待ち受けていたのは海のリハクだった。

傍に控えるのは娘のトウ。

彼女に視線を向けることなく、ラオウは意外に大柄な壮年の男を見た。

「だがなぜ彼らを殺さぬまま去つたのか。拳王たるものがここまで不殺に徹する真意を聞きたい」

「……口で言えば陳腐にすぎる」

銀色の髪の豪傑は首を振った。

あえての不殺を実行する自身に、驚きを隠せずの所作だった。

「もはや五車の使い手は正門で守備につく山以外におるまい。この拳王、齒向かわぬ老人に対し、拳を奮うことは二度とない。おとなしく道を開くがよい」

「たしかに現在フドウは動けぬ。だがこのリハク、目的を前に手段は扱ばぬ」

トウが頷いた。彼女がダンテとナリマンの名を呼ぶ。

扉を開けて出てきた彼らが、縛り付けた何者かをラオウの前に蹴りだした。

それは彼に無理やり同行してきたウサとレイナの二人だった。

両名とも一般兵などに捕まるような細腕ではない。

「南斗百斬拳のダンテ。拳王よお見知りおきを」

雲の上の存在に対し、髭面の南斗の拳士が丁重な礼を示す。

彼が南斗聖拳の使い手だと知ったラオウが何か言いかけたが、ウサがそれを遮った。平身低頭してすいません、と床にハゲ頭を打ち付けている。

「このナリマンとやらにはレイナともども互角に戦えたんで。しかし百八派の正統な南斗の拳には及ばず」

「ラオウ様……申し訳ありません」

若い彼女も深く頭を下げている。

特に勝ち誇った様子もない海の男がどうするね、とラオウに問いかけてきた。

「もうろく 老碌したか海のリハク。その手の脅しに乗ると思つたのか」

「思わぬな」

しばらくにらみ合いが続いた。

時間稼ぎに成功した五車筆頭の男が、新たに到着した人物を自ら扉を開いて出迎える。

広間に入ってきた病身瘦躯の人物を確認して、ラオウが表情を引き締めた。

「トキ」

「兄者」

血を分けた兄弟が静かに対峙した。

ようやく本件を聞き出せる相手と向かい合った覇者が、しばしの沈黙の後で口を開

く。

「ユリアはこの街にいるのだな」

「然り」

「ケンシロウとともにか」

「そうだ」

「容態はどうだ？」

そこまで知られていると思わなかったトキが、思わず目を見開く。

その情報をつかんだウサが縛はくに就いたまま、得意気に胸を反らしていた。

銀の聖者が言った。

「……今は安定している。病の見極めがまだ早かったのが幸いだ。それにここでは医療設備や薬、衣食と療養には事欠かぬ」

「そうか」

「わざわざそれを尋ねるために貴方は」

「おかしいか」

「……いや、可笑しくはない」

地上最強の兄弟が互いに少し微笑していた。

尚な且おつりハクから不殺の件を告げられた弟が、感慨深げに告げた。

「そうか盲を開いたか……ついに貴方も目覚めるときがきたのだ」  
「知らん」

「ではその目覚めの拳、このわたしに見せてもらおうか」

「ほう……その体で兄に挑むつもりか」

「目覚めたのは貴方だけではない」

「……フツ」

北斗神拳伝承者に不足ない二人が、北斗天帰掌の構えを自然にとつた。

それを知っていたのは海の男だけだった。

§ § § § §

「はっ」

「どうしたユリア」

病室のベッドから身を起こした黒髪の女性が不意に身を起こす。

傍らの恋人を窺った。

サキと呼ばれた少女が主人の名を呼んで、トレーに乗せた水を持ってくる。

「ありがとう大丈夫よ、サキ」



「ユリア様……」

「ユリア。何か見えたのか」

「……」

両手で胸を抑えたユリアが頷いた。

彼女はワンピース姿の女主人に上着をかけた少女の頭を撫でている。

そんな南斗の象徴は、北斗神拳伝承者の手を握ってベッドから立ち上がろうと向き直った。

「わかった。そこに連れて行こう」

以心伝心でケンシロウが受け答える。

外で何が起きているか事情を知る世紀末の救世主が、彼女を抱き上げた。

§ § § § §

「病床の男だと……見事に騙されたわ。弟よ、よくぞこのラオウに膝をつかせた」

ユダに受けた傷が開いたのか、ラオウが胸を抑えてしゃがみこんでいる。

銀の聖者はすでに大理石の床に倒れていた。

広間周辺には、北斗の拳による打撃破壊や闘気裂弾の跡はない。

彼らはまさに実の拳のみで打ち合いを展開していたのだ。

「だがそなたに拳を教えた身……一日の長が勝敗を分けた。そしてその程度の差でしかない……フン、世紀末覇者の無様なことよ」

震える体で身を起こす兄が、弟の元へ歩み寄る。

そのときトウがラオウの前に躍り出た。

「もういいでしょう、おやめくださいラオウ。貴方は実の弟を手にかけるつもりですか?!」

「……相手の拳に倒れようともし、相手を怨まず悔いを残さず天に帰る……それが北斗天帰掌。感謝はすれど、恨みや意趣返しなどは存在せぬ」

人質のウサやレイナが胸を張った。

剣を持つナリマンに斬られようと本望な表情を浮かべている。

その二人の姿を見たりハクがむううと唸っていた。

「ナリマン、後は任せた」

「ダンテ」

「聖者を死なせるわけにはいかん。そして今こそミーの死に場所だ。相手が拳王ラオウとは光栄の至り。拳士の最後に相応しい」

南斗百斬拳の伝承者が涼しい顔をしながら、トウを優しく下がらせた。

死人と化した百八派の達人とて、目の前の霸王には及ぶべくもない。

良い目をしている、とラオウは思いつつ、邪魔する相手を一撃に屠ほぶろうと闘気を内に込めた。

「しゃ」

百斬拳最終奥義を放とうとしたダンテが動きを止めた。

それは南斗の上位拳士として当然の振る舞いだった。

自分を制する静かな声が聞こえてくる。

彼は扉の向こうからやってくる気配を察し、大敵すぎる巨漢に背を向けて礼を施した。

その隙だらけの背中ではラオウの視界に映っていない。

彼は広間に入ってくる女のみを見つめていた。

その目当ての存在が近くに寄ってくる。

世紀末覇者ともあろうものが、思わず顔をそむけた。

そして後ろを向いた。あの男が泣いている、とその場にいた誰もが思った。

## 四十五話 慈母という光

あれほど美しい光景は見たことがない。

周囲にいる者は誰もがそう思った。

北斗の三兄弟が揃って南斗の象徴に気脈を送っていた。

北斗神拳を極めるといふことは仁術を極めること、とトキだけが悟っていたが、この期に及んで正統伝承者も歴代最強の剛の男も同じ思いに至ったようだ。

誰が伝承者になっても恥じることのない三人の北斗の男が、ひとりの女の病床に立ち合い、その原因の消滅に力を尽くしていた。

「わしらでは何の役にも立たぬ。邪魔せず外で待つしかあるまい」  
海のリハクがダンテ、ナリマンを促して通路に出る。

そこへトウと看護師代わりのサザンクロスの女たちが、フドウを除く他の五車たちの手当てを終えてやってきた。

怪我人の彼らは霸王との再戦をと息巻いていたが、事情を聞いて押し黙った。  
ジユウザでさえも義理の妹の身を案じ、神妙な表情に変わっている。

「それにしても……ケンシロウやトキはともかく、あのラオウが協力してわれらが象徴

を病魔から救おうとするとは」

「命を吹き込んでいるというが、どういう心変わりか」

風と炎が理解できんと首をひねる。

ジユウザが心の中であの野郎、と嫉妬を込めて毒づいた。

「あの男……ようやく目覚めたのですね。父上」

トウがジユウザのやるせない想いを代弁する。

父が重々しく頷いた。

主にとつて重畳ながら、それによつてラオウの北斗神拳がさらなる高みに到達するのは歓迎できないことだった。

「ラオウだけではない。トキ様もケンシロウ様も同じ境地に至る」

海の男は腕を組み、居城から窓の外を見る。

この事態を経たあの三兄弟は必ず生まれ変わる……それを望んだ南斗の光明は一体どれだけ抗うことができるのか。

「今度こそ無残に敗北を喫するかもしれないな。いや……それすらあの青年の本望か。まったくあの若僧め、感謝はするが大いに気をもませてくれるわ」

リハクが是非もない思いに頭を振った。

そのとき扉が開いた。

出てきた銀の聖者の目が赤い。

それが悲しみの涙ではないことを、通路にいた全員がすぐに理解した。

§ § § §

「どうしたのシン」

アスガルズルに滞在して体を休めていたシンが、ゆっくりと寢床から起き上がった。ちようど部屋に入ってきたマミヤがその表情に目を見張っている。

「すごく嬉しそうだけど、何かあった？」

「……さあな」

金髪の青年が何かを感じたようだが、それを具体的に説明できる根拠などなものもない。

傍らのベッドで寝ていた怪我人のレン、つきつきりでそばにいるルイも、恩人の様子に顔を見合わせている。

シンが立ち上がり、旅支度をし始めた。

その手をルイが握った。

「どうしてこの？」

「どうやら俺の役目は完全に終わったようだ。もはや後顧の憂いは何もない」

あとは北斗神拳という、世紀末救世主の伝説を担う男たちにこの世界を託す。戦うしか能のない己の存在意義は心得ていた。

女王エバも最近手練れの兄弟を雇ったという。

となればこの街の治安も心配することはない。

「帝都ね？」

マミヤが鋭く問いかける。特に隠す必要のない彼は素直にうなずいた。

「先生」

レンの丁寧な呼びかけに、シンはとまどいながらも少年を見下ろした。

「必ず戻ってきて、僕に南斗聖拳を教えてください」

「……そうだったな」

天帝の子ではなく、ルイという少女を守る。

そんな心意気に対して嘘は許されない。

盲目の彼女の頭に手を添え、彼は弟子になったばかりの少年と指切りを交わす。

「死ぬ気で修練するつもりです」

気負いすぎだとマミヤは表情で語ったが、これほど若ければその気負いは熱となる。

過去の自分をそのまま見ているようだった。

大きく違うのは、レンの想いはきつとルイに届くだろう、ということだ。

シンは自覚するほどの珍しい笑みを浮かべて少年少女を抱きしめ、もう一度戻ることを約束して部屋を出た。

マミヤが後を追ってくる。

「逃げられるとお思い？」

「いや」

「足手まといになりませんから、先生」

微笑みながら、黒髪の美女が通路の向こうに指をさす。

マミヤを同行させようと思った理由の二人が待っている。

すなわち、南斗天翔拳のジョーカーと、門下生レスティエだった。

§

§

§

§

§

「だ、だめです長官、シユウのレジスタンスの勢いは止まりません……！ わがシティーの軍勢でも鎮圧は不可能」

「おのれ仁星め！ 拳王不在の今こそ、きやつの勢力を削る機会であるものを……まさか南斗が北斗に助力する展開になろうとは」



爆発炎上し、すでに一般人がいない市街。

そこから退却するシティーの残存部隊が、やむなく城塞から撤退した。

南斗六聖拳のひとりである盲目の闘将に敵<sup>かな</sup>うものは誰もいない。

さらに率いる兵も士気が高い。

彼らに数倍する帝都の軍勢は蹴散らされ、追い立てられていた。

長官以下、部下たちは這う這うの体<sup>てい</sup>で他エリアまでの逃亡を余儀なくされていた。

「くっ……くっ……くっ……ッ覚えておれシユウ！ 戦車部隊を再編した暁には、必ず奴らをまとめて踏みつぶしてやる」

モミアゲが長いモヒカン姿の長官が、数人の護衛とともにバギーを走らせていたときである。

地平線の向こうから、陽の光に照らされた金色に輝く人物がこちらに向かってくるのを発見した。

「ちょ長官。あれは……あれは帝都の」

「金色の猛将軍、ファルコではありませんか?! あやつ自らここまで来るとは」

「……運転を止めるな。そのまま突っ切れ」

上司の命令に頷いた運転手が光り輝くそれに突っ込んでいく。

側近たちは武器を手を取った。

自分をひき殺そうとする駆動車を見た元斗皇拳最強の男が、手に光を纏まとわせ始めた。すれ違いざまに黄金の光が炸裂する。

転倒して岩に突っ込んでいった車が爆発する音を、その巨漢の拳士は背後から聞いていた。

ファルコは振り向きもしない。

続いて現れた配下ともども、荒野の中を歩きだした。

彼が率いる元斗の軍はジャコウ直属の正規軍とは違い、人相はレジスタンスの面々と変わらない。

装備も無駄に威圧感がない。

天帝というより金色の私兵とあってよい存在だった。

そんな少数精鋭の部隊が、シテイではない別の拠点を攻略しに、主人の後を追う。

「ファルコ様」

ジープに乗ってやってきた伝令のひとりが跪いた。

元斗筆頭の将軍が首尾はと尋ねながら、煙の上がる遠くの市街を見つめていた。

「は。手はず通りシユウの軍勢はソリア様がおびき出しました。おっつけバスクの正規軍ややゾルバ、ザルジといった処刑隊も合流する模様です」

「それでよい。数の力で押し包め。いかに南斗六星のひとりであろうとそのうち息切れ

する。あとはソリアがとどめを刺すだろう」

「では当初の予定そのままです」

「総督の仰せだ。アスガルズルを落とす。シティは後回しだ」

「御意……それにしても色里などと」

どうにも納得できないファルコの側近が言葉を濁す。

色ボケと取られてもしかたのない命令であつたが、帝都からのそれに抗う身の上ではない。

天帝を人質に取るジャコウの油断を誘うため、色里を落とし奴を誘い出す。

その間に帝都を搜索し、先代の娘助け出す。

ファルコを始めとする元斗の拳士たちはそういう算段だつた。

金色の軍団のなかにも正規軍の影が潜んでいるやもしれず、ファルコも忠実な配下も声に出しての言葉を慎重に選んでいた。

「行くぞ」

「タイガ様は遊撃隊を率いて各地の救援に備えるそうです」

「……承知」

元斗の緑光將軍の名を聞いた金色が、一瞬だけ言いよどんだ後、マントを翻した。

§ § § § § §  
 同時刻、シユウ率いるレジスタンスが、敵領内の不利を悟つて一旦戦線を下げようとした。

その際に、帝都から派遣された紫光將軍の待ち伏せにあう。

盲目の闘將が元斗皇拳NO. 2の実力者、ソリアと拳を交えている間に、背後からバスク率いる正規軍の奇襲を受けたことで、数で劣るレジスタンスが窮地に陥る。

正規軍は火炎放射や長槍の重歩兵など、軽装の反乱軍とは装備が違っていた。

その総大將が部下に命令しながら戦場を見渡している。

「このまま突き崩せるが……あえて戦況を膠着させる。盲目のあやつと直接戦う愚を犯すことはない」

「首魁と戦うのはソリア。隙を見てドブネズミの親玉を討ち取る、ですな」

「うむ。労少なくして功多く。兵法の基本である」

教鞭のようなものを手に、往年のプロレスラーのような男が戦場を遠巻きに窺っている。

そんな僚軍の煮え切らない動きに、ソリアが片目を剥いた。

連携して押し詰めればシユウ以外の反乱軍は一網打尽のはずだが、南斗白鷺拳の鋭鋒

を避けたい正規軍の動きは鈍い。

盲目の鬪将と対峙する紫光将軍が苦い表情で毒づいた。

「バスクめ、姑息な真似を」

「奴の巧遅はこの際ありがたい。その間に勝負を決めさせてもらうぞ、元斗皇拳」

「……余人ならいざしらず、見えぬ目でこのソリアを止められると思っているのか」

攻防一体、紫の流輪を駆使するソリアの猛勇は帝都でもファルコに次ぐ。

いつしかその粘りは、心の目で戦うシユウの集中力を奪っていった。

衆目にも優劣は明らかだ。

拳技は互角とて、身体のハンデはどうしようもない。

最大の原因である連戦の疲労、それがシユウの裂脚に乱れを生じさせていた。

ぬるい督戦を示しながら金色の髭をしゃがんだバスクが、小気味よい笑い声を立てて

言った。

「いいぞソリア、そのままあやつを消耗させろ。もう一息で白鷺の背後を衝ける」

「処刑隊がまだ到着しませんか」

「奴らは何をしている……いや待て。どうやらようやく飛び回るネズミを地に叩きつけ

たようだな。そろそろか」

全軍突撃、と命令しかけたバスクが教鞭の振り下ろしを途中で止めた。

どこからか飛んできた何者かの上半身が二体、それを上空で見たからだ。かつて処刑隊だったものが落下して転がり回る。

正規軍がその凄惨な光景を窺って固まっていた。

「……っ、これは……?!」

「ぞ、ゾルバ、ザルジの両名ですぜ」

「なっ」

帝都の長官と側近が肝を冷やして、ゾルバザルジが飛んできた方向を眺める。

砂煙の中から何者かの影が見える。

まだらもよう

斑模様のマントを羽織った人物は、ひと房の前髪を垂らし、オールバックの長い赤銅

色の髪を風に靡かせてやってくる。

「何者かっ」

正規兵の何人かが長槍を構えて突きこんだ。

爆風に近い斬撃。

それを食らった鎧姿の槍歩兵が、処刑隊の幹部と同じ死骸となって跳ね飛んだ。

上半身のみがバスクの足元に転がって戻ってくる。

ひええと腰を抜かす何人かの側近をよそに、バスクが目を凝らす。

その者に覚えはないが、部下の凄まじい裂傷を見れば、それが何かすぐにわかった。

「南斗聖拳か……」

剽悍な面構え、長身で筋肉質な男が口角を上げた。

だが上機嫌ではないようだ。その彼が言った。

「……わが拳がわかるのか」

「フン、処刑隊のような雑魚どもと一緒にしてはもらうまい」

バスクが教鞭をフルーレのように扱い、残像が見えるほどの速さで突き込んだ。

灯籠も豆腐のように貫き通すその威力は、帝都でも指折りのものだ。

鷹のような鋭い印象の男がハチの巣になった、と誰もがと思った。

だが教鞭は彼によつて二本の指で挟み取られていた。

それ引き抜こうとするバスクの力に少し驚いた様子で、ふむと呟いている。

「長官のあれを見切りやがった……い」

向こうではソリアとシユウの戦いが続いている。

各戦場の騒音で当地のざわめきは他には聞こえにくいようだ。

男が続けて言った。

「なるほど力もなかなか。依怙えこの沙汰さたで重職に就いたわけではなさそうだ」

「ほざけ若僧……遊び道具を止めただけで思い上がりおつて！」

バスクがむん、と気合を放出させた。上昇気流でマントが浮き上がる。

## 「華山獄握爪」

大男の構えを見た南斗聖拳の使い手が、敵の拳法の名を告げた。

バスクがその小賢しいハンサム面を引き裂いてくれるわ、と跳躍する。

鬪気を伴った右の爪は乱入者に躲かわされるも、その後ろにあつた正規軍の車両の装甲を握りつぶすほどの握力があつた。

さらに己が身を回転させることによつて、その一部分を素手で扶えぐり取っている。

「鉄の塊でさえこの通り。うぬの面を砕き割つて中をくり抜いてくれる」

未だ手こずる紫光のほうを窺つたバスクが本気を出したのか、異相になりながら吠え  
たてた。

「未だかつてわが華山流を破つたものはおらん。藪蛇をつついた南斗の若僧め、覚悟せ  
い」

「ではオレが最初のひとりになつてやろう」

初めて赤銅色の髪の毛の男が構えを見せた。

憤怒の形相でプロスラーのような体格の長官が地を蹴る。

死ねえと叫びつつ、バスクが大木のような腕を奮う。

標的を捉えたと思つた瞬間、それは消えていた。

「あ?」



彼が大口を開けて空を見る。

逆光でわかりにくいだが、その程度の目くらましで立ちすくむバスクではない。

ちよこまかと逃げおつてと罵りながら、両の爪を空に向けて突き放った。

「南斗羽鷹拳、はおうけん死葬舞威しそうぶい」

鷹の爪が獄握爪を引き裂いた。

百人力の剛腕が鷹の指の数だけ裁断され、宙に舞う。

鮮血の瀑布のなか、バスクが数歩後退したが、彼は悲鳴ひとつ上げなかった。

「オレの動きは人間では見切ることはできん」

剽悍な男が舞い降りる。

そして腕を失った帝都の長官の胸倉を掴んだ。

「ほう」

絶命の危機に至つてなお矜持を保ち、頭突きを放とうとする相手に対し、男は武人の名誉を与える、と襟を正しながら、その太い首を掻き切った。

遠くに飛んでいくバスクのそれが、シユウとソリアの戦鬪のなかに消えていく。

有利な戦況だったはずの正規軍がいきなり指揮官を討たれて動揺し、陣形を崩した。

それを悟つたレジスタンスが突破口を開いて包囲を破っていく。

眼帯の元斗の将軍がシユウから一時距離を取り、そして呻いた。

「……あのバスクが相手にならず敗れるとは、奴は?!」

南斗の奥義の名を聞いた闘将が領き、九龍衆のイルフオーンか、とその名を告げる。

「妖星率いる南斗二十三派筆頭の羽鷹拳……はおうけん腹心を遣わすとは本気で帝都を潰すつもりか、ユダ」

「ユダ?! あの気ままな男が」

ソリアが瞠目しながら紅鶴麾下の勇将と名高い鷹を窺う。

「あの拳王すら撃墜した赤い衝撃……奴はこうした覇権争いに興味がないと思っていたが」

「おのれら帝都はオレの逆鱗に触れた」

イルフオーンの率いてきた赤備えが、帝都の正規兵へ突撃を開始している。

鋭い顔立ちの彼が不意に両手を一閃させた。

主の仇だ、と突進してくるバスクの側近たちの首がまとめて吹き飛んでいく。

「われらが将が命を賭して退けた拳王……それが隠れた後でのうのうと漁夫の利を貪る。ジャコウとやらの凡下はともかく、天帝の近侍と呼ばれる誇り高い拳士のすることか」

「言うたな若僧!」

「連戦で疲労の極にある仁星を相手に粹がるな。残った片目を引き裂いてやろうぞ卑怯

者め！」

怒髪天を衝いたソリアの紫の光が地面を抉る。

片膝をついたシュウが息子に助けられる際、彼は若い勇将へユダはどこだと尋ねた。

「ご安心くださいれ仁の方」

イルフオーンが指をさす方向に将がいる、と説明を受けたシュウが眉を寄せた。

戦闘状態に入った南斗と元斗の拳士をよそに、闘将は見えぬ目で空を仰ぐ。

「元斗皇拳最強の男は必ず前線に立つと聞いている。ならば今ユダの前に立つのは……

困だ」

「察しがいいな仁星」

ソリアが憤怒の元斗流輪光斬を打ち、イルフオーンを襲う。

流血に塗れて仰け反る鷹を一瞥し、彼が説明するように言った。

「囿はタイガ。奴が妖星を引き付けている間に、ファルコはラオウ不在の拳王領に侵攻するだろう。後はこのソリアがそなたら二人を屠つてタイガに加勢するのみ。中原はわれらが帝都がいただいたぞ」

低く笑う紫光將軍に対し、シュウがかぶりを振って言った。

「ユダは智勇双全の男、その点はぬかりない。おそらくもつと若い青年に真打を譲ったな」

「なんだと?!」

今度はソリアが鷹の反撃を受ける。

実の拳に近いイルフォーンの斬撃により、彼の闘気の防御は易々と斬り裂かれていた。

胸に走る斜めの衝撃で、元斗の次将が体勢を崩して背進する。

「その青年は北斗南斗、どちらの光か……」

シユウが仲間たちに支えられながらそう呟き、戦場を見回す。

すでに帝都正規軍は紅の軍団の突撃戦法によつて、戦線を維持できなくなっていた。

## 四十六話 陰と陽

「バカな?! そんなバカな……タイガほどの猛者があんなにあっけなく」

帝都の正規軍、その軍団長が、撤退しろと全軍に告げながら呻いた。

元斗の緑光將軍をわずか一撃で葬った赤毛の青年の雄姿を眺めて、呆然としつつも装甲車に引き返す。

赤紫のマントを翻した彼が度し難い、とその唇を動かしている。

元斗の戦士でありながら総督ジャコウに内通していた、と自白した相手に対し、彼は問答無用に斬り飛ばした。

その絶影の拳法の使い手が、潰走していく敵を一瞥する。

このまま帝都を落とす、と告げた主に、小男の影が周囲を見渡しながら言った。

「どうやら金色とやらはユダ様に恐れをなしたようですな。中原に攻め入るために囷を……タイガとやらを用意していたのかも」

「ちようどよかろう」

「……とはっ」

愛馬の赤兎に乗り上げたユダが馬腹を蹴った。健脚のコマクがそれを追う。

「元斗皇拳のファルコとやら、ラオウと互角という自負があるためか視野が狭い。だがそれは思い上がりというもの」

「黄金の牙、ですか」

「だけではない」

妖星の視界の端に南斗紫蝶拳しちようけんの伝承者があらわれた。ポニーテールの髪型、黒い髪 of 彼女も影のひとりである。

「なんじやいメイエルか。お前もユダ様のお供に来たのか」

「ブルータウンの守りはダガール様。難攻不落の城にわたしがいてもしょうがない」

「ならばそのうち鷹も駆け付ける気がするわい。こうなれば元斗の主力が大方出払った帝都など、落ちたも同然だな」

紅の旗の機動部隊がすぐ後ろを追尾してくる。

その勇壮な姿を振り返って、コマクは軽快に笑っていた。

§ § § § §

慈母星の病はいずれ治る、と確信した北斗の長兄は、早々に南の孤島サザンクロスを後にした。

トキが診療し、五車や南斗の拳士らを護衛にする城塞の守りに不安はないと見たのか、末弟も別ルートから大陸に戻るといふ。

「なぜ伝承者までサザンクロスを経つのか。どういふ了見だ」

主人とともに小型の船に乗り込んだウサが首をひねっている。

最後に乗ってきたレイナが答えた。

「帝都の侵攻を迎え撃つつもりでは」

「……金色のファルコならば拳王様しか倒せぬだろう」

「とはいえラオウ様の行先、復活を図る相手はもう決まっている」

「わかつとるわい。先代伝承者すら凌ぐと言われた隠遁者じやろ」

水平線を眺めながらラオウが二人の会話を聞いていた。

わが回復が万全かどうか、それを図るにふさわしい大敵。

リュウケンの同門コウリュウ。

奴を倒して世紀末覇者としての復活を遂げる。

身の程知らずの元斗に対し、拳王に相応しい威厳を示すのはその後だ、と彼はそう考えていた。

それにしても愛などと……ラオウは内心で毒づいた、

「くだらぬ」

剛毅な男に似合わぬ様相で、彼が思わず独語する。

北斗神拳の神髄に至った己にとまどい、まだ受け入れきれない自分に喝を入れるべく、北斗神拳有数の剛拳使いを相手に選んだ。

敗れるならば死あるのみ、と決めている。

ほとんど見られない主人の高揚した表情に、お付きの二人は顔を見合わせるばかりだった。

§ § § § § §

金色のファルコ率いる元斗と軍監の正規部隊の混成軍は、一路アスガルズを目指している。

そんな情報を手にした死神がシンたちの元へ戻り、帝都へ向かう彼らに引き返すよう告げてきた。

意外過ぎる帝都の攻略先にレスティエもマミヤも驚きを隠せない。

「どういう理由です?」

「……帝都の実権は総督ジャコウにあり。奴は権力欲だけではなく色ボケの権化だ」

上司が吐き捨てるように言った。レスティエが嫌悪感をあらわして首を振る。



マミヤがはっとしてシンを窺った。

「アスガルズルには今ルイが、天帝の子が」

「わかっている」

偶然にもファルコは、攻略先で探し物を得ることになる。

総督に従う理由もなくなる。

アスガルズルを落とすのは必至でも、その後ルイを発見すれば正規軍相手に壮絶な仲間割れが始まるだろう。

その混乱のなかでルイはともかくレンが無事では限らない。

「あれはもはや俺の弟子。ルイと同じように死なせはせん」

シンは遙かアスガルズルの方角の空を見上げて、静かに言った。

かの地には女王エバを守る手練れたちが幾人かいる。

彼らの奮闘に期待するしかない。

「そしてこういうときに……ああいう輩が蠢動するもんです。拳王が隠れて中小の軍閥どもが騒ぎ出す」

ジョーカーが遠くの砂煙やエンジンの駆動音に気付き、トランプカードを取り出した。

バイクから降りたシンが女たちはこれに乗れと言い残し、踵を返す。

背中を向けたまま影に語り掛けた。

「ジョーカー」

「はっ」

「奴らは任せた。追い払え」

「御意。KINGのご期待に応えましょう」

膝をつく影が嬉しそうに首を垂れた。

金髪の青年がそのまま歩き出そうとしたとき、二人の女が彼の名を呼んだ。

「あたしたちは頼りにならないってわけ？」

「シン様」

二人の南斗聖拳門下生が腕をまくっている。

ラオウ不在により、各地で蜂起した軍閥たち、数で攻めかかるそんなモヒカンドもの

ヒヤツハーがここまで聞こえてきた。

「マミヤ、レスティエ」

呼ばれた美女たちが目を輝かせた。

後から追ってこいという言葉に、「ええ」と「はい！」という小気味よい返事が重なっ

た。

風に吹かれた長い金髪が揺れる。彼は一気に駆け出した。

§ § § § §  
かつては高層ビルが立ち並んでいた場所に辿り着いたとき、シンは速度を緩めて歩き出した。

何者かの気配を感じて立ち止まる。

尋常な存在ではない。

感覚で言っても拳王か聖帝レベル。

そのすさまじい内に秘めた闘気を感じとった。

この気宇は元斗のなかでも最上位のものだろう。

フアルコか、と考えたシンが、倒壊したビルの物陰からやってくる隙のない誰かに目掛けて跳躍した。

同時に相手も跳んでいた。

空中で交差する。それは完全に極聖拳きょくせいけんの間合いだった。

「南斗獄屠拳なんとうごくとけん」

自分の口からではなく、敵らしき男がそう告げてきた。

着地したシンと敵が向き合うまでに、復古の拳士の片方のプロテクターが吹き飛んで

いた。

「打ち負けた?!」

世紀末になつて以降、獄屠拳を放つてやり返されたことは一度としてない。

だが相手は服を少し切り裂かれただけのようで、平然としていた。

建物の影で見えにくい。

その男の胸元が、陽の光に照らされてあらわになつた。

「お前は」

「ようやく見切つたぞ、極聖拳の蹴りを」

胸に七つの傷。忘れるはずもない。一度目の急襲で自分がこの男につけたものだ。

「ケンシロウ」

「ここで会うとはな……シン」

宿敵きそくが感慨深げに言つた。

気纏きそとも含めて、さらに重厚になつた雰囲氣の北斗の男が、色里に向かうと告げてきた。

向かう先は同じのようだ。

「お前に生かしてもらつたおかげで今のおれがある。だが……次はそうはいかんぞ」

「ファルコを相手に死なぬようにするのだな。本末転倒になる」

幼馴染の憎まれ口に、ケンシロウが珍しく口角を上げて笑つた。

南斗極聖拳きよくせいけん伝承者は、北斗神拳伝承者がその神髓に目覚めたことを肌で知った。しばらくして駆動車両の音が聞こえてきた。

親善的ではない存在の兵団が、この地はもらったと大口を叩いている。

それに敵対する部隊も、ふざけやがってぶつ殺すと息巻いている。

拳王の領土が縮小し、王を名乗り始めた軍閥がいくつも発生しており、縄張り争いを始めた複数の勢力の戦場に、たまたま二人が居合わせた形となった。

シンとケンシロウに気付いたならず者たちが兵団を率い、二人の元へやってきた。

何人がが偉そうに自己紹介をしていたが、北斗南斗の男たちの反応は薄い。

「知っているかケンシロウ」

「鬼王ゴラム……？ 知らんな」

鬼王軍と名乗るその軍閥の長が怒髪天を衝いた。

歯牙にもかけない扱いをされ、なおかつ挑発する言葉を吐くも二人に無視された男は、クマドリ模様の異相に怒気をみなぎ漲らせて牙を剥いた。

「この峨嵋拳がびけんのゴラムさまを知らねえたあ許せねえ！ 若僧ども、今すぐわが拳の錆に」  
鬼のごとき風体のごつい男が、台詞の途中で尻もちをついた。

黒髪の男に額を突かれた軍閥の王は、立ち去る相手に向き直ってゴルーと吠える。

「北斗壊骨拳」

「ほ、くと」

ゴラムが彼の背後に飛び掛かろうとして動きを停止させた。

全身の骨が肉体から飛び出し、爆散した。大軍がどよめいた。

「ゴラムが」

「てめえら……」

見慣れぬ流れ者に対し、他の王たちが共同戦線を張った。

智王だの我王だの龍帝だの名乗りだけは大層な連中が、シンとケンシロウに連携して打ち掛かってくる。

「ほあたあー」

北斗の拳が智王の胴体を一撃でぶち抜いた。

南斗の拳が我王の胸を音もなく貫き通した。

あたたたたというケンシロウの気合のたびに、智王配下の部隊が溶けていく。

特に掛け声の必要のないシンが無言で我王の隊列を突き崩した。

「ハ、ハ、ハ……まさかこの拳法は」

龍帝と名乗る太極龍拳の使い手、アモンが白髪と長髯を震わせながら、部下もろとも一旦引いた。

互いを背にして構える北斗と南斗の拳士は、一見剛柔の組み合わせに見えるが、北斗

神拳はもとより、シンの極聖の拳は南斗においては随一の剛拳である。

「北斗神拳と南斗聖拳がなんでこんなところにいやがる?!」

主のいなくなつた智王我王の部隊が潰走していく。

アモンが冷や汗をかきながら、逃げろと全軍に命じた。

そんな悪党を逃がすわけもない二人の男が同時に跳躍する。

かつて互いに繰り出した蹴りが、アモンもろとも龍帝軍を狙い撃つ。

北斗飛衛拳と南斗獄屠拳を同時に食らつた彼らは、爆裂と斬破のなかで消え去つた。

倒壊したビルが巻き添えになり、轟音を立てて崩れていく。

めくれ上がった地盤が、やがて隕石のように降ってくる。

黒い髪と金色の髪の拳士たちは、そんな埋葬地に一瞥もくれることなく、その場を立ち去つた。

「シン。ファルコをどう思う」

「……天帝の忠臣。あれは自分のために元斗皇拳を奮つたことは、おそらくあるまい」

「それはお前も」

「フン」

以心伝心の彼らが同時に荒地を蹴り、走り出す。

「ファルコはおれが倒す」

しばらく走った後、ケンシロウが呟くように言った。

「あれは自ら盲を開くことができる気質の男。ただ撃ち破ればよいという相手ではない」

「……お前は慈母星に感謝しておけ。全てはあの女のおかげだ」

「ユリアがもう一度会いたいと言っていた」

シンはそれを聞いても微動だにしなかった。

どこにしようとして生きていくれさえいればそれでいい。

彼の横顔からは何も感じ取れなかったケンシロウが、全てを悟って泣いていた恋人を思い出して前を向く。

気付くのが遅すぎた。その一言に尽きた。

地平線に映し出されてきたのは、目的地の皆殺しの色里である。

その城壁を前に陣を敷いている帝都の旗が見えた。



## 四十七話 炎上

ファルコ率いる元斗と正規軍の混成部隊は、アスガルズルの城門の前で陣を敷いて、降伏勧告の返答を待っていた。

本来ならば速攻を求める正規軍側も、沈黙して対陣の姿勢を見せているのがファルコにとつては不気味だったが、指揮系統が乱れないに越したことはない。

彼は門から討つて出てきた旧知の拳士を、先ほど退けたばかりだ。

南斗双鳶拳そうえんけんのハーン兄弟が負傷すると、代わりに何人もの用心棒が出てきたが、元斗皇拳最強の男に敵うべくもない。

「ふん、こいつあ……つまらねえことになっちまったぜ」

滅殺を躰かわしきれずリマが吹き飛んだが、ハズ、ギズの兄弟をかばいつつも、なんとか立ち上がった。

その背後でうつ伏せで倒れるいかつい南斗の拳士が、顔を上げて憎まれ口を叩く。

「……おいサングラス野郎、女王とやらの守りはどうすんだ」

「うるせえなハゲ。あれにはヴァルキリアやザンがついてる。つてかオメエらだけじゃ相手にならんだろ、あの光り輝くオツサンにはよ」

頭髪の寂しいハズの呼びかけに、リマが血の混じった唾を吐く。

弟のギルも口元の血をぬぐって言った。

「たしかにあの角刈りの強えこと。以前戦ったより数段も手ごわくなつてやがる……！」

「てめえらの南斗聖拳が大したことねえからだろ。おりやもつとすげえ奴を知ってるんだ」

「なあにいい若僧?!」

減らず口を叩きあう用心棒たちの前に、帝都随一の猛将が立ちはだかった。

その彼が静かに口を開く。

「このファルコ、無駄な流血は好まぬ。幹部どもはともあれ、この城の一般市民の命は保証する。ただちに降るよう女王とやらに進言してくるがよい」

「ハハハふざけるよ。このおれさまたちが今更おめえに下ると思つてんのか、ファルコお」

「………思わん」

「だつたらさつさと止めた刺しにこいや……！」

兄弟の手招きに金色の男が一步目を踏み出した。

だが彼らを取り出した弾頭を見て、陣を敷く帝都の部隊が驚愕しながら一斉に引い

た。

「これを見ても余裕かファルコ、舐めやがって……このまま爆殺されてえのか?!」  
「笑止。あわれな南斗め」

物音ひとつ立てず、巨体のファルコが兄のハズとの間合いを一気に詰めた。

ギルがそれを阻止しようとするも、金色の光で弾かれる。

ボディビルダーのような巨漢の首にファルコの剛腕が伸びた。

片手で持ち上げられたハズが、思わず持っている起爆用のピッケルを手落とす。

「速え……あの図体でなんであんなに素早く動けるんだヤロオ。バカ力なのは見た通りだが」

目で追うのが精いっぱいだったリマがけつと吐き捨てた。

「陽門の南斗聖拳などわが元斗皇拳の敵ではない。闘気のないおのれらの爪では、このファルコに傷をつけることはかなわぬ」

「……ほぎげ、角刈り!」

余裕で背を見せる相手に、弟のギルが渾身の斬撃を放った。

ファルコはそれを避けたものの、頬に傷を与えることに成功していた。

「はっははぎまあねえぜ! 傷一つ与えられねえんじやなかつたのかあ、ファルコ。ハツタリ野郎め!!」

「…………うぬら」

元斗最強の男が片手に金色の鬪気を込めた。

彼が少し本気になったようで、それを察したリマがしやあねえなあど頭をかきながら大敵へと向かっていく。

「三匹まとめて始末してくれよう。元斗皇拳、衝の輪」

必殺の流輪は三人の用心棒を撃ち抜き、その身を焼くはずだった。

だがその奥義は、どこからかやってきた何者かに、逆に撃ち抜かれる結果となった。

金色の光が黄金の牙によって跡形もなく霧散していく。

ハズ、ギル、リマがうおおっと叫ぶ。

帝都の部隊が何事かとざわめき、動揺で陣形を崩した。

「いやっ」

長い金髪を靡かせ、正面から堂々と突き入れてくる男がいる。

我を恐れぬか、と驚嘆しながらも、ファルコが元斗白華弾を放つ。

だが歴戦の戦士の勘が働いた。

攻撃から防御に、鬪気の流れを咄嗟に切り替える。

だがその気のガードも一瞬にして碎かれた。

「ぐっ……………」

凄まじい突撃だった。

対峙する敵に先手を取られたことも、成すすべもなく白刃取りで対応せざるを得なかったのも、彼にとっては生れて初めてのことであった。

両手で渾身の鬨気を迸らせ、その貫手を挟んで止める。

巨漢のファルコが荒地を削って大きく後退していく。

「ぬううう」

歯を食いしばり、うおおと咆哮した金色の男が全鬨気を放出してようやくその後ずさりは止まった。

ドウつと地盤がめくれ上がる。

土砂の雨のなかで見た金髪の下の深淵なる双眼に、ファルコは思わず一步退いた。

その彼が放った片手の指突を防ぐために消費した気合は膨大なものだ。

疲労の発汗は冷や汗と思われても仕方がない。

大きく息を吐く自分と違い、龍の牙を引き抜いた青年は呼吸一つ乱していなかった。

「一点突破に対し、一点集中の防御で防いだか。さすがは金色……だが南斗聖拳に貫けぬものはない。当たればその体に風穴が開く」

「貴様は……」

ラオウすら認める元斗最強の男が、一撃を防いだけで片膝をついた。

一撃で敵を倒した光景は数知れずども、その逆を見たことがない彼の配下と正規軍が声もなく固まっている。

「おせえぞ黄金の牙！ まんまと裏をかかれやがって、とんぼ返りご苦労様なこつた」  
リマが怒鳴りながら尻もちをついた。

あー疲れたとぼやきながらかたわらの兄弟を見る。

「んだてめえら、シンの同門だろうが、挨拶なしかよ」

「……接点なんかねえよ。百八派の頂上拳、南斗六星のひとりだぞあいつは」

握り拳に力をこめて、弟のギルがけつと悪態をつく。

兄のハズは一連の流れを眺めてから、呆けたように言った。

「ワシらはあれがやりたかつたんだぜ……あのファルコが、拳王に匹敵すると謳われた帝都の猛将が……南斗の一撃で片膝をつくなんてよ。そうだあれが」

南斗極聖拳きよくせいけんか。兄弟の台詞がシンクロした。

その伝承者が別方向を向く。

そこから歩み寄ってくるのは、黒い髪の黒い恰好をした世紀末救世主だった。

驚愕のなか、それでもファルコは死闘の相手だと直感して問いかけた。

「北斗神拳伝承者、ケンシロウだな」

「お前がファルコ」

「……然り」

「引けぬか」

「元斗のさだめ、引けぬ」

「……やはり戦わねばならんか」

ケンシロウが拳の骨を鳴らしてファルコの前に立つ。

そのとき彼の幼馴染は城門のなかへ入ろうとしていた。

「なんだあイケメン野郎、こいつらの死合いを見ていかねえのか？」

リマの声にシンが城塞を見上げた。中から煙が立ち上っている。

サングラスの生物兵器がやれやれの体<sup>てい</sup>で、金髪<sup>てい</sup>の青年に続いた。

「チツ……御大層に陣を敷いて降伏勧告なんてまどろっこしい真似をつて思ったら、内から破ろうとしてやがったか。鳳凰といい、やるこたあ変わらねえな」

めんどくせえと呟いたリマが渦中の戦場を振り返る。

「おっさんども、とりあえずこの門はおめえらに任せる」

そう言ったエバの親衛隊の台詞は、二人の耳に届いていなかった。

ハズとギルは戦闘開始した北斗と元斗の応酬を固唾を飲んで見守っていた。

§ § § § § §

アスガルズルの内乱は何度目だ、とぼやいたリマの先導で。シンも建物の中に入った。

女王は無事なのかという彼の言葉に、サングラスをかけ直したロックな格好の男がさあなとうそづく。

「エバが作った街だが、もともとここは皆殺しの色里だ。どんな不満分子がいるかわからねえ」

「……」

「まあフリーダやザンがいる以上壊滅ってことにはならねえだろうが……ただエバ以外の女子供がどうなるかってのは、正直保証できん」

暗にレンやルイのことを匂わせたリマが、女王の居館に至る扉を蹴破った。

「このフロアまで制圧されてやがんのか、ザンの野郎、何をやってやがる」  
腹立ちまぎれのリマの拳骨が唸る。

広い通りの向こうからやってくるアスガルズルの元用心棒たちが、彼の剛拳でまとめて吹っ飛んでいった。

いきなりシンが立ち止まる。

分厚い通路の壁に手を添える彼を振り返って、リマがおいと声をかけた。



「さすがにそいつは無理してもんだぜ。エバの居城は爆弾でも吹っ飛ばねえ構造になつてる。こいつらを全てぶっ殺して回り道を」

何気なく壁に突き立てた金髪の青年の指が、徐々に高強度コンクリートにめり込んだ。

ゆっくりと埋まっていく龍の牙の動きに、サングラス男の動きも止まる。

「地上のどんな物質も力で打ち砕く、だったな。真正銘のバケモンだぜおめえは」  
重厚な壁がひび割れた。

それを蹴り砕いたシンが、地響きのなかで広間に押し入る。

襲い掛かる正規兵をぶちのめした野獣もそれに続いた。

閃光とともにさらなる爆発音が轟いた。

煙の中から炎にまかれた男が、シンとリマの足元へ転がってくる。

それは仲間である南斗紅雀拳のザンだった。

その腕の中に気絶したエバを抱きかかえていることに気づいたりマが、彼女を助け起こす。

「よくやった、といたいところだが……てめえほどの男がエバを守るだけで精一杯か。ヴァルキリアたちはどこだ」

火傷を負った髭男が無念の様相で、フリーダたちは向こうで倒れており、人質に取ら

れて思うように動けなかったと弁明して面を伏せた。

「……やさぐれた風体の者ども、断定はできませんが……奴らは女王よりひとりの少女を狙っていた」

「あ……?!」

「天帝の忘れ形見とかなんとか……少年も一緒に攫われて」

「おいシン……!」

金髪の青年を見たリマが、ここは任せなと吠えたてた。

頷いた彼は同門のザンが済まぬと頭を下げるのに応え、煙の中から急襲してきた重武装の敵とすれ違う。

シンが奥のバルコニーに駆け込んだ時には、それらの首は全て飛んでいた。

おおらアというリマの掛け声と壁に激突する帝都の兵の断末魔を聞きながら、遠くへ飛んでいくパラグライダーらしき数名の姿を遠目に窺う。

敷地の広いバルコニーの死角から、鎧兜の男たちが左右同時に斬りかかってきた。

彼はその片割れの鋼鉄の胸を貫き通し、もう片方の首を挿んで壁面に叩きつけた。

その大柄な男がもがきながら、憤怒の青年の問いに対し、わははと笑って高らかに告げた。

「で、帝都の門は幾人もの元斗と重甲機兵団が守る……おのれら生身の人間に突破する

術はない」

「バカめと煽る相手を高層のバルコニーから投げ込んでおいて、シンは手すりに足をかけた。」

## 四十八話 黒幕の正体

帝都にある総督ジャコウは、派遣した元斗の軍や正規兵が各地で撃破されている、と報告を受けて動転していた。

「ふあ、ファルコはどうした?！」

「現在アスガルズルを攻略中です」

「すぐ呼び戻せ! ソリアもだ。タイガはどこにも」

「紫光は中原で南斗の軍と戦闘中、緑光は……南斗紅鶴拳に一撃で敗れました」

「なんだとお?!」

薄暗い広間のなか、白髪頭の中年の男が思わず立ち上がる。

「……そ、その妖星ユダ率いる赤備えが途上の群や市の守りを突破し、この帝都に向かって侵攻中とのこと」

玉座に座り直したジャコウが葉巻を吐き捨てた。

震えて火がつかなかったようだ。

「ユダ……あの拳王を退けた赤い衝撃が……」

「きやつは手勢のみで帝都を落とせると思っているのか」

配下たちのそんなどよめきを聞きながら、彼は唾を飛ばして叫んだ。

「息子はどうした?! 天帝を捕らえにいったシーノは?!」

「……シーノ様の私兵は先日出立したまま全員行方知れずです」

「ジャースク!」

ジャコウが爪を噛みながらも一人の息子の名を呼ぶ。

「重機兵と装甲車の大隊を門前に配置しろ! 残っている元斗の拳士どももだ」

「おう。なんだっけ、えー……アスラ、パトロに、えーっと」

後頭部だけの髪を結びあげたハゲ頭の大男が、酩酊したまま立ち上がる。

その親は帝都宮殿の玉座の間からすべての警備兵を追い出して、一人になったことを確認すると、不意に椅子のボタンを押した。

地下へ続く隠し扉を開け、階段を下りる。

水食糧、その他必需品を詰め込んだ駆動車に乗り込み、動作を確認してからまた王の間に戻った。

陸路だけではない。

海路への脱出の手はずも整えている男が、自分だけは生き延びると呟いてワイングラスを手にとった。

§ § § § § §

地平線からやってくるのは、U・Dの紋章を掲げた旗の軍団だった。

それを確認した帝都の装甲部隊が、各地からかき集めた長官や傭兵を盾に、城門上からの遠距離攻撃の準備を終えて待ち構えている。

元斗の拳士ブロンザや長官ダルジャ、ゲイラ、ゲルド、ゾング、用心棒のブゾリ、アインらを揃えた錚々たる面々が門外へ出る。

装備も兵数も圧倒的な防衛側と、軽騎兵を中心とする赤備えが帝都の膝元で対峙する。

「行けい用心棒ども。あの赤い髪の道化を追い払えば金や女は思いのままだ！」

軍監たる正規兵が鞭を奮って傭兵たちを叱咤する。

その様子を一瞥し、アインが舌打ちを放ちながらクソがと毒づいた。

同じ賞金稼ぎ仲間ブゾリがごつい体格の手下たちを何人か向かわせたが、それらは赤備えの赤い槍に全て刺しぬかれて死亡した。

「やるじゃない」

アインがブゾリの肩をぽんと叩き、行くぞと告げた。

槍騎兵のきつ先を躲し、赤い鎧ごと体を叩き潰す巨漢のブゾリや、アインの超へびー

級の剛腕から放たれるパンチを受けた赤備えの数人が、兜を砕かれながら血煙の中に沈んでいく。

「やりますねえ」

主人の愛馬赤兎の傍に従う影の小男、コマクが呟く。

「なかなかいい用心棒どもを雇ってやがる。兵卒では相手にならんか」

丸眼鏡をかけ直した小男が、進み出た影の女の背中を見る。

「メイエル」

「ここまでの防御網にあれほどの猛者はいなかった。帝都の一番槍をもらいます」

長い髪のポニーテール、黒い衣装に身を纏った女拳士が、二メートルを優に超える眼帯の大男と、黒髪のヘビー級ボクサーの前に立ちふさがった。

「女あ？ このブゾリ様に小鳥を狩れつてのか」

「まあ待てよ。おい女、おめえに男はいるのか？」

眼帯の賞金稼ぎが小鳥なんぞ興味ねえ、とばかりに赤備えとの戦闘を再開させた。

アインは年若い美女に、もう一度男の存在を確かめていた。

「それを聞いてどうする」

「いないなら気兼ねせずにつぶつ飛ばせる。このおれの前にしてビビらねえっていう胆力は褒めてやるから、相手がいるならさっさと帰れ」

メイエルと呼ばれた女が後方を振り返る。

赤兎馬に乗る赤毛の主に一瞬だけ視線を送った彼女が、口角を上げて返答した。

「逆に聞こう。お前に女はいるのか？」

「……だつたらどうするって」

アインが眉を上げた。

聞き返された記憶はない。

超ヘビー級ボクサーの自分の威圧に、ここまで涼しい顔をして迎え撃つ女を見たことがなかったからだ。

「だつたら？ ……半死半生で済ませてやる。世界チャンプ程度の腕で南斗聖拳に通じるかどうか、おのが身で試してみるがいい」

「てめエ」

こめかみに血管を浮かべた用心棒がトントンと跳ね、ファイトタイルを取った。

南斗という流派の拳法には大いに心当たりがある。

そんな女の構えからして、尋常な相手ではないと悟ったようだ。

ぬううと気合を込めてパンチを放つ。

大砲に匹敵するその一撃で女の体は四散するかと思われたが、それは相手の手刀で軽くいなされた。



「な」

いなされた上での平手打ちをくらったアインが、長身をのけ反らせた。切れた唇から出る血を拭い、まぐれだろと独語する。

「本来ならお前の顔は二つになっている。メイエルの手加減に感謝しろ」

二人の戦いを見物していたコマクの解説に、アインが怒髪天で応じた。

「舐めた代償は大きいぜ女」

フットワークと連続して打ち放つパンチの速さは、もはやヘビー級のものではない。

そしてヘビー級でもありえない剛撃がメイエルの背後にあつた岩を打ち砕いた。

「逃げ回ってはおれは倒せんぞ」

「では南斗紫蝶拳しちようけんの神髓を見せてやろう」

アインの拳を再三躲かわしながら、メイエルが掌を合わせるような構えを示した。

南斗の拳士は頭から垂直に降りてきて、彼に斬撃を見舞う。

空を切った用心棒の拳に鮮血が走った。

「重力無視かよ、すげえな」

余裕そうなきつ男のそんな反応に、メイエルが目を細めた。

無軌道な動きを見極めつつ、アインがちよいと本気でいくぜ、と告げた。

「シッ」

その掛け声とともに、何発ものジャブがメイエルを襲う。

南斗の無軌道に対し、無軌道に合わせに来るアインの拳撃を避け切れず、彼女は宙を舞って着地した。

彼女が目を剥く。

肩の防具が粉碎されていた。

演舞を止めなければ、体の芯に剛拳がヒットしたかもしれない。

南斗百八派の拳士が冷や汗を流していた。

「南斗聖拳とは何回かやりあったことがあってよ」

「何?」

「ハズ、ギルのハーン兄弟とだ」

「……南斗双鷲拳そうえんけん」

「つてことで、一人しかいないおめえに負けるわけにはいかんのよ。殺しはしねえが

……おれの女のためにおとなしく捕まってくれな」

「なるほど不覚。そなたを舐めたことについては詫びねばならんな」

「あ?」

「わが身と同等以上の敵。そう認識して戦おう」

メイエルが奥義の発動を予感させるように闘気を溜めている。

アインがやるじゃないと口グセを放ち、間合いを詰めた。

だが対戦相手の斜め後ろからやってくる赤い衝撃に気づき、とつさにダイブしてその波を避けた。

彼女はそれが過ぎ去ってから、何事かと友軍を振り返っている。

赤い波は帝都の正規軍の装甲者を真つ二つに割っていた。

赤備えと戦っていたブゾリも驚愕しながら城門のほうを窺っている。

「なんだ今のは?!」

蹄の音とともにやってきた赤毛の馬、その馬上の男をアインが見上げる。

こいつが首魁かと思いつつながら思わず鳥肌を立てていると、群の長官ゲルドとゾングが何者かに刃を当てて、用心棒ども奮戦しろと威嚇してきた。

「てめえらっ!!」

アインがその様子を見て激昂した。

ブゾリも赤備えという敵を捨ててやってきた。

彼の娘のアスカが正規軍の人質になっていた。

眼帯の巨漢の男の老母も、同じように囚われていた。

「アイン、ブゾリ。親族を殺されたくなければ……相打ち覚悟でその赤い衝撃を仕留めろ。いつまでも遊んでいる時間はない」

「ぶつ殺す……!」

ブゾリが大刀を取り出したが、老母の首元に刃が当てられているのを見て動きを停止させた。

顔を真つ赤にさせながら唸る同業者の横で、アインが冷たい声を放つ。

「アスカに少しでも傷をつけてみる……うぬら全員、生かして帰さんぞ」

超ヘビー級ボクサーの凄まじい殺気に長官二人はひるんだが、ガマガエルのような出で立ちの長官、ゲイラがこれを抱えて赤毛の男に特攻しろ、と二人にダイナマイトを放り投げてきた。

「でめえ」

震える眼帯の巨漢が歯ぎしりをしながら母親を窺った。

その老母は目が見えないのか、息子を拝んでいたが、それは助けてというより彼に生きなさいと告げているようだった。

「はやくしろお、ガキと婆を殺されてえかつ!」

ゲルドとゾングの異口同音の恫喝が、帝都の門前に響く。

そのとき、影である小男コマクが動いた。

続いてアインと戦っていた女拳士、メイエルも地を蹴った。

その二人の動きが注目されることはなかった。

それ以上の事態が正規軍の目の前で起こっていたからだつた。

赤紫のマントがばさりとめくれ上がった。

その持ち主は馬から飛び上がり、音もなく空を舞っていた。

「ああ?！」

「あつ」

長官二人が空を見る。

前列にいる配下の甲兵たちを飛び越えた赤い髪の青年は、さらに自分たちの頭上も越え、人質の前に着地していた。

人質の首を掻き切ろうとした配下の正規兵たちが、さらに自分たちの頭上も越

同時に前列にいた重装甲の兵、その全ての首が飛ぶ。

一瞬の出来事で、守衛側は声もない。

その間に少女と老婆がコマクとメイエルに助け出され、アインとブゾリの元へ戻っていた。

赤紫のマントが風に靡いている。

その神速に反応できた帝都側の人間はひとりもない。

彼が立ち上がったのを合図に、長官ゲルドとゾングは細切れになっていた。

「逃がさねえぞガマガエル!!」

アインの憤怒の鉄拳で、両生類のような外見の長官、ゲイラが頭をぶち抜かれて死亡した。

ブゾリが母を抱きかかえながら、救出してくれた小男と女拳士を拝んでいた。

「ユダ様を前にして女を人質に取る。殺してくれと言つとるようなもんじゃ、あほうどもめ」

コマクがやれやれと肩をすくめている。

アインも娘を手渡してきたメイエルに、すまねえと頭を下げていた。

「おれあ降りるぜアイン。母ちゃんを盾に脅してくる野郎どもとは一緒に戦えねえ」  
「もつともだ」

アインが頷いた後、城門前で敵の大軍と唯一人向き合っている赤毛の青年を見た。

フウウウという効果音はその男が発している静かな闘気だ。

「役立たずどもめ、こうなったら全軍で赤毛を押し包め！」

帝都の長官ダルジャが、かかれつと一斉攻撃を命じた。

数十の重武装の猛者たちが、それぞれ得意な獲物を手に、中背に見える南斗の拳士に襲い掛かる。

その彼らの巨体がまとめて真一文字に裂かれていくのを、逆の端で襲い掛かろうとした兵士が見ていた。

避けようとする暇もない。

帝都の軍の第一波は赤い衝撃の指一本で、全てが胴体を二分割されて全滅した。

南斗妖旋舞、というその技の名を、配下のメイエルが口にした。

「ばっ化け物か、こやつ」

ダルジャが城門上にいる遠距離部隊に射撃を命ずるも、いずれの矢玉も相手に届くことなかった。

無駄撃ちする射撃隊の真ん中に妖星がふわりと飛び降りた途端、それらは爆散するよう弾け飛んだ。

石が水面に落ちて弾け飛ぶ雫のように彼らは舞い上がり、武器ごと斬り裂かれながら、城門の下へと落ちていく。

紅の軍団がどつと沸いた。

同時に敵の兵士たちが怖気を奮って後退していく。

「魔人か奴は?! お、おいブロンザ、てめえの出番だ!」

元斗の将軍に迎え撃てと言い残したダルジャが、数人の側近とともに門の中に退散していく。

それを一瞥したブロンザは赤い衝撃の前に巨体を躍らせた。

額に走る傷と長い口髭をひとで、元斗の構えとともに闘気を纏わせ始めた。

「南斗紅鶴拳。噂に聞く凄絶の高速拳、見事である……だがいかに貴様とて、ひとりではこの門をくぐることはかなわぬ」

赤い前髪を人差し指で弾いた美男子が、そのまま標的に指をさす。

「お前が元斗最後の將軍か」

「ふはは余裕だな赤毛め。まあよい、その肝の太さに免じて答えてやろう……元斗の層は厚い。ファルコが最強とは表向き。それに匹敵する者は二人ほど存在する。そもそも総督ジャコウなど、はなからビジャマの操り人形にすぎん」

初耳の事態に、ユダが少しだけ眉を上げる。

続けて得意気にブロンザが語った。

「それがしはそのビジャマに従う者。長官ダルジャも含め、帝都の要人すら誰も知らぬ。我らは天帝など必要とせん。元斗自ら天帝を名乗り、この世を支配する」

ブロンザの合図を受け、城門の上から二人の壮士が飛び降りてきた。

それぞれ異なる鬪気の色を纏まとっている。

蒼光の渋い髭面の男がバトロ、銀光で長い銀髪の青年がアスラと名乗った。

体格の良い元斗の將軍三人が赤毛の青年を半包围する。

元斗の軍はともかく帝都の正規兵は、見慣れぬ拳士の登場に驚きを隠せない。

それでも彼らから引け、と命じられた部隊は、抗弁もせず門の内側へと撤退していつ



た。

額に傷がある浅黒い肌の男、ブロンザが嘲笑いながら構えだす。

「いかに貴様とてわれら三人には齒が立つまい。その細首を叩き切つてくれるわ。そのうえで紅鶴の領土はわしが頂く」

「……なるほど。ビジャマとやらが帝都の黒幕とは良いことを聞いた」

主の台詞を聞いた長年の忠臣、コマクはつばを飲み込んだ。

彼が放つ気炎を窺つた小男が後ろに振り返る。

「用心棒ども、我らとともに下がれ！ はやく!!」

丸眼鏡の影が叱咤し、アインとブゾリの兩名を城門前から遠ざかるように促した。

メイエルは主君が元斗の將軍三人を相手に、本気を見せようとしているのを察した。固唾を飲んで見守ろうとしたとき、赤い閃光が煌めいた。

「ハ………これは」

額から迸る鮮血が自分のものだと思つたブロンザがよろめいた。

いつのまに衝撃が衝き抜けていたのか、彼には認識することができなかつたようだ。元斗の鬨気が昼の戦場をも明るく照らす。

それを受けるほうは、ただ風に吹かれて佇むのみで、気脈の発動はない。

敵からすれば小憎らしいほどの沈着ぶりだった。

「そのほうらで妖星の赤い牙が折れるかどうか、やってみるがよい」  
三人まとめて相手にしてやる。

そう煽られた元斗の拳士たちが憤怒の気合に身を包んだ。

## 四十九話 帝都へ

復活を図る北斗の古老との戦闘を終え、洞窟から出てきた巨漢がいる。

その男は上半身の防具が吹き飛んでいたが、概ね無傷だった。

しかし赤い衝撃による南斗の裂傷は、未だに背中に色濃く残っている。

剛毅な外見の彼が空を見上げて息をつく。

そして近くの岩にかけてあったマントを羽織った。

立ち去ろうとして歩みを止める。二つの影が目の前に現れたからだだった。

待ち構えていたのは若者二人。

双方は長大な鉄の棒を手にしていた。

「よくも父を……!」

相手が世紀末覇者でなければ、ほとんどの人間がその武器で撲殺されていただろう。

それほどの剛撃であつたが、当人はそれを避けもせず受けきつた。

二本の金砕棒はぐにやりと拉ひしやげるのみだった。

「バカな?!」

「コウリュウの息子か」

拳王を名乗る男が二人に問いかける。

それには答えず、悲壮な覚悟の兄弟が空手を奮う。

だが地上最強の暗殺拳を極めた男にはかすりもしなかった。

息子たちの悲鳴が重なる。

撫でているにも等しい手加減で地に叩き伏せられた二人が、未熟を自覚して慟哭する。

起き上がれない屈辱に震える彼らを横目に、ラオウは待機させていた黒王号に乗り上げた。

「兄弟ならば違う道を歩むがよい。何も求めて競り合うことはない」

「ち、父のかた、きを……！」

「コウリユウは倒した。だが死んではない」

ラオウが馬首を返す。

仇敵の言葉に二人が顔を見合わせた。

一縷いちろの望みをかけて、息子たちは震えつつも立ち上がる。

やがてふらつきながらも洞窟の中に入っていった。

父は昏倒しているだけだ、と確認したアウスとセウスが外に出たときには、北斗の長

兄の姿はすでに消えていた。

巨馬を駆る男は猛スピードで坂を走っている。

やがて傍にバギーが隣接した。影のウサと親衛隊長のレイナだった。

「ご報告を。中原のアスガルズルでケンシロウとファルコが激突しました」

「ほう」

「北斗神拳伝承者は義足の金色と同じ立場で戦い……そして辛くも下したとのことで  
す」

「……そうか」

「このまま帝都を征伐するおつもりですか？」

レイナの言葉にラオウがうむ、と頷いた。

ウサの情報では、すでにユダが帝都まで進撃し、城門を攻め立てている最中だという。

影の小男が主に言った。

「ファルコがケンシロウに敗れた以上、残った元斗ではあの赤い衝撃に敵うはずもなく  
……勝負は見えておりますが」

「あの赤毛に受けた傷のせいで、オレは何の働きもしておらん。少しは北斗の長兄らし  
きところを見せる必要がある」

「……元斗が練武の生贄というわけですか。なんとも気宇の大きいことで」

ウサがそう嘆息すると同時に、世紀末覇者がはいやあと黒王号を駆った。

§ § § § §  
アスガルズル攻略を中止した金色率いる元斗軍、その全員が帝都へと引き返している。

そんな車両のなかにケンシロウが同席していた。

死を覚悟して北斗神拳伝承者と戦ったファルコであったが、城外に出てきた女王エバから詳細を聞いて天帝の子の所在を知り、その矛を収めた。

ジャコウの手の者に攫さらわれたルイが帝都に連行された、と伝えられた忠実なる元斗の戦士は、北斗に対し潔く負けを認めていた。

ケンシロウが応急処置を受ける金色の男に告げる。

「シンがあの子を追ったはずだ、問題はない。残る元斗の将軍はお前の説得を聞けば道を開くだろう」

「……ソリア、シヨウキはわが盟友。だがブロンザは総督側だ。それに」

ファルコが傷の痛みとともに眉を曇らせた。

「ビジャマ、バトロ、アスラといった裏元斗の猛者どもはジャコウと利害が一致する。あれらの手にルイ様が落ちたのなら……以前と変わらぬ事態になる」



る。

その城門前に、赤い軍団と紫の軍団の旗が翻っている。

「KING、あれを」

バギーの運転手である死神が指をさす。答えたのは助手席のレスティエだった。

「あれは……元斗の拳士と……南斗の鷹ではないですか?！」

驚くように言った彼女がバイクに乗る主を見た。シンが頷く。

「イルフオーンか。それにあの眼帯の元斗の戦士は……紫光の男だな」

「元斗皇拳第二の将、ソリアですな。しかしあの鷹がここにいるということは、恐るべき赤い衝撃もどこかに」

死神が二人の激闘を見てから主人を窺う。

双方とも満身創痍であった。

元斗次将と南斗羽鷹拳はおうけんの勇将がシンたちの存在に気づいたようだ。

「来たな……黄金の牙」

「なにイ?!」

頬の血を撫で拭うイルフオーンが彼の異名を口にすると、ソリアが胸の傷を手で覆いながら、砂煙うまが上がる方向を眺めて唸った。

「あれが聖帝を倒したという、南斗の極星……!」



シンがバイクを下りた。

フルヘルメットのマミヤがその背に手を添える。

「どうやら師が受けた様々な傷は治りかけているようで、その点は安心して送り出せた。」

「あの紫光と互角に戦うとは……イルフォーン。六星にさほど劣らぬな。さすがは妖星の片腕といったところか」

「ユダ様の配下には独眼竜も控えております。勢力の規模に比べて、人材の層の厚さは尋常ではない。帝都にも拳王軍にもひけをとりませんね」

影の上司と部下が言葉を交わす。

イルフォーンが金髪の青年に何か言いかけたが、その前にソリアが標的を変えた。

「きやつを仕留めれば、わが軍の起死回生となるー!」

巨漢の元斗の次将がそう叫び、目の前の大敵を捨ててシンに歩み寄る。

その間に彼は極大の紫光の流輪を繰り出していった。

鷹との戦いでも使わなかった最終奥義である。

「元斗皇拳、破の輪」

練りに練った闘気を両手に纏まとわせ、その滅殺の光を相手に撃ち放った。

これほどの巨大な気を見たのは初めてなのか、マミヤが悲鳴を上げる。

いきなりの奥義で先手を打ったソリアの見切りに間違いはない、  
だがかつて、鳳凰の闘気ですらも砕いた主の姿を見ている影主従は、涼しい顔でそれ  
を見守る。

その凄まじい紫光が一瞬にして弾け、そして消えていった。

シンの指突が相手の胸に突き刺さる。周りからはそう見えた。

砕かれた側が吐血した。

地響きを立てて両膝をつき、力なく項垂れている。

「あれが南斗極聖拳……ソリアほどの男を倒すのに奥義すらいらぬのか?!」

復古の拳を目の当たりにしたイルフオーンが思わず呻く。

額に汗を浮かべながら、いや、と自答した。

元斗の魂魄を込めた気合、それを実の拳で貫き通す。

長い赤銅色の髪の毛の猛将が、あれが南斗聖拳の神髄だと思い直して戦慄した。

おのが主、赤い衝撃にも匹敵すると肌で実感したようだ。

「KING、峰打ち同然ながら奴はもう戦えません。先を行きましょう」

ソリアの胸の手前で寸止めし、衝撃だけを与えたことを知った死神が、当然のような  
顔をしてエンジンをかけ直す。

それでも元斗の將軍は両手をついて息を切らしていた。

闘気が尽きたのか、打たれて息がでないのか、おそらく両方であることを察して、彼の配下たちが紫光將軍に駆け寄った。

鷹の手勢、赤備えもやってきた。

レステイエとマミヤが天帝の子、ルイの状況を語る。

イルフオーンやソリアを含め、皆驚きながらそれを聞いていた。

ルイという少女がこの時点でジャコウの手の内にはない、と知った眼帯の元斗の拳士も慌てて帝都に戻ろうと、車両に乗り上げる。

イルフオーンも自前のバイクに跨った。

だが今しがた見た黄金の牙が炸裂する瞬間、その光景が目について離れず、恐るべき武威を示した男の遠ざかる後ろ姿を呆然と見つめていた。

§ § § § §

蒼光のバトロと白光のアスラ、裏元斗の二人が目を剥いた。

表の元斗の將軍、ブロンザが赤い霧に包まれて仰向けに倒れゆく。

ジャコウの部隊は度肝を抜かれて見守るばかりだ。

紅の軍団と寝返った用心棒の連中も、呆気に取られて城門前の光景を眺めていた。濃紺の長い髪、髭の壮士であるバトロがアスラ、と声をかけた。

一本指を上空に挙げた赤毛の雄姿を見て、踏み出した年少の同僚を呼び止める。

「ブロンザほどの男を一撃で葬り去ったあやつ……それこそ死合になる。消耗するぞ」  
忠告を受けた白髪の青年は、標的を見つめて目を細めた。

「あの敵はわたしに譲れ、バトロ」

「殺人マシーンめ。ビジャマの目算が狂う……だがあれ一人ならば問題あるまいか」

はははと高笑うアスラの白い髪の毛が逆立っている。それを見てバトロは考えを改め直した。

その白い鬨気の迸りのなか、不意に彼の頬に線が走った。

そこから血が流れ始めた。

無言で指を這わせた無表情な彼が牙を剥く。

「南斗……このわたしの結界を貫きおったか」

そう呟いたとたん、アスラの目の前に赤い髪が靡いていた。

だが白髪の拳士はそれを一笑に付した。

「ばかめ」

赤い衝撃は空を斬った。霧と消えた青年は南斗紅鶴拳の拳士の横脇へとすり抜ける。

ブシウウと血が噴出したのは、赤紫のマントを斬り破られたほうだった。

「ユダ様っ!!」

メイエルとコマクの悲鳴が聞こえた。

疾風でやり返された、と驚きを隠せない部下たちをよそに、当人は感心したように相手に向き直った。

「神速は南斗の専売ではないぞ、赤毛」

その声は背後から聞こえてくる。

アスラとともに挟み撃ちしようとしたバトロの蒼い閃光が間近にあった。

仰け反りながら、ユダが迫りくる凍気の蒼いそれを弾き返す。

「邪魔をするな……!」

「増援の兵気が近い。二人してこの若僧を倒すべし」

「ち」

そう言い合いながら、白と蒼の滅殺の拳が赤い衝撃を押し包む。

そのとき、裏元斗の彼らの指が明後日の方向に折れた。

「なっ?!」

「(っ)の」

バトロの驚愕と若いアスラの苦悶の声がする。

死の間合いであった前後からの挟撃に対応した南斗の拳士は、回転するように舞って元斗の切っ先を薙ぎ、龍の爪で砕いていた。

体格の良い二人が中背に見える彼の円舞を受け、ずささと引き下がる。

「バカな」

「こやつ……われらが双撃の闘気を素手で弾き飛ばしおつた……！」

アスラとバトロが驚嘆しながら敵を窺う。

膝をついていた赤毛の青年がゆらりと立ち上がった。

うおと彼の軍団から歓声上がる。

「ジャコウとやらに聞いていなかったのか。闘気では私は倒せぬと」

千切れた己がマントを投げ捨てる。深淵のアイスブルーの瞳は左右の敵を見ていな

い。

その視線は帝都の宮殿へと向けられていた。

その瞬間、二人の元斗の拳士が胸板を抑えて態勢を崩す。

指だけではなく、紅鶴拳の爪は双方の剛体に衝撃を与えていたようだ。

今度は彼らが膝を折った。苦悶の表情に比べ、青年の白い面は憎らしいほど清々し

い。

その美男子が両腕を上げた。深淵の闘気を内に込めている。

それが誰の目にもはつきりとわかった。

「おのれ」

白い髪の青年が地を蹴った。壮年の男がいかぬ、と呼び止めようとしたが遅かった。

「南斗紅鶴拳、てんけつぽく点穴駁」

§

§

§

§

§

§ 地響きが帝都の城を揺らす。

それは総督ジャコウのいる大広間にも届くほどの振動だった。

城の外では裏元斗の二人とブロンザが妖星を食い止めているはずだが、先ほどから元斗の滅殺の轟音が鳴りやまない。

つまりまだあの赤い衝撃を仕留められずにいる、ということだ。

衛兵すらも下がらせた広間からは、城下を一望できる吹き抜けのバルコニーが設置されている。

彼はガラスの両扉を開けて、その景色を恐る恐る覗き込んだ。

すでに城門は開かれている。正規兵たちが城の中に逃げたのだろう。

あとはブロンザと元斗の軍、裏元斗の二人が赤い髪の侵略者を食い止めている最中

だった。

ジャコウは何度も舌打ちを放った。

「何をしておるたわけどもめ。あとシヨウキがおればあのすばしい妖星を押し包められるというのに……ん？」

辛くも防戦していると思いついていた初老の男が、度肝を抜かれて目をこすり、手にした双眼鏡を覗き込んだ。

「こ、こんなことが信じられるか……！　ありえん……元斗の將軍三人を相手にあの赤毛……赤毛の若僧……!!」

ジャコウは怖気を奮いながら声を荒げて叫んだ。

ブロンザは血の海に沈んでいる。

白髪の青年、アスラは赤い閃光を食らったのか、地に仰向けに伏して昏倒していた。

それを蒼い髪の壮年の男、バトロが抱えて南斗の拳士から逃れるように距離を取っている。

「ユダ……あ、あのラオウを……あの世紀末覇者を撃墜したただひとりの男……こいつはまずい、まずいぞ」

汗まみれになって震える広間の主がもう一つの何かを発見した。

地平線から何かやってくる。



うおっと声を裏返しながら、ジャコウはもう一度それを見た。

彼が最も苦手とする恐怖の暴狂星の愛馬を確認したからだ。

「け、けっ拳王……それにファルコの元斗の軍に……ユダの新手の部隊が」

思わず双眼鏡を手落とす。

このときの総督は動揺からか、ケンシロウやシンも共にいると認識できなかつたよう  
だ。

ともあれファルコが寝返り、世紀末覇者が参戦した時点で帝都側の敗北は必死だつ  
た。

慌てて室内に戻ろうとしたとき、ジャコウの目の前に不気味な出で立ちの男がいきな  
りあらわれた。

腰を抜かしかけた彼が、おのれはビジャマ、と指をさす。

頭にターバンを巻いた眼鏡男が喉の奥で不気味に笑い、この帝都はもう落ちると告げ  
てきた。

「拳王、金色、北斗神拳伝承者、南斗極星拳伝承者が揃って妖星の加勢にやってきた。い  
かにわれらとて、あれら五人には敵わんな」

「気軽に言いおつて……どうすればいいんじや?!」

「かねての手はず通り、お前は息子ジャスクと天帝の子を連れて逃げるのだ。もうすぐ

わが手の者があのガキをここに連れてくる。おれさまの影が数名同行してやるゆえ、そのまま海路を経てあの国に潜め」

「……修羅の国……」

「ほとぼりが冷めたらまた帝都に呼んでやる。それまでわれらも野に下る。おっと、あのラオウが着いた早々馬から降りてきやがった」

「くそっ」

他人事のように城門前を見下ろすビジャマの台詞で、中年男が広間に逃げ帰った。

同時に息子ジャスクとビジャマの手勢が駆け込んでくる。

彼らが連れていたのはまぎれもない天帝の子ルイだった。

一緒に囚とらわれている少年に覚えはなかったが、その手の嗅覚にすぐれたジャコウはこいつも使える、と思い直し、同行させることに決めた。

## 五十話

## 置き土産

「狼煙だ」

城から立ち上る合図のようなものを確認して、アスラを抱えた壮年の男バトロが跳躍する。

眼前に勢ぞろいした北斗南斗元斗の拳士たちを打ち捨てて、城内へと逃げ込んだ。

分厚い鉄条門が閉ざされる。外に放り出された形となった元斗の軍がファルコの説得に応じて投降していく。

「ヤロウドも、新手が来やがったとたんに撤退しやがったクソが」

アインが毒づくのを横目に、車から降りたファルコとソリアが言葉を交わす。

「奴らが引いたということは」

「ビジャマの指図か。きやつめ、ルイ様を手中にしたと見えるな」

「……シヨウキはどうした」

「城中で養生中だが……あれらの動きから監禁されている場合もありえる」

カツ、と閃光が奔った。天将奔烈というラオウの奥義の発動で、分厚い鉄鋼の城門がひしやげ飛んだ。

門両側の城壁までも崩して宮殿への道を作った豪傑の姿に対し、驚かない者は一部の拳士たちだけだった。

それを目撃したほとんどの連中が腰を抜かさっぱりに驚愕の口を開けている。

アインやブゾリはおろか、元斗の拳士たち、ユダの配下イルフオーン、マミヤなど、初めて見るラオウの剛拳には声もない。

鉄塊やコンクリートなどの瓦礫を踏みしめた北斗の長兄が、赤紫のマントを風に靡かせる赤毛の青年の姿を横目で捉え、ぼそりと言った。

その近くでは元斗の將軍、ブロンザが倒れている。

「フン、複数の元斗を相手に二人までも一蹴したか。さすがだな」

「無想陰殺を受けた傷がまだ治らぬ。三人まとめて片付けようと思ったが」

「言いおるわ若僧」

ラオウが口角を上げた。

シンとケンシロウが歩み寄り、ユダやラオウと並んでいる。

赤い衝撃の異名がある男がそれらを見比べながらふむと頷き、金髪の青年に語りかけた。

「北斗神拳の神髄は愛と聖大導師から聞いたことがある。それに兄弟とも目覚めたらしいな」

「のようだ」

シンの即答に、ユダが褒める語感で責める内容の言葉を口にする。

「以前の比ではない力を得た。それを是とするお前の度し難さに乾杯したい気分だ」

「年代物のワインならあとで提供しよう」

南斗の双壁が揃って城内に入っていく。

ラオウが足を止めてそれを見送っていたのは、元斗の筆頭と次席が近くにやってきたからだ。

「金色。わが末弟に敗れたそうだな」

「……言葉もなく完敗だ」

「だがそなたの格は落ちぬ。元斗最強の男よ、誇りに思うがよい」

いくぞケンシロウと促した北斗の長兄が屋内へ姿を消した。

「あれが世紀末覇者。思っていた以上に大きい男だ」

ソリアが初見の感想を述べる。

彼と宿縁があるファルコもあの頃のラオウではないと肌で感じ、今では道連れも難しいと忸怩たる思いに浸るのだった。

各斗の頂点の拳士たちを見守っていたそれぞれの配下たちのなかで、一番目付きの悪い男、ジョーカーがふと思いたったことを口にした。

「黄金の牙、赤い衝撃、世紀末覇者に救世主、元斗の金色。この大陸における最強の面子を敵にするなど、ビジャマという元斗のフィクサー、奴の目論見など最初から破綻しているも同然。どういうつもりか」

「少なくとも奴らに我らが翻弄されたのは事実。今中原はそれぞれの主がおらず、外からの侵攻には脆弱になっているが」

妖星配下の勇将、イルフォーンが何気なく答えた。

本人に自覚はないが、その周りにいた影のコマク、ウサ、拳王親衛隊のレイナといった諜報に明るい者たちがはつとして、それがあつた方向の空に視線を向けていた。

§ § § § §

城への侵入者に対し、迎撃に当たる正規兵は数知れずであつたが、誰一人して足止め成功したものはいない。

元斗の拳士二人はともかく、他の男たちは立ちはだかる帝都の守衛を倒すことに躊躇はない。

火器を含んだ重装備の部隊をことごとく踏みつぶし、王の間に踏み込んだ。

「ぬっ」

ラオウが暗がりのなかで目を凝らす。

もぬけの殻のような広間には、白い布のスクリーンが設置されていた。

やがて映し出されたのは総督ジャコウではなく、フィクサーの男、元斗皇拳のビジャマであった。

「ご苦労だったな諸君。残念ながら手遅れと言い残しておこう。首魁の中年男は天帝の子を連れ、すでに帝都を脱出している。経路は言えんが、その行き先は海外だ」

「海外だと?!」

ソリアとファルコが異口同音に叫ぶ。

「奴はこれを撮り終えて逃げた、ということか」

ケンシロウが映像のなかで得意気に語るビジャマを見ながら、そう独語した。

「ラオウにユダ、そしてサザンクロス。それらの領地がどこからかやってくる侵略者に襲われる可能性がある、ということだ」

ほくそ笑むビジャマの台詞で、腕を組んで聞いていた巨漢がぼそりと呟いた。

「小物どもの逃亡先はおそらく……修羅の国」

「?!」

ファルコとソリアが蒼白になって覇者を見る。

北斗の四弟と南斗の極星はその国のことをほとんど知らない。

赤毛の青年は多少知っているようで、少し考えに沈んでいた。

そんな彼らに対し、ラオウがあればわが祖国、と簡潔に説明した。

「ケンシロウのが生まれた国でもある」

「オレの……」

さすがの堅物伝承者が驚きを隠せない。

シンも元斗たちと同じように驚愕したままだったが、ビジャマの最後の台詞で柳眉を逆立てた。

「天帝の子ルイとお付きのガキはとある国に連れ去った。だからといってこの機会に蠢動する勢力は何も修羅の国と決まったわけではないがな。内乱の極み、その経過をこれから観察させてもらおう。天帝の下僕どもよ、せいぜいあがいてみるがよい……」

「飛べい！」

カウントダウンを察したのか、重く鋭いラオウの叱咤で、歴戦の戦士たちが一齐に散った。

爆裂音と地響きは、帝都の正門に待機していたそれぞれの軍勢の耳にも届いた。

マミヤやその他用心棒たちが大丈夫かと顔を見合わせるなか、あの程度の爆発では主が傷一つ負うこともない、とユダやラオウの配下たちは確信しているようだった。



§ § § § § §

城外に戻ってきた各斗の拳士たちがそれぞれの部隊を引き返していく。

各領地の治安を回復させるのが彼らの急務だった。

それに比べ、北斗南斗の伝承者は身軽だった。

帝都の秩序を回復すべき元斗の二人、ファルコやソリアは当分本拠から動けないため、天帝の子を救う役目はさしあたってケンシロウとシンの二人になった。

向かう先は修羅の国とやらに最も近い海を隔てた孤島、サザンクロスである。

城壁に囲まれた街、サザンクロスの外にある砂浜に出た彼らのほかに、味方の姿はない。

死神やその他の使い手も城内の守りに就いている。

無言で波の音を聞いているシンに対し、ケンシロウがふと告げた。

「ユリアが会いたがっている。ここまで来ておいてそのまま放っておくのか」

「……あれはまだ療養中だ。戦うことしかできない男が会っていい存在ではない。それより」

ビジャマの捨て台詞通り、水平線から船団がやってくる。

それは次第に大きくなってきた。小舟による数十の規模のようだ。

海陸風かいりくふうが黒と金色の伝承者の髪を揺らす。

「奴らの船を奪つて大陸に向かう。そう思ったが、あの小船ではな

「おそらく後に本隊が来る。それまでの準備運動だ」

シンの言葉にケンシロウが遙か彼方を眺めながら返答した。

そんな北斗の男に、南斗の男が呟くように告げた。

「足手まといになれば置いていくぞ、ケンシロウ」

「それはオレの台詞だ」

表裏一体の拳士たちが音もなく波打ち際へと進む。

船に向かつて彼らが同時に地を蹴った。

最初にやってきた偵察隊のような小舟に向かい、二人は跳躍した。

§ § § § §

§ § § § §  
浜辺が見えてきた。

修羅の国から数十日、ようやく辿り着いたのは大陸ではなく、大城塞を抱える孤島  
だった。

動力付きのこの帆船は大型で、これ以上は進めない。

小型船で揚陸するしかなかった。

ポマード漬けのオールバック、修羅の中でもひとときわ目立つ恵体、ただひとり顔を晒している男が、仮面をつけた部下の報告を聞いて、船首まで移動した。

「あれは」

「ご、ご覧の通り先鋒は全滅しました……それも百」

「群将陸戦隊の兵ども……百人の精銳が全て撃退されたというのか」

素顔の長がすつと目を細めた。部下の仮面が思わず縮こまる。

「撃退というより……あれは虐殺でした」

「なにイ?!」

「ある者は爆散し、ある者は貫かれ……あれはもう……戦闘というものでは」  
名を与えられぬとはいえ、仮面の修羅どもは百戦を経て生き残っている手練ればかりだ。

だがそれらは海岸に死屍累々を晒しているのみだった。

「わが国と同様、最前線は強者で固めていると申すか、あの砂蜘蛛のように」

長が舌打ちを放つ。

群將に匹敵する実力を持ちながら仮面を外さず、常在戦場を望む酔狂な若者。

その名を知らぬ者は同国ではない。

陸戦隊の長であるオールバックの大男からすれば、ライバルに値する存在である。

その名を口にした以上、帆船で督戦というわけにはいかなくなつた彼が、手勢を率いて船を降りた。

同胞たちの亡骸で覆われた戦場は、それでも波の音のみの静寂に包まれていた。

長い棍棒を手にする長と配下たちが、城塞の高い壁を見上げながら海岸線に沿つて進んでいく。

「はっ」

仮面のひとりが膝をつき、体の内側から破裂して倒れ込んだ。

皆が振り返るも、そこに人の気配はない。

「な、なんだ?！」

「確かに今……殺気が……どぼあ」

続けて小柄の修羅も頭から砕け散つた。

波打ち際で隊列を乱した修羅の国の侵攻隊は十数名。

しかし帆船にはまだまだ増援が潜んでいる。

「隊長」

「落ち着け。互いを背に、円陣を組めい！」

ザザン、と波の音だけが聞こえるなか、修羅たちがアーミーナイフのような黒い双剣

を手に、周囲を窺った。

長大な棍棒を砂地に叩きつけた長が、不意にそれを一閃させる。

しかし使い慣れた己が武器は空を切るばかりだった。

「いつの間に」

「よく気付いたな。オレの接近にこうも早く気付く雑魚は久しぶりに見た」

「な、何?！」

黒い革ジャン、黒いボトムにブーツ。

黒い髪の漆黒の暗殺者がいつの間にか姿を見せている。

「お(ご)わ」

「べっ」

オールバックの男の左右の修羅が、一瞬にして八裂になった。

一斉に仮面が飛びずさったのは、長が下がれいと大喝したからだ。

黒髪の男が拳を鳴らしながら素顔の大男と対峙する。

「いい手下を飼っているな。モヒカンドもとは格が違うようだ」

「……ほざくな下郎めが。修羅とそのほうらの国の下種どもと同じにするでない」

裂帛の掛け声で長が棍棒を突き放つ。

その切っ先を裏拳で撃ち砕いた男が、砕いたそれから飛び出た何本もの細い鞭により

首と片手を絡めとられ、動きを封じられた。

「ククク……かかりおつたな暗殺者め。その首はもらったぞ」

くるくるとアーミーナイフを片手で回し、得意満面の男が笑みを消した。

「なっ」

剛力を誇る彼が、敵の手に引つ張られて体勢を崩す。

引き寄せられた男は、暗殺者の凄まじい正拳突きを顔面に受けて仰け反った。

「おおお……」

黒い男が気合を込める。

うあたたたたという気合の声とともに、数十発の拳が修羅の顔面を滅多打ちにした。

「おあつたあー！」

とどめの一発、大ぶりの横薙ぎの打撃を受けた巨躯の修羅は、衝撃で宙に浮かび上がった。

それでも堪えて態勢を整え直す。

「ふぎ……ぬぎ」

「なかなか丈夫だな。だがもう耐える必要はない」

男のその一言で、修羅の長の頭部が炸裂した。

仮面の部下たちはもはや戦意をなくしている。

敵に背を見せて逃亡の体勢に入った。

「てっ撤退する！ 長でさえ相手にならんとは……想定外だ」

彼らが跳ね飛んだ。

帆船に逃れるため、乗り込んできたそれぞれの小舟に乗り上げる。

「い、急げ。あの化け物に対抗するには砂蜘蛛クラスでない」と

仮面のひとりが帆船を見上げる。逆光で見えにくい。

やがて噴水のように湧き上がってきた同胞たちの姿を見た。

「あああ?！」

逃亡する仮面たちだが、それでも地獄の国で修羅の称号を与えられた拳士だ。

モヒカンとはわけが違う。

その者たちが仮面の下の目を見開き、恐怖におののいてその凄まじい光景を眺めていた。

帆船から跳躍してきた髪の毛の長い男に対し、迎撃しようとしたのは、死中に活ありの教えに本能的に従ったためだろう。

小舟から飛び上がった十数名の彼らが、金色の髪の毛の敵と空中で交差した。

浜辺へと着地したその青年に対し、すぐ近くにいる暗殺者の男が声をかけた。

「先発隊はこれで全員か」

「帆船を操縦する者以外はほぼ排除した。あれで海を渡る」

「……南斗獄屠拳。修羅どもなど相手にならん」

「長を倒したお前ほどではない」

体を碎かれて落下してくる仮面の集団を一瞥し、表裏一体の拳士が歩みゆく。

「修羅の国には闘神と呼ばれる男たちがいるらしい。ルイという娘が連れ去られた先は推測できるだろう」

「ああ」

「オレの故国でもあるあの国……ラオウもそのうち駆けつけるはず」

その前に事を終えたいとする北斗神拳伝承者は、渡海先に何か因縁を感じているようだ。

南斗極きよくせいけん聖拳の伝承者も、好敵手である赤毛の青年の増援が来るまでに事態を好転させたいと思ったが、彼ら北斗とは違い、あの国に何の縁もない。

天帝の子を助ける以上の何かは、今のところ感じなかった。

やがて砂浜の方角から、聞き及びのある女の声が二人の耳に届いてきた。

ケンシロウが振り返る。

別れの挨拶を交わす男女を見ることなく、シンはそのまま小舟に飛び乗った。



## 第二章 修羅の国編

## 一話 内乱の予兆

静かだが、不気味な風の音がする。

そんななか、海岸に辿り着いた男が小舟から降りてきた。  
櫂かいを捨てて歩きだすその若者がふと足を止めた。

砂浜に倒れる数十の屍がある。突き刺さっている槍からはためく太極旗で、彼らが逃亡した帝都の軍勢だと一目でわかった。

一切の侵入者は許さぬと状況が示してくれている。

彼はその死屍累々を眺めながら歩を進め、海岸の奥へと進もうとした。

「！」

不意に砂地が盛り上がった。

ボツという重い音を発し、数体の影がそのなかから現われた。

そんな四方からの襲来に対し、侵入者は動かない。

アーミーナイフのような刃をその男に突き立てた仮面の男たちが手ごたえあり、といった体で握っている柄をぐりぐりとねじ回した。

「ふん、ただの侵入者ではないと報告にはあつたが……こんなものか」  
「反応なしの隙だらけ。われら修羅には程遠い」

四人の男たちが仮面の奥で笑っている。だがその乾いた笑いはすぐに途切れた。

仮面から見える八つの目が驚愕で見開かれている。

そんな彼らが一斉に飛びのいた。

手にした巨大なナイフが折れていることによろやく気付く。

「ッ、ッやつ」

ザザンという波の音を合図に、身構えて追撃しようとした四人は石像のように動かなくなつた。

海水の混じつた砂を踏みしめ、若い男がそこから離れていく。

「ほう、あの四人の必殺から逃れるか」

仮面の修羅、四人の首が一斉に飛んだ。

同時にその一幕を見ていた新手が海岸に現れた。仮面の模様が違う部下を従えた小男は素顔である。

もみあげの長い小兵の男はマシラ、と名乗つた。

「ぬ?!」

フードをかぶつた男から伸びる金髪を見て、侍のような髪型、恰好をしたマシラが余

裕の笑みを消した。

双刀を抜いた彼が重く低い声で告げた。

「……ワシは男前が嫌いだな」

「猿だからか」

侵入者の一言で、後ろに控えていた仮面たちが恐れおののいて数歩引いていく。

確かによく似ているが、それは言ってはならぬ事実だった。

小男が気を滾らせながら言った。

「ククク……おめえは特に念入りに殺してやるぜ。その虫どものように、原型などどめさせん」

怒髪天を衝く相手が血走った目で刀を構え、そして飛び掛かった。

薙ぎられたそれは空を切ったが、砂地は大きく斬り裂かれて持ち上がり、瀑布のように落下した。

およそ刀で成しえる衝撃ではない。

「気纏の剣士か」

初めて出会うタイプの敵に対し、フードの男が珍しく瞠目している。

ぬはははと高笑う修羅は余裕だな男前と吠えながら、蹴り込まれてくる長い脚を膝で受け、衝撃を流してから回転して後退した。

おおっと仮面たちがどよめいた。

マシラ様が力負けしたのか、と互いに顔を見合わせている。

「押し返しやがったな。やってくれるぜ……試みにてめえの流派を聞いておこうか」

問われた若者がフードとそれに伴うマントを脱ぎ棄てた。

沈みかける夕日に照らされた彼は黄金の髪と相まって、神秘的な雰囲気醸し出している。

マシラにとってそれは憎悪の対象でしかなかった。

脆弱の欠片もない美男子の姿に思わず惚けていた仮面たちが我に返る。

その男は南斗聖拳、と流派を名乗ったからだ。

「なんとせいけん?!」

「……ふはははなんだそれは。知らぬなそのような空手の拳法」

体術に優れたマシラが飛び上がる。俊敏な動きで相手をかく乱し、空からやってくると見せかけて着地し、凄まじい速さで標的の背後に回る。

「胡蝶流双剣。その首かき切って」

名を許された修羅の台詞は中断された。

金髪の青年による回し蹴り。その発動でマシラの利き腕はくの字に曲がってへし折れた。

蹴撃はそのまま男の骨ごと胴体を粉碎していく。

勢いで吹っ飛んだマシラは、海岸線に設置された石垣に激突し、一言も発することなく即死した。

仮面たちを統率する村の長たる修羅が、金髪の侵入者の一撃で敗れたのだ。彼らが信じられぬ光景を見たとはかりに後退していく。

「バカな……マシラ様が蹴りひとつで」

「……区長に報告せねばならん。ここは引く」

風のように現れ、そして去っていく修羅たちを見送る彼が、遅れてやってきた小舟から降り立つ幼馴染に声をかけた。

「ようやく来たなケンシロウ」

「周辺の掃除を先にやられたか。仕事が速い」

黒い髪、全身黒の服装の男が辺りを見渡し、二手に別れようと告げる。

シンが領きながら、何かがお前を呼んでいるのだらうと何気なく返答した。

ケンシロウが内陸部のほうへ視線を送る。

「ラオウやユダもそのうちやってくる。その前に事を片付けたいが」

そう言いながら南斗の男が背を向けた。無骨な北斗の男も心の赴くまま、方角を変えた。

§ § § § §

一人の仮面の修羅が郡将の居城に現れた。

今日は定例会合が行われると知つての来訪だった。

この国において羅將、准將に次ぐ高官である郡将たちは二十人を超えているが、定数は決められていない。

その下の区将などからの下剋上は制度として認められている。

圧倒的な力を持つ羅將以外は明日入れ替わってもおかしくない。

尚武の国ならではの氣風だった。

通知せずのいきなりの乱入者が無言で大広間の会議室を闊歩する。

その無礼極まりない仮面の男の行動を、警備の修羅はおろか、郡将でさえも誰も止める者はいなかった。

仮面を取れぬ、すなわち下級の修羅である。

だがその辮髪べんぱつの彼は、修羅として千勝以上の存在が集まるこの場所で、あろうことかそのテーブルにどっかりと腰かけた。

呆氣にとられる郡将たちを眺めて心地よさそうに笑つてから、仮面が口を開いた。

「今日は何の会合だ？ 茶の湯を楽しむためか。老害ども」

「……………」

数人の群将が立ち上がる。壁際に立つ警備の仮面の修羅たちが息を飲んだ。

「やめい」

同僚を一喝したのは長い白髪に白髭、壮年の大男だった。

北斗の門の拳を駆使するという、他大陸からの流れ者。

それでも郡将においては有数の拳士だった。名をサンガという。

「聞いておらぬのか砂蜘蛛。南の孤島に送った修羅の軍勢は全滅。あろうことか我が国に侵入してくる何者かのことを」

「フン」

砂蜘蛛と呼ばれた仮面の男がテーブルに何かを放り投げた。

それは総督ジャコウと息子の首だった。ざわつく室内のなか、次に口を開いたのは顔に傷がある短い金色の髪の男だった。

静まれと呟くように告げる彼は、郡将のなかでも白眉と呼ばれるほどの実力者だ。

若い仮面が向きを変え、嘲るように言った。

「カイゼル。侵入者はすでにオレが片付けた。うぬらがお茶会などを開いている間に」

「……たわけが。くだらぬ煽りを」

カイゼルと呼ばれた沈毅な男が腕を組む。

辮髪の修羅が殺気を飛ばしてきたが、戦歴千八百勝の豪傑はそれを平然と受け止めている。

「同じ海岸線だが別の情報、わしらが持つていないと思つていいのか。その侵入者はすでに前衛を突破し、各地を収める修羅どもに迫りつつある」

「ほう」

仮面から見える目を見開き、砂蜘蛛がテーブルの上で膝を立てる。

「なるほど非常事態を上には伝えるかどうかの談合か」

「お前とは違い、わしらは一郡の主。羅将の機嫌こそ事態というもの」

「宮仕えのさもしいことよ」

「ハン様の下僕がほざくな」

カイゼルが虚空を見ながらそう告げた。砂蜘蛛がぴくりと反応した。

「我が国有数の影。食わせ者め。古い情報をわざと流して我らの反応を見たな？」

「……何のことだ？」

「疾風のあのお方は鈍重な者を許さぬ。ゆえに今こそが事態だと先ほど言つたのだ」

豪傑然とした風体の男によつて兇戯が暴かれ、砂蜘蛛がつまらぬと言いたげに天井を



仰ぐ。

「鼎の軽重が問われる事態だが、それでも郡将総出というわけにもいかぬ。誰を遣わすかの話よ」

議長格たるカイゼルが広間を見渡す。

第三の羅将の腹心がいる場で武功を上げようと、数人の出席者が手を上げる。

長丁場の会議の予定だったが、砂蜘蛛の登場によりほぼ即決で終わった。

目論見を果たした推参者はいつの間にか姿を消している。

攻勢に出る者、防衛に徹する者、それぞれの役割を心得た群将たちが退出していく。

そのなかで、サンガとカイゼルが離れた場所で座ったままだった。

同じ壮年でも長い髪、白髭の男のほうが年長である。

彼が短い金髪の年下に向かって呟いた。

「小賢しい。発破をかけたか、あやつ」

サンガの台詞にカイゼルが頷き、返答した。

「疾風の意思を告げに影が来た。つまり」

「あの男、見世物として楽しむ程度には興味がある、ということか」

北門の拳士の郡将の語感には、微量の侮蔑を含んでいる。

修羅の国の武人にとって上司とはとってかわるべき対象でしかない。

「かの国出身のお前は……見世物程度とは思っておらんようだな」

「見世物どころか黒船襲来の危機だ。カイゼル、わしはいつでも手を組む用意はできている」

そう言い放ち、サンガが立ち上がった。

カイゼルも同様に席を立った。巨漢の双方が配下の修羅を従えて部屋を出る。

乱世になることを感じ取った彼らが別の通路を進みゆく。

いにしえの拳、孟古流妖禽掌の使い手がふと足を止めた。

従者である殺<sup>シヤ</sup>、斬<sup>ザン</sup>が暗器に手を伸ばす。

広い通りの先に控えていたのは黒い肌の拳士、別名砂時計と呼ばれる男だった。

もうひとりの修羅とともに、周囲の気配を察知しようとしていた。

カイゼルが近づいて言った。

「ハンの走狗はもうない。案ずるな」

郡将がアルフにそう告げ、同じように跪いているモヒカンで筋肉質の男、イゴールに目を向けた。

その彼が主に対して、先日保護した修羅の件を口にする。

「西嶽派銀槍。ハンに殺されかけたあやつを助けて匿っております。火急の際には何かと役に立つでしょう」

「重畳。アルフ」

「は」

上司に促され、黒い肌の髭男がたった今得た情報を口にした。

「砂蜘蛛め。渡海してきた雑魚を皆殺しと思えば、ガキ二人を連れてハンに引き渡すぞうで」

「……ハン。ダンデイを騙るあの男……第一の羅将には報告せずか。まああの魔人にとつては些細なことであろう。第二、第三の羅将の座がすぐ変わろうともな」

カイゼルが広い窓の外を眺め、マントを翻す。

黒い肌とモヒカンの修羅がそのあとに続いていった。

同時期、違う場所で同じように窓からの景色を見ていたサンガも、待ち構えていた何者かの登場に体の向きを変えた。

「ここはわれら郡将共用の城。部外者は隠れ家に潜んでいろといったはずだ」

センター分けの白髪の男が目を見開き、影にそう告げた。

柱の傍に立つ異相の男が腕を組み、けだるそうに返答する。

「バトロアスラはどうにせよ負傷で動けん。このビジャマ様ならばあの魔人の城にも」

「やめておけ。あれは魔界に君臨する王そのもの。お前程度の悪だくみが通じる相手ではない」

サンガの語感にビジャマを侮る色はない。単に事実を告げただけだった。丸い眼鏡の異相な男が柱にもたれて嘲笑する。

「ほげげ。あの北斗の救世主を待つまでこうしているというのか。お前も剛毅な見た目に反して慎重なことよ」

「ぬしらの拳法、元斗皇拳は確かに頂上拳。だがバトロやアスラ、そなたを含めたところで、この国はビクともすまい。しかし伝説のあの男ならば」

元斗皇拳を知っているただ一人の郡将が救世主の名を告げる。

ビジャマが仮面の下ゆえに、偽ることなく顔をしかめていた。

帝都で見た剛掌破の凄まじさは今も目に焼き付いている。情報収集に長けた彼が調べた限りでは、魔人以外の羅将などあの男の敵ではない。

そんな彼を一瞥しながら、サンガが冷たく言い切った。

「我らが望むは第一の羅将が救世主と相打つこと。うかつに蠢動すべきではない。せいぜい第二第三の奴らを相手に駆け引きを展開する程度に留めておけ」

「……やれやれ」

ピジャマが修羅に偽装した仮面を改めて付け直す。

サンガの野心を煽ってあしらわれた元斗の男は、しようがないといった様相で廊下から気配を消した。

死神を上回る韋駄天の彼は城の屋根にまで跳躍し、眼下に広がる郡都の様子を眺めながらわずかに口角を上げた。

「ラオウ、ユダ、ケンシロウ、シン。奴ら最強といってよい者どもを修羅の国に引き付けることは成功しそうだな。あの天帝のガキ様様か。あの国に残るはトキやフアルコ以下ばかり。つけいる隙は十分にある」

うつそりと呟いた裏元斗の策士が鋭い牙を見せて無意識に笑う。

「そして北斗抹殺を拳是とする月氏の拳士……手段を選ばぬあやつがこの機を逃さずわけもなく、必ず動く。この修羅の国を平定するであろう誰かも無傷ではすまん。やがて北斗と南斗と月氏、三つ巴で戦うことになるであろう。奴らが相打ちになったその後に残るのは……このビジャマ率いる元斗よ」

くけけ、と気味悪い声で笑う仮面の男が跳躍した。

しばらく彼は郡将サンガに従う下級の修羅で押し通すつもりだった。

## 二一話 北斗の羅刹

茶髪髭面、顔に二本の傷がある群将、ケインが側近のトー、ナン、シャー、ペイを呼んだ。

仮面ながら名を与えられた凄腕の修羅たちである。

闘技会場の特等席に鎮座する一群の長の前に跪いた。

会場では修羅を目指す男たちが死合いを繰り広げている。

歓声は席を埋め尽くす群民たちのものだ。

引き締まった体躯、長身の上級修羅が髭に手をやり、ワイングラスを揺らしながら足を組んだ。

「かの国へ送った先発隊は全滅。逆に侵入者がわしのエリアの海岸線を突破しおつた。委細聞いておるな」

四人が肯定するように仮面を伏せる。

「サンガとカイゼル。とうかはったて東華八盾に名を連ねておきながら……この緊急事態に傍観を決め込みおつた。砂蜘蛛の動きも怪しい。奴らめ、何か企んでいる」

東華八盾。修羅の国の東部を領域とする群将たちの総称である。

内陸部を支配する羅將、准將の盾となり、核戦争以降、東の海からの侵入を防いできた。

この緊急事態に当たり、攻勢に出ると自薦した彼は策士として名が通っていたが、猛將を自称するライバルたちの不明瞭な動きは特に気に食わぬところであった。

「まあよい。第三の羅將と反目するという一点で、奴らとは共闘する意味がある」ケインがグラスを叩きつけた。

羅將ハンの武威は国中に轟いているものの、いかんせんその気まぐれに振り回される者は多かった。

彼の配下につきたいと願った修羅などは「生きていても仕方があるまい」という謎の理由で殺されかかった事実がある。

この国三本の指に数えられる拳士とて、そのような男に心底からついていく配下などいない。

気まぐれで殺した修羅の人数を覚えていない、と豪語する彼を憎悪する者は多かった。

「それにしても……なんと、という流派の侵入者。そやつ首を」

そうケインが言いかけたとき、拳法家としては死んだといわれる全身にボロ布を纏った下僕が脱走者を確認しました、と告げてきた。

「ひとりのボロが海岸で補足した子供二人を牢から外に連れ出し、逃げたとのことですが……たるんでおるのは海岸線の守衛だけではないようだ。ふぬけども」

報告したボロ思わず首をすくめた。

会場全体に響き渡る群将の無言の圧で、場内がしばらく静まり返ったからだ。

一人の修羅を送れ、とだけ告げたケインがワイングラスを再び手に取った。

§

§

§

砂漠にしては日の光が弱い。だからこそ連れ出したのだといわんばかりなボロに先

導され、子供二人が後に続く。

盲目の少女の手を引く少年が、どこに行くのかと背の低いマスク姿の相手に尋ねた。

「第三の羅将の元へ」

そう告げたボロが押し黙る。

低空飛翔する機動車両が群将の城の方向からやってくるのを発見したようだ。

三人の脱走者の前に回り込んだ車両が砂地に着地した。

「さすがに打つ手が早いな」

ボロがそう呟く。降りてきた追手は仮面をつけていない。それを外すことを許され



た髪の短い修羅が全身に殺気を漲らせながら闊歩してくる。

「男のガキは修羅に、女は修羅の子を産む。それらを勝手に持ち出すおのれは何者か」  
「見たままでさ」

そう言いながら周囲を窺うボロの背は低い。

戦いに敗れ、足を切られた身分の彼らなど、修羅からすれば路傍の石に等しい存在だった。

「わが目で確認した。問答は無用、持ち出しにより死罪に処する」

浅黒い修羅が目にも止まらぬ突きをボロに放つ。

だが周囲を見回していたボロがそれをあつさりと躲し、相手の背後に回る。

「なに?!」

「……お前一人か。ならばよい」

ボロを脱ぎ捨てた男が膝を折っている状態から身を起こした。

恵体の修羅に劣らぬ長身だった。

「キサマ……ボロと偽っていたというのか。ケイン様の城にどうやって忍び込んだのだ?!」

「お前が知る必要はない」

ズオオという鬨気を身に纏った銀色の髪の男はロックミュージシャンのようなヘア

スタイルだった。

修羅の国ではあまり見ることのない様相に、追手側が我知らずに一步後退する。

その気当たりには覚えがあつた。彼が驚愕しながら呟いた。

「その型、まさか北」

堂々と間合いに突っ込んできた銀色の長い髪の毛の男に対し、何か言いかけた修羅が応戦する。

名を許された拳士に相応しい突き入れだったが、それらは全て男の裸の上半身に弾かれた。

「ぐあ」

仰け反つて距離を取つた修羅との距離を詰めた男が両手を広げ、拳を空に消した。

その切つ先が浅黒い修羅の両側の額に突き刺さる。

「北斗琉拳、喝把<sup>かつはかん</sup>玩」

「ほくとりゆうけん?!」

レンとルイが異口同音に叫んだ。

二人とも子供ながら、北斗神拳のことは知つている。だが琉拳という拳法など聞いたことがない。

「ば、ばかな……こつこのわしが一切反応できず両撃を受けようとは……」

浅黒い修羅があがくと悲鳴を上げながら、頭が踏みつぶされたような形状に変化していく。

踏みつぶされたような残骸はすぐに砂の下へと消えていった。

「ほくと……いやあれはほくとじゃ」

レンが怖気を奮いながらルイをかばい、筋骨隆々の恐るべき男から遠ざかる。

「オレの名はシャチ。お前らを殺すつもりはない。羅将への手土産にはするつもりだがな」

北斗の拳の使い手が子供たちを捕らえた。

放せともかくレンが言葉通り放されたことで尻もちをつく。

はっとした盲目の少女が何かを察したのか、とある方向に指をさした。

その方向を見た少年が息をのみ、ルイを後ろに下らせた。

シャチが舌打ちを放ち、四人の仮面を従える剛毅な男のほうに向き直る。

「……隠れていたのか。群将ともあろうものが」

「北斗琉拳。その拳筋を見させてもらったぞ。不用意な若僧め」

茶色の短い髪と髭、この区域の長に相応しい気合を持つ将がマントをなびかせながら

言った。

「……最近、周囲の村の修羅を殺し回っているのはお前だな」

「そうだ。オレがその羅刹だ」

シヤチの自白を聞いた群将ケインが哄笑した。

「たわけめ。羅刹とは羅刹七人衆のことを指す。お前ごときこわつぱに値する名乗りではない」

「……ほう」

「知らぬか。われらの上、准将たちの別称だ。しかし断罪に処するお前には関係のないこと」

「あらゆる拳法を消し去るほどに輝く光の玉、それが北斗琉拳……カイゼル以外のキサマらなどわが敵にあらず」

北斗七星を象る構えを見せる青年に対し、巨漢が大剣を抜いた。

それを見たシヤチがふんと鼻を鳴らす。

「キサマは拳法家ではなく謀略家と聞いている。わが拳に刃などが通用すると思っっているのか。城内でおとなしくしていればいいものを。武功をあせつたな」

言い終えた側が目を剥いた。

相手の背後にいた四人の仮面の姿が消えていたからだ。

「?!」

はっとして彼が上空を仰いだ。

逆光の影になる二人の修羅、ト一、ナンが名の通りの方角から急降下してくる。

「ケインの懐刀ども……奴らのほうが拳士として才がある。よかろう」

シヤチが吠え、砂地を蹴った。空中で東南の修羅たちを薙ぎ払おうとしたとき、地中から飛び上がってきたシヤチ、ペイがシヤチの背後を取る形で跳躍してくる。

小賢しいとばかりに回転蹴りを四方に繰り出す、それは空を切った。

「ちっ」

宙返りを決めて着地する四人を見下ろし、長い銀髪的青年が再び目を剥いた。

投げ放たれた大刀を躲したことで体勢を崩す。

そのわずかな隙を見逃す群将ではない。彼はいつの間にか敵の背後に立っていた。

「なっ」

「多一の戦いに慣れておらんようだな、未熟者め」

練られた闘気を纏う群将の双撃がシヤチを襲う。ガードしようとして彼の腕が弾かれた。

ブシヤっという音を立て、北斗琉拳の拳士が吹き飛ぶ。

砂地に叩きつけられたものの、脇腹から流れる血を抑えながらシヤチは跳ね起きた。

「……………これは」

気功を駆使する、とようやく気付いた若い男の前に、壮年の修羅が立ちはだかった。

「この尚武の国において、謀のみで成り上がれるわけもない。わしはあえて情弱の情報を流している。そしてわしの真髓に気付いたものは全て死んでいる」

「フン、やはりキサマは奸計の輩よ。それで千五百勝の修羅とよくぞほざけたな」  
立ち上がったシャチがぬん、と気合を迸らせた。

「だがこのおれにここまで傷をつけたことは誉めてやる」

「わが国の頂上拳は短い拳歴で極められるものではない。言つたはずだ、お前は未熟者だとな」

§

§

§

§

砂煙が上がる。

だがトーナサンシャーパーの修羅が四方から突き入れた拳は砂地を抉るのみだった。

先ほどやられたお返しとばかりに、シャチが空から襲い掛かった。

「北斗琉拳、破琉双爛」  
はりゅうせうけん

四人の仮面が弾け割れた。

破孔を突かれた彼らがひしやげて弾ける前に、とどめの纏気弾が彼らを撃ち抜いた。

地に降り立ったシャチの背後で群將の側近たちが血の海に沈んでいく。

ブワっという風圧がこの地を治める支配者のマントを大きくはためかせた。壮絶な形相の若い拳士が向き直る。

「次はキサマだ」

未熟者という暴言に報いを与えるべく、茶色い髭をしごいて高笑うケインに向かってシヤチが距離をつめていく。

彼は止め置かれてるバギーを一瞥しながら言った。

「懐刀はすでに折れた。打つ手はあるまい。だが逃走はさせませんぞ」

「ふはほざくな若僧！」

突進してくるケインの打ち込みを受け流したシヤチが、ありえない体勢から蹴りを放つ。

目にも止まらぬ不規則な蹴しゅうげき撃だった。

「がっ」

肩口を蹴り込まれた群将が地面に叩きつけられた。その重圧でケインの剛体が砂地に大きくめり込む。

「とどめだ」

そう言い放ったシヤチがいきなり体を痙攣させ、横向けに倒れ込んだ。

逆に起き上がった相手が肩をおさえ、吐血した口を覆いながらふううと息をつく。

「……ようやく効きおつたか。さすがは羅刹を自称するだけはある。わしの毒手を食らってそれで済むとはな」

群将の上半身の防具とマントは、北斗琉拳の蹴りひとつで弾け、そして消えていた。うつ伏せになったシャチも血を吐いていた。

震えながら立ち上がろうとする彼をケインが蹴り上げる。

だがそれはシャチの掌で防御され、気功が炸裂することはなかった。

「うぬ」

「やってくれたぜ……キサマの拳が毒とはな。おれともあろう者が油断した」

「その体でまだ応戦できるのか」

「……未熟者と煽つたのは悪手だったな。わが逆鱗に触れた」

「う、うお」

群将の片足を持ち上げたシャチがそのまま腰を上げる。

踏み潰そうとする剛力を、長い銀髪の拳士は渾身の気合を放って弾き飛ばした。

「ハ、ハヤッ」

よろめくケインがいきなり動作を停止させた。

気功術の猛将が首だけを動かし、自由が利かぬ、と吠えたてた。

「初撃が終撃。おれもキサマも同じ流れの奥義だったとは驚いた。その効き目が遅いこ



ともお揃いか。なるほど、認めざるを得んな。確かに群将だけはある」

「(こっ)……これが……は、破孔だというのか?!」

「奥義幻闇壊。げんおんかい 北斗七星が闇夜に輝くとき、その体は砕け散る」

「ま、待て」

くるりと背を向けたシヤチが子供二人を抱え、砂嵐の向こうで固まるケインを一瞥してバギーに乗り込んだ。

「毒で顔が真つ青に」

盲目のルイをかばいながらレンが運転手にそう告げる。

震える青年はいらぬ詮索をと相手にしない。

朦朧とした意識の中、エンジンをかけようとしたシヤチが無意識に鳥肌を立てた。

すさまじい気当たりを食らった気がして視線を上げる。

ボンネットの上に立つ辮髪べんはつの仮面の男の眼光を受け、彼が驚愕の目を見開く。

砂蜘蛛か、とだけ言い放った彼の意識はそこで途絶えた。

## 三話

## 南斗燃ゆ

「う……」

シャチの意識が回復した。

遠くから気功で弾き飛ばされ、砂地に転がった彼が、揺れる視界のなかでこちらに進み来る一郡の長の姿を呆然と見つめている。

「なぜだ……幻闇壊で動きを封じたはず」

「……何度言わせるつもりか……お前は未熟者だと」

髪を逆立てたケインが鬼の形相でシャチの前に立ちはだかる。

破孔を破ったのか、という青年の驚愕に対し、巨漢の郡将が重苦しく告げた。

その目は血走っている。

「我が国の頂上拳に対する見切り……それが破孔封じ。郡将以上の者ならばある程度心得がある」

「……?!」

「魔人にはそのような小細工は通じん。だが第二、第三の羅将ならば……戦術次第でついている隙はある。少なくともお前程度の点穴など、わが気功で十分破れたということ

だ」

ケインが砂嵐を巻き上げながら、気纏を全開に放出しだした。

予想外の展開にシヤチが相手の奥義から逃れようと身を起こす。

そこでようやく辯髪べんぱつの仮面の男を思い出し、彼は小さく毒づいた。

「あのガキ二人の姿が見当たらぬ……やはり連れ去ったのはあやつだったか」

重くも速いケインの横薙ぎの拳で、シヤチの銀髪が束になって風と消えた。

体が重い。北斗の拳士として屈辱の防戦一方になっていた。

「く……」

「毒と裂傷で思うように動けまい。お前は北斗琉拳を学ぶのが遅かったのだ。このわし

と戦うには十年早かったな」

「ほざけー」

シヤチが渾身の力をこめて飛び上がった。

見下ろせば、城からは郡の治安部隊がやってくるのが確認できる。

拙速しゅそくしかないとした彼が瞬炎しゅんえん仙せんという奥義を発動させようとした。

そのときだった。

「う、お」

「ぐっ」

ケインとシャツが見えない何かに弾かれ、双方とも後方に大きく跳ね飛んだ。

「なっ……?!」

二人の拳士が異口同音に空を見上げる。

「ば、瀑布を生むほどの一撃だと……」

何かの衝撃によって地上から湧き上がっていた砂が到達点に達し、滝のように落ちてきた。

ズザアアンという重い音を立て、それらはまた砂地と融合していった。

加勢にやってきた治安部隊の修羅たちも声もない。

砂嵐の向こうから二つの影が見える。

やがて赤紫のマントをはためかせてやってくる何者かを、この場にいる誰もが窺った。

仮面の修羅の一人が指をさす。

「なんだ、あの男は?!」

長い赤毛、無骨なこの国ではありえない白い肌、ファッションに拘った格好といい、あからさまに部外者だとわかる風体だった。

その青年はさらに若い従者を連れていた。

金髪でくるくる巻髪の従者が問答無用に動き出す。

敵だと断定した仮面の修羅たちと交戦を開始した。

若者が叫ぶ。

「南斗焰浄拳、爆龍」

その奥義を食らった仮面二人がいきなり発火する。

若者は油断せず、燃えた体で襲い掛かってくる相手をさらに斬り裂いた。

四つになった残骸を横目に、若者はゲンジュと名乗った。

怯んだ治安部隊を一瞥して、対峙する北斗の青年と気功の巨漢に向かってようやく口を開いた。

「どちらが首魁かは知らぬが……盲目の黒髪の少女と茶髪の少年を知っているか？」

ゲンジュの言葉に若いシヤチが反応した。謀略家であるケインは微動だにしない。

「その反応は知っているな。二人はどこだ」

「さて」

「答えぬと死ぬぞ」

「ほざいたな小僧！」

北斗琉拳の拳士が自分よりさらに年少のそばかす顔に飛び掛かる。

シヤチの凄まじい踏み込みの速さに目算を誤ったのか、ゲンジュの炎の反撃は彼にかすりもしなかった。

「しまっ」

「大言の報いを受けよ。北斗琉拳、破摩独指！」

シヤチの一本指が若者の片目を貫こうとしたときだった。

羅刹を自称する男が赤い髪の男に背後を取られたことに気づく。

「……っ?!」

ずささと退いたシヤチが膝をつく。

得体の知れない赤紫のマントの背中を見た。

無防備な背を取られ、さらに見過ごされるように突っ立っていた相手の目論見を理解

できず、シヤチが表情を歪ませる。

「このおれに寸分も気づかれぬ素早い動き……キサマは」

「あのガキ二人を攫ったのは砂蜘蛛。ならば第三の羅刹、ハンのもとへ向かうはずだ」

シヤチの誰何<sup>すいか</sup>を遮り、郡将があっさりと自白する。

海岸線を突破してやってきた侵入者だと断定したのか、何か思うところがあるようだ。

相打ちを狙っているな、とシヤチが正鵠を射た発言を口にする。

ケインはそれを嘲笑うばかりだったが、赤毛の男がブーツを踏み出したことで、表情を改めて侵入者に問いかけた。

「先程の瀑布を生んだ一撃。あれはお前の拳だな？　そこの小僧ではない」  
「……」

「なんと、とほざいたな。近頃聞かぬ下等の拳法。ハンに勝たねばあの小娘は修羅の子を産む道具となる。なんなら合力してやってもよいぞ」

ケインの煽りに、あつという顔をしたゲンジユが主に振り返る。

郡将たる彼は歴戦の武人であり、煽ったからには赤毛の矛先がこちらに向かうことも承知していた。

だがそんな下等な拳法の使い手は一瞬のうちに姿を消していた。

その影を誰も見ることはできなかった。

部下の仮面はもとより、シヤチでさえ標的を見失って周囲を見回している。

「ぬ、おっ?!」

ブワっという風圧を受け、ケインが巨体を仰け反らせた。

体勢を整えた千五百勝の修羅が鋭い牙を見せながら、己の横を通り過ぎていく赤毛の背中を噛みつかんばかりに睨みつける。

「若僧……そよ風でこのわしを揺らした程度が限界か?!　口ほどにもない」

「ユダ様」

赤紫のマントの拳士が遠ざかる。

くるくる巻き髪の若手が主人に続く。

シャツは飛び掛からんばかりのケインがいきなり動きを停止させたことで、本能から構え直していた。

その冷や汗を本人は自覚していない。

ゲンジユの問いかけの声がする。

「ハンとやらを倒し、あの方を救った後はどうなさいます?」

「……目的を果たせば帰還する」

「羅将などというものには興味がないということですね。承知しました」

そんな推参者たちのやりとりを聞いていたシャツだったが、この国の軍神、羅将に対する歯牙にもかけぬ物言いには黙っていられず、思わず声を荒げて叫んだ。

「我が国の頂上拳、北斗琉拳を知らぬのか……!　　ハンはそれを修めた者の一人」

「……北斗琉拳?　　覚えがないな。神拳の亜流か」

「なに?!」

そばかすが残る童顔の青年が顎をしやくる。

その方向に無言で佇んでいた郡将の肉体が不意に崩壊しだした。

細切れになって風に消えていくケインをシャツと数十名の仮面の修羅たちが呆然と眺めている。



度肝を抜かれて歩み去る二人を見送るのみだった。

「あ、ありえん。群将ケイン様が……先程の風圧ひとつで斬殺されたというのか!」

そんな捨て台詞を残し、長のいなくなった治安部隊が逃走を開始していく。

羅刹を自称する北斗の拳士も、己とほぼ互角に戦っていた猛者が一撃で葬られたことに驚愕しっぱなしだった。

「ま、待て! あの手はケインごときとは比較にならん怪物だ。軽々しく倒して帰還などと戯言をほざきおつて」

「信じられぬのならついてこい」

自分より年下のそばかすに鼻で笑られたシャチが目を怒らせた。

それでも無意識に彼らを追いかけながら言う。

「奴の疾風の拳、今まで誰も見切ることはできなかった。いかにお前の主とて」

「笑わせるな。第三などという地位程度に甘んじている者の拳が疾風だと? アンタはまだ本物の絶影を知らん。自分の目でそよ風と赤い衝撃との差を見比べるがいい」

虎の威を借る狐そのものだ、と呟いたシャチだが、子供ゆえに主人を誇りたいのだからと考え直し、先ほどの出来事を思い出す。

赤毛の雄姿に思わず気圧され、震えながら構え直してしまった己が失態。

北斗琉拳を会得してからというもの、驚天動地とっていい瞬間だった。

徹頭徹尾、多くを語らぬ赤紫のマントの拳士が自分では到底敵わない羅将とどう戦うのか……思わぬ拾い物だと無理やり納得したシャツは、臍を噛みながらユダ主従の後を追った。

§

§

§

§

§

§  
タオは薄暗がりのなか、街の郊外を駆けていた。

修羅になることを拒否し、道場からの脱走を凶ったことで追手に捕まりかけたが、途中で出会った長い金髪の青年に危ういところを救われた。

脱走の理由ともいうべき姉の隠れ家まで案内すると告げたのは、この国で愛を説く姉が、区の長である区将から危険分子と見なされたことを噂で耳にしたからだ。

しばらく走ってから少年が呟く。

「衝撃的な光景でした。貴方と対峙したとたん、手練れの追手が勝手に倒れた。あんな拳は見たことがない」

「北斗の拳ではないことは確かだな」

「知っているのですか、北斗琉拳を?!」

タオが驚いて立ち止まる。

シンとしては軽口を叩いたものの、当たらずとも遠からずの反応をされたことで彼も眉をひそめざるを得なかった。

だが彼は別のことを言った。

「それよりあれだ。山の麓から煙が立ち上っている」

「あッ」

黒い防具に身を包んだ少年が隠れ家の惨状を見て走り出す。

暗がりのなかで修羅たちの軍勢が周囲を取り囲んでいるのが見えてきた。

「姉さん!」

「なんだこのガキは……修道生か。どこから逃げてきた」

夕才が燃え盛る隠れ家に駆けこもうとしたが、修羅のひとりにあつという間に拘束された。

手錠をかけられた彼が炎のなかの影を見つけた気がして絶叫する。

そんな少年と現場を包囲する仮面たちの前に、後方から飛んできたのか、着地したひとりの男が業火に向かって進みだした。

「見慣れぬ風体の男、何者だ?!」

金の縁取りが施された黒い胴着、銀のプロテクターとブーツ姿の青年が熱気をもつもせず、炎のなかに侵入していく。

しばらくして洞窟を改築した学び舎のようなそこから、轟音が鳴り響いてきた。地面が揺れる。

建材と石、岩石を含んだ洞窟が崩れ落ち、火の勢いが弱まった。

「何が起こっている?! さっきの男は一体……」

炎の最後のひと吹きはバツクドラフトに近いものだった。

様子を見に炎の近くに寄ろうとした修羅が爆発に巻き込まれて吹き飛ぶ。

その後から出てきたのは、深淵なる闘気に包まれた金髪の男だった。

傷一つついていない。

「あっ小僧」

拘束から解かれたタオがシンに駆け寄るも、隠れ家はもぬけの殻だと告げられ、少年が修羅の軍勢を振り返る。

「どういうことだ、姉さんは?!」

半包围する仮面たちの返答は冷たい。

「焼き討ちに成功したことで目的は達成した。この国で愛を説く不満分子の女。あれは戦士の子を産むためにすでに攫った後だ。我らがここにあるは、あの女の帰る場所を焼き討ちしたまで。だが弟が釣れるとはな」

「こいつらの軍旗は郡将カイゼルのも……そこに姉が」

「あの頭の固い女は一筋縄ではいかん。だがお前が危険に晒されるとあればその信念も揺らぐ」

「くそっ」

蒼白になったタオがハゲと後頭部にだけ髪がある三つ編みの仮面ににじり寄られ、後ずさる。

「この子の姉は郡将とやらの二元にいるのか」

「うお」

二人の歴戦の仮面が文字通り飛び上がった。

いつ間合いを詰められたのかわからず、うろたえて後退した彼らが顔を見合わせている。

この国にはない出で立ちの、黒い胴着の青年が静かに言った。

「そこまで案内してもらおうぞ」

「おのれ何を言うか！」

双方が吠えながら武器を取り出したとき、十数人の仲間の修羅たちは全て荒地の上で屍を晒していた。

「い、いつの間に」

タオに向かって二人が得意気にほざいていた際に、シンは他の連中を全て始末してい

たのだ。

南斗聖拳は北斗神拳に並ぶ殺人拳であり、彼らに気取られず修羅たちを貫き通すのは、シンにとっては造作もないことだった。

「こつこれだけの手練れどもを一瞬で……お前は?!」

生き残りのハゲと三つ編みが助けを求めるように、暗闇の方向を窺った。

それを見越したシンは薄暗い空を見上げた。

誰かが宙を舞っている。そんな降下してくる何者かが拳法の名を叫んでいた。

「杜流陽湖拳、わが鉄拳でその頭蓋を砕いてくれるわ!」

おりやはつという気合の声とともに、丸坊主の髭男が剛腕を振り下ろした。

仮面をつけず、ウビという名を許されたその修羅は区将とよばれるこの地域の長であつた。

「わはは……はっ!」

丸坊主の長の高笑いが途切れた。

自慢の剛撃があるうことか、彼からすればか細い男の片手で防がれたからだだった。

正拳突きを手のひらで受け止める金髪の青年は、数百人の修羅を配下に収める区将の拳を軽々と握り潰した。

「うぬぬぬおのれ!」

片手を潰されたウビが宙返りを決めたその着地点に、すでにシンは立っている。

同時に彼は口から大量の血を吐いていた。

極聖拳の牙に背中まで貫かれた大男がガクリと膝をつき、信じられない表情を浮かべながら、生き残った仮面の二人を呆然と眺めてうつ伏せに倒れていった。

「なあ?!」

「んな」

たった一人の優男に長を含めた不満分子の掃討軍が全滅させられるなど、ハゲと三つ編みの仮面にとっては悪夢とっていい。

腰を抜かした彼らはアワアワと言いながら後ずさっていく。

同様に、半分腰を抜かしていたタオも貴方の拳は一体、と尋ねる。

金髪を靡かせたその男は南斗聖拳と答え、這う這うの体で逃げ出そうとしていた修羅の襟足を両手でつかんでいた。

## 四話

## 東華八盾（とうかはつたて）

「ハイに姉さんが……」

タオが息を飲んでそう呟く。隣には郡将カイゼルの居城を眺めるシンがいた。

その城門には門番の修羅二人が立っていた。

彼らは問答無用にアーミーナイフを抜き放ち、同じ速度でこちらに向かって疾走してくる。

雨が降った後ゆえか、荒地には水たまりができていた。

水しぶきを上げてやってくる仮面の男たちとは、それでもまだ距離がある。

少年が思わず金髪の青年を見上げた。

シンは泰然と修羅の突進を待ち構えている。

「うわっ」

衝突の余波であろう、タオが後ろ向けに転がった。

起き上がったて見れば、シンに突きこんできた仮面の二人は、彼の左右の貫手によって串刺しになっていた。

門番たちが血の色の水たまりに崩れ落ちたと同時に、城門が開かれた。



様子を窺っていたのか何者かの声がある。

「合格だ。新たに修羅になろうとするものよ。城内に入るがよい」

「あ、あれは」

導かれるように門をくぐったタオがぎよつと目を剥いた。

何人もの部下を従え、壇上の上で腕を組んで立っている巨漢がいる。

この国では珍しいモヒカンのヘアスタイルだが、素顔を許された男はタオのような少年にすら只者ではないと確信させるほどの気合を放っていた。

ひるみながらも少年が問いかける。

「待て、姉さんはどこに」

「あれは修羅の子を産む女。欲しいなら力で奪うがよい」

モヒカン男、イゴールがそう告げた。

荒々しく、獣気に満ちたその男が一瞬にして姿を消す。

試練はまだだとばかりに、数十人の仮面の修羅たちが侵入者を取り囲んだ。

一方、郡将の側近として防衛の指示を与えたイゴールは闘技場に戻る。

死合いが繰り広げられるその会場のなか、ボロや観客の敬意を受けながら、城の主しか座れぬ座席に近づいた。

しかしそこに座っていたのはカイゼルではない。

イゴールのライバルともいふべき砂時計の異名がある黒い肌の男だった。  
「……あのお方は」

「東華八盾の一角、群将ケインが何者かにやられた。その対応に追われている。凝りもせず会議中だ」

ここを任されたと言わなければかりな黒い肌の男、アルフがワイングラスを手に取った。  
イゴールが不機嫌そうにそれを眺めている。

双方ともカイゼルの側近たちとはいえ、郡将と区将の間にあるのは武威による上下関係であり、そこに信義などありはしない。

この国は常に下剋上の気を孕んでいる。

イゴールや郡将代理を自薦する黒い男も、虎視眈々と千八百勝の修羅の地位を狙っていた。

ワインを嗜む相手を一瞥しながらモヒカンの巨漢がふと告げる。

「名を許されるべく訪れた先ほどの男……見慣れぬ拳法であったな」  
「ほう」

「年若いが、歴戦の門番二人を一撃で倒しおつた。ここまでやって来るのに一刻もかかるまい」

そう言い終えた途端、イゴールのモヒカンが逆立った。黒い郡将代理が眉をひそめ

た。

二人の傍らにいたボロたちが何かを感じ取ったのか、会場の入り口を眺めながら後ずさった。

「て、鉄条門が」

ボロの驚愕が終わらぬうちに、闘技場内の進入を防ぐ巨大な門が蹴破られた。

轟音とともに鉄の残骸が会場に散らばっていく。

死合い途中の修羅の何人かが、その破片を避けきれず弾けとんだ。

演武の熱気が一瞬にして失われ、歓声が小さくなっていく。

やがて彼らにとっては道場破りに等しい侵入者が姿を見せた。

だが金髪の青年にとってはカサンドラ以来二度目の城門破壊であり、そこに目新しさはない。

やたら豪華な貴賓席のほうへ向かって歩を進めるのみだった。

「……一刻どころか五分も経っておらんではないか、イゴールよ」

「バカな、修羅の数は二十人以上もいたのだぞ?!」

「目算を誤ったか……やはりキサマは郡将の器ではない。区将で終わるべき匹夫よな」

「上から目線で大言を……!」

鎮座する黒い男とモヒカンの大男が睨みあう。

その間に、警備兵を蹴散らしたシンがタオを連れ、貴賓席前の広場にやってきた。面白くもなさそうに青年が言う。

「取り込み中か」

「若僧、黙っている」

イゴールが肩を怒らしながら背後の侵入者を一喝する。今にも郡将代理に襲い掛からんばかりの剣幕だった。

「おい髭野郎」

シンが大仰に座っているアルフのほうに呼びかける。

「お前がここのボスカ」

「……であればいいのだがな」

肘をつくアルフが赤い布を背中から取り出した。

激昂中のモヒカンの修羅と、金髪の青年を見比べて低く笑う。

「あの偉そうな金髪と組んでかまわんど。キサマ一人ではオレを倒せまい」

「アルフ……うぬはこの混乱に乗じてわしを始末するつもりか」

「お前がいては何かと動きにくい」

「郡将への叛意は明白……いけ好かぬ黒ブタめ、正体を現しおって、打ち殺してやる!!」

「暴言の罪はその首で赦してやろう！」

マントを手にしたアルフが飛び上がった。闘気を発しながら構えるイゴールが同じように跳躍しようと腰を落とす。

だが間に入ってきた青年の深淵なる気当たりに氣勢を削がれ、いずれも侵入者を挟んで飛びずさった。

「若僧……！」

修羅を目指す者ではなく、修羅を倒すべくやってきた男とようやく気付いたイゴールが怒気を発しながら構え直した。

それに比べ、郡将代理は冷静である。

相手を惑わせるためか時間稼ぎか、得ていた情報を口にした。

郡将ケインを倒したのは赤毛の男、キサマはその仲間かと尋ねられたシンが独語した。

質問に対し肯定するような内容だった。

「……さすがは絶影。早くも俺の先を行くか」

「なるほど幾多もの海岸の防衛線を突破したという、近頃我が国を騒がす不定の輩がうぬらか。捨て置けぬ！」

モヒカンの修羅が石畳を踏み碎いて間合いを詰める。

叩きつけるように剛腕を振りかぶった。

一撃粉碎の衝撃だと周囲の誰もが思ったが、それは鈍い音を発するだけで終わった。「なっ?!」

シンより頭二つぶんは大きいイゴールの双撃を片手で受け止めた青年は、マントを闘牛士のように持って構える黒い男に呼びかける。

「お前は来ぬのか」

傲然たる侵入者の物言いだが、アルフは鼻で笑った。

「オレの異名は砂時計……時間内で倒す相手は選ぶ。お前はそれに値するかな？」

見栄を切った黒い肌の修羅が哄笑を止め、目を見開いた。

闘技会場が大きくどよめくなか、ズウンという重低音を立て、イゴールが血の海に沈んだからだ。

おのが流派を名乗ることも奥義を発動することもなく、通算百五十勝の修羅は、シンの貫手の一撃で即死した。

髭に手をやりながらアルフが表情を改める。

「……外部からの突きを得手とする拳法か。イゴールの鋼の肉体をもともせぬとはよからう、どうやらそのほうは二分以内に倒す価値がある獲物のようだな」

砂時計を置いたアルフが独特な構えを見せた。シンは一步踏み出したところで、十字の傷がある手の甲を見せて言った。

「認めた敵を常にその時間内で倒してきたというわけか」

「光栄に思うがよい。いくぞ」

「ならば今度は俺が宣言してやろう」

「なに？」

「わが二撃目でお前の命は尽きる」

若い敵の高言に、会場全体がふぎげやがつてと言いたげにどつと沸いた。

それに呼応するようにアルフが怒髪天を衝いた。

「憤詛熄!!」

鋭く吠えた黒い修羅が一瞬にして標的へと迫る。

「思い上がりおつて、ハチの巣にしてやる。ゆうとうせきえんぶ誘闘赤円舞!」

ブオつという空気を斬り裂く重い音がした。

百の指突がシンを襲う。彼の頬から血がほとぼし迸る。この国に来て初めての裂傷だった。

今まで戦ってきた修羅とは格が違うことを知ったシンが、反撃の牙を放つ。

「わはは、かかったな若僧!」

マントで南斗聖拳の一撃を受けたアルフがそれを投げ捨てた。

その際、けして突き破れたり切れたりせぬ特殊仕様の布が、イゴールの体のごとく風穴が開いていたことに気付く。

だが郡将代理は術中にはまった敵の様子を窺うと、その違和感をすぐに打ち消した。「毒を仕込んだわがマントに触れた。そのほうの目にはわしが何人に見えるかな」

「……」

目元を抑えるシンが痺れた体のまま極聖拳の構えを取った。

「敵ではあったがイゴールは修羅。よそ者などに倒されてよい男ではなかった。報いを受けい!!」

シンの周りを囲んだように見えるアルフの、百の突きがとどめとばかりに撃ち放たれた。

毒により、シンからすれば千にも見える指突になっている。

「二分もいらぬか。一分で十分だったな。興ざめだ」

アルフの勝利宣言が会場に轟く。観客や警備の修羅の驚嘆の叫びがそれに重なる。

それは修羅の幻影に対する実の拳への畏怖とといっていい反応だった。

黒い肌の男の百突に対し、線が細く見える金髪の青年のそれは千本の牙。

南斗極聖拳きよくせいけんのブシャツという効果音は一瞬だった。

「あ、あれを見る。砂時計が……」

修羅、観客、ボロたちが指をさす。

周囲から襲った幻影の拳はことごとく突き破られていた。



巨体を震わせる区将の両手の肘から下は存在していない。

勢いをそのままに、アルフに炸裂したシンの奥義は、郡屈指の修羅である黒い体をまさにハチの巣に変えていた。

「南斗千首龍撃」

恐るべきその技の名を聞いたと同時に、ゆっくりと後方に数歩下がった郡将代理が、半分の長さになった腕を広げ、自分の体を見下ろす。

「し、信じられん……このアルフが……これほどの指突を打ち込まれ、よう、とは」

満員の闘技場は静寂に包まれた。

カイゼル以外の者に彼が敗れるなど、この領地の人間からすればありえないことだった。

「き……キサマの宣言通り二撃で敗れ……二分ももたなかったのはオレ、だ、った……か！」

血煙を上げて倒れ込む郡将の側近をよそに、毒から耐えきったシンが椅子の奥の屋内に向かつて歩みゆく。

困惑から回復しない修羅と観客が固まっているおかげか、中から転げるようにやってきた夕才の声が一带に響く。

「ね、姉さんは羅将への献上品として連れていかれたって、ボロが」

「羅将……」

「第三の闘神ハン。それに比べればこいつらは雑魚だって……」

震える少年に、郡将とやらはどこだとシンが尋ねた。

「強ければ何も問わぬと……会議中だったカイゼルが中で待っていると」

§

§

§

§

§

§

夕才が後ろからついてくる。

ようやく事態を飲み込んだ外の会場のどよめき、動揺は地を揺るがすほどの騒ぎとなっていた。

それを背に通路を進む。大理石の堂内は屋内の広場そのものになっている。

ガラスの屋根からは光が刺していた。

そこにアルフを越える巨躯、威厳を備えた短い金髪の壮年の修羅が腕を組んで立ちただかっている。

仮面を従えているものの、他に数名の同僚らしき郡将が柱の陰に潜んでいるのがシンにはわかっていった。

威厳のある修羅が静かに口を開く。

「イゴール、アルフを倒したか。区将<sup>くわしやう</sup>ごときでは相手にならんようだな。名を聞いておこらう」

「……お前程度に名乗る気はない。他の修羅ともどもまとめてかかつてこい」

カイゼルがこめかみに血管を浮かばせた。ここまで歯牙にかけぬ物言いをされたことはかつてない。

力による支配は絶対であり、自分に抗弁する者などほとんどいないためだ。

「修羅として千八百勝。このカイゼルに大口を叩くとは、いい度胸だ若僧」

殺<sup>シヤ</sup>、斬<sup>ザン</sup>と呼ばれた腹心が圓月の刃を手に飛び上がる。

同時にカイゼルも動いた。

「孟古流妖禽掌<sup>もうこりゆうようきんしょう</sup>」

赤銅色の鬨気に身を包んだ豪傑が堂内を揺らす。左右からは殺、斬が迫っている。

勝利を確信して姿を見せたカイゼルの同僚の台詞が聞こえてくる。

「われら八盾最強と名高いカイゼルの逆鱗に触れたか」

「加勢するまでもない。そうでなくてもケインを倒した赤毛とやらの対応で他の郡に向かわねば」

背を向けた数人の郡将が奥の通路からやってくる何者かに気付いたとき、思わず総毛を逆立てた。

彼らを畏怖させる存在など、この国ではそれ以上の地位にいる者しかない。

## 五話 死人の修羅

「じ、准将バルコム……」

「なぜ貴方がこの城に?!」

八盾の一員、郡将であるギュウコ、ギャモンが黒いマントを靡かせるヘルメットを被った上司を窺った。

肥満体系のギュウコや赤いサソリのような防具のギャモン、彼らに比べれば頭一つぶんは低いが、それでもカイゼルに匹敵するほどの剛体だった。

纏う闘気の圧のせいか、この場にいる誰よりも大柄に見える。

やがて妖禽掌の爪撃を炸裂させた八盾最強の拳士が首だけ横に向け、羅将に次ぐ高官の登場に驚きを隠せずに告げた。

「バルコム……何の用だ」

「つれないのう。加勢に来てやったものを」

「ほごくな魔人の飼犬め……!」

「ほう、奴らが相手にならぬか」

「はっ」

カイゼルが向き直る。

側近の殺、斬が南斗凄斬爪、という奥義で八裂になって散るのを見た。

「あの二人を即斬で……」

驚愕の声を上げるギユウコと、両手に巨大な鍔を装着したギャモンに対し、シンが前からまとめて来いと手招きしている。

「ワシら三人を相手にするといふのか……?!」

「ギユウコ、ギャモン。カイオウの犬に手柄を譲ることはない。身の程知らずの若僧に報いを」

八盾の長が吠えた。

推参者扱いされた准将が腕を組み、興味深げにそれを見守っている。

バルコムは第一の羅将の側近だった。

それに対しつけこまれる隙を与えるわけにはいかない。

二人が無言で応じた。

三人の大柄な修羅が広間のなかで青年を取り囲む。

「若僧、さすがに勝機はなさそうだな。逃げてもかわまんぞ」

バルコムが鷹揚に問いかける。

なんだとと気色ばむ郡将たちをよそに、彼は小気味よげに笑っていた。

一枚岩ではない敵を眺めながら、残像が残る極聖拳きよくせいけんの構えを見せたシンが、クセである傷があるほうの手の甲を向けながら言った。

「お前は見ているだけか？」

「……なにイ」

ハーフヘルメットにゴーグル、赤いマフラーという外見の准将が組んでいた腕を解いた。

「聞こえなかったのか。お前も含んでかかって来いと言ったのだ。雑魚ざさが千匹かかって俺は倒せん」

「ほざいたな若僧わかしゅう!!」

バルコムが激昂する前に、肥満体の修羅ギユウコがぶち切れてシンに突進した。

力士のごとき張り手を繰り出す丸太のような腕を躲かわし続けた彼が、相手のがら空きの脇下に必殺の牙を突き入れようとしたとき、横から巨大な鋏はさみが薙ぎ払われてきた。

シンが後方に飛びのいた。

そんな動きを見切っていたカイゼルは、その着地点にねじ切るような拳を撃ち込んでくる。

鬨気を纏う熊手のごときそれは、大理石を砂地のように軽々と抉り、打ち上げた。

「大言の報いを受けい！」

石の破片を砕いてやってくる妖禽掌ようきんしょうの剛撃で、金髪の青年の胸元から血が吹きあがった。

仰け反った南斗の拳士にギウコとギャモンの追撃が続く。

両手で双方の拳を受け流したシンが衝撃を完全に消せずに、砂煙を上げながら後ずさった。

「思い上がったなあ金髪の若僧。わが国を騒がす不逞の輩といえど、郡将三人が相手では」

言いかけたバルコムが腕を組み直す。

構える腕に遮られ、敵の目の上は見えないが、その下の口角は上がっていた。

「まさかあやつ……あえて不利な戦いを望んだとでもいうのか」

相手の体から血を流さず、骨や内蔵を抜き取る妙技、妖禽掌ようきんしょうを受けて無事な男など、

この修羅の国においてはほとんどいない。

さらにあの男の気纏きせうは、部下三人に比べて著しく小さいのだ。

バルコムほどの猛者でさえ、斧に立ち向かう蠟螂ろうろうとしか見えぬ。

なぜあのような余裕を持てるのか理解できなかつた。

彼が深淵なる闘気、というものを理解するのは後になつてからである。

「虎背熊牙盗……今度こそそうぬの臓腑をちぎり潰してやろう！」



クアアアという独特の気脈を迸らせ、カイゼルが奥義を発動させようとしている。彼と連携したごついハサミ男と力士体型の同僚が斜め後ろから襲い掛ってくる。

「むっ?」

ドン、という重圧で広間がまた揺れた。

重低音の後で煌めく黄金の光を確認し、観戦中のバルコムが目を細める。

孟古流の奥義を放とうとしていた八盾の長が、思わず二歩、三歩と後退していた。

「カイゼル。何故間合いに踏み込むのをやめたか」

「……」

犬猿の仲の准将にそう煽られた郡将だが、それに反応することはなかった。

彼の体がさらに退く。そこでやっとバルコムがその理由を知る。

左右から急襲したはずのギユウコ、ギャモンの両名が膝をつけてしゃがんでいた。

カイゼル以上の巨軀である男たちが、十字の構えで両手を広げた細身の侵入者に易々と体を突き抜かれていたのだ。

「脂肪の塊のギユウコ、刃も通さぬギャモンの鎧を…… たった一撃で?！」

カイゼルの驚嘆はそのままバルコムの驚愕だった。

低い姿勢で南十字星の構えを見せていたシンが、突き抜いた標的から牙を抜いて立ち上がる。

郡将二人は青い顔のままガクン、と首を後ろに下げてそのまま仰向けに倒れ込んだ。重量級のダウンにより砂塵が舞う。

一瞬にして上位の修羅たちを倒した奥義の名を、シンが静かに告げた。

「南斗虐指葬」

闘気を駆使し、魔界を最上とするこの国においては、シンの実の拳は派手さに欠ける。だがカイゼルは無意識に後退し続けた。

歴戦の武人の勘ともいえるべきか、見えない気脈の凄絶さを肌で感じ取ったからだつた。

バルコムも時間差をおいてそれを察した。そして尋ねた。

「……お前の流派は」

「南斗極聖拳」

「なんと……北斗琉拳に匹敵する斗の拳法か」

「少しは心得があるようだな」

彼らからすれば小柄に見える青年が金髪を揺らして進み来る。

アルフやギユウコ、ギャモンと戦って負傷した相手ながら、千八百勝と二千勝を越えるこの国屈指の修羅が鳥肌を立てながら身構えた。

互いに冷や汗をかいていたが、煽りあう余裕はない。

「こやつ……尋常ではないぞバルコム」

カイゼルが額に汗を浮かべながら背後にいる政敵の名を呼んだ。

「わかつている。こうなれば二人がかりで」

「お前は引け」

「……なに」

驚くバルコムに、カイゼルが羅將に報告しろと言い放つてから、利き手に鬨気の全てを集中させた。

「孟古流妖禽掌、伐陀羅……」  
もうしようきんしやう ぼつだら

ライバルに等しい相手の最終奥義の名を口にした准將に、死人と化した郡將が伝説の来訪者かもしれないと返答する。

「わが国の鬨神、羅將の支配から解き放つと言われている伝説の男がこやつだというのか……?!」

「わからん。あるいはその手下かもしれない。どのみち内輪揉めしている事態ではなくなった」

バルコムほどの猛將が躊躇したのを見て、カイゼルが吠えた。

「はやく行けい！ よそ者になどに故郷の体制を荒らされてなるものか」

ゴードルの髭男が口角を上げる。



カイゼルが顔を真つ赤にさせながら、破壊された利き手を掲げて仰け反った。

秘奥義といつていい伐陀羅ぼつだらを正面から砕かれたと同時に、上級修羅としての矜持も砕け散った。

天地分断の勢いで放たれた黄金の牙が仰け反った空きの胸に刺さっていく。

闘気のガードも鋼の筋肉も用を成さず、彼の胸板は軽々と撃ち抜かれていった。

南斗極きよくせいけん聖拳に貫徹ぬものはない。

己が拳法の真髓を語る相手に対し、カイゼルが屈辱まみに塗れながら、血にまみれになりながら膝をつく。

奥義ですらないただの指突に敗れるなど、人生の全てを戦いに捧げた修羅にとって、存在理由の否定でしかなかった。

しばらくの時間を置いて、闘技場にいた修羅たちが現場の混乱から立ち直ったのか、騒々しく扉を開けて外から入ってくる。

仮面の彼らの視線の先に、ギユウコとギャモンが血の海の中で屍を晒しているのが見えた。

「ぐ、郡将様方が……」

一撃で倒されたと思われる二人の傷跡を見た修羅たちは、さらに奥にいる二体の影に気付いた。

中背に見える金髪の青年が、両膝をつく東華八盾随一の猛将の胸に、貫手を打ち込んでいるのを確認して、彼らは絶叫していた。

腰を抜かした修羅の一人が渦中に指をさしながら言った。

「あ、ありえん……かつカイゼル様すらも?!」

竜の牙の異名があるそれが、千八百勝の修羅の背中まで突き抜けた。

ポツという鈍い音とともに、巨体が九の字に折れ曲がる。鮮血が宙を舞った。

仮面の連中はどうすることもできず体をすくませ、震えながら堂内を眺めるばかりだった。

三人の郡将をまとめて倒す男の存在に気圧され、柱に隠れる夕才に気付く様子はない。

静まり返った空間のなか、カイゼルがかすれた声で告げる。

「八盾をもともせぬか……見事だ……だが我らを倒したところでこの国はビクともせん。あの闘神たちがいる以上……伝説など伝説で終わる」

両手を大理石についた孟古流妖禽掌もこくりゅうおんしんしょうの豪傑が吐血しながら薄く笑った。

貫手を抜いて態勢を立て直したシンは、うつ伏せに倒れ行くカイゼルの言葉を聞いていた。

「……行くがいい……これよりは准将をはじめ、このカイゼルよりはるかに強い男たち

がお前を待っている……修羅ども」

「は、はっ」

十数人の仮面たちが間際の郡将の声に背筋を正す。

「南斗極聖拳……それがこやつきよくせいけんの拳法だ。国中に触れ回れ」

「ぎよ御意！」

闘技場へと逃げるように出ていく彼らをシンは見送る。

倒した相手を見下ろすのみだった。

カイゼルが佇んだままの相手を見上げて言った。

「あえて止めぬか……侵入者よ」

「極聖拳きよくせいけんの極意でとどめを刺した。そんな相手の最後を妨げる理由はない」

流れる血の範囲が広がっていくのを他人事のように感じながら、カイゼルがフンと鼻を鳴らす。

薄れゆく意識のなかで彼はようやく悟った。

この恐るべき男は奥義を駆使せぬときこそ真価を發揮する、ということを。

そんな情報を伝え切れなかったのを無念に思いながら、郡将カイゼルは眼を閉じた。

## 六話 表裏一体

潜ませていた影からの情報で、郡将サンガは東華八盾の長カイゼルが倒されたことを知る。

同時にこの国に帰ってくるという救世主の伝達を告げる「赤い水」の目撃情報が多発していることも知った。

「南斗復古の拳……あの聖帝サウザーを貫いた牙の持ち主が相手では、さしものもうこりゆうようきんしやう孟古流妖禽掌も相手にならずか……」

センター分け、長い白い髪に白い髭の男は、執務室で仮面から報告を受けた後、目を閉じてそう独語した。

好敵手の討ち死にを聞き、感慨を持って応えた壮年の群将が椅子から立ち上がる。

仮面の影がさら告げた。

「この事態はすでに羅刹七人衆のお耳に入っております」

「……なにイ?!

准将のなかでも特に武に秀でた者を称して羅刹七人衆と呼ぶ。

サンガほどの人物が怒号に等しい返答になったのも無理はない。



まさかここまで早く事態が悪い方向に進むとは思っていなかったようだ。

「ば、バルコム様を含め准将たちは会合を開く予定だとか」

上司の剣幕に仮面が平伏しながら言った。

魔人の子飼いの名を聞いた彼が落ち着きを取り戻したようで、無意識に舌打ちを放つ。

「侵入者は黄金の牙だけではない。評定の結果、個人プレーで迎撃ではあるまいな」

個々の武力で状況を打破してきたこの国の体制は、もはや弊害と言えた。

大陸からの流れ者の彼は口だけ動かし、あほうどもめが、と上司たちをこきおろした。窓からの気配を感じたサンガが部下を下がらせる。

間髪入れずに開いたそこから入ってきた仮面は修羅ではない。

同胞と聞いていいが、利害のみの関係だった。

慣れない仮面をつけ直すクセのその男はターバンを巻いている。彼は喉の奥で笑っていた。

「笑えないスピードの展開だな。羅将とやらのすぐ下の精鋭どもがこうも早くご出馬とは」

「……」

「このビジャマの勘が告げている。出国の用意はしておけ」

「なんだと？」

「身をひそめ、この国の進退を見極める必要がある」

「……まだ羅将が控えている状態で逃げを打つか」

「脱出経路は常に確保する。それが最強ではない者の知恵というもの」

この時点でビジャマは修羅の国自体が井の中の蛙という言葉は避けた。

そしてサンガも彼の言い分に理があると思つたのか、慌ただしく執務室を後にした。

§ § § § §

海岸線を突破した侵入者の噂は、このころになると国中に伝わっていた。

そんななか、赤毛の男が近侍の若者と北斗琉拳の使い手シャチを連れ、東華八盾の生き残りが籠る城へと到達した。

ここを突破すれば羅将へと続く最終防衛ラインへとたどり着くはずだった。

「このエリアは郡将シエが守っている。奴はカイゼルの足元にも及ばぬが、ケイン程度の腕はある。多勢に無勢、突破するには知恵を絞るべきだと思ふがな、赤毛の」

シャチが高い城壁を見上げながらそう言い、壁に手をかける。

分厚いそれを砕くのは容易ではない、と思いつつも、足元の砂漠から何かが盛り上

がってくるのを察して飛びのいた。

「ふん……シエの手下か。主に似てカニそのものだな」

両手に刃を装着した修羅は仮面ではなくゴーグルをつけている。十数名の彼らはガニガニと擬音を発しながらシヤチに飛び掛かった。

連携技の急襲から逃れるためにシヤチが跳躍する。

それを追って地を蹴ったカニが到達点でなにと吠えた。

うつ伏せのような状態で待ち構えていた北斗の拳士が、気合の声とともに四肢を伸ばす。

その瞬間、四人のカニの胴体はシヤチの拳と蹴りに撃ち抜かれていた。

風穴があいたそれらが砂漠のなかに落ちていく。

「郡将ケインを殺った赤毛。その手下め、やりおるガニ」

「あ?」

聞き捨てならない台詞を聞いた若い彼が着地際に回転蹴りを放つ。

地上にいたゴーグルの修羅数体の頭が吹き飛んだ。

しかし最初から罠として設置していたのか、不意に砂から突き上げられた刃により、シヤチは足首を斬られる寸前でまた飛びのいた。

後方への着地点にも刃があった。

周到なと呟いたシヤチが倒立の状態になり、かろうじてそれを躲す。  
「本体のお出ましか」

「アツシがカイゼルの足元に及ばぬだと？ キミはこのシエの足元にも及ばぬガニ」

砂をかき分けて姿を見せたのは、配下たちとは違いすぎる巨漢だった。

男か女かよくわからないカニのような存在の巨大な刃には、敵の足を斬った血がついている。

シヤチは斬られた足の部分を見降ろし、鼻を鳴らして吐き捨てた。

「城主自ら前線に立つとはな、褒めてやる」

「くかか若僧、未熟者め」

羅刹を自称する青年と郡将の一騎打ちが始まると同時に、カニの手勢が赤毛に忍び寄る。それを主に近づけまいとゲンジユが炎の拳を奮い出した。

「ユダ様、何をお考えです？」

考え込むような仕草の主にそばかすの若者が問いかける。

しばしの間をおいて、赤紫のマントの男がふと告げた。

「…………この城のなかに兵気を感じる」

「うなっ?!」

シエが北斗の拳を刃の柄で受けながら唸った。

「なじえそれを……ガニ」

「中に誘い入れ、数で圧倒するつもりだったか！」

「か、数じゃないガニ。そばかすの小僧、お前、赤毛。並の修羅では歯が立たぬガニ」

シヤチの問いかけにシエが首を振り、ワハハと笑って長大な刃を振りかぶる。

だがその笑みは沈勇を絵にかいたような優雅な男の一言で消えた。

「大手門の向こうの何者かの気が……ひとつひとつ消えていくな」

「ガニ?!」

「そなた」

ユダが一步踏み出した。

数体のカニを相手に奮戦していたゲンジユが慌てて飛びのく。

すると小ガニたちが一斉に鮮血の瀑布のなかで絶命した。何が起こったかわからず、

戦闘中のシエとシヤチが周囲を見回す。

赤い衝撃、その絶影の拳を見たのは誰もいない。

その優雅な拳士が静かに言った。

「先客をすでに罠にはめた後ではないか？」

「なっ、なななん何のことかわからんガニイ」

門をちらりと見たシエが内側から響く拳撃に大汗をかき出した。

シヤチが城内の気配に気づき遅れたのは無理もない。ふぎけた外見に口調の敵といえど、シエは大敵だった。

今まで葬ってきた村長や区将とは格が違うのだ。

耳をすませば、ドゴンバゴンという打撃音が聞こえてくる。

城門に誰かがぶち当たったのか、鋼鉄製のそれが軋きんでへこむほどの内側からの衝撃だ。

「あによ叫び声はクジン、ルイスウの」

どもった恰幅のよいカニが仲間の名を口走ったあと、キインという赤い閃光の後の名残りの音を聞いて跳ね上がった。

「な……」

シヤチが目の前の大敵とともに、驚愕で声を失くす。

郡将の居城の門は砲弾でさえも跳ね返す厚さの作りになっている。

その材質でできたそれがスパツと綺麗に四散したことで、周囲に轟音が轟いた。

城門が四つに割れ、コンクリートの壁を巻き込んで崩れ落ちていく。

そんな閃光を生んだ男は固まるシエには目もくれず、瓦礫の上を踏み進んで城の中に足を踏み入れた。

「すすすすす素手である門をブチ壊しやがったガニ……?! バケモンかあの赤毛エ」

「……」

どもり続けるシエとシャチの感慨はまったく同じだった。あれほど鋭利に分厚い鉄の塊を切り裂いた者はこの修羅の国でも見たことがない。

「北斗琉拳でさえもあのような技はない。少なくとも……オレには不可能」

若き北斗の拳士は年上であろう赤紫のマントの後姿を眺めて愕然としていたが、その赤毛の男が中にいる誰かの名を呼んだことで我に返る。

「ケンシロウか」

「……ユダ?!」

彼らの生国でも見なかった珍しい組み合わせである。

しかしサングラスをかけた黒髪の男のほうが驚いていた。

ユダの傍らで周囲を見渡した金色のクルクル巻髪の従者が、倒れている衛兵と巨体を確認して主を見上げた。

「ユダ様、この何人かの立派な風体の奴ら」

「郡将たちだ」

南斗の若手の質問に、北斗神拳の伝承者が答える。

「あんたも修羅の罠に誘われた口か、ケンシロウ」

「うむ」

「畏ごとく嘯み破つたのはさすがだが、少々やられているな」

「上級修羅とその部下、無傷というわけにはいくまい」

そんなやりとりを聞きながら、ユダが城門前に視線を向けた。

「シヤチとやら」

「なんだ、今は忙しい！」

「カニは放つてここに来い」

「ふざけるな！ こやつを相手に背なぞ見せられる余裕など……」

「ゲンジユ」

「はっ！」

そばかすの従者が反転し、シヤチの元へと駆け付ける。

「ここは僕が引き受けた。はやく城の中に入れ」

「世迷言を。こやつは到底お前の敵う相手ではない」

「ユダ様に一任されるは南斗の男として冥利。もはや問答無用、はやく行けつ」

決死の若者が炎を迸らせた。シエがそれを一瞥して鼻で笑い、シヤチの背に言葉を投げかけた。

「命拾いしたな若僧！」

「用件を終えたら戻ってくる。それまで子供相手に遊んでろ」



そう言い残し、シヤチがユダとケンシロウの元へやってきた。

「つまらぬ用なら許さぬぞ赤毛」

長身の彼だが、ユダはそれ以上に高い。その男が白い指を転がる亡骸に向かつて指した。

バカなど目を剥いたシヤチの台詞が広場に響く。

「これは……東華八盾の生き残り?! 四人もの郡将をまとめて倒したというのか!」

黒髪、黒い服の無骨な男が頷く。その筋骨隆々の男は北斗神拳伝承者と名乗った。

「北斗神拳……」

そう呟いた北斗琉拳の拳士がハツとなる。彼が幼きころ出会った救世主のことを思い出したようだ。

「たしか……ラオウ様の拳法」

「兄を知っているのか」

「……わが父が仕えていた偉大なる王だ」

誇らしげに告げた彼が爆炎の風圧を感じて横顔を向ける。

崩落した城門の向こうで、その炎を刃で消し去ったシエが、南斗の若手に交牙断随こうがだんずいという奥義を放とうとしていた。

言わんこつちやないという表情でシヤチが毒づく。

「……哀れな小僧だ。有望な若手をわざわざ死地に向かわせるあんたも大概だが」  
そう言い終えたシヤチがユダの姿を見失う。

周囲を見渡してから、ようやく後方へと振り返った。

毒づいた相手は一瞬にして渦中へと宙返りをきめていたからだ。シヤチは口を開けてシエとゲンジユの間に着地する離れ業を眺めるばかりだった。

「ナ、ぬ?!」

カニのような離れ目の郡将がそう叫んだときには、自身の武器である両手の刃は砕け散っていた。

「あ、ありえん動き、ガニ」

城門の素材以上に硬い刃が根元から折れていることに仰天しつつ、シエがそれを投げ捨てる。

どこから取り出したのか、新たな刃を装着しようとしていた。

「死にたいのか、生きて帰りたいのか」

すでに城の中の惨状を悟っていたシエは相手の問いかけに対し、生きたいガニ、と汗だくになりながら拝みだした。

郡将の要職にあり、死合の経験が豊富な彼からすれば、この目の前の赤毛は拳威とい身身のこなしといい、異常に過ぎた。

鬨気がないように見えて内に込める何かは、この国の他の誰とも違っていた。

それに比べればそばかすの小僧やシャチとかいう北斗の若僧など赤子に等しい。

怖気を奮いながらシエが恐る恐る尋ねた。

「じ、准将様方に襲来を伝えてきてもいいガニか?!」

「そのほうが手間が省ける。できるだけまとめて来るように」

「が、ガニ」

いくらなんでもまとめて、つてこいつはバカなのかと考えつつ、羅刹七人衆になぶり殺しになりやがれと心の中で吐き捨てながら彼が逃走を開始する。

それを見送ったユダはゲンジユを連れて再度城の中に入っていった。

死屍累々の広場でシャチと何か言葉を交わしていた北斗神拳伝承者に向かい、ゲンジユが言った。

「郡将以上の修羅である准将とやらがここに来るらしい。ユダ様はそれらを一網打尽にするつもりだ」

まだ二十歳前の若者にケンシロウが頷く。

准将の名を聞いたシャチが武者震いを見せた。そんな彼が赤い川の発生を知るのはこの後すぐのことだった。

ラオウ伝説はすでに始まっているのだとシャチは思った。

## 七話

## 羅刹七人衆

バルコム、ナガト、テンキボウ、カラスマ、ツキヒグマ、ゲムムサイ。

彼らは羅刹七人衆と呼ばれている。准将のなかでも特に武名の誉れ高い者たちの称号だった。

そんな彼らの城は郡将の大掛かりなものとは違い、敷地も広くなく質実剛健で質素な作りとなっている。

そして知行も郡将とそうかわらない。それぞれが抱える軍団の規模も似たようなものだ。

つまり頂点である三人の羅刹からナンバー2の役職である准将は警戒されている、と世間からは思われている。

真偽は定かではない。

そんな七人の准将たちのなかで最後に姿をあらわした辮髪の仮面は挨拶もせず、無言で既定の座席についた。

城というより館のような会議室の先客六人が、ただひとり素顔をさらさぬ中背の男を一斉に見た。

ろうそくだけで照らされた室内は暗い。そして何者かが彼に語り掛けた。

「東華八盾が崩壊、カイゼルも敗れた。聞いていなどうかはったて」

入室していきなりの情報に、砂蜘蛛が仮面の下の目をわずかに細めた。すでに赤い川が発生したことは知っている。

それには答えず、最年少の修羅は別のことを口にした。

「シエという郡将がわがもとに駆け込んできた。奴の城が攻略されたとのことだが」

椅子を引いた砂蜘蛛が長い足を組む。

「侵略者ども、奪った城で待っているという。思い上がったのか七人衆まとめてかかってこい」と

それまで静まり返っていた広間がどよめいた。

舐められていることに静かな怒りを発しているようだ。しかしながら年長のバルコムやナガトは無言だった。

仮面が議長格たる男に向き直る。

「どう思うね。七人衆を束ねるバルコム將軍」

「……どう、とは」

「赤毛とサングラスの男、そばかす、羅刹を自称する若僧。たった四人で我らが挑発されていることに関して」

砂蜘蛛は明らかに筆頭を挑発している。

テーブルを挟んで向かい合う五人の男たちはそう思った。

だがバルコムは腕を組んだま相手を一瞥すらしていない。誰であれ、未だかつてこの猛将に煽りが通じたことはない。

熊のような体躯の男は政敵を見ないまま返答した。

「カイゼルを倒した金髪の若僧……わしはそれを仕留めるための準備を整えている。赤毛やサングラスの男などに関心はない。必要があればお前が指揮を執れ」

「羅刹七人衆の一人としてオレは独歩の男。徒党を組むうぬらのように決まった部下はおらん。

統率力でいえばナガトが適任であろう」

このなかで一番年下の青年の言葉に、最年長の口髭男、ナガトが葉巻を手に首を振る。武辺者のバルコムにせよ彼にせよ、ここに召集されたのが心外の様相だった。

そんな暇はないと言わんばかりだ。直属の上司である第二の羅刹が婚約者を何者かに殺されたせいで乱心し、その対応に追われている。

そんななか、武勲を立てる機会だとして残る羅刹たちが自薦しだした。

面白くなさそうに面白くもない会合が一段落すると、復讐に燃える七人衆筆頭は用事は済んだとばかりに出ていき、次席ナガトもそれに続いた。

残されたのは砂蜘蛛ら五人だった。

しばらく無言の時間が続いたが、若い彼は自分が指揮官になることなどないと断言し、他の羅刹たちの功名心を煽る。

「あのじじいどもは放っておけ。テンキボウ、カラスマ、ツキヒグマ、ゲムサイの四人で事はなる。今回ばかりはうぬらの功名を邪魔する気はない。侵入者を排除した功績は第一の羅將に報告しておく」

砂蜘蛛がそう言い切った。おのれは魔人と呼ばれるこの国最強の男の直臣だと白状したも当然だった。

ゆえに魔人の陸戦部隊を指揮するバルコムが邪魔でしかないのだが、そんな事情は四人の知ったことではない。

意気込む同僚に心からの叱咤激励を送り、砂蜘蛛は影の役目を果たすべくただひとり城を出た。

§ § § § § § § § § § § §  
北斗琉拳先代伝承者が住むという、聖地の沼という場所がある。

羅將以外の羅刹たちがここに立ち入ることはできないといわれている。

遺跡のようでもあるそんな区画に、ボロのような家人が背を向ける主人の足元に慌てふためいてやってきた。

そして現在国中に触れが出されている警戒すべき斗の拳法について告げた。

老年の男が振り返った。フードの下の暗い目をボロを纏った小男に向ける。

「南斗極聖拳……それが東華八盾筆頭のカイゼルを破った指突の拳法か」

「他にも様々な地域で郡将たちが倒されており、それに敵は若い南斗の男一人ではありません」

「だとしても数人の仕業であろう……修羅の国ともあろうものが早々に准将の出陣を仰ぐことになるとはな。尚武の気風が聞いて呆れる」

中背の老人が歩き出した。

ボロが主人の名を呼ぶ。ジウケイとよばれた先代伝承者が呟いた。

「だが南斗聖拳では……それ以上は望めぬ。この国を大きく揺るがすことは叶うまい」

かつてジウケイは北斗神拳伝承者リュウケンと比肩される賢者であった。

その彼が知る限り、救世主はそのライバルの弟子でしかありえない。

北斗の後塵を仰ぎ続ける南斗では役不足も甚だしいとさえ思っている。

「身の程知らずの南十字の拳士ども、わしが訓戒を垂れてやらねばならん。羅刹七人衆相手ではちと辛かろう」



精強を誇った郡将のトップ集団が壊滅したことは、国の東部区域に激震をもたらした。S S S S S

それ以下の郡将や区将などが各地を見回って治安の回復に努めている。

そんな厳戒態勢の治安部隊がやがて修羅でも一般人でもなさそうな何者かを発見する。

とある都市に近い砂原でのことだった。

健脚揃いの仮面を率いる修羅、禿げ頭が全身にボロをまとった男を呼び止める。

「おっと待ちなさいさん。ここらへんじゃ見ない顔だな。どこへ行く?」

「……」

「検問だ。身元不明の怪しい奴あ金髪の若僧とガキ以外もひっ捕らえろって指令が出る」

皴深い額に刻まれた傷が目立つ老人は、相手の出で立ちを見て第二の羅将、ヒョウの部下かと尋ねた。

「おっお、我らが将を呼び捨てにしやが」

巨漢の修羅が老師の胸ぐらをつかんだとたん、その体はボツといういやな音とともにその大半が消し飛んでいた。

首から上だけになった偵察隊の小頭が無無、という断末魔を残して砂地に落ちる。

残された仮面たちが飛びずさった。そのなかでただひとり冷静に対応している辯髪の男が、興味深そうに観察対象を窺っている。

「ハ、こやつ何者?!」

「ラオウ伝説が到来するまでわが世の春を謳歌していればよいものを……南斗ごときに右往左往しおって、未熟者ども」

北斗琉拳すらわからぬか、そう思いながら北斗の古老がおののく仮面の一人に目を向けた。

その者は他の同僚のなかに身を隠している。

それを一瞥し、ジウウケイは明後日を向く。砂原の向こうからやってくる二つの影に気づいたからだ。

「奴か」

ジウウケイと異口同音の台詞が仮面部隊の中から聞こえてくる。辯髪のその男にかまわず、老人は長い金髪を靡かせる青年に同行していた少年の名を呼んだ。

「夕才」

「?! 老師?」

「小賢しい南斗の同行者とはおぬしだったのか」

「レイア姉さんが修羅どもに攫われたのです。この人とともに行方を追っていて」

「……」

夕才を姿が見えなくなるまで遠くに避難させたあと、少年の同行者がジユウケイと対峙する。

遠くからの北斗の殺気を南斗の青年はわかっていたようだ。

凄絶な殺気の持ち主がため息まじりに告げた。

「名乗る必要はない。わしも南斗ごときに名乗る気もない。身の程を弁えよ若僧。この国を救うべきはうぬではない」

斗の拳法、老虎若龍の戦いを修羅たちが見守るために引き下がっていく。

ヴァジュラという呪文のような言葉を発した瞬間、砂地一面が爆散した。

うおつという悲鳴を上げる観客をよそに、暗い目の老人が砂の雨を他人事のように眺めている。

だがそのなかから泰然と進み来る若い男の姿に瞠目して言った。

「わが気の奔流をどう躲かわした?」

黒い胴着の縁取りは金、その部分についた砂を払いながら、シンが十字の傷がある手の甲を見せて手招きしている。

効かんなあといわんばかりの素振りに、ジュウケイの暗い目が光った。

異様な気を察した仮面たちが背後の辮髪に横顔を向ける。

「砂蜘蛛様……あの気脈は」

「やはり北斗琉拳の古豪か。第二第三に及ばぬのは年のせいだけというわけだ。練度ならひけはとるまい」

砂蜘蛛と呼ばれた中背の男が目当ての南斗の男とは違う興味を覚えて、老人の背を眺める。

しばしの時間をおいてまた爆風の鬨気がシンを襲ったが、今度は砂のカーテンの邪魔はない。

「ま、魔闘気が消えた……?!」

修羅たちが仰天したのも無理はない。

あろうことか、標的の青年は禍々しいそれを十字に払いのけ、一瞬にして霧散させていたからだ。

当然にしてこの場にいる全ての者は、かつて彼が鳳の最終奥義、極大の気当たりである落鳳破すら凌いだことを知らない。

「バカな。わしの暗流を砕くとは」

自分の知っている南斗ではない、とようやく悟ったジユウケイが初めて構えだす。

魔闘気というのは空間を歪めることによって立ち位置を失わせるが本領だった。

久々に駆使した暗流が歪み切っていないことで不発に終わった、とジユウケイは的確に分析している。

北斗の矜持にかけて南斗に劣ると認識することはできなかった。

「死合の勘はこの場で取り戻す。うぬはなまった腕のわしにすら及ばぬことを今から思い知れ」

## 八話

## リユウケンの弟子

「後ろを取ったぞ思い上がりの若僧、この至近距離で暗流は防げまい」

歪んだ空間のなかで上下左右の感覚を失い、無防備の背中をさらした金髪の青年に向かって、北斗の古老が魔闘気の裂弾を叩き込んだ。

弾け飛ぶ相手が地に転がるのを一瞥し、口から煙を吐き続けるジユウケイは治安部隊のなかに潜む仮面の一人に目を向けた。

「そのほう」

北斗琉拳の到達点である魔界を得た者の眼光を受け、周囲の名もなき修羅たちが一斉に引いた。

残された辮髪の仮面がジユウケイと対峙する。

彼は無意識なのか腰の棍に手を伸ばしていた。

「わしと戦うつもりか、それとも逃走の準備か」

「……さすがにカイゼルを倒した男を容易く屠る者相手に」

そう言いかけた砂蜘蛛とフードの老人が目を見開く。

破孔をついたはずの相手は爆散せず、無造作に立ち上がってくる。魔闘気にくるまれ

たその若者がぬん、と気合を入れた瞬間、その気は消し飛んだ。

「こ、こやつ」

ジュウケイが間合いを取るために後退し、砂蜘蛛も同様に後ずさる。

（カイオウの足元程度の魔闘気だとしても……あれを受けて軽傷か。さらに必殺の点穴すら<sup>かわ</sup>躲すとは）

シンよりさらに若い彼だが戦歴は豊富だった。

再度老虎若龍が激突するのを眺めていたが、そこにはいくばくかの嫉視があつた。

（南斗聖拳……北斗に匹敵する流派、その噂は事実か）

轟音を立てる闘気と<sup>ほとほと</sup>迸りすら小さい気が打ち合うのを見守る砂蜘蛛の興味は、もはや若いほうに集中していた。

暗流を纏いし北斗の剛拳を流しきれていない金髪的青年だが、それでも最初から何かのヒントを得ているように砂蜘蛛には映っている。

ジュウケイも察したのか、舌打ち紛れに相手に問いかける。

「若僧……さては北斗神拳の心得があるな？ うぬの動きには覚えがある」

「一時期だがリュウケンに手ほどきを受けた」

「?! リュウケン……!」

北斗神拳先代伝承者の名を口にした眼前の敵に、ジュウケイが掌底を放つ。

死合いのなかで練度を取り戻した暗流霏破を流し損ね、シンが吹き飛ばされた。

追撃に移る古老の拳が南斗の若者を滅多打ちにするのを、仮面たちは固唾を飲んで見守っている。

「宿敵の弟子となれば……もはや生かして返せんなあ！ 破孔が効かぬのならば殴り殺す……」

ゴツ、ガツ、ドゴツという打撃音は止まらない。ジユウケイ自身が久しぶりの叩き込みに額に汗をなし、とどめとばかりに利き手を振りかぶる。

「老の動きが止まった」

砂蜘蛛が独語する。若いほうの足の動きを今更にしてようやく知ったことで、ジユウケイも驚愕の声を放つ。

「う、ぬっ?!」

己の肩にシンの長い足の踵が乗っていた。

それゆえに北斗の拳の角度が下がっている。すなわち標的に剛拳が炸裂することはなかった。

逆に彼のボロが消し飛び、その下の肩のプロテクターも破裂した。

肩を抑えてしゃがみこむ伝説の先代伝承者の姿に、仮面たちが仰天の声を上げている。



さらに放ってくる横なぎの蹴りをガードしたジウケイだが、表情は大きく歪んでいた。

「と、闘気を駆使せぬただの脚がここまで重いとは」

重圧から逃れるために自ら横に飛び、衝撃を流した彼がシンを窺っている。

しかし尚武の国では滅多に見られない美男子は辮髪の仮面を指さしており、追撃すらしてこなかった。

長い金髪の持ち主が言った。

「物見遊山で終わるつもりか？」

「何……?!」

「先程から我々を押し量ろうとしているのはわかっている。だがお前程度が南斗を見切ろうなど十年早い。その身をもって思い知れ」

まるで事実であるかのような挑発などかつてされたことがない。羅刹と恐れられた男が激昂する。

「ほざきおつたな金髪!!」

砂地を蹴つた若い仮面が大言を吐く相手に迫る。

その間合いに入ろうとしたのは砂蜘蛛のフェイントだった。

「千手魔破にて地獄へ堕ちよ!」

四つ刃の暗器を無数に放ちつつ、砂蜘蛛が得意の貫手を繰り出す。

しかしオーバーキルだと思つた男の突撃は標的を狙い損ねている。

彼が見たのは、いくつもの暗器を素手でつかみとつた敵がそれを地に放り投げた姿だった。

この南斗の拳士は片手で暗器を、もう片方で己の拳をいなしただのだ。

「くだらぬ奇襲はともかく、指突はなかなかいいものを持っている。だが格の違いというものを見せてやろう。次は本気で来い」

「暴言には死を」

修羅忍道の秘奥義、滅<sup>めつ</sup>把<sup>ば</sup>妖<sup>よう</sup>牙<sup>が</sup>は配下の仮面はおろか、ジウケイにも見切られぬという自負があつた。

小賢しい金髪が掌を向けてきたことでその殺意は頂点に達した。

「渾身のわが牙に素手で立ち向かおうてか！ そのまま突き殺してくれるわ」

血走つた目の若い修羅が対象の間合いに到達したところで、突進はピタリと止まつた。

ガクンと態勢が崩れる。

砂蜘蛛ほどの男が、んなつ?! という間の抜けた反応を見せるのは珍しい。

掌底の形で秘奥義の指を絡めとつたシンが、このまま握り潰そうとしてくる修羅の手

を軽く握り返した。

「っ……ぐお」

鳳凰の手刃すら粉碎したその重圧に耐えられる者などこの世に存在しない。

形勢不利だと悟った砂蜘蛛が腰にあった棍をシンの肩に叩き込み、その勢いで拘束から逃れて飛びざった。

「き、鍛えに鍛えたわが拳を……素手で組み伏せるといふか……」

砕かれずとも指の骨は折れている。

青筋を立てる辮髪の修羅の憤怒に対し、沈勇の青年は静かに告げるのみだった。

「南斗極聖拳きよくせいけんとまともに撃ち合う愚は避けよ」

シンの深淵なる闘気を初めて思い知った修羅の表情はまさに羅刹だったが、本能からか踏み込むのを思いとどまっていた。

百戦錬磨の若い彼は逆に距離を取り、四つ足の状態で砂地に潜り込もうとしていた。

砂蜘蛛を軽く退けた金髪の主は、指南は終わったとばかりにあらためてジユウケイに向き直る。

奇襲をかけるつもりでいた古老だったが、その隙など欠片もなかったとその表情が示している。

「リュウケンの弟子め……」

「……師に対する憎悪はなにゆえか？」

「魔道に入ったわしの邪気すら払いおったあ奴……地上最強の拳法の使い手として

何一つぶれることなく、清く正しく逝きおった」

羨望からの憎悪だと言わんばかりの魔相の言葉に、シンが極聖拳きよくせいけんの構えを見せながら返答する。

「清く正しく……か。だがあの男はなかなかの非情家であった。その本質はまさしく虎。お前が言うほど聖人君子ではない」

「高みから見下ろしたような台詞をほぎくなあ、若僧っ!!」

怒涛の正拳突き、その憎悪の暗流は激しくなるばかりだったが、今までの応酬で要領を得たのか、シンは肘撃ちや裏拳でジウウケイの体に反撃を放つ。

けして派手ではない。

それでも彼の実の拳は北斗琉拳先代伝承者を心身ともに打ちのめした。

息を乱すジウウケイから魔素が薄れてくるのをシンは察している。

無尽蔵といわれる魔闘気、しかしそれは尽きる前に相手が倒れているからに他ならぬ。

ましてや老齡のジウウケイではその生成も長く続かない。

「なぜだ……なぜ南斗の拳で応戦せぬ?!」

激流の気はことごとく弾かれ、流され、逆に打の反撃を受ける展開に、ジウケイは屈辱のなかで吠えたてた。

やがて彼はシンの背後にリュウケンの幻影を見た。

その瞬間、琉拳の神拳への妄執は極限に達していた。

「気が増大しやがった」

片手をかばいながら砂蜘蛛が跳躍する。

魔闘気の爆破の範囲からかろうじて逃れたものの、下級の修羅を装うという仮面はその際に破壊されていた。

砂の瀑布に巻き込まれていく偵察隊の全滅を目の前にしながら、最年少の准将はジウケイに対して使うつもりであった逃走術を駆使し、砂の中へと消えた。

「ふうふうふう」

気力が尽きた。北斗の古老が大きく息を吐き出しながら膝をつく。

砂漠に打ち込んだ衝撃はクレーターになっていたものの、砂粒までは殲滅できず、それらが流れて穴を埋めていくのを彼は肩で息をしながら眺めていた。

全身に鳥肌が立ったのはそのあとすぐのことだった。

「……?!」

曇り空の下でも輝く金髪を靡かせ、青年がいつの間にか宙に浮かんでいる。

それがその男の奥義だとわからぬ者はいまい。

上空を見上げ、ここで死ぬなどジユウケイが口角を上げる。魔闘気を放出しきつたことで老人の顔からは魔相が消えていた。

南斗極聖拳きよくせいけんの蹴りを食らった者は四肢を切り裂かれるか体をぶち抜かれて死ぬかのどちらかであったが、ジユウケイは五体満足のまま衝撃を受けるだけであった。

しかしながらすでに跳ね起きる気力もないほど彼は打ちのめされているようだった。「が……くあ」

口の中は血と砂の味がした。砂煙のなかを歩み来るのは格下のはずの南斗の男だ。「時代が変わったようじゃな……南斗聖拳がこれほどとは……これで手加減とは。か、体を砕かれたようだ、まともに動けぬ」

自嘲気味に笑うジユウケイが止めを刺せと勝者に告げる。

その相手は首を振っていた。あろうことか稽古をつけてもらったとほざいている。

「わしを愚弄するか……！ この死合を修練とでも言うつもりか」

「北斗南斗の師を持つ俺だ。優れし者ならば相手を選ばん。そしてこの闘いの中で北斗琉拳に対する見切り……少々つかませてもらった」

ジユウケイが愕然としながら呟く。

「一戦にして見切られるほど……錆び付いていたのか。わが拳は」

ジウウケイといえど、さまざまな北斗を相手に実戦をつんできたシンの過去を知りようもない。

彼は己の不甲斐なさに面を伏せてから、仰向けに倒れ込んだ。

「極められたがゆえに受け技も極められ、武威を失った北斗宗家とは違い……南斗は復古した、というわけか……なんともやるせない」

琉拳とは魔闘気にしろ疾風にしろ、爆発的な気操をもってして是とする。

だがこの金髪の青年の気は真逆の位置にいる。

ジウウケイは相手を見上げながら今更にしてそう思った。

「完敗じゃ、南斗聖拳」

倒れながら伸ばすジウウケイの手を握ろうとシンが近づいてくる。

龍の手を握った瞬間、老虎は牙を剥いた。

# 九話 修羅の心得

「甘いもう若僧……うおおおおおううむむ」

そう叫んだ老拳士が呪文のようなものを唱えだした。

同時に枯れ果てたと思われた魔闘気が再び噴出し、二人を押し包んでいく。

「ふはははこの至近距離ならばわが瘴気はより強かろう。神気じんきを持つであろう聖拳使いめ、爆殺できぬのならば魔素にて窒息させてやるわ」

死人となりし魔人、北斗の男として南斗に劣るわけにはいかぬという執念の奇襲に対し、シンは一切の悪感情を覚えなかった。

彼が静かに告げた。

「封じ込めたはいいが、このままでは己も焼き尽くすことになる」

「格差をつけられての敗北こそ死にまさる屈辱よ……屑星と蔑称される北斗琉拳の先代として手段は選ばぬ」

「……未知の北斗、そんな死の教練を受けたからには、ご老体もまたわが師」

「……?!」

「教えを受けた先人を失うのは一度で充分。二度と殺させぬ」



仰向けのジウウケイが見開いていた両目を細め、逆に口は半開きになった。

魔界の業火に焼かれる痛みを忘れたかのように、剛気がないように見える若い龍の言葉聞いていた。

「り、リュウケン」

魔素の上昇気流で金髪が総毛立つその男から、かつての怨敵の息吹を感じた。

先程見たのは幻影などではないと彼は確信する。

それにしても北斗の枠にとどまらず、他門の若僧に生き様を伝承させる者などかつていただろうか。

負の感情が渦巻く闇がリュウケン、そしてシンという人物そのものに飲み込まれたのか、炸裂することなく、跡形もなく消失していった。

ジウウケイは啞然としてそれを眺めるばかりだった。

「じよ浄化し、しおった……」

「読んで字のごとく、北斗神拳や南斗聖拳は魔道を下すための拳法なのだろう。俺に拳を教えたリュウケンがそばにいる気がしたが……ともかく老の魔界は完全に封じた」

自爆を抑え込まれた側がくそつたれと口汚く吐き捨てる。

今度こそ力を失くしたようで、ぐったりと仰向けに寝ころんだ。

くくくと自暴自棄に笑っている。

「なるほどのう……わしは最初は訓戒のつもりで……次は確実に殺すつもりで打ち合った。それが若僧にとつては訓練にすぎなかった。そんなことも窺えず、北斗琉拳を破るための道筋を与えてしまった、というわけか。愚かな」

夕日に照らされる荘嚴な姿の南斗の男を見上げ、彼はやさぐれながら唸っていた。業火の痛みと精神的打撃により、自裁する力もない。

北斗の古老は止めを刺さずに背を向ける南斗の拳士がいずこかに消え去るのを、無念の表情で見送っていた。

やや時間を置いて離れた岩陰に身を潜めていた夕才少年が姿を現した。

死合いを制して戻ってきた金髪の青年を出迎える。

「老師を……殺したの？」

「疲れたと言つて寝ころんでいる。あの状態でも仮面の修羅程度に倒される人物ではない。そのうち起き上がる」

多くを語らない相手の表情に鬼気迫るものがないのを感じ取つて、少年はほつと息をついた。

そして荒野のむこうにある大城塞に向かつて歩くシンの後を追いかけた。

§ § § § § §  
時間は遡る。

郡将シエの城を占拠したケンシロウとユダが北斗琉拳のシャチ、南斗焰浄拳えんじようけんのゲンジユとともに、准将たちの急襲を受けている最中だった。

羅刹七人衆のうちの四人、テンキボウ、カラスマ、ツキヒグマ、ゲムサイは配下の仮面に、弱ったシャチとゲンジユを牽制するように命じ、北斗神拳と南斗紅鶴拳の二人を包囲している。

短い黒い髪の方がサングラスをかけなおし、背後の赤い髪的美男子にぼそりと告げる。

「今まで相手にしてきた奴らとは格が違うようだ。我が国では見なかった体術や気を使おう」  
「うむ」

修羅の国にとって無用なる彼らは、この戦闘の前にシエの居館にて毒ガスと落石の計略を受けている。

負傷したシャチとゲンジユとは違い、彼らはかすり傷程度で済んでいた。

四人とも崩落した瓦礫のなかだと思いきや、こんでいたシエの驚愕は未だ収まらない。

「あの若僧どもはともかく、サングラスと赤毛はなんで無事なんガニ……」  
そう呟いた巨漢のカニ男がいや待てと独語した。

上司の攻勢を食らって吹き飛ぶ敵の動きを見て、いつもの動きではないと看破した。

「そうだ、神経毒はたしかに効いているガニ。それでも奴らがあの方向に退転したのは……」

昏倒するシャチャやゲンジユのもとに向かったケンシロウが膝をつく。

その背を守るユダが残像を残しながら両手を上げていく。

周囲の建築物や庭園が吹き飛ぶほどの応酬に巻き込まれまいと、シエが爆風の範囲外に逃れながら振り返る。

四人の上級修羅と仮面の部隊を一人で迎え撃つ赤毛の顔色は、毒にやられてもなお涼しいものだった。

その男が鶴翼を広げたとき、衝撃波が城内の広範囲に走った。

「ガニ?!」

音速となって消えていくそれに巻き上げられた仮面部隊が、一斉に地に叩きつけられた。

その惨状を眺めるシエがううむと唸る。

「部下どもを盾にしてあれから逃れたガニか……さすがは羅刹」

着地した七人衆が散らばって倒れる配下たちに大儀、と告げ、あらためてユダと対峙する。

先程の伝衝裂波を警戒しているのか、彼らは一定の距離を保って襲い掛かる瞬間を見極めていたようだった。

北斗神拳によつて蘇生した若者たちのなかで、年上のほうがうつ伏せのまま憎々しげに口を開いた。

「意識を取り戻したと思つたら赤い衝撃が見えた。なんということだ……一振りの武威のみで准将四人を立ち往生させるか。やはり力こそが正義……オレもあやつのような強さがあれば」

「……シヤチといったな。見習うべきは私ではない」

羅刹を詐称する若い男の述懐に、異国の赤毛の男が靡くマントの背中を見せながら言った。

ユダは振り向かない。

それでもシヤチは無意識に、ゲンジユを介抱した黒い服の男が立ち上がるのを見上げていた。

その北斗の男が南斗の男と並び立つ。

「二人で刈り取ってしまうかと思つたが」

「それではお前が納得すまい」

「……絶影の奥義を見たからにはな」

拳の骨を鳴らすケンシロウが今度は自分が、とばかりに弁慶のような恰好のテンキボウと、忍者のごとき風貌のカラスマを迎え撃つ。

テンキボウの棍棒をへし折った北斗神拳伝承者がカラスマの爆裂式の暗器を握りつぶした。

煙幕と爆風のなかで、サングラスの男は構えたまま敵の気の流れを読んでいた。

どこから来るか容易に察知できぬ気当たりに、彼ほどの男でさえこめかみに汗を浮かべている。

「ぬっ?!」

「奴らが同時に動いた」

シヤチが目を見張り、ゲンジユが口から流れる血をぬぐって叫ぶ。

その瞬間、ケンシロウが数珠を握ったテンキボウの渾身の拳撃を辛うじて躲す。己の血しづきが派手に上がる。

その際、血煙のなかから現れた小兵のカラスマによってサングラスを破壊されたものの、ケンシロウは双方が奥義の範囲内に重なるのを待っていた。

そんなロツクオンを待っていたのはケンシロウだけではない。

彼らこそケンシロウの引き寄せを待っていたのだ。

「?!」

北斗神拳の正拳突きが空を切る。

ケンシロウの間合いから引くと同時に二人は飛び道具を放つ。

ほうじゆきんげまい  
「宝珠散華舞」

ばくさいがらす  
「爆砕鳥」

バラバラにした無数の数珠を投げ放つテンキボウ、鳥を模したような形の爆弾を投擲してくるカラスマ、二人は技の発動を終えたとたんに地を蹴った。

上空にいる歌舞伎役者のような美男子、ゲムムサイと、熊のごとき巨躯のツキヒグマがいつの間にか飛んでいた赤毛の男と撃ち合っているのに加勢するためだ。

地上の轟音と爆発を聞きながら、次はお前だと二人が吠えた。

「ケンシロウー!」

「引け小僧、我らも巻き込まれる」

叫ぶゲンジユを引きずり、シャチが爆風から遠ざかる。

准将が四方からユダを仕留めたと思ったとき、ゲムムサイの大太刀は折れ、ツキヒグマの利き手の手首から先は消えていた。

「わが業物を素手で……!」

「このわしの剛拳を斬り捨てるだ」と

二人の驚愕をよそに、下方からのテンキボウとカラスマの鋭鋒を<sup>しの</sup>凌いだ南斗の男は、背後の気配を感じてふと微笑した。

「私を巻き添えにあれを放つか。北斗神拳奥義」

天破活殺を不意に受け、ユダの周囲にいた国有数の修羅が弾け飛んだ。

まさか味方の赤毛もろとも撃ち抜くとは思っていなかったようだ。

「黒髪の男、やりおるな。わしらと同じ修羅の心得があると見える」

カラスマが哄笑しながら死角から不意打ちされた敵を見た。

ハチの巣にされたかと思つた優男は両腕を広げながら回転させ、その指先で北斗の闘気を一瞬にして霧散させている。

闘気の余波でわずかに傷を負つたのみだった。

「ほ、北斗神拳の敵味方問わずの奥義を……最初から予測していた?」

「いや……わが主は千変万化、応変の拳士。そもそもあのお方を闘気で倒すことはできません。ケンシロウは最初からそれを知っている」

シャチとゲンジユが上空を見上げながらそれぞれの感慨を述べるなか、弾かれた活殺の残滓が熱で光り、周囲を照らしだした。

「小賢しい目くらましを。だが奴らはわしら羅刹を舐めている」



不意の閃光にひるむどころか、好機と見た歴戦の男たちが以心伝心で動いた。

羅刹を自称する北斗の青年はそれをすぐさま察して逃げたものの、名門の御曹司である南斗のほうは毒と傷で反応が遅れた。

「わしらの奇襲から逃れる余力があるとは、やりおるわ北斗琉拳」

「しまった、そばかすが」

もんどりうって倒れたシャチが上空を窺う。

カラスマの操る鳥に捕らえられ、身動きの取れない状態のゲンジユのクソつという悪態が聞こえてきた。

思わずシャチが味方を煽る。

「最も弱い敵を狙うは修羅として当然のこと。あんたらのお仲間がああなってるがどうする？ 先ほどのようにそばかすごと気弾で奴らを撃ち抜くのか」

北斗南斗の伝承者たちは無言だった。

態勢を整え直した羅刹たちが若者の浅慮を嘲笑う。

「何がおかしい！」

「奴らの戦場の拳、まともに殺り合うのは得策ではない」

人質の首に刃を当てた羅刹七人衆がケンシロウとユダに告げた。

「抹殺命令を受けているのはうぬら二人。互いに殺しあえ。さすればこの小僧には手を



## 十話

## 南斗聖極輪

「なに……」

シヤチが驚愕しながら表裏一体の斗の拳士たちを窺う。

郡将シエは上官たちの機転にさすがガニ、と跳ねながら囚われのゲンジユを拘束する役目を買って出た。

かつて北斗の後塵を仰いできた南斗ではあつたが、それは過去の話である。

聖帝サウザーが台頭してきてからというもの、この二つの拳法は戦えば勝者はない、とさえ囁かれ始めている。

それを知ってか知らずか、羅刹七人衆のひとりカラスマが吠えたてた。

「何をしている黒毛に赤毛。早く戦え！」

彼の三度は言わん、という脅しにケンシロウとユダが互いを敵として構えだす。

怪しい動きはさせんという無言の圧をかけるべく、ツキヒグマやテンキボウ、ゲンムサイが彼らの周りに展開する。

それぞれの妙技を発動させるべき絶好の間合いを准将たちは心得ている。

「わしの指令ひとつでこの小僧は喉を裂かれ、爆破で砕け散る。うぬらがいかなる使い

手であろうと殺される前に小僧だけは道連れにしてくれよう」

カラスマが台詞を言い終えた瞬間、北斗神拳と南斗紅鶴拳の伝承者が地を蹴った。先手を打つたのは絶影の異名がある男だった。

「ふっ」

凄まじい斬りこみの双撃を両手でいなしたケンシロウが頬に走る切り傷のなか、珍しく笑みを受かべている。

おあたあという掛け声とともに拳を打ち上げた。

仰け反って逃げた相手のがら空きの胸に北斗神拳奥義、北斗天勢撃てんせいげきを放つ。

さらに大空に舞い上がった鶴は弧を描いて追撃の波動すらかわし、華麗に着地した。

「……あれを無傷でしのぎ切るとは」

頬に走る傷に手をやり、ケンシロウが眉を寄せる。

それに対しマフラーとマントを風に靡かせる男は、一本指を何度か振っている。

あろうことか正統伝承者に対し、甘い攻勢だと告げているようだった。

北斗の男が深淵なる闘気を貯めている。得難い敵だと再認識したようだ。

「わが宿敵が己より強いといわしめる美しき鶴。一度戦いたいと思っていた」

普段は不愛想な男が楽し気に拳を持ち上げてそう告げる。

北斗の拳からは血しぶきが舞っている。

いつ斬られたのかわからぬ。ケンシロウは武者震いのなか呟いた。  
「奴ら、本気か」

再びぶつかり合うケンシロウとユダを、シャチが愕然としながら眺める。

人質を取って余裕が出てきたのか、准将たちも一息つきながら戦いを見守る。

カラスマが喚き散らすゲンジユにうるせえと拳を叩き込んでから言った。

「なかなかどうしてやりおるが……それにしても地味じゃのう」

「むっ見ろ、きやつらが交錯するぞ」

歌舞伎役者のような外見のゲムムサイが指をさす。あたあと吠えたケンシロウの蹴りを無言のユダが同じような蹴り上げで遮った。

「脚での押し合いか。しなやかに見える赤毛が不利だが」

僧兵のような風体の大男、テンキボウが呟くと、手首の治療を自ら施したツキヒグマが拮抗しておるぞと意外そうに実況する。

皆が剛のケンシロウが競り勝つと思っていたようだ。

押し出せぬ状況に当事者である黒髪の男があえて引いた。

「ケンシロウのフェイントで赤毛が態勢を崩した?! そのから空きの顔面に膝蹴りを」

シャチの解説の間に状況は変化する。

膝蹴りを繰り出そうとした北斗神拳伝承者は、途中で膝込みの腕の十字受け、という

防御に変えていた。

南斗紅鶴拳の肘撃ちという鋭鋒を受けケンシロウが後ずさる。

かくして睨みあいの様相になった。

郡将シエが目にも止まらぬ応酬だが地味すぎるガニ、と嫉妬紛れに毒づいた。

シヤチも思わず頷く。羅刹七人衆の四将でさえ大きな気のぶつかり合いがない戦い

に、奴ら肉弾戦に終始するつもりかと疑っていた。

「終始組手では退屈だ。双方とも気を使えい」

忍者装束の小兵のカラスマが唾を飛ばし、そう叱咤した。

その声にケンシロウがわずかに苦笑し、懐から予備のサングラスを取り出して言う。

「奴らにはあの鏢迫り合いがただの組手に見えるようだ。誰が見てもわかりやすいよう

にとの仰せだが」

「……度し難い」

口癖を放ち、ユダが構えを変えた。ケンシロウが驚愕するのも無理はない。

その型は北斗神拳秘伝、聖極輪であったからだ。

異様なその型に、当事者以外が本気になったかと身を乗り出す。

ケンシロウがなぜその秘伝を南斗が仕掛けると表情で語っている。ユダが静かに返

答した。

「読んで字の如く。聖極とは南斗宗家の異名……北斗がそれを編み出したというのは笑止というもの。一味違う虚実を見るがよい」

「?!」

ブオつと風が吹いた。

鶴歩かくほさんそう斬掃という技を繰り出したユダはすでに拳を引いている。

しかしその後で発生した衝撃波は無数の龍の牙となって北斗の男に襲い掛かろうと  
していた。

そんなケンシロウはすでに目を閉じている。

黄金の髪の好敵手が赤毛の背後に見える。

迫る千本の貫手はまるで南斗千首龍撃だ。

北斗神拳伝承者は好敵手に対する返答を口にする前に、両眼がかつと見開いていた。

「北斗天魁てんかいせんれつしょう千烈掌」

心底が読めないユダはともかく、少なくともケンシロウ自身は虚実の戦いにおいても本気であつた。

南斗の気の突撃を闘気弾で打ち崩し、それを霧散させてから放つ最後の掌底は実の拳と波動の合わせ技だつた。

赤紫のマントの持ち主が風に巻かれて吹き飛んでいく。

広い城塞の壁に激突し、ようやく動きを停止させたユダが地に崩れ落ちた。

全身に切り傷が走っていたものの、北斗の男は勝どきを上げるように拳の骨を鳴らして羅刹たちを見た。

「ほほう。サングラス野郎め。相打ちかと思えば……二段構えの剛拳で赤毛をの虚と実体を押し飛ばしおったか」

カラスマがそう独語して拘束していたゲンジユを突き飛ばす。

石壁が崩れるほどの衝撃を受けた主を窺い、そばかすの青年がそんなバカなど両膝をついて俯いた。

「フン、そう嘆くこともあるまい。お前もすぐ黄泉路に就くことになる」

ゲンムサイが長い黒髪を揺らして小太刀を振り上げた。

シャチが叫ぶ。

「約束を違えるつもりか羅刹ども！」

「甘いことを抜かすわ若僧め、うぬも死ねい」

僧兵姿のテンキボウが棍棒を振りかぶる。しかしゲンジユとシャチの間に何者かが割って入った。

ゲンムサイともども、二人の准将が動きを停止させた。

ケンシロウが片手で小太刀を、そして棍棒を受け止めていたからだった。



「うぬ?!」

「その傷でここまで早く動けるか」

剛力を誇るテンキボウが顔を真っ赤にさせて力むなか、歌舞伎役者のような男前のゲムムサイが鋭い歯を剥く。

そのときだった。

敵の黒髪の男のサングラスに何かが映った。

その持ち主がかの姿を横目に見ながらうつつそりと告げる。

「さすがは羅刹七人衆。天破活殺の点穴が効くまでにここまで時間がかかるとは」

テンキボウとゲムムサイが驚愕の目を見開く。あのときの閃光かつと双方は内心で思ったが、口に出すことはなかった。

背後から壮絶にすぎない気合を感じたがすでに体は動かない。

曇り空のなかでも映える美しき鶴が羽ばたくのを眺めるばかりだった。

「なにににににガニい?!」

郡将シエの素っ頓狂な声がある。飛び上がった南斗の男にすぐさま応じたカラスマとツキヒグマの攻撃が空を切る。

「南斗鶴翼迅斬」

空を切り裂く鋭い音がする。

小兵のカラスマと巨体のツキヒグマを瞬斬したユダはそのまま急降下し、秘孔を突かれて動けなくなったテンキボウ、ゲムサイの間にふわりと着地した。

北斗の奥義で瀕死になったと思われた南斗の拳士が優雅に立ち上がる。

軽い打撲の跡はあっても剛拳を叩き込まれたとは到底見えぬ姿がそこにはあった。

ケンシロウの言葉には隠し切れない悔しさが滲んでいる。それが声色にも表れていた。

「奴らの動きを封じるまで……秘孔が効くまでに、なんとかお前を倒しておきたかったが」

「本気で殺りあい、相手を惑わせるが南斗の聖極輪。仮死状態でごまかせるほどこやつらは未熟ではない。天魁千烈掌は演技ではないと思わせるに十分だった。北斗神拳は使い手ごとに特色があつて興味深い」

赤紫のマントをばさりとめくりあげ、ユダが楽しそうに告げた。その瞬間に大柄な二人の羅刹、テンキボウやゲムサイが血煙を上げて倒れゆく。

「ひ、ひとりで四人の羅刹を二撃で殲滅?! なんなんだあの赤毛エ……ありえん強さが  
二」

恐慌状態だったシエがそれでも我に返り、呆然とするシャチと生気が蘇ったゲンジユに駆け寄る。

郡将としてせめて二人の首をとと思うのは当然のことだった。

一歩踏み出したユダの肩にケンシロウが手を置く。

「今度はオレの番だ」

暗殺拳の伝承者が一瞬にしてシエの背後に到達した。

カニの化身のような恰好の郡将の脇腹を突き、動きを止めてから脊髄に致命の秘孔を打ち込む。

准将たる羅刹には相応の時間を必要としたものの、シエに対しては速攻で北斗神拳の必殺が炸裂していた。

気ではなく実の拳で突いたためだ。

シエの巨体は内部から破壊され、爆発して地に倒れ込んだ。

生き延びていた一部の仮面の修羅たちが上司の全滅を見て、我先に城外へと逃走を開始していく。

それを見送ったケンシロウがシャチとゲンジユを助け起こした。

「い、今のは北斗神拳の」

「北斗崩背撃ほうはいげき。オレとラオウとでは北斗の拳でも趣おもむきが違う。奴の巨大な気に比べればオレなど蠅螂おとこばちに等しいが」

思わずシャチが押し黙る。

その気になれば闘気を操ることができけるケンシロウの自負を感じ取ったようだ。

それをよそに、人質になった不手際を恥じ、ゲンジユは平伏して主に詫びていた。

「申し訳なく……南斗秘伝の聖極輪でユダ様にお手数をかけるなど」

「そんなものは存在せん」

「は……えっ?」

「あれは北斗の秘伝。奴の少しばかりの本気を見てみたかっただけの戯れだ」

「えええ?!」

くるくる巻きの金髪の若者が尻もちをついて主君を見上げた。

戯れかどうか、まだ若いゲンジユには判別しようがない。

しかしこのお方なら独自の聖極輪を編み出しても違和感はないと彼は思った。

嘘とも本当ともとれる強敵の台詞を聞いたようで、ケンシロウが憚然としながら歩み

寄ってくる。

「実際にあるべき奥義だと思わせるのが絶影の凄絶さというところか。天魁千烈掌すら

見切る。与えたダメージはあえて壁に激突した打撲のみとは」

軽傷だということは否定せず、ユダがわずかに口角を上げる。

ケンシロウは舌打ちを打ちかけ、それを紛らわせるために首を振った。

「南斗紅鶴拳の真髄は未だ計れず、わが奥義の見切りをを与えてしまう……なるほどラ

オウが手こずるわけだ、食えぬ男め」

「そうでもあるまい。私の千の牙を凌いだことは次に生きる」

ユダがさつとマントを翻し、ゲンジユを連れて城門の外に出ていく。

シンとの再戦に向け南斗最強の男に稽古をつけられた、と悟ったケンシロウがなんともいえぬ表情でその背を見送った。

ここで異色の二人が別れることになる。

「おい行くぞシヤチ。今から向かう第三の羅将のもとにあんたの探し物があるかもしれない」

ゲンジユの呼びかけに北斗琉拳の拳士がレイア、と想い人の名を口にしながら立ち上がる。

奴なら疾風のあの髭男を倒せるかもしれぬ、という希望を抱いた彼は、馴れ馴れしい若者と底が見えぬ赤毛の後を追った。

# 十一話 龍炎斧（りゅうえんふ）

羅將の城へ至る最終防衛ライン。

すでに国中に指名手配されている三人が群將の拠点に正面から堂々と侵入を果たしていた。

指一本で鉄条門の施錠を斬り落とした赤紫のマントの男の相変わらずな大胆さに、若い北斗の男、シャチが呆れたように言った。

「おいユダ。何の策もなく闘神の元へたどり着けると思っっているのか」

「……とは？」

代わりにそばかすの従者、ゲンジユが問い返す。

どうしようもない奴らだといくつか年上のシャチが毒づく。

「ここはまだ前衛だが、それですら一国の軍隊を相手にする覚悟が必要だ。今までの奴らとは次元が違う」

「叛逆の徒を自認するのならお前こそ覚悟を決めよ。前哨戦で怖気づいてどうする」

南斗焰浄拳えんじょうけんの青年拳士がそう答えながら牙を剥く。

やがて崩れた門の瓦礫を乗り越え、無数の仮面と対峙する。

先手を仰せつかった彼は両手から炎の闘気を放出させ、飛龍と呼ばれる奥義で何人かの修羅を蹴散らしていた。

「多勢に無勢、最初から死ぬつもりだなあの若僧」

乱戦のなかでゲンジユを窺い、シャチが冷たく言い放つ。

その主人といえ、そんな配下の奮戦をしばらく眺めていたものの、名と素顔を許されぬ集団のとある一点に視線を移した。

「ハンの陸戦隊相手では……そう長くはもたんで、あやつ」

血煙のなかのゲンジユを見て顔をしかめたシャチがスン、という空を切る音を聞き、駆け寄ろうとした足を止める。

「南斗紅鶴拳、伝衝裂波……か」

何度見ても見慣れるものではないとシャチが呟く。

絶影の拳が黒山の修羅たちを一気に斬り裂いた。

それと同じくして美しき鶴が舞う。

裂波の威力で人波が割れた。左右に逃げ惑う仮面らをよそに、静かに降り立ったユダが潜むようにして身を隠していた一人の修羅の前で足を止めた。

「あ、あれは?!」

辮髪の仮面の男の姿を確認したシャチが思わず声を荒げて砂蜘蛛！ と叫んだ。

「……わが父が率いる海賊団を半壊させた修羅……！」

銀髪を逆立て、彼が辮髪の仮面に歩み寄る。

砂蜘蛛といえば怒りに震える相手を一瞥し、赤毛のほうに目を向けている。

「気配を消していたのだが……なぜわが前に立つ？」

「そのほうだけが別格見える。そして私に対する物見、誰に頼まれた？」

「フン」

岩の中の広場を埋める修羅たちのなかでも、彼の持つ雰囲気は異質すぎた。

その持ち主が鼻で笑い、背中から二つの棍を抜き放つ。

「このオレの武威がわかるか……めざといな赤毛。ここの群将だった修羅はブタだ。あれではキサマを迎撃できまい」

砂蜘蛛が言ったブタとはシンに倒されたギユウコのことだった。

「シエと羅刹四人を倒した手腕を見せてみよ侵入者。首を刈り取ってハンへの手土産にしてくれる」

「第三の羅將を呼び捨てとは……お前もあやつに翻意があるのか」

憤然としながらシャチが口を挟む。

配下の仮面が散らばるなか、その異質な男は同年代の男を見ずに答えた。

「いつでも首を掻き切つてよいと言質を取っている。それまでは奴の目を演じるのみ」



双棍を両手で持ち替え、ぺろりとそれを舐めた辮髪の男が一気に間合いを詰めてくる。シャチを迎え撃つ。

しかし北斗の拳の一撃は、収縮自在の棍で軽くかわされた。

上空からブランコのように舞い降りる相手の蹴りを避けきれず、シャチが肩に裂傷を負う。

転がり回った彼が見上げたときには、眼前に砂蜘蛛が降り立っていた。

「忍棍妖破陣」

横からの薙ぎを防御したシャチだったが、もう片方の棍に右胸を突き入れられ、芝生の上を滑りながら吹き飛んだ。

「ぐっ」

「遅い」

空からの踵蹴りを側頭部に食らい、さらにもんどりうって倒れる。

「ほ、北斗琉拳を修めたおれが武器術ぶきじゆつのときに……い……」

「いかに我が国の頂上拳であろうと、にわか仕込みでは羅刹には通じん。未熟者は引つ込んでおけ。わが望むはその赤毛なる首……先日金髪には油断したが、今度はそうはいかん」

「舐めるな！」

血の唾を吐いたシャツが飛び蹴りを放ったが、伸ばした棍で打点を高くした砂蜘蛛の  
回し蹴りを食らい、三度芝生に叩きつけられた。

「この武器と蹴撃の連携は変幻自在、お前には見切れまい。黙ってそこで転がっておけ」  
視界の端に映る若い青年、ゲンジユは未だに奮闘している。

その彼が無言の圧で主の元へ行かせまいとするのを砂蜘蛛は悟っていた。

小生意気な小僧に急接近しようとした彼がガクンと態勢を崩す。

「な、つに?!」

鍛え上げられた硬質の棍がスライスされ、バラバラになつて地に落ちた。

降り立った砂蜘蛛が優雅に立つ赤紫のマントの男に気づいたとき、その瞬間、辮髪の  
男の仮面が飛散した。

「……いつの間」

驚愕の表情を浮かべ、素顔を現した砂蜘蛛がこめかみに手をやった。

そこからは血が滴り落ちている。

震えながらこぶしを握った彼がズアア、という闘気を放つて二本指の拳の構えを取っ  
た。

「クク赤毛め……修羅の血を滾たぎせてくれるわ……！ その首、ハンよりも第一の羅将へ  
と届ける価値がありそうだ」

手甲についた血を舐める男の血走った目を見て、ユダが告げた。

「目を自認するお前にも目がつけられている。どうにせよそのほうは羅将とやらの遊び道具に過ぎぬと、いつ気付くのか」

「?!」

辮髪の修羅が建物の中からキラリと光る望遠レンズを見つけ、しばし呆然としたあとで敵に向き直った。

「うぬの白い肌を髪のように赤く染めてやる……！ 金髪といい、南斗とやらはどいつもこいつも不愉快な存在だ」

「いい加減に認識しろ、おさげ髪。お前などユダ様の敵ではないということを」

大勢の仮面たちと互角の勝負を繰り広げる若いそばかすの拳士が叫ぶ。

主人の様子を窺いつつ知り合いになった北斗の男の名を呼ぶ。

「おいシャチ！ やられっぱなしでは北斗の拳士の沽券に関わるだろう。手を貸せ」

「虎の威を借るそばかすめ。主だけではなくおれに助力を求めようとは」

「お前や僕一人ではこの砂蜘蛛とやらには敵わん。だが二人なら」

言いかけたゲンジユが飛びのいた。無数の暗器が彼のいた場所に炸裂した。

十人ほどの仮面の修羅たちが上官の奇襲に巻き込まれ、血煙を上げて崩れ落ちていく。

「小僧く……数々の暴言、もはや生きてここを逃げることもすらかなわんぞ」  
「フン」

南斗の若い伝承者の頬に、数本の傷が走った。

煽る相手が上級修羅だということで、ゲンジユは決死の覚悟で千手魔破という奥義を  
躲かわしていく。

「凡羅破魅陀、はんらはみだ 亜あ仏ぶつ弟てい斗と羅ら」

その呪文のような何かを聞いたシャチが血相を変え、膝をつくゲンジユのほうへ飛んだ。

二人が背を向けあい、構え直す。

「バカめが。あの男を本気にさせたな。死にたいと見える」

「……奴はどこに」

「芝生の隣にある砂地に潜った。修羅忍道を発動させたことは褒めてやるが、それで討ち死に確定とは笑えん」

年が近い若手の拳士二人のなかで、黄金のチリチリ髪がなるほどと頷き、そして言った。

「プライドの高そうなあのおさげ髪が本気になった。ならば狙うは雑魚ではないな」

「なに？」

「僕やお前じゃない」

ゲンジユが他の修羅に蹴りを入れた。

シャチが油断なく構えながら、地中に潜んだ大敵の気配を探る。

離れた位置の砂地がドツと盛り上がった。同時に従者が主人の名を叫んだ。

「ユダ様！」

パラパラと砂の欠片や粒が落ちる音がする。

破魔<sup>はますなぐも</sup>砂蜘蛛と呼ばれる奥義で地中に潜ったはずの辮髪（はなげ）の修羅が、襲い掛かろうとした

標的に首元をつかまれて持ち上げられていた。

「す、砂の中で気配を断った奴の居場所を一瞬で察知したのか?！」

シャチが度肝を抜かれながら感嘆の声を上げる。

仮面たちを殴り飛ばしながら、中背の砂蜘蛛を持ち上げる長身の赤毛を眺めていた。

何度目か忘れたほどだが、その驚愕はいちいち目新しいものだった。

「細身に見えるがあの男、なんと<sup>りよりよく</sup>という膂力だ……砂蜘蛛ほどの修羅を軽々と掴み上げて

平然としてやがる……」

「絶影の拳を奮うにはしなやかさだけでなく、剛力も必要だ。あのお方は速さと力の

均衡においても南斗の頂点に立つ。お下げ男の兇戯など何一つ通用せん」

首を掴まれた辮髪の修羅が必死にもがくのを見て、ユダはそれを放り投げた。

着地して低い体勢になった砂蜘蛛は口から血を吐きつつも、憤怒の形相で海外からの侵入者に呪詛の言葉を吐いていた。

それを涼しい顔で聞き流したユダが配下にこれでよいか、と問いかける。

若い南斗の拳士が礼を施し、あとはお任せくださいと返答しながら残った仮面を斬り捨てていた。

「きさまあ、どこへ行く?!」

激昂する砂蜘蛛が背を見せる相手との距離を詰める。だがそこに割って入ったゲンジユが彼の蹴りを十字受けて防いだ。

後退しながら表情を歪ませる青年は、狂気を孕む敵の凄まじい気当たりを受けきったことで、改めて笑っていた。

「若僧う……!」

砂蜘蛛が菌嚙みをしつつ、近未来な巨大建築物、すなわち第三の羅將の居城に去っていく赤毛の後姿を見送る。

背後にシャチが控えていたからだが、さんざん虚仮こけにされたことで、標的はすでにゲンジユに変わっていた。

「この世に肉片ひとつ残さず滅殺してくれる!!」

怒りで威圧を増したそれに押され、ゲンジユが冷や汗をかきつつも迎撃の型をとる。

自分には到底及ばぬ相手ながら、主人がその強者の一点を衝いたことを彼は見ていた。

死中に活ありとの確信を持って大敵と対峙している。

砂蜘蛛の背後を取りつつも腕を組んだままではあるまいな。おれは助けんぞ。

「お前まだ生きて帰れると思っっているのではあるまいな。おれは助けんぞ」

「その必要はなくなつた。アキレス腱を衝かれたあれ相手に、未熟者の手助けなどいらん」

「ガキめいきがるな！」

飛び上がった羅刹が利き手に鬨気を漲たぎらせて突きこんできた。

その凄まじい勢いは回りに衝撃波生なんでいる。当たり判定はゲンジユの身体を包み込むほど大きい。

「毒蜘蛛どくぐもしゅ手刃滅把妖牙てうめつぱようが」

秘奥義ともいうべき砂蜘蛛の突撃が砂地を大きく波立たせた。また地中に潜る相手の気配は一瞬で消えていく。肩口から裂傷を受けたゲンジユが辺りを見回している。

「致命傷は避けたか。だが次の一撃で終わりそうだな」

「僕が倒れたら次はお前だ。余裕ぶっているのは今のうち」

形相は必死ながら我を失わない青年に、シャチが死人の心得かと悟る。

怪我をもものともせず、ゲンジユは地中の中に爆炎の奥義を撃ち放った。

「南斗焰浄拳、龍炎斧」  
えんじょうけん りゆうえんこ

ボン、という音がした。砂の中で蒸されたような強敵が悲鳴を上げながら飛び出してくる。

「……しやくな真似を!!」

高所からの利で、今度こそ必殺の間合いを掴んだ砂蜘蛛の滅把妖牙が火を噴いた。

両手を伸ばし、地中に炎の気を送っていたゲンジユがその構えのまま、砂地を抉るように炎を斬り上げていく。

砂塵のシャワーで標的を見失った辮髪はなげの修羅が垣間見たのは、斬り上げたそれが上段から打ち下ろされる光景だった。

だが炎の斧は砂蜘蛛の手刃によって一瞬でかき消された。

「ぐあ……」

「その程度の炎舞では死ねんなあ。だがこの身を焦がしたことは誉ほまれとせよ」

二度目の妖牙によって芝生まで吹き飛んだゲンジユにとどめを刺すべく、砂蜘蛛が突進していく。

だが視界の端に映る長い髪の男の存在に目を見張った。

「おれを忘れていないか、わが仇」



「きゃーま………！」

「父を不能にし、百人の船員を皆殺しにしたお前は殺すリストの最上位にいる。あの若僧を矢面に晒しておいて正解だったな。まんまと油断しおって。北斗琉拳、羅刹らせつてんかい天魁」

双腕のラツシユと右脚の打撃が砂蜘蛛の側面に連続して命中した。

フィニツシユとばかりにシャチの回転蹴りが放たれたが、その足の上に手を乗せて倒立し、鋭鋒を凌いだ羅刹七人衆のひとり、血まみれのなかでくかかと高笑う。

彼の両足が相手の首にかかった。

「うぬ?!」

「そのそつ首ねじ切つてくれよう」

捻ひねりを加えようとした羅刹の血走った目がかつと見開かれた。

「……?!」

シャチの肩を踏み台にし、跳躍した砂蜘蛛が苦悶の表情で着地する。

赤い衝撃が消えていった方向へと向き直った途端、彼は胸を押さえて吐血していた。

「あ、やつ……あやつ………！ あのとときの瞬斬かあつ」

バチバチという音がして、辮髪の修羅の体が一文字に斬裂が入っていく。

首をねじ切られかけたシャチが喉元を抑えながら、憎々しげに呟いた。

「あれを持ち上げたとき……ユダはすでに致命の一撃を入れていたのか」

「かつ……ばは」

修羅忍道の伝承者が口から血を吐きながら、苦悶の形相で両断されていく。

「……砂蜘蛛ほどの男を片手間に倒すなど……羅将以外にありえん」

シャチがそう独語する間に、芝生の上でよろめきながらゲンジユが身を起こした。

主君の置き土産がなければ死んでいたと自覚するそばかすの若者は、無念で顔を歪めながらも両手に炎の気を纏わせていく。

「……までお膳立てされておいて、やられっぱなしでは終われん！」

両腕を合わせたゲンジユが切断寸前の砂蜘蛛に龍炎斧りゅうえんぶを叩きつけた。

炎のなかでもだえ苦しむ修羅の国きつての使い手は、うぬら小物どもに負けたわけはない、と断末魔を放つ。

「あの赤毛さえいなければ……いなければああああああ!!」

体を二つに裂かれた辮髪の男が砂地に転がり燃えている。

シャチもゲンジユ同様、二人がかりでも倒せなかつた恐るべき仇を見下ろすも、その顔色は蒼白だった。

「す、砂蜘蛛がやられた……!」

強力な長が倒れると秩序を失くして霧散していく、という仮面たちの行動はいつものことだ。

その彼らの後を追いかける双方の足取りは重い。

「あの男の絶影の拳……確かにハンに匹敵するのもかもしれない」

シヤチの台詞を聞いている南斗の若手に反応はない。

自分の不甲斐なさのなかで、彼の見込み違いを訂正する必要はもうないと思っているようだった。

ハンとやらのもとに行けば全てがわかる。

鎖国ゆえ独特なデザインの第三の羅将の城から轟音が聞こえてきた。

## 十二話

## 鏡の人

「ハン様。先ほど闘技場で新たな修羅が誕生したようです。お目通りを望んでおります」

近侍に髭を整えさせていたダンディな男が、仮面の報告者の言葉で背もたれから身を起こす。

剃刀でその首を掻き切ろうとしていた巨軀の修羅は大汗をかいて後退していた。

オールバックの髭の男、ハンはそれに一瞥すらせず、豪奢な椅子から颯爽と立ち上がった。

「あれか」

いつになく静かな闘技場の方向から、赤紫のマントを靡かせた何者かが謁見の間に入ってくる。

黒を基調としたハンの出で立ちとは違い、その男は派手であった。

赤毛といい青みがかったマフラー、赤い胴着に黒いブーツ。およそこの国では考えられない服の組み合せだ。

「何をしておるか、貴様。ハン様の御前である。跪かぬか！」

仮面の修羅たちの叱咤で、その優雅な侵入者が歩みを止めた。

髭に手をやり、ハンが物珍しげに相手を見る。その目は細められていた。

「その情弱な見た目でよくぞ今まで生き残ってきた。褒美をくれてやる」

表は赤、裏が黒のマントを羽織った第三の羅将がそう告げると、赤毛の男はそれに答えず、周囲を見回してから静かに言った。

「そなたらが攫さらつた子供。その奥の部屋にいるようだが」

「……欲がないな。ガキどもだけでいいのか？」

赤い髪の男の前にやってきたハンが野心はないのかと尋ねた。

それに対して彼は答えない。少し考え込んでいる様相だった。

「野心がないのならば……生きていてもしかたがあるまい」

フウウウと風が吹いた。

謁見の間はすでに閉じられており、風が入り込める隙間はない。

だがそれが何を意味するのかを知っている仮面とボロが唾を飲み込んだ。

そして一歩引いた。

侍女たちも蒼白になり、赤毛の美青年から遠ざかる。

城主がくると背を向けた。靴音が響くほど周囲は静寂に包まれている。

別の靴音がした。背後の男のものだろう。ハンは独り言のように告げた。

「もう葬っている」

ブシャツツという効果音が聞こえる。

疾風の拳を極めた存在はそのまま進みながら、奥義の名を口にした。

「魔舞紅躁」

いまだかつてわが拳の影すら見たものはいない。

そう呟いたハンがつまらなさそうに玉座に至る段差に足をかけようとしたときである。

不意に彼のマントが浮かび上がった。

「ああ?!」

修羅たちの驚愕の音がする。

ハンの二色のマントが散り散りになり、風に乗ってどこかへと消えた。

驚愕で声もないダンディな髭男が目を見開いて振り向いた。

道化に見える赤い対象は、北斗琉拳の奥義を食らいながら生きていた。

首元のマフラーや肩のプロテクターが多少痛んでいたものの、マントを斬り裂かれて

はいない。

ましてや、こめかみから血を流す自分とは違い、まったくの無傷だったのだ。

「は、ハン様の疾風をかわし、逆に斬風であのお方に傷を……?!」

堂内が騒めいた。

彼らの主が羅将の地位について以来、こんな衝撃的な光景は見たことがない。

歴戦の修羅たちがハンの怒りを予想しておののくなく、反撃を繰り出した優雅な拳士が口を開く。

「今のは何の戯れか」

赤い髪の男は不機嫌そうに一本指を首に当て、そしてシュツと切った。

心底軽蔑したような仕草のあと、彼は視線を床に落とす。

「死を授けるが褒美……くだらぬ趣味だ。己より弱いものをそうやって今までいたぶってきたのか」

「……」

広間が今度こそどよめいた。

修羅やボロ、侍女らが壁際に後退していく。

この国三本の指に数えられる強者が今まで煽られたことはない。

さらにいえば先手をかわされて反撃されている姿を見たことなど一度もない。

ハンほど誇り高い男が怒気を発しない理由などなく、やがて凄まじい闘気の奔流が始まった。

しかしそれを受ける側は涼しい顔だった。

そよ風を浴びている様相で彼は一本指を標的に向けた。

「お前ごときに興味はないが……探し物を連れて帰る前に、弱者をいたぶる半端者に思  
い知らせてやろう。今度はおのれがそうなる番だ」

§ § § § §

「この国の闘神とも讃えられる羅将の居城……のはずが……この無防備はどうしたこと  
だ」

城内の闘技場には珍しく人気ひとけはない。

周囲を窺うシャチが瞠目しながら広い通路をよろめきながら走っている。

その後ろにいる異国の若者があれを見ろと告げてきた。

仮面の修羅、それを外す許可を得た上級の修羅たちが六花八裂になって屍を晒してい  
る。

誰がやったか確認する必要もない血の海の通路を通り過ぎ、階段を上がり、最上階の  
謁見の間に二人はようやく辿り着いた。

「ここにレイアが……」

誰もいない広間を見回すシャチが何かを察したのか、控室のような扉を見つけて蹴破



り、中に入っていった。

それに対しゲンジユは主人の気を感じていたようで、北斗の青年と別れ、広間の奥にある大扉を開ける。

日の光を受けながら、龍のような巨大石像をしつらえたその広場を見た。

羅将だけが持つ特設の闘技場のようだった。

そばかすの青年が見物中の仮面たちをかきわけ、中央で対峙する二人の男たちを眺める。

碁盤の目のような石床はところどころ大きく断裂し、あるいは崩壊している。

最上階ゆえに吹き付ける風のなか、黒い短髪と髭の男は上半身裸だった。

防具を砕かれたと思われる。

そんな鬼の形相の人物が羅将ハンドと察したゲンジユは、周囲にいる腰の引けた仮面たちの驚倒せんばかりな台詞を聞いた。

「なんなんだ……あやつは一体何者なのだ……！ あつあのハン様を相手に速さで上回る……そんなバカなことが」

「我らは夢でも見ているのか?! 羅将が撃ち負けるなどありえん」

震える彼らを横目に、ゲンジユが主の名を呼んだ。

「ユダ様！」

彼の一言で、屋上闘技場にいる全員の目がくるくる巻き髪の毛の青年に注がれた。

胴着やプロテクターに傷が入るも、出血がほとんどない主君が忠犬の登場でアイスブルの瞳を和ませる。

「あの辮髪の修羅はどうした」

「ユダ様の一撃であれすでに死んでいました。僕らはその後片づけをしただけで」

むくれるゲンジユの様子に赤毛の美男子が微笑した。

「辮髪?! まさか、す、砂蜘蛛を倒したのか?!」

仮面の修羅たちが動揺しながらゲンジユを窺う。

彼は不満気に肩をすくませていた。

「我らが主の敵ではなかっただけで、僕よりは遥かに強かったさ。あの蝙蝠野郎は」

「……あれを一撃か……フフフやりおるわ、南斗聖拳」

「南斗を知っているのか?」

ハンの眩きにそばかすの青年が応じた。

上半身の防具を吹き飛ばされたダンディな拳士がこやつと殺りあつて初めて知つたと語つた。

「戦いの主導権を常に握つてきたオレが……それを敵に譲ろうとはな。あの砂蜘蛛が相手にならぬわけだ」

言いながらハンが姿を消した。そう見える動きだった。ゲンジユがぎよっと目を見張る。飛び蹴りのようなそれを紙一重で交わしたユダが体勢を崩した。

肩のプロテクターが弾け飛び、無防備の肩から血が舞う。

「疾火煌陣……死合いの主役は譲らぬぞ、赤毛」

ふははと高笑うハンだが、不意にぐっと仰け反った。

腹筋の横から大胸筋、さらには顔左半分側に裂傷が走り、彼のリーゼントが乱れて黒髪が散った。

「なっ?!」

何度目の驚愕かわからぬハンの様子に目もくれず、ゲンジユがいつもの絶影とは違うことに気づいた。おかしいなと呟く。

「ユダ様の拳が鈍い。本来ならあの髭野郎はもう背中から裂けているはず」

ゲンガン老直系の孫は妖星の股肱の臣であり、幼少のころから地上最強のカウンター拳法を目の当たりに行っている。

あの程度がユダ様の本気であるはずがない。相手をなぶるような立ち回りに疑問を覚えていたものの、ああそうかと自問自答の体で領いた。

「そういう輩なのですね、こやつは」

上半身の防具を砕き、額を割り、体に裂傷を与える。

死なぬよう追い詰められていく相手に同情していたゲンジュながら、主が鏡の人であることを思い出し、ハンに胡散臭げな視線を送る。

「自分より弱い者をなぶ蹴つて遊んでいるのですか。なんか……残念ですね……第三の羅将とやら」

「小僧……」

十六、七の若手ごときに見切られ、さすがのハンも怒髪天を衝いた。

大言の報いを受けさせようと、疾風の体術で彼に迫る。

だがいつの間にか回り込んでいた大敵の薙ぎ払いを受け、それをかわ躲すために大理石を蹴つて大きく後退した。

「……キサマ」

自分より長い距離を、自分より早くはし奔つた相手が敵を間違えるなど言いたげに手招きしている。

この男があらわれてからというもの、疾風の存在意義を根こそぎ否定されるような扱  
い方、戦い方をされていた。

今のハンのはきは、これまで配下たちが見てきた余裕のあるダンディぶりとは程遠いもの  
のだった。

「か、完全にハン様が押されている……」

雑魚扱いされている、とは仮面たちもさすがに言えぬ。

ハンの北斗琉拳は闘技場の隅々まで届くほどの殺傷範囲がある。

うかつな口は利けなかった。

狂気の相の羅将が足を踏み鳴らし、伝承者となって以来の大敵に近づこうとしたとき、彼が足を止めた。

ブワツという気圧を悟ったハンが殺気の方向を見る。

北斗琉拳のシャチと自ら名乗ったその青年が連撃を放ってきたものの、対する同門の男がありえない挙動から跳躍し、着地した。

動きを止めていた銀色の髪の毛の侵入者が吹き飛ぶ。

凄まじい疾風の衝撃で床に叩きつけられていた。

「……そうはいきやくそう双背逆葬。たあいのない。わが奥義を名乗るには十年早いわ」

本来の支配者の姿を見た仮面とボロたちが思わず顔を見合わせた。

シャチを軽く一蹴したその武威に、ゲンジュが砂蜘蛛より遙かに強いと唸っている。

しかし炎にまかれ、葬られたはずのシャチが立ち上がった。

胸の防具の内側から鉄板を落とす彼の様子に、闘技場の修羅たちがおおつと騒ぎ立てた。

「まだキサマの拳筋は見えぬか……」

「いかに北斗琉拳を修めていようと、そんなスローではオレは倒せん」

「レイアをどこにやった?！」

口元の血をぬぐう若者の鋭い問いかけに対し、ダンディな髭男が眉を上げる。

「砂蜘蛛が連れてきたのはガキのみ。女だど?」

「……どういふことだ」

呆然とするシャチの元に、修羅の国では場違いな恰好の少年少女があらわれた。

それを確認したゲンジユが仰天し、ルイさまと言いながら二人のそばに駆け込んで跪いた。

「ユダ様!!」

配下の声に赤毛の主が頷く。

探し物を見つけた南斗の頂点の男がマントをまくり上げた。

余興は終わりだとばかりに紅鶴拳の構えを見せる。

「!」

はつと上空を見上たユダの目に、気合を溜めて鬨気を放とうとしているハンの姿が

映った。

「くらえ白羅滅精」  
はくらめつせい

ゲンジユの炎が火の粉に思えるほどの業火の塊、その掌底波が標的に降り注ぐ。水晶の岩でできた床が広範囲に破壊され、めくれ上がった。

「身の軽い赤毛め……だが気を駆使できぬキサマなどわが北斗琉拳の敵ではない」

ズアアアという迸りほとぼしの気合により、その岩盤は重力に反したまま滞空していた。

岩の上に乗り上げていたユダがふわりとハンのもとへ舞い降りていく。

「このハンの間合いに無作為に来るか、舐めおつて！」

## 十三話

## 魔界

羅將によって滞空していた大理石が重低音を立てて地上に落ちた。  
屋上の闘技場全体が揺れる。

跳躍した北斗の男の拳が下降中の侵入者の体を撃ち抜いたかと思われたが、それは残像だった。

「ぬっ?!」

背後を取られたハンが咄嗟にオーバーヘッドキックを放つ。十字受けでそれに耐えたユダながら、そのまま地に叩きつけられた。

周囲の修羅たちがさすがはハン様と歓声を上げる。

「今度こそ死ね。鎧突破突蹴」  
がいはとつしゅう

連撃で仰向けになった標的が二ードロップを浴びて大理石のなかに沈む。

今度こそ派手に地盤が崩落した。

轟音とともに階下へ落ちていく建材と仮面たち、その阿鼻叫喚のなかで宙返りを決めたハン  
の雄姿を見て、シヤチが驚倒せんばかりに眩く。

「オレにはまだ会得できない北斗琉拳の奥義……なんとという猛威だ。あの赤毛でも疾風



には及ばぬか」

銀髪の若い拳士が少年少女を抱えるそばかすの青年のほうを窺う。

同時にハンが動いた。

シヤチがしまったと叫んだがすでに羅将は影の気配すら消している。

「大言を忘れてはいまいな小僧!!」

闘神たる己に暴言を吐き続けたゲンジュに、二本指の貫手、斬風燕破ざんぷくえんぱが到達しようとしていた。

砂蜘蛛との戦いですでに死を覚悟しているゲンジュは子供たちをそつと突き飛ばした。

天帝の子ルイ、少年レンの悲鳴が響く。

鮮血が吹きあがった。

周囲は静寂に包まれた。

北斗の指突を放った側が驚愕の表情を浮かべ、間に入ってきた男にまだ生きていたのかとうめく。

「突蹴を受けてすり傷程度とは……だが燕破を身代わりに受けたようだな。わずかな出血といえどオレとお前の戦いでは致命傷に値する」

「ユダ様?!」

救われた青年は主の名を呼んだが、いつもと変わらぬ様子の彼が横顔を向けたことで二人の探し物を再び抱え、後方へと引き下がった。

「フン、破孔は外したか。だが鬨り殺しになるのはこれからだ」

「そう言い切ったハンがようやく気付いた。敵は片手を上げていた。

ハンほどの男が戦慄の鳥肌を立てた。

フウウウウという風の切り裂く音とともに、ユダは異様な構えを解いている。

疾風を斬った?!

シャチやゲンジュだけではなく、拳の心得がある修羅たちも一斉にそう思った。

「うぬら、一体何をおののいて」

彼らの絶対君主が怒号を発しようとしたとき、上空に高く舞っていた何かが落ちてきた。

浮き上がっていた大理石、その小さな破片かと誰もが思った。

「い、いやまてあれは」

シャチがわが目を疑いながら叫ぶ。鋭いが声は震えていた。

「あれはハンの……二本の指だ!」

その言葉で闘技会場が騒然となった。

腰を抜かす修羅もいる。ボロたちはすでに石になったかのように硬直してうめくの

がやつとだった。

「し、信じられん。あの赤毛……なんの気負いもなしにハンの……北斗琉拳の牙を折りやがった?！」

北斗を修めたがゆえに疾風ほどの男の拳を砕くことがどれだけの難儀か、シヤチには身に染みてわかつている。

しかしかの境地に至った赤紫のマントの持ち主は面白くもなさそうに指についた血を振り払っていた。

「……」

突き出しの構えを解いた第三の羅将といえ、自身の利き手を見て絶句している。

さきほどの出血は自分のものであること、人差し指と中指が根元からなくなっていることを確認して思わずよろめいていた。

「あれでは破孔は突けぬ。鍛えすぎたことで痛みを感じなかったということか……それにしては」

滴り落ちる汗をぬぐい、シヤチは優雅を絵にかいたような拳士の佇まいを見た。

一連の動きは彼にとつては造作もないことだと悟る。

一方ゲンジュは当たり前のような顔をしてそれを見守っている。

主に救われたことに感謝しつつも、羅将をあしらったことに関しては一切の驚きはな

いようだ。

「南斗紅鶴拳、独どく転てん葬そう手じゆ。いかに闘気を纏おうと、ユダ様の実の拳に斬れぬものなし」  
南斗の若手はうつそりと眩く。

強敵の奥義の名を聞いたハンがようやく我に返った。

自負していた妙技は通じず、反撃ひとつで指を失う。

プライドを粉微塵にされた男は珍しく大きく高笑っていた。

「これが北斗神拳と表裏一体とされる南斗の拳。わが疾風の拳が全て通じぬか……ぬは  
ははいいだろう、北斗琉拳の真髄を見せてやる」

リミッターを解除したとばかりに、ハンが魔相の気を孕んでいく。

ごうつという風圧とともに、全開の気合を放出し始めた。

「まっまさかあの男、魔界に……琉拳の到達点と呼ばれる世界に足を踏み入れて」  
仰け反りながらシヤチが悲痛に吠えたてた。

第三の羅将、無敵とよばれた男が速さで負け、奥義をあしらわれ、自身の足元にも及  
ばないそばかすの若僧にさんざんコケにされたことで屈辱は極みに達した。

そんな憎悪は全て赤い衝撃に向けられている。

彼が足を踏み鳴らした。歩を進めるたびに闘技場がズシンズシンと揺れる。

「魔闘気……あれが北斗琉拳の境地だ。地獄の扉を開けたユダにもはや勝機は」

「違うな」

シヤチがいつでも逃げ出せる体勢で恐れおののいていると、その視界の端にいたゲンジユが両腕の中の宝物を守りながらかぶりを振った。

「僕が聞いていた本物の鬪気というのは、あんな不安定で悲しい闇のものじゃない」  
「何だと……」

「拳王……世紀末覇者とも呼ばれる男の極大のそれに比べたら兎戯じゃやて。あの髭はまさに井の中の蛙かかわず。自分より強き者と戦ってこなかった不明を恥じればよいものを、ユダ様への憎悪で闇に落ちる。笑止でしかないわい」

代わりに答えたのは若者ではなく、中年の男だった。

ゲンジユが仰天しながらやってきた丸眼鏡の小男を見下ろした。

「コマク?!」

「やれやれゲンジユ様も無事ですな……それにしてもやつと見つけましたぞ御曹司。この年で渡海は疲れましたわ。しかしお目当てのお方は見つけ出したようで」

魔鬪気の気圧を受け続ける赤毛の美男子が長年の従者の声を聞き間違えるわけもない。  
い。

涼しい顔で頷いている。

そんな忠臣が年代物のワインを手に、そろそろ休憩させぬかと告げてくる。

神妙な顔のコマクながら、台詞はまるで物見遊山に來たかのように緊張感がない。

「ふ……」

それにつられたのか、ユダが思わず口唇をほころばせる。

ルイ、レンを連れたゲンジユといえば、いつの間にか姿を見せていた影の女、メイエルに二人の子供を託している。

黒く長い髪をポニーテールに結び上げた彼女が渦中の光景をあらためて眺めたとき、思わず息を飲んでいった。

コマクもゲンジユも先ほどの余裕はどこへやら、同じ反応を示している。

魔相の羅将が得体の知れない何かを放ったことで、一定の範囲に無重力を発生させたのだ。

魔界と呼ばれる空間のなかに押し込められ、過去に生還できた者は北斗神拳伝承者リュウケンのみ。

そしてかの闇の気術を知る者は、この場では誰一人としていない。

シャチですら初めて目にする異様な光景に、皆が瞬きも忘れて傍観するばかりだった。

「コロス……殺す南斗紅鶴拳」

自身の立ち位置を見失い、よろめくユダに、魔道に堕ちたハンが再び白羅滅精を撃ち

放った。

増幅された闇が標的に炸裂した。

## 十四話 斬りたるは標的のみ

一方、シンは第三の羅將の前線基地である砦の惨状を確認して、聳え立つ王城を見上げていた。

彼の近くでレイアの弟であるタオが腰を抜かしている。

屍を晒す仮面たちを窺いながら、そのなかのひとりである辮髪べんぱつの修羅の上半身を発見したところだった。

「す、砂蜘蛛がやられてる……いつ一体何が起きているんだ?!」

焼け焦げた芝生、砂地でさえ修復できない深い断裂。そんな痕跡を見た金髪の青年は、驚愕が収まらない少年の疑問に答える。

「これは南斗聖拳の斬撃」

「あ、貴方の同門?!」

「どうやら……この城においては俺の出番はないようだ。羅將ハンとやら、運がなかったな」

斬裂跡に手を添えていたシンが立ち上がる。

ようやく気を取り直した少年が腰を上げながら告げた。



「東華八盾が倒れ、さらに格上の砂蜘蛛まで……これ以上何があっても驚かない自信がある」

タオの台詞はそのあとすぐに撤回されることになる。

§

§

§

§

§

§ 砦から王城までの道のりにおいて、誰一人として海外からの来訪者の前に立つことはできなかった。

しかし混乱に乗じているとはいえ、防戦にやってくるのは仮面の修羅のみで違和感を覚えたのかタオが呟く。

「名のある修羅は出払っているのか、それともハンの手駒は全て討ち取られたということか……」

羅将の城の本殿に向かい、二人は螺旋階段を上がっていく。

この国の首脳ともいうべき拠点にまともな防衛体制が敷かれていないことに、タオは未だ信じられないとばかりに首をひねっている。

やがてハンが鎮座しているであろう謁見の間へと辿り着いた。

「誰もいないのか？ もう何がなんだか」

豪華なその広間は無人だったが、屋外から聞こえてくる地響きやどよめきを耳にし、少年は扉を開けて駆け込んでいく。

シンもその後が続こうとして、タオの驚倒せんばかりの声を聞いた。

大勢のボロや仮面たちが屋上の闘技場を遠巻きに囲んでいた。

彼らはタオの驚きなど気にも留めず、ひたすらその光景を眺めていた。

やがてよろめく数名の修羅が身を引いたことで、シンは渦中の現場を目にすることができた。

「あれは」

晴天だった空はいつの間にか曇天に変わっている。

そんななか、赤毛、赤みがかった胴着の同門が両手を広げ、華麗に着地していた。

何かを振り払ったような残滓がある。

闇のように見えるそれは、明らかに異常だと思われる魔相の男によつてもたらされたのだ、とシンはすぐに理解した。

「浅い」

何かをかき消した南斗紅鶴拳の伝承者がそう言い、練度が足りぬと告げてから音もなく相手に接近した。

彼から仕掛けるのは初めてのことだった。

「わが魔界を舐めおつたなあ赤毛！」

放たれた闘気の範囲は戦略兵器並みの煌めきを誇っていたが、しかしそれが絶影の拳の使い手を撃ち抜くことはなかった。

「うおっ?!」

「魔界に至つた白羅滅精を二度も薙ぎ消しやがった！」

コマクの仰天と見知らぬ銀髪の青年の声を聞き、シンは恐るべき同門の拳士が奥義を放つのを悟つた。

「南斗斫撃」

突撃と斬撃を併せ持つような紅鶴拳独特の指拳。

影すら絶つといわれる拳が第三の羅将の防具のない上半身に食い込んだ。

赤き鶴の爪は防御にも有用であろう闇の闘気の残りを力で撃ち抜き、壇中といわれるツボの部分を買いてから、ハンの右肩まで一気に斬り上げた。

「ああああ?!」

配下の修羅たちの絶叫とともに、空から雪が降ってきた。

その氷の粒に映える赤い血しぶきが宙を舞い、白くなつていく大理石の床に降り注いだ。

闘技場は静寂に包まれている。

やがて修羅たちが震えながら、それぞれ声を上げた。

「わ、我が国の闘神が……あのハン様が……」

「闘気もない男の拳で突かれ、斬り捨てられるなど、そんなことがありえるのか」

修羅の国の住人である彼らが受けた衝撃は計り知れない。

胴体を斜めに斬り裂かれた男は魔界に至った北斗琉拳の拳士である。

「無重力の中で暗転させられたあの赤毛……ハンの強すぎる殺気がゆえに……白羅滅精の軌道を読んだとでもいうのか……！」

シャチが身震いをしながら呻く。

そんな静かな闘技場に誰かの靴音が響いた。

渦中を囲む修羅たちは、初めて見る南斗紅鶴拳の奥義を見てほとんど尻もちをついている。

立っている者は数少なく、おかげで視界は通っていた。

姿を見せた長い金髪の拳士は、同門の赤毛の拳士を眺めて静かに告げた。

「闘神と呼ばれる存在といえど、お前の敵ではなかったようだな。ユダ」

「……少々手こずった」

頬に走る傷をひとたけで、仰向けに倒れていく羅將を一瞥したユダが屋上全体を見渡した。

コマク、メイエル、ゲンジュといった彼の配下も極星の登場に驚きつつ、南斗の頂点である双壁の邂逅を窺っている。

「シン様……」

「先生！」

探し物であるルイ、レンがシンに飛びつく。

少年少女を受け止めた彼のそばで、同年代のタオが姉の恋人であったシャチとの出会いに仰天しつつも、なにやら言い争いを始めた。

そんななか、致命傷を食らったダンディな男が断末魔のような魔闘気を放出させつつ、再び立ち上がった。

闘技場が揺れている。

「魔界に半歩踏み入れた以上……このままでは終われぬ……北斗琉拳の面汚しのままでは死ねん！」

魔相がさらに険しくなっていく。恐慌に襲われる人々のなか、一切の怯みを見せぬ南斗の双壁の片割れが憐れむような視線を向けて言った。

「奴の絶影の拳はラオウすら撃退する。無闇な闘気など通じんぞ」

「ラオウ?!」

世紀末覇者の名を聞いたハンが目を剥き、荒ぶる闘気を迸らせながらシンを睨みつけ

た。

修羅たちも大きく騒めいた。

伝説の救世主の名を聞いた数人のボロが慌てふためき、屋内に逃げ去っていく。

乱れた髪の小羅将が伏せていた面を上げた。狂気の男は静かに笑っていた。

「フフフそうか、あのラオウを退けたのか。なるほどこのハンが敵かなわぬわけだ……だが」

噴火のように湧き上がる気合の鬪気とともに、出血も多量になっていく。

「わが終撃で……うぬだけは道連れにしてくれる！」

残像を浮かべた魔界の住人が瞬時に赤い拳士の懐に飛び込む。

シンでさえ見失いかけるほどの速さだった。

疾風の男が目からも血を流しながら吠えたてた。

「北斗琉拳、鬪玉とうぎよくいっかん一玩」

ボツという重い音とともに放たれた魔鬪気は、鬪技場の上部に施された龍の石像を破

壊して、城内に落石を発生させた。

地盤がめくれあがる。

だがそんな派手なエフェクトの技に対し、絶影の異名を持つ男は体たいを空くうに消したの

ち、音もなく敵の目の前に着地した。

ハンの頭から股下まで一本指で斬り下げること成功したユダが膝をつき、大理石を

撫でた。

「……」

ハンのリーゼントのような髪形はすでにぎんばらになっている。

今度こそ魔闘気が完全に霧散した。

もはや声もないといった様子で周囲の連中は腰を抜かして固まったままだった。

一歩踏み出した同門の青年が静かに告げる。

「……斬りたるは標的のみ。拳法とはかくあるべし、まさに実の拳」

シンの敬意のこもった解説にユダ配下の三人、ゲンジユ、コマク、メイエルが頷く。

北斗琉拳の真髄、派手な魔闘気に対し、南斗聖拳を真に極めた者がその答えだとばかりなカウンターを見せた。

敵の返り血で身を染めた美しき紅い鶴。その恐るべき使い手が体勢を整えると同時に、背中から前方へと斬れていくハンが床にもんどりうった。

「先ほどの致命傷もある……文字通りオーバーキルだ。今まで相手をいたぶってきた業が返ってきたな、第三の羅将」

そばかすの青年、ゲンジユが顔をしかめながら呟く。

実力差を思い知らしめる紅鶴の数々の衝撃、それを改めて実感したかのようだった。

ここまで一方的にやられるとは予想もしていなかったようで、ハンの配下たちは未だ

硬直したまま動かない。

しかしボロの集団は我に返ったのか、うわあつと悲鳴を上げて逃散していった。

修羅の矜持がある仮面たちは金縛りのような状態から復帰した後も、なんとか踏みとどまつて信じられぬ光景を眺めやるばかりだった。

「フン……所詮付け焼刃の魔界では通じぬか……最後の悪あがきも余裕であしらわれようとはな……南斗紅鶴拳……全てにおいてわが上を行く絶影の拳」

ハンの魔相は魔闘気の消滅とともに消えていた。

死人と化した状態で完敗という展開に、プライドの高い男もようやく納得したようだ。

「本流の北斗神拳でさえ破った存在と知らず、無様なものよ……闇に飲まれて恥を上塗りしただけか」

「信念を貫けなかったことが敗因だ。疾風の練度に比べれば、お前の魔闘気は趣おもむきがない」

腰に手を当て、優雅にマントを靡かせる相手にそう言われ、横向けに倒れる羅将が喉の奥で笑った。

「このオレを易々と降した赤い衝撃……フフ第二の羅将とてお前の進撃は止められそうにないな……魔人ならばあるいは」

「魔人」



ユダが眉を上げる。ごふつと吐血したハンは第一の羅將、カイオウの名を告げた。だが赤毛の男の反応は予想とは違って薄いものだった。

「天帝の子を見つけた今、他の羅將などに興味はない。後は他の者に任せて先に帰還する」

「……どこまでも読めぬ美しき鶴よ。カイオウを倒し、天を掴む気はないと」

底が知れぬ男の野望のなさにあきれ果てながら、瀕死の羅將はマントを自分にかぶせてくるのを見上げていた。

「人品卑しからず武勇無双……お前ほどの拳士がこの国で生まれていたら……カイオウも歪まなかつたかもしれん」

ハンは曇天の空に仰向けになった。

自身の魔闘気で押しつぶした床にヒビが入る。

城の屋上であるそこは徐々に崩れていき、遙か下にある河川に落下しようとしていた。

同時に己が認めた男から、ケンシロウやラオウがこの生国にやってくる、もしくはすでに来ていると告げられた。

わが国が変わるときか、とハンが大きく叫ぶ。

それを合図に、崩落する床とともに彼が落下していった。

「国中に触れを出せ。ラオウ伝説はもう始まっている……！」

それが第三の羅将の最後の言葉だった。

早合点し、先に逃げたボロのせいで、その下知はハンの姿が小さくなる時には実行されていた。

巨大ダムに設置されたタンクから赤い水が国中の下流に流れだすという、ラオウ襲来を知らせる仕掛けだった。

郡将カイゼルのときも触れがあつたものの、羅将による国の危機の報は規模が違つていた。

闘技場にいた面々が眼下から河川が赤くなつているのを見守つていた。

「ユダ様、天帝の子と少年はむしろ赤備えが保護し、サザンクロスへ送り届けます。貴方様はお心のままに」

コマクやゲンジユ、メイエルが膝をついて主を窺う。

この国に長居する気はないと答えた赤毛の男は、小男から受け取つた新しいマントを羽織り、少し物見をしてから帰還すると告げた。

優雅華麗なああの男になす術もなく敗れたハンだが、自分では到底かなわぬ相手だったと、握りこぶしを震わせながらシャチが感慨にふける。

守るべき娘と弟子との別れをすませたシン、ほぼ無傷といつてよいユダ。今となって

は南斗最強の男たちが肩を並べて屋内へと去っていく。

タオ少年がそれを追い、やるせない思いを振り切ったシヤチもその後続いた。

## 十五話

## 魔人

修羅の国を統べる第一の羅將の城は、絢爛豪華なハンの城とは違い、見た目は石造りの塔にしか見えない地味なものだった。

そんな古い塔の支配者が縞模様のような防具を纏った配下の影、ゼブラからの報告を受けていた。

「羅將ハンが敗れました。奴は死に際に、改めてラオウ襲来の報を告げる赤い水を放出するよう命令したようです」

「……」

「それより遡さかのぼりますが……東海岸を防衛すべき郡将どもの大半が幾人かの侵入者によって倒されております。これは建国以来のゆゆしき事態かと」

玉座に腰かける巨軀の男は全身を黒い鎧で覆っている。

常時放出される魔闘気を抑えるためだった。

魔界とよばれる境地を極めたその存在は、口から煙を吐きながらゆっくりと立ち上がった。

「ついに来るか……わが弟よ」

洞窟のような堂内の空気がさらに冷えたような気がした。少なくともゼブラにはそう思えた。

しばらくたってから迷路のような通路からこの広間に入ってきた者がいる。

ゴーグル付きのハーフヘルメットのような兜、この城の主にも劣らぬ剛体を誇る人物だった。

鎧姿の魔人に長拵ちやうぎゆうの礼をとる男は准将バルコム。

カイオウ陸戦隊の將軍である。

羅刹七人衆の長でもある男は報告ついでに、東華八盾の長カイゼルを撃破した拳法の名を告げた。

「南斗極聖拳……」  
きよくせいけん

黒兜の奥の目が光る。斗を司る拳法つかさど、表裏一体のそれを知らぬカイオウではない。

だが魔道の拳と虐げられてきた彼の憎悪の矛先にあるのは、やはり北斗神拳だった。

「ハンが倒れたことは知っているか、バルコム」

ゼブラの問いかけに熊のような出で立ちの髭面が聞いたばかりだと頷く。

「その使い手も南斗らしい」

無言で驚く准将に、第一の羅将が軽く手を振る。

南斗の侵入者の始末は任せると下知され、バルコムは膝について命を受けた。

しばらく魔人陸戦隊の一部を預かり受けますと言い残し、准将最強との呼び声が高い拳士が去っていく。

利害の一致により、短時間で目論見を果たしたバルコムを見送り、長身瘦躯の影が復讐の鬼だなど呟いた。

「ゼブラ」

「はっ」

鎧兜の魔人が馬を引けと言いながら、黒いマントを手に取った。

「ラオウ伝説……御自ら粉砕するおつもりで」

修羅の国を統べる存在はかつて弟と交わした約束を果たすべく出陣する。

しかしその相手がまさか憎悪してやまぬ拳法の正当伝承者であろうことは知る由もない。

§ § § § §

修羅の国内はすでに大部分が混乱の極にあつた。

赤く染まった川の意味を知るボロに扮した不満分子たち、彼らが一斉に反旗を翻したからだ。

第三の羅將や准將群將たちが倒され、その体制に綻びができた隙を狙うのは、何も彼らだけではない。

空席になった地位に就こうとする修羅が武勲を立てようとして、独自に各地の反乱を鎮圧して回るのも、また当然の成り行きだった。

そんなボロたちの蜂起に対し、ジェノサイドで対応した修羅の軍団がいる。

仮面を外し、名を許されたその男はブロンといった。

巨大ブーメランを操る巨漢は反乱したとある村を撫で切りにし、逃亡した連中を砂漠に追い詰めて止めを刺そうとしている最中だった。

だがブロンと配下たちの前に邪魔者があらわれる。

去り際の駄賃とばかりに彼らはその邪魔者たちに襲い掛かったものの、修羅たちは一瞬にして返り討ちにあっていた。

「てめえら……なにモンだ……?!」

仮面の数人をひとり倒した銀髪の青年はブロンの問いに答えず、彼らが引き立てていた女たちを眺め、どこへ連れていくつもりだと尋ねた。

「反逆者の親類は皆殺しだが見目好い女は別だ。これらはカイオウに献上する」

「……そのなかにレイアという女はいたのか?」

「はあ? 知らんなあ。しかしいい女なら無事ではいるはずがねえ」

区将屈指の猛者の台詞でシャチが長い髪を逆立てる。

ぶはとは哄笑する彼のブーメランを避けた北斗琉拳の拳士だったが、戻ってきた長大なそれを二度躡かわしたところで、ブロンの横薙ぎの蹴りを受けた。

飛ばされたシャチが踏ん張って砂地に手をつき、連れの男たちを窺う。

そばかすの青年、ゲンジュは仮面たちを炎にまいていた。

金髪と赤毛、南斗の双壁といえ、あさつての方向を眺めてから視線を交わしているところだった。

「気のぶつかり合いか。片方には覚えがある」

赤毛がそういえば、金髪が無言で頷く。

以心伝心の二人は少年天才を守れと言い残して背を向けた。

「逃がすかつ」

シンとユダを狙い撃ちにするために武器を掲げたブロンの前に、ゲンジュとシャチが並び立つ。

シャチが憎々し気に言った。

「お前の主、なかなか厳しいな。この人数の仮面と区将のなかに置いてけぼりか」

「この程度の敵を蹴散らせないでユダ様のお供はできん。あんたもいることだしな」

チリチリ金髪の若い南斗の拳士が仮面を斬り裂いてから仰け反った。



危うくブーメランに真つ二つにされるところだった、と冷や汗を浮かべている。

「……まあいい。ブロンはオレが倒してやる。雑魚を処理しろ」

「了解した」

自分との力量差を素直に認めたゲンジユの返答に少し驚きながら、シャチは武器術の達人と対峙する。

羅将には到底及ばぬものの、区将ごときに後れを取るようでは羅刹は名乗れない。

「半殺しで済ませてやる。カイオウの城に案内してもらわねばならんからな」

「ほざけ若僧が！」

軌道の読みにくいブーメランをかろうじて足で蹴り上げたシャチが、二撃目の暗器を避けてブロンの懐に飛び込んだ。

§ § § § § § § § § § § §  
「なんとという弱さか。これが北斗神拳伝承者か」

全身鎧に包まれた第一の羅将はそう吠えて、憎き拳法の使い手の体を掴み上げた。

ラオウを迎撃するつもりがやってきたのは別の男だった。

出会った瞬間、カイオウの武威を肌で感じたケンシロウは、会得したばかりの無想転

生を繰り出したが、暗琉天破によって技の発動を防がれ、暗琉霏破あんりゅうひはを受けて叩き伏せられたのだ。

その後もケンシロウの拳撃は全て通じなかった。

再度暗琉霏破を食らって昏倒した正統伝承者を掴み上げたまま、カイオウがその体を押し潰そうとしたときである。

北斗神拳の血など一切残さぬと告げた魔人が何かに気付いて振り返った。

ケンシロウに倒された陸戦隊の屍を越えて、見知らぬ何者かがやってくる。

「あれは……」

ゼブラがヘルメットの下の目を細めてその影を眺めた後、主人を窺った。

ケンシロウを片手で持ち上げながら、黒い鎧の羅将が片手を振り上げる。

それが魔闘気の放出だと知っている縞模様かみかきの影の男は慌てて退避し、岩陰に身を潜ませた。

カイオウの魔闘気が空を裂き、硬い岩盤を抉る。周囲は砂塵に包まれた。

「うおっ?!」

上空を見上げるゼブラの声で、カイオウが視線を標的に向ける。

逆光のなかで浮かぶひとつの影、それが自分に向かって降りてくるのを見た。

「雑魚どもめ」

兜の奥の両目が光る。

手中のケンシロウを放り投げ、彼も飛び上がった。

「重なつてひとつに見せるなど、小虫の考えそんなことよ」

カイオウの見切りは正鵠を射ている。

しかしながらもうひとつの影は己に向かつてくるのではなく、昏倒しているケンシロウの傍に着地していた。

「ぬっ?!」

魔闘気を再度繰り出す前に、修羅の国最強の男の腕は赤い髪の毛の男の両手に抑えられていた。

彼の白い手は鎧の隙間からもれる魔闘気に直接接触しているにもかかわらず、焼け焦げぬどころか、振り払おうとしてもビクともしない。

「キサマ……」

「どす黒い……しかし赤みもある。初めて見る気だ」

その男は第一の羅将の腕を力で抑えこみながら涼しい顔をしていた。

自分から見れば小男であるその赤い髪の毛の拳士と組みあいながら地上に降り立つ。

着地した瞬間、カイオウが膝蹴りを見舞った。

それを紙一重でいなした相手が後方に優雅に舞い降りる。

魔人が大きく息を吐いた。

ケンシロウを抱き上げる金髪の青年を一瞥してから赤毛に向き直る。

この国では感じられない風が吹いたからだ。

「……今のは」

風を繰り出したであろうその男が手を上げていた。

同時に、ピシリと第一の羅将の兜にひびが入った。

抑えられない内からの気圧でが兜が弾け飛ぶ。

そこから魔闘気が沸き上がった。

カイオウともあろうものが驚きを隠せず、額から流れる血をそのままに、赤紫のマン

トの男を凝視した。

ユダは少し瞠目してから告げた。

「顔の傷以外はよく似ている。お前がカイオウか」

「うぬは」

死合のやりとりを制されたのは初めてのことだった。

怒気を発して魔人が一步踏み出す。

万全の態勢で撃ち放った魔闘気がユダに迫る。

だが赤毛の拳士は二本指の両手で暗琉あんりゅう霏破ひはを受け止め、四本の指で中心から抉るよう

に弾いてしまった。

今度こそカイオウは驚愕した。

ユダがマントを翻し、あえて背を向けたことで驚愕は怒号に変わる。

「どういうつもりか……!」

「気のみでは私は倒せん。拍子抜けだな北斗琉拳」

後ろ手を振った赤い衝撃が自分の出番は終わったとばかりに去っていく。

その背に飛び掛かろうとしたカイオウだったが、ゼブラの叫び声で足を止めた。

「カイオウ様!」

振り返れば、金髪の男の傍で瀕死のはずだったケンシロウが立ち上がっていた。

§ § § § §  
「わ§ 若僧§ごとき§にこの§ブロン§が……」

上半身を碎かれた区将が両膝をつき、ゆっくりと倒れ込んだ。

血の唾を吐いたシャチはそれに見向きもせず、仮面の修羅相手に奮闘しているゲン

ジュの救援に向かう。

「目算が狂ったなシャチ。半殺しではなく仕留めてしまうとは」

「気安く呼ぶなそばかすのガキめ」

憎まれ口を叩きあう北斗南斗の拳士たちが同時に飛びずさった。

双方とも異様な闘気を感じ取ったようで、半包围の仮面たちのなかからやってきたハーフヘルメット、ゴーグルの大男を見て構え直す。

「奴は……」

「カイオウ陸戦隊の將軍、准将バルコム」

ゲンジユの呟きに答えたシャチが舌打ちを放ち、こめかみの汗をぬぐい取った。

「逃げる準備をしておけそばかす」

「なに？」

「あれに遠く及ばんお前をかばって戦えるほどおれも余裕がない」

はつと気づいたシャチが、いつの間にか修羅に捕らえられた少年の名を呼ぶ。

「タオ！」

「レイアという女はわしが預かっている。返してほしくばキサマらの連れの金髪の男を連れて来い」

「……連れの金髪？ シンのことか」

返答したゲンジユが今にも飛び掛かろうとするシャチを押しとどめているうちに、バルコムが配下からの報告を受け、そのまま繰り返していた。

「カイオウ様が撤退した……?」

「北斗宗家の幻影を見た、と言いつつ残して数名の陸戦隊とともに城内に引き返したようです」

「……北斗宗家……北斗神拳のことか」

「ケンシロウとやらは倒したものの、南斗と名乗る赤毛や金髪の男たちに阻まれ、止めは刺せなかった模様」

顔を見合わせるゲンジユとシャチをよそに、何やら思索した様子の准将が我らも引くぞ、と告げた。

「わが仇敵、金髪の男をわが城に呼びこむように伝える。さすれば女などに用はない」  
「待てー!」

飛び上がったシャチにつられ、ゲンジユも跳躍した。

去り際の大男の背に北斗琉拳と南斗焔浄拳えんじようけんが炸裂したが、それは彼のマントを引き裂くだけで、肉体にダメージを与えることはできなかった。

「泰山寺拳法気功術。そなたらの未熟な腕ではわしに傷一つ与えることはできません」

二人が弾かれて仰け反った。バルコムが振り返る。

「熊爪両断拳」  
ゆうぞうりょうだんけん

ボボツという重低音とともに、ゲンジユとシャチが防具を砕かれて吹き飛んだ。

二人はバルコムの剛拳で地に叩き伏せられ、立ち上がれずに腰砕けになっている。

「フン、奥義を使わせたことはほめてやろう若僧ども。このガキは連行する。シンに言伝することを忘れるな。それが生かしておく理由だ」

気絶している少年タオを担ぐ仮面を連れ、准将バルコムが立ち去っていく。

失態だと震えるゲンジユの声を聞きながら、シャチは意識をなくした。



## 十六話

## 恩に報いる

第一の羅將の影であるゼブラは、主人の魔闘気が落ち着いた様子を窺って安堵した。居城の玉座に座ったまま、まじろぎもしない鎧姿のカイオウに静かに問いかける。

闘神の幻影を無意識に放出したケンシロウに惑わされたものの、あのまま彼の首を取ることが不可能ではなかった。

何故奴を生かして逃したのですかという質問に、カイオウが斜め上空を見上げて足を組んでから答えた。

「……同じ宗家の血を継いでいる者があと一人いる」

「第二の羅將ですな」

「あの幻影を持つであろう忌まわしい存在ども……互いに戦わせ、同士討ちにさせる」  
全て滅ぶがよいと呟いた彼が立ち上がった。

妹サヤカを殺してその罪をケンシロウにかぶせるためだ。

そののちに弟ラオウを倒し、大陸に攻め込み、己に大言を吐いたあの赤毛を屠る。

北斗神拳に加え、すでに南斗聖拳も滅殺の対象になっていた。

憎しみこそ北斗琉拳の真髄である。



ゲンジユの言葉にシヤチが頷く。

「あんたを仇敵と呼んでいた。レイアやタオを悪用するのは必然」

臍ほそを嘯む北斗琉拳の若き拳士がよろめきながらあれだ、と指をさし、立ち止まった。

その先にあるのは准将バルコムSの塔のような居城だった。

S

S

S

S

修羅Sの国、東海岸のとある港で停泊している二隻の巨大な帆船がある。

それぞれ頂く紋章は違っている。黒い船から出てきた巨漢と、赤い船に戻ろうとして

いる赤毛の青年とが出くわせた。

彼らの傍にはそれぞれ側近はくが侍っている。

夕暮れの海を背景に、北斗と南斗の頂点の男たちが対峙するように波止場で向き合っ

ていた。

北斗の男が口を開く。

「兄者に殺されかけたケンシロウを救ったそうだな。どういう酔狂か」

「あれは救世主ゆえ」

ユダの簡潔すぎる答えに眉を寄せ、ラオウが水平線を一瞥してから尋ねた。

「北斗琉拳はどうであった」

「……」

「包む必要はない、正直に言え」

腕を組むラオウが目を剥く。

赤紫のマントの拳士は長身だが、彼と比べれば小男に見える。

そんな美男子が忠臣のコマクの視線を受け、わずかに頷いてから告げた。

「相手を惑わせる妖拳。しかしかたに魔闘気を繰り出そうと、最終的には北斗神拳の真髓かなには敵うまい」

「……どういう意味か」

「惑う相手には誰かが愛を説かねばならん。それがお前かケンシロウかはわからぬが……私では倒すだけで終わる。筋違いというものだ」

涼しい顔でそう言い切った南斗紅鶴拳の伝承者に、ラオウの従者であるレイナが仰天せんばかりにユダを眺めた。

彼女はこの国の出身である。

闘神のなかでも最強と謳われる第一の羅将すら眼中にもない物言いをして、つい口を挟んでしまった。

「魔人カイオウすら貴方の敵ではないと?」

「こりゃ、レイナ」

控えていたウサが叱咤する。主も同じように受け取ったようで、腕を組んだまま好敵手を見守っていた。

「敵ではあるのじゃろう。だがなわしも見たが、いかに闘気を極めようと実の拳のわが主を撃ち抜くことはできんよ」

「コマクか。ハンの魔界を見た程度でほざくな」

「女、お前こそユダ様を知るまい。赤い衝撃を食らった覇者を見るがよい」

妖星の忠臣であるコマクが肩をすくめて世紀末覇者を窺った。

レイナもラオウを見上げる。

当人は小物の大言を否定しなかった。その彼が鼻を鳴らして言った。

「このラオウならば……兄者を説き伏せることができる」と

夕陽に輝く赤毛が揺れる。

そんな大敵のお墨付きのような表情を見て、北斗の長兄は口角を上げていた。

「小賢しい鶴め。うぬの見切りに応える形になるのは気に食わぬが……兄を救うのは当然のこと。この件に関してはケンシロウに任せるわけにはいかぬ」

ウサから手渡されたマントを羽織るラオウが、末弟に伝えておけと言ひ捨てて好敵手の傍を通り抜けた。

「あれが戦うべき男は血を分けた兄であるヒヨウ。互いに領分を侵すべからず。行くぞ」

「ははっ」

小男と女剣士が巨軀の主を追いかけていく。

赤紫のマントの主を促し、コマクが船へと向かう。

その際やれやれと呟いた。

「ケンシロウは負傷からの回復が早いと聞く。ならば手厚い治療を施し、さっさと下船してもらおうとしよう。今に至っては本国のほうが内乱気味の状況できな臭くなっている。はよ帰りたいもんじゃ」

§ § § § §  
 「来おったか、金髪の若僧」

バルコムの拠点に姿を現したシンが足を止めた。

塔のような建築物の内部を見上げている。

階上には城の主と区将たち、仮面の修羅が白刃を連ね、円状に標的を見下ろしている。

塔とはいえフロアは広い。復讐に燃える豪傑に対し、シンが問いかけた。

「夕オと女はどうした？」

「そばかすのガキと北斗の未熟者の気配がない。逃げたようだな」

准将は質問に答えず哄笑する。

まあよいと吐き捨てた泰山寺拳法たいざんじの使い手がやれ、と号令すると、まずは仮面たちが一斉に襲い掛かった。

「バルコム様、羅将直属の精鋭どもを相手にどうするつもりですかね。あやつ」

「過剰殺戮というかの陸戦隊の無駄遣いというか」

区将のヌメリ、サモトが呆れた口調でフロアを見下ろした瞬間、黒い鎧の修羅たちの小隊が凄まじい勢いでドバツと弾け、そして四散した。

「何だ今のは……!」

紳士風の髭男サモトが手すりに手をかける。バルコムより大柄なハゲ男、ヌメリは侵入者が口にした奥義の名を驚愕のなかで復唱した。

「な、南斗獄屠拳ごくとけんだ?!」

上空の敵を蹴り碎いたシンが着地し、群がってくる仮面たちを撫で斬りし始めた。

それらが解体されていくのを見た修羅は戦法を変え、上下から連携して襲い掛かる。だがそんな黒山の人だかりを掃いて捨てるように、千の貫手が放たれた。

南斗千首龍撃を食らった前方の集団がハチの巣にされ、まとめて吹き飛んでいく。

区将たちが度肝を抜かれているのを横目に、バルコムは仇敵の拳のクセを食い入るよ  
うに見つめていた。

「ば、爆薬だ。爆薬を使え！」

サモトが自身もダイナマイトを取り出しながら叫んだ。

同僚たちが巻き添えになるのも構わず、仮面の数名がそれを点火させて投げつける。

爆発と爆音で塔内は揺れ、辺り一帯は粉塵に包まれた。

「無茶苦茶しやがって。下が見えねえぞ」

ヌメリが手をかざして現場を窺う。

生身ではひとたまりもあるまい、とキザに告げたナル男はタバコを口にくわえようと  
して悲鳴を上げた。

「んな?！」

いつの間になんてやってきたのか、目の前の手すりの上に立っている金髪の青年を見上げ、  
サモトは尻もちをついていた。

それを見下ろすシンの声は冷たい。

「自分の力で戦ったらどうだ。修羅の名が泣くぞ」

「ほげけー！」

巨漢のヌメリが剛腕を振り下ろすと同時に、サモトがボウガンを発射した。



拳と矢を片手ずつて受け止めたシンが階下に落ちていく。

逃がすかとばかりにヌメリが飛び降りた。それを確認しながらサモトが上司の名を呼ぶ。

「バルコム様」

「銀槍を潜ませている。ヌメリとの連携で奴のさらなる奥義を見届ける。お前は所定の位置に戻れ」

「……女子供を引き立てる役目は少々気が引けますが……カイゼル様の仇とあれば是非もなし」

准将に向かってナルシストの区将が頭を下げる。ボウガンを手の中背の彼が塔の内  
部へと消えていった。

階下の広いフロアでは、大勢の仮面の輪に紛れた名の許された修羅がいる。

群将カイゼルを命の恩人とする西嶽派銀槍さいごくはぎんそうの使い手、その名をルステイコといった。

彼にとつても金髪の仇が自分に向かって背を向けるその瞬間をじつと待っている。

そんななか、ヌメリが持ちこたえているのは、周囲にいる仮面たちの暗器による助力もあつてのことだ。

罠にかける意識では相手に悟られる。

ヌメリも修羅たちも死人となって標的を包囲していく。

やがてシンが石畳の一角に後ろ足をつけた。

そのとき、床の底が抜け、彼の片足がめり込んだ。

思わずヌメリが吠えたてた。

「かかりおつたな若僧！」

レッジホールドのトラップが発動し、シンの動きを封じたそのとき、仮面たちが一斉に特殊素材の網を投げる、さらに身動きがとれなくなった標的に、ヌメリの剛拳が迫つた。

区将の叫びは、シンの背後にいるルスティコの奇襲を援けるものだった。

白銀の槍を奮った修羅が血しぶきと手ごたえを感じて獲物を抜く。

「なっ」

短めのハードモヒカン、ドジョウ髭の槍使いが味方であるヌメリの胸部を突いてしまったと悟った瞬間、ルスティコの胸にも激痛が走った。

金髪の向こうのヌメリが槍と指突をくらったことで胸板を抑え、両膝をついている。

「き、亀甲金網の目を抜く一本指で我らを突き通すとは……」

毒蛇穿穴という、至近距離からの極聖拳の奥義を食らった二人が崩れ落ちる。

その際、瀕死のヌメリが腰のベルトに下げていたダイナマイトに着火した。

そして彼がシンにしがみついて叫んだ。

「ルステイコ、逃げい！ こやつはわしが」

「……考えることは一緒のようだなヌメリ」

すでに死を覚悟した槍使いも懐の中の爆破装置に点火していた。

網にかかったままの獲物に掴みかかるルステイコを見て、異相の巨漢が歯を剥く。

ヌメリは会心の笑みを浮かべていた。

「カイゼルに助けられた恩にあくまでも報いるかい……小賢しいとヤロウだと思つていたが、おめえも修羅の国の武人よな」

「それはこちらの台詞だ粗暴な大男め。後の始末は奴に任せた……」

ごぼつと血を吐いたルステイコが階上を見上げる。

その手すりを握り潰した陸戦隊の将軍がマントをまくつて手を上げた。

それを合図に仮面たちが一斉に飛びさる。

吹き抜けの塔の内部が大音声とともに再び揺れた。

## 十七話

## 義士

崩れた内壁と地盤を覆い隠す砂煙のなか、ひとつの影が動き出す。

爆心地から離れていた仮面の軍勢は、それでも爆発の衝撃で吹き飛ばされていたが、修羅としての本能であろう、彼らは震えながらも起き上がっていた。

もやが晴れてくる。

仮面たちの驚愕が塔内部にこだました。

「上級修羅二人の自爆をもともせぬとは……一体あの薄いもやのような気はなんだと  
いうのだ……?!」

「だが爆裂の全てを抑えきったわけではない。金網にかかって動きもままならぬ今な  
ら」

取り囲もうとした仮面たちだったが、全員が動きを止めた。

特殊加工の金網を素手で引きちぎり、無造作に投げ捨てるシンの姿を見たからだ。

「散れい」

階上から塔の主の声が出た。

たった一声で陸戦隊を退避させた男が手すりに足をかける。

マントをめくった修羅の国きつての豪傑が隊員たちに厳命した。

「うぬら、これより一切の手出しはならん。この死合の結末を見届けよ」

配下たちが胸に手を当ててて礼を施すと同時に、羅刹七人衆の長が跳躍した。

シンも石畳を蹴る。

空中で激突した泰山寺拳法と南斗聖拳の使い手が階上の通路に降り立つ。

広い一階フロアにいる仮面たちがそれを見上げる。

「おおっ」

歓声と同時にシンの頬から血が流れた。

「突き。薙ぎ。蹴り。キサマの南斗の拳は全て見た。そのクセもな」

そう言い終えたバルコムのハーフヘルメットやゴーグルが吹き飛んだ。

やるのうと呟いた彼があらためて牙を剥く。

防具は砕けても傷を与えられなかったことでシンが思わず瞠目している。

「羅将ハンの魔舞紅躁まぶこうそうすら耐え抜いたわしの剛体、その細腕で碎けるものか。ましてや」

間合いを詰めるバルコムに対し、シンが無数の正拳突きを繰り出した。

その全てを受けながらも突進を止めない准将が、巨体を武器にシオルダータックルを

放つ。

「怒りでより強化された硬気功だ、きかぬわ！」

渾身の体当たりを受けたシンが背後の柱もろとも押し込まれていく。あまりもの重圧で柱や石の床が崩れ落ちた。

落下するバルコムの顔を蹴って一矢報いたシンが先に着地する。遅れて降り立った猛将は鼻で笑っていた。

「わしの体は鋼鉄以上。もはやうぬの拳など」

言いかけたバルコムの鼻孔から血がしたたり落ちた。

金髪の青年がかすかに笑みを浮かべ、どこが鋼鉄以上だ？ と挑発する。

鼻血を無言でぬぐった陸戦隊の将軍がふううと息を吐いた。

何を思ったのか、彼はヌメリとルステイコ、それぞれの亡骸に近づき、指でなぞっている。

「愛羅承魂……！ 奴らの血はわが体のなかに……その魂魄がわしをさらに強くする。

見せてやろう、わが憤怒の拳の最終奥義を!!」

胸着を破り、己の厚い胸板に血の線を引いたバルコムが静かに立ち上がる。

「バルコム様……!」

任務の遂行に手段を選ばぬものの、本質は上に強く下に情け深い人物である。

名家でもない叩き上げの修羅であり、それゆえ配下からの信望も厚い。

仮面たちはうおおおと叫んで主の名を呼び、様々な声援を送っていた。

「ぬううううああ」

気合を溜め、石畳を踏み抜いて、復讐の鬼は敵に向かって駆け出す。

凄まじい気を纏わせ、殺傷判定を巨大化させたバルコムの両手は無軌道に揺らいでいた。

「泰山寺拳法、ようきげんゆうけん妖鬼幻幽拳」

初めて見るバルコムの秘拳、その振動に、シンの対応が遅れた。

南斗の拳士の胸にバツの形の裂傷が刻まれる。

シンは咄嗟に飛びのいた。

「……」

引かなければ体を撃ち抜かれて即死していたと確信させるほどの威力だった。

バルコムから迸る怒気ほとぼしによって石畳の破片が浮かんでいる。

胴着の下からでもわかる鋼鉄の筋肉を誇らしげに披露しながら、報復の豪傑が充血した目を標的に向ける。

「すでにキサマの南斗の拳は見切っている。わが奥義を存分に味わうがよい」

仮面たちが勝利の雄叫びを上げる。

バルコムの気合と声援で震える塔内部のアウエー感のなか、シンは初めて構えだした。

南斗極聖拳きよくせいけん伝承者のみが見せる単純な構えだ。

その表情といい、とても追い詰められた者が見せる姿ではない。

それを悟ったバルコムが押し殺すような低い声を上げた。

「……仮面ども、巻き込まれたくないならさらに引け」

主の言葉に反し、修羅たちがシンの退路を断とうと背後に回る。

部隊の決死の行動を認めた彼はそれ以上何も言うことなく、再度妖鬼ようきげん幻幽拳ゆうけんを撃ち放

とうとしていた。

「おのれらの死は無駄にせん、とどめだー」

配下もろともシンを圧殺しようとしたバルコムがガクンと体勢を崩す。

その拍子にブシユウウと彼の両手から闘気が漏れだした。

仇の背後にいた部下たちが余波に飲み込まれ、硬質の石の壁に叩きつけられていく。

バルコムは目の前にいるシンの不敵な笑いを見たあとで驚愕した。

「ハ、ハ、ハ、これは」

敵の銀のプロテクターは吹き飛び、血しぶきが両肩から噴き出している。

明らかに重傷に見える。

しかしおのが最終興義の両手を、この男はしっかりと絡めとっていた。

バルコムほどの男の剛腕でさえびくともしない力だった。



バカナと吠えてから彼が言った。

「じ、自分から踏み込んで……わが拳の刃ではなく柄の部分で受け、衝撃を抑えおったのか……?!」

バルコムは推測を肯定するようにシンの表情が改まった。

その双眼が光る。長い金髪が深淵なる気流によって逆立っていく。

「カイゼル、その他の修羅の命を背負うお前の覚悟、確かに受け止めた。今度はわが極聖の真を見せてやろう」

凄絶なるシンの気合で巨漢の男がわずかに浮かび上がった。

「う……おっ?!」

バルコムが見せた隙は一瞬だった。

わずかに仰け反った相手のガラ空きの体へ、リュウケン直伝百裂の正拳突きが撃ち込まれていく。

うあたあとというケンシロウそっくりの掛け声とともに、バルコムの上半身がほぼ隙間なく、拳の形に陥没していった。

「南斗羅砕点」

ズシン、という音がして、浮上していたバルコムが降り立った。

ラオウ並みの大男である彼はしばし上半身を伏せていたが、やがてその状態から起き

直る。

唸り声は怒号に変わっていく。

「ぬああああああ！」

泰山寺拳法の使い手が凄まじい気炎を上げて筋肉をさらに膨張させ、己が防具を弾き飛ばした。

ケンシロウも顔負けだなとこの状況でシンは思ったが、陥没していた拳の跡が一瞬にして元に戻っていることに気づく。

羅刹七人衆筆頭、准将最強の拳士が憤怒の形相で雄叫びを放った。

「なんだああああこの程度かあああ南斗聖拳は!!」

魔界に入ったハンに劣らぬ闘気を発しつつ、塔の主が石畳を踏みつぶしながら仇敵に詰め寄る。

だがその進撃は途中で止まっていた。

今度は鼻だけではなく口から血が流れていた。

さらに踏みしめた足が動かなくなっただけで、ようやくバルコムが体の異変を悟る。

「うぐ……なっ」

体中に激痛が走った。

いつの間にか腕だけではなく大胸筋、腹筋にヒビが入っている。

鋼鉄以上の上半身に亀裂が走り、それらが次々とつながっていく。

「な、にがお……起こつた?！」

「極聖拳きよくせいけんに砕けぬものはない。どれほど怒りで強度を増そうと無駄だ」

シンの言葉の間にもそのひび割れが広がっていく。

ここに至ってさしもの剛毅な彼が是非もなしと天を仰いだ。

そして深く息をついて目を閉じた。

「はっ、配下総出で罨にかけて……それを蹴散らし……さらに……わしの最終奥義すら破つた、か！」

バルコムが叫び終えて気づく。

この男はカイゼル、ヌメリ、ルステイコ、その他死んだ仮面の想いを込めた自分の拳を全て受けきつたうえで、反撃に転じたのだと。

自嘲の笑みが彼の口髭の下から漏れた。

「ふはは死兵と化したわしの全てを砕く……なんとという恐るべき若僧よ……冥府の奴らに顔向けできぬほどの完敗とは」

熊のごとき風貌の修羅がそう告げ、十字の傷がある手の甲を向けてくる金髪の青年の構えと向き合う。

それが貫手の型になっていくのを見ながら呟くように言った。

「わしに放った正拳は余興というわけか……やはり指突こそがキサマの真髓」

「バルコム。修羅の国の名を汚さぬ義の勇士よ。その名を覚えておこう。百裂の痛みをこれ以上受けることはない……」

南斗聖拳を真に極めた者だけが持つ龍の牙。

そんなシンの一撃が亀裂だらけの大敵の胸筋にめり込んだ。

ハンの拳ですら阻んだ頑健な肉体だったが、かつて聖帝や拳王でさえ貫いた極きよくせいけん聖拳のそれは、バルコムの巨軀をもともせず、背中まで軽々と突き抜けた。

「うわあああバルコム様!!」

仮面たちが悲痛に主人の名を叫ぶ。

胸板に風穴があいたバルコムの上半身はすぐに八裂となり、血の海に沈んでいった。

大きく息をつき、シンが貫手を引き戻す。

塔内の静寂はすぐに剣呑な様相に変わる。

踏み出そうとしても踏み出せぬ隊員の様子を察してシンが告げた。

「どうした。残りはかかってこないのか」

煽りを受けた修羅たちが再び武器を手に取った。

上官に殉じる意思を固めたようだ。

彼らは一斉に仇に襲い掛かっていった。

§ § § § §

塔の階上からシャチとゲンジュ、タオと解放されたレイアが降りてきた。

姉弟を人質にとろうとしていたサモトは、ひそかに潜入していた北斗南斗の若い拳士たちの奇襲を受け、爆散して燃え尽きた。

シンに加勢するつもりでやってきた二人が一階の様相を見て絶句する。

タオ少年は負傷している姉レイアをシャチに任せ、床一面を覆うように倒れる仮面の修羅たちの惨状を呆然と見つめていた。

「い、い、いっくら全員死んで」

顔面蒼白になった少年の台詞を聞いたようで、渦中の人物がすつと飛び上がった。

死屍累々の戦場を超え、石畳に着地したシンが皆を促し、塔の外へと連れ出していく。「皆殺しとはな」

レイアを攫った相手とはいえ、これだけの人数を殲滅したシンの容赦のなさに、羅刹を自称するシャチがおののくように言った。

それを見たゲンジュが手をつないで歩きだした姉弟を横目に首を振る。

「あいつは……何の意味もなく自分より弱い者を翫るような男じゃない」

多分なにか理由があつたんだと断言するそばかすの青年だったが、その理由を聞くこともないし、シンがあえて説明することもなかった。

「陸戦隊の奴ら、助命を乞わず勇敢に果てたというわけか。さすがはバルコム配下。それにサモトも手ごわい相手だった」

「ああ。ゆえに僕やシヤチが奇襲に頼らざるを得なかった。シンも死兵と化した陸戦隊に手加減はできなかつたのだろう」

シヤチとゲンジユがそう述懐するのをシンは背中であらわして聞いていた。

これからどうするということ同門の青年の質問に、半壊した塔を振り返つたシンが答えた。

「第二の羅将の元へと向かう」

ゲンジユが眉を寄せる。

「第二の羅将はケンシロウの実兄と聞いた。君はそやつを倒すつもりか？」

「あれの回復を待つ間、ヒョウを抑える誰かが必要だ」

羅将レベルの敵となると抑えられる存在は限られてくる。

そばかす顔の若い拳士はそれもそうだと頷いた。

シヤチといえは姉弟にどこかの村かジユウケイに頼るよう言い含め、自分は伝説の救

世主、ラオウの率いる軍勢に身を投じるつもりだと告げてきた。

「魔人カイオウを倒すことができる唯一のお方。彼に従ってこの国を変える瞬間を見届ける」

北斗琉拳の拳士はそう言い、さらに若い南斗の拳士に嫌々応える形で握手をしていた。

塔の外に出た彼らが二手に分かれた。

砂煙のなかに消えていく長い金髪と、その手前まで見送っているチリチリ金髪の南斗の二人を眺めやり、シヤチが呟く。

「南斗聖拳……外部から突き入れ、全てを砕く拳法か……当然にしてラオウ様もご存じなのであろう。赤毛に金髪。確かにあやつらは救世主になりうるほどの使い手だった……」

タオとレイアが呼んでいる。シヤチは万感の思いを振り切り、彼らに背を向けた。

## 十八話 正面から砕く

国内の混乱が極まるにつれ、郡将サンガの元にも凶報が続々と入ってきた。

仮面の修羅たちが報告を終えて一步引き、上司からの命令を待つていた。

椅子に座っている銀髪でドレッドヘア、髭面の壮年の男が思わず顔をしかめている。

傍らにはターバンを巻いたアイマスク、裏元斗のひよろ長い拳士が控えていた。

肘をついてため息をついたサンガが再確認の台詞を口にする。

「東華八盾が崩壊、とうかはったて 准将バルコム討ち死に、あの羅将ハンまでも惨敗……だと」

「噂に聞くラオウ伝説が現実となりそうだな。この国も終わりか」

喉の奥でビジャマが楽しそうに笑っている。

眉間に皺を寄せながらサンガは仮面たちを退出させる。

しばらく無言の時間が続いた。

舌打ちを放つ郡将の機嫌はすこぶる悪い。

「……くそつたれが。どうやらキサマはこの国を滅ぼす疫病神だったようだな。予想以上の大敵を引き込んで来おって」



「海を隔てた大陸も現在は混沌の状況にある。ならばわしは帰国し、帝都を取り戻す」  
笑みを消したビジャマがお前も祖国に帰ってこいとサンガを誘う。

「修羅の国はしよせん亡命者たるお前の終焉の地ではあるまい。捲土重来の好機である」  
う」

「……策士め。かの地でおれを捨て駒にしようとしてもその手には乗らんぞ」

「お前はお前の意志で一旗揚げればよい。それだけで乱世はより極まる。そしてさらなる斗の拳法も動き出そうとしている。ラオウ、ユダ、シンといった最強の男たちをここに引き付けておくのは成功した。その時点でこの国の役目はもう終わっていたのだ」

「……」

長い間沈吟していたサンガが意を決して腰を上げる。

バトロ、アスラといった元斗の拳士も負傷が癒えたように姿を現した。

郡将にまで上り詰めた他国者が祖国へ舞い戻る、と股肱の臣であろう数人の仮面に命を下す。

「館に火を放て。国中で蜂起するボロどもの責にすればよい。いくぞ」

決断が速い、と称賛したビジャマが音もなく手を叩いている。

表裏比興な人物の台詞を聞きながら、サンガは元斗三人とわずかな配下を連れ、脱出経路たる地下室への扉を開けた。

§ § § § §  
羅將ハンが倒されてから月日が経っている。

だがラオウ伝説による国の動揺は止まらない。

各地の鎮圧に修羅たちが対応に追われ続けるなか、第一の羅將は不気味な沈黙を守っていた。

そのいつぼう、婚約者を弟に殺されたと思ひ込んだ第二の羅將は密かに魔界に到達し、反乱の掃討に自ら出陣して殺戮の限りを尽くしていた。

とある村を殲滅中、ヒョウは馬上から筆頭家臣とその腹心を見下ろしていた。

彼らは跪き、これ以上の暴虐をやめるように何度も懇願を繰り返している。

「……」

だが主君は以前の慈悲深い彼とはまるで違っていた。魔相の男は低く唸るように告げる。

この国はカイオウのもので、その意思に反するものは皆殺しだ、と繰り返すのみだつた。

「ヒョウ様……」

准将ナガトとハゲ頭の修羅たちが荒地に涙を落とす。

皆が無念の様相で面を伏せていた。

魔界に墮ちたケンシロウの兄は虫ケラを見るような冷たい視線を送り、懐に手を伸ばす。

ヒョウが暗器を取り出した瞬間、ハゲ頭四人がはつと顔を上げた。

上司であるナガトが何か叫ぶ前に、その刃は彼らの額に突き刺さるはずだった。

「ん……？」

四つの白刃は、いつの間にか手の甲に傷がある男の手によって捉えられていた。

腰を抜かした状態のハゲ頭たちの前に、金髪の青年が立ちはだかっている。

思わずナガトが腰を上げた。

「……その出で立ち」

郡将筆頭のカイゼルが国中にその拳の名を流布したことで、髭面の准将はその存在を知っていた。

「て、手の甲の傷、金髪……お前が南斗極聖拳きよくせいけんのシンだな?!」

刃を素手で握り潰した相手は、准将最強を誇るバルコムを倒した男だった。

仰天する彼らに対し、馬上の魔人は口から魔素を吐きながら異国者を一瞥した後、ナガトに声をかけた。

憎悪に塗れた羅將の声に、事情を知らぬシンが眉をひそめている。

「羅刹七人衆ナガト。腹心第一のうぬとて例外ではない。わが意に反するものは滅するのみ……」

「……いつか……いつかカイオウを倒し、貴方がこの国を救うと……我らはそう思っております。ですが」

紳士な風体の上級修羅がヒョウに向き直る。

これ以上ハゲの部将たちに殺気を向けさせないよう、ナガトは武器を手を取った。

「お前の腕でこのヒョウに敵うと思ってるのか」

魔界の住人が哄笑し、飛び上がってくる年上の部下を一撃に葬ろうとした。

魔闘気を纏わせるヒョウの斬撃は、ナガトの首をとらえて刎ねるはずだった。

「ぬっ」

ヒョウが目を剥く。長年の忠臣は部外者に弾かれ、後方に飛んでいた。

己の拳を受け止めた男が衝撃を流すように体術を駆使し、音もなく着地する。

長い金髪の持ち主が言った。

「貴様がヒョウか。義の将だと聞いていたが……第三の羅將と同じく闇に堕ちたというわけか」

「若僧く!! うぬがハンを葬った南斗の拳士」

「俺ではないが……お前はそうなる」

本心ではないシンの大言を聞いた第二の羅将がほざくなど吠え、暗琉天破を放つ。

二人の間に流れる凄まじい殺気のなか、ナガトは部将たちに救われ、大きく後退して  
いた。

魔闘気の流れに押し込められた者はその無重力のなかで位置を失う。

北斗琉拳の秘奥義を破った者は誰一人としておらぬ。

赤い衝撃を知らぬヒヨウはそう独語し、空間のなかで位置を見失う南斗の男にとどめ  
とばかりの暗琉霏破あんりゅうひはを撃ち込んだ。

「あ、あれが闇の波動……！」

魔界を間近で見たのは初めてだったのか、ハゲ頭の四人が風圧で仰け反りながら叫  
ぶ。

カイオウのそれを以前見たことがあったナガトは、直撃して転倒した推参者が跳ね起  
きるのを見てバカなと驚嘆の声を上げていた。

ヒヨウすら驚きを隠せない。

栗毛の馬の手綱を引いて言った。

「小癩な……芯をずらしおった」

シンはバルコムとの戦いですでに両肩のプロテクターを砕かれ、負傷している。

それでも金の縁取りの黒い胴着が焼け焦げて一部が消失していた。

しかしながら体をひねって反らしたことで致命傷ではない。

ヒヨウはプライドを傷つけられたようで、愛馬をいなくなかせて突進させた。

「死にぞこないめ、その体をすり潰してくれろ！」

第二の羅将とて、その標的が世紀末覇者と黒王号相手に死闘を演じたことは知らぬ。

シンは馬上からの正拳突きをかわし、音もなく彼の背後に回り込む。

だがおのれ以上の存在はただひとり、という自負を持つ最上級に位置する修羅は、その気配を読んで上半身をねじり、気合を溜めながら片手の両斬破を振り下ろした。

両手でガードしたシンの表情が歪む。

これほどの斬撃はサウザーと死合った以来の衝撃だった。

よろめいたシンが隙をさらす。

そんなガラ空きの脇下に、ヒヨウは魔闘気を纏った双腕を突き込んだ。

「ふはははわが拳は遠近双全、死角はない。塵と砕けい!!」

「あれは北斗琉拳、琉羅極りゅうらごく荊殺けいさつ」

ナガトが叫ぶ。魔界の閃光にあの若僧が耐えられる道理はない……

「な、なんだと?!!」

ボシユウウという魔素が分散する音を聞いた准将とその部下が、主の双撃を両肘で叩

きこんで防いだ男の姿を眺めやった。

ヒヨウが馬上で体勢を崩した瞬間にシンは身を引き、距離を取った。初めて戦う羅将は自分を満足させるに十分な武威を誇っている。

すでに軽傷ではない身ながら、シンの口角は楽し気に上がっていた。

「余裕ぶるとは、舐めおって」

再度突進してきた魔人に対し、正面から堂々と飛び上がって落下してくるシンは陽光を背負っていた。

「逆光なればこのヒヨウの隙をつけると思ったか!!」

「隙だど? お前は正面から砕く」

黄金の羽ばたきがヒヨウの上空で煌めいた。

「ぐっ」

南斗獄屠拳の重圧に耐えられず、愛馬が膝をつく。

それを救う形でヒヨウが魔闘気を全開に放出し、馬を足蹴にして浮かび上がった。

空中でもみ合うように見えたものの、やがてシンの蹴りに押されていくヒヨウの背中を、ナガトたちは呆然と眺めていた。

落下していく二つの影が地面に激突する。

「ヒヨウ様!!」

煙幕は突風ですぐに晴れていく。

「け、蹴りひとつでヒョウ様を……あの固い岩盤の奥まで押し込むとは」

ナガトがかすれた声で呻く。

火山の噴火のような魔闘気が打ちあがる前に、シンは宙返りをきめながら離れた場所に降り立つ。

黒紫の噴火のなかでヒョウが滞空している。

鬼の形相でシンを見下ろしていた。

しかしそんな羅将の呼吸は乱れている。

遠距離の相手を撃ち抜く暗琉霏破あんりゅうひはの極意は精妙なものだ。

放たれた何本かのそれは気の練度が低下していたからか、南斗の龍の牙によってことごとく正面から砕かれた。

有言実行のシンの行動にヒョウが言葉を失う。

「……」

空中で砕かれた肋骨の部分の胸を抑え、ヒョウはようやくやくありえぬと怒号した。

「降りて来い、驚くのはまだ早いぞ」

人差し指で招くシンの挑発に、煽られた側が激昂して接近戦を仕掛けてくる。

「ぬああああ陽真極破!!」



だがその黒紫の気を纏う正拳突きは、シンによって手首を捉えられ、不発に終わる。流れていく魔闘気が遠くの地面に着弾して地響きを立てていた。

眉一つ動かさず、実の拳の使い手は捉えた相手の手首を放して言った。

「呼吸を乱した気脈など俺には通じん」

「若僧……！」

暗琉天破、暗琉霏破あんりゅうひはを封じられたヒヨウが屈辱のなかでぐふふと高笑う。

闇の気流を生み出していく北斗琉拳と、南斗聖拳を真に極めた者だけが会得できる、内に秘める気合が対峙する。

両者が同時に地を蹴った。

「うおうー！」

憎悪の感情に満ちたもの、深淵たかぶに昂るそれ、両者の拳の打ち合いは互角だった。

互いの握り拳から血が舞っている。

ヒヨウが一步踏み込んだ。

ブワっという凄まじい風圧でシンが後ずさる。

彼の両肩側面に、魔道の拳の奥義、陀紅奏闘斧だこうそうとうぶが炸裂した。

体内に魔闘気を送り込まれた側が、上半身の防具胴着を粉碎させられて爆風とともに

跳ね飛んだ。

「体内に入ったわが怨念の気にまかれて死ねい……」

吐き捨てるように言ったヒョウが口を開けたまま固まる。

受け身を取ったシンがぬん、と気合を入れると、注入したはずの黒紫の魔素は残滓のように細かく放出され、風に消えていった。

「じ、浄化しただと?!」

「お前に魔闘気があるように、南斗には気纏きせうがある……それは内にあつて実の拳の威を増し、それとともに肉体を守る。体への衝撃は抑えきれんが、操気そうきで体内から爆散させるような北斗の拳を封じている。俺を倒したくば直接じくじふ己の拳で体を砕くがよい」

魔界まかいの悉ことごとくを否定する相手が今度は自分から踏み込んだ。

うおおおと吠えたヒョウが無意識に構える。

それは魔道のものではなく北斗宗家の拳の型だった。

シンが踏み出した足を止めた。

強敵の背後に、ケンシロウが浮かび上がらせたものと同じ闘神の幻影があらわれたからだ。

## 十九話 宗家激突

「……今のは」

シンが思わず瞠目する。

充血したヒヨウの双眼が光芒を放ったとき、まんじゅまおんけん万手魔音拳、と意識の外で呟いた男の無数の指突が放たれた。

ソニックブームを生み出すほどの疾さだったが、パンという弾ける音と、ズシンという大地を揺さぶる音とともに、その凄まじい万の貫手は消えうせた。

「な、なんだあの拳筋は……ほっ北斗琉拳ではないのか?」

「ヒヨウ様……今の幻影は……」

ハゲの修羅たちが声を震わせるなか、ナガトは北斗宗家の拳だと確信しながらも、それを防ぎ切った南斗宗家の拳士の姿を窺う。

シンはすでに我に返っていた。

ヒヨウの両手首をつかみ取る彼の手はびくともしない。

魔相に戻った第二の羅将が動かぬと叫ぶ。

「俺に指突で挑むか、笑止」

「おのれ」

万手魔音拳を見切った男の手からは再度血が噴き出している。

それが偶然にもヒヨウの視界を塞いだ。

しかし彼はこの後の攻勢を予想しており、逆にシンの両手を掴み返し、その動きを封じていた。

「これで双方とも動けまい。これからは力比べ……」

傲然としたヒヨウの言葉は途中で途切れた。

「南斗天翔屠脚」  
てんしやうとくきやく

「なっ?!」

ゼロ距離から、下方よりヒヨウの腹から胸板まで一気に蹴り上げたシンが血煙とともに浮上する。

ヒヨウにとっては闘気を駆使せぬ肉弾戦など遠い記憶だった。

小癩など吠えながら滞空する相手に向かって飛び上がる。

魔人による闇の波動が繰り出された。

しかし狙いを掻き切ろうとした彼の爪撃は届くことはなかった。

「神陽翔破」  
しんやうしやうは

シンが空中で十字の型を示すように両手を伸ばしている。

その際、龍の牙による薙ぎ払いを受けたヒヨウの胸が一文字に斬られていた。

天翔屠脚で縦、薙ぎ払いで横、あわせて十字の形に南斗の拳を食らった魔人がもんどりうって転がっていく。

第二の羅将、魔界に入った程の闘神が初めて見る拳法の奥義に翻弄され、昏倒して動けぬのを、ナガトと腹心は震えて見守るばかりだった。

「南斗極聖拳……こつこのおれがまるで相手にならぬのか?!」

ヒヨウが歯ぎしりのあとで呻きを振り絞る。

しかしその台詞は妥当ではない。

ヒヨウの上半身は肌をさらしていたが、同じくシンのそれも砕かれ、互角に見える。

二人とも重傷だった。

「こ、これほどの男……カイオウ以外に存在しようとは」

「……ケンシロウの兄が魔界に堕ちたとあれば、俺はそれを止めねばならん」

「?! ケンシロウだと!」

うつ伏せで倒れていた北斗神拳伝承者の兄が肘について起き上がる。

「うぬはあれを知っているのか?!」

「わが友ケンシロウ。お前と決着をつけるのは奴だ。だが」

そう言いかけたシンが動きを止める。

再び宗家の幻影を浮かび上がらせたヒョウが頭を抑え、のたうち回るのを見たからだ。

「何故だ……うぬほどの拳士が友と呼ぶケンシロウ、なぜあやつはサヤカを殺した?!」  
その名を聞いて女だと理解したシンが何気に彼の前に膝をつこうとしたとき、ヒョウの目がとんでいることに気が付いた。

北斗宗家の血が覚醒する。

詳細はわからずとも、年齢に比して戦歴豊富な南斗の男は無意識に悟って後退していく。

「おおっ」

ハゲの部将たちが歓喜に沸いた。

「……………ふうう」

魔界を脱した、あるいはそれを超越した存在になった主は以前の彼を思い起こさせるような表情に変わっていた。

大きく息を吐いたそこに魔素はない。

双眼の光、長身を覆うほどの内に滾るたぎ気といい、准将ナガトはあれがヒョウ様の真の姿だと確信する。

この修羅の国でカイオウを倒すことができる唯一の拳士。

それが目覚めたのだと武者震いを止められず、距離を詰めていく二人を見守っていた。

「ナガト様、あれが魔人を倒す鍵とよばれる宗家の」

「おそろくな」

「ならばあの南斗とやらはもはや敵ではありませんな」

「……うむ」

羅刹の異名を持つ修羅が間を置いて答える。

部下たちが口にするのは確信ではなく願望であることを、歴戦の勇士であるナガトは知っていた。

「つつあ」

咆哮しながらのヒヨウの蹴りは、シンの膝受けによって防がれた。

実の拳を会得した羅将の一撃、魔闘気とは比較にならぬほど重い。

今まで以上に表情を歪ませ、馬鹿力め、とシンが毒づいた。

ヒヨウの気合の声が響く。

「カッ」

完全に吹っ切れた大敵に、出会ったときのような狂気の魔相はない。

手の甲で受け流しても骨が軋むほどの剛撃に耐えられず、シンが大きく飛びずさつ

た。

「なぜ引いた？ まだ撃ち合い足りんぞ南斗極聖拳！」

「……………こうでなくてはな、北斗の拳」

口元の血をぬぐったシンが構え直した。

残像が残るその掌底の揺れがふと停止する。

魔界を越えた領域に辿り着いた男は、それが奥義の発動の瞬間だと看破した。

「南斗千首龍撃」

ブシャツという音響を残し、千の龍の牙がヒョウに迫る。

だが覚醒した宗家の拳士は己の奥義、万手まんじゅまおんけん魔音拳を防がれたお返しとばかりに、相手

の両の手首をとらえていた。

「ぬう……………」

周囲に発生した轟音や地鳴りは北斗の剛拳と比べても遜色がない。

全ての拳威を潰せず、ヒョウの体には集中線のような傷が入っている。

「このヒョウの魔音拳より少ない手数だが……………威力は上か……………小賢しい若僧め。いいだろう、うぬに本物の閃光を見せてやる」

しゆるしゆるという音の異様な腕の動き、それは内に込める気脈のためか、魔闘気のように目に見える闇のものとは明らかに違う。



何かを察したシンが蒼白になりながらわずかに後ろに飛んだ瞬間、彼の目すら留まらぬ閃光が目の前に広がった。

「……?!」

今まで見たことのない軌道を描く光の拳。

シンがそう思ったときには、すでに己の胸が斜めから斬り裂かれていた。

「ぐっ」

鮮血が舞い上がる。

仰向けに倒れそうになったものの、シンはなんとかこらえて上体を起こした。

サウザーと戦ったときの絶望感が蘇る。

あと一步前にいたら即死だった、とシンは呟いた。

ハゲの部将たちだけではなく、ナガトですらうおとおと歓声を上げる。

北斗宗家の拳が恐るべき南斗の拳を撃ち破った、と感無量の想いで渦中を窺っていた。

「……」

利き手を握りしめたシンの拳から血が流れる。

「擾摩光掌。あれすら躲しおったか。だがしかしその出血、勝負はついた」

シンより長身のドレッドヘアの羅将が立ちはだかる。

禍々しさより神々しいという表現が相応しい存在の威圧を受けた男は、頬の傷を人差し指で弾いてから鼻を鳴らして構え直した。

「いい貫手だな。もう一度見たいものだ」

「……虚勢を張りおつて、次は逃がさんぞ」

間合いを詰めたヒヨウが今度は片手ではなく、双手による擾じょうまこうしょう摩光掌を突き放った。

終撃だとばかりの秘奥義の閃光、それが周囲を押し包んだ。

§ § § § § §

「ああああ?!」

見守るばかりの修羅たちが絶叫を放つ。

爆心地のようなそこは、シユウウと音を立て、煙が立ち上っている。

北斗宗家の拳士は膝をつきながら敵を見上げ、彼の指突を両手で挟み込み、なんとかその鋭鋒を防ぐことに成功していた。

「な、なぜとどめを刺すはずのヒヨウ様が……瀕死の相手の一撃を受け止めているのだ?!」

ハゲの部将たちの疑問に上司の准将が答えようとしたとき、ヒヨウが雄叫びのなかで

金髪の青年の突きを弾き飛ばした。

片手を地について反発に耐えたシンが立ち上がる。

「南斗天地破斬<sup>てんちへはざん</sup>。肉を切らせて骨を断つつもりだったが……そう容易く突き入れさせてはくれんか」

ファルコもシンに攻勢をかけたものの、極聖拳<sup>きよくせいけん</sup>の一点突破に対して不利を悟ったとたん、瞬時に防御に切り替えている。

一流の拳士の本能とはそういうものだろう。

肉を切らせたゆえにシンはさらに傷を受けていたが、戦いの帰趨はこれでまたわからなくなつた。少なくともナガトはそう感じた。

主の自失に近い声がする。

「信じられん……ほ、北斗宗家の最終奥義がうぬの片手ひとつに押し負けるとは……!」

「俺の南斗宗家の拳は俺より強い男たちと死合<sup>つちか</sup>つて培<sup>つちか</sup>ってきた実戦の拳、お前はようやく俺と同じ土俵に立ったにすぎん」

「……南斗宗家……」

「奥義で戦うのはこれまでだ。南斗聖拳の真髓を教えてやろう」

気纏<sup>きそと</sup>で金髪を浮かせながらシンが踏み込んでくる。

ヒョウが武者震いのなか高笑い、勢いよく腰を上げる。

今度こそ引く気のない斗の拳士たちが激突しようとしていた。

## 二十話

## 大言

黒王を駆る世紀末覇者の隣で疾走するのは、浅黒い肌の小柄な老人だった。

その背を追いかける中年の男、ウサが北斗宗家の家人けにんと名乗って主についてくる僧衣の背を見る。

爺のくせに健脚じやのうと毒づいた。

長距離の駆け足にも息一つ乱さない。

北斗の末弟の永遠の従者、黒夜叉。

北斗琉拳発祥の地、羅聖殿の守護者である。

そんな彼がラオウ様、と馬上の豪傑に呼びかけた。

「第一の羅将らいしょうについてはお頼み申します。ですがヒョウ様のことは」

「……兄弟の諍いさかいは当人のみでカタをつけるが道理」

手綱を握る男の沈毅な目が光る。

救世主に相応しいご威光だと思ひながら黒夜叉は言葉が続けた。

「御意。しかしながらケンシロウ様ともども、ラオウ様には泰聖殿たいせいでんに足を運んでもらわねばなりません。それは愛を知る北斗の男に課せられた使命。貴方が兄であるカイオ

ウを救う、とお望みであれば猶更でございます」

「碑文の解説、女神像の教え、か」

ラオウがそう独語したとき、村がある方向から巨大な気のぶつかりあいが見こえてきた。

ウサが飛び上がって渦中を窺う。

「拳王様、あれが第二の羅将では」

影の推測に北斗の従者が間違いないと叫ぶ。

魔界に入ったと思われる羅将とまともに戦える者など、カイオウやラオウ、すでに復活しているケンシロウ以外に心当たりはない。

二人の拳士の戦いが鮮明に映りだしたところで、黒夜叉が目当ての者の尋常ならざる様子に気が付いた。

「ヒョウ様……あ、あれは魔界ではない?! 北斗宗家の幻影を背負っておられる……そんなバカな、狂気のまま正気に目覚めたというのか!」

黒夜叉の驚愕をよそに、ラオウが口角を上げた。

「フン、若僧……金髪の若僧め……覚醒しているヒョウ相手にそこまで押し込むか」  
「あの男は一体?!」

黒夜叉の動揺は無理もない。

修羅の国に広まったはずの南斗の拳だが、その後のラオウ襲来により威名はかき消されていた。

かき消した張本人が標的との間合いを見切ったのか、不意に飛び上がって咆哮する。

「ウサー！」

「ははあ!!」

馬上の主が消えたあと、忠臣の小男が黒王号に降り立って手綱を取った。

黒夜叉が北斗の長兄の着地点を仰天しながら眺める。

「ぬうりゃ」

突き崩されようとしている黒髪と突き崩そうとしている金髪の間、ラオウが掌底を放ちながら降り立った。

ズズ、という重低音の後で岩盤や砂塵が一気に噴火した。

近くにいた准将と四人の修羅が衝撃破で弾け飛ぶ。

「ナガト様……!」

「あ、あれこそまさしく」

猛牛を模した兜、赤いマント、黒い胴着。

修羅の国の王を除いた誰よりも威圧感がある。

深淵から湧き上がる極大の闘気を纏いし彼の姿は、まさしく伝説の男そのものだ。

ナガトたちは一目でそれを理解した。  
立ち上がったラオウが腕を組む。

ヒョウが驚倒せんばかりに北斗神拳の長兄を窺い、シンといえはわかつていたように構えを解いた。

「ラオウ……!」

「お互いでかくなつた。久しぶりだなヒョウ」

シンを一瞥したラオウがケンシロウの兄と向かい合う。

「うぬが身命をかけて戦うは北斗神拳伝承者こそ。こやつではあるまい」

「……サヤカを手をかけたあれはいずれ必ず殺す」

「たわけが」

スン、という音が響く。

ジャブのような拳撃でヒョウが尻もちをついていた。

「う、おつ?!」

一瞬何が起こつたのか判別できなかつた第二の羅将が鳩尾を抑え、救世主伝説の該当者を見上げる。

「な、何をしやがつた、立てぬ」

「南斗極聖拳きょくせいけん。うぬが敵かなう相手ではない」



割つて入ったのはそのためだとばかりにラオウがうそづく。そして横顔でシンに対し撃肘せいちゆうするように告げた。

「ユダというぬといい、これ以上北斗狩りをするとこのならば」

凄まじいラオウの殺気に当てられ、シンが肩をすくめている。

すでにユリアを巡る争いは一段落しており、今の半死の状態で世紀末覇者と戦うほどの動機はない。

「ケンシロウの負傷は完全に癒えた。拳こぶしで語りあえば誤解も溶けよう」

「誤解だ?!」

ラオウの言葉で呆然としていたヒョウが怒りで肩を震わせる。

拳王を名乗る男の一撃は修羅の国の次将すら腰砕けにしていたようで、ヒョウはよめきながら呪詛を吐くばかりだった。

「数刻もすればその痺れは消える。ケンシロウを迎え撃つならば相応の準備を整えるがよい」

「ヒョウ様……羅聖殿にケンシロウ様が向かっておられます。貴方もそこへ」  
「琉拳発祥の地か……」

急な展開に混乱するヒョウを黒夜又は根気よく説得していく。

やがて時が過ぎ、ナガトたちに支えられ、ヒョウは洩々白馬に乗り上げた。

無念の形相でシンを睨みつける彼だが、この畏怖に値する南斗の男より仇を優先させたのか、部下の先導で彼方へと退転していった。

「ラオウ様。ここでわたくしめも」

「あの二人を任せる」

「この命に変えまして」

一礼した黑夜叉がヒョウ一行を追いかけていく。

あとに残るは拳王主従と南斗の男のみだ。

ラオウが黒王に跨りながらユダに尋ねたときと同様の質問を口にした。

「北斗琉拳。うぬはどう見て取った」

「……闘気を操るにおいては北斗神拳すら上回る。その道においては頂上拳ともいつて

ごと」

「うむ……」

他の斗の拳法をまだ知らぬシンと、それを薄々知っているかのようなラオウとは反応の温度差がある。

だがラオウにとっては表裏一体の拳法こそ真の敵であった。

どれほど他の強敵が現れようと、兄カイオウがいようとその認識は変わらない。

「お、おいコラ小僧！」



きたというもの」

そう呟きながらウサも続こうとしたが、見えない何かに弾かれたことで尻もちをついた。

「な、なんでじゃ?! 門構えが崩落しておるのにこれ以上進めんとは」

彼の台詞を聞いたシンが一步踏み出した。

そのとき何者かの気配を感じて振り返る。

恐ろしく壮大な魔闘気だった。

近くにいるような錯覚を起こすほどの魔素。

それを遠くから発しながら、黒王号に似た巨馬を駆る国随一の闘神がこちらにやってくるのが見えた。

「あああああ、あれはまさか拳王様の」

腰を抜かしたウサが崩れた壁際まで後ずさる。

シンといえば、凄まじい憎悪の気を纏った大敵にゆっくりと近づいていった。

大地が揺れる。巨馬から黒鎧の男が下りたのだ。

「狂乱のヒョウを鎮めたのはうぬか……南斗ごときがきやつとケンシロウとの相討ちを邪魔しおって……!」

第一の羅将が唾を吐き捨てかねない嫌悪感を示して吠えた。

「あまつさえ北斗宗家の秘拳、その封印を解き放つ弟の露払いつゆぼらいを担おうとするとは……小僧こぞう!!」

ひええというウサの叫びを背に、シンはラオウに酷似する大男との間合いを詰めていく。

「これ以上の北斗狩りはお前の弟が許さぬというが……奴が封印とやらを解く間ならば……倒してしまつてかまわんのだろう」

「言うたな小虫めが」

魔闘気が聖殿前の崩壊した闘技場を押し包む。

そんなカイオウの怒気を受けたシンは利き手を腕に、そうでないほうを下に、残像を見せながら構えだした。

「ヒョウに小細工を施し、目覚める前のケンシロウを亡き者にしようとする。お前は為政者であっても拳士ではない。拳士たるこの俺が策を弄するお前程度に後れを取ると思っているのか」

大言を放つ相手は修羅の国を統べる王だ。

これほどの強敵と相まみえるのは彼の記憶の中でもそうはない。死人と化す以外に勝機はない。

そう思いながらシンは魔人に打ちかかっていった。

## 二十一話 北斗の兄弟

「ふはは！ 魔界の入り口に触れたハン、浅瀬に浸かった程度のヒヨウとは違い、わが闘気は練れておろうが」

漆黒の鎧に身を包んだ魔人の声を聞きながら、シンは聖殿前の闘技場の石畳に叩きつけられた。

ジュウケイ、ヒヨウと戦っていないければ今の暗琉あんりゅう霏破ひはで即死していただろう。

かつてない衝撃を受けた彼が起き上がろうとしてよろめいた。

「立てまいが。そこで転がっておくがよい。それより」

聖殿の奥から光が漏れている。

解説中かと呟いたカイオウが建物に向かって魔闘気を放とうとしたとき、赤黒い魔人の気を纏わせた上腕を素手でつかんできた者がいた。

焼け焦げず、びくともしないその手の持ち主が言った。

「北斗宗家の受け技を継つぎごうとするラオウがそれほど恐ろしいか。腑抜けめ」

「踏み潰されたいようだな小虫い……!!」

奔流する魔闘気の圧でシンが身を引く。

その瞬間、両者の拳が火を噴いた。

「うぬ程度の貫手では……わが魔闘気でさえ封じる特殊鉄鋼でできた鎧を突破できま  
す」

金髪の青年の鋭鋒を受け流したカイオウが相手の胴体を撃つ。

標的の体を全て覆うほどの当たり判定、そんな赤黒い闘気に再び巻かれたシンが後方へ吹き飛び、レンガの壁をぶち抜いて崩れ落ちる。

魔人と呼ばれた男が地を蹴った。

瓦礫のなかの邪魔者にとどめを刺すべく掌底を放つ。

「ん？」

無数のレンガの破片がカイオウに向かって飛んできた。

それが黒い鎧に当たって落ちる。

第一の羅将の視界を遮るようなそんな欠片にまぎれ、やってきたのは南斗の強烈な蹴撃だった。

「小賢しい小虫め」

古強者に値する男が咄嗟に剛腕を振り上げる

相手の足首をつかんだカイオウが間髪入れずに蹴り返した。

「俺の蹴りを片腕一本で抑え込むとは、さすがにやる……！」

空中戦に敗れ、撃墜されたシンが砂煙を上げ、膝をついて着地する。

破損したプロテクターと胴着のなかから血しぶきが舞う。

「すでに破孔を突いている。そのまま散れい」

「?!」

バズンという音がして、シンの肩のプロテクターが完全に飛散した。

骨まで砕けたか、と低く笑ったカイオウが落下しつつ、標的へ膝落としにかかる。

しかし態勢を立て直した金髪の青年は、迫る巨体に向かって垂直に蹴り上げてきた。

圧殺しようとしたカイオウの動きが止まる。

「ぬうう……：砕け散りもせず、わしの押し掛かりにさえ耐えおるか……い」

カイオウがさらに目を剥く。

耐えるどころか、彼から見て非力な小男にしか見えぬ男は、自身の膝落としに対し、垂

直蹴りで徐々に押し返してきたのだ。

「悪あがきを」

魔闘気をさらに放出させ、その気圧によって打ち上げてくる南斗の蹴りをようやく振り

り払う。

みたび地に叩きつけられたシンだがすぐに跳ね起きた。

重低音を発して降り立ったカイオウが下を向く。



「……」

蹴りを受けた膝から肩口まで切り裂かれていることに気づいた。

おのが気を抑えるほどの硬質の黒い鎧。

それが他者によってここまで破壊されたことは過去にない。

「うぬ」

「魔闘気に感謝するのだな。あれがなければ今頃南斗天翔屠脚てんしよつとぎやくによって斬り裂かれている」

一矢報いたとはいえ、肩口を砕かれ、全身打撲のシンと鎧が破壊されたのみのカイオウとではどちらが不利か明らかだ。

先ほどから岩陰に身をひそめて状況を眺めているラオウ配下の影、ウサが震えながら呟いた。

「シンめ……奴は格上であればあるほど戦いのなかで強くなっていくぶつ壊れ野郎だ。どれほど絶望的な成り行きであろうとあの若僧の心を砕くことはできない」

斗の拳士たちがぶつかり合い、ウサの顔を光が照らす。

§§そのたびに圧倒されるのは南斗の男のほうだった。

§ § § § § §

ラオウが導かれるようにやってきたのは聖殿の地下だった。

すでに振動と轟音が天井から聞こえてくる。

兄のカイオウと金髪の小僧の気を感じながら、彼は黑夜叉から聞いた北斗宗家の秘拳の投げ所と思われる女人像の前に辿り着いた。

「宗家の血はヒョウとケンシロウ。部外者であるこのラオウではこの儀に見合わぬかもしれぬが……」

宗家の血族であるオウカという女性を模したそれにラオウが手を伸ばす。

伸ばしかけたとき、この国の救世主ともいわれる男は必然のように光り輝き、そして剥がれていく像の表面を意外そうに見つめていた。

鎮魂の塔と呼ばれるそこには、一見解読できないような文字が記されている。

ラオウはまたも無意識に詞宝林しほうりんという秘孔を自ら突いていた。

いつの間にか背後に近寄ってくる気配はもはや彼にとってどうでもよいことだった。

別の入り口からやってきたであろう宗家の永遠の従者に無言で促されたようで、その主人がラオウと並び立った。

§ § § § § §

地鳴りの残響が続いている。

聖殿とは正反対の方向の石柱に衝突して倒れたシンがピクリとも動かなくなつたこととで、カイオウがふうううと大きく息を吐いた。

体を覆う黒い鎧は所々に断裂の後がある。

羅将を誇らしげに象徴するマントはすでに跡形もなく消失している。

カイオウの表情は苦り切っていた。

たかが小虫にこれほどの手間をかけさせられようとは、屈辱以外のなにものでもない。

「無明灰燼殺……渾身の魔闘気をわが手で直接体内に送り込んだ……が」

舌打ちした魔人が無造作に暗琉霏破あんりゅうひはを放ち、倒れるシンを滅多撃ちにした。

灰燼と化した標的の周囲を確認した後で聖殿の半壊した正門へと向き直る。

「シンの野郎がまったく相手にならん……拳王様の兄とはいえこれほどの実力差があるとは」

毛のない頭頂部をさすりつつ、岩陰から渦中を覗き見るウサが首をすくめた。

南斗の極星でさえ虫扱いするカイオウからすれば、ウサなど路傍の石にすら値しない。

一瞥すらせず、修羅の国の頂点が正門を蹴り砕こうとしたときだった。  
「……………?!」

冷氣すら感じさせる気当たりを背中から受け、カイオウが振り向く。

同時に地鳴りが聞こえてきた。

その方向は地上ではなく地下だ。

「ハ、ハの光は」

カイオウの短髪が逆立った。

地下からの光の衝撃で石盤が噴水のように舞い上がる。砂塵のシャワーで視界は霧もやに包まれていた。

巻き込まれた形でウサが階下に落ちていく。

いつの間にか二つの影が浮いている。

極大の闘気が霧もやの中でも認識できた。もうひとつの影は長い髪を靡かせているのがわかる。

それらが交錯した。

双方が地に降り立つ。大きいほうの影が小さいほうの影に振り返る。

その姿を見た兄が弟の名を呼んだ。

「ライオウ……………!」

銀の短い頭髪、黒い胴着に深紅のマントを纏った巨漢がカイオウに視線を向けた。

「しばらく見ない間に悪相になったな、兄者」

ゆえあつて神顔しんがんの相になった男が肉親に迫る。

先程交錯した瞬間に、彼の拳王たる証である兜は吹き飛んでいる。

それは小さいほうの影によつて破壊されたのは明白だった。

「ラオウ」

兄はもう一度弟の名を呼んだ。

踏み進んでくるのはただの敵ではない。屑星と蔑称されたことのある琉拳とは違い、神拳の伝承者といつても過言ではない傑物と対峙することで、カイオウは無意識に武者震いを示しながら尋ねた。

「うぬのその傷は」

「ああ、これか」

双子のように似通つた男たちのなかで、顔に傷のないほうが目玉をぎよろりと動かし、背後の小さい影に対して、である。

二メートルを軽く超える彼らに対して小柄に見えるものの、長い金髪を靡かせる青年も百八十センチを超える長身だった。

それが渦中の二人に歩み寄ってくる。

「小虫め……」

苦々しげにカイオウが毒づく。

弟の兜を割り、両腕両足に裂傷を与えた存在は南斗獄屠拳ごくとけんと告げ、戦いを邪魔したらオウに対し、無言で抗議しているようだった。

した側が兄に向かいつつも背後の潜在的な敵に告げる。

「ヒョウを追いつめ、兄者さえ蹴り殺すつもりか。これ以上の北斗狩りはさせんとすつたはず」

「このわしが若僧を何度追いつめたと思っている。命拾いしたのはそやつだ」

「フツ……」

仏頂面が基本の拳王が薄く笑った。魔人のこめかみに血管が浮かぶ。

「懐かしいやり取りを思い出した。戦争前の稽古での話だ」

「ラオウにしては珍しい長い台詞だった。」

「小僧にとどめを刺すつもりがリュウケンに邪魔された。師父は奴に救われたなどほざきおつた。その当時は意味を理解せず、救ったのはこのラオウよと豪語したものだ……しかしあのとき続けていたら、オレは南斗の拳で死んでいたかもしれぬ。何が言いたいかというとな、我らはやはり兄弟だということだ」

最大限の敬意をこめたあと、ラオウが裏拳を背後に叩きつけた。

実の拳によって殴り飛ばされたシンが受け身も取れず石畳に転がっていく。

「秘孔、新壇中しんたんちゆう」

「むう……動けん」

「普段ならばうぬには当たたらぬだろうが……兄との死闘でいつものキレがなくなったよ  
うだな。それでもあの威力の蹴りを放つとは、悪魔の小僧め。わが言葉でしかその秘孔  
は解除できぬ。そこで兄者とオレの死合を見ておくがよい」

そう吐き捨てたラオウが前からの突風を受けて少し後退した。

これが魔闘気だとすぐに悟った彼は、頬に走る傷を受けたことも忘れて口角を上げて  
いた。

「ラオウく!!」

「カイオウ!」

両者がそれぞれの名を呼んだ。

## 二十二話 頂上決戦

地下に落とされた拳王配下の影、ウサがようやく地上に這い出てきたときに見たのは、彼の主とその兄が気をぶつけ合った瞬間だった。

互いに弾け飛ぶ。

身を守る防具も吹き飛んだ。

くすんだ金髪のカイオウ、暗い銀色の髪のアオウ。

それぞれの体を覆うドーム状の闘気の色も、闇のものと光とで明らかに違う。

「な、なんちゆう極大のほとぼりの迸りじゃ。かつて死合いの誓いを交わした者どうし、気合が尋常ではない」

冷や汗がとまらないハゲ男の視界に、ひびの入った石畳の上でしゃがんだまま動かないシンの姿が映った。

「ん？ おいこりや金髪の若僧」

「……」

「なんじゃ金縛りか。しかしのお……あの魔人にもう少し粘って食らいつくかと思うたが、わしの買い被りだったか……うおっ」



ウサの目の前で何かが霧散した。それは剛気のぶつかり合いで流れ弾のように飛んできた大きい石の破片だった。

衝突する前にシンが南斗練氣れんきつうは通波で撃ち落としたのだ。

「お、お主……もしやまともに動けるんじや」

「それこそ買ひ被るな。この場からは動けんが気合くらいは放てる」

「……とりあえず助かったわ礼を言うぞ」

意外に素直な中年の言葉に時間差で頷いたシンが渦中に向き直る。

カイオウが暗流天破を繰り出してラオウを無重力空間のなかに閉じ込め、暗琉霏破あんりゆうひはを炸裂させる展開を見守った。

「暗転の中でひれ伏せ、北斗神拳」

超重量の気を受けたラオウが地に叩きつけられた。

相手は小虫ではなく血を分けた弟であり、世紀末覇者として名を馳せる強敵だ。

シンとの戦いでは本気ではなかったとばかりな気を解放した彼が飛び上がり、とどめの拳を打ち下ろす。

「骨も残さず滅してくれよう……」

そう言いかけた彼が巨体を起こしたラオウの様子に言葉を切った。

弟の沈毅な双眼を見て何かを悟る。

「うぬ……あえてわが魔闘気を受けきったとでもいうのか！」

「闇にさまよい、憎しみにまみれた気術。まさに笑止」

バキン、という音とともに、ラオウを覆っていた魔人の闘気が消失した。

「北斗神拳の真髄を知り、北斗宗家の秘拳の教えを受けたこのオレにそんな見戯など」  
効かぬわと鋭く叫んだ弟が正拳を下から突き上げた。

北斗一点鐘いっぴんしょうと呼ばれる奥義がカイオウの上半身の黒い鎧を砕き割る。

「ぐ、おお」

弟からの衝撃を抑えきれず大きく後退したカイオウが壁に激突する。

「うぬれ」

修羅の国の王たる存在が屈辱のなかで吠えた。

腹立ちまぎれに背後の建築物を消し飛ばす。

さらなる狂乱の魔素がラオウに襲い掛かった。

しかしそれは標的の気に阻まれている。

「……魔界に堕ちたジウウケイがリュウケンに敗れた時点で理解しておくべきだったな。それとも同格の敵がないこの地で思い上がっていたか」

闇の気を阻む光のそれを纏いつつ、ラオウが厳おびかに告げる。

素肌の胸部を抑え、吐血しつつも、カイオウは泰然とする血族との間合いを一気に詰

めていった。

「うぬに封印を解かせたのはわが失態。だがゆえ……是が非でもうぬを倒さねばならなくなつた。情を超える踏ん切りがついたわ！」

大地が揺れる。

そのなかでラオウが宙に浮かんでいた。

ドーム状の闇の圏内で動きを封じられた彼に、黒い稲妻が突き抜ける。

北斗琉拳においても彼にしか成しえぬ絶技の名は暗魔真可極破あんままかきよくはといつた。

動きを封じていた圧力が解かれ、血まみれになつたラオウがよろめきながら地に降り立つ。

「漆黒の雷極だと……このラオウの防御を貫くとは、滾たぎらせてくれる。これが本氣になつたわが兄の拳」

「フン、あれで生き延びるか。拳王の異名は伊達ではないな。だがこれで負傷の度合いは五分と五分、死合はこれからだ」

両者が両手を組みあう。

互いに押し込めようとする際、気の上昇気流を生んでいた。

轟音と地鳴りは収まらない。天変地異のような竜巻のぶつかり合いが始まつた。

「なんてこつた。あ、ありやもう人と人との戦いじゃねえで」

岩にしがみついて暴風に耐えるウサが、派手な血しぶきを見る。

二人は頭突きで顔を見合わせていた。

それぞれの額が割れている。しかし出血した双方とも口角を上げて笑っていた。

「このカイオウにここまで泥臭い戦いを強いるとは、褒めて遣わずぞ弟よ」

口の中の血を吹きかける魔人が膝蹴りを放つ。

視界を塞がれた男は膝受けでそれを相殺し、組んだ手を解いて間合いを取った。

「フフフわが魔素を含んだ血を浴びおつたな。いかに光の気を纏いしうぬとて、その目はしばらく使い物になるまい」

第一の羅将は額から血が流れるのを拭き取りもせず気合を溜めていた。

「ぬうううおおお！」

ごうつという気の流れとともに、カイオウの雄叫びが響く。

ひとつひとつが砲弾に匹敵する程の剛拳を受け、拳王と恐れられる男が、ガードで対処する他に手はないほど滅多打ちにされていた。

「いついかん拳王様が」

大敵の凄まじい殴打の数々にウサが悲鳴を上げる。

防御態勢のまま押されていく主の体から気の纏いが消えた。

「ようやく気での守りが枯渴したか……いかにわが血を分けた兄弟とはいえ、北斗神拳

の使い手である限り容赦はせん」

「なぶ 戮り殺しの打撃音は止まることなく、聖殿前の広場に響く。

「いつ、この」

主人に殉ずべくウサが懐中の暗器を取り出す。その手を抑えたのはまたしてもシンだった。

「邪魔を」

「やめておけ。助太刀をするなら俺が入る」

「……」

暗器が地に落ちる。

打たれ続ける主を窺う小男は、腕のガードの内側にある彼が笑っているのに気が付いた。

「宗家の血を引き、母の愛を受けて継がれてきた北斗神拳が憎い……捨てられた側の琉拳がうぬらを恨むは道理であろう。創始者シユケンが生み出したもの……そのすべてを葬り去ってくれる」

振り下ろされる正拳が地を叩き割る。着弾し、爆裂していく岩石の破片で二人を見失ったウサが目を凝らす。

しかしシンには彼らの動きが見えていた。

「あれはラオウ百中の拳、無想陰殺」

シンが瞠目しながら告げた。

背後を取らせたラオウが無意識無想の蹴りでカイオウを撃ち抜いたはずだった。

「消えた……幻影だと?!」

「なぬ?」

シンの鋭い叫びでウサが飛び上がった。砂嵐はすでに晴れている。

「ぬるいわ。北斗神拳究極奥義といわれる無想転生すら破ったこのカイオウに、そのよ  
うな下等な技が通じると思うたか」

ラオウの剛脚を紙一重でかわ躲した魔人がそう吐き捨て、上げていた長い足を下ろす。

回し蹴りを食らったラオウが両膝と片手を地につけている。

うつ伏せに倒れ込むのをかろうじて堪えているようだった。

「け、拳王様が……両膝をつくなど」

「俺とユダすら瀕死に至らしめた無想陰殺……あの男、避けた際のひねりを加えて蹴り  
返すとは」

カイオウという人物の武才を知り、さすがにシンも武者震いを隠せない。

血に塗れるラオウを見下ろす彼の髪形が崩れている。

その額の上の部分にアザがあるのを、金髪の青年が確認した。

「あれは北斗七星……う？」

南斗宗家の拳を修めた者として何か感ずることがあったようだが、秘孔の効力で地に伏せられた状態の彼がそれ以上何か言うことはなかった。

「とどめだ！」

修羅の国の王が目をかつと見開いた。

視界を遮られた側は身じろぎもせず、兄の秘奥義を受け止めようとしていた。  
「せいみょうだんれつ凄妙弾烈」

ラオウの胴体に連撃が叩き込まれた。

闇の気でも雷極でもない拳を確信したシンは、浮かび上がるかつての強敵が血反吐を吐くのを見た。

建材を破壊しながら広場の端まで転げまわる世紀末覇者の姿に、見守るばかりのウサはもう声もない。

「致命の破孔を突いた。体を地に押しつぶされて死ぬ」

冷たく言い放ったカイオウが顔に走る傷に指を這わせ、一瞬だけ表情を歪ませた。

秘孔で立ち上がれないシンに暗い目を向けたときには、その顔は畏怖に値する笑みに変わっていた。

「打たれ強い小虫よ待たせたな。今度こそ滅し去ってくれる」

「おおおおい若僧！」

「下がっている」

狼狽するウサを後ろに突き飛ばした金髪の青年が、くすんだ金色の髪 of 魔人を見上げる。

最後に勝つのは悪だといわんばかりに両手を広げている。

「……ん？」

カイオウが動けない相手の手の甲に、南十字星の傷があるのを発見した。

指突ましんごうれっはの構えを見せる南斗の拳士を嘲笑いながら、北斗琉拳の剛掌破ともいうべき魔震剛烈波を打ち下ろした。



## 二十三話 天を衝(つ)く

血しぶきが舞う。

南斗の男からのものだ。

後方から見ていたウサは、打たれ強いあの若僧からすれば大した傷ではないと断定して別の方向を見た。

魔震ましんごうれつは剛烈波を正面から防ぐことができる者などこの世に存在しない。

そう思いながらもカイオウが不機嫌に首を振る。

同時に北斗神拳の奥義を告げる声を聞いた。

「北斗剛掌波」

カイオウとシンの間に闘気を撃ち放った男が瓦礫を無造作に振り払っている。

魔人ならぬ拳を駆使した修羅の王の驚きは尋常ではない。

「せ、凄妙で寸分たがわずうぬの破孔を突いたはず……なぜだ、なぜ生きている?!」

「一撃一撃が超ド級の連撃打。さらにその全てが疾風並みに速い。さすがは第一の羅将、われら三兄弟の長。このオレをここまで殴り飛ばすことができるのは貴方しかおらぬ。だとしても、だ」

「……」

「考えよ。なぜ無効化されたのか」

兄の前に立ちほだかつた弟が背後のシンを押し飛ばす。

「まさか」

己の両手を眺め、呆然から立ち直つたカイオウが独語した。

「女人像による北斗宗家の拳の受け技……」

「然り」

「……わしには伝授どころか手がかりでさえ与えてくれぬその像……またも北斗神拳がゆえにうぬは!!」

カイオウがうおおと吠えた。

広場が音響によつてまたも揺れる。

浅からぬ傷を負つたラオウながら、泰然とした様子は変らない。

さらなる狂乱ぶりを発動した兄を見た彼の目に浮かぶは、憐憫れんびんの情だつた。

「うぬごときがわしを憐れむな……! そのまなざしだけは許せぬ!!」

「……まだ氣ついておらぬ。それが情けないというのだ、カイオウ」

彼の額上部にあらわれた北斗七星のアザ。

それを注視するラオウが眉を寄せる。

未だ気づかぬカイオウは、誰に教えられることなく自然に身につけていたという不敗の拳の型を取り出した。

仏頂面のラオウがまたも白い歯を見せた。

「フ……」

「なおも煽るかラオウ！ それとも死の恐怖で狂ったか」

「手がかりさえ与えてくれぬ、だと？ これが笑わずにいられるか」

ズシンという音とともに、世紀末覇者が踏み出した。しかしそれは一歩で止まることになった。

女人像に刻まれていた北斗宗家にしか伝わらぬ構え。それを今一度確認したためだ。

無意識に誇示するようなそんな大敵を、ラオウが迎えうつ。

彼は円を描くように両手を回し、気合を溜めていた。

「ようやく防衛術を伝えられたオレとは違い、最初からその型を心得ていた兄者のどこが屑星だ？ 北斗神拳への憎悪など見当違いだとまだわからぬとは」

カイオウの不敗の拳とラオウの無敵の拳が互いの間合いに入った。

「天に滅せいラオウ！」

闇ではない気を纏った拳撃。

強烈という言葉でさえ不足に見えるほどのそれが、拳王と呼ばれる男の顔に放たれ

る。

「ら、ラオウさま」

ようやく絞り出したウサの弱弱しい声のなか、渾身の一撃をヘッドスリップで躲かわしたラオウが、兄の拳に対する答えのような奥義を発動させる。

「てんしやうほんれつ天将奔烈」

両の掌底を受け、カイオウが宙に浮く。

その姿はウサだけではなくシンの目にもスローに映った。

「ぬうおおお」

北斗宗家の気合技に耐えていたカイオウが堪えきれず、斜め上空に打ち上げられていく。

「うぬぬぬこのカイオウを……舐めるなよラオウううう!!」

空中にて雄叫びを上げた魔人が光の気の打ち上げを砕いた。

よろめきながら地に降り立つ。上半身の防具は全て破壊されていた。

ラオウと同じ状況になっている。

互いに血まみれだった。

息を乱した双方が静かに歩み寄る。

「今の……うぬの拳は」

「わからぬか。ならばもう一度言う」

不意の突風に負けぬ音量でラオウが告げた。

「兄者、貴方もオレも北斗宗家の血を引いているのだ……ゆえに宗家の奥義、ほんれつ奔烈を押し返すことができた」

「?!」

「北斗神拳創設者シユケンの従兄弟、リュウオウ。それがオレやトキ、そして兄者の血筋」

「……な、なにを」

女人像から伝承された遺言をもとにラオウが語る。

語り終えてなお呆然とするカイオウが我に返るまで、弟は兄を待っていた。

腰を抜かしたウサを横目にシンが呟く。

「今のラオウと殺り合えば俺といえどあの一撃で消し炭。それに耐えきった奴め……最強の男に張り合える唯一の存在として目覚めたか。いや……ラオウが目覚めさせたのか」

「クククそうかそういうことか」

喉の奥で笑うカイオウが伏せていた面を上げた。

だが湧き上がるのは静かな気の奔流ほんりゅうであつて魔闘気ではない。

いつの間にか魔人の極意である暗気あんきは消えている。

「ようやく合点がいったわ。北斗宗家の伝承者となるべき資質を持ちながら琉拳へと追いやられたわれらが代々の血統……わしだけが闇に迷つていたのではない。リュウオウから始まる血が怒り狂つていたのか」

「カイオウ」

恨むなら北斗神拳を修めたわが身を打つがよい。

神気しんきに包まれるラオウがそう言いながら両手を広げていく。

「だが……歪んだままの貴方をこのままにしておくわけにはいかぬ。宗家の秘拳を得たわれらは寸分たがわず互角。ならば」

ラオウを覆つていた光の気が消えた。

すでにカイオウも闇を纏つてはいない。

二人の間には聖殿の前に吹く風の音だけがあつた。

「受けてみよ、わが全霊の拳を」

§ § § § § §

「お、おっおいシン。わしは何か幻影でも見ているのか、あの二人は」

「……まるでガキの喧嘩だな。俺の目にも幼少期の奴らが殴り合っているようにしか見えん。兄への敬意やら情愛を感じられるラオウの姿……まさしく北斗神拳の真髓を物語っている」

ウサの感慨を耳に、シンは眩しそうに渦中を眺めている。

この世においても類を見ない気の持ち主だち。

それを操るでもなく奥義でもなく、彼らはただ実の拳のみで撃ち合っている。

かつてユダに拳法とはかくあるべし、と贅辞を贈ったシンは、今回もその心情に至るのだった。

「うぬに拳を教えた身として一日の長がある、おうりや」

「ぬうう」

兄の手刀打ち下ろしを食らった弟が地に触れ伏す。

しかし地盤を砕いて沈むことはなかった。

肉体のみを打つ拳は、肉体のみダメージを与えている。

かつてのカイオウなら倒れた者の後頭部を踏みつけていただろう。

だが彼は立っていると告げたのみで、ラオウが起き上がるのを待っていた。

「いかに魔人として拳を奮おうと、憎悪と狂気で武威を増そうと……そなたの心体を挫くことはできません。ならば拳士として小細工無用の打ち合いでうぬを圧倒してやろう。このカイオウ、伊達に北斗の長者を名乗っておらぬぞ」

「……わしの全霊を上回るとは小気味よし」

肩に打撃を受けたラオウがそれをかばいながら起き上がる。

拳法の極意に至った者どうし、恐ろしく地味な光景ながら誰にも割って入れぬ無我の境地が展開されていく。

「兄者の不幸には同情している」

「何をほざくか、劣勢のうぬこそ」

肘撃ちをくらったカイオウが仰け反った。仰け反りながら蹴り返す。

どうやら蹴術はカイオウのほうが上手のようだ。

「不幸とは……血などではない。その環境だ。琉拳へと追いやられたことでもない」

「なにイ?!」

「オレの全霊の拳にすぐさま対応できるほどの天賦の才。現時点で貴方に匹敵するものはおらん」

ラオウの拳が迫ってくるカイオウの拳と激突した。

二人とも相譲らず、拳で押し相撲をし始めた。



「貴方の不幸……それは己より強い男と戦つてこなかつたことだ。オレは……オレを超える者たちと殺り合い……そんな戦場で生き残つてきた」

ラオウの台詞はヒョウと戦つた際のシンの言葉とほぼ同じだった。

その間にも血が吹き上がる。拳をぶつけ合う意地の張り合いに優劣が出始めた。

「うぬ……！」

「わが先を行くは先代リユウケン、聖帝、赤い衝撃……そしてその金髪の若僧。ただひとりを除いてすべて南斗の拳士であることが無様でならぬ。そしてケンシロウ。兄者に敗れたが……生き残つてさえいれば、のちに必ず兄者を超えるであろう。それが北斗神拳」

「ほ北斗神拳がゆえに……しかし、しかし南斗ごときに劣るとほざくとは」

「もはや時代は変つた。兄者も戦つたという赤毛、南斗紅鶴拳のユダ……あれは同格どころかオレや貴方すら超える異才だ。そしてそれを認めるとき、初めてあの小賢しい鶴を凌駕するかもしれぬ全霊の拳を得た」

「情弱なことを!!」

カイオウが押し返した。両者の拳から再び血が舞った。

「どうおあ」

「ぬおお」

同時に兄弟が拳を引く。そして彼らは貫手を相手に突き入れた。「俺の目の前で指突だど？ 小賢しいのどちらだ」

思わずシンが毒づくほど凄絶な相討ちだった。

秘孔と破孔を突くなど思いもよらぬ彼らが鮮血に塗れ、互いに口角を上げて言った。「こうなれば喧嘩好きなうぬの酔狂にとことん付き合つてやろう。意地の張り合いなら負けるわけにはいかなあ」

「ふ……血の気が多い貴方が言うか」

今のカイオウには憎しみも歪みもない。

そんな感情はラオウの全霊の拳によって吹き飛ばされたかのようにだった。

そしてそれはラオウにしか成しえぬことであつた。

修羅の国の救世主と喧伝したカイオウの目に狂いはない。そう思わせる成り行きだった。

拳撃などという格式の高いものではない。シンの言う通りガキに戻つた男たちのただの殴り合いが再開された。

「宗家の秘拳は最強ゆえか受け身すら極められている。つまり同程度の才を持つ者同士が戦っているのが今の状況だ」

「フン」

ラオウがうつそりと口を開く。カイオウがそれを察し、打ち込まれた弟の拳を流して身を引いた。

「まだ拳こぶしで語り尽くせぬか。我らは業が深い」

拳王を名乗る男が傲然とうそぶく。

「ただの兄弟げんか。こうなれば北斗の枠すら必要あるまい。もはや宗家の血ですらクソくらえというものだ」

弟の台詞を聞いたとき、魔人と恐れられる男が会心の笑みを浮かべていた。

「フッフ女神像から教えを受けたうぬがそこまで言うか……北斗の壮大な伝承すらわれらの争いの下か」

「ゆえに、だ。兄者の憎悪はくだらぬと断定できる。そうであろう、オレは幼き日に貴方を超えるという宣言をただひたすら実行するのみ」

「フハハ大言を！ あの言葉をまだうぬは」

大仰になりそうな展開を身内騒動に収めたラオウ。吹っ切った表情で高笑うカイオウ。

傑出した二人の拳士を見守るシンは、そのやりとりに感銘を受けながら隣にいるウサの肩を叩く。

拳王の忠臣である小男は泣いていた。

「あれが素顔のわが主……皮肉なものじゃ。北斗神拳の長兄、世紀末覇者を名乗っていた頃よりも今のお姿のほうが遥かに神々しく見えるとはのう。まさしく戦神じゃ。そして互角に渡り合うカイオウもまた」

互いだからこそ力を最大限に引き出せる。

シンもウサの独語に頷いていた。

ユダがラオウに告げた私なら倒すだけで終わる、という台詞を金髪の青年は知るはずもないが、ラオウ本人は現存する最強の拳士の断言を今ようやく噛みしめているところだった。

（ユダ……赤い衝撃め。あの赤毛めが。今のオレの力を以てしてやっとなり理解できたわ。強くなればなるほどあやつが遠ざかる。兄者をただ倒すだけでは意味がない。兄の心を掬い、そしてその歪みを絶つ。血を分けたオレにしかできぬこと）

目を見開き、牙を剥くラオウにカイオウも吠えて応じる。

それぞれの頬に一撃が入った。食いしぼる歯の間から血が流れだす。

しかし彼らは結界のなかで戦っているかのように、互いに引かなかつた。

「うぬのその拳圧……闘気に頼らぬ実の拳、なんと心地よきことか」

「その境地に一日で至る貴方こそ……北斗神拳を得ていれば、この国だけではなく世界を覆う救世主となれたであろう。貴方を仰いで我ら神拳の四兄弟、馬車馬のように働い

たものを」

「世辞をほざきつつその意気や天を衝く。フハハいいだろうこの一撃で終わりにしてくれよう！」

深淵から湧き上がるラオウの気合は、ただ全て利き手の正拳に込められた。

カイオウの打ち放つ掌底に向かつて放たれたそれは攻防一体の兄の手のひらを貫通し、再度修羅の国の王の顔に拳こぶしを叩き込むことに成功していた。

## 二十四話 帰国

「シンー」

「ケンシロウ」

北斗宗家の血を引く宿敵が馬を駆って泰聖殿前広場にやってくるのが見えた。

下馬したケンシロウが後ろに騎乗しているヒョウを気づかいながら周囲を見回している。

健脚の従者、黒夜叉が追いついてきたようで、主に変わって馬に乗り上げ、重傷のヒョウを支えていた。

「兄弟げんかは終わったか」

「……ああ」

ラオウと同じく女神像からの秘拳を会得したケンシロウは軽傷だった。

それに比べ、満身創痍のヒョウがシンを見下ろして尋ねた。

「あの二人が見当たらぬ」

「魔人の先導でとある場所へと立ち去った」

「……まさかカイオウは」

せき込むヒョウにケンシロウが駆け寄る。それを制止して第二の羅将が口元の血をぬぐって言った。

「魔性の沼。カイオウの……そしてラオウの母が眠るといふ彼らにとつて聖域に「うむ」

シンは彼方へと視線を向ける。

「ラオウはウサという影と黒王号を連れて行ったようだ」

「置き去りか」

真顔でそう告げるケンシロウだがこれでも彼にとつては軽口である。

疲労の色がある金髪の青年が空を見上げたあとで答えた。

「奴ら兄弟の約束の地。俺はともかくお前たちは部外者ではあるまい」

ケンシロウが眉を上げる。正統伝承者の永遠の従者である黒夜叉が主を促している。

ヒョウといえは咳き込むのをやめて、因縁の相手を一瞥してから馬首を返した。

「我らはカイオウが選んだ死地へと向かう。南斗の若僧」

「傷が全快したらいつでも相手をしてやる。しかし俺がもうこの国にいる理由はない」

不機嫌そうなヒョウの台詞にかぶせるようにシンが告げ、彼も背を向けた。

「シン、オレがサザンクロスに帰還するのはしばらく後になる。ユリアを頼む」

宿敵の言葉に足を止めた彼がその必要もあるまいと呟く。

それを聞いていかなかったのか、ケンシロウの掛け声と馬蹄の音が遠ざかっていった。

§ § § § §

§ シンは再び荒野を歩いている。

観戦していた彼にはラオウとカイオウの戦いの行く末がわかっていた。

それほどまでにあの展開は決定的だった。

あれ以上は弟にとって兄への私刑に他ならない。

しかし歪んだ己の始末をつけると宣言したカイオウの意向を無下むげにするようなラオウではない。

ウではない。

「誰にも恥じぬ負けがある、か……」

風が鳴いている。

カイオウの背中を見送ったとき、シンはサウザーという快男児を思い出していた。

拳こそ言葉という実証を身をもって知る彼だが、ラオウも兄から去り際の何たるかを

学ぶのだろう。

あの死線を超えて自分は強くなった。



ゆえに拳王と呼ばれるほどの男がさらに高みへと達するのは明白である。

シンはケンシロウやラオウに敗れる自分が容易に想像できた。

「それもまた良し」

もはや死人ではない彼が独語する。

そんな思いをはせながら東に向かつて進んでいくうちに、拳王の紋章を掲げた部隊と遭遇する。

ラオウ伝説に沸き立つ各地の反乱を支援、既存勢力を駆逐して大軍となった兵团を率いる大将の名はヒルカ。

ひよろ長い体躯のモヒカン男は悪人顔だったが、それでも覇者の忠臣として知られる拳王軍の重鎮だった。

四輪駆動の上で芝居がかったようにマントをめくりあげた男は、やたらと偉そうに話しかけてきた。

「シンか。お前の拳法と名はすでにこの修羅の国に轟いている。カイゼルを倒し、バルコムを破り、第二の羅将ヒョウを圧倒する。われらが救世主を支える僕しものひとりだとな」

いつのまにラオウの配下のような噂の広まり方をされていたのか、金髪の青年には覚えはなかつたが、目の前にいる薄い顔立ちの親衛隊長がそう手配したのだろう、と即座

に思った。

諜報、謀略といった類の情報戦に長け、兵の統率においてもザクやバルガなどの将軍に劣らず、さらに泰山妖拳たいざんようけんの達人である。

世紀末覇者の手駒のなかでも使い勝手が最もよいとされる、知勇兼備の人傑だった。

「もはやこの動乱の帰趨ききうは明らかだ。逆にきな臭くなっているのが我らが本国。ゆえにリュウガやジャギ、他の将軍たちはそれぞれの部署に置いてきた」

「……」

「すでに赤い衝撃は父祖の地ブルータウンに帰還しようとしている。うぬもサザンクロスに戻り、慈母の星の守りに就くがいい」

火急の事態かとシンが尋ねる。

暗部を統括する長身のモヒカン男は、帝都から修羅の国に逃亡したというビジャマなる者の情報をすでに得ており、その人物が再び大陸に舞い戻ったと告げてきた。

「お前も知っている通り、裏元斗の拳士ビジャマは帝都の争乱の元凶。バトロ、アスラといった同胞を伴い、手薄になった本国にまたも災いを呼び込もうとしている」

「災い？」

「他の斗の拳。その使い手と手を組んだ」

「他の斗……北斗の分派か」

「それもある。しかしそれよりゆゆしき事態なのは、古いにしえの拳法が西より来たることだ」  
その名を聞いたシンが思わず目を見張る。

「西斗月拳。北斗神拳抹殺を拳けん是せに掲げる月氏の拳法。北斗の分派、裏元斗、それらの動きをラオウ様不在のまま止めねばならぬのだ。祖国を立て直すわが主はもとより、ケンシロウでさえしばらく帰還できん。極星や妖星といった南斗の双璧に希望を託すしかない状況だ」

幾人もの諜報員を抱えるヒルカならではの地獄耳に、シンは声もない。

「状況は流動的でわしでさえその先は読めん。わかっているのは拳王領はともかく、孤島のサザンクロスは目下無事であるということだけ。今後の成り行きによつてはわしが本国に引き返す場合もありうる……とにかく応変に立ち振る舞うことだな、南斗の光明。慈母の星のために」

俺様目線で指揮棒を振るラオウの親衛隊長が行くぞ、と全軍に告げた。

砂煙を上げ、機動部隊が進軍を再開させる。

何気なく見守るシンに声をかけてきた者がもう一人いた。

北斗琉拳の使い手、羅刹を名乗る銀髪の青年だった。

隊列の中にいた彼がバイクから降りてきてシンと向かい合う。

「お前とユダには世話になった。タオとレイアはわが師ジュウケイに保護されている。

おれはこのままラオウ軍に身を投じてこの国を立て直す一兵卒となるつもりだ」  
シンもまだ若いシャチはさらに若い。

男の顔になったと思いがながら南斗の拳士は北斗の拳士と握手を交わす。

「それと……アンタの知り合いのあのそばかす。先に帰還したようだが」

「ゲンジユだな」

「次に会うときはもう少し腕を上げておけと伝えておいてくれ。思い上がるにはまだまだ未熟者、カイオウすら翻弄する赤い衝撃が主とて、己の力と勘違いするなとな」

なんとも表現しがたい表情のシンがそれでも領いて、言いたいことだけを言い切つて走り去るシャチの背を見送つた。

§ § § § § §  
修羅の国から戻つてきたシンをサザンクロスの港で出迎えたのは配下のジョーカー  
やレストイエだけではない。

波止場から荷下ろし場、城門前に至る間に天帝の子ルイ、弟子のレンや五車などの護衛を連れた南斗の象徴、その影武者まで姿を見せたことは彼にもさすがに予想外だった。

シンが小舟などを使って自力で渡海してきた間に、かの地の状況は慈母の星の物見によつてすでに把握されていたようだ。

五車の長リハクの説明で逆にシンが修羅の国がどうなったか知ることになる。

「救世主ラオウが魔人カイオウを辛くも下し、新たに国を建てることになった。ケンシロウと和解したヒヨウが統治者として君臨する。ラオウはひとまず生存していた妹サヤカをヒヨウに嫁がせて故国を任せ、連れてきた軍団ごと帰還するつもりようだ。無論ケンシロウ様も」

「そうか」

軍人でもあり政治家でもあるリハクが色々語っていたものの、堅苦しい話は野暮といわんばかりに娘のトウが風と炎を両脇に、父を隊列のなかへ引き戻していく。

ようやく話ができるといいたげにやつてきたのはストリートロングの黒髪を持つ美貌の持ち主であり、それに劣らぬクセツ毛の黒髪の女だった。

万感の思いでおかえりなさいと告げてきた幼馴染と拳の弟子に、シンが無言で頷く。

「あれ以来、今まで顔を合わせる機会もなかった。貴方には今までどれだけの辛苦を与えてきたのかと、ずっと」

「ねえシン。こうしているとどちらが本物か、ほとんどの人がわからないって思うんだけど」

思いつめたように何か言いかけるユリアを制し、マミヤがどや顔で告げてきた。

ルイとレンを眺めつつ、シンは確かにと無難に答えたものの、言葉を遮られた側のほうは美しい眉をひそめている。

似たような顔立ちの彼女と言えば、いたずらっぽい表情で金髪的美男子を覗き込むようにして近づいた。

「シンは……ユリアさんのために死ぬのは当然よね」

「? ああ」

「影武者のあたしも成り行き次第で命を落とすことになる」

「……」

ユリアは珍しく怪訝な顔で双子のような存在を見つめている。

「もしそうなら少しくらい弟子を褒めてくれてもいいでしょ?」

「何を……」

やたらと兄に馴れ馴れしい女の行動に妹が手を伸ばしかけたときだった。

「?!」

南斗の象徴の影武者のクセっ毛が風で揺れている。

彼女は背の高い金髪の青年の首に両手をかけ、額と額をつけるまでに距離を詰めていた。

「なっ」

リハクの娘トウの驚愕の声がある。

謹厳な父がゴホンと咳で牽制するも、そんな行動を起こした大胆な女はしばらくその状態を維持し、無言のなか本物と睨みあいを開始した。

風のヒューイと炎のシュレンも呆気に取られて固まっており、城壁の上から座つて見下ろすジユウザのみが口笛を吹いてやるねえと囃し立てていた。

「シン」

氷点下の声色で妹が兄を呼ぶ。

我に返った彼が本物に劣らぬ美貌の持ち主の両肩に手をかけ、そつと引き離れた。

マミヤが唇を舐めている。

それを確認したユリアが柳眉を逆立てて二人の間に割り込んだ。

「シン？」

もう一度名を呼ばれた男が無表情で首を振る。

ラオウとカイオウ同時に相手にするより心胆を寒からしめる展開になったものの、冷淡に見える美男子の様子に、ユリアだけではなくマミヤも心情を害したのか、なんだその反応はと怒り出す。

拳ひとすじで生きてきたシンにはそういった女心はわからない。

双方がなぜ不機嫌なのかわからず、そして女の扱いに慣れていない風や炎からも無視され、リハクからチャラ男めという無言の威嚇を受けるに及んで後退していく。

「シン様」

天帝の子ルイが衛将の名を呼び、彼の手を引つ張った。

救われたようにシンはどうしたとひぎを折る。

盲目の美少女はにっこりと笑っていた。

そして金髪の頭を引き寄せ、標的の頬へと唇を触れさせることに成功していた。

今までのやり取りが見えていたのかと言わんばかりに周囲の面々が驚くなか、ひとりだけ無言で俯いている少年がいる。

「どうしたレン」

茶髪を震わせる弟子が師の呼びかけに面を上げた。

シンを指さし、決闘です先生！ と荒ぶっている。

当人はレンの激昂にとまどい、しゃがんだまま上を見上げてユリアとマミヤを窺ったが、それらはそれらで睨みあつて一触即発の状況であり、こちらを顧みるつもりはないようだ。

リハクやトウ親子のジト目、ヒューイシュレンの犯罪者を見るような表情を確認するに及んで、シンは久しぶりの死人と化した。



「死んだ魚の目をしてやがる。ざまあみろよモテ野郎が。あんな小さい娘を女の顔にさせやがって死ね。今すぐ死ね！」

城壁の上からジュウザが大声で毒づいている。

同じ兄という立場ながら、雲は象徴にあのような嫉妬を受けた覚えはない。

収拾がつかなくなった眼下の様子を一瞥した彼が、紫色に染まっていく空を眺めて後ろ手をついた。

「フン、色々あったが一件落着か。ともあれラオウやケンシロウ、騒動の元凶どもがいずれ戻ってくる。また面倒ごとが増えそうな予感がしてならねえな。雲のように自由にさすらいうことができるのはいつになることやら……」

### 第三章 大陸内乱編

#### 一話 斬り倒す者

ここはかつて拳法の総本山とされていた。

斗の拳は全ての徒手武術の頂上拳。

それを統合し、象徴と規定された天帝を擁し、最側近の元斗、都の六つの門を守る南斗、最強ながら一戦車として最前線を任されていた北斗神拳。

そんな大都の栄華も過去の話だ。

半壊しかけの薄暗い大聖堂の段差に、ターバン頭の人物が首を垂れて座っている。

丸眼鏡の彼に日頃のにへら顔の面影はない。

思わず舌打ちをした後、背後に立つ黒いワンピースの胴着の男に毒づいた。

「クソつたれが。わしらが再建した帝都を荒廃させやがってどういふつもりだ」

「なんのことだ？」

「とぼけやがる……しかしここを守っていたのは元斗の將軍たち、有象無象な輩に追いつかれるほど弱くはねえ」

「わが部隊を蹴散らし、このわたしに傷を負わせたほどには手練れだったよ。ゆえに本

気で相手にならざるを得なかった。この崩壊は予期せぬものだ」

黒いイスラム帽ようなものをかぶった金髪の男は、長身を揺らして薄く笑っている。「ファルコ、ソリア、シヨウキ。北斗南斗との戦いで奴らが負傷中だったのが幸いだつたな。本来お前ごときに遅れをとる元斗ではない」

「フフフそういうことにおけ」

負け惜しみのターバン男、ビジャマの台詞を鼻で笑った帽子の金髪男が口角をあげた。

「さてもさても……西より来る刺客ども、天より降り立るわれら、双方を呼び込もうとするそなたの気宇の大きさは褒めてやる。ついでに仮面の使徒の数体を中原に向かわせた。さらなる混乱は望むところであろう」

「なっ?!」

お、おま、とどもりながらビジャマが振り返って言った。

「い、今の時点で西の奴らと遭遇させるわけには」

「使徒は影、風のように現れそして去る。来るべき創生のために今は無駄な衝突はさけておくよ。あくまで優秀な検体が欲しいだけさ。神たるあのお方のために」

「……」

あまりに異質すぎる男の妖気に当てられ、ビジャマは言葉を失くす。

いつの間にか氣配を消した相手の方向に唾を吐きかけ、彼は同門のバトロやアスラに合流するために聖堂を後にした。

§ § § § § §

修羅の国で制圧の任務についているはずの拳王親衛隊の隊長、ヒルカの言葉通り、本国は各地の武装集団の蜂起により混乱の状態にあつた。

ユダ、ラオウといった強力な権力者、救世主ケンシロウも未だ不在。

そのためか手あたり次第に集落を襲う輩が増えた。

水が豊富だと噂されるとある村に野盗の群れが襲い掛かったのも当然の成り行きだった。

しかし狼藉を繰り返す者たちに天罰が降りかかる。

ただの村人ではとても対抗できないようないかつい荒くれ者たちだったが、この地にいる何者かによつて斬殺され、そのほとんどが屍を荒野に晒すことになった。

ただひとり生き残つたのは偵察を任務とする健脚のモヒカンである。

「あ、あんなのがいるって聞いてねえぞありえねえ……全員が一瞬で輪切りになりやがった」

村との距離を取り、ようやく一息ついたばかりの痩せ男が村とは逆方向に目を凝らす。

地平線の向こうから進み来る異様な集団の存在に気づいたためだ。

「んな……ナニモンだありや?!」

「禍々しい仮面、人というより獣の風体。世の常の者ではないな」

「え? ああああ、てめ……いやアンタ」

「下がっている。どうやらお前からモヒカンとは次元が違うようだ」

いつの間にもここまで追ってきたのか、水色の長い髪の拳士がそう言いながら、やってきた数体の仮面と対峙する。

修羅が使用する仮面とは趣が違い、目を覆うものや口元を覆うものなど様々な形態があるようだが、渡海していない彼が知るよしもない。

「……何者かは知らぬが」

ヒョオオオオという効果音を発しながら男が両手を広げていく。

それは南斗水鳥拳の構えだった。

「悪意を持ってわが村に立ち入ろうとする者は死ぬぞ」

「なるほどおファン・デル・コール様の仰るとおり名のある使い手がいたか。フン、いけ好かねえハンサム面だなあそのツラあぶつ潰してやるぜ」

「口ほどに体が動くか見てやろう。御託はいいからかかってこい」

餓狼時代を思わせる笑みを浮かべながら、レイが矛を振りかぶってくる巨漢を迎え撃つ。

はや！ という気合の声で一人目の仮面が六花八裂に散っていった。

§ § § § § §

サザンクロスを守りをトキや五車屋に任せたシンが、配下のジョーカーや女拳士レス・ティエを伴って城を出る。

その見送りに無理やりついてきたのは慈母の影武者の女だった。

「修羅の国から戻ったばかりなのに休む暇もない。大陸が内乱中だとしても働きすぎよね、貴方は」

「ルイ様やレンもそう言っていました」

青白い頭巾をかぶった影の女がもつともだと大きく頷く。

クセつ毛の黒髪を風に靡かせた美女、マミヤは胴着の下の包帯だらけなシンを痛ましそうに見つめている。

「……両親の村にはレイやシユウがいるから心配してないし、だから本当はついて行きたいんだけど」

肩をすくめる無骨な恰好の女は、無言のシンのまなざしを受けて目を細め、いたずらっぽく微笑んでいた。

「しょうがない、帰ってきたらまた労ってあげよう。この前みたいにね」

「この前ってアレですか？ ……ユリア様からも言い含められています。キスなんて許しませんよ！」

「レスティエもすればいいじゃない」

「はっ……え?!」

マミヤの軽口に謹厳な娘が呆気にと取られて黙り込む。

何か考えている様子のそんな部下を横目に、目つきの悪い痩躯の男が主に問いかけた。

「本国と言っても広い。とりあえずの行先はどこになさいます?」

「帝都」

簡潔すぎる金髪の青年の答えに、死神は争乱の元凶ビジャマを捕らえるつもりだなと察し、一礼して了承を示していた。

§ § § § § §

異様な風体の敵を一掃したレイが静かに息を吐き出した。

砂煙のなか、彼らの亡骸を見下ろした南斗の若い勇将は頬、肩、脇腹に走る裂傷に指を這わせ、不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「たかが十人程度の敵にこのおれがここまで傷を受けようとは……六星の名がすたる」

それにしても、と呟き、村のほうにとつて返した彼は「てんと」と名乗る仮面の集団の捨て台詞を思い出していたが、そんな思考は不意につんざいた轟音で中断された。

村の出入り口のバリケードを破壊した何者かが内部に侵入していく姿を見たからだ。

悪い予感しか覚えない。

レイは髪を逆立てながら、先ほどの仮面どもとは違う雰囲気のもの、まるでマフィアのようなそんな連中の背を追いかける。



「なんだえてめえはー」

大小さまざまな身長の黒い服装のマフィアたちは、音もたてず姿を現した水色の髪  
の男を威嚇する。

「あわびゆ」

煽りの返事とばかりに数人の黒服の首が飛んだ。

さらにここは通さんと言いながら鉄杖を打ち込んでくる巨漢とすれ違い、標的を千条  
斬りにしたレイが地上に降り立つ。

マフィアの本隊が視線の先にいた。

リーゼントの髪、顔に傷のある中年の男が首領ということはわかった。

長衫ちようざんというチャイナ服を着た首領の名はトテンプウ。

その中年太りは数人の手下に村の女子供を捕えさせ、目の前の盲目の敵に膝をつかせ  
ている。

「シューー！」

「レイか……済まぬ。アイリヤシバが奴らの手に」

帝都に対するレジスタンス部隊を率いて連戦し、元斗の將軍との決戦で受けた傷が未  
だ治りきらない同僚が、肩から血を流しながら俯いている。

仁星ほどの手練れに一矢報いたと思われる首領は、壮年の拳士に向かって唾を吐きか

けて言った。

「ワシの瓶切りの心得がなければ全員斬られてたぜ盲目の化け物め。まあ人質をとつたからにはこつちのもんだ」

「てめえ」

レイの鋭鋒を紙一重でよけた瓶切りの達人がよせやいと軽口を叩く。

「若僧。村の女どもが死ぬぜえ？ おとなしくしとけや」

「にいさん！」

アイリの声がある。だが兄は妹の声の方向に向き直ることはなかった。

「……?!」

レイの弱点を知るシュウが愕然としながら周囲を窺う。

だが彼でさえ長年の友人の動揺を悟ることはできなかった。

「アイリ」

近づいてくるマフィアどもに一瞥をくれ、それを斬り倒していく男が肉親の名を呼ぶ。

「アイリよ」

自分の意思で生き、自分の意思で死んでいく。

ケンシロウとともに牙一族を殲滅した際、彼女の決意の表明を覚えている兄が呟くよ

うに告げた。

「女といえどお前はこの村の戦士のひとり。武器を手にしながら力及ばず捕まったのなら是非もなし」

「ああ？」

トテンプウが眉を上げる。

シユウの息子シバが妹を見殺しにするのか、と鋭くレイに問いかけた。

「兄妹の情より大儀を優先させねばならぬこともある。おれやアイリよりも仁の星の命が重い。シバ、お前の父親は生きねばならぬ」

「レイさん……」

シバが絶句する。シユウが何を言うかと激昂しかけたものの、マフィアたちによつて取り押さえられていた。

「この兄を非情の輩と罵るがよい。だがゆえおれにはもはや弱点はない」

増援の黒服を人間の動きでは見切れない速さで斬り捨てていく男が口角を上げ、初めて妹と視線を合わせた。

「アイリ、せめて笑って死んでいけ。おれもいずれその報いを受ける」

囚われの身のアイリは血の気を失ってはいたものの、淀みないレイの青い瞳を見て微笑し、ゆつくりと頷いていた。

「なに勝手にお涙頂戴の演劇やってやがんだクソどもが……ほ、えっ?!」  
怒号を放つ首領の顔から血が吹きあがった。

遠くから放つレイの真空波で斜めに切り裂かれたようだ。

トテンプウの絶叫のなか、レイを包囲した手下たちがあらためて打ちかかっていく。

「くたばれ……えっ? あれ、奴がいねえ」

少しばかりの砂塵を残し、華麗な男が上空へ消えたのをならず者たちは認識することができなかった。

最初に気づいたのは拳法の心得があるトテンプウである。彼が叫んだ。

「バカヤロウ奴が降りてくる逃げろい!!」

「は?」

首領に顔を向けた黒服の動きが止まった。

いつの間に着地していたのか、膝をついて両手を広げていたその男が静かに立ち上がる。

「飛燕流舞」

その台詞のあと、十数人のマフィアたちは細切れになり、血煙のなかに沈んだ。

「な、なんていう切れ味の拳じゃ、まさかありや」

レイの凄まじい拳さばきを見たトテンプウが冷や汗を流しながら後ずさる。

生き残った手下たちもやばいですぜと尻込みし始めた。

「か、頭あ」

「うろたえるなあボケが。わしらには奴がいる。おい、出番だぞどこに潜んでやがる?!」  
首領のだみ声が村に響き渡る。

すると黒服のなかで気配を消していた長身の、いかにも剛勇然とした男が一步前に進んで姿をあらわした。

「……お前が本物の首魁か」

剽悍な顔つき、総髪茶筌ちやせん、古いにしえの武士のような恰好をした巨漢が殺気立つレイの前に立ちほだかった。

心の目で見たのか、気配だけでも尋常ではないと察したのか、シユウが傷をかばいながら身を起こす。

「奴と戦ってはならぬ、レイ!」

「やばい……なんかやばいよレイさん!」

息子シバも思わず金切り声を上げていた。親子のそんな様子を背に、レイが新手が大敵だということを認識しつつ構え直す。

「南斗水鳥拳……さすがは流派の頂上にいるだけあつて見ものだったぞ。久しぶりに生きのよい獲物だ」

「?!」

南斗聖拳を知っている男の顔は異相なものだ。

その存在が牙を剥いた。

次の瞬間、レイが身を仰け反らせて後退した。血しぶきが上がる。

「我の名は斬り倒す人の意、ギドウオーン。南斗の男よ、北斗神拳を葬る前にお前の血を月氏の神に捧げてやろう」

## 二話 次の月が満ちるとき

「お、親分」

「下がれ……！ あ、あの青い髪の野郎、ギドウオーンの蹴りをいなして一撃入れやがった。奴も相当やばい」

斬られた顔をかばいつつ、トテンプウが渦中から手下を下がらせた。

傷付いたシユウも息子シバに抱えられ距離を取っている。

少年が言った。

「茶筌ちやせんの髪のあいつの目にも止まらぬ水鳥拳の一閃、今のレイさんならあるいは」

「……」

親は子の願望に答えない。

鋭さを増すレイの拳を紙一重でいなし続ける武士のような出で立ちの男に、盲目の鬪将は畏怖をか覚えて歯を食いしぼるばかりだった。

「ん〜ふふふこれが本物の南斗聖拳か。我が倒した雑魚どもとはどうやら格が違うようだな。この切れ味、柔のなかにある剛の息吹き。まさに百八派の頂点にふさわしい。六人の王とはよく言ったものよ」

胸の傷に指を這わせ、その血を舐めとった男が双眼を光らせる。

「ギドウォーンを本気にさせやがった。やれやれだ、やっと一服ができる……」

傷の手当てを終え、葉巻を口にしたマフィアのボスの動きが止まる。

すでにレイの斬撃は拳法の達人の彼の目にも止まらぬ速さだった。

現代風にアレンジされた西斗の拳士の肩衣袴かたぎぬばかまの一部が風に乗って飛んでいく。

「あれを凌ぎ切るとは……身内ながらなんて野郎だ。笑ってやがる。紙一重のやりとりを楽しんでいるのか」

口から煙を吐き出して唸るトテンブウは、見えなくなっていくレイの拳筋を追うのをやめた。

わずかに舞う血しぶきのなか、ギドウォーンは突き込んでくる水鳥の両手を弾く。

「お前の疾風の拳は先手必勝。しかし不測の事態にわずかな隙をさらす」

「ぬ、っ?!」

レイの後方の脇腹に、武士のような敵の指突がめり込んだ。刺した両手で獲物を持ち上げるギドウォーンがそのまま体突き抜こうと力を込めだした。

「レイー!」

シユウが叫ぶ。

だが目の前でアイリが囚われの身になっている。彼は動けなかった。



抗うレイと押し込めるギドゥオーンとの力比べが始まっている。

「ぬうふふふあじつとしておけ若僧く！ 無駄なあがきを」

「それはどうかなチョンマゲ野郎……力みすぎるとその腕千切れ飛ぶぞ」

「ん?!」

ギドゥオーンの両胸にひびが入った。

力を込めすぎたことで、躲したと思っていた斬撃の傷が開いたのだ。

「ごわはっ」

大敵が血煙を上げて仰け反ったことで、拘束を解かれたレイが宙返りをきめる。

間合いをとった六星の一人が矜持を見せて見得を切った。

「置いてきた斬撃に触れた。それが南斗水鳥拳奥義……残鳥斬。速攻のみがわが拳の真

髓にあらず」

「……」

呆氣にとられていた異相の存在が吹きあがる血を拭き取ろうともせず、面を伏せている。

それを上げたとき、彼は狂気の憤怒に表情を変えていた。

「斬られたことも感じさせぬとはなあ。さすがは南斗六聖拳……気に入った。だが我はすでに人にあらず。それを教えてやる」

「?!」

「ただでは殺さん。わが西斗月拳の恐怖を万人に思い知らせるために、お前には人柱になつてもらおう」

「西斗月拳?!」

さらに悪相になつた男の拳の名に聞き及びはない。

レイだけではなくシユウでさえ度肝を抜かれて初めて聞く拳法の名を復唱していた。

「はああああ」

両手を広げながらギドウオーンが気合を溜めていく。

「今宵は新月。月氏の神に捧げるに相応しい生贄よ……北斗神拳抹殺はその後だ」

「ほ、北斗神拳抹殺」

シバの震える声を聞きながら、静寂に包まれた村のなかで男は傲然と言い放つた。

「北斗を名乗るものは何人たりとも許しはせん。それがわが西斗の拳是」

「……」

今度はレイが不敵に笑つた。

「ならば……よくおれの前にあらわれてくれたな、西斗月拳」

敵に合わせたかのようにレイも両手を広げていく。

構えの気合の凄まじさを誰もが感じていたが、それが何なのかを理解しているのは同

格のシユウのみだった。

「キサマの傲慢な首を叩き落してケンへの借りを返すでしょう……もはや生かしては返さぬ」

「その意気やよし」

手を掲げた西斗の拳士が突っ込んでくる。

南斗の拳士は相討ち覚悟でそれを迎え撃った。

§ § § § §

「南斗究極奥義、断固相殺拳だと……なるほどなあ。死人になったがゆえの相打ち狙いか」

やるのうと告げた茶筌ちやせんの髪形の男は、己に突き入れられた南斗の牙を胸から引き抜いた。

「フハハ何故急所を外したのか信じられん、という顔をしているな水鳥。本来ならお前の究極奥義はこの身を撃ち抜いて相殺を遂げたはずだった。しかし」

ギドウオーンは口から血を流していたものの、致命の一撃を躲かわしきつたことは明らかだった。

逆にレイに対し、いくつかの秘孔を突き抜いた彼が告げる。

「軌道の読めぬ拳筋、それと同時に体も霞かすみと化す。ゆえに急所を狙うことなど不可能だ、それが西斗相雷拳」

「ふっ、ほざけ侍モドキめ。死合いはこれからだ」

互いに間合いを取る。すでに死人と化しているレイは出血のなか、標的を十字切りにすべく、一瞬で距離を詰めた。

斬の音響が村の広場に響く。

「南斗千塵岩破斬……決まったか」

「い、いや父さん見て」

シウウの眩きにシバの驚愕が重なる。

「侍モドキに与えた傷が……だんだんと軽いものになってきている」

「?!」

斬撃跡の胸に手を当てながら、西斗の拳士が凄惨な笑みを浮かべて言った。

「この我をして秘奥義を駆使させ、見切るのに時間をかけた獲物は始めてだ。褒めて遣わずぞ南斗水鳥拳」

彼の言葉を合図に、レイが異変を感じたのか利き腕を見た。

「ぐっ……なに」

「仕上げだ。西斗月拳はなあく、複数の秘孔をつけて必殺の技と成す」

利き腕から、そして体中から血を吹き出したレイが態勢を崩す。

シユウをはじめ村人たちが悲鳴を上げた。

「凡百の敵ならばこの時点で殺している。しかし……お前ほどの達人はただでは殺さん」

膝をついたレイの前にギドウオーンが立ちはだかった。

レイにもはや二度目の相殺拳を放つ余力はない。それを見越した上で西斗の拳士は一本指をゆつくりと上空へ掲げていく。

吐血した水色の髪 of 青年が残りの血を吐き出し、夜になろうとする空を見上げる。

北斗七星の横にある小さな星が輝いているのを確認しながら、口に出した言葉は別のものだった。

「二本指だと小賢しい……それを駆使する男を知っている。昔馴染みが得意とする拳では死ねぬな」

「ある意味とどめではあるが、今すぐには死なぬさ」

最後の力を振り絞り、レイが宙へ浮かぶ。

彼の執念の鋭鋒が届く前に、ラオウに匹敵する剛体のギドウオーンの指拳がレイの胴体突き刺さった。

「西斗月拳奥義しんげつしゅう新月愁。次の月が満ちるとき、キサマの体は崩壊して肉片となる。それまで月氏の神を恐れ広めよ。秘孔術の祖はわが西斗だとな」

§ § § § § §

「ユダ様」

不意に赤兎馬の歩みを止めた主人に気づき、松明を手を持つ従者コマクが眉を寄せた。

「いかながなされました？ 久方ぶりの我らが故郷ブルータウンは目の前。夜空を見上げて何をお考えで」

赤毛の美男子の赤紫のマントが風ではためいている。

不快感を覚えたのか、彼が首を振りながら手綱を握る。

修羅の国から凱旋するや否や、赤備えは幾度となく武装勢力の襲撃を受けている。

大陸は動乱のさなかにあった。それを示すように、予定より大幅に遅れての帰還となっていた。

赤備えの部隊長、南斗紫蝶拳のメイエルがかすかに顔をしかめるユダの白い横顔を見

る。

五感を超えるものを持っている馬上の主の様子を窺いながら、メイエルは嫌な予感がすると呟いた。

## 三話 光とは

女子供たちを積んだトラックを最後尾に、数台の車両を従えた屋根のない装甲車が先頭を走っている。

その後部座席に座る西斗月拳の拳士と、マフィアの長の中年男が言葉を交わしていた。

「村の女子供は将来西斗の血を受け継いだ子を産む。あの南斗の若僧の妹を錯乱させぬためにも、若僧を一撃に葬らなかつたわけか」

トテンプウが葉巻を吸いながら後方に視線を送る。

トラックのなかにいる大勢の女子供のなかでもひとときわ目立つ美貌の主が、レイの妹アイリだった。

「おれさまが味見したかったが」

「傍流とはいえお前も同胞、他の女は好きにしろ。だがあの女は我かヤサカの子を産む。

見目好く品のある雌は何匹いてもよい」

「それにしても……秘孔しんげつしゅう新月愁を受けて気絶した若僧はともかく、盲目のオヤジと息子、きやつの手勢を見逃したのは何故じゃい」



「あれは集団戦に長けた男だった。我には及ばずとも、お前や手下どもを皆殺しにできるほどの腕はある。まだまだ周囲には敵も多い、兵隊を減らすわけにもいくまい」

茶筌ちやせんの髪形の男、ギドウオーンは瞑想しているように目を閉じ、腕を組んでいる。

古の侍のような衣装から見える腕の筋骨の逞しきは拳王にも劣らない。

そんな豪傑の横でトテンプウが敵の数を指折り数え始めた。

「北斗の分派……あやつらも蜂起したそうさ。ええと、キヨウウン、タイエン、ソウブ……他には帝都で裏元斗と対戦中のファルコ、ソリア、シヨウキ……斗の連中に限っても数えればきりがねえな」

「……北斗神拳の男たちはまだこの国に戻らぬか、悠長なことだ。命拾いしておつて」

「おれさまはこれから攻略する隠れ家に引きこもるぜ。あんな化け物どもなんざ相手にしてられねえ」

「好きにしろ」

拠点という名の隠れ家を統率する誰かが必要なわけで、トテンプウの居残りをギドウオーンはあっさりと承知した。

§ § § § § §

ブルータウン。勢力圏内に森や湖を擁する大陸中屈指の大都市である。

その支配者が修羅の国から凱旋し、影や宿老の孫を連れて登城していく。

大陸の混迷のなか、この領内は他の軍閥とは違い、比較的平穩に保たれている。

そんな彼が戻ってきて最初に指令したのは、動乱の極にある帝都に一軍を派遣するということだった。

同じく帝都へ向かうシンへの援軍という意味もあるだろう。

その指揮官に二十三派筆頭の猛者イルフォーンを選んだのは、元斗の将ソリアと好敵手めいた縁があるからだ。

公人としての自身の務めを終えたユダに、今度は私事の衝撃的な報告を受けることになる。

南斗六星という大物の二人がわずかな手勢を連れ、この地へ逃げ込むようにやってきたと聞いたからだだった。

軍事を二十三派の数名に、内務を宿老ゲンガンに任せた赤毛の支配者は、かつてない荒い足取りでかつての同僚の元へ向かう。

その長身の後姿は憤怒に包まれていた。

若いゲンジユや女拳士メイエル、側近たちが息を飲んで後に続いている。

敬愛する主君の前に回り込み、両名が救急室への両扉を開ける。

その部屋のなかの光景を見たユダは思わず歩みを止めた。

「レイ……」

沈勇にして剛毅と謳われる赤い衝撃が絶句する。

ベッドに腰かけて俯き、憔悴した様子の美男子を見つめるユダの藤色の瞳も揺れている。

そのそばのベッドでは、艱難辛苦の道中で氣力が尽きたシユウが眠っている。

傍らに居るのは息子のシバであった。

少年は南斗の白眉と讃えられる英傑の登場に慌てて身を起こし、迎え入れてくれたことへの礼を施していた。

それに頷いたユダが肩で息をつくレイを窺い、隣にいる隠密機動部隊の長、ダガールに視線を向けた。

「……水鳥、白鷺。この乱世においても屈指の使い手が這う這うの体でこの街にやってきて数日が経っています。白鷺については問題ないとしても……水鳥のほうは」

独眼竜が身を引いた。俯いている義星のすぐ横で膝をつき、妖星がその様子を見守る。

しばらく無言の時間が流れた。

水色の髪 of 勇将がふと我に返る。この城の主を認識したようだ。

「……ユダか……」

「……?!」

面を上げた美男子の顔はやつれていた。

疲労の色が濃いその顔に驚いたユダが何か言いかけたが、片手で胸を抑えている彼が力なく笑ったのを見て二の句が継げなかった。

激しく咳き込みだしたレイに、メイエルがハンカチを手渡す。

布を受け取った同僚は口元の血を拭き取り、再び自嘲の笑いを漏らしていた。

「すまぬ。おれともあろう者が……言い訳のしようもなく完敗した。それに」

「……」

「わが命は……次の新月にて尽きるらしい……」

「……」

「西斗月拳。恐るべき使い手だった。そやつに妹アイリや女子供を連れ去られ、おれやシユウはかろうじてここまで逃げてきたのだ」

激痛が走ったのか、レイが表情を歪め歯を食いしばっている。

南斗六聖拳の二人が一人の男に撃退されたと知ったゲンジユとメイエルの驚きは尋

常ではない。

内心の動揺を抑えつつ、ダガールが補足するように口を開いた。

「秘孔しんげつしゅう新月愁。北斗神拳にも似たような技があるようですが、少なくとも拙者らには馴染がありません」

無表情の主に、影の長が続けて言った。

「聞くには、北斗抹殺の拳是の彼ら……水鳥の身をもつてして神拳の者どもへの挨拶とする、と」

「……恐怖におびえて最後の日を迎えるがよい、ということですか……なんという非情な」

蒼白になったメイエルが身震いしてレイを見下ろす。

「またも無言の時間が続く。」

やがてマントをめぐる音がした。

皆がぎよつとしながらその持ち主に注視する。

「ゆ、ユダ様」

ゲンジユの恐れおののく声のなか、この地の支配者が立ち上がった。

そのとき、上半身を伏せていたレイが起き直り、瀕死と思えぬ力で同門の腕をつかんだ。

「待て！」

歪んだ表情で彼は叫ぶ。何をするつもりだと問われた側は無言だった。

「……」

「経絡秘孔を操るにおいて……西斗は北斗を凌ぐ。奴はそう高言していた……それはおそらく事実であろう」

退室しようとするユダがレイの血走った双眼を見つめる。

苦痛をおして、南斗水鳥拳の伝承者は力任せに年来のライバルを引き寄せた。

「し、シユウが見逃されたのは僥倖きようこうだった。ユダ、格別北斗に恩があるわけでもないお前が……この争いに関わるべきではない……！」

やつれた美男子の形相は必死だった。

痛みで崩れそうな彼の手を取り、ユダは再び腰を落とす。

レイが小さい声で告げた。

「北斗と西斗の……諍いさかいに手を出すな。お前は……おれのように……なるな」

「ユダ!!」

自分で立ち上がることも叶わないレイが気力を奮い、身を乗り出す。

そして絶叫に近い声を上げ、ユダの胸倉を両手でとった。

周囲の仰天をよそに、つかまれたほうは好敵手の目から視線を外さず、その怒号を受けていた。

「お前とシンこそ南斗の光！ 死んではならぬ……死なすわけにはいかぬ!! 象徴や天帝の……いや……すさんだこの世にさまよう女子供のため……お前ほどの男は……お前たちはこの時代に必要不可欠な存在……双方とも皆のために生き続けねばならんだ!!」

室内が再び静寂に包まれた。

身震いが止まらないシバの横で、いつの間にかシユウが寝返りを打っていた。

しかし渦中に割って入るほどの体力はない。

長い沈黙が続く。

やがて長い赤毛の持ち主が口を開いた。

「レイオ」

縫りつくような義星の両手首を持ち、妖星はそれを優しく引きはがす。

苦しそうに息をつく彼をゲンジュとメイエルがベッドに座らせた。

気力を尽くした相手の肩に手を置き、光と呼ばれた男が口角を上げる。

「……私やシンは戦うことでしか役に立たぬ。だが義や仁といった星は救世主が本懐を果たした後に必要な、それこそ光だ。案ずるな、私の名にかけてお前の妹は必ず助け出

す

「……!!」

アイリのこととは私情と抑え込んでいた彼が堪えきれずに嗚咽した。歯を食いしばっているようだ。

ぼとりと落ちた涙の粒が見える。ユダは憔悴した相手の肩を何度も叩き、何度も案ずるなど告げた。

「……すまぬ」

「もう十分だ。よく生きていてくれた。後は任せよ」

うつ伏せたままレイは何度も領いていた。

妹を助けてくれといえない年若い同僚の代わりに、意識が完全に戻ったシユウがふと呟くように、全てを託すと言った。

「シユウ、レイを頼む」

そう言い捨てた赤紫のマントが翻る。

同時に極斗衆ごくとしゅうの長と部下、若い南斗の将が続く。

ブルータウンの看護師たちと入れ替わりに、外の通路に出る。

広い廊下に黒いブーツの足音が響きわたる。

「ユダ様」



ダガールが主の名前を呼んだ。赤毛を揺らした長身の男は前を向いたまま命令を發した。

「トキをこの街に——いや、一刻も早くレイたちをサザンクロスに連れていけ」

彼の声は鋭い。抑え込んでいても感じる圧力に、部下たちが戦慄の鳥肌を立てた。

「あれなら西斗新月愁しんげつしゆうに対抗できる秘術も……おそろく心得ていよう」

「……御意」

独眼竜ほどの肝の据わった男がユダの背中に怯みながら答えた。

ゲンジユのような股肱の臣でさえ、かつて主がこれほどの怒りを表に出すのは見たことがない。

西斗月拳とやら、龍の逆鱗に触れた。

メイエルはそう思いながら、イルフォーンの軍勢が帝都に向けて進發させているのを窓から見送っていた。

## 四話 帝都の嵐

再三戦火に見舞われた帝都の城だが、それでも堅固な作りのそれは防衛拠点としての機能を失つてはいなかった。

裏元斗の手勢とジャコウの残党らは数を頼りにファルコ率いる私兵たちを場外へ追出し、負傷の癒えぬ表<sup>おもて</sup>の三人を掃討する事態にまで追い詰めていた。

城のバルコニーから状況を見守るのは、ターバンを巻いた丸眼鏡の異相の拳士、ビジャマだ。

裏元斗の将ともいうべき彼が防護柵の上に腰かけながら、背後からやってきた男に横顔を向けた。

来たか、と彼は思った。

部屋の中に入ってくる前からわかるほどの剛気に、さしものビジャマも鳥肌を立てながら、それでも軽口を叩く。

「随分と悠長な登場だな。おぬしの同門はすでに宿願を果たしに中原へ向かったというのに」

ビジャマの台詞を聞いた何者かが足を止める。

センター分けミディアムパーマ、黒い服の男が黒い帽子のつばに手をかけて言った。  
「ギドウオーンが手に負えぬ相手がいるとでも」

「フン……北斗というのは神拳だけではない。分派もいることは知ってのように」

茶髪で髭の帽子男が緑の瞳を細めた。首にかけてある緑の勾玉がわずかに揺れる。

「曹、孫、劉の北斗は一応そなたの標的であろう。きやつらはサザンクロスを目指して進軍中だ。表立つての大軍ではないが、彼らは一人一人が拳王にさほど劣らぬ豪傑でな」

「……」

「その南の都みやこには天帝のガキと南斗の象徴がいる。分派だけではなく北斗神拳の兄弟どもも必ずそこに集まる」

そう言い捨てたあと、ビジャマが視線を移して眼下の光景を眺めた。

元斗の気の激突に混ざる黄金の気脈を感じた帝都騒乱のフィクサーが、無意識に手すりの上に立ち上がった。

このときすでに背後の気配はない。丸眼鏡のひよろ長い拳士は呟きながら階下へ降り立った。

「西斗月拳……北斗に向ける年来の憎悪でこの世をさらにかき乱すことを期待しよう。この地上でわし以上の達人は必要ない。全てのそれは露と消えるがいい」

彼は数名の影を連れ、帝都の裏口から脱出していく。

脱兎は彼の常套手段であった。そして権謀術数の男は西斗以外にまだ奥の手を隠し持っているのだ。

§ § § § §

裏元斗が表の元斗の將軍たち、ファルコ、ソリア、シヨウキを追撃している。

バトロの蒼光とアスラの白い光は、紫光の異名を持つ帝都第二の猛将を凌駕していた。

バトロアスラはビジャマにより頭部に埋め込まれた装置で闘気を増幅させており、戦う前から手負いのファルコ、シヨウキを撃破し、比較的軽傷であったソリアすら滅光の餌食にしている最中だった。

「しぶといな。元斗の次席の勇名は伊達ではないか。アスラの光とおれの凍気を受けて倒れぬとは」

「……まさに死人<sup>しびと</sup>」

蒼い髪のパトロ、白い髪のアスラが優勢ゆえか、称賛の台詞を口にする。

一方、仕掛けで増幅された滅気になんとか耐えきっていたソリアの巨軀は血まみれだった。

彼の眼帯はすでに取れている。潰れたその目からも血を流しながら、同僚に向けて紫光將軍は二人に引けいと告げた。

「ファルコ……シヨウキ……後は任せたぞ。ルイ様と、帝都を」

もう一度ソリアは逃げると叫ぶ。

ぶざけるなど吠えながら立ち上がった熱血漢の赤光將軍が、未だ膝をついている金色に肩を掴まれた。

「ふ、ファルコ」

「シヨウキよ門が……開かれた。あれはビジャマの援軍。このままでは元斗が滅ぶ……撤退せざるを得ぬ」

「お、お前?！」

ソリアとファルコといえは朋友だった。

しかし現状を直視したファルコの判断は誰が見ても妥当なものだ。

シヨウキは元斗筆頭に肩をかしながら、次將の異名を呼んだ。

「引くぞ紫光!」

「行かせはせんで死にぞこない」

アスラの拳撃がソリアを襲う。彼はそれを脇の下に挟んで受け止め、光の鬨気を流しながら叫んだ。

「どうやらオレはここまでのようだ……シヨウキ ファルコを死なせては先代の元斗の師に顔向けできぬ。わかつているな」

「死ぬのならばおれだ。元斗第二の将のお前が殿しんがりなど」

「フン……お前ではバトロヤアスラには敵わん。適材適所というものだ」

紫光將軍の巨軀からさらに血しぶきが舞った。裏元斗二人の攻勢は激しくなるばかりだ。

シヨウキですらもはやソリアは助からぬ、と絶望のなかで思った。

「撤退する……」

元斗最強の男が苦悶の表情で全軍に告げる。

ゆらりと身を起こしたファルコは帝都の城を見上げた後、髭の同門を引きずりながらこの場を後にしようとしていた。

「ソリア……！ ぬおおソリア!!」

残存するファルコの私兵が二人の將軍を支え、もがく熱血漢を車に押し込めた。

全身を朱に染めた片目の男と、金色の異名を持つ男が視線を合わす。

「お前を倒す宿願を果たすのは……どうやら来世になりそうだ、ファルコ」

「……何度やつても同じこと。そのときは再びお前の片目を射抜いてやろう」

口角を上げたソリアにつられ、ファルコもニヤリとしながら頷き返した。

結びつきの強い彼らが互いに視線を背ける。

紫の髪の死人しびとはふつきれたように前を向く。金色の髪の猛将はあふれる涙を抑えきれず項垂れた。

白光將軍のアスラがとどめを刺すべく構えながら、年上の同僚に顎をしゃくる。

「こやつこやつの首はもらったも同然。バトロ、奴らを追え」

「小僧こぞう、言うようになつたなあ」

ソリアが傲然と笑いながら気合を溜めている。

その様子を見たアスラは目を細め、終撃かと悟った。

「早く行け。こやつはまだ奥義を隠している。おそらく死と引き換えに放てる大技だ」

アスラに再度促され、蒼い髪の中年男、バトロが無言で駆け出した。白と紫の気合が激突する。

「……だが惜しかったなソリア。お前は血を流しすぎた」

紫光利斬しこうせつざんという秘奥義を放つ前に、その闘気は消えた。操気の術を駆使できなくなつたようだ。

彼は両膝を地に荒い息をついていた。

「……」

「無念であろう。しかし苦しませません。それが同門としての情け」

無機質な表情のアスラが、膝をついた元斗屈指の猛者を一刀両断にしようと剛腕を上げる。

そのときだった。

不意に荒地にかかる影。

それを見た白髪の若者が上空を仰いだ。

「あれは……一体」

アスラの誰何すいかに答えるように、瀕死の男が覚えのある影の形を見上げながら呟いた。

「……あの翼のようなマントは……鷹か……クソいまいましい」

「?!」

ソリアが嫌なものを見たとはばかりに、しかめっ面をしながら血のつばを吐く。

青い空から降りてきた乱入者により、大地がその爪で引き裂かれた。

「ぬっ」

その凄まじい衝撃を避けるために後方へ飛びずさったアスラが目を凝らす。

砂塵のなか、地上に降り立った邪魔者の長身を窺った。

「……何者だ」

「表に出ず、ひたすら暗躍するばかりのネズミどもとはお前たちのことか」

赤銅色の髪の毛の持ち主が姿勢を正して腕を組み、厳かに告げる。



ひと房の前髪を垂らし、その他をオールバックにした若い男はサウザーを思わせる剽悍な外見をしている。

元斗同士の崇高な戦いを邪魔された側が殺気を放つ。

「不意打ちとはいえ、このアスラの前に立つとはいいい度胸をしている。殺す前に名を聞いてやろう」

白い光を放つ感情のない男が鬼気を繰り出す。

鷹の翼をあらわすような切れ込みが入ったマントが大きくはためいた。

彼はカツと目を見開き、残像の残る構えでその気圧を受け流していた。

赤備えの小隊を率いるその指揮官は、赤い衝撃の第一の家臣にして、六星にも匹敵するといわれた猛将だった。

「その片目はこのイルフオーンが倒すことになっている。お前ごときネズミが討ち取ってよい相手ではない」

「……南斗聖拳」

その構えを見たアスラが珍しく苛立った様相を見せた。

己を昏倒させた赤い衝撃の憎き拳法を思い出したからだ。

流派の違いはあったが、彼にとって屈辱を払拭するいい機会だと思ったのか、赤銅色の髪を推参者と対峙する。

一方紫光は心底嫌そうに表情を歪め、憎まれ口を叩いていた。

「若僧、余計な真似を……」

「お前の回復の暁にはその口を裂いてやる。だが今は」

好敵手の独語を背中で聞き、南斗羽鷹拳はおうけんの伝承者が地を蹴った。

機械で闘気を増幅させたこの大敵は、九龍衆の彼にとつても格上の存在である。

しかし絶対君主の期待に応えるべく、イルフオーンも死人しびとと化していた。

§ § § § § §

そのころ、蒼光將軍バトロもファルコとシヨウキに追いついたものの、思わぬ邪魔が入りその拳を阻まれていた。

「ふ、ファルコあれは」

「……黄金の牙……」

元斗の兵に支えられた赤と金色の將軍が安堵の息をつく。

長い金髪が揺れる背中からは彼らからすれば小柄なものだ。

しかし裏元斗の体内に差し込まれた気の増幅装とは正反対の、深淵から湧き上がる気

脈が二人にははつきりと見えていた。

「ジョーカー、レスティエ」

そんな男の言葉に以心伝心の影主従が距離を取る。

それを確認したバトロが金髪の青年との間合いをつめていく。

「キサマがシンか……手負いのファルコやシヨウキ程度には楽しませてくれるのだろうか」

修羅の国にいたこともあるバトロは、その国全土に轟いた南斗極聖拳きよくせいけんとその構えを知っている。

蒼氣そうぎを放出させながらあえての大言を口にした。己を追い込むためだった。

ははははと高笑いながら飛び上がり、彼はいきなりの奥義を放つ。

「元斗皇拳、凍瀑衝とうぼくしょう」

突き入れてきた利き腕の鋭鋒をシンは十字の傷がある手の甲で受け流す。

地面に刺さった一撃により、周囲は冷気で包まれた。

「う、おっ?!」

奥義の突風を受け、シヨウキがのけ反った。重傷のファルコが歯噛みをしながらいかんと呟く。

地面から生えてきた無数の氷柱がシンを襲う。

それを薙ぎ払った際の相手のガラ空きの胸部へ、技の仕上げとばかりにバトロが蒼光

の掌底を繰り出した。

彼の全霊の波動は荒地や岩を巻き込み、広大な殺傷範囲で南斗の拳士を押し包む。

受け身すらとらせんとばかりに、裏元斗の拳士は吹き飛んだ相手を猛追する。

氷舞裂弾ひょうふれつだんと呼ばれる至近距離でのショットガンを受けた金髪の青年が、ゴムボールの

ように飛び跳ねて聳え立つ大岩に叩きつけられた。

岩に亀裂が入った。

「無念……助けにすら入れぬとは」

シヨウキが天を見上げ、目を閉じながら呻いた。

轟音を立てて崩れ、砂塵まみに塗れる岩壁に背を向け、バトロがこちらにやってくる。

ファルコが義足をバシンと叩く。悲鳴を上げる兵たちを制し、震えながら身を起こし

た。

「ファルコ様……！」

「お前たちはシヨウキを車に乗せて去れ。南斗の若僧にもらった時間、このファルコ無

駄にせん」

「何をバカな、ファルコっ」

重傷のシヨウキが表情を歪ませる。帝都きつての義将である男に、ファルコは元斗特

有の構えを示した。

「……」

赤光將軍が絶句する。

天帝守護の拳、名門中の名門の流派には、決死の志を見せた者を妨げてはならぬ、という是非もない意味の型がある。

それでもシヨウキの苦悶が戦場に響いた。それを聞きつけたソリアが同じようにシヨウキへ決死の構えを見せた。

死人になつた兩名にはその余裕があつた。

「ソリア、ファルコ……」

シヨウキが地に突つ伏した。自分だけ助かるのかという絶望の状況に、熱血漢が何度も乾いた大地を叩く。

「金色。元斗最強の男よ……キサマを破つて我らが表となる。心置きなく逝け」

「……機械で増幅させた作り物の士が天帝の近侍だと？ 裏門うらごときが笑わせるな」

北斗神拳にやられた胸の傷から血を流しながら、ファルコが金色の気を充満させた。

ルイ様、申し訳ありませんと述懐し、彼は冷気に向かつて、双碗による黄光おうこう利斬せつざんを撃ち放つた。

## 五話

## 真なる西斗

血の花が咲いた。荒地とアスラの白髪が朱に染まる。

「……まだ動けたのか、紫光め」

白光の奥義を防ぎ切った隻眼の同門は、吐血しながらも得意気に笑う。

彼の視線の向こうには、シン配下の死神と影の女が裏元斗についた帝都の軍を蹴散らし始めていた。

「舐めるなよアスラ……わしを誰だと思っている」

ファルコに次ぐ元斗の猛将はプライドが高い。ましてや共闘しているのは因縁のある南斗の鷹だった。

「つつあ」

南斗羽鷹拳はちうけんの気合の声とともに斬撃が振り下ろされる。だがアスラは煩わしわづらそうにそれを弾き飛ばし、身を引いたソリアの眼前まで間合いを詰めていた。

待っていたとばかりに剛腕を振り上げるソリアの鋭鋒をかわし、無表情の白い青年は紫のマントを裂いた。

そこから突き出る裏元斗の拳は寸分たがわす標的の胴体を貫いている。

アスラは再び相手の血を浴びた。そして言った。

「流輪リゅうりん壊破かい。キサマの奥義、元斗流輪光斬に対するカウンターだ……」

討ち取ったと確信したアスラが利き腕を相手の体から抜こうとした。

しかし異変を感じて目を剥いた。

「ぬっ?!」

「……引き抜けまい。流輪の撒き餌にまんまとかかりおったな……まだまだ若いう。執念を込めたわが身をを引き裂けるものならしてみるのがよい」

「ほげげ」

利き腕をソリアの胸筋に絡めとられて動けなくなったアスラが死にぞこないめと吠える。

同時に寒気を感じた彼は白髪を振り乱して上空を見た。

彼の充血した目に映るは、大きく両手を開いて降りてくる若い鷹の姿だった。

「細工は流々だ鷹め……ソリアともあろうものが死合の脇役を演じるとは……情けな  
い」

隻眼の猛者は自嘲の台詞とともに、振りほどこうともがく標的の両手をつかみ取る。

さらに気を充満させ羽交い絞めたことで、血が瀑布のように流れ落ちた。

「ソリア貴様あ……最初から、こ、これを狙って……?!」

苦悶の表情を浮かべる二人の元斗のもとへ、赤銅色の髪の毛の勇将が急落下してくる。しかしその身に闘気はない。

「南斗羽鷹拳、飛鷹龍極垂」

妖星配下、南斗二十三派筆頭の秘奥義がアスラの纏う白い気脈を垂直に斬り裂いていく。

気を破るほどの実の拳、ここに至ってイルフォーンは南斗聖拳の真髄に目覚めた。

鷹の爪を交差させ、地面を抉るように着地した彼が、ソリアのものだけではない血煙を背中で察知する。

ブシユウウという出血の音は自身の両手からも発していた。

己が龍の牙すら衝撃に耐えられないほどの、羽鷹拳はおうけんの一撃だった。

長髪と短髪の違いはあるものの、サウザーに似た外見の剽悍な男が不機嫌そうに呟いた。

「……やりやがる、元斗皇拳」

いつの間にか繰り出していたアスラの蹴撃しゅうげきで、イルフォーンのマントと防具はその存在を消している。

半裸の鷹が立ち上がり、奥義を放った獲物を見た。

白光の拳士が崩壊を堪えようと両足を踏ん張っている。



言葉にならぬ苦痛のようだ。

「……………」

さらに発光していくアスラの様子を窺って、周囲いた皆が手をかざす。気の増幅装置が破壊されたことで制御不能になり、それが日中の戦場を明るく照らした。

「ジョー様！」

「おう……………イルフオーンめ。ファルコに匹敵するともいわれた裏元斗の一人を、とうとう仕留めやがった」

帝都の兵を薙ぎ払い、死神が振り返る。

そこには紫と白い光の残滓が映っていた。最後の残り火を放出させるように、元斗の拳士ソリアとアスラが再び組み合い。そのまま睨みあっている。

「死さえ……………ファルコに捧げるか、いけ好かぬ片目め……………」

「……………いけ好かぬのはこちらだ。わし自身を囿にし、鷹と二人がかりでしか倒せぬとは……………はなはだ不本意」

憎々し気に呟いたソリアが仰向けに倒れていく。

だがその前に、赤銅色の長髪の男が彼の巨体を受け止めていた。

長身を支えきれず両膝をついたアスラがそれを無念そうに眺めてから、ゆっくりとう

つ伏せに沈んでいった。

同門の死を確認した瀕死の男の表情は苦り切っている。

「忌々しい……一番気に食わん男の腕の中で果てるとは……わしは前世で何か悪いことでもしたのだろう。そうとしか思えん」

「最後までへらさず口を」

「今わの際ゆえの本音だ。しかし……見せてもらつたぞ、南斗の真髄……実の拳を。そは斗の闘気すら斬り裂く刃、やいばやがて北斗をも越える光……か」

ソリアの鬼気迫る表情は穏やかなものになっていた。

イルフオーンが位置を変え、彼にファルコがいる光景を見せていたためだ。

「無事だったか、悪運の強い奴め」

元斗の長をかばうように、金髪きんぱつの長い髪の青年が青い髪の壮年の男の前に、やや身を低くして構えている。

それは南斗極きよくせいけん聖拳の伝承者が指突を放つ体勢に他ならなかった。

緊張の糸が切れたように笑みを浮かべ、ソリアは満足気に天を見上げて言った。

「ファルコが無事ならばそれでよい……思い残すことはない。同じ髪の色いろの若僧、そういえば奴は不死身であつたな。そうだ……」

あの黄金の牙に貫けぬものはない。

そう言い残して彼は残ったもうひとつの目を閉じた。

イルフオーンがそれに気づき、剽悍な面を歪ませたが、渦中の出来事をしっかりと見守っている。

「見届けたかソリア。元斗皇拳の蒼い光を突き破る……あれが本物の南斗聖拳だ」

死出のはなむけになったか、と思っただけは彼も南斗の拳士だからであろう。

南斗の極意を具現化した執念の男は、蒼い髪の壮年の拳士の胸板から牙を抜き放つ。

アスラと同じように増幅装置が破壊され、気流が暴走したようにバトロの体を覆っていく。

光に包まれる相手を一瞥し、近くで倒れかけている金色の男に歩み寄った。

「黄光利斬。おうこうせつざん 先手を打つお前の閃光がなければ奴の不意を衝くことができなかつた。

ファルコ」

滅していく裏元斗の拳士を眺めながら、表の長はシンの言葉に力なく頷く。

「……バトロほどの男が……このファルコの加勢があつたとはいえ……まさか一撃とはな。サウザーやケンシロウが敗れるわけだ」

配下の兵たちに抱えられるファルコが口元の血を拭いながらフフフと笑った。ソリアと同じような自嘲の笑みだった。

「無念のまま死んだかバトロ。だが生き残ってしまった以上、まだお前の後は追えぬ

……」

震えながら起き上がった元斗最強の男はマントを手にしながら、すでに絶命しているバトロにそれをかぶせて黙祷した。

そして面を上げた彼がシンに視線を向ける。

「元斗の私闘はまだ終わってはいない。礼は言わぬぞ若僧」

気丈な巨漢の台詞に金髪を風に靡かせた青年が何か言いかけたが、そこへシヨウキが戻ってきてファルコに肩を貸しながら告げた。

「帝都にはまだビジャマがいる。アスラ、バトロを洗脳して気の増幅装置をつけた張本人」

「うむ」

「ソリアの亡骸は連れていき、地方のエリアに退避する。ひとまず態勢を整えてから改めて帝都に進撃すべし」

「承知……」

やむを得ぬ会話を終えた金色と赤光の将軍がソリアの元に跪き、しばしの別れを惜しんだのちにそれぞれの旗の四輪駆動に乗り上げる。

重傷の双方は応急の手当てを受けながら撤退を再開させた。

§ § § § § §

ファルコたちの支援に成功したイルフオーン率いる赤備えも部隊を反転させている。すでに荒廃した城門とその周辺にいるのはまばらな警備兵のみであり、すでに帝都としての威厳は失われていた。

「帝都の謀反人はあとひとり。イルフオーンめ、止めはわしらにさせるつもりのようなすな。しかしビジャマとやらは策を弄する将と聞きます。敵勢はわずかにしても、油断は禁物」

しかしながら影には影の戦い方がありますよと告げて、目つきの悪い薄緑色の髪の男は、城の裏手門に回るようシンを促す。

「正面突破のKINGにとつて不本意でしょうが」

劣少なくして功多しと告げたジョーカーの声が無人の裏手の通路に響く。

「サウザー、ラオウなどの巨星ばかりが敵ではなくなりましたからな。ビジャマなる小物の考えはわしのような小物こそわかるってもんです」

「韋駄天が小物だと？ お前の諧謔かいぎやくの質も落ちたものだ」

シンの珍しい軽口にジョーカーが肩をすくめてから、二階部分の窓に向かって地を蹴った。

部下のレスティエも身が軽い。そんな影主従に続いて主も跳躍した。

§ § § § § §

すでに帝都の兵は内部においても大半が逃散し、城内にいるのは裏元斗に忠誠を誓う古参のみだった。

それらの姿は侵入口からは見当たらず、シンたちは回廊を進むばかりだった。

「……元斗の生き残りと対峙するのは大広間でしようか」

「そのほうが畏もしかけやすい。奴のことだ、退路も……」

レスティエの質問に答えようとした死神が眉を寄せた。

部下を制して立ち止まり、背後の主を見る。

「向こうにあるは城内に造られた庭園のようです。そこから何者かの気配が」

「……何者ですか？ わたくしにすらわかるほどの気脈の持ち主」

青白い頭巾をかぶった美人はそう答え、テラスのような光の指す一画、噴水や花壇があるほうに目を凝らす。

日ごろ沈着なジョーカーが青ざめた顔をしているのに気が付き、レスティエも同様に表情を変える。

「レスティエ距離を取れ。わしでも危ない。ここは」

「二人とも後から来い」

シンが配下に言い残し、庭園に足を踏み入れた。

泉の広場のようなその椅子に偉そうに座り込んでいるのは、黒いロングコートの人物だった。

その長身の男は口髭をはやしている。

ラオウよりは小さいが、シンよりは大きい存在が黒い帽子のつばを弾いて目を向けてきた。

それだけでジョーカーとレスティエが息を飲んだ。

「なっ何者だ、あやつ……」

死神の異名を持つ影がここまで戦慄を覚えるのは珍しい。

影の女は言葉にならず一歩、二歩と後退していた。

「……憩いの邪魔だな。そなたら」

センター分けミディアムパーマの髭男は美丈夫だったが、禍々しい気を纏う姿は異様にすぎた。

意図して待ち構えていたわけではないことを察したシンが彼の元へ向かう。

金髪の青年がベンチで足を組んで座っている男、ヤサカと対峙した。

「お前も元斗か」

「……無知とは罪」

ブワッと風が吹いたと同時に、シンは吹き飛んでいた。

片手と膝をついて後退を止めたが、その擦れた跡からは煙が立ち上っている。

庭園の草地から石畳まで弾かれた主を見て、二人の影が反応できず大口を開けている。

「雷……」

そう口にしたシンが避け損なって当たった肩口を抑えながら、相手を眺める。

今まで食らったことのない衝撃と属性の拳だった。元斗ではないと彼は思った。

「推参者よ。せめて我をここから動かして見せろ」

座ったまま両手を広げる漆黒の格好の帽子男が、懐からキセルを口にした。

煙を吐く余裕の相手にシンが撃ちかかった。



## 六話

## 真・相雷拳

ヤサカの茶髪が千切れて飛んでいた。

首だけ動かして相手の突撃を躲かわした帽子男が髭の下の口角を上げる。

鋼製のベンチの背もたれを音もなく貫くその拳を見た彼が、緑の瞳を細めて告げた。

「南斗聖拳……元斗と同じく陽の拳か。しかし北斗にすら届かぬそなたら程度ならこのままで十分」

言い終えた瞬間、ヤサカがシンを蹴り上げた。

遠くから見守るレスティエが主の名を叫ぶ。

肘と膝の組み受けでその衝撃に耐えきった金髪の青年ながら、あまりもの威力で大きく空中に浮きあがった。

芝生に転がったシンがわき腹を抑えつつ、膝を立てて身を起こす。

口の端から血を流すシンの様子に違和感を覚えつつも、彼女が蒼白になりながら呟いた。

「……シン様をあそこまで翻弄できる拳士が帝都にいるなんて」

「雷を纏う闘気。光を伴うあれのなかにかつには入れぬ。しかしあの拳法は一体」

何かを思い出そうと考え込むジョーカーがときおり渦中から視線を外しながら呻く。その間にも庭園が瞬間に煌めいている。

挑んでは弾き飛ばされるを数度繰り返し返してから、シンがようやく構えだした。

「なるほど噂通り。利き手を上に、そうでないほうを下に、単純だがそれが南斗極聖拳きよくせいけんの構えだと聞いている」

感心したように頷く彼の、タバコ休憩だといわんばかりの姿に緊張感はない。

煙を吐き出す男が指一本で来いと誘うのにつられ、シンが踏み込んだ。

必殺の間合いで南斗千首龍撃を放つ。

それを見たヤサカがほう、と緑の瞳をわずかに見開く。

「ギドウオンとともに南斗の流派をいくつか討ち取ったことがある……しかしそのなかでもそなたは別格よのう。楽しませてくれる」

千の牙を全てを見切ったようで、ヤサカが無数の手首をつかみながら嬉しそうに笑った。

凄みのある笑顔に当事者ではないレスティエが小さく悲鳴を上げる。

「当たれば我とて危ないが……だがそなたの牙がこの身に届くことはない。もう逃げられんぞ」

獲物の手首をねじると同時に、ヤサカが気合を発するため咆哮した。

「死の抱擁を食らうがよい」

座ったままのヤサカがシンを正面から抱くようにして両腕を回り込ませ、背中に拳を突き入れた。

かつて同門ギドウオンがレイに放ったものと同じ型だった。

相手の力量を推し量る西斗の緒戦の技のようだ。

「経絡秘孔を操る頂上拳こそわが西斗月拳。月氏の生贄に相応しいかどうか……南斗の若僧、すぐには死んでくれるなよ」

拳を口にしながらか、ヤサカが指をめり込ませていく。

「シン様！」

「そうか西斗月拳……幻ともいわれた雷いかずちの斗の秘拳、まだ生き残っていたのか?！」

影の部下と上司が同時に叫ぶ。

それを耳にしたヤサカが哄笑しかけたものの、そんな笑いは途中で消えた。

「んぬ?」

己の突き入れようとする両手が押し広げられていく。

「( )や( )……!」

柔拳と思っていた相手の思いもよらぬ力に、ヤサカの形相が鬼と変わる。

対するシンは涼しい顔をしていた。

「南斗極聖拳きよくせいけんは剛柔双全の拳……この程度で押し込められると思つていいのか」  
「つち」

自分の両腕が完全に押し広げられたことでヤサカが仰け反つた。  
しかしそれはしなりを利用した頭突きだった。

流血を見てほくそ笑んでいた彼が今度こそ大きく目を見張つた。

「なに?!」

額から流れ落ちる血を舐めとつたシンがぬん、と力を込めると同時に、西斗の拳士の脇腹から血が吹きあがつた。

泥臭い戦いはシンのもつとも得意とする戦法であつた。

その彼が静かに告げた。

「座つたまま南斗の千手を受けきつた。そう思つているのはお前だけだ」

脇腹、二の腕の外側がえぐり取られ、ヤサカが上半身の態勢を崩す。

拘束を解かれたシンが後ろに飛びずさり、そして上空へと舞つた。

「ほぎいたなあ若僧……!」

ヤサカの帽子はすでに千首龍撃の威で吹き飛んでいる。

キセルを放り投げた漆黒の服の男は額に指をあてた。そこから流血していることによく気が付いたのだ。

死合いに慣れている南斗の男が急降下で迫ってくる。ヤサカは舌打ちを放ちながら椅子を踏み台に蹴り上がった。

「必中の飛び蹴りだな、そうはさせん」

南斗獄屠拳の発動を膝蹴りで防いだ西斗の男が横薙ぎの剛拳で相手を殴り飛ばす。いつもの受け身を取れず、シンが芝生に叩きつけられて転がった。

「フン。体がしびれて思うように動けまい。最初の雷撃でお前の体術は半減して……」  
降り立ったヤサカが押し黙る。

ベンチから離れてしまった己を見下ろし、ゆっくりとシンに向き直った。

彼が牙を剥いた。その瞬間に風圧が巻き起こった。

周囲の草木がざわめくほどの怒気だった。

「座して仕留められると思っていたが……やるじゃねえか……！」

「立ち上がらねば獄屠拳でお前は死んでいた。いい判断だ。しかし口ほどにもないな西斗月拳」

死と紙一重の戦いに、シンは痺れるわが身のことを忘れて構え直した。

それに対し、月氏の血を引く拳士が喉の奥で笑っている。笑いのなかで彼が言った。

「舐めていたよ南斗聖拳。褒めてやろう……ただ我を立ち上がらせた以上、そなたに勝機はない」

相手の高言を聞いていたシンの、残像が残る構えが止まったのを合図に双方がぶつかり合う。

ヤサカの正拳突きを伏せてかわすのと同時に、シンが南斗迫破斬を撃ち放った。

「ふっ」

宙返りを決めてそれを避けた髭男が鼻で笑う。

胴着が裂けた胸の部分の傷を見せつけるように反り返った。

「ば、バカな」

それを確認したジョーカーが愕然とする。

彼に与えたはずの極聖拳きょくせいけんの奥義が男の胸筋によって完全にふさがってしまったからだった。

「戦うほどに相手から受ける傷は浅くなる。研ぎ澄まされていく感覚が心地よい。それにしても見切りの才があるな、目つきの悪い男」

異様な気の持ち主に眼光を向けられた死神が思わず身構える。

そんな細身の彼を一瞥し、ヤサカが対峙する金髪の青年に飛び掛かる。

闘気に頼らぬ実の拳の威力は凄まじく、それを避けるたびに、シンの体の端々に血しぶきが舞った。

シン主従が知るはずもないが、先程からまるでレイとギドウオーンの戦いを再現して

いるかのような展開だった。

「すばしいネズミめ。だが」

間合いを詰めたヤサカは、生身で龍の刃を受けていた。

それが対南斗の必勝法だと西斗の拳士たちは知っていた。

「刃先なればとて、そなたの龍の息吹は感じられる。根本に当たればただの打撃。そしてその程度ではわが剛体には通じぬ」

少々痛いかな、と補足したヤサカがシンを掌底で押し出した。

「別格の南斗の男よ、褒美を授けよう。わが秘拳を見せてやる」  
「?!」

西日を背にした男の奇妙な構えに、シンが手をかざして相手を窺う。

「腕が消えた……」

「雷を纏いしわが秘技、どこから来るか見えまい」

背に拳を隠し、その筋を悟らせぬ態勢に入ったヤサカが石畳を蹴る。

「西斗月拳秘奥義、真・相雷拳」

静かな怒号を放ち、ヤサカの指突とシンのそれが交錯した。

今までの強敵は彼の渾身の一撃によって粉碎されてきたのだが、今回に限っては、シンのほうがヤサカの拳の軌道を読み違えていた。

雷の指突がシンに突き入れられている。いかすち

逆に南斗の龍の牙は、西斗月拳による雷撃や秘孔により、その威力と速度を封じられていた。

さらにいえば、正統伝承者ヤサカの相雷拳は同門のギドウオーンのそれと比べて威力に違いがありすぎたのだ。

「き、KINGが……」

「シン様が貫手の激突で敗れるなんて」

影主従の震える台詞をシンは遠くからの声のように聞いていた。

初めて撃ち負けた大敵の前に膝をつく。

指突を抜いたヤサカが手についた血を振り払いながら宣言した。

「複数の点穴を突き、弱ったのちに止めを刺すがわれらが西斗。苦しみの中で悔いながら死ぬ」

「……弱ってからだど？ まどろっこしい野郎だ。見物せずにかかってこい」

「ふははほぎけ若僧！ 仕上げを御覧じろ」

ヤサカが高笑う。

一矢報いようとしたシンだったが、力を込めたとたん胸から血を吹き、突いたほうの腕を砕かれて仰向けに倒れこんだ。



「見納めだ、わが神に祈れ」

すでに昏倒している相手に近寄り、正拳を振り下ろそうとするヤサカが腕を止める。蒼白い頭巾をかぶった女が絶叫とともにシンに覆いかぶさっていたためだ。

彼は思わず嘆息して拳を引き下げた。

「……な、なぜだ」

ジョーカーが仰天しながら一步引いたヤサカを見る。

彼は両手を広げ、やれやれといった体で告げた。

「月氏の末裔の誇りがある。いい女は殺さぬ。ましてや南斗ごとき、これ以上痛めつける必要はないか。そのうち総身から血を吹き出して死ぬであろう」

ヤサカが庭園から去るために背を向ける。

それを察して死神も主に駆け寄った。

転がっていた帽子を手にとり、極星を沈めた西斗月拳の拳士はキセルを口にしながらふと微笑し、帝都を後にした。

「北斗神拳よ、長年の怨敵よ……うぬらはあの若僧以上に楽しませてくれるのだろうか」

## 七話

## 不屈

「……俺はどれくらい昏倒していた？」

「数刻ではありますが……どのみち大惨敗ですよK I N G」

「だろうな」

「ジョー様！」

「落ち着けレステイエ。声が大きい」

シンが身を起こしたのは帝都から少し離れた廃墟ビルの中だった。

彼がヤサカに敗れたのち、帝都の争乱に巻き込まれぬよう退散した影の男と女は、気を失っている主を抱えてとりあえずのこの場所にやってきたのだ。

それにしてもレステイエの動揺は収まらない。

「あ、あの男、シン様が体中から血を吹き出して死ぬって」

「それについては問題ない」

「え?!」

レステイエは意識せず金髪の青年を抱きかかえていたが、それに抗する力のないシンは成すがままにさせている。それを見ながら死神が言った。

「KINGは経絡秘孔や破孔の「ずらし」についてはおそらくこの世の誰よりも心得ている。北斗よりもだ」

リュウケンに鍛えられ、ケンシロウ、ラオウ、ヒョウ、カイオウと死闘して得た見切りは、ヤサカにも通じたようだ。

西斗月拳はそのことに気づかぬまま立ち去った。

戦いには敗れたが生き死にの勝負はついていない。

だとしても、シンとしては核戦争後初めての完敗だった。

胸をなで下ろしてため息をつくレスティエが己の体の傷を見てあらためて驚愕するのを、他人事のように眺めるばかりだ。

死神と彼女のやり取りがビルの一室に響く。

「……………このひどい裂傷跡は北斗の……………?!」

「そうだヒョウとやらの北斗の拳。調べてみてわかったが、この傷は泰山寺拳法、そこは孟古流妖禽掌……………あと裏元斗バトロの凍気も受けている」

「あらためて考えると……………間を置かずの連戦すぎて」

「胴着の下は満身創痕だった。さすがのKINGといえど本来の武威は発揮できなかつたということだ」

「万全に見えた西斗とはコンディションが違いましたか……………」

「そんなものは言い訳にはならん」

「確かにシン様ならそう言いますね」

虚空を見つめる金髪の主の反応は薄い。

青白い頭巾の美女は療養して完治してから叩きのめしてやりましょう、と主相手に握りこぶしで力説していた。

疲労と負傷をもものともせぬ主のやせ我慢に対し、ジョーカーが憎まれ口を叩く。

「ケンシロウは貴方に負け続けながらも強くなった。この際あの不屈の男を見習いたいものですな」

目つきの悪い配下の台詞を聞きながら、生き残ったのはレスティエがいたからだと理解している彼が素直に影の女に謝意を述べた。

「はい。次こそ勝ちましょう！」

不屈の女が白い手で自分の両手を覆ってくるのに対し、シンは少しとまどいながらも領り返した。

§ § § § § §

裏元斗の生き残りビジャマがまたも行方をくらし、ファルコたちも引いて帝都が空になった頃、月氏の血族であるトテンプウは、攻略したばかりのとある山里で、西斗月拳のギドウオーンとともに、水が豊富なこの地の温泉に浸かって、わが世の春を謳歌していた。

「名湯と銘酒の組み合わせ、まさに馳走だのう」

顔に傷のある中年男がブランデーを傾けながら、岩の向こうにいる鋭い顔のちよんまげ拳士に問いかけた。

「すぐ出立するんじゃないやなかったのかよ。さすがに温泉となれば話は違うかい」

横顔を見せながらギドウオーンが不本意に呟く。

「北斗と戦う前の湯治だ。レイという南斗の男に少々手こずったのでな」

「……話は変わるがよ。ゲルガといったか、この里のボス」

「あれか。奴は地下の牢獄に閉じ込めておいた。里の女ども、あれを殺せば自裁すると言つて聞かぬ。あのいかつい大男め、外見に見合わず美人ぞろいの若い娘の心をつかんでいるな。長とはかくあるべき」

「バケモノ顔め、いけ好かんヤロオだ」

葉巻を投げ捨てるトテンプウがいる場所は、かつてジュウザが覗き見をし、シンと戦

いかけた里だった。

泰山破奪剛の使い手、ゲルガに圧倒されたトテンプウとその配下がギドウオーンを呼び戻し、その力でようやく鎮圧し終わったところである。

瓶切りと呼ばれる拳を極めた彼でさえ、ゲルガの剛力には到底及ばなかったようだ。先日戦ったレイヤシユウといった南斗の二人の力は言うまでもない。

西斗月拳が別格としても、この世はバケモノばかりかよと彼が毒づくのも無理はない。

「そうだ、南斗の男の妹を攫つたら。あの女はどうしてる」

「アイリという女か。見かけによらず強情ながら、それでも風呂の誘惑には勝てまい。今は女風呂にいるが、もうすぐ連れ出す」

トテンプウが領り返しながら、岩風呂の横で座っている部下と賭け事に興じている。

どちらかといえば女より博打好きな中年男は、ギドウオーンが長身の背を見せて去っていくのを横目で窺いながら、よっしゃワシの勝ちだと雄たけびを上げた。

§ § § § § §

「ユダ様、あれを」

赤兎馬を駆る赤毛の主に知らせるように、バギーに乗る側近の女が指をさした。

そう言いながら、黒髪ポニーテールの女拳士、メイエルは目を細めて先を見る。

隣の座席にいる小男、コマクが双眼鏡を覗き込みながら呟いた。

「見たことがある……あれは……まさかあの部隊は」

「西斗月拳とやらですか？　コマク様」

「いや……あれは北斗?!」

「えっ」

小男と南斗紫蝶拳しちようけんの女拳士が主の反応を見守る。

赤毛の馬の手綱を握ったユダがゆっくりと速度を落とし、地平線からくる一団を待ち

受けようとしていた。

古参の中年男の名を呼ぶ。

「コマク」

「はっ。来るは北斗の……北斗孫家拳の手勢です。大戦前の反乱の鎮圧以来、初めて見

ましたな。たしか奴の名はキョウウン」

北斗神拳抹殺を拳とする西斗月拳にも劣らない憎悪を滲ませながら、逆立った漆黒

の髪の方が先頭に立ってユダの前にやってきた。

赤いマントに黒い服という出で立ちの北斗の拳士は、サザンクロスに向かって進撃中だった。

ここでユダ主従と会うとは思っていなかったようで、多少の驚きはあるものの、行きがけの駄賃だとばかりに気炎を上げながら、ユダに向かって指を指している。

「拳王を名乗る北斗神拳の長兄……その首を狩る前に南斗の雛鳥の羽をむしるのも一興……」

キョウウンの命令なしに孫家拳の軍団が陣形を広げたが、それを見たユダも無言で手を上げる。

赤備えが一斉に後方に引き下がった。

同時に愛馬から降りた彼が赤紫のマントを風になびかせ、黒い拳士と対峙する。

「あのラオウを撃墜したという噂は嘘か誠か、キサマの拳撃の冴えをオレに見せてみよう」  
奔流ともいふべき闘気を放出させる男とは対照的に、若い南斗の拳士は沈勇そのものだった。

気負いなど一切感じられない。

「泰然とした佇まいが気に食わぬ……その涼しい優面やさおもてを引き裂いてやろう」

キョウウンが踏み出した。凄まじい速度の突進だった。



「ぬうりゃ」

北斗孫家拳の正拳が大岩を砕き割る。回し蹴りの空破が円状に地面を抉り上げた。赤い残像の全てを撃ち抜く彼の充血した双眼がカツと見開かれた。

「羽が落ちていゝぞ。その体裁きでどこまでオレの速攻から逃げられるかな」  
羽とは無論ユダの髪である。その落髪の軌道を見切るために数発の空振りが必要としたが、ついにキョウウンが絶影の体術をとらえることに成功した。

「つせえやー！」

気合を吐いたキョウウンの拳が回り込もうとする赤紫のマントを捉えた。  
だが衝撃を分散させるそれが北斗の拳を絡めとる。

「ちっ」

「そのマントは易々とは千切れんわ。逆に捕まえたぞ北斗の分派めー！」

コマクが丸眼鏡をかけ直しながら叫び、主の指突の発動を垣間見る。  
鶴の嘴が筋骨隆々の北斗の胸板を貫いたかと思われた。

「……?!」

ユダの藤色の瞳に、黒髪を逆立てた男の勝ち誇った様相が移っている。

ひと指し指、中指、親指による独特な突き込みのそれを片手で防いだキョウウンが、鋭い歯を見せて笑った。

「本来ならばオレの目に止まらぬ一撃……だがそんな鋭鋒もわが前ではこんなものか」  
「これは……」

「孫家拳そんけいの操そう気。氣づかれずに相手の氣力を削ぐ術だ。よもや力も入るまい」  
態勢を崩すユダを見て配下たちがどよめきを放つ。

それでも彼らは主に加勢することはない。

力及ばずという現実の意味があるものの、徹底したユダの拳是を心得ているからだつた。

「リオウの北斗神拳には中和されたがな、鬪氣が不得手な南斗ごときでは抗えまい」

腕をねじられた赤毛の男が眉を寄せる。そんな白い面を見たキョウウンが心地よさげに嘲笑った。

数々の笑みは狂気の増幅に一役買っているかのようだった。

「すばしこいだけが取り柄の鶴め。こうなればサンドバッグにしてくれるわ」

利き手を取られたまま、ユダは孫家拳の蹴りを縦横無尽に受けていた。

メイエルとコマクが蒼白になりながらそれを見守っている。

それぞれが率いてきた部隊は巻き添えを恐れて遠巻きになっているが、無論それはユダやキョウウンの指示だった。

長身の黒い男が赤い男を横蹴り膝蹴り、かつてない肉弾戦の様相に、思わず赤備えた

ちが槍を構え直す。

それを叱咤したメイエルも気が気ではなく、噛んだ唇からは血が流れ出している。逆に北斗の軍勢は意気が上がっている。

そんななか、裂蹴れっしゅうを放つ本人が小首をかしげて、颯り殺しの標的を見下ろした。

「……ひ弱な鳥どりごとき、数発で碎けるかと思つたが」

巨軀の彼より小柄な赤毛の拳士は額や頬、口から血を流しながらもしぶとく呼吸を整えている。

「このオレの操気掌そうきしょう、よく効くであろう。触れていれば猶更……」

キョウウンが言葉を切つた。

髪が逆立つた状態の北斗の男がゾワつと肌を刺すような感覚に襲われ、死角の位置へ肘撃ちを繰り出す。

「ぬっ幻影?！」

空振りの打撃で態勢を崩した男の肩に、ロングブーツの踵落としが食い込んだ。

「うぬ……」

その蹴り込みを肩自体で弾き、なんとか耐えきつたものの、さしもの剛力を誇るキョウウンが相手を拘束しきれずに、青いアームバンドから手を放す。

ようやく操気掌そうきしょうから逃れたユダが間合いを取つた。

ふうと息をつく主の様子に、従者コマクがふいとさらに大きく息を吐く。

「なんちゆうこつちや。御曹司があれほど蹴り込まれるのを初めて見たわい……それにしても気を奪う術だと？ 恐るべし北斗孫家拳」

コマクの述懐にメイエルが頷く。

優雅華麗な主が戦闘の主導権を握られていることに驚きつばなしだった。

「力は衰えても鋭さは変らんか……応変の死闘に慣れているな。なるほどあのラオウが手こずるわけだ」

地を踏み鳴らす剛勇の拳士がこれからが本番だと言いながら拳こぶしを握る。

今までほぼ無言だった赤毛の拳士が頬の傷を撫で、切れた唇の血を人差し指でぬぐってから静かに言葉を発した。

「これが北斗の分派孫家拳か。楽しませてもらった」

「……なにい？」

狂気の目の男がユダの上げた一本指を見る。

そのことに気が付いたと同時に、キョウウンが間抜けな声を上げる。

「お、お?!」

ブシユウと舞う血が自分のものであることを認識するのに、北斗の男は数拍の間を必要とした。

彼は無言で肩から胸へと斜めに走る裂傷を見つめている。

「気を奪うとは虚を衝かれたが……」

拳の影すら見ることができなかった一閃の名は南斗漿華斬しよつかざん。

しばしの自失から我に返ったキョウウンが、八重歯を見せて仰け反りながら笑いだした。

ユダも不敵に口角を上げている。

「削がれてなお斬れ味は変らぬようだ。今度は私が遊んでやろう」

## 八話

## 通説を破る衝撃

キョウウンの纏う赤いマントが千切れとんだ。それはマントだけではなく赤い液体も含んでいた。

「なっ……?!」

二度目の漿華斬しょうかざんを紙一重という余裕を見せて躲かわしたはずの北斗の男がまたも体勢を崩す。

バクツという音を立てて斜めに走った胸部への亀裂は二度目だった。

これでキョウウンはバツの字の裂傷を胸に負ったことになる。

マントが完全に剥がれ、黒い胴着が破れ散った。

逞しい胸筋があらわになったが、それは鮮血にまみれていた。

「気を察して避ける癖があるようだが」

鶴の嘴のごとき指先を上げ、赤毛の拳士が静かに言った。

「練度が増すほど殺意は消える。それを絶影と人は呼ぶのだろう」

シユン、という空気を切り裂く音で北斗の男の両頬に、指の数だけ傷が入った。

「うぬれ」

「わが拳に斬れぬものなし。硬気功など無意味だ」

「……ほざいたな、非力な小鳥め！　こんなものはわが剛体からすればカスリ傷」

そう吠えながらのキョウウンの踏み込みで砂埃が舞った。

赤い衝撃をかくぐつて間合いを詰めてきた狂気の男に対し、ユダが感心したように目を見張る。

「ほう、見た目より俊敏だな北斗」

「つかまえたぞ雛鳥、大言の報いをくれてやる！」

編み込んだ部分の赤毛をつかみとり、鬨気をこめた正拳を彼の白い面に叩き込んだ。

経絡秘孔を突かず、破壊のみに重点を置いた剛拳を繰り出したのは、余裕ぶつた優男に対する当てつけである。

血の花火が散った、と思ったのは受けた側以外の連中だった。

異口同音に主の名を呼ぶ赤備えとおのが北斗の手勢。孫家拳を極めた自身でさえも見誤った。

「あ……？　なん」

拳を鍛えすぎたという側面もあっただろう。ようやく痛み気づいたキョウウンが叩き込んだ利き手を見上げて、ためえええと叫んだ。

「お、オレの拳を……くっ砕きやがった！」

受け止めた南斗の赤い牙に北斗の血がついている。  
血にまみれた狂気の黒い拳士が仰け反りながら後退していく。

「南斗ごとときに孫家の剛拳が……!!」

絶叫に近いキョウウンの台詞を聞き、南斗紫蝶拳しちようけんの伝承者、メイエルがようやく事態を理解したのか、吐く息とともに告げた。

「いい加減以前の認識から抜け出せ。早死にするぞ」

「……女あ」

返り血を浴びた美しき鶴がマントをめくりながら背筋を伸ばして身を起こす。

その雄姿をキョウウンが視線で殺しかねない勢いで睨みつけている。

そんな彼を指さし、ユダは何の感情も見せずに手招いた。

「ラオウに敗れたお前がラオウを退けた我らが主に立ち向かう。その意気やよし」

「?!」

丸眼鏡の小男は事実を口にする。

しかし当然にしてそれがキョウウンに対する煽りに他ならない。

ましてや格下の南斗（北斗の分派は皆そう思っている）に雑魚扱いされることなど屈辱以外の何物でもなかった。

「クククク」



充血させた目を見開き、北斗の拳士が無事なほうの腕を上げた。

「……よくも言うた。眠れる獅子を起こしたぞ鬼どもめ」

ピリついた空気が一瞬無になったかと思われた。

赤備えたちが身をすくませた。コマクとメイエルも息を飲んだ。

北斗孫家拳の男が気合の咆哮とともに、自ら頭部に秘孔をつき、しばらくそのままの態勢で何か堪えていたためだ。

「……」

「な、なんだ」

大地が揺れ、小男が一步引いた。南斗の拳士としての勘か、メイエルがそんな小男の襟足をつかんで飛びのいた。

「……激昂こそ究極の闘気……」

ズズズズという地鳴りとともに黒髪を逆立てた男が、上半身の胴着を吹き飛ばして光る双眼を標的に向けた。

孫家拳、きょうしんこん狂神魂。

そう告げた異相の拳士の声は大きくなかったが、ユダ以外の皆の度肝を抜くことに成功していた。

メイエルが北斗の奥義を反復する。

「狂神魂?!」

「狂いの気はオレですら抑えられぬ……!」

破壊衝動が風圧を生んだ。周囲にいる敵味方が大きく仰け反った。

常軌を逸した形相の拳士が踏み込んでくる。

掌底を受けた赤い衝撃が荒地を削って後退していく。

「おう、この速さの押し込みを防ぐか、南斗め!」

拳のひとつひとつにボツという重低音がついてくる。あるいは躲かわし、あるいは手甲で受け流し、それでもユダの体は血煙に包まれた。

当事者以外はその攻防を目で追うことはできなかつた。

音がする方向へひたすら視線を動かすのみだ。

「カツ」

相手を蹂躪していたキョウウンの笑いは怒号に等しい。ハハハハという大音声のなかで獲物の鮮血の量は増すばかりだった。

殴打中の男の拳は血まみれだ。

「二度と見られぬように白い顔を殴り潰してやる」

「やめろ!」

「ああ?! 聞こえんなあ……!」

制止しようとする女拳士の声を心地よく聞き流し、キョウウンは片手を不能にされた恨みとばかりに何度も剛拳を叩きつける。

しかし彼がふと違和感に気づき、振り上げて腕を止めた。

「何をそんなに驚くか騒がしい……」

背後から配下の悲鳴が聞こえてくる。ああああという反応をわずらわしげに一瞥した北斗の男は、吐き気を催したのかウおつと頬を膨らませた。

「な、に……」

「忠告してやったにも関わらず、同じ過ちをまた犯したか埒らちもない。わたしには主とお前の血の色の違いがわかる。これで両の手は碎かれた」

憐れむような南斗の女拳士の声に、キョウウンは狂気の虎眼で上げた腕の先を見た。

「こつこつ、これは……?!」

「常人が素手でレイピアを殴り続けたらどうなるか……怒りで痛みを忘れた者の末路だな」

メイエルが激昂中の男を眺めて告げる。

その男は腕の半分まで、ユダの指拳で貫かれていた。

赤毛の返り血だと思っていたが、それは自分のものであると知ったキョウウンが咄嗟に退いて間合いを取り、何が起こったと困惑しながら言い放つ。

「こつこのオレの北斗の拳が……全て粉碎こぼされるなど」

「……拳王すらそんな愚は侵さなかつた。聖帝きよくせいけんですら極聖拳に撃ち負けた。南斗聖拳を真に極めたお方の龍の牙、正面から抗うべきではない」

「然り然り」

中年男のコマクが何度も頷き、物静かに佇む主を窺う。

「……指一本。それだけで狂気を宿した恐るべき手練れの拳を撃ち砕く。それにしても、機嫌の悪い今のユダ様に出会つたあやつの不運よ。同情してしまうわ」

破損した両の手を交互に見て絶句するキョウウンの耳に、フウウウという風を切る音が聞こえてきた。

「西斗と戦う前のいい運動になった。言い残すことはあるか？」

「こ、こんなことがありえるのか……！ おつオレを相手にここまで圧倒するとは」

悲鳴の台詞を口にした北斗の男が呆然と赤毛の男を見れば、ほとんど傷らしい傷を受けていない。

それはすべて特注の赤紫のマントに衝撃を吸収されているように思われた。

「孫家拳が……秘孔すら突けず力負け……つか、あぐ」

上腕まで達した裂傷の痛みに耐えられず、強剛な黒い拳士が顔じゆうに汗を浮かべながら後退していく。

両腕を開いたユダの構えはまさしく鶴が羽ばたく様相をあらわしている。

死合いをしかける相手を間違った、と狂気の中の正気でキョウウンは思った。

「来世は狂気や闘気などに頼らぬ拳を会得するがいい。南斗紅鶴拳奥義」

「諦めは悪いほうでなあ、まだ足は生きている!! 北斗孫家拳……」

キョウウンの裂脚が南斗に届くことはなかった。

北斗に一度見せた技は通用しない。

その通説を真つ向から破った赤い衝撃が、孫家拳伝承者の熱い胸板に突き刺さった。

第三の羅将、ハンを撃破した南斗斫撃しやくげき。

流派は違えど同じ北斗の拳士には有用な奥義のようだ。

紅鶴拳独特な、異様な配置の指突が敵の背中を突き抜ける。

音もなくその牙を抜いた華麗な男が血塗られた腕を振り払う。

大量の赤い血が荒地にまかれ、同時に突風が荒野を駆け抜けていった。

「なん……なんて野郎……だ……オレの、あし、もろとも……」

ねじ切られ、高く舞っていた利き足が地に落ちてきた。

時間差を置いて北斗孫家拳の伝承者がうつぶせに倒れていく。

キョウウン様とわめきながら彼の部隊が主に駆け寄る。

赤兎馬に乗り上げた赤毛の青年が手綱を取って遙か彼方に視線を向けた。

小男が問いかける。

「偵察隊によると、この先には何者かに襲撃を受けた小さい里があるそうです。様子見  
がてらそこで休息を取られては」

「……」

「軽傷とはいえ北斗に気を吸い取られた後で西斗と戦うのは危険ですぜ」

様子見とは占拠されたその里を開放するという意味も含んでいる。

中年の下僕の言葉に少し考え込んでいたユダだったが、今度はメイエルに促され首を  
縦に振った。

§ § § § § §

南の孤島ザンクロス。ラオウ不在による動乱に満ちた大陸とは違い、海を隔てたこ  
の城塞は未だ平静に保たれている。

帝都や拳王領内の混乱、北斗の分派の再蜂起という報告を受けていた慈母星と関係者  
たちは、あらためてもたらされた修羅の国の状況を聞いていた。

天帝の子ルイとともに玉座に座る南斗の象徴が緊張していた顔を少し和ませた。

「……ケンが帰ってくる」

「修羅の国は第二の羅將、ヒョウに任せ、ケンシロウ様はラオウとともに帰還するのと」と

跪いていても大抵の男より大きい山のフドウが穏やかにほほ笑んでいる。

喜色を隠せず頷くユリアの前に、海のリハクが賢者トキを連れてやってきた。

広間じゅうが驚きに包まれる。

五車だけではなく、南斗百斬拳のダンテ、鉤爪の使い手ナリマンといった荒くれ者も顔を見合わせるほどの以外な人物がトキの後ろで控えていた。

「あれは……」

「賢者の偽物を語るあやつ、ついに本物に諭されたか」

ナリマンとダンテが胡散臭げに渦中を見守っている。

トキが象徴に紹介した者の名はアミバ。

元は南斗の拳士であり、ヒューイやシユレンとも顔見知りだった。

悪人そのものであった以前の彼とは違い、沈勇を絵にかいたような佇まいを見て、五車の彼らも驚きを隠せない。

象徴に対し完璧な礼を施したかつての南斗の男は、今では敬愛の対象になった北斗の

次兄の弟子になったことを告げていた。

「仁者を師として恥じぬ存在になることを期待する」

天帝の子ルイの形式的な台詞に、御意、と平伏するアミバが表情をそのままに心中で呟いた。

（いつ死んでも不思議ではないこやつから秘術を教わるのは今しかない。隠忍自重は今のうちだバカどもめ。トキの北斗神拳を受け継げばこんな島などに用はない。おれさまこそが真の賢者、真の天才だとこの世に知らしめてくれる）

面を伏せる男の口角は上がっている。

ここにいる衆目の多くは歴戦の勇士であり、モヒカンなどの有象無象とは出来が違うている。

それでもアミバの悪を見抜ける者はほとんどいなかった。

彼は拳法の腕よりまず邪心を覆い隠す術を磨いてきた。それが功を奏したようだ。

ただひとり、下層の身から象徴の護衛へと這い上がってきたナリマンが違和感を覚えて眉を上げたものの、謁見の間において無粋を口にすることはなかった。

最年長の海が諭すように告げる。

「大陸の混乱がこのサザンクロスに及んだとき、われら五車の大半は前線へと出向いていく。その際、南斗百斬拳のダンテやナリマン、トキ様の弟子たるお前にわが主を守つ



てもらわねばならぬ」

「承知」

「……死ぬんじやねえぞアミバ。あのトキの後継者となるからには、おれやこいつらを身代わりにしても生き続けろ」

若き賢者候補の神妙な様子を見ながら、雲のジウウザが風や炎に顎をしゃくつて軽口を叩く。

今回ばかりはヒューイもシユレンも何も抗弁しなかった。

やがて政治的なやりとりを終えた天帝の子ルイがユリアの手に引かれ、別室へと下がっていく。

それと入れ替わるように慈母性星の影武者たるマミヤが姿を現した。

彼女はバルコニーの向こうに広がる街の景色を眺め、物思いに耽っている。

そんな背中を見守るトウが父に向かって言った。

「マミヤさんの自薦の身代わり。我々にとつては行幸以外の何物でもないですが……ユリア様はご不満の様子」

「……ここは堪えてもらわねばならぬ。いずれ訪れる太平の世のため、ルイ様とともにあのお方は必要な存在。しかしのう、手段を選ばぬわしは……そのうち必ず地獄に墮ちような。慈母を支えるは悪鬼羅刹、なんとも皮肉なものだ」

「父上の謀略に賛同したわたくしも同じこと。死なばもろともでございます」

海の娘の断言に、風雲炎山の四人がわずかに目を伏せた。

ユリアのためならばいつでも死人と化す者たち。そんな男たちに善悪の概念などす  
でにない。

大義のために斬り捨てられる小義の側に、彼らは既に立っているのだ。

## 九話

## ふり幅

「相変わらず傷の治りが早い。これも内なる気脈とやらの働きですかな」

死神の軽口は安堵の証だった。

廃墟の寺院を利用してしばらく療養していたシンが上半身を起こした、

ジョーカーから金の縁取りを施した黒い胴着を受け取る。

銀色の両肩のプロテクターに手をやり、感触を確かめながら立ち上がった。

「お前やレスティエには助けられてばかりだな。感謝する」

主の言葉にらしくないと思いつつながら死神が何かに気づき、窓のほうに視線を移す。

そして呟くように告げた。

「K I N G」

「……ああ」

外の気配を悟った男二人が窓側に近寄る。

ジョーカー配下の南斗の影、青白い頭巾姿の女が紺色の髪の子と対峙しているのを

窺って、シンが目を見張った。

その長身の男の怒号が聞こえてくる。

「……ここに金髪の若僧が潜んでいるはずだ、呼んで来い！」

センター分けミディアムパーマの拳士は南斗の斬撃を躲し、レスティエの手首をつかんで言った。

「ふっ問答無用か……それにしても頭巾で隠していてもわかるほど美形の女だな。お前の体に聞いてもよいのだぞ」

「じゃ」

手首を捉えられたままレスティエが蹴りを放ったが、それは優しく防がれてしまった。

彼女の腕や足をへし折ることは容易であったものの、女好きの性癖ですでに食指が動いている。

シンを倒した後生け捕って持ち帰ると思いつながら、珍しい道衣の男が両手を上げた。

「聞いているか金髪の若僧！ わが名はタイエン、覚えがあらう。女が無事にいるうちに今すぐわが前に姿を現せ!!」

「傷が癒えたばかりのシン様に何の用だ」

「……そなた、聞いておらぬのか。北斗曹家拳と南斗の遺恨を」

「え?!」

北斗の拳の名を聞いた女拳士が驚愕するのを見て、タイエンはそのしなやかな肢体を

押しやった。

寺院の二階から飛び降りてくる逆光の影を見ていたからだ。

「ふははは待ちかねたぞ、南斗聖拳、いや」

呵々大笑しながらタイエンも地を蹴った。

空中で表裏一体の拳がぶつかり合う。

「見切ったぞ！ キサマの大技、南斗獄屠拳を」

「ほう」

「でかくなつたな若僧く南斗極きよくせいけん聖拳つ!!」

双方が雑草が生い茂る地に降り立つ。

影の長が部下を引っ張り、傑出した拳士たちから距離を取った。

「ジョー様、あの男が北斗曹家拳のタイエン……」

「のようだな。大戦前の分派の反乱に際し、KINGはあの男を一度破つたと聞いてる。その師が赤い衝撃に惨敗したとも」

「……つまりタイエンはサザンクロスを急襲するよりシン様との決着を望んだわけですか」

「手勢は南下させたのかもしれない。いずれにしろ彼は身一つでここに来たようだ」

周囲に北斗の部隊の気配がないのを悟ったジョーカーがさらに後退していく。

曹家拳の凄まじい蹴り上げで地盤がめくれ上がった。地響きはタイエンの突きで寺院の壁が崩落したからだろう。

「相変わらずすばしこいな野郎だ……今度はキサマから仕掛けて来い、龍の牙を久しぶりに見たい」

「戦鬪狂め」

回復後の腕馴らしにちょうどいいと思ひ直したシンも思わずニヤリと笑う。

残像が残る構えを見たタイエンが会心の笑みを放つ。

「南斗千首龍撃」

風が舞い、千の龍の牙がタイエンを襲う。息を吸い込んだ長身の拳士がうおおと気合を吐いた。

「爆龍陽炎突!」

人差し指の北斗の突きが極聖拳の奥義を迎え撃った。二人の間に血煙が散る。

レスティエが息をのんで呟いた。

「し、シン様の黄金の牙をほぼ全て抑え込んでいる……あの男」

「さすがのわしもあのやりとりは見えん。それにしても奥義中の奥義の応酬だが、互いに不発に終わっているな」

汗をぬぐう死神が風圧で仰け反る部下を支える。

「鍛えに鍛えたわが指突、いかにキサマの牙とて容易には砕けまい。オレはこのときを待っていた……南十字の街はキョウウンやソウブに任せる。北斗神拳など後回しだ。その金髪首こそわが宿願」

「しつこい男だな」

「執念こそ拳法家の極意だろうがあ！」

「……なるほどお前も」

血しぶきのなか、北斗南斗の応酬が終わった。

互いに奥義を打ち終えた二人が間合いを取る。

指先の血をなめとったタイエンが満足気にニヤついた。

「これで極聖拳きよくせいけんの奥義は二つとも封じた。北斗に一度見た技は通用せん」

「それが大言に終わらねばいいが」

「キサマのそれが大言だというのだ！」

タイエンが大胆に踏み込んでくる。カッと両目を見開いた男の無影の脚が金髪の青年を襲う。

「秘伝」

空気を切り裂く音とともに鞭のようにしなる蹴りが放たれた。

二人の影が気づいた時には、シンは弾かれて飛ばされていた。

彼の胴着に北斗の足跡がついている。

片足を上げたまま、タイエンが地に伏せる相手を眺め、奥義の名を告げる。

「幻夢百奇脚。キサマに見せるのは二度目だがあ……今のオレの脚は見えまい？」

死の修練を経た男の気合は周囲の草地を揺るがすほど荒ぶっている。

たまらずレステイエが主の元へ駆け寄った。

「シン様！」

「女あどけい。可愛がるのは少し後だ」

昏倒しているように見える金髪がわずかに動いた。その前に立ちはだかった長身の拳士が宿敵を見下ろした。

「オレの不意を衝こうとしても無駄だぞ」

タイエンの蹴りがレステイエに見えることはない。そんな彼女を避け、百奇脚は倒れる標的に襲い掛かる。

「フン、やはり死に真似か芸のない」

タイエンの利き足は身を起こしたシンの利き手で捉えられていた。

間にいたレステイエがようやく気付き、はつとして主を振り返る。

膝について剛撃に耐えていたシンが彼女を見た。

いつもは目で語る南斗宗家の拳士が珍しく言葉にして同門の女を諭す。



「レストイエ。下がっている」

「……」

「この男はお前を狙う気はないらしい……奴に手を抜かれると俺の拳が鈍る」

「……はい」

青白い頭巾の美女がタイエンから渋々遠ざかる。

口笛を吹く北斗曹家拳の使い手がやはりいい女だ、と呟いた。

「キサマを倒してあれをもらうぞ。一途なところもいい」

「レストイエを巻き込まぬとは……礼を言う」

「これで大戦前の借りは返した。五分と五分だ」

改めて構える北斗と起き上がった南斗の拳士が対峙する。

「今度こそ完膚なきまでに叩き潰してやる、金髪の若僧……!」

「その返礼にお前に復古の拳の秘技を見せてやろう」

シンが両の手を見せながら顔の前に上腕を上げる。そんな構えを見たタイエンがこめかみに血管を浮かび上げさせた。

「見たことがねえなそんな構えは」

タイエンほどの男が武者震いを見せた。

「それがキサマの奥の手というわけか。二大奥義を封じられてなお放てる大技があるな

らやってみろ。オレの先手に生き延びれたらの話だがな」

「御託はいいからかかってこい」

「聖帝や拳王にすらひるまぬその剛毅、死すまで変わらぬか。上等だあ」

独特な構えのシンの視線が下を向いた。その一瞬の目の動きを北斗の男は見逃さなかつた。

「ふははっ」

「?!」

「残念だったなあ、これは」

百奇脚はまさに幻夢だった。

それは気当たりのみで実体はない。

蹴りに自負があるシンが気当たりに耐えきるのは容易だった。

だが実の拳によるタイエンの指突に反応が遅れた。

「鞭のようにしなる爆龍陽炎突の軌道、直線の動きしかできんキサマに読めるかなあ?!」  
いくつもの重低音が空を裂く。孫家拳の拳先は復讐の相手の背中に向けられていた。

雷が落ちたかと思われるほどの衝撃が周辺を揺らす。

レスティエは思わず目をつぶった。ジョーカーはしゃがんで中腰になっている主を窺う。

「んん?」

タイエンは左右の指がシンの背中を突いた感触を得たものの、己の髪が千切れ、風に流れていくのを見つめていた。

「んな………に?!」

陰の北斗の拳を抑え込んだ南斗が陽の拳で反撃に移る。

憎き若者の静かな声を彼は驚愕しながら聞いていた。

「南斗陰陽双斬手」

「しやらくせえ」

タイエンが手甲で斬撃をいなし、蹴りを叩き込んだ。

「?!」

金髪を持ち主の姿は前方から消えている。

北斗の男は南斗の男が両手を上げて跳躍するのを瞬間に察した。

双斬手は畏かと眩きながら、タイエンが吠える。

「バカめが、封じた拳を三度向けようとは!」

ダン、と片足を地に叩きつけ、タイエンも飛び上がる。

「奇襲の際に放ったアレがもう一度タイエンに通じるとは思いません、ジョー様」

「……北斗の拳に同じ技は通用しない、か?」

「え？」

珍しくタバコを取り出した死神の落ち着きに、レスティエが眉を寄せる。

「北斗神拳伝承者ケンシロウがあのお奥義を見切るまでどれほどの死線を超え、あの方と戦ったと思っっている。療養で体がなまっていたK I N Gのエンジンがようやくかかったようだ」

ふうくと煙を吐き出した影の長が空中で激突する斗の拳士たちを見上げ、ニヤリと口の端を上げた。

「西斗月拳に敗れたのはかえってよかったかしれん。極きよくせいけん聖拳奥義、南斗獄屠拳がふり幅を得ただから」

# 十話 赤い鬼

北斗孫家拳の妙技、無影脚を進化させた幻夢百奇脚が空を切った。

鞭のようにしなるタイエンの蹴撃は、発動前にわずかな溜めを必要とする。

その隙に、シンの蹴りはタイエンを衝き抜けていた。

「はっ?!」

タイエンが肩越しに背後を見る。相手の金髪が風に靡いていた。

空中でのやりとりは一瞬だったが、双方にとつてはその何倍にも感じられたはずだ。

「南斗獄屠拳……もはやそんなものは効かぬといったはず」

北斗と南斗の拳士が着地する。二人とも動かない。

「KINGの体調は修羅の国に渡る前に戻った。しかし武威は羅将たちとの死合いを経てさらに増している。病み上がりのためか、今回は出足が遅くなってしまったが」

ジョーカーがタバコの煙を吐きながら呟く。レスティエが主の背中を窺いながら言った。

「西斗月拳のヤサカについても同様ですね」

「うむ。だが次にきやつは思い知ることになるだろうよ。とどめをささず去ったこと

を」

ポイ捨てしたタバコを死神が拾い上げる。部下の女のジト目を受けたためだ。

そんなやりとりの間に、互いに背を向けていた南北の拳士のうち、北斗の男が血しぶきを上げながら仰け反っていた。

食いしばった歯から血を流しながらタイエンが呻く。

「お、オレの死角から抜けやがった……とでもいうのか……?!」

一撃で四肢に衝撃を走らせるという、きよくせいけん 北斗極聖拳独特の奥義。

それでも彼はなんとか態勢を整えて転倒を免れていた。

全身を硬気功で強化していた下準備が生きた形だ。

それでも硬化の部位は容易く切り裂かれている。

「触れば必ず斬る」

「……」

己が拳の矜持を語り、シンが振り返る。上体を折り曲げる北斗の男も振り向いて顔を上げ、やってくる南斗の男を憎々しげに眺めやっている。

「このタイエンと同じ技を何発も放つとは……ふざけやがって……ならば次のキサマの奥義は」

「わかっているのなら話は早い」

睨みあう二人が同時に両手を広げた。孔雀が羽を広げるような残像を残すタイエン、単純な構えの手の動きを止めたシン、両者が動いた。

「ぬうあああああ、爆龍陽炎突！」

北斗の怒号が響く。この時点でタイエンは機先を制した、と確信した。

彼の拳も脚同様、しなる鞭のようになる前の、溜めによる一瞬の隙がある。

「あっ」

「?! あの野郎、わざと隙をさらして」

レストイエの悲鳴に重なって、ジョーカーが火のついたままのタバコを握りしめて唸った。

タイエンの応変の才は北斗神拳の伝承者レベルに達している。

一度見切られた隙を今度は誘いに変えたのだ。

千の龍撃を霧散させるように、陽炎突が迎え撃つ。

その反動からか、互いに砂利を踏みしめて後退していき、二つの砂嵐を浮かび上がらせた。

今日は風が強い。それはすぐ消えうせた。

「やるねえ……オレが千手龍撃を相殺するのを予測していた、ってことか。止めは別の……」

吐血のなか、タイエンが鍛え抜かれた胸筋を両手で押さえて片膝をつく。

大敵の拳と相打ちになったシンは奥義の衝突で弾かれる際、もうひとつの術を繰り出していったようだ。

それは先にシンが言い放った復古の秘技を見せてやる、という答えに他ならない。

「なるほどな……これが……ケンシロウに与えた七つの傷……の龍の牙……か」

こごかしいわと吠え、男が凄まじい気合を込めて筋力を増幅させた。

その膨張により、開いた穴を瞬く間に塞いだ剛勇の士が、涼しい顔の相手ににじり寄る。

「まあだ勝負はついてねえぞ……シンっ」

構えを解いた金髪の青年が静かに問いかける。

「なにゆえケンシロウが胸の傷を残していると思う」

「ああ?!」

「南斗極聖拳、毒蛇穿穴をまともに食らった者はな、治そうとしても元に戻らぬのだ」

相手を絶命させるのではなく、戦闘不能にさせるためのシンの切り札である。

一本指による七つの連撃。その破壊力は千手龍撃に寸分も劣らない。

ほざけと言いかけたタイエンがガクガクと震え出した。

再度の吐血をしたことで、素肌の胸元を見下ろす。



「……あ?! お」

「表面の傷を塞いだようだが内部は無事ではすまん。それが渾身の気を内に込めたわが指突」

ついにタイエンが両膝をついた。手のひらに吐いた血を握りしめ、シンを見上げる。静かなる男の双眼を受け、タイエンはクソつたれと悪態をついた。

「俺やユダの南斗の拳には正面からぶつからず、ひたすら避けよ。次の死合いまでそれを肝に銘じるがいい」

「ま……また負けるのか、おい……」

ゆっくりと倒れ行く大剛の男を一瞥し、シンが長身をひるがえした。

いつの間にもやってきたのか、孫家拳の配下の部隊が主に駆け寄る。

その喧噪を背に、死神とレスティエが後に続く。

「あの男、とんでもない化け物でしたが……思えばシン様の圧勝でした」

「そう見えて紙一重。北斗と南斗の戦いに圧勝などほとんどありません」

「ほとんど? 例外もあることはあるんですね」

「あの赤い衝撃がまさしくそれだ。KINGは……まあ西斗に惨敗だったな。しかしそれでも生き残っている……そして二度も同じ相手に負けるお方ではない」

無責任に呟くジョーカーに、満腔の意をもって頷くレスティエが金髪の主の背を追い

かけた。

§§

§§

§§

§§

「てっ、テツてんテンプウ様、親分!!」

「なんじやいうるさいのう。今ちよつといいとこなんだ邪魔を」

「雀卓囲んでる場合じゃありませんぜ、殴り込みでさ」

「あ?」

顔に傷のあるガマガエルのような風体の中年が、椅子を回して振り返る。

「ここは乗っ取ったばかりの里だあ、あのゲルガって長の仇でも取りに来たのか?」

「な、なんか奴ら赤い軍装で統一してやがって。サルみたいな素早い小男とか、親分みてえな瓶割りの術をつかう女とか、いろいろおかしい連中で」

「……わしと同じ技だあ?」

吸っていた葉巻を手にしたトテンプウがちつつちつと言いながら、ヤクザ者の部下にギドウオーンはどこにいると尋ねた。

「なんか……アイリっていういい女を連れて裏口から出ていく最中でしたぜ」

「呼び戻せ」

勝負師としての勘が働いたならず者の親玉が行くぞと告げ、手下を従えて里の広場に向かう。

「ありやなんだ?!」

仲間の首が空に浮かんでいる。それが落ちた大地には、すでに彼女に斬られた男たちの亡骸が多数転がっていた。

「やっぱりあれは親分の瓶切りじゃねえか」

「瓶切りだ? このクソ爺がメイエルと同じ拳をふるうつてのか笑わせるなよヤクザども」

「?!」

屋外に出たばかりのトテンブウと部下たちの真上から、心底呆れたような声が降ってきた。

彼らが見上げる先に、軒先の上に座り込む丸眼鏡の小男が見下ろしている。

「なんだてめえは!」

「弱い犬ほど吠えやがる」

「ぶっ殺す」

身軽な部下の一人が道衣をまくって飛び上がった。

だが俊敏だったやくざ者は空中で小男が手にした鉤爪かぎづめに顔を裂かれ、蹴り込まれて地

上に叩き落された。

「ヤロウ……わしの瓶切りの餌食になりたいようだな」

トテンプウが手刀を掲げてかかつてこいと煽りだす。それを見たコマクが足で拍手をしながらかげ笑った。

「それどころじゃねえで。広場の手下ども、全滅しとるぞ」

「……あんな細い女が親分の側近を皆殺しかよ」

そう呟いたならず者のひとりコマクに首ねっこをつかまれた。小柄な男にしては信じられない怪力であり、猿臂えんびだった。

その丸眼鏡の中年男がお前らはなにもんだ、と尋ねている。

部下の窮地を一瞥し、トテンプウが広場を見回す乱入者の女と対峙する。

ポニーテールの彼女が白い指先を向けて言った。

「貴様がボスだな」

「女……少々やるようだがなあ。おいたがすぎるぜ」

口角を上げた女拳士、メイエルが赤いアームバンドの腕を伸ばす。

「ここに転がっている下郎どもよりはまともなようだ。少しは楽しませろ」

「大口をたたきおって、小娘が」

トテンプウが気合を入れながらメイエルに突きかかる。彼女はそれをふわりと避け

て着地した。

マフィアのボスが目を見張る。自分の瓶切りを躲した女は初めてだった。しかしこの腕一本でヤクザ者を率い、裏社会で勢力を築いてきた男だ。

レイにつけられた顔の裂傷をもとせせず、目にもとまらぬ斬撃を続けて打ち込んだ。

だがその剛腕の動きが止まる。

彼とは比較にならぬ細い手の持ち主がそれを易々と止めていた。

現実を理解できず、トテンプウは間拔けな声を上げる。

「んな……え?!」

「……つまらぬ。やはり南斗聖拳ではないな。そんなぬるい拳でわたしの前に立ちはだかるとは、笑止な」

手首をつかむ女の力はすさまじいもので、怪力を誇るトテンプウが突き放そうとしてもビクともしなかった。

「放しやがれ!」

「里の人間に対する殺戮、その罪を受けよ。南斗紫蝶拳しちようけんの奥義を見せてやる」

§ § § § § §

「ひええええええ」

トテンプウの悲鳴が広場に響く。

黒髪のポニーテールを揺らして地に降り立つた南斗の女が立ち上がると、彼の両腕を断ち切った技の名を告げた。

「蝶舞翅開断」  
ちようぶしかいだん

腕を失ったならず者の親玉が尻もちをついた。

助勢しようとした配下たちの数人がメイエルに打ちかかるも、手にした武器ごと解体されて新たな血の海を増やすのみだった。

トテンプウが後ずさりしながら背後に向かって叫ぶ。

「おいしいいい、てめえら奴はどうした?！」

「そ、それが」

建物の裏手から戻ってきた角刈りの手下がすでに何者かと殺りあって、と言いかけて、轟音が響く建物のほうを見た。

「な、なんだ」

皆が屋内から建材を破壊して弾き飛ばされてきた巨漢を見る。

それが西斗月拳の拳士だと確認して問いただそうとしたものの、総髪（もみ）の男の形相にトテンプウもろとも押し黙った。

「ギドゥオーン……あの怪物が押し込まれるのを初めて見た……」

というのが手下たちの統一した意見だった。

顔に×の傷をつけられた中年男は瓶切りの拳法使いとしての勘で、建物から出てくる男の気配に一番先に気が付いた。

「あいつぁ」

赤毛、赤紫のマントを揺らして姿を現したのは長身の若者である。

トテンプウは思わず組織の用心棒のような異相の男に呼び掛けた。

「おい、おめえともあろう者が……まさかあの赤毛の若僧に吹き飛ばされたってんじやねえだろな?!」

応急の手当を受けるトテンプウを横目で見た西斗月拳の拳士が、ちつと舌打ちを放ちながらも返答はしなかった。

得体の知れない相手が無言で殺気を叩き込んでくる。

ギドゥオーンほどの使い手が連れていたアイリを一瞬で奪還され、さらに衝撃波で屋外まで弾かれるなど恥辱以外のなんでもない。

ヤサカに知られたら始末されるレベルの失態だった。

「南斗紅鶴拳、伝衝裂波。どうやら切断はまぬがれたようだ、やるな」

ギドウオーンがメイエルの感心したような台詞で目を細める。

正面から堂々と歩み来る赤毛が以前倒したレイという男と同門の拳士だと認識したようで、ふんと鼻を鳴らしながら双腕を上げた。

「なるほど……その凄まじい殺気は仲間を半殺しにされた恨みだな」

ハハハハと高笑う鋭い目の大男がゆっくりと両手を広げ、言葉を継いだ。

「南斗ごときが我を一撃に飛ばしたのはその怒りゆえか。だが麗しい同胞愛など虫唾が走るわ。道化の男め、奇襲など二度と通用せんぞ……」

ピシ、という音がした。

剛強な肉体が割れる音で、ギドウオーンは静まり返った広場のなかで生まれて初めての反応を示していた。

は?! という彼らしからぬ声は自分のものだと知ったと同時に、古風な胴着が風に乗って飛んでいく。

朱に染まつていく上半身を他人事のように眺めていると、また女の声がある。

煽るといふより案じているような声色だった。

「即死からはまぬがれたが……ユダ様の拳を正面から受ける不調法はもうやめろ。傷が



開いた以上、二度は耐えられん。次からは必死で逃げよ」

「なっ……」

胸部に斜めに走った裂傷と同じくして、ギドウオーンの両頬から血が流れている。

「……」

赤毛の男が繰り出した両手の斬撃は受けきったはずだった。

衝撃を流せずに薙ぎ飛ばされたものの、この程度かと彼は内心嘲笑ったものである。

だが速すぎる衝撃に対し、その効果は遅れてやってきた。

そう思ったとき、今まで無言だったユダと呼ばれた赤毛の男が初めて口を開いた。

「レイの妹を連れていたからには、お前は私の仇」

キインという衝撃がまだ耳に残っている。残響音のなかでユダが告げた。

「拳士としての誇りを全て斬り碎くまで殺しはせん。あがけるだけあがいてみよ。北斗への憎悪など忘れるほどの屈辱を与えてやろう」

今まで見たことがない主人の静かな怒りを見て、コマクが肩をすくめる。

美しき鶴が鬼になったわ、と呟いたコマクが里の住人から情報を聞いて、屋内にある地下の牢獄に向かう。村長ゲルガを救うためだった。

## 十一話

## 暗躍

「遅い」

濃いブラウン、センター分けの髪、緑色の瞳、口髭の男が夜空を見上げて呟いた。黒いハットをかぶり直した西斗月拳の頂点がキセルを口にして煙を吐く。

「ここで落ち合うつもりだったが……来ぬか。いや、来れぬかギドウオーン」

夕闇が落ちていくなか、岩に座っていた彼が立ち上がる。

「やくざ者と組んでの遊戯が過ぎたな。所詮は次点の伝承者、北斗の分派にでも手こずっているのだろう」

冷たく言い放ったヤサカが首飾りの勾玉を握りしめながら、巨岩から静かに降り立つ。

進みゆく男の背後には、いずこかの勢力の一隊が全滅の屍を野にさらしていた。

ヤサカの名と西斗月拳を知るものは一部を除き、この大陸ではほとんどいない。

ゆえに無謀な輩が彼に手を出したのだが、別動隊がほぼ全滅と聞いたようで、本軍らしき軍勢がやがてヤサカの元にあらわれた。

機動部隊が薄暗い荒野の中で標的と対峙する。

「行く先々で中小の軍閥を潰しているのはお前か」

そう問いかけた人物はヤサカと似たような髪形ながら白髪だった。この国に生まれるも、渡海して郡将まで上り詰めた拳士の名はサンガ。

額に傷があり、口と顎に豊かな髭を蓄えている壮年の男だ。

「だったら」

ヤサカの不敵な笑みに対し、情報通のサンガがジープから立ち上がって言った。

「北斗滅ぶべし。お前の拳から逃れた者どもからそう聞いている」

「……二千年前、われらが秘術を盗んだきやつらの呪われた血を……月氏の神は許さぬ」

「それが拳是」

「そなた、何者だ？ 今までの雑魚どもとは少し違うようだ」

「北斗神拳には恨みがないわけではない。南斗聖拳にもな」

表裏一体の拳法、それらによって修羅の国は権変を迎えていた。

郡将だったサンガからすれば、ラオウやケンシロウ、シンやユダなどは疫病神そのものだった。

彼らのせいで修羅を率いてこの国に凱旋するという、年来の目論見を叩き潰されからだ。

「わしならお前の獲物の情報をいくつか持っている。手を組まぬか」

「……」

音もなくヤサカが飛んだ。

着地点はこのジープだということをサンガのみが悟った。

轟音がした。一瞬にして車両は砕かれた。西斗月拳の掌底で金属の塊がひしゃげ、ガソリンに引火して爆発した。

一撃必殺の奇襲を躲した壮年の男の体術を見て、ヤサカがほうと瞠目している。

「先読みの術か。やるねえ」

「お前が率先的に滅ぼすべき存在……ラオウ、トキ、ケンシロウ。いずれ劣らぬ才を持つ北斗三兄弟が、一か所に集まる場所を知っている」

燃え盛るジープを見ながら説明するサンガに、西斗月拳の伝承者は拳を収める。

ほっとした様子の彼にヤサカが問いかけた。

「具体的に言ってみろ」

「孤島の都サザンクロス。そこに至る最短ルートを先導しよう」

「……連れていけ」

サンガの意図はヤサカも察している。己の力を勢力拡大に利用するつもりなのだろう。だがそんな野望に興味のないヤサカは何食わぬ顔で新たに手配されたジープに乗り

込んだ。

「途中にある拳王軍の検問は潰していこう。背後を衝かれると面倒だ」

年上の男の言葉にヤサカがキセルを揺らしてああ、と答えた。

よもやま話のつもりなのか、彼は帝都で南斗極きよくせいけん聖拳のシンを殺したとサンガに告げる。

修羅の国で猛威を奮った復古の拳を倒した、と聞いて愕然とする壮年の男を一瞥し、ヤサカは長い脚を組んで彼方を眺めていた。

§ § § § § §

北斗神拳の三弟のだみ声が荒野に響く。

「おいリュウガ、あの旗！」

「南斗白鷺拳、シユウのレジスタンスのものだな。行くぞジャギ」

白馬をいななかせて止めた世紀末覇者の將軍、泰山天狼拳伝承者がバイクに乗る同僚とともに目を凝らす。

勢力を大幅に縮小しながら戦線の維持に努めていたリウウガとジャギが旗を掲げる数台のバギーに近づいた。

潜在的な敵とはいえ、今は休戦中のような間柄である。

遠慮の文字がないジャギが指揮官らしき人物がいる車内を覗き込んだ。

「あん？　仁のオッサンだけじゃなく義の若僧もいやがる……」

「六星の二人が同乗だと?!」

緊急事態を察したのか、リウウガがいきなりフロントドアを開けた。

胸を押さえて倒れんばかりに座っているレイとそれを支えるシユウの姿を見て、拳王軍の幹部たちが再び驚愕する。

「ジャギ、これは!?!」

「わーってるよ、どうやら何かの秘孔を突かれたようだが」

「……お前にはこの秘孔の跡がわかるのか」

レイを抱える盲目の鬪将の言葉に、ジャギがわかるも何も、と再びレイの胸部を観察して言った。

「北斗神拳、新血愁……いや少し違う気もするが……生かしたまま苦痛を与え続け、最後は全身から血を吹き出して死に至しめる、て言われた時限を操る高等術だ。これができる奴あラオウ兄者ぐらいのもんだが」

「だが現在拳王様はケンシロウとともに修羅の国におわす」

「じゃあ誰がやったんだ?! 北斗の分派風情が成せる技じゃねえ」

二人のやりとりで、昏倒寸前のレイを見守りながらシユウが告げた。

「……我らを退けたその男の名はギドウオーン。西斗月拳の伝承者」

聞き及びがないその拳法に、二人は顔を見合わせる。

それにしてもこの荒野では話にならぬということで、ひとまずシユウの部隊を拳王領の支城に迎えることにした。

鼻の利くジャギが本城は何か危ないと察していたためだ。

§ § § § § §

北斗孫家拳のタイエンを撃破し、いくばくかの休息を経て、シン一行は再び南下しはじめた。

その最中、森と湖がある風光明媚な領内の近くを通りかかったが、その際に赤備えと呼ばれる偵察隊に出くわした。

指揮官は紅鶴配下南斗二十三派のひとり、南斗鶴影拳やえいけんのヤンソンと名乗った。

「久しぶりだな金髪の若僧、死神」

「ヤンソン、言っておくがわしらは妖星の領内で悪さをする気はないぞ。ただ時短で通り過ぎたいだけだ」

赤いターバンに目元まで覆ったマフラー。細身で中背の優男がジョーカーの弁明を遮って手を上げる。

「野望のなさすぎるお前の主の行動には是非もない。それより聞いているか、南斗六星の二人が西斗月拳によって倒されたことを」

「?!」

ここに至ってシンたちは同門の身に起こった災厄を知ることになる。

ユダの街ブルータウンに案内されたシン、ジョーカー、レステイエが居城に招かれ、赤い衝撃の将帥たちを前に、世情に通じた彼らから様々な話を聞くことができた。

「レイ殿に秘孔を突いた西斗に報復するため、ユダ様はわずかばりの手勢を連れてこの地を発った。その行く先で北斗曹家拳のキョウウンとやらを倒したという報を受けている」

「元斗皇拳のファルコたちは未だ帝都を取り戻せず雌伏中で、とても助力できる余裕はない」



「拳王の領内や周辺はさらに混乱している。北斗の分派や中小の軍閥の暗躍が激しい」  
宰相格の老将ゲンガンの説明を謁見の間で聞いているシンの後ろで、一般門下生であるレスティエが興奮冷めやらず左右を窺っている。

ユダ配下の名だたる重臣たちは彼女にとつて雲の上の存在だった。

「伝説の老拳士ゲンガン様、独眼竜ダガール様、武官筆頭と呼ばれる南斗羽鷹拳はおうけんのイルフオーン様……はいませんが……ヤンソン殿その他紅鶴の名将たちが勢ぞろい。壮観ですね。まるで南斗の聖殿に身を置いた気分です」

「……聖帝なき今、二十三派の達人たちを率いる南斗最大の組織の長にして、拳王を凌ぐであろう大陸最強の拳士の居城だ。わしだけではなく心ある者はみなそう評するだろう。主が不在であろうと聖殿と違って差し支えないかもな」

レスティエが目を輝かせる傍ら、吹き抜けの王の間の向こうに広がる街並みを眺めながら、半分嫌味でジョーカーが呟く。

そんな双方の目にも、百戦錬磨の二十三派がおのが主に対して好奇やら憧憬やら、あるいは嫉視を向けてくるのを肌で感じていた。

長い金髪を風に揺らして佇む男は彼らが誇る赤い衝撃と対を成す勇者であり、その美男子ぶりは大戦前から南斗の里に轟いている。

ましてや聖帝サウザーを倒した唯一の人物だ。

それだけで南斗の拳士だらけのこの場では注目の的だった。

その間にシンは北斗孫家拳のタイエンを撃退し、それ以前に完敗したヤサカを追っている最中だと妖星の宿老に告げていた。

「なるほど……だとすれば西斗月拳の使い手は複数いたことになる。貴重な情報だ」  
坊主頭、白い口髭顎髭、ダークレッドの胴着を身にまとった老人が頷く。

すると居並ぶ重臣の末席に連ねていたそばかす顔の青年がシンの名を口にし、まあそれでもさと呼びかけた。

「西斗月拳とやらに一蹴された、と言うが……修羅の国で一緒にいたこともある僕から見れば、あれだけの修羅と連戦した後のあんたを敵は殺しきれなかったってことだろ。やはりあんたは不死身だよ」

「……その小娘の助力があったとはいえ」

最長老の孫の言葉を遮ったのは、二十三派においても年長組、四十を超える齢の大男だった。

南斗虎雁拳こがんけんのバルドヴィーノ。

浅黒い肌に赤いヒゲ、どこかの部族の勇者のような外見の巨漢は、ユダ陣営においても一、二を争う膂力の持ち主であり、拳王軍のウイグルにも引けをとらないと噂されている。

そんな猛者が組んでいた毛深い太い腕をほどいて言った。

「このしぶとい極星を討ち損ねた時点で……奴ら西斗の命脈は尽きている」

「ユダ様の逆鱗に触れた以上、光明が雪辱を果たす前にあの方が全て片付けてしまいうかもしれんがね」

バルドヴィーノの台詞を継いで楽しそうに言い放ったのは、銀色の長い髪を後ろで結上げた隻眼の士だった。

彼は南斗随一の影の軍団、極斗衆ごくとうしゅうを率いる長でもある。

対面にいる長身の髭男に虎眼を向けた大男が新参者の名を呼んだ。

「ダガール」

バルドヴィーノは筆頭イルフォーンの派閥の長と目されるだけあって、影働きを自薦しようとした独眼竜を制するような視線を送っている。

それを悟った百八派きつての勇将は珍しく肩をすくめてぼやく。

「貴公の将は裏元斗のひとりを討ち、中原においてその武名を轟かせている。拙者といえはこの街の守りに就くのみで力が有り余ってな」

「我らが鷹は遠くにあつて次の任務に就こうとしている。いかに隼が推参しようとしても遅きに失すると思うが」

飄々とした素振りを崩さないダガールと威圧感を増すバルドヴィーノのやりとりで、大広間に緊張が走る。南斗鶴影拳やえいけんのヤンソンは中立のようでもどこ吹く風だ。

そんな雰囲気に気付かない南斗焰浄拳えんじようけんの若者、ゲンジュが、僕が参戦するのは問題ないでしょうと口を挟んできた。

「老ゲンガン様の嫡孫のご助勢はありがたく……しかし貴方様に万一のことがあればユダ様に顔向けできません」

「目が泳いでいるぞレステイエとやら。迷惑だと顔に書いてある！」

地団太を踏む名門の御曹司と平身低頭する平拳士をよそに、ジョーカーが行きますかとシンを促した。

## 十二話

## 食わせ者

世紀末覇者と呼ばれた男の領内を蹂躪していたサンガとその部隊は、西斗月拳のヤサカを伴って拳王の居城まで軍勢を侵入させていた。

彼とて他の軍閥同様、ラオウが修羅の国から戻ってきた場合を想定して当初は中樞にまで押し入るつもりはなかったが、隣にいる人物が北斗抹殺の拳是を担っていると知って手を組んだのだ。

ヤサカほどではなくともサンガは優れた拳士だった。

敵陣を突破するのにそう時間はかからない。

配下の部隊を屋外に待機させ、サンガとヤサカは二人だけで王の間に足を踏み入れる。

そこで待っていたのは、薄い一重の目に赤い色のモヒカン、偉そうなマントを羽織ったひよろ長い男だった。

「キサマ一人か」

ヤサカの鋭い誰何に対し、悪人顔の拳王軍の幹部は玉座の前の段差に腰かけて不遜な態度を見せている。

「やれやれ、修羅の国での激務から解放されて帰国してみればこの有様。ワシとて過勞死しかねんな」

「……噂には聞いている。その珍妙な出で立ちには騙されんぞ。世紀末覇者の將軍にして親衛隊、影の長も兼ねる、お前が地獄耳のヒルカだな」

「そういう君はサンガ。郡将の座を捨て、この生国に舞い戻ってきた蝙蝠ぶりには恐れ入る」

豪傑とひよろ長という属性は違えど、互いに壮年の人物の視線が交錯する。

もう一人のやや若い男が口を開く。

「地獄耳というからには我の拳と名を知っていよう」

「もちろんだ西斗月拳のヤサカ」

月氏の血を引く拳士はそうかと頷いた。

「うぬの主はサザンクロスに戻ってくると聞いている。それはいつだ？」

ヤサカがふと気を放つ。

薄暗い王の間にすさまじい殺意が漂った。しかしポーカーフェイスの謀略家は顔色一つ変えることはなかった。

簡単に口は割らぬと思つたサンガが一步踏み出す。

それを止めた濃いブラウンの髪の子が奴の意思など必要ない、と告げた。

秘孔を突くつもりだというリアクションを示した側が肩をすくめて言う。

「怖い怖い。ならば情報を渡すしかあるまいて」

薄い目の男がおどけたように言った。

「ワシならばそのサンガよりもサザンクロスサザンクロスの正確な位置に詳しい。ましてや海域に展開されている監視の網を抜ける術も心得ている。そして北斗劉家拳北斗劉家拳のソウブ、君の同門に倒された南斗水鳥拳南斗水鳥拳のレイなどもトキを頼りにそこに向かっている最中だな」

「同門……ギドウオーンのことか」

「まあその男のことはどうでもよい。遅かれ早かれ彼はこの地上から消え去ることになる」

「あ?」

眉を潜めるヤサカに拳王の親衛隊長は多くを語らなかつた。

義星に時限の秘孔を突いたことよつて妖星の逆鱗ぎやくせいりんに触れたギドウオーンという者の末路など、ヒルカにとつて何の興味はない。

サンガが敵の意図をはかりかねて尋ねた。

「何を企んでいる?」

「企むの何も単純なことよ。君はともかく、そのヤサカは南斗極聖拳きよくせいけんすら破つた強敵だ。そんな化け物がこの地にいつまでも留まつてもらつては治安の回復がおぼつかん。

使い勝手がよいジャギはともかく、かつては敵だったトキに関しては何しらの管轄外というもの」

「……サザンクロスに北斗南斗の拳士を集結させる、か。見え透いた罠を」

「それらを撃ち払ってこそその西斗月拳であろう。北斗四兄弟が揃い、天帝、南斗の象徴もそこにいる。月氏の復讐を遂げる最高の舞台であるな」

「……」

黒い髭男が考えるそぶりを見せたことで、センター分けの白髪の男がはっと目を見張る。

「おいヤサカ」

「ここまで露払いしてやったことに感謝しろサンガ。その薄目の後ろに控えている手下どもでもよい、孤島に案内しろ」

いつの間にかヒルカの配下の影が姿を見せていることにサンガは驚いていたが、ヤサカはそれを一瞥して謀略家の間合いに歩き進む。その際、西斗月拳の裏拳がモヒカン頭を襲った。

「おいおい、いきなりの挨拶はよせ」

「ほう」

彼の拳は衝撃を吸収する布に巻かれて動きを停止させていた。やるじゃねえかとヤ



サカが小さく呟く。

その技を見たサンガが瞠目して呻いた。

「あのヤサカの拳を止めるとは……」

「泰山妖拳蛇咬帶<sup>じやこうたい</sup>。来るとわかつていて気合を入れといたわ。それにしても軽く振っただけでこの圧力……なんとも恐ろしい拳法じゃ、西斗月拳」

ひらりと身をかわしたひよる長い男が敵に一礼し、地獄への扉を開けとばかりに奥のドアを指さしている。影に案内させるようだ。

「フン、北斗や南斗など何人いようとわが敵にあらず。まとめて蹴散らすのにちようどよい」

若いほうのミディアムパーマの男がそう言い、じゃあなと壮年の男に片手を振って去っていた。

それをただ見送るだけしかできないサンガの怒号が広間に響く。

「食わせ者め！ はなからわしらを分断させるつもりだったのかっ」

「あ奴をここから追い払うだけでよかった。となれば君など小物に等しい。もういいぞでてこい、リュウガ、バルガ、ザク」

ヒルカの合図に、拳王配下の勇将たちがわずかな手勢を率いて姿を現す。サンガも屋外に待機させていた修羅の国からの子飼いを呼んだ。

「小物だと？ 郡将として名を馳せたわしにうぬら程度が相手になると思っているのか！」

「さてな。このヒルカは忙しい。あとは武闘派の將軍たちに任せる」

「……おのれ小賢しい薄目め」

歯ぎしりするサンガをよそに多忙な男がマントを翻す。

相手の憤怒を聞き流して王の間から退出していった。

§ § § § § §

里長さとむらゲルガが巨体を引きずって地下室から出てきたとき、広場で見た光景は彼が閉じ込められる前に見た状況とは一変していた。

大男は呆然とその渦中を見つめながら、牢破りを易々と成功させた手先の器用な小男に向かつて言った。

「なんじゃあ、あの赤毛は……ありえねえくらい強え武士野郎の拳が通じてねえ」

ゲルガの震え声を聞きながらコマクがうつそりと言った。

「あやつはレイを倒したほどの勇士じゃ弱いはずがない。しかし今まであれほど己が攻め立てられた記憶はあるまい。月氏とやらの誇りを木っ端微塵にされるのはこれからじゃ」

滴る血が一向に止まらない。体中に裂傷が走っているようだった。

そう感じた西斗月拳の拳士が口の中の血をべつと吐いた。

「このギドゥオーン、切り倒す人の意をもつ名の我にここまでの斬撃を与えるとはな。褒めてやるぞ南斗の男」

鬨気を溜め直した彼の体から新たな血が吹きあがる。

それでも構わず剣豪のような風体の男は両手を広げ、幾多もの掌底を浮かび上がらせた。

残像が放つ風圧で赤毛と赤紫のマントが後ろに靡く。

狂気に満ちたその迸りに対し、怒りの感情を滲ませながらも涼しく見えるユダの顔に、ギドゥオーンは八重歯を向いて吠えた。

「その白い優面を押し潰してくれ」

咆哮のなかで放たれる百裂の掌底がユダを押し包む。

「あの特技……余人なら秘孔を突かれ、爆散する前に打撃で肉塊になるだろうが……」

南斗紫蝶拳の伝承者メイエルが小さく呟く。余人とはこの場にいる主以外のことを

指している。

「ゆ、ユダ様の頬に血が」

コマクが思わず身を乗り出した。

西斗月拳の圧で地面が捲れあがつて落下していく間に、その血が主のものではないことに気づいて違つたわとため息をつく。

「あ、ありえん……私の手の平に合わせて己の手を！」

「……趣味が悪いな。無作法なお前の奥義を迎え撃つ私の身になってほしい」

「ぬ……つく」

拳を握り合わせて組み合う二人の斗の拳士が同時に反発するように離れた。

両手を左右に見ながらギドウオーンが後ずさりし、赤く染まった敵の龍の牙を窺う。

奴は力で西斗の拳を握り潰すつもりだった。彼が知る南斗ではありえない剛力であり、泥臭いが峻烈な反撃だった。

「秘孔でいくらかは修復し、出血を止めたか。まだ気力は尽きていないようでも重畳なことで」

歩み来る赤毛の拳士は相手にその余裕を与えるまで動かなかつた。それを悟つた彼は今更のようにもうひとつのことを悟つた。

「今まで……キサマには拳撃を何度も当てたはずだ……だがことごとくこの我が……秘

孔を外したとでもいうのか?!

「ことごとく当たつていては北斗とは戦えぬ。表裏一体なる拳法の死合い、点穴で勝負がつくのは稀だと知れ」

「わが拳を盗んで創られた北斗と同列にするかあつ!!」

大喝したギドウオーンの気合は遠巻きに見ていた里の連中、トテンプウの部下のならずもの、赤備えにも及んだ。

吹き飛ばされる彼らを横目に、それを至近距離で受ける側の声はあくまでも冷徹だった。

「同列ではない。お前が北斗神拳に及ぶことは未来永劫にあり得ぬ」

「……殺す! 殺してやる赤毛の若僧!」

凄まじい踏み込みで拳を振るおうとしたギドウオーンがふと動きを止めた。

止めてすぐ、彼の鬚まげが風に乗って消えていった。月氏の拳を伝承して以来、それに手を出した者も斬つた者もない。

「……うぬ」

さらに額を割られたと気づいた男が、片手で顔を覆い、血まみれの中ぐふふと高笑う。

そのなかでギドウオーンは異様な構えを繰り出した。

「な、なんだ、あ奴の構えは」

「奴の利き腕が……消えた?!」

コマクが仰天し、メイエルが西斗月拳の奇妙な構えを眺めて思わず叫んだ。

これが激昂する男の秘奥義だということとは誰が見てもわかる。

「ぬふふうふううあこの技に勝ちはなくとも負けはない。どれほどの達人でさえも見切れぬわが神技で今度こそ庄殺してくれるわ」

西斗月拳、相雷拳と名乗った巨漢が地を蹴った。

拳を背に隠して死角を作り、鬨気の揺らぎでその拳筋を見失わせる、と悟った南斗紅鶴拳の伝承者が本格的に身構えた。

## 十三話 天を舞う

一度目の踏み込みは本気ではあつたが、敵の間合いを知るためにあえて反撃を受けた。

憎き赤い鶴の殺傷範囲を覚えたことで、受け身を取つたギドウオーンは再び地を蹴る。

ここまで万全を期して戦つたことはない。その不快感を飲み込んで彼は無数の拳を討ち放つ。

拳を背に負い、闘気のゆらぎによつてさらなる迷いを誘う。

かつてこれを破つた者は誰一人としていない。

南斗水鳥拳のレイ、北斗の流れをくむ極十字聖拳のハクホウもこの技で葬つた。

「南斗ゴとときにこの終撃を二度も使うとは思わなかつたがな、灰燼と化すがよい」

己の揺らぎと比べ、迎え撃つ赤毛の男の泰然とした様子に彼が驚愕の雄叫びを上げる。

「余裕のつもりか！」

その怒号を受けた標的は楽しそうに口角を上げる。

実を伴う殺意を受け流しながら、赤い衝撃は西斗月拳の秘奥義を明確に解析してみた。

「それがお前の奥の手か。ひつきつまるきよう、最後の一撃が真の実の拳というわけだ」

空から降りてくるギドウォーンの、雷を纏った最後の正拳がユダに襲い掛かる。

あれば当たればさすがに死ぬな、と他人事のように考えながら、両手を胸の前で交差させた南斗紅鶴拳伝承者が重低音の二つの衝撃を両の手の甲で受け流す。

わずかの間において、ドゴンという凄まじい重低音が広場に鳴り響いた。

炸裂した奥義で地面の石畳が水面に落ちたしづくのように飛散していった。

「うおっ」

里の長、ゲルガが尻もちをつきながら、音もなく浮かび上がった美しき鶴を見上げていた。

風で流れる赤紫のマントがまるで広げた羽のようだと、無骨な彼ですらそう思った。

「んな、に?!」

ユダが片足で降り立った先はギドウォーンの顔面だ。

「(ハッハ)の……」

「西斗月拳、相雷拳。どこからくるかわからぬ間合いで敵を惑わせる、か。そんな邪拳で私を降せると思っていたのか」



重力を無視したように、ユダが優雅に敵の顔面に一本足で立っている。

そんな相手の足をつかんでいるギドウオーンだが、叩き落そうとするもびくとも動かない。

月氏の神の拳士が土足で顔を踏まれ悶えている。確認せずとも周囲の仰天ぶりがかかる。

ヤサカに知られずとも切腹ものの屈辱だった。

修復したとはいえ、一度砕かれた指ではユダからの圧をほどこくことができない、と知った男の顔は黒いブーツの下で真っ赤になっていた。

「あの優男、速さだけではなく剛の面でも……鬼みてえに強えあやつの上を行くのか」「違うな禿げの里長。上ではなく遙か上、じゃ」

丸眼鏡の小男のドヤ顔が見える。うるさいのうと思いながら、ゲルガは事実の指摘にただ頷いた。

「ほれ見ろ。鶴が天を舞うぞ」

コマクが指をさす。

「おお……」

里の人間やならず者、日ごろ主の雄姿を見ているはずの赤備えまでもがどよめいた。

そのなかで南斗紫蝶拳の伝承者、メイエルは赤い唇を震わせて、天空で煌めく赤い衝

撃を見つめていた。

「赤い月……いえ……半月の形の赤い一閃」

そのエフェクトが西斗月拳の拳士の胴体を衝き抜けたことを知ったメイエルが胸の前に手を合わせながら呆然と眩く。

「あれが赤麗蒼天嘴襲……わたしでさえも初めて見た。ユダ様の秘奥義」

ムーンサルトのような動きを示し、相手に背を向けて降り立ったユダが片膝を地につけている。

赤毛を靡かせた彼がゆっくりと立ち上がるまで、ギドゥオーンは両手を天にかざしたまま動かなかった。

大量の血が背中から吹き出る反動により、ようやく西斗月拳の男が反応し、痙攣しながらつんのめる。

「——つが、お……あ」

声にならない叫びを上げてギドゥオーンが両膝をつく。

すでに視界は赤く染まっている。

地についていた手を握りしめた際、硬い石畳のそれが抉られた。

カツ、カツと踏みしめてやってくるブーツの音がする。

膝をついたままの大柄な男が力を振り絞って向きを変えたときには、ほぼ無傷の恐る

べき男が目の前で優雅に佇んでいた。

現在、里の広場には赤紫のマントが靡く音しかしない。

「我が……ここまで押し込まれるなどあ、ありえぬ……き、キサマは一体」

吐血しながら呻く古の武士のような相手の背に、冷徹な女の声が降りかかる。

「南斗聖拳最強にして……地上最強のカウンター拳法の伝承者。世紀末覇者拳王すら凌ぐ赤い衝撃だ。そんなお方をお前は怒らせた。南斗を侮り命を弄んだ者には、相応の報いを受ける」

「……」

文字通り誇りをはずたずたにされた男が反論もせず考えを巡らせる。

口にしたのは己が倒したレイのことだった。

「……あれの秘孔を封じる手はない。激痛と絶望のなかであの華麗な同門は死んでいく」

くく、と喉の奥で笑ったギドウオーンが我ならその方法を知っていると言いかけた。

その瞬間、剛毅な彼がぎよつとした表情で相手を見上げた。

知らぬのか、と語ったユダが藤色の瞳を細め、標的を射抜く。

「秘孔封じという秘技が北斗神拳にはあるようだ」

「な……」

「仁術を心得る賢者に助力を仰ぐ。必要ならば伝承者や覇者にも頭を下げる」

プライドが天を衝くほど高そうな赤毛の男が静かに言い切った。

「最初から私か極星を殺しに来るべきだったな。レイやシユウこそこれからの世に必要な存在。それに手をかけたお前は全ての南斗に対する敵だ。いかなる命乞いも通用せん」

フウウウという南斗紅鶴拳独特の鬨気の迸りが周辺に漂った。

だらりと下がっていた彼の手が下から上に位置を変えていく。その残像が見える。

外に放つのではなく内に秘める気、というものを間近で見たギドウオーンが凄絶なその構えに腰を抜かしたまま後退していく。

やがてその音がクアアアと研ぎ澄まされたものに昇華するに及んで、彼は指一本動けなくなつたように金縛りにあつていた。

蛇に睨まれたカエルとはまさしくこのことだったと、里にいた誰もが後に語つていく。

「ああああああ！」

「死への恐怖を味わつたのならそれでいい。出血死を待つまでもない」

とどめの赤い衝撃は西斗月拳伝承者の悲鳴のなかで放たれた。

「南斗紅鶴拳、ようせんし妖斬嘴」

体の中心から集中線が伸びたような形、いわば旭光きせきのヒビが入ったギドウオーンは断末魔の台詞を放つ。

「わ、我を倒した程度でいきがるな赤毛……！　西斗の正統伝承者ヤサカがいる以上、キサマもいずれ我のように地獄へ堕ちる」

花火のように上半身が断裂した男の下半身がどしやりと崩れ落ちる。

広げていた両手を収め、返り血を浴びた赤い鶴がマントを翻す。

下僕のコマクが間髪入れず走り寄り、血で汚れたそれを半ば奪うように受け取った。

「正統伝承者はヤサカ、か」

「ユダ様」

コマクが震えながら主を窺う。そいつが首魁と呟いたユダが待機させていた赤兎馬に乗り上げた。

「いかん、御曹司はもうひとり西斗の男を続けて倒すつもりだ。メイエル！」  
「承知」

どこにいるかもわからないヤサカなど探している暇はない。

赤備えの小隊長として彼女は先頭に立ち、静かな憤怒の主を説得するために追いかけた。

里長ゲルカにじゃあなと挨拶をしたコマクもレイの妹アイリを促し、後に続く。

風のようにあらわれ、去っていく赤い集団を、里の人々は声もなく見送っていたものの、一番先に我に返った長が巨体を怒らせて、用心棒を失ったならず者へ復讐を開始した。

瓶切りの達人とはいえ、腕を失ったトテンブウが泰山破奪剛の使い手であるゲルガに敵うべくもない。

彼らは激昂の里長によって八裂になり、屍を荒野にさらして生涯を終えた。

§ § § § § §

「あれがサザンクロスか」

大型クルーザーの屋根の上に座る男が黒いハットを持ち上げて、水平線の向こうに見える南の島を眺めた。

その船首近くに立つ青白い髪の巨漢が組んでいた腕をほどき、大きくなってくる城塞を見つめている。

西斗月拳の伝承者が無防備の背を見せている北斗劉家拳の伝承者に声をかけた。

大陸の港でサザンクロスを襲撃しようとしているソウブの部隊と出くわしたヤサカが、船に同乗させてもらった理由を今一度問いただしたのだ。

ラオウに酷似する巨漢は城塞に向かったまま答えた。

「うぬにとつて北斗劉家拳のオレは神拳より優先順位は落ちる。そうであろう」  
「……」

「オレとてうぬと死合うのはラオウ、トキ、ケンシロウを倒してからだ」  
「なるほどな」

片方の膝を立てたヤサカがキセルを取り出した。

ラオウというより口角の上げ方がサウザーと瓜二つな豪傑は長いブーツに軍服姿である。

その彼がおのが目的は南北合一だと告げた。

「南北合一?!」

「北斗の頂上拳の座をオレが奪い取る。南斗の象徴を迎え、その高貴な血を混ぜることによつて劉家拳の拳格を確固たるものにする。それがここに来た理由」

「南斗の象徴、慈母の星か……」

象徴が大陸随一の美女だと聞いているヤサカがソウブの野望を聞いて目を細めた。

女の美貌は事実でも、南北合一がソウブ自身の野望だと軽々しく信じるつもりはな

い。

そう思いながら首にかけてある緑色の勾玉を彼は無意識に握っていた。

前に向き直ったソウブが孤島の港を確認しつつ獐猛なる牙を剥いた。

ラオウとサウザーを合わせたような外見の北斗劉家拳の男は、背後の潜在的な敵が慈母星に興味を持ったことを確信して、速度を上げると操舵室の配下に命じた。



十四話  
救世主

爆発音が南十字星の居城のフロアを揺らす。

地響きのなか、この地の総督とも呼ぶべき五車星の長が吹き抜けの広間からサザンク  
ロス街を眺めている。

風雲炎山海の各部隊の報告を受けていた。

「北斗劉家拳の軍勢に曹家拳や孫家拳の残党も参加しており、その船団の数は増すばかりです。さらに月氏の民の血を受け継ぐ者とやらが……」

言上中に倒れた風の隊員のかわりに、炎の軍団の影が血まみれで頭を下げる。

「西斗月拳と名乗った男の武勇は凄まじく、われら五車の最精鋭ともいべき親衛隊はそ奴によつてほぼ壊滅状態にあります……しかし北斗分派の首魁である劉家拳のソウブは未だ城門前広場の後方で鎮座し、配下や残党を動かすばかりで」

それに領いたりハクが顔をしかめて娘の名を呼ぶ。

「……ラオウに匹敵するような敵が二人、か。トウ」

「はい。今トキ様はレイ様の治療で手が離せず、シユウ様も負傷で動けません。戦力としてあてになるのは南斗百斬拳のダンテ、ナリマン、五車の面々」

「いかに彼らとてソウブ一人にも苦戦しよう。しかし未だケンシロウ様は戻らぬ」  
苦悶の表情を浮かべるリハクが玉座に座る鎧武者を見る。

そのときだった。

「者ども、引けい！」

中年男が鋭い叫びとともに、風と炎の隊員二人を担いで飛びざった。

巨漢の海の拳士は壮年でありながらも俊敏な身体能力を持っており、蹴破られてきた鉄条の両扉が吹き飛んでくるのを避けて転がり、二人の隊員の無事を確認してから

不躰な侵入者の姿を窺った。

「うぬら、下がれ」

リハクの鬼気迫る低い叱咤で五車の兵が一斉に武器を引き、相手との距離を取った。

広い謁見の間に静寂が落ちる。

革靴を踏み鳴らしてやってきた黒いハットに黒い服装の男は、キセルを口にしながら、玉座の鎧武者に問いかけた。

「……お前が南斗の象徴、この街の支配者か」

「だったら」

作り声とはいえあきらかに女の声だ。彼は手についていた血を振り払いながら言う。

「慈母星と名乗るのならばこれ以上我に無駄な血を流させるな。そなたの部下たちは血

はもう吸い飽きた。食らい尽くすならやはり北斗」

「……ヤサカといったな。階下の部屋のからくりを突破してきたはずだ……それでも無傷とは」

眉間に皺を寄せるリハクに対し、ヤサカはあくびを堪えながら傲然と言い放つ。

「フン、あれはラオウやソウブといった巨漢相手の仕掛けであろう。あんな見戯が通じると思っていたのか。お前は我だけではなく奴ら北斗の面々すら舐めている」

ときどき黒い服が破けていたものの、西斗月拳最強の男は砂埃がついた部位を見つめ、それをふつと吹いて面を上げた。

リハクがむむ、と唸りながらさらに問いかける。

「ダンテ、ナリマン、ヒューイやシユレンの四人を相手にしたはずだ」

「……あの南斗どもはそなたの部下か？　ならばもう少し練武の士をつかわすのだったな。我を手こずらせたあの金髪若僧ほどの腕がなければ足止めはできん」

鎧武者がピクリと反応した。ヤサカはそれを見逃さなかったが、あえて別のことを口にした。

「年寄りの冷や水だ。やめておけ」

海の男が象徴の前に立ちほだかる。同時に娘のトウも剣を持って身構えていた。

「北斗神拳が我を恐れて修羅の国から戻らぬのなら……こちらとしてもおびき寄せる

餌がいる」

リハクが放つ捨て身の五車波碎拳はすいけんはヤサカを瞠目させる気合いが込められていたが、足止めできたのはわずか数十秒。

トウに至つては女は殺さぬという拳是の彼に秘孔を突かれ、動けぬ体にされて大理石の床に伏せている。

「そなたら健気な親子を討ち取るほど西斗は落ちぶれてはおらん。ラオウ、トキ、ケンシロウを屠り、ソウブを打ち破り、西斗月拳の名をこの世に知らしめる。その前の余興にも当たらぬが」

腰が砕けて立てぬリハクが配下の部隊に動くなと命じる。

この男に対抗できる拳士は現在サザンクロスにはいない。

無駄な抵抗を諦めたと察したヤサカが、立ち上がった鎧武者に目に見えぬ突きを放つた。

頑丈な兜が一瞬にして砕かれた。そのなかから現れたクセツ毛の長い黒髪を見て、彼が感嘆の声を上げた。

「ほう……想像以上の美しさ。そなたが慈母の星」

女の構えを見たヤサカが目を細め、南斗聖拳かと呟く。

「策士と聞く海の男が何やら細工をしていると思つたが、その構えは南斗宗家の構え。

金髪の若僧と同じものだ。その稀有な美貌といい、偽物ではないようだな」

突きかかつてきた鎧武者の手首を捉え、ヤサカが相手の白い面に顔を寄せた。

「美形だな。今まで見てきた女が霞む。なるほど北斗の男たちが執着するわけだ」

「放せ……!」

「殺気のこもつたいい拳筋よのお。余人ならば不意を衝かれていただろう。だがそなたが相手にしているのは地上最強の拳。北斗神拳も北斗劉家拳も……わが西斗月拳の亜流にすぎんのだ」

「ほごくな髭野郎」

真ん中分けミディアムヘアの男が名家の血筋らしからぬ美女の口調に目を見張る。

「月氏の神の宿願。それを晴らすのがおかしいか、女」

「地上最強とは笑わせる。だからほごくなと言ったのだ」

「ゆ、ユリア様いけませぬ」

リハクが震える体で立ち上がろうとする。彼女の名を改めて聞いたヤサカが口角を上げた。

「ユリアか、なれば聞こう。そなたにとって地上最強の拳とは」

「南斗極きよくせいけん聖拳」

間髪入れず返答した長い黒髪の鎧武者の顔は瑞々しく上気していた。

なんとも美しいドヤ顔だった。

「その拳法の男……シンといったか。そやつは我がすでに帝都で葬った。必殺の秘孔を突いてな」

「……へえ。彼が爆発したのを見たとても?」

「あん?」

「やはり確認はしていない。そうだと思った」

ひとり合点がいったとばかりに微笑んだ美貌の主が再度斬撃を放ってくる。

それを躲したヤサカがユリアと呼ばれた相手を気絶させ、脇に抱え込む。

海の部隊と長がやめろと追いつがるも、彼は鼻で笑って吹き抜けの広間のバルコニーに進み出た。

「神拳伝承者や拳王が戻ったら伝えろ。南斗の象徴はこの西斗月拳のヤサカ預かっているとな」

「まっ、まさかここから飛び降りるつもりでは?!」

トウが顔を蒼白にして叫ぶ。ヤサカが笑みを返し、石柱に乗り上げて言った。

「手中の宝を砕く愚行などせぬよ女。我に臆することない胆力、拳の心得、しかも美しい。恐れ入ったわ慈母星」

そう告げた茶髪の髪の男がハットを抑え、脇に鎧武者を抱えたまま飛び降りた。

騒然となる広間だったが、なんとか立ち上がったリハクが娘を抱きかかえ、周囲にいる五車の隊員全員に退室を命じる。

急な展開にとまどうばかりの彼らだったが、主の不機嫌な二度目の叱咤に敬礼して出ていく。

「……やれやれじゃな」

しばらくしてリハクが小さく息を吐いた。娘も同じようにやりきれない吐息を放つ。

「……これでよかったですか、お父様」

「……」

「我らが主ユリア様は天帝ルイ様とともにおわします。このことを知ったら」

「どうしようもあるまい。あのお方には納得してもらおうしかない」

「マミヤさんの自薦なれば我々にはヤサカを止めようがなかった。事実を知っているの

はごくわずか。そしてあの者がマミヤさんが影武者と気づけば」

「犬とも畜生とも言え。全ての責任はわしにある……だが」

口から流れる血を拭き取りながら、リハクは眼下に広がるサザンクロス街並みを眺めた。

その奥の城門から喧噪が聞こえてくる。

事情を知らぬフドウやジュウザが軍勢を率いて、北斗劉家拳のソウブと睨みあつてい

るようだ。

「やはり……あの拳士たちに頼らねばならぬ。ケンシロウ様にラオウ。シン様やユダ様……北斗南斗の救世主たちに」

§ § § § § §

サザンクロス城塞前の港および荷捌き地では、雲と山の部隊と北斗劉家拳の手勢が小競り合いを繰り返していた。

双方の思惑もあり、正面からの決戦は避けている様相だ。

だがそんな睨みあいに変化が起きる。驚愕の叫びが五車の軍から沸き起こった。

不意に城門が開かれ、そのなかから出てきた二人のうち女のほうがサザンクロスの主だと彼らが知ったからだった。

すでに彼女の見た目も名も知っている劉家拳のソウブも、これほど早く慈母の星が攫われようとは思ってもいかなかったようで、思わず舌打ちを放つ。

やってきた西斗月拳の伝承者と鎧武者の女を眺めて床几から腰を上げ、彼が言った。



「……さすがはとうべきか、奴ら南十字星の幹部どもが不甲斐ないとうべきか」  
「両方だ。ともあれ南斗の象徴、このヤサカがいただいたぞ」

髭の男が黒い帽子をかぶり直し、意識を取り戻した隣にいる鎧武者の女を見る。

無理やり連れ去られたとわかる表情の美女が周囲を窺う。

人質とわかるその姿に激昂した雲のジユウザと山のフドウを目線で制し、混乱が増すばかりの状況を回避しようとしていた。

「ジユウザ、フドウ」

指揮官たちの名を呼んだ象徴の泰然とした様子に、彼らが思わず両膝をつく。

五車の二人は互いにしか聞こえない会話を口にした。

「見たかジユウザ」

「……ああ。ちよいとキレかけたがおかげで落ち着いたぜ。あれは」

「言うな。おそらくリハクの策だろう。ここはあの女に従っておけ」

「妹が無事ならそれでいいが……なんとも気丈なこったぜ、ママヤって奴は」

想い人と瓜二つな存在をあらためて眺める雲の賞賛は途中で途切れた。

汽笛を鳴らして入港してきたのは船団だった。

それがユダの水軍と修羅の国から戻ってきたケンシロウやラオウだということに気づき、飄々とした男が腰を上げる。

「いいタイミングで救世主たちが戻ってきたぜ。こりや乱戦になるか」

## 十五話

## 千隼（ちはや）推参

時間は少し廻る。

シン、ジョーカー、レステイエが西斗月拳のヤサカを追うなか、内乱中の拳王領内に通りかかった。

当然にして一行は、ラオウに代わつて留守を預かる重臣ヒルカの情報網に引つかかることになる。

拳王陸戦隊に導かれ、シンたちがラオウの居城にある薄暗い広間に足を踏み入れたとき、かつては美麗だったであろうそこは、様々な建材の残骸が散らばっていた。

激しい戦闘の渦中を窺い、細目の影が目を見張る。

「あれは……拳王軍の幹部たち……しかし相對する巨漢の中年男は誰だ？」

「修羅の国で郡将を務めていたサンガという老獪な武人だよ、死神」

リュウガ、ザク、バルガなどの將軍とサンガの對峙を眺めつつ、同じような細い目の男がジョーカーにそう告げる。

シンの側近は己以上に影を駆使する敵に向かつて顔をしかめてみせた。

「ヒルカ。わしらをここに連れてきたのはきやつを始末させるためか」

「察しがいい。あれは修羅の国でも有数の猛者でな、我らも少々手こずっている」

指揮棒を手にしたモヒカン頭の謀将がマントをまくり、無言で佇むシンに近寄る。

「西斗月拳の最新情報がある。そやつを倒せばすぐにでも追撃の手配を整える」

「……」

「おっと」

遠くからサンガの気当たりが飛んできた。

それを躲そうとしたヒルカの前に立ち、シンは巨漢の気当たりを裏拳のみで弾きし返した。

さすがよの、と偉そうに呟いたひよる長い男がが再度金髪的青年に向かって言った。

「南斗の光明。やはりお主でしかあやつは倒せん。力を貸せ」

「シン様」

レスティエが広い敷地の壁際まで下がる。彼女の主が手ぶりでそう命じたからだ。

直属の上司も同じような動きを示しながら、拳王の宰相格に向かって言った。

「どうせキサマのことだ、西斗だけではなく北斗劉家拳の所在や飼い主であるラオウなどの現在位置も把握しているのだろう。地獄耳め」

「……それが対外情報機関の長たる役目だよ、ジョーカー。君はやや影の使い方が甘い。

拳の腕はいいんだがね、このヒルカにはまだまだ及ばん」

「十年早いと言いたげだな、中年オヤジめ」

狡猾だが有能な相手にそう答え、死神が歩みゆくシンの背中を見送る。

「リュウガ、ザク、バルガ」

名を呼ばれた拳王配下の將軍たちが一斉に後方へ飛びずさった。

長時間の攻防でさしもの剛毅な彼らも拳の先の先を読む、といわれるサンガの秘術に疲弊しきっており、日頃険悪な仲の宰相に対し抗弁せず引き下がる。

「修羅の国の郡将がこれほどの強者だったとはな。このバルガともあろうものが南斗極聖拳きよくせいけんの引き立て役とは」

「ヒルカ曰く、あれは東華八盾とうかはつたてという上級修羅のひとり。我ら二人、死ななかつただけでも上出来よ」

重傷に見えるバルガとザクがもう一人の僚友を横目に大きく息をつく。

陸戦指揮官として名高い彼らとは違い、拳王軍屈指の拳士である泰山天狼拳の使い手は無念の様相だった。

相打ちしてでも仕留めたかったが、ヒルカがそれを許さない。

今の彼の言葉はラオウの命令に等しい。

屈辱的な撤退に震えながら、リュウガがそばを通りかかる南斗の拳士に吐き捨てるように告げた。

「結局はお前に頼ることになるのか……この場合も……わが妹ユリアのことも」

力なく膝をついた彼に、ザク、バルガの両将軍が駆け寄る。

リュウガの肩に手を置いたシンが纏っていたグレーのローブを脱ぎ捨て、肩で息をつく軽傷のサンガと対峙する。

青みがかつた白髪 of 壮士は追い詰められようと不敵に笑っている。

未だ戦意を失わぬ男がいきなり突きかかってきた。

「ヤサカはお前を葬ったと言っていたが……やはりな、生きていたか南斗の若僧！」

鋭い一撃を流すシンが同じように突き返す。だがそれはサンガによって読まれていた。

「うぬ……わかつていてもこの剛撃、当たれば即死か」

ヒルカと同じ謀略家ながら、若いころは前線に立つ拳士として名を馳せていた。

そんな気概が呼び覚まされたようで、死人と化した彼の狂気は拳威の増大に繋がっている。

そんな巨体から繰り出される蹴りを、シンも長い脚で受け止めた。

「ぬっ?!」

ラオウ配下の髭の将軍たちが異口同音に身を乗り出す。

歴戦の彼らの目には、シンの蹴りで吹き飛ぶサンガの勢いは不自然に思えたからだっ

た。

飛んでいく先は、青白い頭巾をかぶった女の元だった。

そしてその近くには外通路に続く両扉があるのだ。

「しまっ」

リュウガが思わず立ち上がる。

同時に上司であるジョーカーも動いていたが、サンガの猛烈な掌底に押し出されて大理石の床に転倒させられた。

転げながら彼が叫ぶ。

「や、ヤロウ、これを狙っていたのか！」

レストイエは南斗の門下生としては非凡な拳士であつたものの、拳王軍の幹部と対等に戦う猛者には敵わない。

たちまち身柄を拘束され、サンガの手の内に落ちた。

「動くな若僧っ」

先の先を読む彼が冷や汗を流しながら吠える。

南斗獄屠拳の発動を止め、歩みを止めたシンを見て安堵したサンガは、そうだやめておけと恫喝した。

「聖帝を破り、第二の羅将ヒョウすら追い詰める。いかにヤサカに後れをとろうと……」

お前のような未完成な男こそ畏怖に値する。次に奴と戦えば勝つのは」  
憎々し気な男の台詞が不意に途切れた。

サンガが見上げる先に、天井のステンドグラスを割って落下してくる何者かの姿があった。

キュロット（乗馬ズボン）が特徴な青みがかった黒い胴着、眼帯の拳士が女を人質に取る大男に向けて一直線に降りてくる。

「何やつか?!」

レストイエを拘束したままでは彼女ごと斬られる、と思ったサンガが迎撃するために飛び上がる。

「ヒルカの部下から妖星の配下は外で待てと捨て置かれたのが……よほど気に障ったか  
と見える。隼め、強硬手段に出てきたか」

ようやく余裕を得たジョーカーが取り出したのはランプのカードだ。

それを数枚、から空きのサンガの背中へ投げ放った。

「んぬ?!」

鋭利な刃物を仕込んだ飛び道具が彼の上半身の防具を砕いたものの、鬨気に包まれた肉体にダメージを与えることはできなかつた。

しかし。



「……うおのれええええー！」

拳における先読みの名手であり、この広間にいる誰よりも実戦経験がある男が目を見開いて呪詛の悲鳴を放つ。

サンガに限ったことではない。

どれほどの見切りを備えている達人でも不意を衝かれることはある。

まさしく今がそれだった。

上級修羅だった彼からすれば、トランプカードなど兇戯にも値しない。

しかし対峙する相手が一瞬も目を離せぬ強敵だった場合は別だ。

カードに気を取られたわずかな間に、その相手は必殺の間合いに迫っていた。

「あの細目めえええええ!!」

「いかに軌道を変えようとしても無駄だ。上空から急降下し、足で蹴落とすように狩りを行う拙者の爪からは逃れられん」

空気を切り裂く凄まじい音がした。

それを繰り出した銀色の髪を後ろで束ねた推参者は、開いた両手を交差させるようにしてサンガと激突する。

ジョーカーが秘技の名を呟く。

「南斗隼蒼拳奥義、千隼」

上下に位置を変えた二人のうち、地に降り立った異相の男が砕かれた肩のプロテクターを一瞥し、仕留めた標的を見上げた。

「うあがは」

鮮血の花火が咲く。

それはサンガの口と亘斬りされた胴体から迸ほとばしっていた。

さすがにあれはわしでも避けられん、と死神が思いながら独語する。

「その爪撃そうげき、さらに極まったか。九龍衆筆頭どころか六星に劣らん」

ドサリと落ちた巨体が転がりまわる。壇上にあぐらをかいて座っていたヒルカが珍しく瞠目し、ザクやバルガも声をなくして南斗の勇将を眺めていた。

リュウガも思わず毒づく。

「ジョーカーの助けがあつたとはいえ、我らが倒しきれなかつたあの不屈の男を一撃とは……あ奴がユダ配下で勇名を謳うたわれる隼はやぶさ、独眼竜ダガールか」

南斗最強の影を率いる極斗衆ごくとうしゅうの長が、未だ闘志を失わぬ壮年の敵と改めて対峙する。  
「うぬれ……勝ち誇るにはまだ早いぞあ」

半日以上戦つて疲労の極みにあつたサンガに対し、ダガールは敬意を表するように一礼して面を上げた。

いつものように気負いのない、緊張感のない台詞を放つ。

「まだ動けるか。先読みの術で必殺から抜けるとは、やるねえ」

「一人では死なん、キサマも道連れじゃ！」

サンガが終撃を突きこんでくる。

ふたつの剛拳をあえて受け、そして流したのは年長に対する礼儀であった。

「しかし貴公は大陸騒乱の原因。容赦はせん」

飄々とした男の口調が厳かなものに変わった。

その瞬間、百八派屈指の武威を持つ拳士の龍の牙が炸裂した。

硬気功で守られていた古強者の胸板に、剛柔併せ持った隼の切っ先が突き進んでいく。

サンガは激しく抵抗を示したものの、ダガールの指突は止まらない。

背中まで貫かれたことで力を失った大柄な男は、大量の出血とともに両膝をつく。

相当に気を削がれたのか、実の拳を放った側も利き腕を引き抜いたあと大きく息を吐いていた。

「見事」

「……」

うつ伏せに倒れた強敵を見下ろすユダの右腕がシンの言葉に反応し、昔馴染みの金髪の青年に向かってひらひらと手を振った。

強さに見合わず威厳がないといわれて久しい男は、この世で最も早くシンの拳才に気づいた存在としても有名である。

でかくなつたな若僧とも言いたげな視線を外し、長身を翻した隼の背に同門の影の聲がかかる。

「ダガール將軍」

「邪魔をしたな死神。遅参してきた鷹の気配がする。ゲン爺の孫もやってきた。とりあえず拙者は退散しよう」

何か言いかけた影が口を閉ざす。

広間に入つてこようとするそばかすの青年、ゲンジュに続いてやってきたのは、隼と同格の猛将だった。

レステイエの反応は拳を志す若い女子としては妥当なものだ。

脆弱とは程遠い猛々しい鷹の登場に興奮を隠せない。

「ジョー様、あれは南斗羽鷹拳はおうけんのイルフオーン様では」  
「のようだな。政敵に先を越されて不機嫌極まりない顔をしている。乱闘にならんうちに主を連れてさつさとここからずらかるぞ」

他人事のように消えていくダガールとそれを追うイルフオーン、呑気なゲンジュの聲がするなか、シン主従も外に出ていく。

それを見送る拳王の腹心の戯言は半ば事実に近いものだった。

「恐ろしく腕の立つ配下を従えているな、さすがは妖星。あの若い鷹といい層が厚い。ザクやバルガなど相手にならんだろう。わが軍の将帥として招きたい逸材だ」

「……言い訳できぬが、うぬとて武に關してはわしらは変わらんだろうが」

「奴の細目を抉りたい気分だ」

同僚たる拳王陸戦隊の將軍二人が軽口で応じる。

雑魚扱いされなかつたりユウガはすでに私兵部隊から応急の手当を受け、現場の復旧作業に取りかかっている。

サザンクロスに向かったシンの背中に、彼は妹を頼むと改めて頭を下げていた。

## 十六話

## 妖（あや）かしの星

サザンクロスの港の波止場に降りてきたのは、修羅の国から帰還してきたラオウと麾下の軍団、そしてケンシロウだった。

城門前広場で南斗五車星の部隊と対峙していた北斗劉家拳のソウブが髪を逆立て、床几から立ち上がる。

そして慈母星を連れて逃亡しようとしていたヤサカに声をかけた。

「見ろ、西斗月拳。あれが北斗神拳の長兄と伝承者。ようやくの凱旋というわけだ」  
「……奴らが」

黒い帽子の下の双眼は暗い。

首から下げている緑の勾玉を握りしめる彼が、手中にある女鎧武者の手を引いた。

「逃げられないと思っっている顔だな、ユリアとやら」

「……」

「この我が北斗の兄弟ごときに後れを取ると思ったか。見ておけ、奴らをまとめて成敗してくれる」

「ふっ」

長い黒髪の美女は不敵に口角を上げる。

ヤサカは慈母の星とは思えぬ激情の瞳の中に、空からマントを広げてやってくる何者かの姿を見た。

「急襲か小賢しいわ」

振り向いた月氏の拳士はすでに雷を纏わせている。

「ほう、いきなり奥義とは」

軍服姿のソウブが腕を組む。

だが、と口にしたそのニヤリ顔はサウザーに瓜二つであった。

西斗の雷撃が空を切る。

「?!」

必中といわれる相雷拳が獲物を捕らえ損ねた。

すり抜けられたと悟り驚愕するヤサカが、はつと我に返って再度振り返る。

「……やるじゃねえか、赤毛の優男」

いつの間に象徴を奪われていたのか、赤紫のマントを羽織った男は鎧武者を抱えて距離を取っている。

「野郎……!」

荒い口調になったヤサカが獐猛な牙を剥く。

己の頬に裂傷が走っていたためだ。

強烈な殺気を当てられた側は守るべき存在が別人であることをすぐに察知したものの、それに対する反応はない。

「大儀。南斗紅鶴拳」

美貌をさらした鎧女の一言だけで、南斗六星のひとりはおおよその事情を理解した。

頷いた彼が感謝すると小声で応える。

改めて怨敵との距離を詰めていく。

マミヤに向けた優しいまなざしとは違い、藤色の瞳は怒気で揺らいでいた。

「西斗月拳正統伝承者、ヤサカだな」

指をさしたユダの表情も、声すら冷たい。

彼としても同僚のギドウオンをこの男に殺されたことを知っている。

劣らぬ憤怒の気纏を浮かべ、指をさし返しながら言った。

「誰にものを言っている。月氏の血を流させた罪、北斗と同様に罪深い……キサマはあの金髪のように容赦はせんぞ！」

「容赦とは笑止。手を抜いて戦えば死ぬのはお前だ」

「言うたなあ雛鳥めが……」

西斗と南斗の拳士を誰もが見守るなか、再び床几に腰を下ろしたソウブが興味深そう



に赤毛の青年を眺めていた。

己を唯一降した聖帝サウザー。今も武名を轟かせる鳳おわとりがもつとも恐れた男。拳是として越えねばならぬ北斗神拳の長兄を撃墜した赤い衝撃の雄姿を。

「地上最強のカウンター拳法、見せてもらうぞ。ラオウを倒せば次の獲物はあやつ」  
ユダが構え直した。

誘っている。そう悟ったヤサカが踏みだした。再度相雷拳を打ち込んでいく。  
もともと迎撃用ではなく攻勢に重きを置いた奥義である。

(我の利き手の動きは見切れまい。手遅れになるまで迷うがよい)

「おいフドウ」

「あの位置、ユダ様からすれば奴の拳は死角のはず……お前ならどうするジユウザ」  
五車星の二人が渦中から目を離せずに言葉を交わす。

「無理だな、おれならさっさととんずらする。まともに受けたら死ぬぜ」

「頑丈さでは人後に落ちぬワシとて同じこと。あんな雷極を受けて生きていられる自信はない」

閃光が煌きらめいた。

その光に他の色が含まれていることを確認したのは北斗の伝承者だけだった。

ソウブの神眼は拳を放ち終えたブラウンの髪の毛の髭男ではなく、膝をついた赤い髪的美

男子に向けられている。

泰然とするラオウと目を見開くケンシロウを横目に、ソウブは思わず高笑った。

「ふっ、ふふふふはははは、ハハハ！」

「……劉家拳、何がおかしい」

北斗の分派の哄笑を耳障りと感じたのか、地面が陥没するなかで立つ西斗の男が踵を返す。

「あれの前にキサマが果てるか、ソウブ」

「……気づかぬとは、愚か者が」

巨漢の男が表情を改め、思わず逃げいと叫ぶ。

憎き北斗の男の叱咤でヤサカが反射的に飛びずさる。

「……相雷拳が効かぬ?!」

大きく離れて着地した彼が信じられぬものを見たとはばかりに瞠目している。

いつの間に接近していたのか、ヤサカの真ん中分けの髪の毛の額に鶴の人差し指が付きつけられていることに、誰もがようやく気が付いた。

「これが絶影……」

かすれ声でそう呟いた西斗月拳の拳士の額から血が流れだす。

お前などいつでも殺せると言わんばかりな妖星の冷厳な目がヤサカを射抜いている。

「おい」

唸るようなヤサカの声は怒りで震えている。ユダの人差し指をつかんだ男は思わず面を伏せた。

「同胞ギドゥオーンもこうしてなぶり殺したのか」

「相雷拳とやらはすで見切っている。まずはひとつめのお前の誇りを砕いた。今から全ての矜持を粉碎していく。そして奴と同様、南斗聖拳を敵に回したことを後悔しながら……死ね」

ユダの尋常ならざる凄みを受け、ヤサカほどの男が総毛立った。

握った指を潰すつもりでいた彼がそれを手放す。

無意識の危機感を打ち消し、反り返って気合を溜めた西斗の男が飛び上がった。

だが踵落としは南斗の男の長い脚によって相殺される。

「うぬ」

ならばと放たれた百裂の掌底。

まともに受ければ塵と消える広範囲の剛撃ながら、それもことごとく受け流されていた。

放ち終えたヤサカの両手はユダの両手によって内側から開かれている。

ガラ空きの胴体に向け、独特な指の配置の拳が突きこまれた。

「あれは南斗斫撃?!」

フドウが叫ぶ。

今度は自分の体術を見せつけるように、ヤサカは宙返りをきめてその鋭鋒を躲し、地に降り立っていた。

「鶴の嘴か、しかし鋭さがなかったな。お前も金髪の若僧と同じく相雷拳の全てを流せなかった。その腕や手は痺れて物の役にたつまい」

黒い胴着の破れた部分を見下ろしたあと、月氏の血を引く拳士が両手を天にかざす。グキグキと筋を鳴らしながら唸るように言った。

「ぬうふふふあ。過剰殺戮に等しいわが奥義を見せてくれよう。南斗ごときには過ぎたる第三の相雷拳を」

絶影に劣らぬ神速を見せ、彼は鶴の懷に飛び込んだ。

「死ねい、相雷焦熱拳」

双腕による雷炎の打ち上げを受け、ユダの体が属撃に塗れて宙に浮いた。コンクリートに跡をつけるほどの踏み出しで、ヤサカが標的より高く飛翔していく。

「うあわたあ!!」

「ごうつという重い打撃音とともに、真なる西斗の剛拳が振り下ろされた。」

そのとどめを受け、地面に叩き落された赤い衝撃がもんどりうって転がっていく。雷と炎にまかれ、動きを停止させた標的を見ることなくヤサカは歩みゆく。

U・Dの紋章の旗の部隊が騒ぐなか、ようやく渦中にやってきたラオウとケンシロウを出迎えた。

「待ちかねたぞわが西斗の亜流ども……!」

巨漢のラオウには劣るものの、ヤサカも背が高い。

彼は伝承者より先に北斗の長兄を抹殺するつもりでいた。

それに相対しようとする男が無言で配下を影響範囲から下がらせる。

そして復讐者に向けて告げた。

「二千年もの間怨念を受け継いできた拳法か。女々しいものだ」

「何い?!」

首にかけた緑の勾玉が浮き上がる。鬼の形相のヤサカが告げた。

「わが西斗月拳こそ地上最強……それをこの世に知らしめるために赤い南斗は葬った。すぎたる口を利くキサマも生かしてはおかん」

「後ろを向け」

「あ?」

ラオウがマントをまくって指をさす。それを見ていたソウブも思わず立ち上がった。

フドウとジウウザも息を飲む。

「やはりな、あれほどの雷炎を受けても軽傷か。さすがはシンの上を行く存在だ」

修羅の国で共に戦ったことがあるケンシロウは当然のように呟き、南斗最強の拳士がゆらりと立ち上がるのを眺めていた。

「……てめえ」

振り返ったヤサカが唾を吐く。

秘奥義で倒したはずの敵は属撃を纏っておらず、突いたはずの秘孔も炸裂していない。

「自ら最強とほざく者ほど滑稽なことではない。それは他人が決めること」

「……」

拳王を名乗る豪傑らしからぬ台詞がヤサカの背後から聞こえてきた。

「このラオウすら退けた妖あやかしの星。うぬごときが容易く倒せる男ではない」

兄である北斗琉拳のカイオウを倒してさらに武威を高めた世紀末覇者の言葉は重い。満身創痍として気力ますます盛んな巨漢が口角を上げた。

「オレを失望させるなよ赤毛の若僧」

## 十七話 地上最強とは

「そこを動くな北斗の長兄。この死にかけの道化を始末したあとはキサマだ」  
ヤサカの暗い双眼に光が灯る。

西斗月拳正統伝承者の背後から、闘神の形を模した闘気が迸った。

かの異形を眺める無数の観衆のなかで、神拳の兄弟のみが何かに気づいた。  
包帯姿の弟が兄の名を呼ぶ。

「ラオウ」

「……あれが見えるかケンシロウ」

「どういうことだ……？ かつて西斗は北斗の創始者によって殲滅の憂き目にあつたと聞いている。それが何故北斗宗家の……シユケンの血でしか成しえぬあの幻影が浮かぶ」

「フン。しかし……まだまだ練れておらぬわ。憤怒の神とはな」

二人は驚愕を隠せず、煌めきのなかで撃ちあう西斗と南斗を見つめている。

「怨念に飲まれたあやつが我らと同族だともいうのか。それにしても不運な男だ」

「……むっ?!」

ケンシロウが無意識に一步踏み出した。

ラオウの精悍な横顔が赤く光る。彼が自身の笑みを自覚して一転、不機嫌そうに告げる。

「見よケンシロウ、あれが南斗紅鶴拳、血冥断指。けつめいだんしだが……奴め、斬撃を必殺の前で止めている。捌り殺すつもりだ」

ユダの絶影の奥義を見た将来の救世主は、おのれを二度破った南斗極聖拳きよくせいけんの好敵手が常に言っていたことを思い出し、改めて瞠目していた。

シンほどの拳士が自分より遥かに強いと言わしめる存在の後姿を。

「——っが、うお……う」

不意に体をびくつかせ、ヤサカが血反吐を吐いた。

二人の周囲には風圧で埃のみが舞い上がる。

西斗の奥義を受け続けていた側がいつの間にか優勢に立っていた。

一本指を上空に上げていたユダが血を振り払う動作を見せたことで、おおお、というざわめきが衆目から放たれる。

思わずジユウザも舌打ちの中で毒づいた。

「……ラオウの野郎がかつておれにほざいたことがある。うぬではあの道化の相手にならないとな。その理由がわかったぜ。見えねえ拳を駆使するあの西斗は正真正銘のバケ



モンだ。しかし」

「うむ。あの方は前に出てくる敵の勢いをそのまま返すカウンターの妙手。ヤサカとやらが強ければ強いほどその反撃も威を増す。いかなる敵もあの神技には対抗できまい。地上最強とはまさにユダ様を指すのだろう」

五車の雲がぼやけば、同僚の山が唸り返し、額の汗をぬぐって答える。

フドウの台詞に頂上拳の自負があるヤサカが反応し、ほざけええと咆哮した。

「たかが背中を斬った程度でこの我を制したつもりか、赤毛え！」

気合を入れた西斗月拳の拳士が筋力で斬撃の傷を塞ぎ、怨敵に向き直る。

激昂するヤサカとは違い、ユダといえは負傷のなかでも立ち振る舞いはあくまでも

凛々しく、優雅さは寸分も失われてはいなかった。

クセである指での手招きをしながら、彼が冷徹に告げた。

「表面の傷を塞いだか……気丈なことだ。だが私の嘴は奥まで食い込んでいる。あとはその体に指を引っかけて左右に開き裂くのみ」

残像を残した構えのなかの、フウウウウという気脈が周囲に響き渡る。

主に長年仕えてきた小男が、隣にいる南斗紫蝶拳しちようけんの女拳士でさえ知らぬ技の手がかり

を口にする。

「ゆ、ユダ様の……ラオウ相手にも駆使しなかった血化粧が始まるぞ」

「血化粧……」

「技の名までは知らん。だがあの髭野郎が八裂になるのはもう避けられ……ん?!」  
丸眼鏡をかけ直したコマクが西斗と南斗たちの斜め上に浮かぶ影を見た。

「うっ上うえ上うえええ」

中年男の声に皆が青空を仰ぐ。

金髪が靡いている。

鎧武者の女が潮風で顔に黒髪がかかるのもかまわず、涙目でそれを見上げていた。

この場にいる誰もがヤサカとユダの終局に目を奪われ、彼が飛び上がるまで気づいた者はいない。

北斗劉家拳のソウブが波止場に留まっている小舟を一瞥する。

そこから目つきの悪い男と、青白い頭巾をかぶった女がやってくるのがわかった。

黒い胴着、黄金の縁取りの防具の青年が西斗の拳士に蹴りを放つ。

ここにいる主だった者のなかで、一人を除いて誰もが知っている南斗極聖拳きよくせいけんの奥義だ。

「南斗獄屠拳……!!」

異口同音でジュウザ、フドウ、ラオウ、ケンシロウ、コマク、メイエルが叫ぶ。

それを初めて見たソウブは再び床几から腰を上げる。

西斗と南斗が空中で激突した。

「生きていやがったか金髪……」

「帝都での借りを返すぞ、西斗月拳」

からまつて降りてくる双方が地上に立ち、弾かれたように飛びずさった。ぎよつとしてさらに後退したのはヤサカだ。

こちらに向かつてくるはずのシンが斜め後ろの同門に向かつて回し蹴りを放ったからだった。

「仲間割れかあ南斗?!」

彼が口元の血をぬぐっている間に、とどめを刺しに来るはずの妖星とそれを抑える極星との攻防が続いていた。

「話は聞いている。レイに秘孔を突いた輩は斬り捨てたそうだな。ならばヤサカは俺が」

「あの程度の使い手に敗れたお前が二度目ならやれると? 思い上がるな」

「……あれの憎悪と今のお前と何が違うというのか。南斗紅鶴拳の真髄は怒りなどではあるまい」

南斗聖拳を真に極めた者同士、龍の牙が激突する。

独特な配置のユダの指突とシンの単純な型の指突は互いに譲らない。

双方から除け者にされた側は呼吸を整えながら、それでもおいこらあと呼びかける。

「今は引つ込んでろ髭野郎」

「推参者の光明を黙らせるまで少し待て」

「……ふざけやがって舐めてんじやねえぞ！」

冴えわたる貫手の応酬をくぐり、ヤサカが両の手で両側の南斗を掌底で弾き飛ばそうとしていた。

「んな?！」

今度は西斗の拳が躲かわされた。

「邪魔だ」

周囲のどよめきのなか、赤毛と金髪の台詞が重なった。

気術による斬撃で仰け反るヤサカに目もくれず、南斗の双壁は彼の頭上でまたぶつかり合った。

「二度お前とは本気で戦ってみたかった。ちょうどいい、この場で俺が叩きのめしてやろう」

「このユダに大言を吐くか。十年早いぞ」

若い二人のやりとりを憎々しげに見上げるヤサカが膝をついた。

気力を復活させるために秘孔をついているようだ。

「若僧ども……我に回復の時間を与えるとは甘すぎる」

あほうどもめ、と呟いた彼がブシヤつという炸裂音で反射的に身を起こす。

弾かれた赤毛が音もなく空を舞い、水鳥に劣らぬ華麗な体術を見せて片足で着地する。

一見きよくせいけん極聖拳の強烈な蹴りが撃ち込まれたように思える。

だがユダはシンの足首あたりに手を添えて倒立しながら躲した際、一撃を放つていた。

先に地に降りた赤毛が起き上がり、かろうじて転倒を免れた金髪が黒い胴着の胸のあたりを抑えて面を上げた。

「なるほどこれが奴の神速か……聞きしに優るな。いつの間に」

シンの肩のプロテクターが砕け、時間差をおいて斜めに斬り裂かれた胴体から血が噴き出した。

周辺にいる様々な所属の人々は歓声を上げていた。

キョウウン、ギドウオーンを倒し、ヤサカを追いつめ、さらに同門とも戦って一矢報いる赤い衝撃の姿は、見物している全ての者の目に鮮烈に映っている。

腕を組んで見ているラオウが顔を斜め下に向け、わずかに口角を上げながら言った。

「地上最強とは……奴を倒すことができる者のことを言う。単純な話だ」

北斗の長兄の台詞に末弟が驚きながらも頷く。

魔神カイオウすら倒した世紀末覇者がそう断言したのだ。

長身ながら豪傑には見えない南斗紅鶴拳の伝承者は華麗に振り返り、出血を止めた西斗の拳士に告げた。

「ようやく復帰したか。では私は下がろう」

「……何イ?!」

驚愕のヤサカに歩み寄るシンが今気づいた、とばかりに言った。

「弱すぎるお前が態勢を整えるまで俺と遊んでいたということだ。腹立たしいが、所詮俺もお前もあれの掌てのひらの上」

「……」

射殺いしころしかねない目をユダに向けるヤサカが怒号を放ちながら身構えた。

「この金髪をくびり殺してからキサマを塵と砕いてやる。逃げるなよ赤毛!」

「あやつがその気ならばうぬはずでに死んでいる。そこの若僧の乱入に感謝するのだな、西斗月拳」

ラオウの無慈悲な言葉を目にしたヤサカが今度こそ怒髪天を衝いた。

雷炎の連撃をシンに放つ。

「キサマの南斗聖拳はすで見切っている。何度やつても同じことだ死ぬい」

西斗の剛拳を受け流すシンが属性までは消しきれず、それにまかれて崩れ落ちる。それを横目にラオウが鼻を鳴らし、ケンシロウに向かってサザンクロスに入るよう顎をしやくった。

「紅鶴拳の極奥義、血化粧とやらは見損ねたか。ならば優先順位は城の中だ」  
「元よりレイの治療が先、ここは五車たちに任せる」

北斗神拳の二人が北斗劉家拳の伝承者の前を通りかかる。その際、床几に座っていたソウブは彼らと見えぬ火花を散らしていた。

「逃げるかラオウ」

「しばし待て。北斗神拳抹殺のために突かれた秘孔ならば、それを封じるは北斗の長兄の務め。西斗ごときの新月愁などわが手で無に帰してやるわ」

「……ラオウ、トキ、ケンシロウ。北斗三兄弟が手を取り合つて慈母星を全快させたことは、もはや大陸の心ある者なら誰もが知っている。それを再現させるつもりか」

「事が終われば相手をしてやる。待つ間は西斗と南斗の死合を見て暇をつぶしておけ。どのみちあれはこの地で終わる。金髪はともかく赤毛は絶対に倒せん」

世紀末覇者が赤い衝撃の名を呼ぶ。察してやってきたユダに対し、ラオウが背中を見せながら告げた。

「ヤサカとやらを討つのは好きにしろ。だがソウブを倒すはこのラオウ。奴には仕掛け

るなよ」

「……レイへの尽力は私ではできぬこと。その言葉には従おう」

「フン、サウザーから聞いていた通り、見かけによらず情の厚い男だ」

ラオウが部下を率い、城門の中へと入っていく。それに続いたケンシロウが足を止め、  
年来の幼馴染に向けて叫ぶように言った。

「シン、二度は負けるなよ。お前を倒すのはそやつではない」

「わかってる」

宿敵の二人が視線を交錯させる。

先に目を反らした南斗の拳士が炎の剛撃を正面から受け止めた。

「ぐっ」

「ぬふふふ北斗南斗はどいつもこいつも虫唾が走るわ、馴れ合いおつて……!」

シンの掌底に打ち込んだ拳を押し込んでいくヤサカの狂気で、彼自身が纏っていた闘  
神の顔も歪んでいる。

「キサマ」ときに時間をかけている暇はない、散れい」

さらに片方の正拳が放たれたが、それもシンに阻まれた。西斗と南斗の二人は両手で  
組み合いながら対峙する。

気と力のぶつかり合いになっていた。



「ぬううううううう」

充血した目のヤサカの唸りとともに、コンクリートで覆われた大地が揺れた。

見物人たちが恐れおののいて距離を取っていく。

コマクやメイエルが慈母星をかばい前に出る。雲や山でさえ固唾を飲んで渦中を見守るばかりだ。

眉一つ動かさないのは北斗の分派と南斗の赤い衝撃のみ。

妖星の配下たちに抑えられ、もがく鎧武者の美女が斜め前にいる彼らの主に問いかける。半ば悲鳴に近いものだった。

「シンは大丈夫なの?! ねえ」

必死の形相の彼女を少し窺ったユダが一言、今のヤサカ「であれば」大丈夫だと口にした。

「そう」

妖星の意味深な返答に気づいたのかそうでないのか、少し落ち着いたママヤが心配そうな視線を金髪の青年に向ける。

「今の若僧であれば倒せるだあ?! 赤毛え……とことん舐めやがって」

「舐めるも何も妥当な判断だ」

「?!」

彼の断言に驚いたのではなく、組み伏せようとしていた相手からの反撃にヤサカが目を見張る。

「同門同士の戦い……一歩間違えばユダ様に斬られていたやりとりがシン様にとつて準備運動だったということか」

「エンジンがかかるのが遅いつてレベルじゃねえな。一回あつたまる前に殺されかけてんだろ、不器用な野郎だ」

フドウとジュウザの独り言を聞きながら、ヤサカは圧殺しようとした相手が上体を上げてくるのを眺めていた。

力負けだと、と吐き捨てた彼が我に返り、再び狂気を放出する。

## 十八話

## 正念場

互いに長身ながら、ヤサカのほうが背は高い。

斜め下からの打撃を予想していなかったのは不覚だった。

気の解放で反応が遅れた。

頭突きという斗の拳法ではあまりない一撃をくらった西斗月拳の拳士が両手を放し、顔を抑えて後退していく。

「うぬ……若僧」

鼻血を垂らす髭男に対し、金髪的青年もヤサカが手を放した際に薙ぎられた斬撃を受けていた。

頬から流れる血を拭き取り、彼の渾身の剛拳を龍の牙で突き払う。

「つち」

拳の側面を抉られたヤサカは後ずさりながら切れた手で鼻血を拭いた。

拭きながら独語する。

「肉弾戦にも長じるか南斗極きよくせいけん聖拳……！　フン、やるじゃねえか」

「実の拳の打ち合いこそ南斗の真髄。手数で相手を翻弄し、秘孔でとどめを刺すことに

慣れた西斗とは違う」

「二度敗れておいてほぎきやがる」

「だからこそ借りを返しに来た」

外に放つものではなく、内に秘めた気の巡りで大地が揺れる。

司空の鳳おどりを倒して以来、彼がこれほど鬪気を練り上げた戦いはない。

ズシン、という重圧音で周囲にいた見物人たちも皆体勢を崩していた。

再び二人が激突する。

手のひらを重ねて組み合うのも二度目だ。

「お、おお」

ジュウザが思わず半口を開け、狂気の男とは違う深淵の気纏を浮かび上がらせる恋敵の姿を眺めていた。

「聖帝サウザーを粉碎した極聖の拳……西斗月拳の拳こぶしを握りつぶすつもりか……!!」

山のフドウの台詞を聞いた耳ざとい髭男が危機を悟ったのか、組んでいた手を自らほどいてみたが引いた。

その際、シンの組手から逃れるために大量の気力を消費したようで、その構えはふらつき、バランスを欠いている。

冷汗が止まらないヤサカがそれを拭ぬぐって言った。

「……なるほどぬかったわ。聖帝とやらが敗れた原因をようやく悟るとは。内に秘めた気を指先に込め、硬気功などとは比べ物にならぬ強度の牙で全てを砕く。修羅の国で猛威を振るったのもそれだな」

数本の指をへし折られたものの、八裂からまぬがれた利き手を見下ろしヤサカは吐き捨てる。

かつて自慢の剛拳を力のみで潰されかけた記憶はなく、何度目か忘れた舌打ちを禁じえなかつた。

「それが南斗聖拳を真に極めた者の究極奥義、龍の牙と謳われる指突ということか……！ クソつたれがあ」

もう片方の手で綺麗に折られた指を気で修復している。認めざるを得ないと言いたげな、苦悶のヤサカの表情だった。

「手数で圧倒する西斗と一撃必殺のシン様の南斗。互いに特性が出ているな興味深い」  
熱気で汗まみれなフドウがそう言えば、手当を終えたヤサカが首にかけた勾玉を触りながら一歩踏み出す。

いつの間にか彼の狂気は消し去っていた。

「ならば……その一撃必殺のクソつたれを食らわなければよい。もはや月氏にとって北斗に匹敵する抹殺対象になつたぜ、南斗の若僧ども」

「……狂気による拳撃から趣おもむきを変えたな」

ヤサカの様子の変化に最初に気づいたのは赤い衝撃だ。

影のコマクや南斗の拳士であるメイエルもそういえば、とセンター分けの豪傑を見直  
す。

鎧武者の美女、マミヤが鬨気を消し去った全身黒の髭男に違和感を覚え、無意識に  
ユダに歩み寄る。

そのさまは偶然にも修羅の国にてラオウが到達した境地。

まさにヤサカがシユケンの血を引くという証であったが、それを知ってか知らずか、  
南斗六星のひとりは面白いものを見たという反応を示している。

「西斗月拳の真髄というやつか。あれは全霊の拳」

「全霊の……」

象徴に瓜二つの女が怖気を振るって二人の拳士に視線を移した。

ユダの解説の声が遠くに聞こえてくる。

「極聖拳きよくせいけんを降すことができる、かもしれぬ戦法。自覚のある覚醒ほどやっつかいなこと  
はない。光明よ、正念場になるぞ」

§ § § § § §

一方、サザンクロスの城内では、北斗三兄弟が医務室で秘孔しんげつしゆう新月愁に対する処置を施そうとしていた。

だがそれはまさしく応急であり、快癒には程遠い。

丸椅子に座っているレイはこの時点で意識を失くしているように俯いている。

「西斗が突いた秘孔に対するは心霊台のみ。だがこれでは問題の解決にはならぬ」

同じく着席しているトキがそう言いながら、傍らに立つ長兄と末弟を見上げた。

ケンシロウが頷きながらラオウを窺う。

不世出の剛拳の主が言った。

「お前の言いたいことはわかってる。だが秘孔封じはひとつしか使えぬと誰が決めたのだ」

「……?!」

北斗神拳の伝承者が愁眉を開き、思わずレイの肩に手をかけた。

トキも頷き、椅子から腰を上げる。弟の珍しい瞳目に兄は鼻を鳴らして返答した。

「フン……うぬらに拳を教えた身、兄が気づかぬでどうする。ともあれ三人同時にいく

ぞ。心霊台でわずかに伸ばした余命の間に、末期に至る気の流れを止める」

世紀末覇者ともあろうものが敵の流派の拳士を助けるために、殲滅以外の目的で闘気を漲らせ始めた。

トキの感銘は尋常ではなかったが、再度兄に促されて義星の背中に手を添える。

呼吸を整える末弟もその背を叩き、親友に語り掛けていた。

「……妹を残して逝かせはせん。わが友よ、必ず助けてやる」

「ちと手荒になるぞ南斗水鳥拳。自決すれば楽になるほどの激痛、心霊台以上のものがお前を襲う。へたれてこのラオウの助勢を無駄にさせるな」

力なく笑ったレイが扉の開く方向に何気なく視線を向けた。

そこから顔を出したのはアイリを伴ったユダの配下ゲンジュだった。

このとき、一人では立てぬほど弱っていた彼が飛び上がるようにして妹のもとへかけよった。

たった一人残った肉親との再会、抱擁を終えたレイが椅子に座り直した時には、その様相は先ほどとは別人に変わっていた。

トキが呟くように言う。

「戦士の顔になったか。本人がそうでなくば西斗の秘孔に打ち勝てぬ。その意気やよし」



壮健な兄弟が気功を送り始めたのを確認して、次兄も気を練り始めた。かつてユリアを病魔から救ったときのように、やはりこういう事態において主導権を握るのは医術の仁だった。

§ § § § § §

城門前の激闘を天守から見下ろしていた影がある。

南斗五車星の長とその娘、そしてこの街の主の姿だった。

手すりを持つ美しい女の手が震えている。

壮年の大男がうつそりと象徴の名を呼んだ。

「ユリア様」

「………実の拳どうしで撃ち合っているのが見える。シンが血だらけに」

「肉弾戦は南斗宗家の拳の真骨頂。かつてサウザーやラオウとまともに死合った黄金の牙なら、必ずや期待に応えてくれるでしょう」

「………ですがお父様、西斗の打撃は届いているのに南斗の指突は紙一重で避けられてい

るように見えます」

青ざめた顔のトウの言葉にリハクが眉を寄せる。

「確かに……あのままでは」

海の男の眩きを耳にした長い黒髪の主がマントを翻す。

派手に靴音を鳴らし、屋内に戻っていった。

「ユリア様！」

「トウ、我らも続くぞ。救急室で手当てを終えたであろう風と炎を呼べ」

「それどころでは……あの恐るべき西斗の拳士に本物のユリア様を見せてよいものですか?!」

叫ぶ娘を見送り親がバルコニーを振り返る。

そして放ったのは現実主義の非情な台詞だった。

「赤い衝撃が後に控えている。尊き御身に危害が及ぶことはない」

たとえシン様が敗れようともな、と突き放した言葉を吐いたりハクが、一縷の望みを託しているおのが主の後を追いかけた。

## 十九話

## 愛の誓い

「ぬうふはははははははもう息切れか南斗極聖拳……！　まだわが拳の到達点を愉しんではおらぬぞ」

血煙のなかで金髪の青年が膝をついた。

センター分けの髭男は完勝だと言いたげに両手をかぎしている。

「……やべえんじやねえのかあいつ。剛拳どうしの肉弾戦、どうやら西斗のヤロウに分がありそうだぜ」

「ヤサカとやら……誰が見ても神々しいほどの高みに辿りつつある。あれがユダ様の言う自覚の覚醒」

五車の雲と山のうめき声が凄惨ながら静かな戦場に響き渡った。

皆が固唾を飲んで見守っている。

そんななか、鎧武者の美女が蒼白になって渦中に駆けだそうとしていた。

しかしその守護星たる赤い衝撃が配下に目線を送る。

「放せ……！」

「南斗を統べる御身といえど、こればかりは聞けませぬ」

「御曹司のご命令だ、男と男の戦いに出しやばるな」

「ママヤを抑える南斗紫蝶拳しちようけんの女拳士と下僕の小男が鋭く言い放つ。

「そんないざごぎを横目に見たヤサカは切り裂かれた黒い胴着を煩わしそうに破り捨て、鋼の上半身を露あわわにしながら尋ねた。

「女……南十字の象徴よ。この若僧の命がそれほど惜しいか？」

「静かな城門前の広場に不気味な風が吹く。

彼の台詞を耳にしたクセのある黒髪の影武者は抑えにかかるユダの直臣の肩をつかんで、思わず身を乗り出していった。

「フン……それほど執着を示すとは。それは慈母星としての義務か、それとも」

「――」

何かを叫ぼうとするママヤの口を塞いだのはメイエルである。

「問いかけた男は薄く笑っている。

「闘気とともに狂気も奥底に閉じ込めた西斗の拳士が、ついには声に出して呵々大笑しだした。

「北斗抹殺を前にして南斗宗家の男を月氏の生贄に……そう思っていたが、少し気が変わった」

「……何？」

膝をつき、俯く金髪を眺めながら高笑うヤサカの台詞に、珍しくユダが眉を寄せる。「象徴であろうとなかろうと……気に入ったよ、いい女だ。未熟者などにくれてやるには惜しい」

周囲がざわついた。

それでも本来ならば激昂してもよい面々、ジユウザ、フドウなど、ママヤが影だと知っている者はわずかに動揺を示しただけだ。

「う」

強烈な蹴りを受けたシンが吹き飛んだ。

転がり終えても立ち上がれないほどの衝撃を受け、彼は肘をついて大敵を眺める。

「お前ほどの女には地上最強の男がついてしかるべき」

ヤサカの目がユダに向けられた。

だが赤毛の美男子は泰然としたままだ。

それを窺った髭男は重畳、と呟きながら歩き出す。

「南斗の慈母星よ、西斗の我こそお前にふさわしい。強き者の傍ならば、そのような無骨な鎧で体を覆う必要もない」

そう言いながら、勝者がシンの頭を踏みつけた。

ママヤの絶叫を耳にしたそのとき、今にも駆け込んできそうな勢いの美女に向かって

ヤサカは告げた。

「ひと思いに殺そうと思ったが、わが伴侶になろうとする者の声なら……我も聞き入れる用意がある」

「?!」

今度こそひとかどの拳士たちを含めた驚愕のざわめきが沸き起こった。

西斗月拳の拳士が象徴を人身御供に南斗宗家の助命を提案している、と誰もが察したところで、死神とレスティエがようやく声を振り絞って言った。

「ジョー様……!」

「……マミヤさんはあのお方の身代わり。南斗の人間としては勘違いさせたまま成り行きに身を任せる以外にない」

「そんな」

「KINGが一番無念であろう。本来は守るべき相手にあのような決断を迫られるとは」

短い薄緑色の髪の毛の影が歯ぎしりをしながら金髪の主を窺う。

「返答次第で若僧の頭は踏みつぶす。覚悟を決めよ」

「……マミ」

髭男の足元に屈辱の平伏を余儀なくされたシンが顔を上げようとするも、ヤサカに再

度踏みつけられて地中にめり込んだ。

血はともかく、土の味を嘔みしめるなど、この世に生まれ変わってから初めてのことだ。

「メイエル。コマク」

赤毛の主の静かな呼び声に、二人の忠臣が半狂乱の影武者から手を放す。

とたんに駆けだすマミヤの背を見ながら、彼らは主人の後ろに音もなく寄り添った。

「ユダ様、あのままでは」

「……」

「あの女……金髪の小僧のためなら身代わりであることを白状してもおかしくありませんぜ」

赤い衝撃は無言だった。

本物でない以上はどうでもいいという態度にも思えるし、南斗の双壁とも呼ばれた同僚に期待しているともとれる様相だった。

その間に、鎧武者の女がヤサカの前に飛び込むように斬りかかっていた。

当然にして軽くひねられ、手首をつかまれて持ち上げられている。

「おっと。先ほどより拳の鋭さが増したか。ふむ、その上気した顔も美しい」

「触れるな髭野郎……！」

「おとなしくしている。間違つてこやつ頭を踏み潰してしまふかもしれん」  
「……」

ママヤの美しい瞳が全霊の拳に昇華させた西斗の男の瞳を見つめる。

激昂中の彼女だったが、それでも神の域に達したと思われる拳士に対して違和感を覚えていた。

「……違う」

「あ？」

ぼそりと呟いたママヤの低い声にヤサカが眉をひそめたものの、身を包む鎧を一撃に粉碎して転ばせた。彼はその肢体を確認して白い歯を見せた。

「武張った格好よりその下の衣装のほうがよいではないか。ますます好みだ」

剛腕を伸ばし、意中の女を抱えた髭男が頬が触れ合うほど距離を詰めて、底冷えする声で告げた。

「我を愛していると言ってみろ」

「何をバカな……下ろせ！」

「気の強いことよ。躰がいがあるが、この時点で望むは恭順の意思」

荒地を削り上げるヤサカの蹴り。うつ伏せのシンの胸部にヒットしたことで、標的が宙に浮く。



ママヤを抱きかかえたまま飛び上がった西斗の踵落としは奥義だった。

雷炎の属性を内に秘めた相雷炎獄蹴そうらいえんごくしゅうを受け、地面に叩きつけられたシンが跳ね飛んで転がっていく。

「やめ……」

「そなたの心ひとつでなぶり殺しはやめてやる。我を愛すると言えば苦しませずに殺してやる」

先ほどは生かす、と言っていたはずが、ママヤのシンに対する感情を確信したヤサカが冷たく言い放った。

「執着すればするほどあの若僧は凄惨な最期を迎えることになる。五体満足の状態で果てるか、肉塊になるか」

コンクリートの地面から立ち上がる南斗の拳士の血だらけな姿に、彼を主とする影の女が身構えた。

上司がそれを抑える。いつにない厳しい声だった。

「耐えよレスティエ。もはやKINGの沽券にかかわる。六花八裂になろうと邪魔をしてはならん」

「……そのようなことになればわたくしも死にます！」

「それは止めはせん」

ジョーカーが苦く吐き捨てた。シンが倒されれば弔い合戦の準備はできている。青白い頭巾の彼女を押しとどめながら、そうなつたところで敵かないはせんと思いつつ心は平静だった。

黄金の牙を上回る赤い衝撃がいる以上後顧の憂いはない。

「強情な女だ。まだ観念せぬか！」

南斗宗家の伝承者が西斗の剛拳により叩き伏せられ、蹴り上げられる。

それを眺めるしかできないママミヤの絶叫が再び城門前に響く。

「やめて、ではなく愛の誓いだろうがあ?!」

ヤサカがそれ以上に大きく叫んだ。

同時に、シンの腹筋に貫手が突き入れられた。

口から血を吐き、両膝をついた若い南斗の拳士に渾身の正拳が打ち下ろされようとしたときである。

「……」

ママミヤのか細い声が放たれた。

だがそれでは、再び正気のなかに狂気を込めだしたヤサカを満足させることはできなかった。

「なあにイ?! 聞こえんなあー！」

内に気をこめた拳でシンの顔を殴り飛ばしたところで、慈母星の影武者が求められた  
台詞を金切り声とともに口にする。

## 二十話 かつての自分

裏門からそつと出てきた南斗の一隊があつた。

長く美しいストレートな黒髪を靡かせ、その先頭に立つた女がいる。

「あ、愛します……一生……どこにでもついて行きます」

かつてユリア自身が言つた服従の言葉が聞こえてきた。

背後のリハクやトウ、風や炎以下、数人の護衛もこの成り行きに硬直している。

彼女は無意識に一步踏み出した。

大多数の衆目は天に向かつて雄叫びを上げるヤサカに向けられ、この島の主が姿を現したことに気づいていない。

勝者が這いつくばる敗者の頭を踏みしめて声高に告げた。

「……聞いたか金髪の若僧！ 女の心変わりには恐ろしいのお……しかしこやつをここま  
で苦しめたのはお前自身。以降はよく我に尽くすがいい」

俯くマミヤのクセツ毛が潮風で揺れている。

誰もが声もない。

そんな静寂の中、ヤサカがとどめの一撃を振り下ろそうとしたときである。

「シン」

大きくない音量だった。

風に消されるようなそんな細い声を、城門前の全員が聞いていた。

時間が止まったかのような瞬間だった。

「な、に……?!」

腕の中の女と、城門から出てきた女は双子のように似通っている。

ヤサカをはじめ、その事情を知らされていなかった者たちが動揺するのは当然のことだった。

さすがのソウブも驚きを隠せない。

唯一赤い衝撃のみが本物の登場にマントをめくり、守るべき対象に一礼する余裕があった。

「シン」

クセのない長い黒髪の美女が、もう一度金髪の青年の名を呼んだ。

彼女は囚われの影武者と同じく、瞳に涙をためていた。

次の瞬間。

息を飲む、というざわめきと後ずさる群衆の反応でヤサカが振り向いた。

「……てめえ」

全霊の拳を会得したほどの存在が、血みどろの体で起き上がった瀕死の相手を見て驚愕しながら毒づいた。

「まだ動けるつてのか死にぞこないが……!」

起き直ったシンの双眼から光が放たれている。

このときの彼にまだ意識はない。

「も、もはや死んでいるも同然のはずが」

「あの野郎……蘇りやがった」

象徴のすぐ後ろに控えるヒューイとシユレンが呆然と呟く。

フドウとジユウザがようやくやく我に返り、慈母星のもとへとやってきた。

「死が垣間見えるなかで……われらが将の呼びかけに応えた、とでもいうのか」

「あれが……あれが奴のいう執念。ユリアに対する……死を超える執念」

滅多に自失することのない山や雲が身震いするほどの光景だった。

「北斗神拳先代伝承者リユウケンをして……死人しびと、といわしめたただ一人の男」

ソウブが鋭い牙を見せ笑みを放つ。

昂ぶりを抑えきれず鬨気を噴出させながら眺めていた。

いつぼう、渦中の主である金髪を血で染めた男は大敵との距離を詰めつつあった。

五車筆頭の海がうむ、と頷き、震える拳を握りしめて独語する。

「どのような状態であれ、ユリア様の声ひとつであの男は甦る……シン様は気が付いているのか？ わが主を救っている以上に、ユリア様に救われているということを」

足を引きづる南斗宗家の拳士は隙だらけだ。

だがヤサカは気<sup>け</sup>圧<sup>お</sup>された。

ユリアという女が二人いる、という異常な状況に言及できぬほど、彼は目の前にいる死人に圧倒されていた。

「シン」

似た外見から放たれる異口同音の声。

その名を呼ぶ二人の美女が視線を交錯させた。

このときはじめて意識を取り戻したシンがユリアとマミヤを察知する。

金髪に隠れて表情は見えないが、シンの口角が上がった。

そして魂魄の気を巡らせ始めたということに誰もが気が付いた。

「うおお?!」

「しっ信じられんあの体で」

赤い衝撃のそばにいるコマクとメイエルが叫ぶ。

ズズ、ズという地響き、空気を揺らす音の壮絶さに、双方は恐れおののいて主の名を呼んだ。

「ゆ、ユダ様」

「案ずるな。あれは」

死の前の一瞬の煌めきではない、という言葉までは聞いたが、それ以降は拳撃の炸裂音でかき消されている。

「うお?!」

ヤサカが吹き飛んだ。

受け身を取ったが衝撃を流せず、転がり回ってようやく動きを停止させた。

「死力の最後の一撃か」

西斗の男に抱えられていたマミヤが驚きの悲鳴を上げる。

シンは敵の間近に迫っていた。血だらけの手でヤサカの腕をつかむ。

彼女は泣き腫らした目を見開き、若い師を見つめていた。

「てめええいつの間?!」

「……マミヤを放せ」

「マミヤ?!」

ヤサカが驚愕し、ユリアではない名を耳にして本物があるほうに首だけ向けた。

そしてそんなわずかな隙に、彼はシンの利き手におのが利き手を絡めとられていた。

「若僧、今の我に以前の拳の潰しあいを挑むか……!! 圧殺してくれるわ」



竜の牙を粉々に砕こうと、全霊の拳に力を籠める。

同時に、ヤサカは仕返しとばかりにシンの額に向かって強烈な頭突きを放った。

西斗と南斗は至近距離で火花を散らすように睨みあう。

「あれが真のユリア……南斗の象徴。金髪の若僧の本命というやつか。残酷な男よのう、この女ではお前の死力を導き出せなかったと言ったも同然」

「……」

蒼白な顔のマミヤが再び面を伏せる。

しかし肩を震わせる彼女がその震えを止めた。

シンの渾身の台詞を聞いたからだ。

「力づくで女を従わせる……かつての俺をこうして見ようとは。そしてその立ち振る舞いが……こんなにも醜悪なものだったとは。見苦しいにもほどがある」

「ぬっ?!」

ミシ、という音とともに、シンの頭突きの押し込みでヤサカの額が割れた。

吹き出す血が長い金髪にかかる。

「マミヤ」

シンの静かだが力のこもった呼びかけに、象徴の影武者がはつと顔を上げた。

「目を背ける必要はない。しっかりと見ておけ。お前を泣かせた男は今から俺が叩きの

めしてやる」

絶望の振戦（意図しない震え）から武者震いに変わったマミヤが蘇った男の名を呼ぶ。

彼女は二度、三度とシン、と呼んだ。

「額を割っただけで痺がるなあ若僧が！」

溢れる涙の彼女の瞳の中で、全霊の拳の持ち主と今まで見たことがない激昂を見せる瀕死の男が激突した。

三度目の頭突きでより背の高いセンチター分けの髭の男が後ずさり、態勢を崩す。

「マミヤを抱えたままでは死ぬぞ西斗」

「ほざいたな……!!」

カツ、と牙を剥いたヤサカが凄まじい側面蹴りを放つ。

だがシンはそれを膝受けし、そのまま膝蹴りをヤサカの脇腹に打ち込むことに成功していた。

「か、あ……」

吐血するヤサカが表情を歪ませる。

「己に対する怒り、か。シン……全霊の拳に立ち向かう奴なりの答え、奴なりの覚醒というやつか」

南斗紅鶴拳の伝承者が喉の奥で笑う。

両手を下げるその後ろ姿にコマクとメイエルがあらためて胸をなで下ろしていた。血化粧を放とうとしていた先ほどまでの主はもういない。

「黄金の見た目と違い地味な拳法。一皮むけるその過程も地味なものだ。だがゆえ」

あれはまぐれや偶然ではない。

死合いの天秤がまた動く、とユダが呟いた。

ヒューイやシュレン、フドウ、ジユウザ、五車星の面々がうおおおと歓声をあげる。

「お父様!!」

海の娘、トウも父の肩に手をかけて渦中を覗き込む。

腕を組んでいたリハクも止めていた息を吐き、むううと唸った。

ママヤが敵の腕の中からぼろりと落ちるようになり大地に両膝をついた。

見上げれば、二人の斗の拳士が本格的に両手で組み合っていた。

「シンー!」

「ママヤ、少し離れている」

クセツ毛の美女が碧眼の美男子の渋い笑みを受け、泣きながら笑いながら頷いていた。彼女

彼女は精神的衝撃のなか、ふらつきながらも後退していく。

以心伝心の死神とレスティエが駆けつけて助け出す。

「これで心置きなくお前をぶちのめせる。いくぞ」

「上等だあ、今度こそ有無を言わさず屠ってくれよう……！」

拳士にあるまじきとってよい力比べがまた始まった。

内に込めた闘気をぶつけ合う。

一見地味に映るそれに対し、まさしく斗の頂点か、と思わせるほどの第二ラウンドが始まった。

§ § § § § §

「レイとともに気を使い果たしたか。病身では是非もなし」

「ラオウ」

「戦場へ戻るぞケンシロウ。トキはこのまま寝かせておけ。あとはこのアミバとやらに任せる」

秘孔封じに成功し施術を終えた北斗の長兄が末弟に告げた。

弟によく似た外見の助手、アミバを一瞥し立ち上がる。

ベッドで身を横たえる南斗の義星と次兄を交互に見ながら、ケンシロウは乱れた呼吸を整えてラオウに続いていく。

「ユリアが金髪の若僧の元へと向かったことは聞いている。いい加減くたばってもらいたいものだ。倒す手間が省ける」

「フッ」

自身の背中を追いかけるケンシロウが鼻を鳴らす。

一瞬足を止めたが、ラオウは何も言わなかった。

現伝承者が確信している何かを問いただす必要など何もない。

## 二十一話 起死回生

ヤサカにとつて敵とは西斗月拳によつて粉碎、撃破されるものであり、地べたを這いつくばり、砂埃に塗れるのは常に相手のほうだった。

今回もそうであつた。

しかし何度叩き伏せられようと、目の前にいる南斗宗家とやらの拳士は立ち上がつてくる。

両手を組み合いながらも、彼は我知らず身を震わせた。

驚愕で青くなる自身の顔色を悟りつつ叫ぶ。

「我の最終局技、全霊の拳をどれだけ食らつたと思つている、うぬは一体」

「先程の所業はかつてのわが姿……あのような暴虐……それを成すというのならば」

シンに対し背骨を折らんばかりに押し込んでいたヤサカの上体が持ち上げられていく。

信じられんといった西斗の拳士の両目に火花が散つた。

「ぐっ、ぬ?!」

片足で地を蹴つた血だらけの男の膝蹴りを頬に受け、その衝撃に耐えきれずヤサカは

片手を放す。

「こ、こやつ……!」

「必要があれば何度でも、お前の前に立ちふさがる」

ヤサカは見た。

シンの両目が光を放っている。

ケンシロウが無想転生を会得した瞬間にも似ている。

それを知らずとも、憎き敵が内に込める気が溢れたものだと察するのに時間はかからなかった。

「ぬああああ全霊の拳を舐めるなよ若僧うおおおおお!!」

「南斗極聖拳、毒蛇穿穴」  
きよくせいけん どくじゃせんけつ

勢いをつけるには短すぎる間合いの、斜め下からの指突。

それが気功で鍛えられたヤサカの腹部に突き刺さった。

先ほどの西斗の突きに対するシンの倍返しだ。

貫かれた側が血を吐いた。

むしろシンに向かって血を吹きかけたといっている。

そしてわずかな隙の間に、彼は横蹴りで毒蛇穿穴からの脱出をきめていた。

蹴られた南斗の男は裸の上半身の蹴られた腹筋をさすっている。

シンは口から流れそうな血をペツと吐き、冷たく言った。

「それは俺のセリフだ髭野郎……わが南斗宗家の拳、二度とお前ごときに遅れは取らん」  
「血統だけが取り柄な温室の拳が戦場の拳に向かつてよう言うた」

互いが弾かれた。純粹な殴りあいによる激突で吹き飛んだのだ。

「肉弾戦のガチンコ勝負か。いいねえ。拳法家の本来の姿だ。うさんくせえ鬨気なんぞ、今の奴らには一切通じねえ。薄い膜みたいに破れちまって用を成さねえだろうな」  
「うむ。あれこそ拳を極めようとする者の到達点といつても差し支えあるまい。ヤサカとシン様、今の彼らは拮抗している」

ジウウザ、フドウの昂りを抑えられずの断言に、皆が無言の同意を示している。

ソウブ、ユダでさえ言葉はない。

再び歓声が沸き上がる。

「すり潰れる」

覚醒後の相雷拳、死角からの掌底突きはあろうことか無数だった。

戦いの中で昇華される奥義、勝利を確信して放ったヤサカが砕けた口調のシンの台詞を聞いた。

そして相手の拳圧で仰け反った。

「どこから来るかわからぬ拳だ？　しやらくせえぞ西斗月拳」



ブシャツという音とともに、彼の奥義の双壁の一、南斗千首龍撃が西斗の掌底に突き込まれた。

ヤサカはシンの貫手の餌食となる前に、表面を抉られながらもそれを全てを引き戻していた。

「野郎……」

「死角から穿つなど小賢しい真似をせず正面から来い。言い訳できない状態でお前の全てを砕いてやる」

冷や汗を流すヤサカがシンの手の甲にある十字の傷を窺った。

南十字星、南斗そのものの紋章を持つ男が利き手を上に、そうでないほうを下に、残像が残る構えを見せている。

「南斗天地破斬、知ってるぜその奥義わあ」

陽の拳においても随一の剛の突撃、それを見切った全霊の拳士は脇で抱えこもうとしたが、腕と指を弾かれ、立て膝のまましゃがんで大きく後退していった。

髭男が何度目かのクソつたれという悪態を放つ。

「フン……南斗聖拳を極めた男の指突はひたすら避けよ、か。斬撃なれば間合いを詰めた振り下ろしの根元に張り付けばよいが、奴には通用せん。なれば」

軽の功、その流れの速さで実体を消したヤサカがシンの体を衝き抜けた。

金髪のかかる額から血が吹きあがる。

「マミヤとユリアの声にならぬ悲鳴がするなか、当事者は相手に向き直ってまた十字の傷の手の甲を見せつけている。

ヤサカが目を怒らせた。

「ぬるい、と言わんばかりの顔だなあてめえ」

「いつまで俺の拳を避け続けられるか。お前の拳の一撃では死なぬが、わが牙が真を食えばお前の命はない」

それぞれの真髓をぶつけ合うその死合は、実の拳のみを奮いあうためか泥臭く、とても頂上である斗の拳法どうしの戦いには見えない。

皆がそう思ってしまうのも無理はない。

「だがそうではない。一般の兵ども、目の色が変わってきておる。ヤサカとシン様の殴り合い、この老骨さえ昂らせてくれるわ。若者ならなおのこと、あれが原点にして頂点の戦いだと知るべし」

南斗五車星の軍、ラオウの残した部隊、ソウブの手勢、ユダの赤備え。

周囲にいる大多数を占める彼らが我慢比べのような応酬に魅入り始めた。

なかには西斗の拳士に声援を送るものまでいる。ヤサカの全霊の拳の強さに惹かれたのだろう。

「なんちゆう動きだ、西斗の髭野郎！ 南斗聖拳の必殺をかいぐつて懐に」  
妖星配下の小男がぴよんと跳ね飛んで叫ぶ。

「死の抱擁か」

藤色の瞳を細めユダが呟く。

全霊の拳を得た男の抱擁は一度目とは練度が違った。

シンの背中に両手を突き入れたヤサカが対象を持ち上げていく。

それを眺める兵たちがあらゆる意味でどつと沸いた。

「秘孔まであと少し……激痛のなかで狂い死ねい不遜な若僧」

下から見上げるヤサカのドヤ顔が不意に歪む。

凄惨な笑みは消えた。

自身の両腕が外側に押し広げられていく。

抱え込む力を緩めなければならなかった。

ヤサカの上腕部分に食い込んだシンの両手の指で、危うく握りつぶされそうになつた

からだ。

「だがあなあ、てめえの胸部はガラ空きだあ」

西斗の強烈な蹴り上げ。

その振り切った足先ぎりぎりまで飛んで躲かわしたシンが、金髪を風に靡かせながら

カッ、と気合の声を上げた。

心あるものは皆口にする。

「次に出すのは決まっている」

極聖拳きよくせいけんの代表的な奥義ながら、すでに使い古されているものなど通用せんとばかりに、ヤサカが軽功術で逃げる。

後ろ宙返りをきめて間合いを取った彼が、離れた場所で片膝についてしゃがみこむ傷だらけの男を眺め、鼻で笑う。

「何度やっても同じことだからぬ。そんな蹴りで」

勢いよく立ち上がったヤサカだったが、気功を発動させようとして前のめりにつんのめった。

「お……?!」

ふらふらと数歩歩いた後、両手両足から鮮血が吹き出すのを見た彼がああ？ という反応を示して両膝をつく。

逆に立ち上がったのはシンである。

「二度や二度くらい程度でこの奥義を見切ったと思っているのか。千変万化の蹴撃しゅうげき、それこそが南斗獄屠拳……!」

核戦争前のラオウに止めを刺しかけ、伝承者になったケンシロウを戦闘不能にしたと

いうシンの切り札、ひとかどの者なら誰もが知っている。

五車星をはじめ、ユダでさえ見事と賛辞を贈らざるを得ない金髪の青年のカウンターキックだった。

「まさに起死回生……聖帝サウザーを倒したときといい、逆転を極意とするシン様の面目躍如」

「だがまだまだ……これでようやくKINGがヤサカに一矢報いたにすぎん。黄金と呼ばれる牙を見るのはこれからだ」

レステイエとジョーカー。

シンの死闘を見続けてきた二人が手に汗を握りながら渦中を見守る。

四肢から血を吹き出しながらも歩みゆくヤサカの姿は、言動に反比例する沈勇なものだった。

「カスリ傷なんぞいくらつけても無駄無駄あ。肉は裂けても骨は砕けん。思い知れ、わが拳とうぬの差を」

「……?!」

「先ほどの抱擁、極聖の爪で力任せに破られると思っていた。本来の目的はこれだ」

ヤサカの手の中に暗器を見た周囲の面々が血の気を失った。

力を失くして膝から崩れ落ちるシンの様子は、拳によるダメージには到底見えなかつ

た。

センター分けの髭男が高らかに告げる。

「紅鶴拳といい極聖拳きよくせいけんといい、南斗の頂点どもは秘孔をずらし、致命の突きから逃れる妙技を心得えているのはもう十分わかっている。この指の内なる気を読み取っているのだらう。しかし紙一重の応酬のなかで存在感のないこの針ならばどうだ？ 強すぎる光に隠れる影までは読めまい。それほど我とうぬの間には差はない。あるといったのはな、敗れば死ぬ常在戦場の覚悟の差よ」

片手を地について苦悶するシンの様子を一瞥し、暗器を捨てた西斗の拳士がざわめく連中を見渡して心地よさげに笑った。

しかしそんな笑みは一瞬にして消える。

主だった者から卑怯者という声を一切聞かなかったためだ。

「……つまらぬ。死合の是非を吠えたてるかと思えば、存外に冷静とはな。煽りがいのない雑魚どもめ」

雑魚と吠えながら、この場においてももつとも恐るべき拳士の様子を見てヤサカが瞠目する。

一本指を上げた赤い衝撃に身構えた彼だが、それは自分の背後に注意せよという仕草に他ならなかった。

「?!」

「目まぐるしく変わる攻防に対し、最初に根を上げたのはやはりお前だったか。暗器に逃げ、相手に背を向ける。西斗月拳よ、執念のあの男ならば……殴り合いでは絶対に引かん」

「なっ……」

「背後を取られたのではなく自ら向きを変えたのだ。まさか不意打ちとは言うまいな」  
そう締めくくったユダの台詞の間に、ヤサカは無意識に奥義を発動する。

残狼相雷陣。

雷を身に纏うほどの速い動き、その残像で敵をかく乱し、死角から剛拳を繰り出す西斗の秘技だった。

## 二十二話 心技体

ほとんどの人々の目には無数の残像しか映らない。

その無数の残像からさらなる数の突き、薙ぎが放たれる。

絶影と呼んでも遜色ない剛拳で滅多打ちにしてから、秘孔で爆殺するつもりだった。

「つぬ?!」

「おこ」

凄まじい連撃ではあったものの、その全ては南斗の手の甲であしらわれている。

瀕死による脱力のためか、極められた受け身は怒涛のそれを軽く受け流すことに成功していた。

鬼の形相のヤサカに対し、シンは面白くない表情で退屈そうに告げた。

「獄屠拳を封じるために針で秘孔をついた。下半身の動きを制限させたようだが……組み撃ちはもう終わったということか?」

蹴り上げを弾かれたヤサカがうるせえと言いつ返す。

背後を取られたことで発動した残狼相雷陣。

最後の一撃までその勢いは止められるものではない。



「砕ける金髪頭……！」

シンの後頭部にヤサカの鉄拳が振り下ろされる。

まだ気づいていない相手への完璧なタイミングだった。少なくとも彼はそう思った。だがゆえ、不意に伸びてきた腕に気づくのが遅れた。

「う」

正面からのほうが当然にして間合いは短い。

南斗極聖拳きよくせいけんとは真つ向から打ち合うな、という教訓が今回ばかりは仇となった。

やむを得ない。二度目の南斗天地破斬を防ぐべく両手で敵の片腕を抑え込む。

「今度こそ弾かれはしねえ、このまま押し潰して」

ヤサカがそう吠えたとき、ひしやげる音がした。

明確な、骨が砕かれる音だ。

「ぐっ……っあくソが！」

西斗の拳士が無事なほうの手で南斗の爪を引きはがし、間合いから逃れるために転がり回る。

「あの野郎……！ やりやがった、ヤサカの全霊の拳を……正面から力で握りつぶしやがった……!!」

ジユウザが思わずうおっしやああと叫ぶ。それにつられて五車の軍がどつと沸いた。

飛びずさったヤサカが利き腕をかばいながらさらに後ずさる。

呆然とする彼がふらつきながらやってくる相手に対し、ありえねえと吐き捨てた。

「覚醒したわが両の腕が瀕死の片腕に……圧し負けるなど……そんなバカな?!」

風に吹かれてやってくるシンの足取りは未だに重い。彼は歩みを止めて言った。

「わが切り札はすでに火を吹いている」

「?!」

動きの鈍いシンに対し、相雷陣で応じようとしたヤサカが態勢を崩して前につんのめった。

「あ、脚が」

「両手両足、秘孔で傷を修復したようだが、奥義の多用で限界に来たか。四肢の動きを封じる南斗獄屠拳、この奥義を食らって無事な者などこの地上に存在せん」

「ほざけえ若僧があ……!!」

周囲に重圧がかかった。ヤサカの憤怒により空気がピリついた。

ほとんどの見物人が無意識に引いていく。

気の奔流で大地が揺れた。

全霊の抑えが効かなくなってきた証拠である。

「な……何が」

ヤサカを覆う結界があらわれた。

過去にラオウが、そして魔人カイオウが到達した気脈の到達点だ。

練り上げられた波動は防御はおろか飛び道具としても活用できる。

拳士に限らず、力を求める者ならば誰もが切望する極みの領域、西斗月拳による魔界である。

だが……ヤサカの自尊心は地に塗まみれていた。

「せ、制御できぬ……あの小賢しい蹴りのせいで……気合を、内に込めておくことが、できぬ……！」

北斗の兄弟に比肩するフレアが彼の剛体から湧き上がる。

その暴風に立ち向かうシンが静かに告げた。

「かつてある男が言った。頂上拳に過剰な殺意や闘気はいらぬと」

片手と四肢に傷を負うものの、彼ほどの重傷ではない月氏の拳士が臍ほそを嘔み、南斗の拳士の言葉を愕然と聞いていた。

「そのような見世物、鳳おわとりの羽ばたきひとつで吹き飛ばせる」

何かに誘われるように、二人が同時に地を蹴った。

極大の闘気を持ち主がひと薙ぎで標的を消し去ろうとしたとき、凄まじい衝撃波が周囲全体を衝き抜けていく。

ヤサカのドーム状の闘気の結界は消えていた。

「ジョー様！」

「ああ、あれはまさにあのときの」

未だ残る爆風を堪える死神と影の女が見た光景は、鳳凰拳との戦い以来二度目だった。

振り絞って放たれる夕日に照らされたそれは、まさしく黄金の牙。

「しかと見よ」

絵画の風景のようなふたつの影を眺め、南斗紅鶴拳の伝承者が微笑して言った。

南斗紫蝶拳しちようけんのメイエル、いつの間にか戦場に戻っていた南斗焰浄拳えんじようけんのゲンジュだけ

ではなく、南斗天翔拳のジョーカー、門下生レスティエに対しても、である。

「南十字星の紋章を持つわれらが拳、その極意を」

彼らは最強を謳われる赤毛の男の言葉に固唾を飲んで領き、そして金色の長い髪が風に吹かれるのを見た。

振り下ろされる西斗の拳を軽々と突き抜いた極星の貫手が、胴着のなくなつた上半身にめり込んでいく。

「か、つぐ……あ」

突撃の余勢を駆り、長身のヤサカの体が宙に浮く。

床几に座っていた大男、北斗劉家拳のソウブが膝を叩き、勢いよく立ち上がった。髪を逆立てているのは興奮のためだ。凜猛な八重歯を剥いている。

「外部から突き入れ、全てを破壊する……！」

荒れ狂う西斗の男の胸に刺さった牙が突き進む。

ヤサカのあらゆる抵抗はまさしく足掻きでしかなかった。

ソウブほどの男が立ち尽くし、両の拳を握り奮わせながら呟く。

「南斗聖拳を真に極めし者のそれを人は龍の牙と呼ぶ、か」

暴れ回るヤサカを突き抜いたその先から鮮血が溢れ出る。

正面から撃ち負けたという屈辱という触媒を経て、彼がさらに覚醒した。

一時的に腕の力が蘇る。

出血は思ったよりも少ない。死力が尽きる前にヤサカは喚き叫んだ。

「ぬおおおおおおお舐めるな、舐めるなよお若僧！ 月氏の誇りにかけてうぬごときに敗れるわけにはいかねえ!!」

相手の長い髪の毛を掴み、頭突きをシンに放つ。

重圧に耐えられず地盤が陥没する。

年若いほうの額も無事ではなかったが、放った当人の額がより割れていた。

「……」

忌々しい敵の、アイスブルーの双眼がふと細められた。

拳の勝負はすでについている。そういわんばかりなシンの様相だった。

「月氏の誇りだ？ 一人の女の誇りを穢けがしておいてほざくな下郎……！ お前は拳士としてではなく、男として容赦せん」

音量は決して大きいものではない。

しかし執念の男が放つその台詞の圧は、頑強なヤサカの心の芯を砕いた。

目の焦点が合わなくなる。

今度は体を撃ち砕くべく、シンが標的の髪をつかみとる。

めまいのなか、引き寄せられる西斗の拳士の絶叫が城門前に響いた。

「なんなんだてめえは……?! てめえらは……こんなイカれた奴らが格下の南斗なんて聞いてねえぞ……クソおああああ!!」

低く重たい頭突きの音がした。

必殺の指突ではなく、あえてヤサカの土俵に上がったシンの意地の一撃だった。

ブツ、と何かが切れる。

ヤサカの首からかけていた紫色の勾玉が地に落ちていった。

同時に持ち主が脱力したように両膝を折る。

うつ伏せに倒れながらヤサカが言った。

「ゆ、許したまえ……先祖の御霊の期待に応えられぬこ、と……を」

復讐の男がついに大地に沈んだ。

わずかに間をおいて、呆然と見守っていたソウブの部隊、五車星、ユダの赤備え、シンの部下たちが一齐にうおおおという雄たけびを上げていた。

サザンクロスの城門が開かれたことが大多数にわからぬほどの、地鳴りのような歓声だった。

沸き立つ彼らをよそに、勝者は駆け寄った二人の美女たちに支えられる。

双方が視線を合わせたが、それは刺々しいものではない。

本物の瞳は親愛の情を、影武者のほうはそれ以上の感情を迸らせていた。

そんな明確な区分けを互いはずぐに理解したようだ。

「ユリア、マミヤ」

名を呼ばれた双方は長身の美男子を見上げてほっと胸を撫でおろす。

ユリアにとっては兄の、マミヤにとっては拳の師の、いつものぶつきらぼうな横顔があった。

シンは彼女たちを優しく引き離し、倒れるヤサカのそばに落ちている紫の勾玉を拾い上げた。

「それは……？」

「あの男の首飾り」

拾った勾玉を手に、うつ伏せの敵の前に跪くシンの様子をユリアとマミヤが見守る。ヤサカが己の命以上に大切にしているものだ。

それを相手の首にかけ直しているのを窺って彼女たちが瞠目した。

「シン。この男、まだ生きている?!」

マミヤの問いに師が頷く。

「俺に秘孔のずらしがあるように、この男も致命の突きをわずかに反らしている」

「とどめは……」

ユリアがもつともな質問を口にする。

主の近くにいる五車星たちはいずれもやっちまえという表情を浮かべていた。リハクはおろか、トウすらもそう感じていた。

しかし当人はかすかに首を振る。

「奴の誇りは全て貫いた。そもそも……わが南斗極聖拳きよくせいけんは憎しみの拳にあらず」彼の高言は地に伏せる西斗月拳の拳士に対する、無意識の強烈な皮肉だった。涙を流してその屈辱に耐えているヤサカが軽傷なほうの拳を握る。

ユリアはそんな展開に紅唇をほころばせた。

南斗の光明。



ユダがつけた彼の異名はまさしく言いえて妙と言ひ切れるものだった。

「心技体、全てを備えた南斗聖拳の……いや、あらゆる拳士の亀鑑たる男か、金髪の若僧」  
感銘を受ける真面目なりハクの述懐に、風、炎、山の面々は顔を見合わせる。

雲のジウウザが鼻を鳴らして吐き捨てた。

「それはあのヤロウへの暴言だっていうのよ。わかつてねえなあジジイ」

そんなばやきは当然にして喧嘩にかき消されている。

ジョーカーとレスティエが淡々と佇む目の前に小躍りしながらやってきた。

ゲンジユやメイエルもそんな光景に目を奪われている。

影のように控える従者のコマクだけが赤毛の主の言葉を耳にした。

「サウザーよ、南斗の帝王よ。かの姿をお前にも見せたかったぞ……まさにわが門の光、もはや私の助けは何ひとついらぬようだ」

ユダの万感の独語を合図に、北斗神拳の長兄によく似た容貌の、北斗劉家拳の伝承者が波止場に向かって部下に顎をしゃくる。

「ソウブ様」

「……一旦引く」

「え？ あ、しよ、承知いたしましたっ」

劉家拳の家人たちが豪快に闊歩していく大男の後に続く。

広場はそれどころではない騒ぎであり、この時点で彼の離脱に気づく者はほぼいない。

ソウブはいつになく上機嫌だった。

これは彼の気の昂ぶりを示している。

ラオウより後ろ髪が長く、サウザーに似た口角の豪傑は、誰にも聞こえぬように呟いた。

「北斗神拳伝承者を二度も破り、あの聖帝を倒し、一度は不覚を取ったものの西斗月拳すら制する……天にもつとも近いとはあの男のことを言うのであろう。フツフフフドゥうやら奴はオレの宿敵として相応ふさわしいようだ。きやつ、ラオウを後回しにと思えるほどにな。覚えておくとぞ、南斗極聖拳きよくせいけんのシン」

## 二十三話 北斗南斗の宿命

城門が閉じられていく。

サザンクロスの城内に戻っていく五車星とその部隊のなかには死闘の勝者と敗者がいたが、二人とも生きているのが不思議なくらいの重傷だった。

それとは別に、象徴や影武者を見送り、激突の後が色濃く残る広場を見回す集団もある。

そのなかの主だった人物が口を開いた。

「他門のレイに対する救済に感謝する。この借りは必ず返そう」

「フン……名高き赤い衝撃に借りとはこそばゆいことよ。それには及ばぬ。だがトキには頭を下げておけ。心身をすり減らして今もまだベッドから起き上がれん」

領いた赤毛の青年の傍を通りすぎる際、世紀末覇者を名乗る豪傑は自分によく似た姿形の分派の男を探したが、ソウブはすでに南十字星の島から姿を消していた。

いつか戦うことになると思いつつ、赤いマントを影のウサから受け取ったラオウが背後の強敵に向けて言った。

「この世に北斗の末弟は必要な存在。それと同じく義星も必要、そうほざいたらしいが」

「ああ」

「だがオレとうぬは……ケンシロウとあの金髪のような間柄でもありはせん。西斗月拳すら手玉に取るうぬこそわが最強の敵」

「……」

「カイオウもリウケン並みにオレを楽しませてくれたが……妖星の赤い牙はそれ以上だと確信している。再戦はすでに決定事項だ。忘れるな」

「残念ながら私は記憶がよく飛ぶ」

「ほざけ。天に選ばれし者、南斗紅鶴拳のユダ。それを砕いてこそ拳王の伝説は完成される。表裏一体、竜虎の決着は必ずつけようぞ。それが二千年にわたって伝えられてきた北斗南斗の宿命」

ラオウが配下の精鋭を率いて整然と南の孤島を後にした。

残されたのは覇者に頂点扱いされた沈毅な優男と側近、そして赤備えだけになった。

中年の従者コマクが長身の主を見上げる。

「ユダ様」

「トキに合った後、ブルータウンに帰還する」

「レイ様の様子を一目みてからでも」

女の気づかないを見せるメイエルの言葉に、同じ六星の彼は無事ならばそれでよいとサ

ザンクロスの天守に向かって歩き始めた。

「これで終わったと思いたいんですが……何ていうか……いや々な胸騒ぎが止まらないんですけど」

そばかす顔の若い拳士が何気なくそう言うと、ブーツの歩みを止めた赤毛の美男子が白いあごに手を当てて、ゲンジユの予言は正しいと呟いた。

「これ以上の混乱はどの勢力もうんざりでしょうに、御曹司の勘はよく当たる。少し休ませてもらえんでしょうかね、年寄りに連戦はこたえますわ」

コマクがため息をつきながら主の背中を追いかける。

すでに日は沈もうとしていた。

§ § § § §  
サザンクロスの救急医療室。

利き腕を破壊され胸を貫かれたヤサカだが、致命の衝撃を受けながらも、全霊の拳を会得するに至ったその頑健な体とケンシロウ、トキらの手当により、なんとか一命をとりとめていた。

それに劣らぬ傷を受けているシンも別の病室で絶対安静の状態だった。

マミヤはもとよりユリアも執念の男の傍から離れず、つきつきりでその看病に当たっている。

今回ばかりは五車星たちも何も言わぬ。

妹が兄を案ずる親愛的な行動を見守るばかりだった。

数日経って未だ人事不省に近い西斗南斗をよそに、サザンクロスは戦後処理で慌ただしい。

やがてそんな右往左往も峠を越え、帰途に就く者もあらわれる。

負傷していた仁星と、新月愁からの復活を遂げた義星の六星二人が郷里へ戻ると象徴に告げてきた。

ユリアはシンの病室の外でケンシロウとともに盲目の闘将シユウと、髪がライトブルーから白髪に変わったレイと挨拶を交わす。

双方は跪いてユリアに儀礼的な礼を施してから起き直った。レイが言った。

「ケンやトキだけではなく、あのラオウにも命を救われようとは……つい最近まで考えもしなかった」

ケンシロウは無言で頷く。

「ゆえにこの命の借りは必ず返す。オレにできることがあれば言ってくれ」

「慈母星に仕え、生きて使命を果たすべし。仁や義、二人とも死ぬことは許されん。ユダ

もそう言っていた」

北斗の親友の敵命に近い台詞を受け、レイが差し出された彼の手を力強く握り返した。

シユウも恩人の千金の言葉を中心に刻もうと頷き返す。

「厄介ごととは極星や妖星に任せればよい。あれらは戦う運命を課せられた星々、火急の際に先頭に立つべき双璧だ」

生涯の宿敵に全面的な信頼を置いている。そんなケンシロウの断言だった。

壮年のシユウは後進に道を譲るという考えもあつたが、まだ若いレイは同年代の双璧に対抗心がある。

それでもシンやユダは自分にとっての大恩人である。

白髪になった水鳥拳伝承者はしばらくは最前線は譲つてやる、と憎まれ口を叩いて背を向けた。

彼ら六星の二人がサザンクロスから発つて、もうひとりの六星が目覚めます。

意識を取り戻した金髪の青年は、いつの間にか気を失っていた南斗の象徴を支えながら満身創痍の身を起こした。

「シン様」

「シン……！」

「KING」

五車の長、マミヤ、ジョーカー。それぞれが彼の名を呼ぶ。

抱き着いてくる美人の弟子を受け止め、シンはユリアをトウやレスティエに任せた。昏睡状態のなかでも感じていた最愛の存在が、二人の女に抱えられながら病室を出ていくのを眺める。

「ユリアに助けられた、か」

「わが主はシン様が目を覚ます直前までつきつきりで貴方の手を握り、念を送っておられました。昼夜問わずですぞ」

リハクが咳ぼらいをしながら椅子に座り直す。

泣きながら抱き着いて離れないマミヤをよそに、シンは傍らに立つ死神が何気なくケンシロウに場所を譲ったのを察していた。

寡黙な宿敵が珍しく諧謔かいぎやくを口にした。

「生きて帰ってきたか。さすがに今回は死ぬかと思ったが」

「……ユリアに頬をはたかれて引き戻されたようだ。あとトキの気脈も感じた」

「トキの兄者はレイだけではなく、お前や他の男を看ていた。精魂を使い果たしてまた病床についている。まあ医術の仁だ、本領を發揮してどこか楽しそうではあったがな」

「そうか」



ユリアの病といい、重ね重ねの大恩にシンが後で見舞うことを確約しながら、同門のシユウやレイが旅立ったことをリハクから伝えられる。

「仁や義が無事ならば世は事もなし」

シンが眩きながらベッドから立ち上がる。

マミヤは包帯だらけの師の上半身に上着をかけた。

その際彼女から聞いたのがヤサカの安否だった。

秘孔を突いて絶命の流血を止めた彼は自ら治療を施し、またトキにも助けられてすでに目覚めているという。

ひとりでその敵の元へ向かおうとするシンにマミヤは有無を言わずついてきた。

病室に入ったときヤサカは仰向けに寝ていたが、シンらの気配で目を開けた。

彼ら美男美女が自分を見下ろせる距離に来たとき、西斗月拳の伝承者は不機嫌に告げた。

「偽物の女と復古の拳の若僧……うぬらもわが月氏の真実を聞いたであろう。北斗の次兄からだ」

ヤサカが北斗の血を引くと知らされたのはマミヤのみだ。

意識を回復したばかりのシンはそれを聞いて瞠目している。

「ふん……どちらにせよ北斗を恨むは筋違いであったわけだクソつたれが。わが半生、

くだらぬ労力を費やした」

利き腕のひしやげた指を見ながら、髭男が自嘲気味にそれをかざす。

龍の牙に貫かれた右胸の様子はまだ予断を許さないようだが、秘孔を操るに北斗を凌ぐとされる西斗の拳士は、命に別状はないよう処置しているという。

「しかしな若僧、うぬとの因縁は別なもの。五分の戦績で終わつたと思うな。必ず勝ち越す」

胸の傷が痛むのか、表情を歪ませがら欠けた手でシンを指さす。

美女に支えられる彼を一瞥し、舌打ちを放つてから彼らに背を向けた。

「……我より重傷であつたうぬがすでに立つことができほど回復しているとは。その点においても気に食わぬわ。はやくこの場から消え失せろ。次合うときは三度目の死合の場だ」

言いたいことを言い切つたヤサカが再び目を閉じたのを機に、二人は病室を出る。

シンが何かを話す前にマミヤは釘を刺していた。

「しばらくここで療養してもらいますから。逃げてても無駄」

「……」

「あの人を泣かせるのは貴方の本意じゃないでしょ？」

「……五車の追っ手をさばけるほどの元気はない」

通路の窓に目をやり、不承不承に返答するシンの耳に、妹のような女の慌てふためいた声突き当りから聞こえてきた。

「ユリア様、お、落ち着かれませ。シン様はこの建物の中に必ずいますれば」

普段は重厚なりハクの上のしどろもどろな台詞も聞こえてくる。

そんな集団がこちらに気づいたようだ。

ストレートな長い黒髪の美女が復古の拳士の名を呼ぶ。

「シン・……にいた」

ぱつと花が咲くように笑顔を見せ、ユリアが彼の胸に飛び込んできた。

彼女のそんな気やすい行動に、同じような顔をした美しい影武者の眉が吊り上がる。

意に介せぬ無邪気な相手の髪をなで、シンは遅れてやってきた宿敵と言葉を交わす。

「目覚めたとたんにお前がいなくて泣き始めた。子供返りのようなものだが、今は許せ」

「どのみちしばらくはここから動けん。妹の好きなようにさせるさ」

黄金の髪的美男子は彼に抱き着く本物と肩を貸す影の、一見静かなやりとりに気づいてはいない。

兄の恋人に対するユリアの対抗心に、マミヤが本気で殺気を送っている。

以前よりあまり関わりたくないと思っっているリハクとトウは少し離れて見守るばかりだった。

一雨降った後だろうか。窓の曇り空には大きな虹がかかっていた。